

魔法少女リリカルなのはStrikerS もう一人のストライカー

藤月沙月

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

新暦71年。空港火災に巻き込まれた少女を救ったのは、黒銀の魔導師だった。彼の腕に抱かれて飛んだ空に憧れた少女は、自身ですら忌み嫌っていたその力を僅かながらに受け入れた。

『強くなりたい。この人みたいに——！』

4年後、士官学校を卒業した少女を待っていたのは夜天の王とエース・オブ・エース。そして『機動六課』。新人フォワードの一人として、ロングアーチに配属された少女・秋月深琴を待っていたのは再会と、後にミッドチルダを震撼させる事件の予兆だった——。

■当作品は「魔法少女リリカルなのはStrikers」の二次創作小説で、かつて私・藤月沙月が、沙月というHNでにじファンに投稿させていただいていたものを加筆・修正したものです。オリジナルキャラ、設定が多く存在しますので苦手な方はどうかご注意ください。

■追記：11月10日の投稿をもちましてアニメ本編分は終了、11日投稿分より漫画版、サウンドステージ4ネタです。

■さらに追記：11月14日をもちまして漫画版、サウンドステージ版終了しました。11月15日よりサウンドステージX編開始しました。

■さらにさらに追記：12月26日をもってサウンドステージX編終了しました。以降より特別編・番外編となります。

■最後の追記：04月09日の更新をもって本シリーズ完結です。

誤字脱字は確認次第修正予定。最後まで読んでくださった皆様、ありがとうございました。

## 目次

魔法少女リリカルなのはStrikerS もう一人のストライカー

00	：プロローグ	1
01	：空への翼	5
02	：機動六課	14
03	：集結	23
03	：5：新しい日々	34
04	：ファースト・アラート	45
05	：星と雷	57
06	：進展	66
6	：5 01：派遣任務の行き先は？	76
6	：5 02：現地到着、任務開始！	79
6	：5 03：喫茶翠屋	82
6	：5 04：家族と仲間と友達と	87
6	：5 05：シーリング・ファイト	92
6	：5 06：帰還	97
07	：ホテル・アグスタ	99
08	：願い、二人で	114
09	：たいせつなこと	126
10	：機動六課のある休日（前編）	140
11	：機動六課のある休日（後編）	149
12	：ナンバース	157
13	：命の理由	168
14	：Mothers & Children	178

04	胎動と再会と	383
03	詩篇と蒼氷	375
02	マリアージュ	367
01	事件	360
StrikerS サウンドステージX		
27	The Day after II	355
27	05 : 青空	350
27	04 : 首都クラナガンにて	342
27	03 : 故郷に馳せる	334
27	02 : 試験と結果と	324
27	01 : 11月、休暇の前に	318
26	5 : The Day after I	307
26	: 約束の空へ	295
25	: ファイナル・リミット	286
24	: 桜花爛漫	277
23	: 星と空と雷と	269
22	: Pain to Pain	260
21	: 決戦	252
20	: 無限の欲望	245
19	: ゆりかご	238
18	: 翼、ふたたび	230
17	: その日、機動六課 (後編)	218
16	: その日、機動六課 (前編)	209
15	: Sisters & Daughters	198
14	: 75 : Meaning of strength	186

05	火災、遭遇	389
06	探すべきもの、それぞれの夜	401
07	無限書庫&共同調査	409
08	捜査、進展	418
09	マリंगाーデン	427
10	信念	435
11	だけど、今は	441
12	集え、星の輝き	447
13	嵐の後	456
14	1000年	462
15	それから	472

特別編

Report 01	秋月深琴のある1日	476
Report 02	「親友」の思うところ	485
Report 03	そして影は忍び寄る	493
Report 04	2月某日、機動六課にて (前編)	500
Report 05	2月某日、機動六課にて (幕間)	510
Report 06	2月某日、機動六課にて (中編)	516
Report 07	2月某日、機動六課にて (後編)	527
Report 08	秋月静真、過去を振り返る。	537
Report 09	THE GEARS OF DESTINY	545
(前編)		
Report 10	THE GEARS OF DESTINY	551
(中編)		
Report 11	THE GEARS OF DESTINY	551

(幕間)

Report 12 : THE GEARS OF DESTINY

558

(後編)

Report 13 : 母と娘と

573

Report 14 : 戦技披露会

579

魔法少女リリカルなのはStrikerS もう一人のストライカー

00：プロローグ

00：プロローグ

新暦71年、4月29日。

燃え盛る炎に覆われた、ミッドチルダ北部臨海第八空港搭乗受付口。ミッドチルダ北部・エルセア行きの飛行機を待っていた私・秋月深琴も、当然その火災に巻き込まれていた。

「怖いよ……やだよ……」

自力で張った淡紅色のバリアの中で、私は泣くことしかできなかった。勢いが衰える事の無い炎に、救助のためにやってきた隊員も動くに動けない。先程から姿は見えるものの炎がその行く手を阻んでいる。上昇する熱に体は悲鳴を上げ、張られたバリアも徐々に消え始めた。慣れない状況と長時間の魔法使用からか、魔力の消耗が激しい。「嫌だよ……こんなの」

涙が溢れて視界を歪ませる。脳裏に過るのは優しかった頃の両親と兄。帰りたい。苦しくても幸せだったあの頃。会いたい。声が聞きたい。今の状況を知れば、きっと助けてくれるはずだから。

「帰り、たいよお……」

魔法なんか使えなくていい。魔法があるから、家族は自分を否定したのだから。

（こんな力、欲しくなかったのに）

ピシリ、という音が響く。音の方向——自分の真上を見ると頑丈な屋根に罅が入っていた。

「……あつ……」

救助隊の人が騒ぎだしたのが聞こえる。

亀裂が大きくなるのを見つめながら、私はぼんやりと考えていた。そして亀裂が達し、大きな瓦礫となった屋根が落ちてくる。バリアの出力を上昇出来るほどの魔力も残っていない。底を尽き始めた魔力



はバリアですら維持できなくなっている。

そして、限界は訪れた。魔力が完全に底を尽き、自分を守っていたバリアが消滅する。瓦礫が重力に従って速度を増していった。

(死ぬ、か……)

あ、死ぬんだ。真っ先にそう思うけれど、体は動かない。

動かなくていい。もう疲れた。私が死んだって誰も悲しまないのに、何必死になってるんだろう……。

そう思っただけを閉じた、瞬間。

《Circle Protection》

半球型の銀色のバリアが私を包んだ。そして、機械音声が続く。

《Cross Fire Shoot》

それと同時に、バリアと同じ銀色の光が砲撃となって瓦礫を飲み込んだ。

「なんとか……間に合ったみたいだな」

言っただけ、声の主である男性は降り立つ。真っ赤な炎に煌めく銀の髪と海のように深い青色の瞳をしたその人は私の前に来ると膝を折り、私と視線を合わせた。

「よく頑張ったな。偉いぞ」

バリアを解除して私の頭を撫でたその人は言う。何て答えればいいのか分からないのと口を開く余裕が無い程疲弊した私がただ撫でられていると、彼は私の両脇に手を入れ、そのまま抱き上げた。そして一気に夜空へ飛び出す。

(この人……魔導師なんだ……)

銀の髪によく映える黒の防護服は空隊の物とは違う。じつと見つめていると、それに気付いて優しく微笑んだ彼は、私を落とさないように力強く、それでいて優しく抱きしめた。その温かい腕の中で、私は目に涙を浮かべていた。

「どうかしたか?」

「あ、いえ……」

優しい声で問いかけたその人は、そういえばと通信回線を開く。

「まだ名前を聞いてなかったな。ついでに年と」

「あ、秋月深琴、九歳です」

答えると、回線の向こうから確認作業を行っているらしい女性の声が聞こえた。搭乗者リストとの照会作業を行っていたようだ。その作業が終わったことを確認して、男性は通信回線を閉じる。

「搭乗手続きをしていたみたいだが、家族は一緒じゃないのか？」

「いえ、一人です……今日、管理外世界から渡航してきたばかりで……」

一瞬だけ訝しむような目をしたその人は、付け加えた言葉に小さく頷いた。

「管理外世界からの渡航ということは、魔導師志望か？」

「今はまだ……さっきの魔法も、無我夢中でしたし」

飛行機が爆発して、炎が燃え広がって、たくさんの悲鳴が響いて――怖くて、死にたくないって思いでいっぱいになった。

ただそれだけで、私はあのバリアを張っていた。どういう展開方法だったかも分からない。

そもそも『魔導師』という存在を知ったのは一週間ほど前で、自分にその才能があるかどうかも分かっていない。

「そうは思えないけどな」

「えっ……」

前方を見据えながら、その人は続ける。

「確かに粗削りだとは思いますが、筋はいいんじゃないか？ 教官資格を持つていない俺が言うのも何だが……少なくとも、俺より才能はあるだろう」

自嘲するような笑みを浮かべて、その人は言った。

「騙されたと思ってやってみるといい。理由はどうあれ、せつかくここに来たんだ。全部自分のせいだと思ひ込むなよ」

そう言い切って、その人はゆっくりと降下していく。待機していた医務官に私を引き渡して、また空を飛んでいった。病院に搬送される最中、私は先程の言葉を思い出していた。あの人は私に才能があると saying していた。家族に嫌われ、自分も嫌っていたこの力を、あの人は認めてくれた。

——私は救われて、生きていてもいいのだろうか。  
そう考えたら、乾いていたはずの涙が浮かんできた。  
もし、本当に私に才能があるのなら。

あの人のようになりたい。あの人のように強くなりたい。あの人のように優しく、誰かを助けられるほどの力が欲しい——。例え先程の言葉が、私を慰めるだけの嘘だったとしても。

(……変わりたい)

変わりたい。泣いてるだけの自分を終わりにしたい。守られるだけの自分なんか、終わりにするんだ——！

(弱いままで、何もできないままで、いたくない！)

先程まで考えていたことは正反対の願いを、この瞬間には抱いていた。

そしてこの出会いが、後の私に関わることなど知らぬまま。

私は、両手をそっと握りしめていた。

◇

幼い頃から私は非力で、臆病で、情けなくて、自分の力に怯えていた。一族やその将来がどうの言われても実感が持てなくて、家族から拒絶されて。「自分の居場所なんてない」とその全てから目を背けた。自分は「ヒト」ではないんだと、そう思っていた。

(でも、今は違う)

居場所を貰った。愛情を与えられた。戦うための術を学んだ。この手の『魔法』は大切な人を守るための、そして、悲しい『今』を打ち抜くための力だ。

廃棄された都市の一角で、青い空を見上げる。いつかあの人と再会できるその日まで、彼が誇りに思える自分になりたいと。初めて所属する部隊でも、しっかりやれるようにと。

——それは私・秋月深琴が14歳になる年の、長いようで短かった一年間の始まりだった。

## 01：空への翼

あの日の出来事は、今でも覚えている。  
燃え盛る赤い炎と、崩れ落ちる世界。私を救いだした銀色の光。  
涼やかな青い瞳も、纏う漆黒も全て。  
その時願った。泣いているだけの自分を終わりにしたいと。そのための力が欲しいと。

その時知った。そのための力は、既に私の中にあるということ。

新暦75年、3月の末。澄み渡った青空の下——厳密に言えばミッドチルダ臨海第八空港近隣。今では廃棄都市区画と呼ばれているこの廃ビル屋上に、私・秋月深琴はいた。

この近辺が廃止されたのは、4年前あった空港火災が原因である。そして私がここを訪れるのも4年振りのことだ。

あの時はこの世界に初めて来たときで、目標を見つけた。

幼くて、何も知らなくて、ただ泣くことしかできなかった私。でも、今は違う。

「……というより、違っていたい……」

——手にしているのは、二振りのデバイス。

纏うのは、航空武装隊共通の防護服。デザインはありふれたものだが、性能は自分に合わせて、そして納得のいくまで調整を加えている。

それは、この世界で『魔導師』であることの簡単な証明。

(でも、やっとここまでこれた……)

あれから4年。長いようで短かったその時間を、私は強くなるために費やしてきた。背も伸びて、筋肉もついた。魔力運用に関しても勉強したし、見合うだけの実技訓練も行った。

(大丈夫……ちゃんとやれる……)

デバイスを握る手に自然と力が入る。閉じていた目を開くと同時に、空間モニターが現れた。

『おはようございます』

画面に映っていたのは、幼い——というか文字通り小さな少女だった。空色の髪と、交差するように留められた黄色い髪留め。そして私の目が正しければ普通の人と異なるサイズ——誰かの使い魔だろうか？ いや、今はそんなことより。

『さて、魔導師試験の受験者さん、揃ってますか？』

「はいー」

『確認しますね』

言って、少女は情報を記録しているであろう本を手にとった。

『時空管理局第一士官学校に所属の、秋月深琴空士候補生。所有している魔導師ランクは空戦Bランク。本日受験するのは空戦魔導師Aランクへの昇格試験で、間違いないですね？』

「はい。ありません」

確認を終え、少女は笑う。

『はい。本日の試験官を務めますのは私・リインフォースツヴァイ空曹長です。よろしくですよー』

「よろしくお願ひしますー」

少女——リイン曹長と、敬礼を交わす。

『それでは、試験の内容について説明しますね。ここからスタートして、空陸問わず各所に設置されたポイントターゲットを破壊。ダミーは破壊しちやだめですよ』

説明に合わせて、ターゲットの画像が浮かぶ。ポイントターゲットには○、ダミーには△の目印がついていた。

『妨害攻撃に気をつけて、全てのターゲットを破壊。制限時間内にゴールを目指してくださいです。質問はありますか？』

「いえ。大丈夫です」

試験内容は、想定していたものとほぼ同じだ。落ち着いてさえいれば、大丈夫のはず。

『では、スタートまであと少し。ゴール地点で会いましょう！ ですよ』

空曹長のウインクと同時に、空間モニターが閉じられる。代わりに現れたのは試験開始を告げるシグナルだった。青から黄、そして赤色

へと変化していく。

(3、2、1……！)

シグナルが赤色へと変わり、試験開始を告げるブザーが鳴り響く。それと同時に走り出した私は、屋上から飛び降りた。

足に、淡紅色の翼が生まれる。そのまま体を空に向け、同時にデバイスの切っ先を向けた。

「ロードカットリッジ……！」

自作のデバイスは、リボルバー式拳銃の銃身下に片刃のナイフがくつついたもの。女の手には似合わないと酷評されたそのマガジンが一発分回転し、近代ベルカ式魔法陣が足元で輝く。20近い数の魔力スフィアが急速に空へと向かった。

◇

「おお、始まった始まった」

同時刻、上空へり内部。空間モニターを見つめていた栗色の髪をした少女がそう呟いた。

八神はやて。管理局内の階級は、二等陸佐。

モニターの向こうでは、深琴が形成した20発もの魔力スフィアが空に設置されていたポイントターゲットを撃ち落としたところだった。中距離誘導射撃魔法へ「アクセルシューター」。深琴がミッドチルダ式をベースに古代ベルカ式をエミュレートした近代ベルカ式の使い手であることは周知の事実だが、一般的に魔力の遠隔運用が苦手な近代ベルカ式魔導師が、ミッドチルダ式の魔法をここまで操れるというのは珍しい。

「この子だよね？ はやてが見つけた子」

「そやで。まー、見つけた言うてもほとんど紹介やねんけどね」

はやての隣に座っていたフェイト・T・ハラウン執務官が、空間モニターを立ちあげながら問いかけた。

「私らと同じ地球出身で、ミッドチルダ第一士官学校首席入学の天才。まだ在学中やけど、このままやと首席卒業やって。クロノくんの後輩

で、入学前に高々度飛行適性試験をクリアした、優秀な空戦魔導師や」  
「魔法体系は近代ベルカ式主体のミッド混合ハイブリッドって、けっこう珍しいね……あ、本局教育隊の秋月教官の姪っ子さんなんだ……」

「母方の姪らしいよ。ちなみに4年前の空港火災の被害者の一人や」

「当時から優秀やったみたいやで？ とはやては微笑する。

「教導次第では中途半端になる可能性もあるけどな。ま、そこら辺はなのはちゃんにお任せや」

「そうだね」

頷いたフェイトが、空間モニターに映った深琴を拡大表示させる。

続いて開かれたモニターを見て、はやてが微笑んだ。

「まずはお手並み拝見、といこか」

「うん」

◇

破壊されたターゲットの破片と爆風が、消え去る。

(……うん。ある程度撃破できたかな)

青い空には、自分だけ。

空を飛ぶことは、魔法を習い始めた時から苦手ではなかった。それはとても珍しいことだと伯父兼養父は言っていたし、実際士官学校でもそうだった。

「よし。それじゃ、後は……」

視界に敵影は見えない。残るは――。

一気に加速して、廃ビルに突入する。窓ガラスを割った音に気付いた複数のターゲットが照準を合わせ、攻撃を開始した。床に着地し、私は走る。

「……アクセル……っ！」

加速した勢いで跳躍。ターゲットとの距離を一気に詰めて剣を振る。その間も敵の攻撃は続くから、命中地点を頭に入れて動かないと死ぬ可能性だってある。

これは試験だから、本当に危なくなったら試験官が出てくるだろう。けれど……！

敵に狙わせない。攻撃が当たる位置に長居しない。そして何より正確・確実に敵を倒す。

何度も繰り返し返した基本に則って、ターゲットを殲滅する。残されたダメージターゲットが音もなく浮遊していた。広がるのは、奇妙な沈黙。大きく息を吐いて、私は周囲に視線を遣る。

(……これで、終わり?)

時間はまだ充分残っている。ペース配分を間違えただろうか？

いや、そんなはずない。仮にもこれはAランク試験だ。こんな簡単に終わるはず——

「っ!？」

嫌な感覚が背筋を走る。次の瞬間、青い砲撃が天井を貫いた。見上げると大きな穴が開いている。視覚補助魔法が発動し、目標の姿を可能な限り映し出す。

「……嘘でしょ……?」

そこには、大型オートスファイアが音もなく鎮座していた。



「ついに落ちちゃったね」

眉を潜めて、フェイトは呟いた。その視線は空間モニターに表示された——深琴が現時点で見ているものと同じ球体に固定されている。

「受験者のほとんどが脱落する最終関門、長距離射撃可能の大型オートスファイア……」

「しかも今回からのAランク試験には、Bまでとは一味違う機能が追加されてるって噂や」

苦笑混じりに頷いたはやてが、肩を竦めた。同時にフェイトが首を傾げる。

「それって、やっぱり『あれ』?」

「そう、『あれ』」



「……なのは、無茶して……」

Aランクの魔導師は、局内でも数は少ない。その魔導師はいずれもエースと呼ばれて遜色ない実力者たちだ。

深琴も彼らの仲間入りを果たすか、それとも眼前の敵に為す術もなく敗北するのか。

「どうやって切り抜けるか——知恵と勇気の見せどころや」

唇を噛んで敵を見据える深琴に、はやては呟いた。

◇

(オートスファイア……大きい……)

唇を噛み締めて、私はデバイスを握る手に力を込めた。

大きいし、距離がある。私が覚えている魔法であの場所まで届くもの一つしかない。

それも、ちゃんと通るのだろうか。

(でも、やってみるしか……)

カートリッジロードしたデバイスを銃のように構え、銃口に魔力スファイアを練り上げる。発射されたそれはまっすぐ敵の前に届き——跡形もなく消えた。着弾した様子は、ない。

(……まさか、AMF? でも、なんでAランク試験に出てくるターゲットが、AAAランクの防御魔法を……?)

考えていると、青色の砲撃が何発も発射された。それを回避して、空へと飛び出す。ビル三つ分まで離れると、ようやく砲撃は止まった。

(ロングレンジには砲撃、クロスレンジにはAMF……)

なんとか敵の懐に潜り込んだとしても、あのフィールドを破壊できるかどうか……。

(やるしかないんだけど……)

つい弱気になりそうな心を叱咤する。

『いいか、深琴』

伯父の声が脳内で繰り返された。続くのは耳にたこができるほど

聞かされた言葉。

それは魔導師としての訓練を受け始めて間もない頃。

あの人への憧れの影響か、私は近代ベルカ式でありながらミッドチルダ式の魔法を使いたがっていた。そんな私を危なっかしく思っていた伯父は、適性テストなるものを課した（ちなみに本局教育隊で使用されているものと同じだったりする）。

その結果は可もなく不可もなく——言ってしまうなら「どっちつかず」だった。

『騎士』と呼べる程近接戦ができるわけじゃなくて。かといって『魔導師』と呼べる程魔力集束や制御が得意なわけでもない。

『魔導師にしては』近接戦ができて、『騎士にしては』魔力収束や制御ができて、『管理外世界の出身にしては』魔力があるだけ。

『器用なのは認めるが、どのポジション適性も低い。今のままで魔導師や騎士となるのは非常に難しいとしか言えないな。一言でいえば弱い。弱すぎるんだ、お前は』

突きつけられた現実。突き刺さるような言葉に、涙も出なかった。生まれて初めて、負けたくないと思った瞬間。

ずっと白い部屋に閉じ込められて、死ぬことを恐怖よりも諦めていた。そんな私が、その時初めて負けたくないと思ってしまった。

（確か初めて、「悔しい」って思ったんだよね……）

負けたままでいたくない。終わりたくない。死にたくない。生きたい。——あの人に会いたい。あの人——”時空管理局本局執務官”デイバイン・アーウィングのように、誰かを守る自分になりたいと。

「ここで諦めたら、何もかもが無駄になる……そんなの、絶対に嫌」

深呼吸をして、心臓とパニック寸前だった頭を落ちつかせる。冷静さを取り戻した頭で、状況を情報を再確認する。

A M F——アンチマジックフィールドと呼ばれるそれは、範囲内の魔力結合・魔力効果を無効にするフィールド系の上位魔法だ。

（一番有効なのは、範囲外で発生させた魔法効果での攻撃だけ……）  
例えば物質加速型魔法とか、天候操作による雷とか。けれど悲しい

かな、私はそれらの類の魔法を覚えていない。

(となると、プログラムに介入するか……)

残る敵はあのスフィアだけ。時間は限られている。なら——！

(一か八か、フィールドごと破壊する！)

左手に携えていたデバイスを、鞘を兼ねた腰のベルトに納める。

残した右手のデバイスを構え、カートリッジを二発ロード。銃口の少し先で淡紅色の魔力スフィアが形成された。足元に、同色の近代ベルカ式の——正三角形と剣十字の魔法陣が浮かび、徐々に強く輝き始める。

(時間はあと五分ちよつと……一撃で、決める！)

環状魔法陣が限界まで魔力収束制御を行っているのが分かる。絶対に外さない。

あの人と同じ名を冠すその魔法は、今の私が確実に勝つための魔法でもある。力を貸してくれなんてことは思わないけど。

スフィアが、強く輝いた。

「デivain………ッ、バスター!!」

カチリ、と引き金を引き、発射された砲撃は一直線に大型スフィアの方へ飛んでいく。轟音を立てて、ビルの壁が破壊された。

そして、淡紅色の光は壁を貫通する。

「やった……？」

表示させたモニターの向こうでは、大型オートスフィアの残骸が音と火花を立てていた。

◇

「あー……」

「無茶するね、この子も……」

ことの次第を見守っていたはやとフェイトは、そうコメントするに留めた。

「まあ結果オーライやね。オートスフィアは破壊したし」

「うん……AMFの上からってところが、ある意味すごいけど……」

本来、フィールド系の防御魔法は一定範囲内に等しく効果を齎す。AMFの場合、それは一定範囲内の魔力結合解除ということになる。その場合フィールド内に入った時点である砲撃に使われた魔力は多少なりとも結合を解除されるはずだ。いくらくデイバインバスターが強靱なバリア貫通能力を持つていたとしても、例外ではない。

しかし、モニターには無残にも大破し無力化されたオートスファイアが映っていた。

「見たところ、バリアブレイク系を併用してなさそうやしなあ……単純な魔力砲であれをぶち壊したとしたら、相当ダメージが残る筈やけど」

はやてが、小さく呟く。

モニターの向こうで深琴は息を荒げてはいるものの、深刻なダメージは残っていないようだった。すぐさま時間を確認し、全速力でゴールへと向かっている。

「どうする?」

「最終決定はなのはちゃんに任せるよ。……まあでも、話だけはしてみよか」

言って、はやてはモニターを切り替える。ずっと背面に表示させていた、深琴の個人情報に。

「立ち向かうための意志は強い子だから。きっと大丈夫だと思うよ」

「やと、ええけどな」

モニターの向こうでは、深琴がついにゴールへと到着していた。

## 02：機動六課

「はい、お疲れさまですー！」

「久しぶりだね、深琴」

「ゴール地点で私を待っていたのはリインフォースⅡ空曹長と、もう一人。管理局教導隊の制服に身を包んだ、サイドポニーの女性。見たことあるどころの問題じゃない。」

「たっ、高町教導官……!? お疲れ様です！」

「うん、お疲れ様」

高町なのは。管理局での階級は一等空尉。エースオブエースと名高い魔導師だ。そのキャリアは9歳の頃からだというのだから、非常に驚きだ。私が魔導師訓練を受けた年齢が11歳で、それでも若い方だと言われていたのに。ちなみにその出身は、第97管理外世界、現地名称〈地球〉、日本。現地の住所は全然異なるが、同郷だ。管理外世界はその基準から魔導師が殆ど生まれない。日本は海鳴市で生まれ育ち、PT事件、闇の書事件を（当時、なのはさんの魔導師歴は一年弱だ）解決に導いた。

「クールダウンしとかなないと。それに『なのはさん』でいいからね？」

「は、はい。失礼しました」

高町教導官——改め、なのはさんとの出会いは二年と少し前。私が受験した高々度飛行適性試験の試験官が、なのはさんだった。地方は異なるが同じ世界の出身で、同じ空戦魔導師（候補）という点で覚えられて、一年半前に士官学校で再会する。士官学校では特別教導に來た教官と、一般生徒。それからは顔を合わせればお茶をする程度の親交があった。

「伯父さん……じゃないね。秋月教官から聞いたよ。士官学校首席で卒業できそうだった？」

「はい。……まだ、進路とかは全然決まっていなくてですけど」

「尋ねられ、私は恥ずかしくなって顔を伏せた。」

——そう。私はまだこの時期になっても卒業後の進路が決まってい  
ない。いや、話は来ているには来ているんだけど……。

「やっぱり、無理なんでしょうか……士官学校を出て、武装隊の一般局員になるっていうのは」

柔軟を行いながら、私は呟いた。

仮にも士官学校は、将来の幹部を育成する機関だ。もちろん魔導師であつてもそれは変わらない。ただ危険な場所、捜査を行う魔導師は出世しやすいし、士官学校卒業という肩書きがあれば卒業してすぐの素人でも三等尉官で部隊に配属される。それからどう使われるかは部隊次第だ。

「部隊によつては難しいかもね。大抵出向して指揮やキャリア系の資格取る人が多いっていうし」

「ですよね……」

正直言つて、私には自信が無い。実戦経験はほとんど無いのに配属していきなりキャリア扱いで、三等尉官なんて、無理だ。そもそも進学した動機は担当教官をして「航空武装隊向き」だったのに。——にも関わらず士官学校に入学した理由は、単に伯父夫婦に逆らえなかつただけだ。詳細は思い出したくも無い。

と過去に文句を言つても現状が変わるわけはなく、いまだに進路が未確定なのは同期生の中でも私だけらしい。チームを組んでいた二人の友人もそれぞれ既に進路を決めて、卒業を前に研修を受けている。

「深琴。この後、時間あるかな?」

「あ……はい。大丈夫です」

「じゃあ、この後地上本部でね。結果発表とか進路のこととか話したいし、相談に乗るし。それにお客さん来てるから」

言うだけ言つて、なのはさんはラインフォースⅡ空曹長と向こうへ行つてしまった。



「でも、珍しい方ですね。士官学校を出て、武装隊——それも一般局員希望なんて」

「そうだね。……リイン、この点加えたら、こんなものかな」

「あ、そうですね。じゃあこれ、提出しますね」

「うん、お願い。お疲れ様です、リイン試験官」

先ほどの試験データを纏めながら、なのはとリインは深琴のプロファイルを呼び出す。その隣のモニターには在学中の士官学校から提出された各部署への推薦状と、その根拠になる成績データが表示されている。

「これ、はやてちゃんとフェイトちゃんにももう送ってるんだよね？」

「はいです。それとははやてちゃんから、もう一人——」

「あ、うん、聞いている。……でもこれは、難しいよねえ」

「はいです……」

頷いて、リインは成績データを拡大する。

「座学も実技もオールA。毎学期の試験も、トップから落ちたことがないそうです。その上、3年前のインターミドル・チャンピオンシップの成績……授業態度や素行も問題ないどころか非常に優秀だそうです……士官学校としても、早く進路を確定させたいところだそうです……」

「他の部隊としては、扱い辛いつて思われてるんだろうね。無理も無いけど……深琴が魔導師になった動機からして、航空武装隊向きだし」

言っただけのは、首を傾げるリインに深琴の事情をかいつまんで説明した。実の両親との関係、伯父夫婦の存在、そして4年前の空港火災での出来事……。それらの一つ一つに頷いたリインは「じゃあ」と口を開いた。

「私たちと一緒に来てくれる可能性は充分あるですよ？ あ、もちろん本人が了承したら、ですよ！」

「うん、そうだね」

クスリ、と微笑んでなのはは頷く。

そしてそのしなやかな指先で、メールソフトを立ち上げた。



「いきなりメールを送りつけてくるから、何かと思えば……」

深い溜め息を吐いて、デイバインはモニターを閉じた。一度目を閉じ、すぐに別のモニターを呼び出す。メールの差出人は、親友の一人である高町なのは。文面は簡素で、動画データが添付されていた。一先ず話はそれから、ということらしい。

そしてその動画の内容は、先程深琴が受けていたAランク試験の映像だった。

自作のデバイスを手に、防護服を纏う深琴は別段でこずることなく目標を達成していく。終盤、AMFを備えた大型オートスフィアには一瞬驚いたようだが、苦勞することなく撃破していた。

その映像を横目に、デイバインの脳裏にまだ幼い彼女の顔が浮かぶ。

「……4年、か」

4年前、自身が救出した少女はもつと幼かった。何も知らず、ただ炎と恐怖に怯えていたのは今でも覚えている。けれど、モニターの向こうに映る彼女と本当に同一人物なのだろうか。それほどまでに少女——秋月深琴は成長していた。外見も、その精神も。

そして、それは誰よりもデイバイン本人が驚いていた。あの時の無力な少女が、今こうして戦っていること。何より自分の意思でその場所に立っていることを。

「インターミドルに出てたと知った時も驚いたが……相変わらず無茶苦茶だな」

時空管理局第一士官学校から送られた深琴のプロファイルと推薦状に目を通し、デイバインは嘆息する。そこにはおおよそ14歳という年齢には似合わない経歴や資格が並んでいる。そしてその希望進路欄にははつきりと五文字の表記。デイバインはそれを睨みつけた。

曰く、『執務官補佐』と。

『憧れなんです』

『助けてもらって、助言してもらえて、強くなりたいと思ったから、私は今、ここにいます』



『だから、どんな相手だろうと全力で戦います』

それは三年前に偶然見つけた、少女の宣誓。真つ直ぐな目には慢心とはまた違う自信が滲み出ていた。

——違う。俺は、そのためにあいつを助けたんじゃない。

握りしめた拳に、力が入る。頭を振ってその記憶を追い出し、デイバインはモニターに指を伸ばした。

◇

所変わって、時空管理局ミッドチルダ地上本部。紺色の制服に着替えた私は、そこで待っているという『お客さん』と会っていた。

「八神はやて二等陸佐です。よろしく」

「フェイト・T・ハラオウン執務官です。こうして会うのは初めてだよ  
ね」

「気づいてると思うけど、ハラオウン執務官はクロノ提督の義妹いもつとさんや。私も顔なじみで、よく話を聞いてたんよ。『同郷の、優秀な後輩がいる』って。あ、遠慮せんとお茶飲んでな」

「あ、あの……恐縮です……」

そんな話をし、一口紅茶を飲んだ八神二佐は私を呼び出した経緯を話し始めた。

曰く、「臨機応変に動ける、少数精鋭の部隊設立」のため。

全ては四年前、あの空港火災が原因なのだ。八神はやて二佐は言った。大規模だからこそ後手後手に回らざるを得ない管理局と、後手後手に回っては解決できない事件と救えない命。もつと小回りの効く部隊があれば——そう思ったらしい。既に私も被害者の一人であることは知っていたのか、「辛い事、思い出させてごめんね」とフェイトさんは言ってくれた。私は無言で、首を横に振った。

フェイトさんが謝ることは何も無い。あの事故があつたから今、私はこうして魔導師の道を志したのだし。

「……とまあ、そんな経緯があつて八神二佐は新部隊設立のために奔走」

「4年ほどかかってやっとそのスタートが切れた、というわけや」

紅茶のカップをテーブルに置き、八神二佐は微笑する。それに合わせて途中でなのはさんと共に合流したリインフォースⅡ空曹長が指を立てた。

「部隊名は時空管理局、本局遺失物管理部・機動六課！」

「登録は陸士部隊。フォワード陣は陸戦魔導師が主体で、特定遺失物の捜査と保守管理が主な任務や」

「特定遺失物……ロストロギア、ですね」

ロストロギア。過去に滅んだ超高度文明から流出する、特に発達した技術や魔法の総称だ。過去には『ジュエルシード』や『闇の書』など異世界で発見されたりして、いろいろと問題になっている。

そうした技術や魔法は、広域犯罪に利用されやすい。現に先ほど挙げたロストロギアもかつてそうした目的で蒐集・利用されていた。管理局が管理する世界（魔法が認知されている世界）ならともかく管理外世界——私やなのはさん、八神二佐が生まれ育った地球のように魔法が認知されていない世界では、それは非常に大きな脅威となる。

「でも広域捜査は一課から五課までが担当するから、うちは対策専門」  
「そう、ですか……」

地上本部の領土ミッドチルダに本局直属の部隊を置く理由は語られなかったが、地上本部と本局の仲が悪い（というか地上本部が一方的に嫌っている）という事実は私のような一介の士官候補生でも知っている。恐らくその辺が関わっているのだろう。

なんて考えていると八神二佐は「で」と指を組み、上体をやや前に傾けた。

「秋月深琴士官候補生。私はあなたを機動六課のフォワードとして迎えたいと思ってる。……厳しい仕事にはなるやろうけど、濃い経験を積めると思うし、昇進機会も多くなる。まあその代わり、他の部隊との兼ね合いで、三等尉官での入隊はできひん。三等空士からやけど……どないやる?」

悪い話ではない……はずだ。執務官補を目指す者として、フェイト執務官と一緒に働けることはマイナスになるはずがない。階級だつ

て別に気にならないし、なのはさんの教導を受けられるのなら、今よりもっと強くなることだってできる。

他の部隊に配属されるより、確実に前に進むことができる。

「入ります！ 私、機動六課に！」

厳しい仕事でも頑張り続けたら——アーウイング執務官に会えるかもしれない。救助とあの時の一言に、改めてお礼を言えるかもしれない。

内心で一人舞い上がっていると八神二佐は微笑して「きまりやね」と呟いた。そして席を横にずらし、そこに結果を知らせに戻ってきたなのはさんが座る。

「じゃあ、今度はこっちの話に移るね」

言って、なのはさんは手元のボードを見て微笑んだ。

「試験の結果だけど、おめでとう。合格だよ。実技一般は問題ないし、最後のバスターもかなりよかった」

その言葉に、思わず胸を押さえる。まずは第一関門クリア、だ。そう思った瞬間、なのはさんは瞳を細める。

「でも、バリアブレイク系なしで魔力によるごり押しっていうのは減点対象。今は何もなくても、いずれ体に負担がでるよ」

「はい……気をつけます」

「まあそういった点も、六課に入ってから改めて教えていくからね」

「はい！ ありがとうございます！」

「今日は試験で疲れたやろ？ 細かいことはまた改めてってことで。秋月教官や士官学校の校長にはうちの方で話しくくから」

結果とか報告しとき、と八神二佐は笑った。



『やったじゃん！』

地上本部には、なぜか緑豊かな憩い場がある。その芝生に座り込んで、私はランク試験の結果、そして六課へのスカウトがあったことを友人と両親に報告していた。メールで報告した途端、友人の一人で本

局で研修中のルーチェ・バイオレットから映像通信が届いたんだけど。ちょうど休憩中らしく、その隣にはもう一人の友人、レオン・アヴァンシアの姿もあった。レオンが、先ほどから騒いでいる彼女の頭に一発手術を入れる。ルーチェの董色の瞳が涙で歪んでもレオンは顔色一つ変えない。……そういえば、彼の碧眼が曇ったところを、この二年間一度も見たことがなかった。

『いやー、一時はどうなるかと思ったけどさ、これで名実ともに空戦Aランク。進路先も決まって一石二鳥だ！ さっすが深琴』

うんうん、とルーチェは頷いている。その様子を、レオンは溜息混じりで見つめていた。

『でも、いいのか？ 新設部隊の登録は陸士部隊なんだろう？』

念を押すように、レオンは言う。

『いくら執務官がいて、昇進機会が多くても……』

「……大丈夫だよ。いずれにせよどこかの部隊に所属して、経験を積まなきゃいけないだし」

ロストログア対策ということは、遠からず犯罪者との戦闘だってあるのだ。そもそも魔導師ランクは「あくまで規定の課題行動を達成する能力」の証明である。それはイコール単純な魔力や戦闘能力であるはずがない。

『多分、っってお前な……』

深い溜め息が、レオンの口から零れた。が、その呆れ顔はすぐ真面目なものに変わり、画面の外へと向けられる。

『はい、すぐ戻ります』

「あ、ごめん。休憩終わり？」

『悪い。また時間取れたらメールする』

『私も戻るわ。深琴、またね』

「うん、またね」

モニターを閉じ、私は息を吐く。

(二人とも、すごいよなあ……)

もう既に局員としての研修を終え、進路に沿った部署に配属、研修

なのだから。後は卒業式を待つだけである。それに比べて、私のスタートは遅すぎる。

はあ、と溜息を零して私は芝生に寝そべった。遥か高い空は、青い。しかし、自分は今から始まるのだ。息を吐き、私は目を閉じる。

「頑張らないと……」

小さく呟いた言葉は、風にかき消された。

## 03：集結

第一士官学校講堂に、学校長の長く、ゆったりした話が響き渡る。今日で最後になる（少なくとも一年は着ないだろう）紺色の制服を身に纏った私・秋月深琴は大人しく祝辞を聞いていた。

思えば、これまでの人生で『卒業式』というものに参加したのは初めてで。昔兄から聞いた話では、「すっげえ眠くなる」とのことだったが、今の私は睡魔に打ち勝っている。むしろ睡魔より緊張感が強すぎて、指先が既に紫色に変わっていた。

（深琴、大丈夫？）

気遣わしげに視線を向けて、ルーチエが念話で問う。

（顔色悪いよ。つていうか真っ青）

（……血の気が引いてるのが自分でもわかる……）

緊張のあまり、貧血一步手前の状態だ。いっそこのまま倒れてしまいたいくらい。しかし過去、ある人は言ったそうだ。『時間はいずれ過ぎるが、同時に必ず訪れるものだ』と。

そして、その時は訪れた。

『卒業生代表、挨拶。卒業生代表 秋月深琴』

「……はいっ！」

列を離れ、私は足早に登壇する。落ち着け、大丈夫だから、とルーチエ、そしてレオンが念話をつなぐが、返事する余裕なんかありません。そもそも二人も、返事がくるなんて思っていないだろう。

『卒業生代表挨拶。卒業生代表、秋月深琴』

スピーカーに、自分の声に乗った。

『……本日をもちまして、私たち時空管理局第一士官学校61期生は卒業し、それぞれが目指す道へと進み始めます。思えば、あつという間に二年間が過ぎたような気がします』

そう、あつという間だった。試験をパスして、チームを組んで、夢を見つけて。あまりにもあつという間すぎて、卒業するという実感がわからない。

『今日から私たちは時空管理局の一員として働き始めます。管理局員

としての心構えと誇りを胸に、平和と市民の安全のための力となるために』

そして同時に、「首席卒業チーム」だからという理由で、なぜ私が代表挨拶をしなくてはならないのか小一時間ほど教官と話し合いたい。『……最後になりましたが、教官、そして両親、お集まりいただいた来賓の皆さま。まだまだ若輩者ですが、これからも変わらぬご指導、ご鞭撻の程よろしく願います』

拍手が響く。降壇して、列に戻って、ようやく息を吐くことができた。同期のみんなが「お疲れ」と念話を繋げてくれる。ああとつと終わってほしい。ほんとに倒れそうだ。



まあ無事に式は終わり、時間は過ぎ、新暦75年4月。遺失物対策部隊機動六課隊舎。陸士部隊の制服に身を包んだ隊員とバックヤード陣（といっても全員ではないらしい）が整列して、その時を待っていた。

「機動六課課長、そして、この本部隊舎の総部隊長、八神はやてです」  
八神二佐が登壇し、集まった面々を見渡す。

「平和と法の守護者、時空管理局の部隊として事件に立ち向かい、人々を守っていくことが、私たちの使命であり成すべきことです。——実績と実力に溢れた指揮官陣。若く可能性に溢れたフォワード陣。それぞれ優れた専門技術の持ち主の、メカニックやバックヤードスタッフ。全員が一丸となって、事件に立ち向かっていけると信じています。……まあ、長い挨拶は嫌われるんで、以上ここまで。機動六課課長及び部隊長、八神はやてでした！」

全員からの拍手を受け、八神二佐は微笑んだ。  
「そういうえば、お互いの自己紹介はもう済んだ？」

なのはさんが半ば振り返って、後ろを歩く私たち六課フォワード（見習い）に問う。

「え、えっと……」

「名前と、経験やスキルの確認はしました」

「あと部隊分けと、コールサインもです」

返事に詰まったシヨートカットの少女——スバル・ナカジマ二等陸士に代わって、ツインテールの少女——ティアナ・ランスター二等陸士と赤毛の少年——エリオ・モンディアルが答える。

「そう。……じゃあ訓練に入りたいんだけど、いいかな？」

「はい！」

姿勢を正し、私たち五人は声をそろえた。

所変わって、機動六課陸戦訓練場付近。フォワード陣はいったん解散し、それぞれ訓練用ジャージに着替えて訓練場に集合することになった。私も白シャツとズボンに着替え、腰のベルトに返却された自作デバイスを戻す。

「珍しい形ね」

「そう、でしょうか？」

「うん。自作？」

「はい。一応……」

言って、スバルとティアナは私のデバイスを見つめた。かくいう二人のデバイスだって珍しい形だ。スバルは拳型、ティアナは拳銃型。ポジション的にもスバルはフロントアタッカー、ティアナはセンサーガードか。ちなみにエリオは槍型、キャロはグローブ型のデバイスだ。

「今返したデバイスにはデータ記録用のチップが入っているから、ちよつとだけ大切に扱ってね。それと、メカニックのシャリーリから一言」

なのはさんから話を振られたメカニック、ロングアーチ所属のシャリオ・フィニーノが口を開いた。

「えー、メカニックデザイナー兼機動六課通信主任の、シャリオ・フィニーノ一等陸士です。みんなは『シャリーリ』って呼ぶので、よかつたらそう呼んでね」

ちなみにロングアーチ所属である私にとって、同僚であると同時に



先輩でありある種上司でもある（あくまでも直属は八神部隊長だ）。

「みんなのデバイスを改良したり、調整したりもするので時々訓練を見せてもらったりします。あ、デバイスについての相談があったら遠慮なく言ってね」

「はい！」

「……じゃあ、早速訓練に入ろうか」

なのはさんは言うものの、はつきり言っただけでこの場所に訓練できるようなスペースはない。目の前には海が広がっている。

「は、はい……」

「でも、ここで、ですか？」

スバルとティアナの問いに、なのはさんは不敵な笑みを浮かべ、シャーリーを呼んだ。呼ばれた本人は右手を挙げて笑っている。そして右手を振り、九種類の空間モニターを開いた。

「機動六課自慢の訓練スペース。なのはさん完全監修の、陸戦用空間シミュレーター。——ステージ・セット！」

その細い指が、スイッチを押した。同時に目の前の海に、ビルのが現れる。その光景は、Aランク試験会場にも似ていた。



「ヴィータ、ここにいたのか」

「シグナム」

桃色のポニーテールを揺らし、ライトニング分隊副隊長のシグナムが言った。その隣にはスターズ分隊副隊長のヴィータが立っている。

「新人たちは早速やっているようだな」

「ああ」

二人の視線の先で、新人魔導師の五人がそれぞれ互いの状況を確認していた。フロントアタッカーのスバルとガードウィングのエリオ。センターガードのティアナとフルバックのキャロ。

そして唯一の『ポジションフリー』であるが故に、一人で黙々とデバイスの状況を確認する深琴。

「お前は参加しないのか？」

「五人とも、まだよちよち歩きのひよっこだ。あたしが教導を手伝うのはもっと先だな」

「そうか」

「……それに、自分の訓練もしたいしさ」

言つて、ヴィータの瞳が僅かに陰った。しかしそれは次の瞬間には強い輝きへと変わる。

「同じ分隊だからな。あたしは空で、なのはを守ってやんなきゃいけないえ」

「……頼むぞ」

「ああ。……そういえばシヤマルは？」

家族であり共に戦う『湖の騎士』の姿が見えないことを疑問に思い、ヴィータが問う。そんな彼女にシグナムはただ一言だけを告げた。

「自分の城だ」

「んー！ 良い設備」

一方その頃、湖の騎士・シヤマルは、シグナムに「自分の城」と評された機動六課医務室でその瞳を輝かせていた。

「これなら検査も処置も、かなりしつかりできてるわね」

「本局医療施設からの払い下げ品ですが、実用にはまだまだ十分ですよー」

「みんなの治療や検査。おねがいますね、シヤマル先生」

「はーいー！」

機器の調整をしながら言ったルキノ・リリエとアルト・クラエツタに、シヤマルは笑顔で答えた。



『よし、と。みんな、聞こえる？』

「はーいー！」

陸戦訓練場の、とあるスペース。なのはさんとシャーリーは既に別の場所に移動していた。

『じゃあ、早速ターゲットを出していいこうか。まずは軽く10体から』『動作レベルC、攻撃精度Dってところですかね』『うん』

何が出てくるのだろう。無意識のうちに私はデバイスに手を伸ばし、体の重心を低くしていた。

なのはさんの声が響く。

『私たちの仕事は、搜索指定ロストログアの保守管理。その目的のために私たちが戦うことになる相手は……これ!』

地面に、複数のミッドチルド魔法陣が現れる。輝きを増した魔法陣から、カプセルを大きくしたような機械が10機、現れた。

『自律行動型の魔導機械。これは近づくとき攻撃してくるタイプね。攻撃も結構鋭いよ』

シャーリーが軽く説明する。

『では、第一回模擬戦訓練。ミッション目的、逃走するターゲット10体を破壊または捕獲。15分以内』

「はい!」

『それでは』

『ミッション、スタート!』

なのはさんとシャーリーの声が響くと同時に、ターゲットは全機、逃走を開始した。

「うおおおおおおお!」

逃走する4機のターゲットをスバルは追跡し、跳躍すると同時に拳に纏わせた魔力を一気に放出する。

しかし、いとも容易く避けられた。

「何これ、動き早っ!」

その視線の先では、エリオがターゲットの攻撃を回避しながら壁を跳躍し、接近しているところだった。槍を振り魔力を放出するも、その攻撃もまた外れる。

「駄目だ……ふわふわ避けられて、当たらない……」

「前衛二人、分散しすぎ！ ちょっとは後ろのこと考えて！」

『あ、はい！』

『ごめん！』

ティアナの声が飛ぶと同時に、眼下の地上ではターゲット10機が合流して逃走を続けていた。

「ちびっ子、威力強化お願い」

「はい。——ケリュケイオン！」

《Boost up. Ballet power.》

威力強化を受けたティアナが放ったオレンジ色の弾丸は、ターゲットに届く前に、消えた。

「バリア!？」

「……違います。フィールド系!？」

『魔力が消された!？』

『そう。ガジェット・ドローンにはちよつと厄介な性質があるの。攻撃魔力をかき消す、アンチマジックフィールド。通称AMF。普通の射撃は通じないし……それにAMFを全開にされると、飛翔や足場作り、移動系魔法の発動も困難になる……スバル、大丈夫?』

どうやらスバルが追跡に失敗したらしい。状況確認のため開きっぱなしにしていた回線から、ガラスの割れる音がしたから、窓に突っ込んだようだ。怪我はなさそうだけど……。

『まあ、訓練場では皆のデバイスにちよつと細工をして擬似的に再現してるだけなんだけどね。でも、現物からデータをとってるし、かなり本物に近いよー』

『対抗する方法はいくつかあるよ。どうすればいいか、すばやく考えて、すばやく動いて!』

なのはさんの言葉を聞いて、私は先日のAランク試験を思い出す。あの時用意されたオートスフィアも似たような機能が搭載されていた。あの時は何の用意もしてなかったけど、今回は違う。今日まで

に、一応の対抗策は編み出している。今頃四人とも、手近のターゲットを叩いている頃合だろう。

分散したターゲットが2機、こちらへ向かってきた。デバイスを構えて、私はティアナへ通信を繋ぐ。

「こちらロングアーチ04。ターゲットの迎撃に移ります」

『了解。確実にお願いできる?』

「了解しました」

私が立っている場所は、ビルとビルを繋ぐ橋の上。スバル達四人からは離れているのは、設定された「最終ライン」がここから数メートル後方だから。ティアナの言葉は意地悪でも皮肉でもなんでもなく、ここを突破されると、ミッション失敗という単純な話。そんな場所に私を配置したのは、他のフォワード陣より魔導師ランクが上であること、そして私のポジションと経歴に由来する。

「ロードカートリッジ……い！」

カートリッジを二発ロードして、銃口の先に魔力弾を生成した。淡紅色のそれを、同色の膜が包み込む。合計三発の多重弾殻弾をそれぞればらばらに誘導し、ターゲット二機の進路を妨害した。軌道も速度も甘いから命中しない。けれど、それでいい。あくまでもこの魔法は、一時凌ぎなのだから。

（——魔力が消されて通らないなら、『発生した効果』をぶつけなければいい）

そしてカートリッジを三発ロードすると同時に、淡紅色のベルカ式魔法陣が浮かぶ。それはターゲットよりも前に。そこに踏み入れた1機の動きが鈍くなった。周辺の水分が凍結し、ターゲットを包み込む。氷の足枷が、ターゲットの動きを止めた。

「っ……い！」

残るはあと一機。跳躍して逃げ惑うターゲットの頭上に飛び降りる。そして右手のデバイスでターゲットを切りつけた。実体刃を噛むように、AMFが発動する。同時に後方から多重弾殻弾の中身がAMFを突破した。

左手で握ったデバイスの銃口に、魔力スフィアが形成される。

「デイバイン……っ……バスター！」

引き金を引き、淡紅色の魔力砲がガジェットを貫いた。

◇

淡紅色の爆発が起こった。

「うっそお!？」

「んー、また無茶するなあ……発生効果で足止め、はいいんだけど」  
モニターの向こうには無傷の深琴と氷の檻に囚われたガジェット  
ドローン、そして無残にも破壊されたもう1機の姿があった。

多重弾殻射撃は本来AAランクのスキル。それをカートリッジ二  
発で三発も生成し、短時間とはいえ全弾誘導状態を維持するなんて、  
まず難しい。

「でもあの子、先天資質はもってないはずですよね？」

「うん。まあ士官学校で温度変化魔法は習ってるはずだから、可能と  
いえば可能なんだけどね」

「……まあ新人の中で唯一の空戦A+ランクですしね。よく引き抜け  
ましたね」

「オフィス勤務はロングアーチだから、面倒見てあげてね。シャ  
リー？」

「もちろんです!」

だが、先日のAランク試験から一ヶ月も経っていない。その短期間  
で資質のない、それも凍結系の魔法を習得する魔導師なんて聞いたこ  
とがない。似たような事例にクロノ・ハラウオンがいるが、彼が闇の  
書事件で広域凍結魔法を使用した際は、彼が長年培った魔力変換・温  
度変化技能と氷結技能に特化させたデバイスがあったからだ。彼女  
が度を越した努力家なのか、『ポジションフリー』故のプライドか。

(無理をする傾向があるから心配だけど……)

内心で呟き、なのはは通信待機中のモニターに指を伸ばした。

◇

訓練は一日中続き、空はすっかり暗くなっていた。

(想像以上に疲れた……)

シャワーを浴び、自室のベッドに倒れ込むと途端に睡魔が襲ってきた。動き回って欲しくて、空腹のはずなのにまったく感じられない。

(……でも、ちよつと楽しかったかな)

絶対嘘だ、化けものかと友人には言われそうだけど。目標があれば、ある程度の辛いことは乗り越えられる。少なくとも何も無いのになんて痛くて、辛かったあの頃に比べたら。

夢を見ていた。空港火災の後、伯父夫婦から魔法を教わり始めた日の夢を。

私の魔法術式——『特殊型の近代ベルカ式ミッドチルダ混合ハイブリッド』を活かすための戦い方と、魔法の数々。それと平行して飛行魔法の練習と、『剣閃』と呼ばれる格闘技法の修得。

そして夢の風景は三年前——インターミドル・チャンピオンシップのそれへと姿を変える。歓声を受けてフィールドに立つ私は、三年前の自分そのままだった。

(……また、世界代表戦か)

何の因果か初出場ながらストレートに世界代表にまで選ばれた、当時の私。しかし初の世界戦であつという間に敗退している。戦績は世界代表10位。

そもその原因は、進学先で伯父と揉めたことだった。

当時、私が希望していたのは航空武装隊。一方伯父は士官学校への進学を希望していた。あくまで「預かっている姪っ子」を、危険な部署に行かせられるかと伯父は繰り返していた。私を預かったのは、魔法に関してちゃんとした指導をするためだと。

当然揉めに揉めた結果、「インターミドルで世界代表に入れたら、航

空武装隊へ行ってもいい」という今思えば非常に無茶な結論に落ち着いた。インターミドルの出場者は全員魔導師であり、管理局やその関係機関に所属していない。その中で上位の成績で勝ち残れなければ、本局直属の空武装隊に合格しても続かないだろう——と伯父が考えていたことを、伯母が教えてくれた。

結果は条件は満たしたものの、日々のオーバーワークで体を壊した私は半年の治療の後士官学校へ進学し、以降のインターミドルも欠場した。

だが、ふと思う。何故伯父が私に対して過剰に反応するのだろうか。

(父さんと母さんが、私のことを気にかけるはず無いのに……)

それを、伯父は誰よりも知っているはずだ。

目を開けると、暗闇に包まれた寮の自室。寝返りをうって、私はきつく目を閉じた。これ以上両親のことを思い出さないように。脳裏に過ぎる家族の姿をかき消して。

——ほら。少し耐えさえすれば、何も悲しいことなんて無いのだから。そう言い聞かせた。



### 03. 5：新しい日々

ただ自分を縛るだけだった白一色の世界は、彩り鮮やかな自由な世界に。

ただ自分を生かすだけだった機械は、魔法という名の力へと。

ただ見上げるだけだった空は、今となってはとても身近なものに。

ただ懂れていた日常は、あつという間に終わりを告げて。

——新しい日々を、「機動六課」で費やすことになる。

時空管理局遺失物管理部対策部隊、機動六課。私・秋月深琴が所属するその部隊は特定遺失物の保守管理が主な任務であり、同時にそれらを悪用しようとする犯罪者と戦う対策部隊でもある。一年間という期間限定部隊でありながら集められた戦力<sup>隊長陣</sup>は、間違いなく時空管理局最強。そして選抜された新人は、その誰もが才能を秘めている。ほぼ反則に近いこの人事が通ったというのだから、部隊長・八神はやて二佐はよほどのやり手なのだろう——というのが、現時点での第三者評価だ。

「秋月三士、お茶をどうぞ」

「あ、ありがとうございます。ルシエ三士」

そんな部隊に私が配属されてから、4日が経過しようとしている。隊員オフィスで、同僚のキャロル・ルシエ三等陸士からお茶を受け取り、私は作成途中だった書類を一気に書きあげた。そんな私の様子を、キャロはぽけーっと見ている。

「え?! 深琴、もう終わっちゃったの!?!」

半ば悲鳴に近い声を上げたのは、スバル・ナカジマ二等陸士。デスクワークは苦手なのか、その目には涙が浮かんでいる。

「あの、ナカジマ三士。私でよければ手伝いますが……」

「ほんと?!」

「駄目よ、深琴。こいつを甘やかしちゃ」

バックに花畑さえ見えるほど一気に表情を明るくしたナカジマ三士を、ティアナ・ランスター二等陸士が突き放す。

「うう……ティアあー……」

「そんな目しても、駄目なものは駄目」

「ナカジマ二士、資料です。よかったらどうぞ」

「エリオお……」

資料を差し出したエリオ・モンディアル三等陸士に、ナカジマ二士はまるで抱きつくようなテンションでお礼を言う。そして五人で書類を書き進めること数分、そのアナウンスは響いた。

『隊員呼び出しです。スターズ分隊 スバル・ナカジマ二等陸士。同ティアナ・ランスター二等陸士。ライトニング分隊 エリオ・モンディアル三等陸士。同 キャロ・ル・ルシエ三等陸士。ロングアーチ 秋月深琴三等空士。10分後にロビーに集合してください』

……一体何だろう。呼び出しなんて、配属して初めてだ。そんなことを話しているナカジマ二士とモンディアル三士、そしてルシエ三士のヒーリングを受けるランスター二士。

「深琴は平気？」

「あ、はい。大丈夫です」

ありがとうございます、と頭を下げると、ナカジマ二士、ランスター二士が眉を顰めた。……え、なんかまずいこと言った？

「あのさ、なんつーか、こう……」

「チームメイトなんだし、もうちよつと柔らかくていいよ。そんな敬語とか、気を使わなくても」

そう言われても、正直に言えば困る。年齢は近いし、階級だってそう差はないのだから敬語はおかしいのかもしれないが……。

(昔、二人にも言われたっけ……)

まだ士官学校に入学して間もない頃、数少ない友人のルーチェ、そしてレオンに言われた覚えがある。

『立場は対等なんだから、敬語を使う必要なんてない。……いやまあ、親父さんの教育方針は間違っではないんだけど……』

『私たちがいいっていえばいいの！ チームメイトなんだから！』

「名前でもいいよ。スバルと、ティア！」

困惑した私とエリオ、キャロにスバルは言う。

「ではスバルさんと」

「ティアさんで」

「うん！」

「さ、行くわよー」

エリオとキャロの結論に満面の笑顔で、スバルは頷く。その光景を見守っていたティアナが号令をかけた。

「はい、みなさん集まりましたねー」

ロビーで待っていたのは、機動六課部隊長補佐・リインフォースⅡ空曹長だった。

「今日の午前中は訓練なしということで、5人に六課の施設や人員を紹介していくですよ」

「はいっ」

「ほかのみんなは初日にオリエンテーションをやったのですが、5人はずーっとなのはさんの訓練でしたから」

「みっちりやってました」

スバルが笑顔で答える。

「でもおかげで最低限の基礎は終わって、今日からは本訓練のスタートだとか」

……最低限の、『基礎』？ あれが？

◇

機動六課、部隊長室。

「訓練ももう4日目か。新人たちの手ごたえはどないや？」

「5人共いいね。かなり伸びるよ、あの子たち」

機動六課部隊長・八神はやて二等陸佐が、戦技教導官・高町なのは一等空尉に問う。はやての言葉に、なのははウインクを返した。

「取り急ぎ準備だけは終えたんだけど、伸ばしていく方向もだいぶ見えてきた」

言って、なのはは新人魔導師5人のデータをモニターに表示させ

る。

「高速機動と電気資質。突破・殲滅型を目指せるガードウィングのエリオと」

モニターの画像が、エリオからスバルへと変わる。

「一撃必倒の爆発力に頑丈な防御性能。フロントアタッカーの理想型を目指していくスバル」

今度は、スバルからキャロへ。

「二騎の竜召喚を切り札に、支援中心に後方型魔導師の完成形を目指していくフルバックのキャロ」

そしてキャロから、ティアナへ。

「射撃と幻術を極めて、味方を生かして戦う戦術型のエリートガンナーになってくはずの、センターガードのティアナ」

最後にティアナから、深琴へと。

「魔力運用の器用さを生かして臨機応変にポジションを変更し、単独でも高い戦闘力で敵を殲滅する『ポジションフリー』の深琴——チームでは一応ウィンドバックを担当するけどね」

言つて、なのはは満面の笑みを浮かべる。

「どこまで伸びるか楽しみでねー。5人がしっかり完成したら、すごいことになるよー!」

「楽しみやー。リーダーは誰になるんやろ?」

「ティアナで決まりじゃないかな。ちよつと熱くなりやすいところがあるけど視野は広いし指示も正確。自然と他の4人を引っ張ってるしね」

ただ、となのはは続ける。

「ライトニングは経験不足以外は問題ないんだけど、スターズのコンビと深琴が3人揃つてすごい突撃思考なんだよ」

「あー……なのはちゃんのちっちゃいころみたいなの?」

一撃必倒を地で行くスターズコンビと深琴、そして全力全開を地で行くエースオブエース(当時9歳)の映像がなのはの脳裏にも過つたらしい。複雑そうな顔で呻いた。

「今すぐでも出勤できなくはないけど、全員まだあと1週間くらいはフル出勤は避けたいかな。もう少し確実に安全な戦術を教えるからにしたいんだ」

「へーきや。そのための隊長・副隊長の配置やし、新人たちの配置についてはなのはちゃんの裁量に……」

と、はやては言い直す。

『高町教導官』に全面的にお任せや」

「ありがとうございます、八神部隊長」

◇

「はい！ こちらの食堂で案内は一通り終了です。食堂の使い方はもうわかってますよね？」

「はいっ」

「ちようどお昼休みです。これにて解散としましょう」

「ありがとうございます！」

「じゃあ、お昼食べちやおうか」

「うん！ エリオたちも一緒に……」

「スバルー、ちよつといいー？」

言いかけたスバルを、アルトが呼んだ。

「先食べてて！ すぐ合流するから」

「ん」

「はいっ！」

そして残された私たちを、沈黙が包み込む——その瞬間だった。ポケットに入れていた携帯端末が着信を告げる。

「すみません。お昼、お先にどうぞー」

「席取ってるわね」

「すみません、ありがとうございますー！」

足早に食堂を出て、一息つく。休憩室の一角で、ようやくモニターを繋いだ。発信者は、レオン・アヴァンシア。

『悪い、急に。そっちはどうだ？』

「なんとかやってるよ。今のところは大丈夫」

『……お前の“大丈夫”はあてにならないから聞いてんだよ。噂になっただけぞ。Aランク試験のターゲットを完膚なきまでに破壊したって』

「やりすぎ?」

『分かってんなら自重してくれ』

自重してたら落第だつてば。内心でそう呟いていると、レオンが気まずそうに切り出した。

『本当に大丈夫か? 訓練もそうだが、同僚と上手くやれそうかとか……特にお前は、いろいろとアレだし』

アレ、とぼかさされたがその中身は言われなくても分かっている。地球出身で本局教育隊教官夫妻の姪、新人のくせにAランク、士官学校首席卒業——そして、インターミドル・チャンピオンシップ世界ランク10位。羅列するだけでも生意気な経歴だ。うち最初と最後だけでどれほどの人間を敵に回しただろう。士官学校に入学して間もない頃はやれコネだのやれお嬢だの言われてたっけ(腹が立ったのでそいつら全員実技訓練で叩きのめしてやった。今となつてはいい思い出である)。今の居場所でも似たようなことになっていないか——レオンは、それを心配しているらしい。

「……余計なお世話」

そんなことない、と言い切れない自分が腹立たしくてついぶっきらぼうな口調になる。こちらを真っ直ぐに見詰める、モニター越しの碧眼がその感情を更に駆り立てた。

大丈夫だと思う。けれど確実かと問われたら否、と答えるしかない。

私は秋月英史の姪で、同じ『秋月』を名乗る人間で。無力であることを理由に、秋月の姓を汚すわけにはいかない。無力であることをただ嘆くだけでは母<sup>あの人</sup>さんと、何一つ変わらない。そして何より、無力であることが嫌だった。私とあの人は違う。あの頃と今の私は違う。違うはずだ。違ってほしい。——それが積み重なって、強くなりたかった。いったん入ったスイッチは、今に至るまで切れる様子はない。

い。

(……私は、間違つてない)

そうだと自分で自分に応える。あの黒銀と並び立つその日——いや、再び出会うその日まで、私は無力でいるわけにはいかない。そう考えれば訓練も全然苦しくなかった。

それは同時に「ごく一般的な」14歳でいられないということだけで、それでよかった。少なくとも今の私はそう思っている。そしてそれは、自分だけが分かっていたいればいい。

『……ならいいけどな。ルーチエも心配してるし、メールくらい入れろよ』

じゃあな、と通信が切れる。相変わらず過保護なチームメイト達だ。慣れないうちは二人の気遣いが苦手で仕方なかったほどだったのを思い出す。今では心地よくなっているのだから、時の流れというのは不思議だ。

そう考え微笑んでいると、頭を軽く小突かれる。

「よ。お疲れさん」

「ぐ、グランセニツク陸曹?! お、お疲れ様です!」

大慌てで背筋を整え、敬礼する。その様子に陸曹は「相変わらず固えな、お前」と苦笑していた。

「オリエンテーションは終わったのか?」

「はい。つい先ほど」

答えた私を、陸曹はじっと見ている。

「あの……」

「ん? ああ、悪い。……そういやお前、歳いくつだっけ」

「今年の夏で14歳になります」

「14ねえ……入局したての俺より年下かよ。まああいつはもつと年下だったか」

天才は怖いねえ、と呟きながら陸曹は歩き出す。ちなみに呟く前に「昼飯まだだろ? 一緒に行くか」と言われたため、私はその隣を歩いている。

「さっきのは友達?」

「はい。士官学校時代のチームメイトで……」

という振りから徐々に個人情報暴露されていく。誕生日、血液型、趣味・特技エトセトラ。3年前にはよく雑誌のインタビューもあったから慣れてはいるけど、口にするのは苦手だ。

「あの……その質問に、何か意味があるんですか？」

「だってお前、ここに入ってから事務的な会話しかしてないだろ」

耐えかねて口を挟むと、陸曹はこともなげにそんなことを言った。

「アルトが気にしてたぜ」

「クラエツタ二士が？ ……あ痛っ！」

聞き返すと、なぜか額を指で弾かれた。いけない、油断してた。

「他にもルキノやメカオタ眼鏡やお若い准陸尉殿やリイン曹長や八神部隊長がな。ついでにいえばなのはさんにフェイトさん、シグナム副隊長やヴィータ副隊長もだ」

「ロングアーチと隊長陣全員じゃないですか」

「そんだけ心配かけてんだよ、お前は」

肩を竦めて、陸曹は説明した。曰く入隊してから私が誰ともろくに話をしてないとクラエツタ二士、リリエ二士が心配していて、というかよそよそしいよねーとフィニーノ一士が輪に入り、そこからロウラン准尉、リイン曹長と輪は広がっていつてシグナム副隊長と陸曹に伝わり、ほぼ同時にヴィータ副隊長、八神部隊長、なのはさん、フェイト執務官に伝播していったとのこと。

「むやみに誰とでも慣れあう必要はねえけど、最低限のコミュニケーションは取れないとマズいんじゃないの？」

「……そう、ですね……」

けれど、どうすればいいのか。レオンもルーチェも私より四つ近く年上で、それでも同期生の中では私に次いで若かったのだ。けれど六課は違う。二人よりも私と歳が近い人が多い。

「……でも、分からないんです。自分とあまり歳が変わらない人との会話の仕方が」

「分からないって……」

そう、分からない。地球ではずっと入院してたし、士官学校に入る



までは伯父夫婦の下でひたすら魔法の力を磨いていた。士官学校ではレオンとルーチエがずっと傍にいたし、二人より私と年が近いひとはいなかったから。

何を話せば、相手は応えてくれるのだろうか。それさえ分からない。

「そう難しく考えなさんな」

言って、陸曹は私の頭をぽんぽんと叩く。

「話していくうちに分かってくるもんだ。話なんて最初から合わないのが当たり前だしな」

「はい……」

「まずは敬語はやめろ。うちはそこまでうるさくないし丁寧語で十分だ、とは八神部隊長からな。ついでに言えば階級呼びもやめろ。せめてフォワード陣は呼び捨てでな。俺も『ヴァイス陸曹』でいい」

「はい。ヴァイス陸曹」

「その調子だ。……ほれ、行ってこい」

視線の先には、宣言通り席を取って待っていてくれたフォワード陣がいる。

「遅いわよ、深琴」

「ご飯冷めちゃうよー」

「メニニュー、何にしますか?」

「深琴さん、お茶どうぞ」

歓迎準備完了、と言わんばかりに4人は空席を示す。ヴァイス陸曹に背中を押された私はまずは一歩踏み出して止まり、今度は小走りで4人の元へ向かった。自然と頬は上気し、口角が上がる。

「――ごめん、お待たせ」



「なのはちゃん的に、この機動六課はどーやろ」

「どうって?」

「いい部隊になりそうかなー、とか」

はやての問いに、なのはは笑みを浮かべた。

「人材は本当にしっかり揃ったと思う。ロングアーチやバックヤードまで本当にいい子たちばかりだし」

が、そこまで言っつて、なのはの表情は曇る。

「新人たちも……特にフォワードたちはいろいろ重い子も多いけど……ライトニングの2人はもちろんスバルもティアナも、深琴も……」

『立ち向かうための意志を持った子』。前線メンバー集める時に一番気にしたところや。あの5人はそこは絶対間違いない」

言っつて、はやてはなのはを見た。

「なのはちゃん、フェイトちゃんには苦労かけるし寄り道してもらっつて申し訳ないけど……」

「寄り道じゃないよ。前線で教官つて立場は、私にとつては夢みたくない立場だし」

それに、となのはは続ける。

「立ち向かうための意志に、撃ち抜く力と元気に帰つてくる技術をしっかり持たせてあげること。——それがわたしの仕事だからね」



「さて、じゃあこれから第一段階に入っていくわけだけど」

陸戦訓練場で、教導隊制服に身を包み、その手にデバイス・レイジングハートを携えてなのはさんは口火を切った。

「まだしばらくは個人スキルはやりません。コンビネーションとチームワークが中心ね。5人ともそれぞれ得意の分野をしっかりと生かして協力し合う！」

「はいっ！」

「個性を生かして能力をフルに活用して、まずはチームでの戦いをしっかりと身につけよう」

「はいっ！」

準備体操に入りながら、私は空を見上げた。

新しい居場所と、そこで過ごす日々。仲間たちと、エースたちと過ごせるこの瞬間を大切に。

そしてきつかけを与えてくれたあの黒銀に、言いつくせないほどの感謝を胸に。

——秋月深琴、頑張ります！

## 04：フアースト・アラート

『前略 ルーチェ、レオンへ』

メールソフトを立ち上げて、私は黙々とメールを打っていた。機動六課に配属されて二週間が経過したこと、訓練が想像以上に厳しいこと（これでまだ第一段階なんだってさ）、しばらくは24時間勤務だということを知らせておくために。

というのも、同期の中で陸士部隊に配属したのは私だけだから。周囲に知り合いも何もいないから、今まで以上に連絡をこまめに取り合っつて、常に状況を知っていたいから——そうレオンは教えてくれた。ついでに多分ルーチェあたりが中心になって、定期的な同窓会をやるのだろう。そのほとんどには参加できないだろうけど。ついでいか同窓会ってそんなに頻繁にやるものだったけ？

（いつまでも子供扱いは勘弁してほしいけどなあ……）

まあでも、愚痴っついてもなにも変わらないわけで。ならその時間を有意義なことに費やすというのが筋だろう。

時は新暦75年5月。現在時刻、午前5時。日課のランニングを終えた私は、自室でシャワーを浴びていた。本来寮では二人一部屋が原則らしいのだが、スターズはスターズと、ライトニングはライトニングと各部隊毎だったりする。私の所属はロングアーチなので同じロングアーチ所属の人と組むはずだったが、フォワードを兼ねる私は殆どの時間を訓練に費やしている。そのため他のロングアーチの隊員では活動時間が合わないの一人部屋をもらったのだ。

（……何がいいって、こうして気兼ねなくシャワーを使えるってことだよな……）

士官学校時代も寮に入っていたけど、その時のルームメイトは友人でもあるルーチェ。時間外の自主訓練には寛容だったけど、やっぱり遠慮はあったわけで。それに比べてやや手狭でも、一人部屋は気楽でいい。

（それにみなさんでお風呂って、あんまり好きじゃないし……）

というより、周囲——特にスバルやティアナとのスタイルの違いが

気になってしまう。一年、二年ほどしか変わらないのに私の体つきは子供のそれだ。動きやすいからいいけれども、やっぱり気になる。

そして時刻は6時ちようど。

「今日もやるぞー!」

「おおー!」

スバルの掛け声に声を合わせたエリオとキャロを微笑ましく思いながら、私はメールを保存し、送信予約をかけた。ちなみにこれから早朝訓練です。

◇

「はい、せいれーつ!」

白い防護服を身に纏ったなのはさんが号令をかける。集まった私たちは息も絶え絶えだ。

「じゃあ本日の早朝訓練ラスト一本、みんな、まだ頑張れる?」

そう聞かれて、無理ですなんて言えない。言えるわけがない。返事に満足したなのはさんは内容——弾丸回避訓練シュートイベーションを告げた。デバイスを呼び、中距離誘導制御型魔法《アクセルシューター》を10発生成する。

「私の攻撃を五分間被弾無しで回避するか、私にクリーンヒットを入れればクリア。誰か一人でも被弾したら最初からやり直しだよ。頑張っているこう!」

「このぼろぼろ状態で、なのはさんの攻撃を五分間……捌き切る自信ある?」

「ない!」

「同じくです!」

ティアナの問いに、私とスバルが被った。ちなみに私、訓練中は陸戦限定（飛行魔法使用禁止）なので、自信がある方がおかしい。というか、五分間もスタミナが持つかという話だ。

「じゃ、なんとか一発入れよう!」

即断即決、素晴らしい限りです。なのはさんが開始を告げ、アクセ

ルシューターが飛んできた。

「全員、撤退回避！ 二分以内で決めるわよ！」

「おーっ！」

声を合わせ、全員で攻撃を回避する。——が、そこから先が問題だった。

シルエット・スバルがなのはさんに突っ込み、シルエット・ティアナが狙撃（する振り）。なのはさんが気付かないはずがないからそれを囮にして、幻術で隠れていたスバルがなのはさんを攻撃する。残っていた2発のシューターが彼女に向かうため、回避したスバルをティアナが援護しシューターを撃ち落とす。私は時折シューターをおびき寄せエリオとキャロに寄せ付けない。隙を突いて、キャロのブーストを受けたエリオがなのはさんに一発入れる——とシナリオとしては問題なかった。

問題は実際に行ったときに、発生した。スバルのローラーが悲鳴を上げ、ティアナの援護が不発という異常事態が。

ウイングロードで逃げるスバルを、シューターが追う。なのはさんへのマークがなくなってしまった。キャロはブースト、エリオは攻撃の準備に入ってるから動けないし、動かすわけにはいかない。

「ロードカートリッジ……！」

カートリッジを三発ロードし、私もアクセルシューターを10発呼びだす。同時に8発をなのはさんへ放ち、突撃した。

「っ……！」

桃色のシールドに阻まれ、刃は届かない。いつくるか分からない視覚外からの攻撃にも気を抜けない。こうなったら……っ！

左手のデバイスの銃口をバリアに向ける。カートリッジロードと新たに8発の誘導弾を生成した。そしてそれを一つにまとめ上げ、再びカートリッジをロード……しようとした瞬間、スカツやシユカツという気の抜ける音が響いた。カートリッジ内の魔力が回った様子はない——炸裂不足だ。

「こんな時にい!?!」

そしてその隙を逃がすなのはさんではなかった。戻ってきたピン

ク色の誘導弾が私へと飛んでくる。

「アクセル！」

高速移動魔法——ブリッツアクションで何とか回避し、距離を取る。マガジンごと取り換え、再びカートリッジをロードした。10発の魔力刃を生成し、環状魔法陣が取り巻いたそれを一斉に撃ちこむ。煙は上がるが、命中した様子はない。全部バリアで防がれたはずだ。——けれど今は、それでいい。

「我が乞うは、疾風の翼。若き槍騎士に、駆け抜ける力を」

《Boost Up Acceleration》

ちようどいいタイミングで、キャロのブーストが完了する。

「あの……っ、かなり加速がついちやうから、気をつけて！」

「大丈夫！ スピードだけが取り柄だから！」

不安げなキャロにエリオはそう答え、槍型デバイス・ストラダーを呼んだ。

煙が晴れ、ティアナの誘導弾とチビ竜・フリードの火炎弾、再生成した私のアクセルシューターがなのはさんに向かっては避けられる。

「エリオ、今！」

エリオ達に気づいたなのはさんが向かう。ティアナの声が響いた。

「いつ……けええええええ！」

《Speerangriff!》

直線的な軌道の攻撃。爆煙が辺りを覆った。バリアさえ破れたら確実に入ったはず……！

だが、煙から弾かれたようにエリオが姿を現した。

「エリオ！」

「外した!？」

煙の向こうから現れたなのはさんは、無傷だった。が。

《Misson Conplete》

レイジングハートはそう告げた。ビルの窓枠に片手でぶらさがっているエリオを回収し、地上へ運ぶ。確かによく見れば、なのはさんが纏う白い防護服の左胸元の部分が僅かながら汚れていた。

「じゃ、今朝は……まで。いったん集合しよ？」

「はいっ！」

「さて、みんなもだいぶチーム戦に慣れてきたね」

防護服を解除して、陸士制服に戻ったなのはさんは笑った。

「ティアナの指揮も筋が通ってきたよ。指揮官訓練、受けてみる？」

「いえ、あの……戦闘訓練だけでいっぱい입니다……」

ですよー。

「キュウ？ キュクルウ？」

小さく鳴いて、フリードは辺りを見回していた。……ん？ なんか

焦げ臭い……？

「スバル、あんたのローラー！」

「へ？」

ティアナの言葉に、みんなが視線をローラーブーツに向けた。原因であるローラーブーツは火花を散らして、悲鳴を上げている。

「オーバーヒートかなあ……後でメンテナンススタッフに見てもらおう」

「はい……」

ローラーを抱えて涙目になったスバルになのはさんはそう言って、私とティアナに視線を向けた。

「二人のデバイスも、けっこう厳しい？」

……確かにここ最近、デバイスの調子は厳しくなっている。さつきみたいな炸裂不足は初めてだけど、騙し騙しの整備ではこちら辺が限界だ。かれこれ4年ほど使ってるし……でも今からデバイスを換えるとなると一抹の不安が過る。

「みんな、訓練に慣れてきたし……そろそろ実戦用の新デバイスに切り替えかなあ……」

なのはさんが呟いた。……新デバイス？

◇

フェイトさんと八神部隊長を見送って、私たちフォワード陣は寮のシャワーを浴びて早朝訓練でついた汚れを落としていた。



「えつとスバルさんのローラーとティアさんの銃、深琴さんの銃剣つて、ご自分で組まれたんですね？」

「うん、そうだよー」

「訓練校でも前の部隊でも、支給品って杖しかなかったのよ」

「うちでもそうでした」

念入りに体を洗いながら、デバイス自作組は振り返る。

「私はベルカ式な上に戦闘スタイルがあんなだし、ティアもカートリッジシステム使いたいからって」

「で、そうなると自分で作るしかないのよ。訓練校じゃオリジナルデバイス持ちなんていなかったから目立っちゃってね」

しかもデバイスは買うとなると非常に値が張るうえに、事件・事故防止のため身分証など様々な書類が必要となる。もちろん管理局員や訓練校、士官学校の生徒はその条件もある程度緩和されるが、何より先立つものが「さらば諭吉！」レベルを超越しお年五十年以上（一年につき数万から数十万もらうと仮定して）の金額が必要となる。カートリッジシステムなどの後付けや、私やスバルのように独特の戦闘スタイルを取るとそれとそれに合わせたチューンナップが必要となり、金額は跳ね上がる。

「あ、もしかしてそれで、スバルさんとティアさんはお友達になっただですか？」

「腐れ縁とあたしの苦悩の日々の始まりって言って」

本気で嫌そうだ。その状況に、私も思わず笑ってしまう。

「みんな、まだかなあ……」

「クウ……」

一人階段で待つエリオに同意するようにフリードが鳴いていることに気づかないまま。



ミッドチルダ北部ベルカ自治領、「聖王教会」大聖堂。多くの信者とシスターが行き交うその場所に、モカ色のコートに身を包み、フード

で顔を隠した八神はやてはいた。彼女を先導するように付いているのは、教会騎士の待機制服に身を包んだ中学生くらいの少年、

「19歳だ」

もとい青年だ。

「久しぶりやね、零」

「ああ、はやて」

青年・渡辺零は微笑む。

「そういえばこの間……秋月深琴といったか？ あの、インターミドル世界ランク10位の。そいつの個人訓練相手になってほしいとなのはに頼まれたんだが、俺でいいのか？」

「……か必要なくねえ？」と零は呟く。

「そんなことあらへんよ。だいたいインターミドルのあれやって、あの意味偶然や」

言って、はやては深琴の伯父・秋月英史あきつぎひでふみとの会話を思い出していた。

「近代ベルカ式主体ミッドチルダ式の混同ハイブリッド型の魔法体系は、数が少ないだけで取得は可能や。もともと近代ベルカ式は、古代ベルカ式をミッドチルダ式でエミュレートしてできたものやしな。……でも3年前には、特殊型とはいえ、深琴のような使い手はほとんどおらんかった。秋月教官は深琴が勝ち進んだのは、相手側の情報収集不足としてる。せやから世界本戦で早々に敗北してるんや。そもそも当時の深琴は魔法歴約一年の駆けだし魔導師。確かに約一年であそこまで動けたんやから才能とかもあるんやろうけど、あれが一般的な魔法体系なら都市本戦に進めたかも怪しいらしいよ」

「だから低い防御性能でありながら突撃して、ゼロ距離からのバスターか……それなら確かに相手も思わないだろうな。バリアのすぐ上から貫通魔法を放つなんて、正気の沙汰じゃない」

発射の反動で、最悪自身だつてダメージを負ってしまう。線は悪くないのに焦りから危険なごり押しを繰り返すのは彼女の悪い癖だ。

「なら引き受けてやるさ。聞く限り、器用なのにごり押しの傾向がある以外には問題はなさそうだし」

「そう言ってくれると助かるわ」

言っではやては、騎士団隊長カリム・グラシアの執務室に入って行った。その後姿を見送って、零は肩を竦めた。そして呟く。  
「……クツキーでも焼くか」



機動六課隊舎、メンテナンスルーム。そこに集まっていた私たちフオワード5人の目の前に、それらはあった。

「うわあ、これが……」

「あたしたちの新デバイス、ですか？」

ストラダーとケリユケイオンは変わらないが、私とスバル、ティアナのものとは見慣れないものだった。ティアナのものは、カードのような形状。私とスバルのものは大きめのクリスタルのような形状だ。色はスバルが青色で、私のが淡紅色。

「そうですーす！ 設計主任、私！ 協力、なのはさん、フェイトさん、レイジングハートさんとリイン曹長！」

「い、いいんでしょうか……もらってしまつて……」

「もちろんですよー」

ふわり、とリイン曹長が私の肩に降りた。

「部隊の目的に合わせて、そしてエリオやキャロ、スバルにティア、深琴……個性に合わせて作られた、文句なしに最高の機体です！」

五機のデバイスが、宙に浮かぶ。

「この子たちはみんな、まだ生まれたばかりですが、いろんな人の思いや願いが込められてて、いっぱい時間をかけてやつと完成したです」  
そしてデバイスたちは、それぞれの主の元へ向かった。

「ただの道具や武器と思わないで大切に、だけど性能の限界まで思いつきり全開で使つてあげてほしいです！」

「この子たちもね、きつとそれを望んでるから」

淡紅色のクリスタルを手にとって、触れる。

「……よろしくね」

そう呟くと、まるで応えるようにクリスタルが煌めいた。

「まず、その子たちみんな、何段階かにわけて出力リミッターをかけてのね。一番最初の段階だと、そんなにびっくりするほどのパワーが出るわけじゃないから、まずはそれで扱いを覚えていって」

「で、各自が今の出力を扱いきれるようになったら、私やフェイト隊長、リインやシャーリーの判断で解除していくから」「ちようど、一緒にレベルアップしていく感じですね」

シャーリーの説明になのはさんが補足し、リイン曹長が続ける。現在は機能の説明だ。五枚のモニターにはそれぞれ私たちのデバイスのデータが表示されている。

そしてこの出力リミッターについて、ティアナが口を開いた。なのはさんたちにも、同じもの——けれどデバイスだけでなく、彼女たち本人にもかかっていることを。

「まあ私たちだけじゃなくて、深琴もなんだけどね」

元々時空管理局の部隊は、保有できる戦力(魔導師)の上限が決まっている。高ランクの魔導師を一部隊に集めることの防止策だ。けれどその判断は魔導師ランクのため、上限ぎりぎりになるようリミッターをかけてランクダウンさせることでクリアできる。もちろんリミッター解除は上司——隊長陣は八神部隊長、八神部隊長は部隊後見人のクロノ・ハラオウン提督とカリム・グラシア理事官の許可が必要で、減多におりないし回数復活の申請は非常に通りにくいというものだ。

ちなみにこの出力リミッターは、なのはさんの言葉通り、私も該当している。というのも入局前にA+ランクを取得してしまったから、他の部隊との兼ね合いで。今年度入局した局員でAランク以上は私一人だけだから。この場合は『新年度入局員規定』が0・5ランク分の魔力限定という形で適用されている。残りの分は先ほどの保有戦力分に引つかかるためである。同じ魔法でもこれまでよりロードするカートリッジの個数が増えたのはそのためだ。申請先なのはさんかフェイトさん、もしくは八神部隊長。

「うちの場合だと八神部隊長が4ランクダウンで、隊長たちはだいた

い2ランクダウンかな。で、新人規定やその他で深琴が1ランクダウン」

八神部隊長はSSランクだからシングルAランクに、隊長たち——なのはさんはS+だから2.5ランクダウンでAA。そして私はA+だからB+。

「深琴さんもですか?!」

「えっと、深琴さんはA+だから……B+ランクって……ええっ?!」

「私たちとあまり変わらないの!?! あれで!?!」

私の飛行許可が降りないのは陸戦フォーメーションの訓練中ということもあるけど、このリミッターの問題もある。リミッターは操作技術などには影響しないものの、そもそも飛行魔法自体が先天資質でAランク以上を必要としているから、B+ランクに落とされた今の私じゃ危険すぎる、そして問題が発生しても今まで通りにすぐ対処ができるわけじゃないということだ。

と、逸れた話を戻して、新デバイスの説明は続く。

「新型もみんなの訓練データを基準に調整してるから、いきなり使っても違和感はないと思うんだけどね」

端末を弄りながら、シャーリーは続けた。

「午後の訓練の時にでもテストして、微調整しようか」

「遠隔調整もできますから、手間はほとんどかからないと思いますよ」

「便利だよねえ、最近は」

「便利です」

肩を竦めたなのはさんに対し、ライン曹長は諸手を挙げて喜んでい

る。  
「あ、スバルの方はリボルバーナツクルとのシンクロ機能も上手く設定できてるからね」

「ほんとですか!?!」

「持ち運びが楽になるように、収納と瞬間装着の機能もつけといた」

スバルの戦闘スタイル——シューティングアーツはローラーブーツ系デバイスとナツクル型デバイスによる格闘技法だ。いつもはブーツとナツクルを持ち運んでいたけれど、これで楽になる。とても

嬉しそうだ。

が、そんな時間は長く続かなかった。アラートが鳴り響き、一級警戒態勢を知らせる。

「グリフィス君！」

『はい。教会本部から出動要請です』

『なのは隊長、フェイト隊長、グリフィス君。こちらはやて』

グリフィス准陸尉が説明する前に別のモニターに八神部隊長の姿が映った。

『教会騎士団調査部で追ってた、レリックらしきものが見つかった。場所はエーリム山岳丘陵地区。対象は山岳リニアレールで移動中』

『移動中………つて!?!』

「まさか………」

リニアレールのシステムがハックされ、制御不能に陥っている可能性は十分考えられ……。

『そのまさかや。内部に侵入したガジェットのせいで車両の制御が奪われてる。リニアレール車内のガジェットは最低でも30体。大型や飛行型の未確認タイプも出てるかもしれへん。……いきなりハードな初出動や。なのはちゃん、フェイトちゃん、行けるか?』

そのまさかだった。

『私はいつでも』

「私も」

『スバル、ティアナ、エリオ、キャロ、深琴！ みんなもオツケーか?』

「はいっ!」

背筋を伸ばし、声を揃える。部隊長は僅かに頬を緩め、指示を飛ばした。

『シフトはAの3、グリフィス君は隊舎での指揮。リインは現場管制。なのはちゃん、フェイトちゃんは現場指揮。……それと深琴』

「はい」

『いきなりやけど、能力限定を0.5ランク分だけ解除する。飛行型のガジェットがいたら、なのは隊長、フェイト隊長と一緒に制空権の確保を』

「了解！」

0・5ランク分……これで何とかシングルAランクにはなる。飛行魔法も問題ないはずだ。

『ほんなら……機動六課フォワード部隊、出動！』

「はいっ！」

フォワード陣となのはさん、リイン曹長を乗せたヘリが現場へと向かう。

「新デバイスでぶっつけ本番になっちゃったけど、練習通りで大丈夫だからね」

「エリオとキャロ、フリードもしっかりですよ！」

「危ない時は私やフェイト隊長、リインがちゃんとフォローするから……おっかなびづくりじゃなくて、思いっきりやってみよう！」

現場に到着するまでの時間、私はシャーリーから受け取った新デバイス——ローゼンクランツのデータを頭に叩き込む。新デバイスで初戦闘、そして初飛行。——今の私は、どこまでこの子の力を引き出せるのだろうか。どこまで戦えるのだろうか。

呼吸を整え、私は淡紅色のクリスタルを握りしめた。

## 05：星と雷

「問題の貨物車両、速度70を維持！ 依然進行中です！」

「重要貨物室への突破は、まだされてないようですが……」

「時間の問題か……」

アルトとルキノの報告を聞いて、グリフィスが呟いた。同時にアラートが再び鳴り響く。

「アルト、ルキノ、広域スキャン！ サーチャー空へ！」

シャーリーが叫び、モニターが切り替わった。

「ガジェット反応!? 空から!?!」

「航空型、現地観測隊を捕捉！」

「グリフィス、こっちは今パーキングに到着。車停めて現場に向かうから、飛行許可お願い」

パーキングの坂を下降しながら、フェイトは言った。

『了解！ 市街地個人飛行、承認します！』

「うん！」

そして、それとほぼ同時刻。

「ヴァイス君、私も出るよ。フェイト隊長と深琴と、三人で空を押さえる！」

「うつつ、なのはさん！ お願いします！」

《Main Hatch Open.》

操縦桿を握るヴァイス陸曹にそう声をかけたなのはさんは、一足先に開放されたハッチへ向かった。

「じゃ、ちょっと出てくるけど、みんなも頑張つてずばつとやつつけちゃおう！」

なのはさんの声は、明るい。これが経験の差、というやつだろうか。正直言うと、今更私は怖くなっている。今から戦場に出るといふ事



実と、そこで自分の技が通じるかという不安、そしてみんなの足を引つ張らないかと恐れている。それはキャロも同様らしかった。……優しい子だから、きつと余計に。

「じゃあ、深琴。いつもの訓練通り、深琴らしい戦い方で大丈夫だよ。私やフェイト隊長もいるから、心配しないで」

「はい！」

私の返事に頷いて、なのはさんはハッチを駆け降りた。その体を桜色の光が包んだ次の瞬間には、なのはさんは白い防護服を纏っていた。そして臆することなく空へ向かっていく。

その姿を見届けて、私は首にかけていたクリスタルを外し、紐を右の手首に巻きつけるようにした。いつでも降りられるように、ハッチへと歩を進める。

『初戦闘だからってびびるんじゃねーぞ』

通信回線の向こうから、ヴァイス陸曹がそう言った。

『お前は新人の中であた一人、シングルAランクの空戦魔導師だ。心配いらねえ。思いつきり暴れてこい！』

「はい！」

開かれたハッチの向こうには、青い空が広がっている。高々度飛行は何度もやってきたが、戦闘行為は初めてだ。怖くて体が震える。だけど逃げるわけにはいかない。

淡紅色のクリスタルを握る手に、力を込める。私は一人で戦うんじゃない。なのはさんも、フェイトさんもいる。地上にはみんながいるし、一緒に戦う相棒もいる。

だから――！

「ロングアーチ04、秋月深琴、行きます！」

一気にハッチを駆け、飛び降りる。空へ出た体は、重力に従って落ちていく。右手を胸元に持っていく、さらに力を込めた。

「行くよ、ローゼンクランツ」

《St anby ready.》

「セットアップ！」

《Set up.》

淡紅色の輝きが、私の体を包み込む。纏っていた制服は弾けるように消え、魔力で構成された防護服を纏っていく。靴下、靴、黒のインナーと白を基調としたジャケットとスカート、腰のベルトと装甲――。全てを装着し、黒と淡紅色のショートソード型に変形したデバイスを手にも、魔力を足に集中させる。見上げた空に、何十機もの航空型ガジェットが飛んでいた。

《Load Cartridge.》

柄の部分に装着されたマガジンが二回回転し、12発の誘導弾を生成する。

《Accelerate Shooter.》

自動詠唱。誘導弾が全て空を舞うガジェットへ向かい、その体に風穴を開けていく。しかし喜ぶのもつかの間、後方に新たなガジェットが回り込んだ。

(しまった、間に合わない――！)

《Form Zwei. Protection.》

左手のショートソードが腕輪型へと変形し、淡紅色の盾を発生させガジェットのミサイルを消滅させる。同時に先ほどの誘導弾がガジェントを撃墜した。

「ローゼンクランツ……あなた、もしかしなくてもかなりすごい？」

《No. Those present is the magic which you had memorized. I only chose the optimal thing from them. Therefore, not some I have very. 『いいえ。これらは全て、あなたが記憶していた魔法です。私はその中から最適なものを選び出したにすぎない。ですから、私はすごくなんかありません』》

そう、このデバイスは自分を評価する。

《All are your ability, Master.》

『全てあなたの実力です、マスター』》

「そっか……でもちよつと、違うかも」

息を吐いて、私はローゼンクランツを見た。

「魔法は私が覚えてる。でも、それを選んでくれたのはあなた。……きつと、どちらかが欠けても戦えないの。それとね、私、『マスター』って呼ばれるのは苦手なんだ。まだまだ未熟者だから。だから……」

《It is even if I call it a "Buddy"?》『でしたら、相棒とお呼びしても?』《》

「そうしてくれる? 私も、あなたを『ロゼット』って呼んでも?」

《Of course.》『勿論です』《》

答えて、ローゼンクランツ、改めロゼットは次の目標を探し出す。

「行くよ、ロゼット!」

《All right, buddy!》『了解です、相棒!』《》

ちようどその時、降下ポイントから青色とオレンジ、黄色とピンク——四色の光が煌めいていた。そして未だ止まることを知らない貨物列車の屋根に着地する。

スターズの二人はなのはさんの、ライトニングの二人はフェイトさんの、それぞれの分隊長の防護服をイメージして作られているらしい。その点、私のものは若干異なっている。

ライン曹長——というよりは八神部隊長や他の守護騎士達——の防護服に似たデザイン。黒のインナーと上着、スカート部分の装甲は八神部隊長のそれ。スカートのデザイン自体はウィータ副隊長のそれに一番近い。色合いは白と魔力光と同じ淡紅色。

『深琴の場合、機動性もちろんだけど、ある程度の出力も必要だからね』

とは、なのはさん。スターズスタイルは高出力で重装甲、ライトニングスタイルは軽量かつ高機動にチューンされているらしい。私の場合はロングアーチスタイルと呼ばれる、魔力制御と放出に重点を置いた防護服……ということだ。ロングアーチ——そしてデザイン基となった副隊長達の防護服は八神部隊長がデザインを考えたと聞いたことがある。その上彼らは優れた『騎士』だ。そんな人達の防護服を纏えるなんて、と心が震える。

『まあ、ジャケットの詳しい説明はまた後日ってことで』

『第二編隊来るよ!』

「はいー」

ショートソード型に切り替えたロゼットを両手に構えて、私は更に高く飛翔した。

◇

「ふうん……」

ステルスに身を包み、少年が呟いた。モニター越しには空と陸、二手に分かれて空間を制圧しつつある魔導師達が未だ交戦中。しかし用意された『玩具』の殆どは、既に撃破されていた。  
「で、僕はどうすればいいわけ？」

『そうだな……空の魔導師と遊んでやってくれないか？』

モニターの向こうで、白衣の男は言った。次いで、双剣を携えた魔導師の映像を拡大させる。

『できれば、彼女と。あれの確保は後回しでいい』

「りょーかい」

間延びした声で答え、少年はモニターを閉じた。同時にその足元に、深紅色をしたミッドチルダ式の魔法陣が浮かぶ。

「さて、行こうか。『アインザッツ』」

少年が両手に携えた、二振りのショートソードが無言で応えた。

◇

『スターズF、4両目で合流。ライトニングF、10両目で戦闘中』

『スターズ1、ライトニング1、ロングアーチ04、制空権獲得』

『ガジェット二型、散開開始』

ロングアーチの現状報告を聞きながら、私はリニアレールに目を遣った。先ほど降下したスバル達はそれぞれリック確保のために動き始めている。制空権を獲得した私たちは残りのガジェットを三方向に分かれて殲滅しつつ、いつでも地上に援護できるように動いていた。

「ここまででは比較的順調——のはずだった。

《Buddy!》

警告を発し、ロゼットは自動でプロテクションを発動させる。

「あれ、気づかれちゃった」

盾に噛まれ、刃は届かない。しかしそれでも乱入者は笑っていた。漆黒の髪に、血のように赤い瞳。纏う防護服は闇そのものの漆黒。そしてその手には、ロゼットによく似たショートソード。

少年は笑みを深める。同時に深紅色の誘導弾が背後に回り込んだ。それを回避して、私たちは距離をとる。

「ちよつとの間、遊んでくれる?」

「——っ、ふざけないで!」

誘導弾を撃ち落とし、今度はこちらから切りかかった。何なんだ、彼は。いきなり攻撃してきて、「遊ぼう」だって? 訳がわからない。

「怖い顔。せつかくの可愛い顔が台無しだよ」

「るっさい!」

本来なら喜ぶべきところだろうけど、今はそんな場合じゃない。急いで誰かと合流しないと——!

「あ、駄目だよ。言っちゃよね? 遊ぼうって」

距離を取ろうと離れた瞬間、少年が切りかかって距離を詰めてくる。そのまま流されるように、私となのはさん、フェイトさんとの距離が離れていく。

「ね、遊ぼうよ。あんな機械よりも僕と遊んだ方が楽しいと思うけど」

「どつちもお断りよ……!」

「そう言わずに、さ!」

重い斬撃を繰り出す彼と、防戦一方の私。何が楽しいのか、少年はずっと笑顔のままだ。

「僕はフェアクレールト・ナハト。よろしくね。秋月深琴さん」

なんで私の名前を、と聞く余裕もなかった。

◇

「ロングアーチ04、アンノウンと交戦！」

「ライトニングF、依然新型ガジェットと交戦中！」

モニターの向こうには防戦一方の深琴とエリオ、キャロの姿が映し出されていた。そしてシャーリーは先ほどフェアクレールトと名乗った少年のデバイスの映像を拡大させる。

「何あれ……あのデバイス、ローゼンクランツとそっくり……どうして……」

「シャーリー……今は考えても仕方あらへん」

今の深琴では、フェアクレールトと名乗った少年には敵わない。力の差は歴然だ。現に今も、なのはやフェイトが援護できないよう距離を離し、また攻撃しようものなら彼女が盾になるように位置を換えていた。その上散開したガジェット二型がなのはとフェイトを妨害する。

「ライトニング4、飛び降り!？」

アルトの報告に、指令室は一瞬だけ静まった。モニターには新型の攻撃で落下したエリオと、彼を追うように飛び降りたキャロの姿があった。

「あの二人……あんな高高度でのリカバリーなんて……!？」

「……いや、あれでええ」

「あ、そっか!？」

はやての言葉に、シャーリーが声を上げる。次の瞬間、ピンク色の魔力光が爆発した。



キャロの魔力光が、爆発したかの様に強くきらめき、消えた。そしてそこには白銀の竜。その余波は私とフェアクレールトの剣戟をも一瞬止めるほど。

「あれって……フリード?？」

白銀の体に、赤い瞳。そしてその背に乗るキャロとエリオの姿——  
普段のサイズからは想像もつかない。そしてキャロがエリオと槍型

デバイス・ストライダーにブースト魔法を二重に掛け、新型のガジェットへ向かっていく。その姿は『竜の加護を受けた巫女』と『竜を従えた騎士』のように見えた。

「へー、竜召喚かあ……ルールーとどつちが凄いだろ。ねえ？」

「知らない……っていうかルールーって誰!？」

とか言いながらもフェアクレールと私は再び、今度はお互いに距離を詰める。誘導弾による牽制も、彼には——彼とそのデバイスには効果が無い。まるでこちらの手の内を知っているかのような——。

「深琴！」

フェイトさんの声が響き、同時に金色の魔力砲がフェアクレールへと向かう。しかしフェアクレールトはそれも難なく避けた。そして私とフェイトさんは、彼を挟みこむ。

「殺人未遂と公務執行妨害の現行犯で、あなたを逮捕します」

「んー、それは困るなあ。逮捕されちゃったら、深琴と遊べなくなっちゃうし」

フェイトさんの言葉を聞いているのかいないのか、フェアクレールトは笑っていた。

「じゃあまたね、深琴。今度はもつとゆっくり遊べたらいいな」

「まだ言うか……って待ちなさい！」

周囲に爆煙が広がり、フェアクレールトの姿を隠す。風で煙が消え去った時、彼の姿はなかった。

「何だったのよ……」

いきなり攻撃されて、反撃一つろくに入れられなかった。

そして何より、彼のデバイス。一度も応答する様子はなかったけど、あの形はロゼットに非常によく似ていた。悔しさに唇を噛み締めていると、なのはさんからの通信が入る。

『スターズーよりライトニング1、ロングアーチ04。スバルとテイアナがレリックを確保したよ。そっちは大丈夫？』

「うん。アンノウンは逃がしちゃったけど、深琴も怪我はないみたいだし」

「あ、はい！ 大丈夫です！」

同時に開いたモニターには、嚴重に封印をかけたレリックをスバルとティアナが運んでいるところが映し出されている。

『これからスターズは中央のラボまでレリックを護送するね。ライトニングは現場待機。深琴、ライトニングの補佐を頼んでいいかな？』  
「は、はいー！」

応え、私は急いで地上へと向かう。眼下の白竜の背で、エリオとキヤロは笑っていた。



## 06：進展

遊ぼう、と笑っていたあの少年を思い出す。実際遊ばれているように私の攻撃は通用しなくて、いいように振り回されて。それが何よりも悔しかった。そして何より、愛機とよく似た彼のデバイスが気になった。

彼に勝ちたい。そのために、私は何をすればいいのだろうか。そのために、私は何ができるのだろうか。その答えを一分一秒でも早く知るために、今日もまた、訓練漬けの一日が始まる。

機動六課、陸戦訓練場。本日よりフォワード陣はそれぞれ自分のポジションに合わせた個人訓練に入っている。フロントアタッカーのスバルはヴィータ副隊長と。センターガードのティアナはなのはさんと。ガードウイング、フルバックのエリオとキャロはフェイトさんと。そして名ばかりウインドバックの私は――。

「どうも。聖王教会騎士団所属の騎士、わたなべれい渡辺零だ」

待機服に身を包んだ少年――じゃない、青年・渡辺零さんはそう簡潔に自己紹介した。なのはさん、フェイトさん、八神部隊長とは顔見知りで同い年だとか。嘘だっ！と思わず叫びそうになるほどそうは見えない。服装とかも加えたら私と同い年でも通用しそうだ。

そんな零さんだが、どうやら武器は日本刀らしい。今は右肩に袋に入れた状態で包んでいるが、まるで騎士というより侍といった感じだ。外見が日本人らしい黒髪黒目なこともあるのだろうか。ちなみにご先祖が地球出身とのことだ。

「訓練内容だが、メインは魔法の切り替えの高速化と、攻防・回避の切り替えを重点的に行う予定だ。しかし何にせよ時間がないから、一部は仮想戦闘データで代用する。ちなみになのはとレイジングハートお手製だ。さつきやってみたが、結構きついぞ」

冗談抜きにな、と語る零さんの目から輝きが消えた。トラウマでも植えつけられたんだろうか。

「まあ今日は初めての個人訓練だから、そこまで飛ばしはしない。午

前中はそうだな……現時点で使える魔法を、一回全て見せてもらえるか？」

「それだけでいいんですか？」

他のみんなは早速スパルタ訓練を受けてるんだけど。一方零さんは「あいつらはな」と苦笑している。

「そもそもお前はライトニング同様実戦経験が前回の出動だけだ。ルールなしの戦闘は、な」

確かに、彼の言うとおりだ。私が経験してきたのは、インターミドルやランク試験など「一定のルールに則った」戦闘である。それはかなり大きい。なぜならこれからの戦闘は「殺し合い」にも発展するのだから。

「まあお前の実力なら十分耐えうるがな。だが一度自分を見返してみるのも悪くないぞ」

「はい……」

まあひとまずやってみるしかないだろう。呼吸を整えて、私は口ゼットを握りしめた。

「なるほどな……」

開始から一時間ほどで、私は覚えている限りの魔法を全て出し切った。まだ練習中の魔法も見てもらったが、零さん曰く「やめるお前はまだ14だ頼むから早まるなむしろ俺泣いちゃう」と以下エンドレスで止められたのでしばらくは使わないことにした。

「よし、一応データ解析して、次の訓練からいくつか実際に使ってみるか」

「よろしくお願いしますー！」

「ああ。後はそうだな……一応なのはから、飛行に関しても言われてるんだが」

なのはさん曰く、現在私は陸戦フォーメーション訓練中、そしてB+ランクに限定されている状態なので現時点で空戦教導は危険+時間が取れないということだ。

「まあそれも午後に戻すか。残り時間はそうだな……」

僅かに宙へと視線を遣つて数秒、零さんは刀を構える。同時に騎士甲冑を展開した。

「ちようどいい。残り一時間、全力で来い」

その言葉に頷いて、私も防護服を展開する。零さんから放たれる威圧感を感じ取り、嫌な汗が背中を流れた。けれどそれも一瞬のこと。ロゼットの第一形態——ショートソードを両手に構え直し、私は呼吸を整える。

微笑する零さんに彼——フェアクレルトの顔が過るが、そんな思考を振り払う。強くなるんだ、と。そして二度目があればその時は、最悪でも一撃を返すのだと言い聞かせて。

「——行きますっ！」



「いやー、やってますなあー」

陸戦訓練場付近で、シグナムと肩を並べてモニターを見つめていたヴァイスはそう口を開いた。開かれた五枚のモニターには新人フォワードの個人訓練の様子が映し出されている。

ヴィータの指導のもと防衛魔法の出力強化を行うスバル。

フェイトの指導のもと回避トレーニングを行うエリオとキャロ。

なのはの指導のもとインターセプトトレーニングを行うティアナ。

「初出勤がいい刺激になったようだな」

「いいっすねえ。若い連中は」

「若いだけあって成長も早い。まだしばらくの間は危なっかしいだろうがな」

「……つか、一組だけ全力戦闘入ってるように見えるのは俺の気のせいっすかね」

「いや、『ほぼ』全力戦闘だ。——とはいっても、それは深琴だけだな」

そう訂正して、シグナムは問題の一組——秋月深琴と渡辺零の戦闘

を見た。訓練場では彼女たちが使用している場所だけ爆煙の上りが違っている。

「シグナム姐さんは、参加しないんで？」

「私は古い騎士だからな」

そう答えたシグナムは、自嘲の笑みを浮かべて肩を竦めた。

「ま、それ以前に私は人にものを教えるという柄ではない。戦法など、

『届く距離まで近づいて斬れ』ぐらいしか言えん」

「すげえ奥義ではあるんすけど……」

乾いた笑い声を上げて、ヴァイスは訓練場を見やった。

「確かに、連中にはまだちーつと早いっすね」



「はい、じゃあ午前の訓練終了ー」

なのはさんの号令に、集まった私たちはほぼ同時に地面に座り込んだ。口を利く余裕も残ってない。

「はい、お疲れ。個別スキルに入るとちよつときついでしょう？」

「ちよつと、というか……」

「その、かなり……」

ティアナとエリオが息も絶え絶えに言う。

「フェイト隊長は忙しいから、そうしょつちゆう付き合えねーけど」

言つて、ヴァイタ副隊長はデバイス・グラーフアイゼンの切っ先を向けた。

「あたしは当分、お前らに付き合つてやつからな」

「俺もな。つて言つても、基本的に深琴か前衛のどつちかになると思うが」

言つて、零さんは「つーか俺らだけ『個別スキル(笑)』だったんだが」と呟いた。それは午後に戻すつて言ったのはあなただ。

「それから、ライトニングの二人は特にだけど……スターズの二人も、もちろん深琴もまだまだ体が成長してる最中なんだから、くれぐれも無茶はしないように」

「じゃ、お昼にしようか？」

「はいっ！」

なのはさんのその一言に、思わずテンションが上がった。

さて、どこの世界だろうと食事中は会話も弾むものだろう。それは私たち機動六課フワードも例外ではない。

スバルのお父さん、ゲンヤ・ナカジマ三等陸佐。そしてお姉さんのギンガ・ナカジマ捜査官。ナカジマ家の話題を発端とし、本日の昼食時の会話は出身や部隊員の繋がりについてになった。主に隊長陣——部隊長、なのはさんが生まれ、フェイトさんが一時期その世界で暮らしていた第97管理外世界へ地球へについて。どうやらスバルのご先祖もその出身らしい。そして話は一旦エリオに移り、その悲惨な出身——本局の特別保護施設育ちだということ——をあまりにも明るく彼は話して。

(……っていか話をしてる間に山盛りのスパゲッティがみるみる内に消えていくって……)

絶対おかしい、と私は内心で強く言い切った。

機動六課の食堂は広く、綺麗で、味もよく量もあるという非常に便利な施設である。特に魔力の迅速な補給には糖質・炭水化物・たんぱく質をバランスよく配置した食事が不可欠であり、健康体の維持のために各種ビタミンやミネラルも必須となるため、若く伸び盛りの魔導師の食事は常人のそれを上回る事がほとんどだ。もちろん私もその一人……でいたかった。

「でも、それ言ったら深琴は……深琴、それだけで足りるの？」

「え、あ……うん……」

スバルから話を振られた私は小さく頷く。お皿に大盛りのスバルとエリオ、並盛りだけどお代わり何度めだろうティアナとキャロが目を見開いている。そんな私はメインのスパゲッティ並盛り一杯とパン、サラダ、スープ、ジュースだ。別に体重とかそういうのを気にしているのではなくて(訓練で全部消費されるから脂肪として残らない、が正しい)。

「でも、ちゃんと食べなきゃもたないよ?」

「そうなんだけど、ね……昔から食欲薄いんだよね、私。食べようと思えば一応食べれるんだけど……ずっと、入院してたし……」

その一言に、同席していたスバル、ティア、エリオ、キャロ、シャーリー、零さんの表情が固まった。

「入院って……病気か、何か?」

「話すと結構長くなっちゃうんだけど……」

けれど、全員が目が私に集中している。これはちゃんと話しておかないと後々面倒そうだ。

「私が地球——っていつても、八神部隊長やなのはさんの出身地からずっと西の方なんだけどね。そこで暮らしてた頃はずっと、入院してたの。魔法技術の無い向こうでは原因不明だったんだけど、こっちで言うなら、俗に言う『魔力性疾患』で」

管理外世界の例に洩れず、地球には魔法文化も、次元航行手段も無い。けれど魔力は確かに存在し、ジュエルシードや闇の書——夜天の書などのロストロギアが流れついたことだつてある。そして八神部隊長やなのはさん、私や伯父、今は隠遁生活を送っているらしいギル・グレアム元提督のように管理局に入局するほどの魔導師が生まれることも極稀だが存在する。

けれど私は地球の魔力素と適合できず、自身の魔力を維持することができなかった。……いや、一時期は出来ていたのだ。——ロストロギアが、地球に流れ着くまでは。ずっと東の方で発見された『ジュエルシード』、そして『闇の書』の魔力干渉を受けては発作を繰り返し、10歳になる年まで入院。ある時訪れた伯父・秋月英史あきづきえいしに事実を告げられて、彼とその妻に引き取られ、今に至る。

しかし幼少時からの経験か、リンカーコアによる魔力素の結合効率は高く、食事以外——主に睡眠で十分補えた。逆に食事だとあつという間に必要分が結合されてしまうため、過剰供給により処理落ちするという欠点がある。まあそれ以前から食欲旺盛というわけではなかった。

そして入院中は精神的にも参っていたため、「生命活動を維持する

ために食べる」という行為を億劫に感じていた。ぶっちゃけると心がほとんど死んでいた。

今になって思えばバカみたいだと思うが当時は周囲——主に魔法を忌み嫌った家族や兄への罪悪感でいっぱい、幼いなりに苦しんでいたのだ——とでも言っておく。ちなみに今になつては本当にバカみたいだ。うん、本当に。

そう締めくくって顔を上げると——お通夜状態だった。

「あの……ごめん」

「ううん、気にしないで。っていうか私もあんまり気にしてないし、今の方がずつと楽しいから」

「そうか。……でもしっかり飯は食べ。ほれ」

「え、ちよ、あの、零さん、勘弁してください。パスタはこの半分ぐらいで……」

「駄目だ。食事も立派なトレーニングだから。計画に追加する」

トングでスパゲッティの山を私の皿へ移しながら、零さんが非情な宣告をする。鬼か、この人は。

「何だったら菓子でもいいぞ。和菓子だろうが洋菓子だろうが作れるしな。何がいい？」

『料理できる男性』って最近の流行か何かですか？」

「必要に迫られたら男だつてするさ。まあ俺の場合は9割が趣味だが」

「何で零さん騎士やつてるんですか!？」

9割が趣味って、それもう殆ど自主的ですよ。思わず突っ込みを入れると、この空気に耐え切れなくなったティアナが小さく噴出した。そして笑いは伝播し、気づけば私も声を上げて笑っていた。

正直言うと、今の状況はかつての私が夢見ていたものである。学校に通つて、友達を作つて、目標を見つけて、いつかは働いて。それが地球で言う普通と、ミッドチルダで言う普通が違うだけ。でも、それでよかった。

ここにすることが幸せだと、胸を張って言える。今はまだ、それだけでよかった。

「はーい、それじゃあ夜の訓練おしまーい」

うん、幸せではあるんだけどさ。そう思いながらも、私はへたり込んでいた。太陽はとつくのうちに沈み、ミッドチルダには夜の帳が落ちていく。スターズ、ライトニングはなのはさんとヴィータ副隊長。私は相変わらず零さんと個人スキル教導だ。

「ありがとうございますましたあ……」

ほら、声に力がこもってない。朝から晩までみっちり訓練。幸せではあるんだけど、しんどいものはしんどい。

「お疲れさまでしたあ……」

「はーい」

「ちゃんと寝ろよー」

そう声をかけてくれたのは、ヴィータ副隊長だ。

寮への道を歩く同僚たちも、私と似たり寄ったりで。それでも弱音が聞こえないのもまた似たり寄ったり。昨日より今日、今日より明日。ほんの僅かでもいいから前に進んでいると信じて。

「頑張ろうね、ロゼット」

《Yes. buddy》



時同じくして、第97管理外世界へ地球へ極東地区日本・海鳴市。夜空に包まれたその大地で、蒼氷色の魔力弾が弾けた。しかしぷよぷよ動くスライムにも似た何かは無傷だった。それを確認した少女は、舌打ちを響かせる。手にした杖を構え直すと、スライムはびよこびよこ動いて戦闘区域から逃げ出した。目視とあらかじめ散布していたセンサーから反応が消えたことを確認して、杖を下す。

少女が身に纏うのは、黒いロングジャケットとプリーツの入ったミニスカート。アレンジが加えられていることを除けば、遠い異世界の魔導師が着用している防護服にもよく似ている。しかし本来なら着



用者のサイズに合わせられているはずの丈が合っていない。

「相変わらずすげえな、『魔導師』って」

「……………」

暗がりから姿を現した男は、素直に称賛した。聖祥大付属高校の男子制服に身を包む彼に視線を遣り、無言を貫いた少女は、防護服を解除する。光が弾けた時、少女が身に纏っていたのは聖祥大学付属高校の女子制服だった。少女の燃えるように赤い髪が風に揺れる。視線を少年と合わせることなく、少女は口を開いた。

「……………でもないです」

言いながらも、少女は空間モニターに指を走らせる。

「少なくとも、あなたの妹に比べたら」

「……………そうかい。俺としたらずいぶんうらやましいけど」

現れた別のモニターに、一人の少女が映った。肩より少し長い、濡烏を思わせる髪。そして同色の瞳というこの国特有の外見をした少女——秋月深琴が。

それを見た少年——秋月静真あきづきしずまの表情が曇る。それに気づいているのかいないのか、少女は別の写真を出した。陸士部隊の制服を身に纏う、ツインテールの少女を。

——ティアナ・ランスター。親友がこの世に遺した、忘れ形見。恐らく自分をもっとも恨んでいるであろう彼女の姿を見て、少女は瞳を伏せた。この子も、ここへ来ると言うのか。

「……………おい、秋葉あきは、顔色悪いぞ。大丈夫か？」

「……………平気です」

静真にそう答え、少女——霜月秋葉しもつきあきははモニターを閉じた。

「よっしゃ、帰るか！」

「なんでそんな元気なんですか……………っていうか先輩、自分の家に帰ってくださいよ」

「晩飯何にすっかなー。野菜とかあったし、鍋しようぜ、鍋」

「もうすぐ梅雨の時期に鍋ってどうかと思いますよ、季節感的に。っていうか人の話聞いてください」

「いや、待て。確か素がなかったな。今ならスーパーにもぎり間に合

うしキムチにするか塩ちゃんこにするか、値段的にトマトやカレーに挑戦してみるか……秋葉、どれがいい？」

「明らか自分の好みですよ。それと後者二つは勘弁してください。個人的には塩ちゃんこがいいです」

肩を竦めてツツコミを入れていた秋葉が応える。

そしてこの日から一週間も経たないうちに、時空管理局古代遺失物管理部より「機動六課」が出張任務に来ることになるとは知らぬまま。

## 6. 5 01：派遣任務の行き先は？

第97管理外世界〈地球〉。私が10歳までの月日を過ごした世界で、けれど心に残る思い出もない世界。ミッドチルダに来て間もない頃、それとなく伯父に言われたが、帰りたいたとは思わなかった。帰る必要も感じていなかった。来た瞬間はともかく、今となればなんの感傷もない。

だから今、その連絡を聞いて一番驚いている。

「派遣任務、ですか？」

「そや。状況が状況やから、フォワード陣、各分隊の隊長、副隊長も一緒や」

「もちろん、私たちもですよー！」

オフィスで作業中、八神部隊長、リイン曹長に声を掛けられた私は、デスクに送られたファイルを開く。

——詳細不明のロストログアを確認。場所、第97管理外世界〈地球〉極東・日本、海鳴市。

「二時間後には出発予定や。きりが良いところで終わらして、準備頼むな」

「はい」

第97管理外世界〈地球〉極東・日本。その世界を懐かしむ同郷者と、話を聞く同僚と。その中でただ一人、私は唇を噛み締めていた。

私の様子に気づいた同僚は後に語る。『まるで、今にも泣きそうだった』と。



「第97管理外世界。文化レベルB……」

「魔法文化無し、次元移動手段無し……って、魔法文化無いの!？」

「無いよー。うちのお父さんも魔力ゼロだし」

フォワード陣がそれぞれ情報収集のため、現地情報をモニターに映

す。

「何でそんな世界から、なのはさんや八神部隊長みたいなオーバーSランク魔導師が……」

その疑問をティアナが口にした途端、八神部隊長は笑った。

「突然変異、というか……たまたま、な感じかな」

「私もはやて隊長も、魔法と出会ったのは偶然だしね」

「な」

「へえー……」

と、同僚たちの視線が私に移る。海鳴市ではないとはいえ、私も地球出身の魔導師。

「元々『秋月』はそういう家だし……。うちはスバルのお父さんとは反対で、移住してきた魔導師が先祖らしいし。私や伯父の前にも何人か、魔導師みたいな人はいたから」

そう答えて、会話を打ち切った。嘘はついていないし、何よりこれ以上は話したくなかった。少なくとも話してしまうと、みんなは気を使うだろう。——私が、実の親に捨てられたなんて。

声が、過ぎる。

『私は、あれの母親になった覚えはありません』

はつきりとした拒絶の目。そして言葉。

『あなたなんか、生まなければよかった』

寄るところがある八神部隊長と副隊長を見送って、私たちは転送ポートに入った。

(まあでも、大丈夫か)

海鳴市には秋月の実家はあるけれど、実家嫌いのあの人は——あの人たちは寄りつかないから。だからきつと大丈夫。私のことを知る人は、いない。最初からないのだから、寂しいはずもない。

というより、本来私は、あちらの世界では「異端」なのだ。それが恐れられ、嫌われるのはなんら不自然なことではない。例え『秋月』がその異端を崇拝する家系であっても、それとあの人達は無関係だ。だから、母さんは悪くない。

(悪いのは、私だ……)

母さんの期待に応えられず、その上母さんが望まない力を持って生まれてしまった、私が。褒められたいと思わない。「お帰りなさい」の一言だっついていない。それでも、ほんの僅かでもいいから、同じ血を引く人間として認めてもらえたら。

それだけでいい、と私は瞳を閉じた。

## 6. 5 02：現地到着、任務開始！

「はい、到着ですー！」

転送先は、見慣れないコテージ。辺りを見回して、フワード陣は初めての地球に目を丸くしている。

ミッドチルダとあまり変わらないが、やはり細かな部分は異なっていた。ここ・海鳴市には初めて来たが、故郷とそう変わらないように思える。——それはきつと、故郷の記憶がほとんどないからだろうか。

「なのは！ フェイト！」

「アリサちゃん！」

そして現れた自動車と、それから降りてきた金髪の女性。ちなみにティアナはこつちにも自動車があることに驚いていた。ミッドチルダの自動車はモーターモービルと言って、水に微量の化学触媒を組み合わせた燃料によって内燃機関が駆動するもの。廃棄はごくわずかな触媒煙を含む水蒸気で、自然や生物への害は極めて少ない。ミッドチルダは「クリーンでより安全な」魔法技術を採用しているだけであって、環境保護にも結構うるさ——否、敏感なのである。

「あ、紹介するね。私となのは、はやての友達で幼馴染」

「アリサ・バニングスです。よろしく」

「よろしくお願いしますー！」

女性——アリサさんは頷いた。そしてその視線が私を捉える

「あ、あの……う？」

「あ、ああ、ごめん。知り合いの後輩に雰囲気似てたから」

まあそいつは男だけど、とアリサさんは笑った。その言葉に私は内心で首を傾げた。秋月の関係者がいるのだろうか。けれど秋月の直系はあの人達しか残っていない。私と伯父はそこから外れていた。

——一定以上の能力を持つ魔導師は、正式な認可を得ずに管理局の管理外の世界に滞在できないから。

伯父は当時既に高校を卒業していたし、私は学校に通っていないかった。だから認可が下りず（欲しいとも思わないけど）ミッドチルダに

渡ったということ。このため私と伯父は直系から外されている。

秋月の家は後継ぎ（伯父）がいなくなったため、長女であったかつては私の母だった人が後を継いだ。けれど当時から分家筋の殆どはその血が薄れていたはず。いくら直系筋で異端とは言え、長男である兄を差し置いて生まれたばかりの私を跡継ぎとして祭り上げなければならぬ程に祖父は焦っていたのは覚えている。

そこまで思い出して、私の脳裏にあの人の声が過った。

『私は、あれの母ではありません。母になどなった覚えはありません』

それは、私が伯父と初めて会った日のこと。

『あなたなんか、産まなきゃよかった』

（深琴、どうかした？）

考え込んでいると、スバルが念話を繋いできた。

（なんか考えてるみたいだけど……顔色、悪いよ？）

（……大丈夫だよ。心配かけて、ごめん）

その言い方がまたみんなの不信感を煽ることは分かっている。けれどどうしても押さえきれなかった。

「さて。じゃあ改めて、今回の任務を簡単に説明するよ」

言って、なのはさんは空間モニターを起動させた。そこには（一）、海鳴市全域の地図、地形が表示されている。

「搜索地域は（一）、海鳴市の市内全域。反応があったのは（一）こと、（一）と、（一）」

ロストロギアの反応が確認された場所は、日を追うごとに移動していた。ティアナが指摘すると、フェイトさんは頷く。

「そう。誰かが持って移動しているのか、独立して動いているのかは分からないけど……」

「対象ロストロギアの危険性は、今のところ確認されてない」

「仮にレリックだったとしても、この世界は魔力保有者が滅多にいないから、暴走の危険はかなり薄いね」

つまるところガジェットさえ出てこなければ、被害をほとんど出す

ことなく遂行できるはずだ。

「じゃあ中距離探査は、ライン、お願いね」

「お任せです！」

「クロスミラージュにも簡易版の探索魔法をセットしてあるから、そつちとこつちの二人ずつで、少し離れて探していこ」

「あとは市内の各所に、サーチャーとセンサーを設置。作業としてはこんな感じかな」

ちなみに私は一人で設置作業だ。——というのも地球出身で、現地住民とトラブルになってもほぼ自力で対処できるだろうから、らしい。まあ地球初体験組を別行動させる、というのは大変だから。色々。

(深琴も、なんかあつたらすぐ呼べよ)

(はい。ありがとうございます、ヴィータ副隊長)

上空からサーチャーを散布しているヴィータ副隊長が声をかけてくれる。黒のハンチング帽を目深にかぶって気合を入れ直し、私は一歩を踏み出した。



## 6. 5 03 : 喫茶翠屋

——『姉さん、事件です』。そのフレーズが過った瞬間、「いや、私に姉はいない」と冷静にツツコミを入れた時点でそこまで事件性は高くない。少なくとも機動六課的な事件性は、ゼロだ。

「ねえ、君、今暇？ 近くにいいお店あるんだけど、一緒にどう？」  
「いえ、あの……」

状況を整理しよう。あれからサーチャーやセンサーの設置を終えて、時刻は夕方。まずはスターズと合流、ということの話がまとまった。場所はなのはさんのご家族が経営しているお店で、幸い距離はない。さあいざ行かん！ とテンション上げた直後、今に至る。

(こ、これは……ナンパ、というやつだろうか……ど、どうしよう……) 困惑していると相手は更に言葉を連ね、更に私は困惑する。っていうかなのはさん達とかティアナ達なら分かるけど、この人は何で私なんかをナンパするのだろうか。はつきり言わせてもらおうと時間の無駄なのだが。

「あの、私、これから用事があった、その、行かないと……」  
「少しくらい大丈夫だって。なんだったら俺、案内しようか？ つ、痛てててて！」

言うや否や、相手はそっと私の肩に手を伸ばそうとして——その腕を振じあげられていた。言っておくが断じて私にはない。

「困ってんだろ。やめてやれ」  
黒いブレザーを着た、男。背は零さんより少し高い——173センチくらいだろうか——、何よりその威圧感が異常だった。これ以上の暴力も辞さないという雰囲気になんぱ男(仮名)はたじろぎ、逃げ出す。

「ったく。逃げ出すくらいなら最初からすんなっての。なあ、深琴」  
「え？ あ、はい……」

さざりりと名前を呼ばれ、私は困惑しつつも返事をした。

「……っつておい。お前、まさか俺のこと忘れてるんじゃないだろうな？」

忘れてるどころか覚えがありません。この世界にいた頃、接触は家族以外となかったはずだし……とまで思い出して、私は目の前の男を見た。まさか……。

「……静真、お兄ちゃん？」

「忘れてただろ、お前」

「……っというか、この世界にいた時のことは忘れていたい記憶だ。」

あきづきしずま 秋月静真。私の実兄で、確か年齢は今年で18歳……だったはず。

「でもお前、変わってねえなあ。すぐ分かったぜ」

「……そうかな？」

そういう兄は、外見が昔と変わっていた。主に髪。かつては私と同じ黒色だったはずなのに、今の彼の髪には金茶色が混じっている。その色といい跳ね具合といい、派手だと思うのは私だけだろうか。

しかし、今はそんなことよりも。

「……なんで、海鳴市にいるの……？」

「なんでって……」

私の疑問を繰り返した兄は、舌打ちして「あいつ、本当に何も話してないんだな」と呟いた。が、その表情もすぐに明るいものへと変わる。

「まあその話は後に置いとくとして……用事あるんだろ？ 場所分かるか？」

「えっと……確か、『喫茶翠屋』って……」

「なら知ってる。行くぞ」

店名を聞くや否や、兄は私の手を取った。



「……行っちゃいましたね」

「そうだね。行っちゃった」

黒いブレザーを纏う少女の眩きに、彼女の隣を歩いていた少年は頷いた。

「あの子が深琴ちゃんか。……あまり似てない？」

「先輩は魔力資質ゼロですからね。妹さんが異常なだけで」  
「それも、秋月の家では珍しいはずだけどね。時間があれば手合わせ  
したいな。秋葉ちゃんはどう？」

「私は別に。っていうか、彼方さんと違って、勝てる要素がありません  
から」

秋葉と呼ばれた少女は、隣の少年——藤月ふじつき彼方かなたを見た。

「……あの、彼方さん。今日バイトですよ？ 一緒に行かなくてい  
いんですか？」

「うん。でももうちよつと後でも大丈夫だよ」

言って、彼方はその目を細める。その視線の先で、動く影があった。  
「……ちよつと、面倒なことになりそうだし」



翠屋とは、駅前駅前の商店街の真ん中にある喫茶店だ。ケーキやシュー  
クリーム、自家焙煎自家焙煎コーヒーがお勧め——とは道中で兄から聞いた話  
である。学校帰りの女子高生、近所の主婦グループに人気のお店らし  
い。

「すみません、遅れましたー！」

「いいのよ、静真君。まだ時間じゃないんだし」

ドアを開けて、開口一番に兄は謝罪する。だが制服らしい黒いエプ  
ロンをした女性は笑って許していた。

そして女性の視線が、私に移る。綺麗な人だ。優しそうで、どこか  
雰囲気なのはさんと似ている。

「あ、紹介するね」

と、奥のテーブルからなのはさんが来た。

「私の両親。お父さん、お母さん。私の生徒の——」

「あ、秋月深琴です」

「深琴ちゃん、ね。で、静真君の妹さん」

「は、はい……一応は……」

にこやかに話しかけられ、戸惑う。想像もしていなかった兄との再

会も含め、調子が乱れる。

優しそうなご両親、そしてお姉さんと話しているのはさんはとても楽しそうだ。スバルもティアナも目を丸くしている。

——正直、意外だった。自分たちが持つていけない力を持った子供に、何故あの人たちはにこやかに接することができるんだろう。私たちみたいにそういう家系でもないのに。「家族」だから……？

「ほれ」

黒いエプロンを着けた兄が、私の前にケーキとカフェオレを置いた。

「えつと……？」

「奢る。前に言ってたろ？ 『退院したらケーキ食べたい』って」

「っ！」

前つて——それは6年以上前の話だ。

入院してた頃——それもまだ初期のうちは、原因解明のため絶食とかいろいろ繰り返していた。ちようどその話をしてたのは入院してから初めて迎える誕生日の時だったと思う。

「……覚えてくれてたんだ……」

「まあな。一応兄貴だし」

「いや、それは関係ないような……」

まあ悪い気はしないんだけど。そんなことを思いながら苺ショートケーキにフォークを刺し、口に運ぶ。スポンジはふんわりとしていて、クリームは甘すぎず。間に挟まれた苺も甘酸っぱくて——。

「美味しい……」

そういえば、ケーキを食べたのつて今日が初めてかもしれない。士官学校在学中は健康維持のため必要最低限のカロリー摂取しかしてなかったし、入学前なんてそんな余裕がなかったから。

(……さすがに、生ものは転送できないかなあ……)

せっかくだから、レオンやルーチェにお土産でもと思ったんだけど。

「そういえば、静真君。この後のあれ、行く？」

「もちろん行きます！」

私の横で、兄はなのはさんのお姉さん——美由希さんが話している。そしてケーキを黙々と食べ進める私をなのはさんのご両親が微笑ましく見つめていたことなど、気づかないまま。

## 6. 5 04 : 家族と仲間と友達と

それから、翠屋で待つこと数分。迎えに来てくれたフェイトさんの車で、私たちはコテージへと戻った。戻ってきて数分も経たないうちに隊長陣の知り合いラツシュなのだから笑えない。そして先ほど別れたばかりの兄も来た。そしてその上――

「お、みんな、お帰りー！」

「お帰りなさいーい」

「部隊長自ら鉄板焼きを!？」

鮮やかな手つきで鉄板焼きをつくる部隊長がいるのだからさらに笑えない。

「つーか、そういうお前は料理できんの？」

「……あまり」

「えー。でも前に零くんと一緒にしてたじゃない」

そう証言したのはシャマル先生だ。

「いや、あれは、どっちかって言うくと邪魔してたとか……」

「でも、あの時のクッキー美味しかったぞー」

「あ、ありがとうございます」

それは零さんと出会って二日目。休憩時間中の話題から始まった。だってあの人、騎士業務の傍らでクッキー焼いてるんだもん。思わず何やってんですか、とツツコミを入れてしまったけど。訓練後零さんが六課の寮でクッキーを焼く姿を目撃し、手伝いを申し出たのだ。最初は材料出すレベルだったけど、しまいには一緒に生地を混ぜ、焼き、飾り、配るまでしていたのです。詳細は別の機会に語ることもあるだろう。

そしてそれからは現地協力者のアリサさん、月村すずかさん、美由希さん、エイミイ・ハラオウンさん、フェイトさんの使い魔・アルフ、そして兄の自己紹介。

それで分かったのは、この世界でも魔法を知ってる人がいること。そしてその多くが現地の人であるということ。私や兄みたいに、「そういういった前例のある」家でも何も無いのに。それぞれ戸惑いはあった

らしいけど、今では笑って受け入れている。

(深琴、さびしいか?)

念話で、そう声をかけたのは八神部隊長だ。

(……家族と、会いたくないか?)

(……いえ。私の家族は、秋月英史、秋月ミレイの二人だけです)

英史伯父さま、ミレイ伯母さま。本来なら姪にあたる私を受け入れ、家族となることを喜んでくれた。私の精神的な部分でも、かけがえの無い大切な家族だ。

もちろん、本当のお母さんも、お父さんも、お兄ちゃんも嫌いじゃない。お母さんが魔法を嫌う気持ちは分かるし、お父さんがそれに同調した気持ちも分かっている。最初は受け入れがたかったけど、四年も歳月が過ぎたら変わる。——一番はあの人と出会って、自分の力をまっすぐに見つめられたからだけだ。

(……そっか。深琴がそれがええ、ゆうんなら別にええよ。急にごめんな)

(いえ。ありがとうございます、八神部隊長)

今は何より、この機動六課のメンバーが家族のようだと思っている。優しくも厳しい隊長たちと、気さくなメンテスタッフと同僚達、そして零さん。友達だって、レオンとルーチェがいる。

だから、私はもう昔の私じゃない。本当の家族と会いたいとは思わない。またいつか、任務ではなく休暇で訪れた時でいい。

——それで、いいよね?

◇

夕食も終わり、各々談笑してた頃。

「さて。サーチャアの監視をしつつお風呂済ませとこか」

「はいっー!」

「まあ監視と言っても、デバイスを身に着けていれば、そのまま反応を確認できるし」

「最近はほんとに便利だねー」

シヤマル先生に、なのはさんはそう言った。技術の進歩は素晴らしい。

「でも意外だよなー。こんなちっさいのが魔法の杖なんだろう？」

「いや、杖とは限らないけどさ……」

私のデバイス・ローゼンクランツに興味を示した兄が、水晶を光にあてたりして確認している。

《Heilio.》

「おお、喋った！ 音声どっから出てんの？ 電池は？」

「人の相棒をおもちや扱いしないで！」

兄の手からロゼットを取り返す。……分かってやってるんだろうか、この人は……。

そう溜息を吐いた直後、兄のポケットから軽快な音楽が鳴り響いた。携帯電話を取り出し、ディスプレイを確認した次の瞬間、兄の表情が凍る。

「悪い。ちよつと出るわ」

部隊長の指示通り、スーパー銭湯に向かう準備を始める女性陣の間を通り抜け、兄は電話に出た。そんな彼の背中を見届けていた私に、エリオとキャロが近づいてくる。

「深琴さん、『銭湯』ってなんですか？」

「キョククルー」

「あ、私も気になったー」

と、スバルとティアナまで会話に参加してきた。

「えつと……意味合いとしては、『公衆浴場』だね。隊長達が言っていた『スーパー銭湯』は、その形態の一つ。温泉とかサウナとか……お風呂だけじゃなくて、他の設備とかもある大規模な施設……かな。結構家族連れとか多いよ」

「へー……」

「さすがに詳しいわね」

「私も行ったことはないけど」

この世界にいた頃見たテレビからの情報がほとんどだ。意味合いとしては間違っていないはずだけど。



(お兄ちゃんに聞けば、もっと詳しく分かるかな?)  
しかし兄は、戻ってこなかった。

所変わって、海鳴スパラクーア。大人13人、子供4人の大所帯はそれなりに目立っていた。

その一団から離れ、お風呂を済ませた私は一足先に外へ出ていた。手にしたコーヒー牛乳で喉を潤す。夜風が涼しくて、心地いい。

あれから兄は大急ぎでコテージを出て、帰宅した。なんでも、中々帰ってこない兄を心配した母が泣きやまない、と父から電話があつたらしい。4年も会わないうちに、母はずいぶん弱気になってしまったらしい。こと兄に関しては。

(……まあ、私には関係ない)

兄が二人に私のことを話さなければ、の話だけど。

その時、私はふと空を見上げた。闇色に染まった空には星が輝いている。

けれど、確かに今、自分のでも、六課メンバーのものでもない魔力を感じた。敵意はない。だがどこか冷やかな力。

「気のせい、かな……」

「深琴ー。待たせてごめんなー」

眩くと同時に、出張メンバーと現地協力者がぞろぞろと現れる。みんなに振り向いた私は気づかないままだったけど、ふと空を見上げた民間人は口々にこう言っていた。

——『星が、蒼色に輝いていた』と。



『秋葉ちゃん、12時の方向に三体。援護よろしく』  
「了解」

同時刻、海鳴市上空。蒼氷色のミッドチルダ式魔法陣を輝かせた秋葉は、同色の魔力弾を生成する。標的は、地上に現れたカプセル型の兵器。名称は、ガジェット・ドローン。

『兄さんから聞いた話だけだね』

地上で刀を振るいながら、藤月彼方は切り出した。

『こいつら、AMF持ってるんだって。最近ミッドチルダや他の世界にも出現してるらしいけど、並大抵の局員では歯が立たないって』

「多重弾殻射撃は、本来AAランクのスキルですから。私だって使えませんし」

現に、秋葉が放った魔力弾は通常のものとは変りない。

「……すみません。彼方先輩まで巻き込んでしまつて」

『気にしないで。僕自身好きでやってるから』

言つて、彼方は日本刀を鞘に納める。その足元にはガジェットの残骸が三機分、音も無く晒されていた。——相変わらず馬鹿げた身体能力だ、と秋葉は内心で呟く。これで「魔力ゼロ」なのだから、この世界もある意味で異常集団である。

と、モニターの向こうの彼方が浮かべていた笑みを消した。

「先輩？」

『ごめん、秋葉ちゃん。もうひと頑張りお願いできる？』

「……やります」

杖を握る左手は震えている。その痺れに耐えながら、秋葉は感情を戦闘用に切り替える。

——元エースと呼ばれたプライドと、亡き親友への罪滅ぼしのため。

サイズの合わない闇色の防護服と赤毛が、風に揺れた。

## 6. 5 05：シーリング・ファイト

その時、秋月静真は自室の窓からその光景を見ていた。闇色に染まっているはずの空が、蒼氷色に包まれた瞬間を。

「今日もやってんな……」

あの後——妹やその同僚との交流から抜け出した彼は、帰宅早々母親に泣きつかれた。曰く『夕食の時間を過ぎても帰って来ないから、誘拐されたのかと思って不安で仕方がなかったの』と。聞いた瞬間、静真が嘲るような笑みを浮かべたのは言うまでもない。だいたいいつも夕食時はバイトに入っているのだから、この母親は何も学んでいない。

父親の説教も聞き流し、静真は足早に自室に戻る。名目は「勉強」だ。高校三年生、テスト間近となるとこの言い訳は非常に便利である。もちろん勉強などするつもりもない。参考書を広げて振りだけをしていると、視界の端に蒼氷色が映り込んだのである。そして僅かに離れた所からまた別の、そして覚えのある気配が近づいている。

「……秋葉……深琴……」

今、後輩は戦っている。きつと、深琴も。この機会を逃せば、次に会える日まで遠い。そこまで考えて、静真は部屋を飛び出した。

——何故、自分には彼女のような力がないのだろう。

——何故、彼女だけがその力を持って生まれたのだろうか。

（何で俺だけ、何も無いんだよ……！）

深琴がミッドチルダへ渡ったその日から、何度この無力を呪っただろう。自分に力があつたなら。自分がもっと大人で、両親と決別できるほど強ければ、深琴を守ることもできただろう。もっと普通の兄妹として、普通の家族らしい生活を送れたはずだ。

その日から、静真はずっと両親を嫌っていた。バイトして金を貯め、18年間自分の扶養にかけた金を支払い、家を出る。幸い、理解ある先輩と後輩に出会い、バイト先と家出先を確保できた。

そして知った。妹が遠い異世界で、「魔導師」になったことを。この世界にもその異世界の事情を知る人間が自分たち以外にもいること

を。

「はあつ……はあつ……」

「静真君!」

荒れた呼吸を整え、静真は額に流れた汗を拭った。静真に気づいた影——彼方は目を丸くしている。その手には刀——紛れもなく真剣が握られていた。その現実には、静真は唇を噛む。

——ああ、何故、自分だけが無力なのだろう。

「先輩、逃げて!」

地上に降りていた秋葉が、声を飛ばした。静真の後方からカプセル型の兵器が飛び出してくる。センサーと思しきパーツが鈍く輝いた。

——ああ、自分は死ぬんだ。その現実を、誰よりも冷静に静真は受け入れる。四年前、異世界へ渡つてすぐの妹が、そうしたように。

《Circle Protection》

しかし放たれた青い熱線は、静真に届くことはなかった。淡紅色をした半球型のバリアが静真を包んでいる。

「な、なんとか間に合った……」

そしてその上空では白い防護服に身を包んだ、秋月深琴が立っていた。

◇

時は、海鳴スパラクーアからコテージへ戻ろうとした瞬間まで遡る。シャマル先生のクラールヴィント、キャロのケリュケイオンが反応し、リイン曹長のエリアスキャンによると例のロストロギアが発見されたという。そしてガジェットと、現地協力者——それも魔導師一名、民間人二名の反応もあった。ロストロギアの封印はスバル達に任せ、私は一人現場に急行したというわけだ。

そこで見たのは三人の男女。一人は零さんによく似た男性。もう一人はうちの兄。そしてもう一人——赤毛にサイズの合っていない、やや意匠は異なるが本局航空隊の防護服を纏った女性。そしてガジェットI型十機。うち攻撃してきた二機を地上で撃墜して、私は肩

越しに振り向いた。

「遅くなりました。古代遺失物管理課機動六課所属の、秋月深琴三等空士であります」

「時空管理局嘱託魔導師の、霜月秋葉です」

女性が応える。霜月秋葉さん、と私は彼女の名前を確かに刻み込んだ。

「こいつらの目的は、十中八九ロストログアです。そちらの方は六課の隊員達が現在封印を行っています……っので！」

アームケープルを振り回してきたガジェットを破壊して、私は続ける。

「申し訳ないんですが、援護をお願いできますか？　ちよつとこの数は厳しいんで」

「了解しました。指示を」

「はい。つと、その前に……ロゼット」

《Divide Energy》

秋葉さんの、杖を握る左手の震えが気になった。魔力不足時によくある症状で、私も何度か経験している。とはいえそれが握力にまで影響するのは、初めてだ。

私の魔力をほぼ半分ほど、秋葉さんに渡す。

「あ、ありがとうございます」

「いえ、こちらこそ……『兄』がご迷惑をおかけして、申し訳ありません」

ロゼットを構え直し、私はガジェットを見据えた。

「……見てて、『お兄ちゃん』」

バリアの向こうで、兄が目を見開いたのが分かる。自分から、彼に「お兄ちゃん」と呼びかけたのは今日で二度目だ。

「——もう、『守られるだけ』の私じゃ、ないんだよ！」

(すげー……)

白い防護服を纏った少女——秋月深琴は、ショートソード型のデバイスを携え、躊躇せずガジェットの群れに突っ込んでいった。カート

リッジは今のところ使用していない。デバイスに強化魔法をかけている様子もない。平行して発射している魔力弾は、多重弾殻。それも一発二発ではない。自分に魔力のほぼ半分を渡して、あれだけの行動が取れるなんてさすがは『ポジションフリー』と言うべきか。

『深琴の相手をしてると、昔のお前を見ているような気分になる。……まあ深琴は、お前ほど生意気じゃないがな』

つい先日、そうメールを送ってきた師であり、兄貴分の言葉を思い出す。

(……ティータ……)

そして同時に、柔和な笑みを浮かべる親友を、秋葉は思い出していた。杖を構え直し、その周囲に蒼氷色のスフィアを30発ほど生成する。数発で限界だった先ほどとは大違いだ。環状魔法陣で独立制御された魔力弾は、複雑な軌道を描いてガジェットへと向かった。



モニターの向こうに映し出されたのは淡紅色のバリアに守られた息子と、四年ぶりにこの世界に戻ってきた娘の姿。懐かしいと思うより前に、娘の成長に女性——秋月遥あきつきはるかは感嘆の息を吐いた。記憶に残る彼女は年齢不相応に幼く、華奢だった。にも関わらず今はどうだ。自分の力を制御し、空を飛び回り、大地を駆けているではないか。そして何より、「自分の意思で」戦い、生きている。

その成長が遥には誇らしく、そしてどこか寂寥感を抱かせた。本来なら自分が、この命に代えてでも守らなければならなかったのに、と。異端であり続けるため兄を束縛し、彼が異世界へ姿を消せば生まれて間もない娘に毒を盛り、支配下に置こうとした父——娘・深琴から見れば祖父にあたる人物を、遥は恐れ、何よりも嫌っていた。

そして何より、遥は娘を愛していた。そんな娘がその人生を、命すらも秋月の再興のために捧げなければならぬことは、何よりも許しがたいことだった。もし対象が静真であつてもそれは変わらない。

そして異世界へ渡った兄・英史と連絡を取った遥は、彼に協力をと

りつけた。深琴が自身の力を制御し、自分の意思で将来を選択できるその日まで、そして何より父が深琴を諦めるその日まで、預かっていて欲しいと。

だが当時の深琴と静真に、その全てを話すのは酷だった。純粹無垢なその心に一生の傷を負わせかねない事実を、遥は口にするにはできない。だから、突き放したのだ。

『私は、あれの母親になった覚えはありません』

『あなたなんか、生まなければよかった』

無論深琴の心を傷つけたのは分かっている。しかし結果としては大成功だった。現に彼女がミッドチルダに渡ってからこれまで、遥は彼女と連絡を取っていない。だから深琴は、祖父が既に亡くなっている事も知らないままだ。

「……もう、いいんじゃないか？ 深琴は、強くなった」

「……そうですね」

夫の言葉に頷いて、遥は僅かに笑みを浮かべた。

「でも、まだです。今はまだ仕事中ですから」

だから次、休暇でこの地を訪れるその日が来れば、全てを話そう。そしてできることならば、その体を抱きしめよう。秋月でも魔導師でもなんでもない、普通の親子として過ごせる日々を夢に見ながら、遥はそつとモニターを閉じた。

## 6. 5 06 : 帰還

それから、キャラが問題のロストログアを封印して。

『封印は万全。これにて出張任務完了や。深琴も、こっちに帰ってきてな』

「はい。ガジェットの残骸は回収しますか?」

『そやな。今シヤマルが転送ポート開くから、頼めるか?』

「了解!」

ロストログアの封印は問題なく終了し、私と秋葉さん、そして藤月彼方さんが担当していたガジェットの破壊も滞りなく終了し。

「一晩くらい、泊っていけばいいのに……」

私たち機動六課出張メンバーは、今夜中に隊舎へと帰還することになった。封印したロストログアとガジェットの残骸はシグナム副隊長が聖王教会に届けてくれる、とのこと。

あれから秋葉さんは、彼方さんと共に先に自分たちの拠点に戻ったそう。兄との関係は高校の先輩後輩だそうで、「悪ぶっているのに優等生」の兄と「素性が一切不明の優等生」の彼女は学内では何かと有名ならしい。

一方の彼方さんは兄が所属する剣道部の先輩で、今は聖祥大学に通う大学生。アリサさんの同級生だとか。見た目といい武器といい零さんの関係者だと思っただけけれど、「禁則事項です」と笑顔で何も教えてくれなかった。

「今度は休暇で来いよ」

「休暇があれば、ね」

しばらくは24時間勤務だし。そう告げると、兄は苦笑した。

「なんか虚しいわ。お前がもう社会人やってるとか」

「でも、私より年下もいるしね」

エリオとかキャラとかね。苦笑していると、兄はポケットから小さな袋を取り出した。

「やるよ」



「開けていい?」

「おお」

リボンを解き、箱を解体する。中から出てきたのは、淡紅色の薔薇をあしらった銀色のヘアピンだった。

「もらっていいの?」

「一応誕生日プレゼントだよ。お前七月生まれだけど、どうせ帰ってこないだろう?」

「……ありがとう。お兄ちゃん」

「よかったね、深琴」

「ええお兄ちゃんやな」

昔みたいに戻る日はまだ遠いかもしれないけど。

「……また帰ってくるから」

「おう。その時は前もって連絡しろよ」

「うん」

いつか、母さんたちと向き合える日が来たらいい。

そう思いながらも、私は転送ポートに入った。

## 07：ホテル・アグスタ

「ほんなら改めて、ここまでの流れと今日の任務のおさらいや」

ミッドチルダ首都南海地区上空。ヴァイス陸曹が操縦するヘリ内部で、私たち機動六課フォワードはこれからの任務について聞かされていた。フォワードと分隊長、部隊長補佐、そして医務官・シヤマル先生と狼・ザフィーラは大きく表示されたモニターを見つめる。

「これまで謎やったガジェット・ドローンの製作者、及びレリックの収集者は現状ではこの男」

言つて、モニターに一人の男が映った。

「違法研究で広域指名手配されている次元犯罪者——ジエイル・スカリエツィの線を中心に、捜査を進める」

「こっちの捜査は主に私が進めるんだけど、みんなも一応覚えておいてね」

そう言ったフェイトさんに、私たちは返事をする。

「で、今日これから向かう先はここ、『ホテル・アグスタ』！」

前に進んだリイン曹長がモニターを切り替えた。

「骨董美術品オークションの会場警備と人員警護。それが今日のお仕事ね」

「取引許可の出ているロストロギアがいくつも出品されるので、その反応をレリックと誤認したガジェットが出てきちゃう可能性が高い。とのことで、私たちが警備に呼ばれたです」

「この手の大型オークションだと密輸取引の隠れ蓑になったりもするし、色々油断は禁物だよ」

なのはさん、リイン曹長、フェイトさんがそれぞれ説明してくれる。

——特定遺失物。またの名を『ロストロギア』。それは過去に滅んだ超高度文明から流出する、特に発達した技術や魔法の総称。当然それらは危険なものが多いのだけど、中には研究によって安全性が確認されるものもあり、それらは大学を始めとした研究機関に提供されたり、「特に危険性の無い」という判断をされたものは今回の様なオーク

シヨンに出品することも認められている。過去の遺産であるロスト  
ログアの歴史的価値は高く、コレクターも多い。

(……それを利用した贋作もあるんだけどね……)

一人内心で溜息を吐くも、先ほどからシャマル先生の足元にある箱  
が気になって仕方がない。集中しなきやと言いついて聞かせてモニターに  
目を遣ると、ホテル・アグスタ内部の資料が表示されていた。スバル  
とティアナの目が鋭くなって、非常口を確認している。

さすが災害担当、と感嘆の息を吐いて、私も二人に倣って非常口や  
経路を確認しようとした。——ひどい頭痛が、私を襲うまでは。

「っ……」

「深琴さん？ 大丈夫ですか？」

私の異変に気づいたエリオが声をかける。心配そうな彼に「大丈  
夫」だと告げて、私は再度モニターに集中した。慣れてしまったのか、  
痛みは和らいでいる。

一部始終を目撃していたなのはさん、フェイトさん、八神部隊長は  
未だ心配そうだったが、ひとまず指示を続けた。

「現場には昨夜からシグナム副隊長とヴィータ副隊長他、数名の隊員  
が張ってくれてる」

「わたしたちは建物の中の警備に回るから、前線は副隊長たちの指示  
に従ってね」

「はいっ」

「あの、シャマル先生？」

と、ここですつと視線で箱を追っていたキャロが手を挙げた。

「さつきから気になってたんですが、その箱って……？」

「ん？ ああ、これ？ 隊長たちの、『お仕事着』」

でも、箱は4つあるんですけど。……あれ、4つ？ シャマル先生  
の笑顔に、私はなぜか嫌な予感に震えていた。

自然の中に作られたホテル・アグスタ。スーツやドレスに身を包ん  
だ客——オークシヨン参加者が列を作っている。

「いらつしやいませ、ようこそ」

その会場入り口で、リストと客の照会を行っていたホテル職員に、八神部隊長が代表でIDカードを差し出した。その身に纏うのはいつもの陸士隊制服ではなく、淡い水色のドレス。なのはさんはピンクと赤、フェイトさんは紫を基調にしたドレスを身に纏っている。

「こんにちは。機動六課です」

——そして同伴する私もまた、淡紅色を基調にしたドレスを身に纏っていた。



「あ、深琴。ちよつとええか？」

時は少し前。へりから降りてそれぞれ待機場所へ向かおうとしていた私に、八神部隊長が声をかけた。

「何でしょう、八神部隊長」

「うん。実は深琴にも会場内の警備に回って欲しくてな」

「了解です。では入口付近で待機していますので」

「……って、ちよい待ち！」

「待つですよー！」

言つて、裏口からオークション会場に向かおうとした私を部隊長とリイン曹長が止める。

「いくらなんでも、その格好ではあかんやろ」

「? ですが、警備でしたら問題は……」

現に、警備の副隊長、フォワード陣は制服だ。

一体どうしろというのか。首を傾げる私に、八神部隊長は不敵な笑みを浮かべる。

「シャルル！」

「はいっ！」

「じゃ、シャルル先生!? い、いったいどちらへ!？」

呼ばれたシャルル先生はすぐく楽しそうな笑みで、私を更衣室に引っ張っていく。

「ぎ、て、と」

一文字一文字区切って、シャマル先生は持っていた箱を開けた。用意されていたのはドレスだった。ウエスト部分に大きなコサージュがついた淡紅色のパーティードレス。ティアド調の上品な裾は、慣れていないせいかな非常に鬱陶しい。

「うん！ よく似合ってる！」

「あ、ありがとうございます……」

なのはさんは満面の笑顔だ。だが。

「あの、私、やっぱり外での警護の方が……」

「そうしてあげたいのは山々だけど、一応、理由もあるんだ」

なのはさんは言う。理由？

「ガジェットが出現したとき、今回ばかりは深琴の能力限定も解除できない。担当が外でも一緒。理由は分かるよね？」

「えっと……あ、施設や来場客が戦闘に巻き込まれるから……？」

仮にもAランク、そしてオーバースランクの戦闘だ。いくら非殺傷設定をオンにしても擦り傷一つ負わないという確証はない。特に経験不足の私では威力調整がまだ不十分だ。気づいた私に、なのはさんは優しく笑いかけてくれる。

「深琴のことだから、そんなことはないと思うけどね。それでも深琴は、スバル達と違って全力を出せない。そしてこの間みたいにアンノウンが現れないとも限らない。でも内部だったら、私たちがすぐ援護できる」

そっか……そこまで考えて、部隊長は私を内部警備に回したんだ。そこまで気を使ってもらったのに、私は、なんて最低な……。

「まあ、八神部隊長もちよつとは楽しんできると思うけど。深琴のドレス選んだの、部隊長だし」

「その情報はいらなかったです……」

私は着せ替え人形じゃないです。そう内心でツツコミを入れてみると、なのはさんが「そうだ」と声を上げた。

「あのね、深琴——」

◇

(さすがに警備も嚴重だね……)

そして今、私はホテルの防災システムの調査中だ。

(外は六課のみんなが固めてるし……これなら、大丈夫かな)

ミッドチルダでは土地開発や建築物建設の際、一定区画ごとにセンサーの配置を義務付けられている。そうすることで大きな魔力の動きや自然災害の反応を(ある程度ではあるけど)把握することができるから。

ホテル側が慢心せず六課に警備依頼したのは、出席者であり、今回のオークションに出品される品物紹介・鑑定を任された考古学会の学士——ユーノ・スクライアの進言があつたから、らしい。

元々ユーノさんは時空管理局無限書庫の司書長で、『PT事件』、『闇の書事件』にも関わった魔導師だ。その経緯で六課隊長陣とは個人的にも知り合いだとか、「大事な友達」だとか(後者はなのはさん談)。(それにしても……)

鈍く痛む頭に手を遣つて、軽く息を吐く。体調は至つて良好であり、先程受けた簡易メデイカルチェックにも異常は見られなかった。疲れてるのかな、と首を傾げてモニターの電源を落とす。

(深琴、そっちの様子はどう?)

っと、ティアナから念話だ。

(特に問題はないよ。警備システムの方も稼働してるし、それに、もし何かあつてもなのはさん達がいるしね)

エースオブエース、高町なのはは一等空尉。彼女の正体に気づけば、来場客も何かあつても大丈夫だと思つてくれるだろう。

(……それはあんたでも同じだと思うけど)

(?)

(なんでもない。じゃ、また後で)

(う、うん。また……)

素っ気無さを感じる声で、ティアナは早々に念話を打ち切つた。彼女の様子に、私は思わず首を傾げる。

……なんかティアナ、機嫌悪かった？ 私、何かマズいこと言ったかな……？

「……最近悩んでるみたいだし……それと関係あるのかな……」

知り合ってからもうすぐ2ヶ月。ここ最近は2、3日に一回のペースで、なのはさんによる『インターセプトトレーニング』を一緒に受けているが、時折ミスがあったりして、肩に力が入りすぎているらしい。

(私と一緒にだと、やりにくいのかな……)

そして先程の様子に、士官学校時代の嫌な記憶が脳裏に過ぎる。

『——生意気なのよ、あんたは！ そうやって澄ました顔して……何でもかんでも思い通りになるって、調子に乗ってんじやないわよ！』  
甲高い声と、嫌悪の眼差し。思い返す度に苛立ちと、そんな感情を覚える自分の心の狭さに吐き気がする。

「……違う。ティアナは、そんなこと言わない……あの人達とは、違う……」

あの時は耐えられたのに、何で。何で、今はこんなに苦しいのだろう。じわりと浮かんだ涙を拭う。

『深琴』

ピツ、と軽やかな音と同時に、空間モニターが起動した。フェイトさんからだ。隣になのはさんと一緒なので、どうやら合流したらしい。

『もうすぐオークションが始まるから、会場に入ってた方がいいよ』

『八神部隊長もまだだから、よかつたら探してきてくれるかな？』

「了解しました。すぐ向かいますので」

通信を閉じて、私は踵を返す。

(後で、ティアナにちゃんと謝ろう……)

気に障ったなら、ごめんと。きつとティアナのことだからすぐ許してくれるだろうし、「別に。気にしてないわよ」とか言うかもしれない。

会場へ向かう途中で八神部隊長を探しながら、ふと思った。そういうえば士官学校時代、やけに突つかかってくる先輩がいた気がする。名

前、なんていったっけ……。

◇

その頃、ホテル・アグスタ外。森の中に、その男と少女はいた。

「何か、気になるのか？」

「ドクターのおもちやが、近づいてきてる……」

指に止まった銀色の小型の虫から受けた報告を、少女は男に伝える。

「そういうこと。久しぶり、ルールー」

そして「ドクターのおもちや」ことガジェットと共に現れたフェアクレールトは、笑った。同時に通信用のモニターが開く。

『少し、頼みがあるんだ。ルーテシア、君にも手伝ってほしい』

「……いいよ」

「せめて内容くらい聞けよ……」

「フェア、うるさい」

呆れたように言ったフェアクレールトに、ルーテシアは小さく言い返した。

◇

(いた……っ！)

部隊長を探すこと数分。開始数分前のため人気がないロビーで、ドレスとはいえ見慣れた後姿を目撃した私は小走りで近づく。よくよく見れば、誰かと話しているようだ。銀の髪に、青い瞳。執務官制服とは違う黒いスーツに身を包んだ男性がそこにいた。忘れるはずない、あの人は——！

——デイバイン・アーウィング執務官。私の命の恩人で、私が魔導師を目指すきっかけをくれた人。

覚束ない足取りで、私は更に近づいた。やっと会えた。ようやく言える。あなたの言葉が、私を救ってくれたこと。その言葉に背中を押



されたから、今の私がいることを。

だがその高揚は、一気に冷めた。

「俺はそんな理由であいつを——秋月深琴を、助けたんじやない」

嘲笑にも似た声に足が、止まる。

「たった一言で自分の力を受け入れた？ 馬鹿馬鹿しい。所詮その程度の苦しみだったんだろう。でなければ簡単に吹っ切れるはずがない」

その言葉に、視界が歪んだ。八神部隊長の「そうかもしれない」と同意する声すら遠く聞こえる。

「やけど……っ、深琴!?! いつから……」

「あ……いえ、私……私……!?!」

狼狽する八神部隊長に、返事ができない。盗み聞きともとれるこの行為を謝罪するための言葉も出てこない。足が震える。頭が真っ白になり、呼吸がうまくできない。

——どうしよう。どうすればいいの？ 胸元にかかるロゼットを握りしめた瞬間、その報告はあった。

『会場周辺にガジェット出現！ I型35、III型4!』

『スターズ02、ライトニング02、出動！ スターズF、ライトニングF、防衛ラインに到着!』

見れば、窓の外にはスバル達がいた。みんな、戦ってる——私も、行かないと!

「八神部隊長、私にも出動許可を!」

『待つて、深琴!』

ルキノが言つて、別のモニターを表示させる。そこにはホテルの裏口方面に移動するフェアクレールとガジェットI型が10機。何かに気づいたロゼットがもう1枚——こちらはここ、ホテル・アグスタとその周辺の地図をモニターに映し出した。

「このルートって……まさか……」

目指す場所は恐らく地下駐車場——それも今回オークションに出品される美術品を輸送してきたトラックを停める、特別駐車場。

「レリックの反応は?」

『今のところ、確認できていません』

「まだ見つかってないのか……」

「……そもそも、今回はレリックが目的ではない……?」

いずれにしても、ここで待機というわけにはいかない。みんなは正面に現れたガジェットと戦闘中だ。こちらへ回す余力もない。

そして何より。

(私はそのための……『ポジションフリー』なんだから……!)

「深琴、ちよい待ち!」

部隊長の制止を振り切って、私は走りだす。命令違反とかそんなことどうだっていい。

後手後手に回って、目の前で誰かを失うのは嫌だ。私だって、4年前は失われる側だったのだから。だから今度は、私が——!

そしてこの時、ティアナもまた命令違反を起こしたと私が知ったのは実に数日後の話である。



4年前のあの日のことは、そして彼女のことは一時も忘れたことはなかった。救えなかった命の方が圧倒的に多かった自分が救えた、唯一の命。そんな彼女には、どうか平和で、安全な世界で過ごしてほしい。自分はそんな世界を守るために戦うのだと。

だから自分が一番分からなかった。なぜあんなことを——自分の力を卑下する彼女に、そんなことないと言ったのかを。恐らくその時は何とも思わず、純粹な好意からの発言だったはずだ。だがその発言がどのような結果を招いたのかは言わずもがな。彼女は自分が思っていたような道とは正反対の——魔導師としての道を進み、自分に憧れたと嬉しい——否不本意な発言をし、希望進路は執務官補佐ときた。部下に聞けば、学生時代からずっとそれだけを繰り返していたらしい。

それは嬉しくもあり、それ以上に後悔を自分に与えた。そして今からでも遅くないと思い始めた。魔導師なんて、辞めてしまえと。きつ

かけを与えたのは自分だ。なら辞めるきつかけを与えるのも自分ではないと意味がないだろう。

だが、彼女があんなに不安定になるのなら言わなければよかった。溢れんばかりの涙をぬぐうことも、流すこともせず自分と友人を見る彼女の姿は、あまりにも痛々しくて。

しかしすぐさま感情を切り替え、自ら戦場へ向かった。その後姿を自分たちは見送ることしかできなかった。というか友人は彼女の上司であり、止めたのだから命令違反であることこの上ないのだが、彼女はそんなことは気にしていないらしい。その思想はある意味で救えない。

そしてそんなことを思いつつ、すぐさま彼女を追った自分もまた、救えない馬鹿だ。



ロゼットと防護服を展開して、私は特別駐車場に到着した。それほど同時に現れたフェアクレールは「やあ」とさわやかな笑顔を浮かべる。

「久しぶりだね、深琴。元気？」

「ごめん状況考えてくれる?! 今そんな挨拶交わしてる場合じゃないんですけど!」

「挨拶も魔法だよ? 挨拶するたび友達は増えるらしいし」

「どこの広告機関の回し者だよ?! ……つとにかく! 目的は何?!」

……遭遇二回目でこんなこと思うのもあれだが、なんで彼と話すとき、私はいつも以上にツツコミを入れてるんだろう。先日4年振りに再会した実兄にも「お前はあれだな。特定の状況じゃないとツツコミは口に出さないだろ? それって疲れね?」と言われたばかりだ。兄よ、まったくもってその通りです。

「目的? んー、ロストロギアの奪取?」

「なんで疑問系!」

駄目だ。正直疲れる。なんて思っていると、フェアクレールは

にっこり笑って両手を挙げた。

「今回のレリックじゃないから、見逃してもらえると助かるんだけど」

「だからって、はいそうですか言って言うて……思ってるのっ!？」

あの人の前で恥かくとか、そんな問題じゃない。大勢の、無関係の人を巻き込むわけにはいかない!

声を荒げて、私は加速した。そのまま彼との距離を詰める。フェアクレールは目を丸くしたままだ。

先手を取れた、と確信した瞬間。斬りかかった右手は深紅色の鎖に絡めとられていた。

(バインドっ!? こんな至近距離で!?)

「単純だよ、深琴って。そういうところも結構好みだけど」

「るっさい! ちよつとは真面目にやりなさいよね!」

「やだよ、めんどくさい」

どこからか、聞きなれた声が「漫才やってる場合か!」とツツコミを入れたような気がする。いえ、そんなつもりは一切ありません。

けど、このままでは危険なことに変わりはない。左手で攻撃、も考えたが、両手を塞がれるというのは勘弁したい。同様の理由で蹴りも却下。ではどうするか。

『……お前さ、その突撃思考どうにかしようや』

乾いた笑い声をあげる、零さんを思い出した。それは個人訓練初日の午前——そう。模擬戦(一回目)のすぐ後だ。いつも通り接近からの斬り合い、からの射撃といこうとした私は、接近してすぐに今のようバインドをされた。

『いや、まあ理由は分かる。いきなり斬り込んできたかと思えばゼロ距離からの砲撃だ。初見の相手ではほぼ対応できないだろう。お前速いし、並大抵の相手なら斬り合いだけで勝てるだろう』

だが、と零さんは続ける。

『お前の戦闘スタイルはガードウィング並みに速度を必要としている。その分防護服も機動性を重視しているから、どうしても防御力に

欠ける。そして相手も、俺みたいにバインドをかけてくるといふ可能性を忘れていた。そりゃガジェットならなんとかなる。だがあいつには勝てない』

——なら、どうすればいいんですか。今までのスタイルを変えたくない。というか変えたところで、私がすぐそれに慣れるとは限らない。バインドなんて、素手で碎けるわけ——。

『その手段がある、と言ったらどうする?』

『教えてください』

『馬鹿、少しは考えてから物を言え』

言って、零さんは私の頭に手刀を落とした。小さく『お前相手にスパルタしたなんて知れたら、俺あいつに殺される』と呟いて。

『まあ教えるけどな。実践で』

零さんが教えてくれたこと。それは——。

(脱力した静止状態から……)

イメージは海や湖に浸かって、自らの手足で「水斬り」を行うように、らしい。足先から下半身へ。下半身から上半身へ。

——そして、回転の加速で拳を押し出す!

生まれた衝撃波はバインドを碎き、相手に僅かながらのダメージを与える。同時にフェアクレールトは離れた。

「ロゼットー!」

《Form Drei》

第二形態——拳銃型に変形したロゼットは、続けざまにカートリッジを四発ロードした。生成した魔力弾を砲撃に。

「クロスファイア……」

なのはさんの言葉の続きを思い出す。

『今の深琴なら、多分すぐ使いこなせると思うから。ローゼンクラウンの第二形態。ちょっとだけ、リミッターを解除しとくね』

同時に淡紅色のバインドが、フェアクレールトの動作を奪う。

「シューーーーーー!」

淡紅色の砲撃が、フェアクレールトに直撃した。だが、彼に命中し

たという手ごたえはなかった。

煙が風に消える。その向こうには、まるで彼を守るように佇む人型の虫に似た何かがあった。

「…………ごめんね、ガリユール」

呼ばれた何かが、僅かに振り返る。その手には見慣れないケース。

「ルールーに手柄を取られるのも癪だけど、君を傷つけたことには変わりないからね。ごめん」

「……………」

何か——ガリユールは、小さく頷いた。そしてケースをフェアクレールトに預け、こちらに突撃してくる。両腕をまるで剣のように変形させて、斬りかかってきた。

そしてよく見れば、先ほど砲撃で受けただろう傷は見当たらなかった。

(堅い…………いちかばちかで…………)

《Blitz Action》

ロゼットの自動詠唱で発動した移動魔法で、私は一旦距離を離す。

「…………ロゼット。無茶かもだけど、一緒に頑張ってくれる?」

《Load Cartridge》

何も聞かずに、ロゼットは忠実に行動する。ロードしたカートリッジは、搭載中のマガジンの残弾全て。そして空になったマガジンを捨て、新しいマガジンを入れる。それからまた、五発。

そして同時に、十発の魔力弾を生成する。それらはホテルに侵入しようとするガジェットI型を撃墜し、消えた。

ロゼットの銃口に、周辺の魔力を集束させる。集束しきれない魔力が私の体にダメージを与えるが、そんなことはどうでもよかった。淡紅色の鎖がガリユールの動きを捕らえた。

「スターライト…………ツ…………ブレイカー!」

カチリ、と引き金を引く。淡紅色の魔力砲は一直線にガリユールへと向かった。

が、手ごたえはない。

(嘘…………効いてない…………)

煙の向こうから現れたガリユーは、無傷だった。弱弱しく輝く深紅色のシールドと、発動したフェアクレールトはぼろぼろだったけど。同時に、私もそれで限界だった。意識が途切れる寸前で、それでも持ち直す。しかしバインドは既に壊され、ガリユーに腹部を殴られ体は吹っ飛ばされる。

「っ……」

何とか立ち上がるが、これ以上は耐えられない。無茶するんじゃない。無茶するんじゃない。急加速したガリユーがその拳を振り上げる。見えてはいる。けれどもう、この体は動かない。動けない——、はずだった。混濁する意識に、声が聞こえた。

『——殺せ』

言葉と同時に、私の腕は動いていた。バリアを発動し、ガリユーの拳を受け止める。

『刃向かう敵を、侵略者を殺せ。虹の王を殺せ』

(……殺す。王を、この手で)

語りかける声は深く優しく、反抗の意思を奪っていく。それは同時に私の意識をも奪う行為だったが、不思議と拒否感は感じられない。

「深琴……？」

フェアが身構える。同時に受け止めていたガリユーを弾き飛ばした。何故だが体が軽く、リミッターによる不自由さも感じない。けれど、記憶したはずの魔法が思い出せなかった。

しかし体は覚えているらしく、躊躇無くフェアへと向かっていく。伸ばした手は、丁度リンカーコアがある部位へと。血の色にも似た瞳に映る私の瞳は、金色に染まっていた。

(……ああ、そっか。まだ覚えてる……)

そのまま魔力を剣の形へ集束する。同時に淡紅色だった魔力光が黒く変わって、紫色の天にも似た羽が舞った。

「——エンシエント・マトリクス」

音声トリガーが発動し、集束した魔力を一気に解放する。直撃を受けたはずだが……どうやらしぶとく生きているようだ。

轟音と衝撃波。それが過ぎ去るのを待つ程馬鹿ではない。二撃目

に移ろうとした途端、別の声が内側から響いた。

『……駄目だよ、深琴……』

年端もいかない少女の声。聞き覚えがあるはずなのに、その名前が出てこない。大事な名前なのに。大切な、存在だったはずなのに……。

地面に崩れ落ちた私の体を、生温かい何かが濡らす。それが自分の血液だとは、私を知る由もなかった。

そして私の息の根を止めようと、ぼろぼろになりながらも召喚獣が腕を振り上げたことも。その召喚獣を牽制し、フェアクレールト共々撤退させたのが銀色の魔力弾だということも。その主——デイバン・アーウィング執務官が大声で私を呼んでいたことも。

私が全部を知ったのは、それから三日後のことだった。



## 08：願い、二人で

昔——ミッドチルダに渡る前、よく見ていた夢がある。実は全て夢だったという、そんな夢。

母の声に起こされた私と、父と、兄、そして母の四人で食卓を囲み、兄と共に学校に向かう。学校では友達と、昨日の見たテレビとか、宿題のこととか他愛のないことを話して。学校から帰ったら習い事とか、家の手伝いとかして。そして再び家族全員で食卓を囲み、団欒し、そして一日を終える——そんな夢を見続けていた。自分に都合のいい夢を、飽きもせず。

きつと、私という人間は「不幸のヒロイン気取り」なのだろう。社交辞令を鵜呑みにしてしまうほど単純で、弱くて、情けなくて。

そして再び、心は迷う。こんな私が、このままでいいのかと。私なんか、魔導師になってよかったのかな。

——魔導師を辞めた方が、いいんじゃないかな……。

泣いているだけで、何も出来ないのに。前に進むことも振り向くことも恐れているだけ。……どん底まで落ち込んだ思考は、ぐるぐると後ろ向きに回りだす。

目の前で泣いている人がいても、手を差し伸べることも——声をかけることも出来ない自分なんか——。

『……違うよ』

ふわりと、羽が舞う。夜色にも似て、それよりもっと色鮮やかな——紫色の天にも似た、その羽。記憶には無い。けれどもどこか懐かしいその色と、声の主を私は知っている。姿を現した少女は微笑んでいた。

『大丈夫……あなたは強いから。それは、私が一番知ってる』

少女が私の手を握る。彼女の名前を口にしようとした瞬間、少女が首を振った。何故と問おうとした私の言葉を遮って、少女は口を開く。が、その言葉は風に掻き消されたかのように、私の耳には届かない。

「待って……！」

陽炎の様に消えていく少女に手を伸ばす。指先が触れた瞬間、寂しげな声が聞こえた気がした。

——ごめんね、と。



目を覚ました時、なぜか視界は歪んでいた。天井も、顔を覗き込む人も見えないほどに。

「目が覚めたみたいね」

「……シャル先生……？」

上体を起こし、目を擦る。下した手の甲には雫がついていた。手早くバイタルチェックを終えてほっとした様子で、シャル先生は椅子に腰かけた。ここはどうかやら、機動六課の医務室らしい。

「気分はどう？」

「特には……少し、頭がぼーつとするくらいで……」

私、なんで医務室にいるんだろう。ホテル・アグスタにいたはずなのに……。

ふと体を見れば、至る所に白い包帯が巻かれていた。……そうだ。ホテル・アグスタにガジェットが現れて、フェアクレールトと見慣れない召喚獣と戦って、それから……それから、どうなったんだっけ。声を聞いた気がする。その声に身を委ねた瞬間からの記憶が、全くと言っていいほど残っていない。あの声は、なんだったんだろう。

(お爺様に似ていた気もするけど……)

とは言っても、私が最後に祖父と会ったのはもう10年近く前のこと。それから秋月家からの音沙汰は無いし、年齢的にももう亡くなっているだろう。いい思い出も無いし、顔も覚えていないのに。

……だけど、今大事なのはそこじゃない。

「……私、どうなったんですか？」

「典型的な魔力エンプティと、大威力砲撃の反動をもらに食らっちゃったの。三日間眠ってたんだから」

「三日も……!？」

「あ、駄目よ！　まだ安静にしてなきや！」

ベッドから降りようとした私を、シヤマル先生は止めた。

「でも、私……！」

「……落ち着いて、よく聞いてね。例のアンノウンと召喚獣は逃がしてしまっただけど、奪われたのはレリックとは異なるロストログリアよ。ガジェットは全機撃墜したし、オークション会場や客に被害はなかったわ。奪われたロストログリアは密輸物で、今108部隊とフェイト隊長、それとアーウィング執務官が密輸ルートとか合同で捜査中よ」  
「アーウィング執務官が……？」

そういえば会場にアーウィング執務官がいたんだっけ……。彼の言葉を思い出すと、胸がチクリと痛んだ。私は彼に嫌われていたんだ。迷惑がられていたんだ……。――

口を閉ざした私に、シヤマル先生は微笑む。

「ええ。でも、深琴を一番に発見したのはアーウィング執務官なのよ？　それに、合同捜査を提案したのも――」

続くはずの言葉が、扉の開閉音で遮られた。

「あら、なのは隊長」

「深琴の目が覚めた、って連絡があって……」

陸士制服に身を包んだなのはさんが、ベッド傍の椅子に腰かけた。

「ごめんね、深琴。援護するって言っておきながら、何もできなくて」「いえ。独断で動いた私が悪いんです。ちゃんと部隊長の指示に従っていれば……」

そうだ。元をただせば私が悪いんだ。

「まあしばらくは絶対安静ね。訓練は一時中止。ロゼットは今メカニクススタッフがデータ解析してるから、終わり次第持ってきてもらうね」

「ですが……」

――「もう平気です」と続けようとした瞬間、なのはさんが安心半分、困惑半分の微笑を浮かべた。

「深琴は、ちよつと一生懸命すぎるんだよね。それは深琴の長所でもあるけど、短所でもあるよ。……まずは怪我の治療を最優先。万全の

状態で復帰しよ?」

「……はい……」

でも、ここで立ち止まってはられない。……というより、立ち止まっていたくない。何かしなければ。ただでさえ私は訓練を三日も休んでいるのに……これ以上どう休めというのだろうか。

「あの、なのはさん。前にいただいた、仮想戦闘データは続けてもよろしいでしょうか?」

私の言葉になのはさんは目を細める。その視線の鋭さに、思わず私は肩を竦めた。「怒ってるんじゃないんだよ」というフォローに、小さく安堵の息を吐く。

「……すみません。何かしてないと落ち着かなくて……」

「そっか。……分かった。でも、一日一時間、時間厳守でね」

「ありがとうございます!」

「うん。それじゃ、お大事にね」

言っただけなのはさんは立ち上がり、医務室を出た。そして入れ違いに、見覚えのある——ここにいるはずのない人物が入ってくる。

「失礼します。レオン・アヴァンシア捜査官候補生です。秋月三士が目を覚ましたと聞いて——」

「ああ、いらつしやい。どうぞ」

「はい。ありがとうございます」

眩い金色の髪と、穏やかな海面を思わせる碧眼の青年。

——レオン・アヴァンシア。士官学校時代の同期で、同じチームを組んでいた「首席卒業生」の一人。階級は三等空尉で、現役捜査官候補生。

やや足早に、レオンは私のベッドに近づいた。その眼差しは鋭く、彼の機嫌が悪いことを示している。……彼がここまで分かりやすく機嫌を表情に出すなんて珍しい。

「アーウィング執務官から聞いた。また無理しやがったな」

「えっと……ごめん」

シャマル先生が席を外したのを見届けて、レオンはいつもの口調で言う。即座に謝罪すれば「謝るくらいなら最初からするなと何度言え

ば分かる!？」と怒られた。けれどそれすらも懐かしい。そして彼の訪問で、私の中で何かが弾けた。

「……深琴? どうした?」

「レオン、私、私……」

再び視界が歪み、呼吸が苦しくなる。必死に笑顔を作ろうとしたが無駄だった。

「私……このままでいいのかな……?」

「お前、何言って……」

あの言葉はただの社交辞令だった。勝手に浮かれて、調子に乗って。何も気づかずに、あの人のことを勝手に尊敬して、迷惑掛けて。こんなことなら、私――。

「……魔導師になるんじゃないかった……」



同時刻、機動六課隊舎会議室。その一角で、デイバイン・アーウィングは提供された資料を睨みつけていた。ガジェットとアンノウン――フェアクレールとの戦闘データ、奪われたロストログアとその密輸ルートへの推測など、機動六課と陸士108部隊、そして彼と部下がこの三日で可能な限り集めた情報である。

「……ここにいたんだ」

「なのはか。何の用だ」

その背中に声をかけたなのは、返ってきた冷たい声に肩を竦めた。

「深琴、目が覚めたよ」

「知っている」

「顔、出さないの? 深琴も喜ぶ……わけないか」

きっと今会えば、彼女の心はさらに乱れるだろう。そう予測したなのは苦笑する。

「はやてちゃんから聞いたよ。ほんとに、『あんなこと』言ったの?」  
あんなこと、とぼかされた言葉に、デイバインは唇を噛み締めた。

しかし振り向きはしない。

「深琴、シヨックだったろうね。ようやく会えたのに」

「……お前に、何が分かる」

「分からないよ。でも……」

言い返したなのは躊躇う様に唇を噛み、一步彼に近づいた。

「……深琴ね、実の母親にその力を疎まれていた。あんなの自分の子供じゃない、産まなきゃよかったって、面と向かって言われて、捨てられるようにミッドチルダに送られた」

六課が活動を開始して間もない頃、なのはは深琴に聞いた。なぜ魔導師を目指したのかと。そして将来はどんな道に進みたいのかを。

『憧れなんです』

彼の名を紡ぐたび、深琴はそう続けた。彼にかけられた言葉が嬉しくて、認められたことが誇らしく、だから憧れたのだと。彼のようにになりたい、彼のように『誰かを守る自分』になりたいと深琴は言っていたのを、なのはは思い出す。インターミドルに出場したことも、士官学校に入学したのも全部『誰かを守る力』を手に入れるためだと。

それは彼も分かっている。だからこそ。

「……本気で、魔導師を辞めさせようと思ってる?」

「ああ。俺は本気だ」

「それを、深琴が望んでいないとしても?」

魔導師でなければ、現場に出ない。管理局員にとってそれはほぼ絶対的の安全だ。無論、それは彼女本人が望まないことなど理解している。それでも、デイバインはそれを望まずにはいられなかった。

何より、とデイバインは三日前の戦闘を思い出す。なのはを始めとした上司の誰もが知らなかった、深琴の身に起きた異変。己の血で染まったその姿を思い出し、デイバインは唇を噛んだ。

自分がこの目で確認しただけの情報、いつでも提出できるよう纏めてはいる。だが。

(……あれは、本当に深琴なのか……)

破壊と殺戮を絵に描いたような、あの異変。自分が知る彼女とは程

遠い不吉な姿に、言いようの無い嫌悪感と後悔が呼び起こされる。  
あんな戦い方をするために、彼女は魔導師になったんじゃない。  
あんな戦い方をさせるために、なのはや零——自分の親友たちは彼女を育てているんじゃない。

——こんな思いをするために、自分は彼女を救い出したんじゃない。

「……誰が好き好んで、危険な現場に出すか」

「……相変わらずだね。深琴限定で」

肩を竦めて、なのはは呟いた。

◇

「あ、深琴さん」

「もう大丈夫なんですか?」

「うん。二人とも、心配かけてごめんね」

それから、数日。その日は午前訓練のまともで模擬戦を行う日だった。もちろん私は今日も医務室で点滴を受けていたのだが、フェイトさんに付き添われ、陸士制服を着崩した姿で私は20n1の模擬戦真っ最中のスターズを見た。

ウイングロードを発動させたスバルが、なのはさんに向かっていく。ティアナは地上でクロスファイアシュートを発動させる。過去の一件で砲撃型を愛用する私とは違って、ティアナのそれは誘導型。見えて勉強になるんだけど……。

(あれ……何か、変?)

いつもよりキレが無い誘導弾が、なのはさんに向かっていく。萎縮か不調か……どちらにせよティアナらしからぬ異変に気づいたヴィータ副隊長とフェイトさんも首を傾げていた。そしてもちろん回避して移動を続けるなのはさんに、スバルが突撃する。でも、あれは……。

(フェイクじゃない……本物!?)

桜色の誘導弾を防いだスバルはそのままなのはさんに突撃する。

近接戦になったが、なのはさんはレイジングハートでリボルバーナツクルを捌いた。

そして再び、違和感。何かがおかしい。スバルも、ティアナも、そしてなのはさんも――。

スバルがなのはさんの攻撃を受け、その隙を突いて上空からティアナがオレンジ色の魔力刃でなのはさんへ攻撃する。

「おかしいな。……二人とも、どうしちゃったのかな？」

スバルの拳と、ティアナの刃。それらを片手ずつ受け止めたなのはさんは呟いた。

「頑張ってるのは分かるけど、模擬戦は喧嘩じゃないんだよ。練習のときだけ言うこと聞いている振りで、本番でこんな危険な無茶するんなら、練習の意味、無いじゃない」

小さな、けれど確かに届いたその言葉は。

「ちゃんとき、練習どおりやろうよ。ねえ。私の言ってること、私の訓練……そんなに間違ってる？」

「私は、もう誰も傷つけたくないから！ 亡くしたくないから！ だから……強くなりたいんです！」

――ティアナには届かなかった。

「……少し、頭冷やそうか」

なのはさんの指先は、ティアナへと向けられる。誘導型の魔法で射撃準備に入っていたティアナを攻撃したなのはさんは同時にスバルをバインドで縛り上げ、こう言ったそうだ。「じっとして。よく見てください」と。

戦意を失い、倒れる寸前のティアナを、なのはさんは砲撃型のクロスファイアで狙い撃つ。

その光景を目にした瞬間、私は手すりを掴んでいた左手に力を込め、飛び降りていた。

「ティアナ！」

「深琴!？」

「馬鹿、戻って来い！ 深琴！」

フェイトさんとヴィータ副隊長が声を荒げた。けれど、動き始めた



私は止まらなかつた。展開状態のウイングロードに一旦着地し、直前にかけていた魔法で一気に加速する。

目的地は、回避も防御もしない——否、できないティアナの元へ。「ラウンドシールド……！」

「……深琴……」

桜色の砲撃がティアナを直撃する。その刹那発生した淡紅色の円形の盾を見たのはさんが、こちらに視線を遣った。気遣わしげな、視線を。

その視線を受け止めた途端、心臓が一際大きく揺れた。

——あれは敵だと、声がする。

(……違う。なのはさんは、違う！)

「——そこまでししろよ、お前ら」  
内側から聞こえる声を否定した瞬間、意識にもう一つの声が割り込む。

見ればフローターで衝撃を緩和しウイングロードに落ちたティアナを庇う様に、零さんが刀を抜いた。……もう大丈夫。零さんが、守ってくれる。それを見届けた私は、意識を手放した。

——彼の視線に、兄のそれを感じながら。



意識を手放した深琴が、倒れ落ちる寸前で零と共に訓練場に急いでいたデイバインに抱き留められる。それを確認した零は無言で刀を鞘から抜いて突撃し、その刃先をなのはの首筋に向けた。

「……零くん、何のつもり？」

「そこまでししろって言ってるんだよ。模擬戦は喧嘩じゃないんだろ？ ならお前が今、スバルとティアナにしたことは何だ？」

言つて、零は黒曜石にも似た瞳を細める。そこに浮かぶのは、確かな怒り。

「言うことを聞かない部下への制裁か？ それにしては武力行使が過ぎるんじゃないか？ 二回目の砲撃は、深琴の盾が間に合ったから良

いものの——防御も回避もしない、できない奴に直撃したら、いくら威力を調整してると言っても、大怪我は免れないよな？」

「でも、こうでもしなきゃ……」

『将来間違えるから意味が無い』ってか？ それで見せしめの様に、圧倒的な実力差で撃墜させられた本人はやりきれないよな」

「……ティアナは、焦ってる。強くなるうとして、間違った方向で無茶をしてる」

なのはが、呟くように口を開いた。スバルやエリオ、キャロ、フェイト、ヴィータが心配そうに自分たちを見る。内フェイトとヴィータからは敵意すらも感じるが、零は気に留めることなく話を続けた。

「そんなことは分かってるよ。傲慢じゃないけど、俺はお前がティアナを大事に思ってることも、伝えたいことも分かっている。その上で言わせて貰う。文句は後で聞かしくし、気に入らないって思うなら砲撃ぶち込むなりなんなり好きにしろ。その時は俺も、そのつもりで迎撃する」

刀を一旦下げ、零は意識を失っている深琴に視線を遣った。デイバインの腕の中、目覚める様子も見られない。本当は俺たちが間に合わなければいけなかったんだけどな、と内心で呟いた。

「基礎は大事だ。それはこいつらだって痛いほど分かっている。なら何故逆らうか？ 簡単だ。『強くなっている自信が持てないから』だ」

そもそもこの部隊の保有戦力は明らかに異常だ。ランクは当然のこと、将来有望な才能を秘めた新人達を寄せ集めている。だが彼ら——及び本局だってこう思っているのではないか。『何かあってもなくても、なのは達が何とかしてくれる』と。

新人たちの動きは、決して悪くない。けれど同時に「頑張っても、どうせ最後はエースが持っていく」のではないか。そう思ってもなんらおかしくは無い。

もちろん、なのはやフェイト、はやてが強くなるために、誰かを守る様に努力していることは零も分かっている。けれどライトニングと比べて、スターズは——なのはとスバル、ティアナは関わっていないのではないか？

それは深琴にも言える事だが、幸いなことに、彼女が所属するロングアーチは隊員同士の年齢も近く、気が利く隊員が殆どだ。入隊して間もない、局員としての経験もない深琴を心配し、自分たちの輪に引き込めるほどに。

(こういう役回りは苦手なんだがな……)

そう内心で吐き捨てるも、自分以外に口を開く者はいない。デイバインからの援護射撃を期待しつつ、零は深い溜息を吐いた。

「ホテル・アグスタでもそうだ。確かにティアナは致命的なミスをした。ヴィータが間に合ったから良かったものの、一歩間違えれば仲間を殺しかねない。スバル、それは分かるな？」

「……はい。でも、ティアナは……」

「ああ、ティアナはそんなことしないだろう。けど実際問題、人間だからミスをする。これはティアナだけじゃない。お前やエリオ、キャロ、深琴だってそうだ。もちろん俺やデイバイン、言ってしまう必要なのは達だって『いつミスをしてもおかしくない』んだ。人間だからな」  
「特に射撃型のセンターはな。状況を見て指示を出し、自分も攻撃に回らなければならぬ。誰よりも本人が思っているだろうな」

零の言葉に頷いたデイバインは、そつと深琴を抱え直す。大慌てでやって来たシャマルと共に、未だ目を覚まさない深琴とティアナを医务室へ運んでいった。

「問題はそれ以前。当時フォワードの担当は、ホテル防衛のための最終ライン。あそこでガジェットを全機叩かなければ、敵はホテルに侵入し、客諸共攻撃する。深琴は既に裏口から侵入しようとしたアンノウンの迎撃中。しかも敵は召喚魔法のエキスパートで、転送魔法も使用可能。——ではここで問題です」

ピンポーン、とどこからか気の抜けた音が響く。小さな笑いも起きない状況に不満を覚えない零ではなかったが、「この不器用共が」と内心で吐き捨ててこらえた。

「もしガジェットが侵入を果たしたとして、会場内にいたお前たちは『どうやって安全無事に迎撃する』んだ？　そして今回の件、『本当に悪いのは誰だ？』。結果的にはガジェットは全機撃墜。深琴撃墜と口

ストロギア強奪が痛かったが、客に怪我は無かったからよしとしよう。別に功を焦つても良いじゃないか。人間だもの」

言つて、零は微笑んだ。涼やかで、どこか冷酷な笑みを浮かべる。「大事なのはさ、なのはとティアナが『お互いに話し合う』ことじゃないのか？ 誤解の無いようにお互い面と向き合つて、他の奴らは邪魔しないで、な」

## 09：たいせつなこと

深い闇が広がる。何も、誰も存在しない空間。押し寄せる疲労感に目を瞑って、時間が経つのを待つ。何も聞こえない、静かなその場所。……なのに、何でこんなに悲しい気持ちになるんだろう。

一人は嫌だ。寂しいのも、怖いのも嫌だ。弱くて泣き虫で——立ち止まって動けないままの自分が嫌だ。でも、それ以上に誰かを傷つけて、悲しませる自分の方がもつと嫌い。

『――殺せ』

冷たくも穏やかな声が響く。敵を殺せと、ただひたすら繰り返して。堪えきれず瞼を開くと同時に、気が遠くなりそうな風景が浮かんで消えていく。

古い城と、玉座に座する王。

曇天に覆われ、草木の枯れた大地。

血を流して倒れ伏す兵士と、虹彩異色の王達の姿。

「っ……い！」

気づくと、自分の手は夥しい血で染まっていた。見てきた様な風景と、感じてきたような思いに揺さぶられる。しかし受け入れがたいそれらを拒絶するように、私は固く瞳を閉じた。

「……会いたい……」

ぽつりと漏れた言葉が、反響する。何でもいいからこの場所から逃げ出したい。怖いのだ。まるで私が彼らを殺したのだと言わんばかりのこの世界から。きつと今、この場所に一人だから悪い方へ悪い方へと考えてしまうのだろうか。

だから。

六課のみんなに、家族に会いたい。そう思った瞬間、闇色の世界に、ほんの僅かな光が見えた。助けて、と思わず手を伸ばすと、誰かに握り返されたような感触を覚える。頭を撫でられて、どこか安心するその感覚に、母の姿を思い出した。

話したいことがあります。伝えたい思いがあります。どれから言

葉にすればいいか迷うほど、たくさん。

上手く言葉にできなくて、素直になれなくて、伝えられないことも多くて、時間が足りなくなるかもしれないけれど。せめてこれだけは言わせてほしくて。

——ありがとう。そして、ごめんなさい。

今は、これだけでいいんです。きつといつか、全て伝えられる日が来ると思うから。

私はまだまだ子供で、何も分からないけど。それでもあの瞬間だけは信じていたいから。

だから、私は——。

◇

伸ばした手が、握り返される。開いた目に映りこむのは眩い蛍光灯の光だった。ぼやけて見えるのは、両目に涙が溜まっているからだろう。先程とは違う光景に、安堵の息を吐いた。

「深琴」

小さくも凜とした、優しい声に名を呼ばれる。私の名前は、そんなに優しい響きになれるのか、と十三年の人生で初めて思った。まだぼんやりとした様子の私を見て、声の主——八神部隊長はくすりと微笑む。

「……八神、部隊長……?」

「うん。体の具合はどないや?」

「あ……」

そう尋ねられて、今いる場所を再確認した。——ここ数日お世話になりっぱなしの医務室である。

「なんや魘されてたけど、嫌な夢でも見たんか?」

柔らかい関西弁に、幼い頃を思い出す。魔法も、家の事も何も知らずに過ごしていたあの頃。

——まだ両親に愛されていたと、自覚できる懐かしい日々を。

ぼろぼろと涙が零れて、シーツに染みを作る。堪えようと握り締めた手の平に爪が食い込んで皮膚を裂いた。見かねた部隊長が、そっと私を抱き寄せる。

「……我慢せんでええんよ。泣きたい時は、思いつきり泣いた方がええ」

とんとん、と優しく背中を叩かれた。規則正しいそのリズムと共に睡魔が襲う。

腕の温かさに微睡まどろみながら、夢の中で最後に聞いた言葉を思い出していた。聞き覚えのある少女の声。

——一人じゃないよ。

同時に思い出すのは、遠い昔の記憶。何度か病室に来てくれた三人の女の子の姿。……なのはさんとフェイトさん、それに八神部隊長に似ている気がした。

◇

その日の夜、私は寮の裏庭にいた。手にしているのは、二振りの木刀。服装は白い上衣と紺色の袴という、ちよつと今いる世界を勘違いしそうなもの。——とはいえ、私にとってこの服装もまた制服であるのだから、仕方ない。

教わった型に従って、木刀を振る。本来私が習った二刀流は太刀と小太刀の組み合わせが正しいのだが、習っていた当時の私の腕力では太刀を振るうことができなかった。秋月家に伝わる武術はそのどれもが曰くつき、というか無茶苦茶というか……流派としては異端である。伝えられるのは武器——刀や剣の道に通じ、魔力を循環させ「一閃で全てを終わらせる」技法。流派的な名称としては「剣閃」と名づけられ、その教えを「一閃必倒」とする理由でもある。

それを伯父から習い始めたのは十歳の頃。魔力制御と平行して、肉体的にも鍛えるために。

あの時教わった技を、ひたすら繰り返す。何もしてないと不安でしようがなくなるから。

あれから——再び意識を取り戻した後、私は一先ずの検査を受けた。いきなりビルからの飛び降りとか何考えてるの、とシヤマル先生には怒られたけど、検査の結果肉体に受けた怪我は完治。魔力も8割の回復が見られたため退院ということに。

相変わらずの化け物じみた回復力に、自己嫌悪すら覚える。

「っ……」

カラン、と乾いた音を立てて、左手に携えていた木刀が落ちた。左手は麻痺したように震えて、握りしめることすらできない。

「一旦、休憩しとけ」

音も無く現れた零さんは、手にしたタオルとスポーツドリンクをこちらへ渡した。

「まったく、お前といい、ティアナといい……少しは落ち着いたらどうだ」

「そう言われても……」

今日の訓練——2on1での模擬戦で、ティアナが取った行動とその結果。もちろんなのはさんは怒って——ティアナにはではなく、不甲斐ない自分に対してだが……正直、私はどちらが正しいと分からない。

無茶して体を壊したら意味が無いことも分かる。けれどそこまでしなければならぬ程追い詰められる気持ちも、痛いほど良く分かる。かつて自分もそうだったから、余計に。

「……話は、6年ほど前に遡るんだが」

そう前置きして、零さんはモニターを起動させた。そこには一人の局員が映し出されていた。

「ティータ・ランスター。当時の階級は一等空尉。所属は首都航空隊で、執務官志望のエリート魔導師。享年21歳」

「任務中に、亡くなったんですか？」

「……パートナー共々逃走する違法魔導師にやられたらしい。その魔導師は無事逮捕できたんだが上司の心ないコメントが、妹の心に深い傷を負わせたって話だ」

手短かに語る零さんの横顔が陰った。ティータ一等空尉のパートナー……おおよその見当はつく。

「そのパートナーって……霜月秋葉さん、ですか？」

「……そうだったな。一回会ったんだっけか」

地球への出張任務で出会った、囑託魔導師。彼女が纏う防護服は、首都航空隊のものによく似ていた。デバイスだって一般局員に配布



される杖型ストレージデバイスだったし。

本来、囑託魔導師とは、その現地の世界の人間が「止むを得ない事情」で魔法や異世界に関する知識を得てしまった場合に備えて用意された面が大きい。

そういう人は——機動六課で挙げるなら、なのはさんの様に自分専用のデバイスや防護服を所有していることが多い。

だからこの世界——時空管理局の管理下にある世界で共通するような防護服やデバイスを持つ囑託魔導師は滅多にいない。

「秋葉はな、昔色々あって、聖王教会に保護されてたんだ。まあでも魔力資質は高かったし、あいつ自身の希望もあって管理局に入局した」

もう一枚のモニターに、六年前の秋葉さんが映し出される。当時11歳。階級は一等空士。

「最初は秋葉も、ティードに中々懐かなかったんだけどな。コンビとして行動するうちに変わっていった。ティードも妹がいたせいか、年下の扱いに慣れててな。『あの秋葉が笑ってる!?!』と俺は何度も思った」

「……さりげなく失礼だと思います」

「事実だから仕方がない」

「そんなドヤ顔で言われても……」

スバルから聞いた話だと、ティアナは既に両親を亡くしている。自分を一人で育ててくれた兄を愛し、誇りに思っていたに違いない。なのに、その死が無意味だったと言われたら……私だって、反発する。兄は間違つてないと、何が何でも証明するだろう。

「俺はな、深琴。なのはの気持ちもわかる。基礎ができてこそその応用だ。体を壊したら意味が無い。だけどティアナの気持ちもわかる。痛いほどにな」

「はい……」

「もちろん、お前の気持ちもな。ディバインに言われたんだろ? 『その程度の苦しみだった』とか何とか。で、このままでいいのか迷ってる。違うか?」

違わない。あれからずっと考えている。これから自分は、どうすれ

ばいいのかと。

「迷えばいいんだ。迷って、苦しんで、泣いたって構わない。正しい道なんか、進まない限り分かりはしないんだ。14歳で、自分の存在意義が分かる方がおかしい。そのために俺たち年上がいるんだ。何でもかんでも一人で背負いこむ必要はない」

言つて、零さんは立ち上がった。

「邪魔になると悪いから、俺は先に戻る。あまり無理するなよ」

「はい。ありがとうございます」

「おう。……それと、そのヘアピン。似合ってるぞ」

じゃあな、と零さんは夜の闇の向こうに消える。その後姿を見届けた私は、髪からヘアピンを外した。

「……お兄ちゃん……」

私が魔導師であることも、秋葉さんが魔導師であったことも知っていた兄。兄なら、優しく声をかけてくれるのだろうか——？



型の流れを一つ一つ確認した私は、一旦座り込んだ。タオルで汗を拭いて、一息つく。こうやって木刀を振るってる間は落ち着いていても、手放した瞬間不安になった。

魔導師であること以外、私に誇れるものなんてない。魔導師でない私に残るものも、何もない。「ただの秋月深琴」にしかならない。

もし魔導師でなかったら。私も家族と一緒に暮らして、中学校に通つて、友達がいて、高校受験とか将来に悩んでいたのだろうか。……だめだ、まったく想像できない。試しに兄が通っていた中学の制服——女子は濃淡の異なる紺一色のセーラー服を纏う自分を想像してみたが——うん、似合わない。

……私に「普通」を求めたのが間違いだった。

やっぱり、私は——。

「……ここにいたのか」

「っ!？」

溜息とともに、デイバイン・アーウィング執務官が姿を現した。反射的に体が緊張する。

「ほら」

手渡されたのは、紛れもない私のデバイスだった。恐る恐る手を伸ばし、私は受け取る。

「時間はかかったが、別段故障は見当たらなかったらしい。データは自分で確認しろ、とのことだ」

「あ、ありがとうございます……」

答えたきり、会話が続かない。沈黙が広がる。

「……あの、アーウィング執務官」

「何だ」

不機嫌そうな声で、執務官は聞き返した。正直怖いけど……今しかない。

「4年前はありがとうございます。そして、すいませんでした」

まずは謝罪。そして。

——ヘアピンを握りしめた手を胸元にあてる。こんな時ばかりで申し訳ないが……力を貸して、お兄ちゃん。

「……それでも私は、『魔導師』でありたいです。きっかけはともかく、私には、それしか取り柄がないから」

……言ってしまった。だが後悔はない。

そう。結局私には「魔導師」である以外、存在意味がない。それに、今更魔導師を辞めて何になる？

別に、母さんが私を受け入れてくれるわけじゃない。みんなと一緒にいれるわけじゃない。

何も変わらないのなら——いや、変わるとしても、「今の私」でありたい。だって認められないということは、母と同じということになるのだから。

それに。

「自分が、『普通』じゃないってことに気づいてから……」

震える唇で言葉を紡ぐ。小さな声だったけれど、アーウィング執務官には届いたようだ。視線だけを動かして、続く言葉を待っている。

嫌悪か苛立ちかは、分からないけれど。

その視線を受けて、漠然と母さんの目を思い出す。怯えるような、哀れむような感情が縋い交ぜになったその目。化け物と罵られたあの時、シヨックを受けると同時に納得した自分がいた。それでも母さんに嫌われたのが悲しくて、母さんを悲しませることしかできない自分が大嫌いになって。

「……あの瞬間までは、死んでしまいたいと思っていました。誰かを守ることも、喜ばせることもできない自分なんか、生きている意味なんか無いって……ずっと、思っていました」

でも、と4年前のあの日を思い出す。危険を顧みず、炎と瓦礫から救い出してくれた人。自分の身を守るだけで精一杯だった私に、それでも「よく頑張ったな」と褒めてくれた。大嫌いだったこの力の使い道をそれとなく示してくれたことが嬉しくて。

変わりたいと願った。弱いままで、何も出来ないままでいたくないと。運命なんてものがあるとすれば、それはきつとあの瞬間。

「繋いでもらった命を無駄にしたくない。生きたいと願ったあの瞬間を無意味なものにしたくない。……だから、強くなりたいって思っただけです」

……この人のように危険な場所でも省みず、誰かを助けられるように。

(……言っちゃった……)

小さく息を吐く。六課の誰にも——それこそなのはさん達にも話していない、私の気持ち。

とはいえ支離滅裂であることは認める。黙り込んだままのアーウィング執務官を見上げると同時に、執務官が口を開いた。

「魔導師を辞めることが、一番安全だとしても？」

僅かに震えているような声。魔導師を辞める、か……。

「……怖いのかは嫌ですけど……でも、そう思っている人がいるのなら、私はその人を助きたい。助けられるだけの力が欲しい。それが魔導師であり続けることなら、私は……！」

怖いのは嫌だ。誰かが傷つくのも、誰かを傷つけることも大嫌い。

……でも、もしも誰かが同じように悩んで、傷ついて、助けを求めていたら。私はその声に応えたい。

それに今は、六課のみんながいる。もう一人じゃないのだから、怖くない。

そう続けようとした瞬間、モニターが開き、アラートが鳴り響いた。

『深琴、出動だよ。今すぐヘリポートへ来て』

「はいー」

なのはさんからの通信に返礼して、私はアーウイング執務官を見た。青い瞳は、誇らしそうな、どこか寂しそうに輝いている。

「……失礼しますー！」

その理由も気になるが、出動命令が最優先だ。

「行こう、ロゼット」

《All right, buddy.》

——もう逃げない。迷わない。六課の魔導師として——秋月深琴として、戦うんだ！

「今回は空戦だから、出撃は私とフェイト隊長、ヴィータ副隊長、それと深琴の四人」

「みんなはロビーで出動待機ね」

ヘリポートに集まった私たちは、なのはさん達から指示を受けていた。しかしみんな陸士制服なのに、私だけ剣道衣で非常に恥ずかしい。着替えてくればよかった……。

そして、ティアナの悲痛な声が響く。才能もレアスキルもない自分は、死ぬ気で頑張らないと強くなれないのにと。

そしてもしかかしくなる。なのはさんたちの言葉も、ティアナの言葉も分かる。間違っていないし、間違ってる部分もある。けれどそれをうまく伝えられない自分が、非常にもどかしい。

「今回の敵は航空Ⅱ型、4機編隊が三隊。12機編隊が一隊」

モニターに映るガジェットⅡ型を見ながら、なのはさんは説明する。

「フロントアタッカーはヴィータ副隊長。フェイト隊長はガードウイ

ングで、私はセンターガードで中距離から火砲支援を行います。深琴はフルバックとして、私たちの援護をお願いね」

「はいー」

援護、援護。何度も繰り返して、私は心に刻み込んだ。

◇

「……行きましたね」

「ああ」

六課隊舎から飛び立ったヘリを見上げて、レオン・アヴァンシアは呟いた。その隣で、デイバイン・アーウィングは頷く。

「……お前も出るか？」

「いえ。俺じゃ、足を引つ張るのが関の山です。そりや深琴とツーマンスセルで、っていうなら話は別ですが」

そうだとしても、まだ万全でない深琴に前線を担当させるわけにはいかない。そうなれば結局自分には何もできないのだ。

そう、レオンは言外に告げる。

「そういうお前はどうかんだ？」

待機服に身を包んだままの零が問う。とはいえいつでも出動できるように、準備は怠っていなかった。そんな彼を横目に見て、デイバインは左腕に嵌めた、黒銀の腕輪を示す。

「許可さえあればいつでも、問題はない。……そうだろ？ アルカディア」

《Yes.》

答えた腕輪は、自動的にその形を変える。黒銀色の拳銃へと。

そしてその形は、深琴のデバイス・ローゼンクランツの第三形態によく似ていた。

◇

「こちらスターズ1。中距離火砲支援、いつきまーす！」

私の数メートル前で、なのはさんは宣言する。桃色の砲撃がガジェットII型の編隊を容赦なく撃ち落としていた。

「っ、ヴィータ副隊長！」

《Wing Shooter.》

副隊長の背後に、ガジェットが音も無く回り込む。そのガジェットを、淡紅色の直射弾で撃ち落とした。

「続けていきます……フェイト隊長！」

《Enchant Defence Gain.》

「ありがとう、深琴」

強化された防御力を活かして、フェイト隊長はガジェットに切り込んでいく。

隊長たちの連携は、見えて完璧としか言いようがなくて。……私なんかいなくても、なんとかかなりそうだ。

そう弱気になった瞬間、『後ろだ！』とヴィータ副隊長の声が響いた。

飛んできたミサイルを回避して、攻撃を開始する。が――。

「さつきよりも数、増えてない……っ？」

《I think so.》

眼前のガジェットII型の数は、およそ13機。現在隊長たちが相手しているガジェットは、後15機……って絶対数増えてる！

『深琴！』

「っー」

空中をこれでもかとはばかりに、私は急加速飛行を行う。でないとして、つていうかそれでも振り切れない。――避けきれない！

が、私を追尾していたガジェットの数機が、銀色の砲撃に撃ち落とされていく。乱入者は他の誰でもない。

「アーウィング執務官……」

「援護に集中しろ。こっちは俺が引き受ける」

その言葉と同時に、とん、と小さく音を立てて背中が合わせられた。あの時と同じ防護服。しかし手に握られている拳銃は、違っていた。

「無茶をするな、とは言わない。巻き込んだ責任は取る。――絶対に、

守ってみせる」

「えつと……？」

「ああいい、今のは聞き流せ」

小声で、その上早口だったから聞き取れなかった。まあ聞き流せ、と言われたから気にすることでもないのだろう。無性に気になるのは気のせいかな。なんかすごい重大なことを聞き逃した気が……。

「……行くぞ、アルカディア」

《All right.》

黒銀色の拳銃——アルカディアと呼ばれたデバイスが答える。でもその形、ロゼットと……。

『……そうだよ』

困惑している私に、なのはさんは通信を繋げた。その間も、火砲支援は続いていた。

『アーウィング執務官のデバイス、アルカディアはね。ロゼットの第三形態のコンセプトを受け継いでるの。戦闘データはもちろんだけどね』

「なのは、余計なことを言うな」

『にやはは』

執務官の頬に、若干ながら赤みが差す。一方のなのはさんはどこ吹く風、とばかりに笑っていた。

フェイトさんとヴィータ副隊長が突撃し、なのはさんが砲撃を編隊に叩き込む。援軍及びなのはさん達が撃ち漏らしたガジェットは、アーウィング執務官が一機残らず撃ち落していった。

「——行くよ、ロゼット」

《All right. —Blaze Cannon.》

熱量を伴う砲撃が、後方から引き続きやってくる編隊を撃ち落す。

「ええー！」

それからあつという間にガジェットは全機撃墜して六課に帰還した私たちは、両手を合わせて——まるで拝むようなシャリーリーに迎えられた。

「駄目だよ、シャリーリ。人の過去、勝手にバラしちや……」



「駄目だぜー。口の軽い女はよお」

シャーリー曰く、あれからフォワード陣になのはさんの過去の戦闘ビデオを見せた、とのことらしい。やっぱり見てられなくて、このことで。本部に残っていた零さんがいくらか口添えをしてくれたおかげで、余計に拗れたりはしなかったようだ。

「あ、あとね……深琴のことも、話しちゃったんだ……」

「私？ え、でもそんな話すようなこと……」

と、シャーリーの後ろで待っていたレオンが、意味ありげに視線を逸らした。

「……世界代表戦のビデオ、見せちゃったの……」

「お前かああああー！」

反射的に逃げ出したレオンを追って、一発殴る。

インターミドル世界代表戦。

それは私が人生初の負けを知った場所で、同時に人生初の集束系魔法を使い、治療に半年を要する程の怪我を負った、その日。

「悪かったって！ でも仕方ないだろ！ 身近な人間が似たようなオーバーワークしてんだから、その方が説得力あるし！」

「そういう問題じゃない！ っていか何であるのビデオ残ってるの!?!」

「俺が知るかよ！」

それからみんなで茂みに隠れて、なのはさんとティアナの和解を見届けて。とりあえずレオンはもう一回殴らせていただいた。



そしてその翌朝。フェイトさんが教えてくれた。

「技術が優れてて、華麗で優秀に戦える魔導師をエースって呼ぶでしょ？ その他にも、優秀な魔導師をあらわす呼び名があるって知ってる？」

その言葉に、私たちは顔を見合わせた。お互いに視線で「知ってる

？」「知らない」と訴える。

私たちの様子に、フェイトさんは微笑んだ。

「その人がいれば、困難な状況を打破できる。どんな厳しい状況でも突破できる。そういう信頼を持って呼ばれる名前。……『ストライカー』」

言って、フェイトさんは空を見上げた。青くて広い、空を。

「なのは、訓練を始めてからすぐの頃から言ってた。うちの五人は全員、一流のストライカーになれるはずだって……だからうんと厳しく、だけど大切に丁寧に育てるんだって」

その優しい笑みと言葉に、私は思わずはにかんでいた。

（だから厳しい言葉は、全部その人のことが嫌いだからってことじゃないんだよ）

と、フェイトさんはいきなり私に念話を繋いだ。

（その人のことが大好きだから、守りたいから。でも素直に言えなくて……あんな言葉になっちゃったんだって）

『巻き込んだ責任は取る。——絶対に、守ってみせる』

誰が、とは聞かなくても分かる。彼の言葉を思い出すたびに顔が熱くなった。

「深琴？　大丈夫？」

「顔、真っ赤ですよ？」

「あ、うん！　大丈夫、大丈夫！」

きよとん、と首を傾げる面々に笑顔を見せる。

「よーっし、今日も頑張ってこー！」

「オーツ！」

叫ぶように拳を突き出せば、みんな乗ってくれた。ティアナが何か言いたげな様子だったけど、いつものように肩を竦めて、それでも笑っていた。

## 10：機動六課のある休日（前編）

あの、ちよつとした事件から約二週間。ティアナはすっかり、いつもの彼女に戻りました。

訓練も順調に難易度が上がり、日々楽しく、同時に少しだけ辛かったりするけれど。

——もうちよつとだけ、頑張れそうです。

「はい。今朝の訓練と模擬戦も無事終了。お疲れ様！」

訓練場で整列して座り込んだ私たちに、なのはさんは笑いかける。その両隣りにはヴィータ副隊長とフェイトさん。三人のやや後ろに零さんとデイバイン・アーウィング執務官。一方こちらにはいつものフォワードに足して友人のレオン・アヴァンシアが参加していた。五対六と数では有利でも、このメンツでの模擬戦は結構厳しかった。一応各ポジション同士接敵、を重点にしていたんだけど。

スバル対ヴィータ副隊長。エリオ、キャロ（フリード）対フェイトさん。ティアナ対なのはさん（火砲支援込み）。そして私とレオン対零さん、アーウィング執務官という感じで。

「今だから言うけど、俺さつき割と全力出した」

「出さないでくださいよこれ訓練ですよね!？」

零さんの眩きに、反射的にツツコミを入れる。……たしかに模擬戦中、彼の攻撃はいつもより重かった。

「いや、二年間コンビ組んでただけあって息びったりだったし、ついカッとなってやった。反省はしていない」

「お願いですからちよつとでいいんで反省してください！あと、私たち『コンビ』っていうより『トリオ』が正しいですから！」

衝動的犯罪者みたいな言い分で、本気を出されたらかなわない。なんて思っていると、レオンが目を丸くして私を見ていた。

（何？）

（いや……お前が俺ら以外でここまで話すのって、珍しいなって）

……そうだっけ？ あ、いや、確かにそうだった。なんか最近ふつきれたみたいで……。

遠い目をして、零さんは呟く。

「どら焼きは主食にならないんですね、分かります」

それどつちかかっていうとおちやめな機能の方ですから!!

「でね、実は何気に、今日の模擬戦が第二段階クリアの見極めテストだったんだけど」

なのはさんの言葉に、私たちは目を見開いた。

「どうでした?」

「合格」

「はやつ!?!」

なのはさんの視線を受けて、フェイトさんは微笑む。間髪いれず即答した彼女に、思わずスターズコンビがツツコミを入れた。

「ま、こんだけみっちりやって、問題あるようなら大変だったこった」

「大変、どころじゃないだろ」

呆れたように言ったヴィータ副隊長に、アーウィング執務官がツツコミを入れるように呟く。まあそうですけどね。

「デバイスリミッターも一段階解除するから、後でシャーリーのところにいつてきてね」

「明日からはセカンドモードを基本形にして訓練するからな」

ちなみに、私のデバイス・ロゼットの第二段階はあの拳銃型である。ってことはこれからしばらく射撃系スキルの練習かー、と思った瞬間、私の中を違和感が駆け巡った。

——『明日』? 午後から、じゃなくって?

その疑問に、なのはさんは笑顔だ。

「今日は皆、一日お休みです」

……だ、そうです。

「あら、そういうことだったの」

ミッドチルダ首都・クラナガン。二年前に越してきた「我が家」へ、

私は顔を出していた。事前連絡は30分ほど前という急な帰宅にも関わらず、養母・秋月ミレイは笑顔で私を出迎えてくれる。

「英史さんから書類と、メッセージを預かってるわ。『たまには家に帰ってこい』って」

『24時間勤務だから無理』って言ってるのに……」

顔を出そうにも、伯父・秋月英史は本局の局員——教育隊教官だ。ミッド地上勤めの私と会う機会なんかそうそうない。あの人も分かってると思うんだけど……。

「……でも、深琴ちゃんも変わったわね」

「……そう、でしょうか？」

「ええ。昔に比べて、すっごく可愛くなったもの」

懐かしそうに目を細めて、ミレイ母さんは言う。……可愛い？ 私  
が？

「か、かわ……!?!」

「深琴ちゃん。女の子はね、ちょっとしたことでも可愛くなれるのよ。恋とか、恋とか、恋とか」

「か、母さん、あの、話が見えないんだけど……」

っていうかきっかけが「恋」しかないんだけど。そして一旦自分の世界に入ったこの人は、めったなことでは帰ってこない。

「深琴ちゃんも、もう14歳だもんね。恋の一つや二つや三つや四つはするわよねえ……」

「三つや四つは多くない？」

「私、憧れてたのよー。娘と一緒に買い物して、恋愛相談に乗るのって……英史さんが聞いたらきつと怒るでしょうねえ……そこで颯爽と娘の味方をする私……そして、緊張する娘の恋人に『遠慮せず、お義母さんって呼んでね』とフレンドリーに接する私……うん、母親の鑑ね!」

「わけが分からないよ!」

盛大にツツコミを入れてみたが、母親の意識は戻ってこない。

「じゃあ私、戻るから」

「……それでいて娘夫婦の生活に口出ししない私……適度な距離を保

「つことも母娘には大事だと思うのよね……」

「……もう、放っておこう。荷物と書類を手に、私は家を出た。一旦寮に戻らないと。今頃レオンは既に待ち合わせ場所だろうから。」

「うっそお!？」

一旦戻った私を迎えたのは、スバルとティアナの叫び声だった。何が嘘なのだろう。

「み、深琴ってバイクの免許持ってたの……!？」

「うん。ほら」

と、私は免許証を見せる。一応これでもA級ライセンスだ。ちなみに乗ってきたバイクは自前。ちなみに荷物を置いたらまた家に帰り、駐輪してからレールウェイに移動する。目的がツーリングとかなら別だけど、公共の乗り物で移動する方が楽だしね。

そんなこんなでレールウェイに乗り、サードアベニューへ。改札口を抜けるとすぐに、目的の人物は見つかった。

「ごめん、二人とも。お待たせ」

「あ、深琴！ 久しぶり！」

その片割れ——ルーチェ・バイオレットが、私を抱きしめる。レオンの「うるせえ」という文句も、彼女には聞こえていない。

ルーチェ・バイオレット。私とレオンの同期でチームを組んでた一人。教官志望の現在は武装隊で研修中の、魔導師だ。ちなみに階級は三等空尉。

「それはごつちの台詞よ！ 何よ、レオンのくせにちやっかり六課に居候してきー！」

「仕方ねえだろ上司の意向なんだから！」

「……でも、この間本局の偉い人から怒られたらしいけど。執務官」

曰く、「志望とはいえ研修中の士官学校首席卒業生を連れ回すのは、将来の管理局人事問題につながるから勘弁してくれ」とのことらしい。だからレオンは六課に滞在できて後二、三日。それから本局に(強制)送還となる。

しかも、アーウィング執務官には補佐官がない。本人に言わせる  
と、「凶悪事件担当だから」。補佐官の大部分は魔力なしの局員だか  
ら、凶悪事件をメインに扱う執務官のところには行きたくないし、  
行ってもすぐ異動希望が出るという。話を聞いている時、零さんが「ぎ  
まあー！」と笑っていたのを思い出す。

そんなことを思っていると、ささやき声が聞こえ始めた。

「……ねえ、あの子さ、『秋月深琴』に、似てない？」

「え？ ……あ、ほんと！ 似てる似てる！ っていうか本人じゃな  
い？」

その指摘に、私は被っていた黒のハンチング帽を目深に被り直す。  
伊達眼鏡をかけている今の姿は、お忍びの芸能人みたいだ。

「そうだった。深琴、まだ有名人だもんね」

「とりあえず、どつか適当に店入るぞ」

「了解」

二人の間に入って、私は歩き出す。

『以上、芸能ニュースでした。続いて政治経済——昨日、ミッドチルダ  
管理局、地上中央本部において来年度の予算会議が行われました。当  
日は首都防衛隊の代表、レジアス・ゲイズ中將による、管理局の防衛  
思想に関するの表明も行われました』

アナウンサーの声が、機動六課食堂に響き渡る。部隊長を始め隊長  
陣と協力者である教会騎士団騎士・渡辺零とデイバイン・アーウィン  
グ執務官は、画面に視線を向けた。そこには、一人の男——レジアス・  
ゲイズ中將が映し出されていた。

『魔法と技術の進歩と進化。素晴らしいものではあるが、しかし！  
それがゆえに我々を襲う危機や災害も、10年前とは比べ物にならな  
いほど危険度を増している！ 兵器運用の強化は進化する世界の平  
和を守るためである！』

威厳に満ちた声が響く。

『首都防衛の手は未だ足りん。地上戦力においても我々の要請さえ通

りさえすれば、地上の犯罪も発生率20%、検挙率においては35%以上の増加を初年度から見込むことができる!』

「……このおっさんは、まだこんなこと言ってるのな」

「レジアス中將は古くから武闘派だからな」

呆れたように呟いたヴィータに、シグナムが答えた。

「とはいえ、兵器運用は難しいよな。一応魔法は『安全でクリーンなエネルギー』だし」

「だが全員が使えるものでもない。それに中將も魔力なしのはずだ」

「嫉妬か」

「身も蓋もないことを……」

ドヤ顔で指摘した零は、ふと空間モニターを起動させる。そこには眼鏡をかけ、黒いハンチング帽を目深に被った少女——秋月深琴の姿があった。

それは最近ミッドチルダで流行している情報交流サイト。かつてなのは達がいた世界で言うなら『ソーシャル・ネットワーク・サービス』の一つでもある。この三十分ほどでアクセス数が急激に伸びてるページがあった。

——『元IM世界10位 秋月深琴 発見!』と。アップされた写真と視線があつていないことから、盗撮であることが分かる。

「……あ、なんかやべえことになってる」

そう呟いて、零は立ち上がった。まずは彼女の上司である部隊長に報告してからだ。

「でもさー、深琴も変わったよねー」

言つて、ルーチエはフライドポテトに手を伸ばした。

「やっぱり執務官と会えたから?」

「……さあ?」

首を傾げて、私はパンケーキにフォークを刺す。ブルーベリーのソースがからんで美味しい。

(……でも、零さんが作ったお菓子の方がおいしいかも……)



現在はサードアヴェニューレールウェイからほど近い、駅前のファーストフードショップだ。ひとまずはここで、互いの近況を語り合っている。

「つていうか、そんなに昔と違う?」

「全然違うよ。特にそのヘアピン」

言つて、ルーチエは私の顔を指差した。ヘアピン——調べたら実際の名称は「くちばしピン」であることが判明したそれ——は、サイドの髪を後ろで纏めるのに使っている。

「前はそんなの持つてなかったし、あつても普通のピンだったもん」

「ああ……お兄ちゃんからもらったものだから」

そう言えば、あの再会以来兄を「お兄ちゃん」と呼ぶことに抵抗がなくなつた。同僚たちとのコミュニケーションも……。

と、ロゼットが映像通信を告げた。

「はい。こちらロングアーチ04」

『はい、こちらスターズ3。そっちの休日はどう?』

『ちゃんと楽しんでる?』

スバルとティアナからだつた。

「うん。今、士官学校の友達と一緒に。サードアベニューに」

『そつか。あ、サードアベニューならエリオとキャロも行つてるはずだけど……』

「そうなの? レールウェイでは見かけなかったけど……」

『シャーリーさんがプランを作ってくれたんだつて』

シャーリーお手製外出プラン、と聞いて嫌な予感がするのは私だけだろうか。エリオとキャロのことだから、真面目に取り組んでそうで怖い。

『まあ友達と一緒になら大丈夫か。なんかあつたらすぐ連絡しなさいよ?』

「うん、ありがとう」

『じゃーねー』

通信が切れたことを確認して、私は息を吐く。スバルもティアナも気が利くなあ……。

「……な？」

「まあ年相応な感じはするけど……」

「？」

「なんでもない」

なら、人の顔を見て溜息を吐かないでほしい。そう思いながらも、私はパンケーキに止めの一撃を刺した。

同時刻、一つの問題が発生していたことに気づかないまま。

「っあー！ 深琴、もっかい！」

「……やだよ、めんどくさい」

それから目的のものを購入した私は、レオン、ルーチェの三人でゲーセンに繰り出していった。ちなみに目的はルーチェ曰く、「全ゲームランキング制覇」らしい。現在挑戦しているのは迫りくるゾンビを撃ちまくるシューティングゲームだ。画面にはく Mikoto Rank 1 >との表示。

「ルーチェは諦め悪すぎ」

「深琴が強すぎなの！ つか、クレイゲーム以外全勝ってありえないんですけどー！」

悔しい！ と叫びながら、ルーチェは地団駄を踏む。復習してくる、と筐体に向き合う彼女に溜息を吐きながらも、私は外のベンチに座った。そして鞆からさっき買ったもの——次元通信の端末を取り出した。

メタリックな銀色のそれは、兄が持っていた携帯電話にも似ているデザイン。ちよつと値は張るが、兄のイメージにも合う。それに時空管理局本局が発行している個人端末用次元通信ユニットに対応できる最新型だ。予算オーバーだが、それくらいは許容範囲。

私が伯父・秋月英史から受け取った書類は、そのユニットの取り付け申請に必要なもの。あとは本体と書類を本局に送ればいい。それはルーチェに任せる。

「レオンもごめんね。買い物に付き合わせて」

「気にすんな。……お兄さん、喜ぶといいな」

……ほんとに、そう思う。伯父さんに頼んで、発送と申請、本体は私名義だ。ちなみに通信費は伯父夫婦持ち——こればかりは未成年であることと「妹」であるということから反対された。

一番の問題は現地での妨害だが現地の協力者（零さん談）が、可能な限り手を打つという。本当、あの人は何者なんだろう。そう思った瞬間だった。ロゼットが通信を告げる。しかし先ほどのものとは違う。

「？ キャロから全体通信……？」

いくらなんでも「今、どうしてますか？」なレベルではない。二人に何かあったのだろうか。それとも——。

『こちら、ライトニング4。緊急事態につき、現場状況を報告します。サードアベニューF23の路地裏にて、レリックと思しきケースを発見。ケースを持っていたらしい小さな女の子が一人』

『女の子は意識不明です』

「F23……」

ロゼットが表示した地図を確認する。——よし、そんなに距離は離れてない。走ったら10分程で到着できる。

「ごめん、レオン。行ってくる。ルーチエには適当に……」

「言わせないわよー！」

仁王立ちしたルーチエが叫ぶ。

「あたしだって仮にも時空管理局の局員！ ちゃんと言ってくれたら文句言わないし、武装隊の一員として協力する！ むしろさせて！」

「……本音はそっちなか」

「……いや、お前、それ以前にそこドアの前……」

レオンはともかく、ルーチエは上司の許可取らなくていいんだろうか。そんなことを考えながらも、私たちは現場へと急行した。

## 11：機動六課のある休日（後編）

サードアベニューF23の路地裏。全体通信を受けた私は現場に急行していた。

「深琴さん！」

「ごめん、お待たせ」

「いえ……」

キャロの膝の上で気を失っている少女——いや、「幼女」が正しいか——の身なりは、ずいぶんと酷い。かなり衰弱しているようだ。

「地下水路を通って、かなり長い距離、歩いてきたんだと思います……」

「それと、これ……」

エリオが見せたケースには、長い鎖がついていた。問題はその下。たるんでいる……？

「……ケースは、もう一個あった……？」

『一応探してはいるけど、反応はないんだよね……』

「目視で探したほうが確実か……」

だが現時点でケリユケイオンにも、ロングアーチのシステムにもそんな反応はない。この女の子が地下水路を彷徨っている途中で落とし、そのまま……と考えた方が妥当だ。回収済みの方は既にキャロが封印処理を施しているから、ガジェットが見つける心配はないと思うし。

『ガジェット、来ました！ 地下水路に数機ずつのグループで総数16……20!』

『海上方面、12機単位が5グループ!』

「多いわね……」

なのはさん達を乗せたヘリを見送った直後、ロングアーチから入った報告にティアナは目を細める。

「八神部隊長。私が空に上がったほうが？」

『そやな……いや、深琴は、アヴァンシア捜査官候補と一緒に地下水路を担当や。レリック確保を最優先。もしアンノウンの少年が現れた』

「……」

「情報を引き出し、可能なら無力化して保護……でよろしいでしょうか？」

アンノウンの少年——フェアクレールトの詳細は未だ不明のまま。違法魔導師として管理局に記録もないし、そもそも魔導師登録すらあるはずもなかった。そしてローゼンクランツとほぼ同型のグェバイス。どこからデータが漏れたのか……そうでなくとも話すことは多い。

『ただし、あくまでもこちらの目的はレリックの確保や。それに今回は、深琴のリミッター解除は極力行わなへんつもりや』

「あの、八神二佐。私も参加してよろしいでしょうか？」

成り行きを見守っていたルーチェは、よりにもよってそんな発言をした。

「二人が関わってるのに私だけ除け者は嫌だし……まだ小さな女の子がこんな目に遭ってるのに放っておけないよ」

『……分かった。ルーチェ・バイオレット三尉、協力感谢您的します』

うおーい、認められちゃったよ。レオンはともかく、ルーチェはAMF戦は初めてのはずなんだけど……いいのかな。

「……指導要領の変更があつてさ」

「うん」

「それにAMFとか特殊フィールド戦についてもあつたのよ。今研修の真つ最中」

「……お疲れ」

……そういえば六課に入る前、伯父さんがそれについて愚痴つてたような気がする。

「レオンは？ AMF戦の経験」

「六課のシミュレーターなら何度か」

「ん、了解」

レオンもルーチェも、二人揃ってミッドチルダ式の魔導師だ。その上板にも、第一士官学校の首席チームの一員。シミュレーターの経験さえあれば、すぐ慣れるだろう。

「じゃあこっちは私たち三人でいいね？」

「ああ」

「首席チームの実力、見せてあげる！」

「馬鹿、張り合っただろうする」

もはや漫才のノリだ。懐かしいんだけど、ちよつとは自重してほしい。同僚の前なんですけど。ちなみにポジションは私がフロントアタッカー、ルーチエがガードウイング、レオンがセンターガード。今回は場所が狭い水路ということもあり、隊列は反対になる。目指すのはF94区画。途中でスバルのお姉さん、ギンガ・ナカジマ捜査官と合流する予定だ。

……なんだけど、私たちは突入して数分も経たないうちにガジェットI型と遭遇していた。

「ロゼット！」

《Blitz Action》

先頭へ躍り出て、敵の攻撃を引きつける。二人には絶対に近づけさせない。六課の、フォワードの一員として——何より大切な友人を、傷つけさせはしない！

「一気に蹴散らすよ！」

《All right!》



「へえ、こんなに動けるんだね、この子たち」

モニターに送られてくる映像を見て、フェアクレールトは微笑んだ。

「それに深琴も……今までより全然いいね」

もつとも、そうでなければ面白くない。あの淡紅を潰すのは自分だ。

でも、とフェアクレールトは唇を尖らせる。その視線は、狭い地下水路を縦横無尽に駆け巡る深琴に注がれていた。——やはり、彼女にあんな場所は似合わない。初めて会ったときと同じ、青い空の下が一番似合う。

だが、空には『彼』のおもちゃと自慢の『娘』がいる。へりに奪われたケースとマテリアルの確保が目的とはいえ、交戦は避けられないだろう。それを考えれば幸福と言えるだろうか……。

「あつちにはルールがいるしなあ……それもそれで面倒だし……」  
探し物の回収を任せたいがいいが、深琴が地下へ行つたのなら意味がない。てつきり彼女は空に上がるものだと思っていたのだが……。

「……もしかして、なんか理由があるのかな……」

思えば二度目の戦いだって、初めての時と違っていた。動きのキレや魔法の出力が弱弱しかったような感覚を、フェアクレールトは思いつく。

そしてそれが、彼女の意思ではどうしようもないものだとしたら……ああ、非常に腹立たしい。上から権力で押しこめる管理局の傲慢にも、押し込められる深琴自身の弱さにも。

「……行こうか、アインザッツ」

その言葉に、アインザッツは無言で深紅色の宝石を輝かせた。

◇

「しっかし、よく動くよな」

モニター越しに先行組の様子をうかがっていた零が、呟いた。

機動六課フォワードチーム、協力者三名の突入から遅れること数十分。空でなのは、フェイト、ヴィータ、リインフォースⅡの戦闘が始まった頃、渡辺零とデイバイン・アーウィングもまた地下水路に突入していた。それぞれ愛機と騎士甲冑、防護服を展開して臨戦態勢ではあるが——いかんせん、先行組がガジェットのひとつを叩いたせいで意味がなかった。水路のあちこちにガジェットⅠ型の残骸が虚しく晒されている。

「はやてが選んで、なのはの教導を受けている連中だ。これくらい出来なくては意味がないだろう」

同じくモニターに視線を遣りながら、デイバインが冷静に言った。

例外の三名——ギンガ・ナカジマはシューティングアーツをスバル

に教えた師であるから別として——レオン・アヴァンシアとルーチエ・バイオレットはフロントアタッカーを務める深琴のアシストか、彼女からフィールド貫通効果を与える補助魔法を受けたのは最初の数機のみ。以降は自分なりの戦い方を見つけたようで、深琴の援護なしでも戦えていた。

一方六課フォワード陣は訓練と出動で培った戦法や経験を存分に生かし、危なげなく戦えていた。AMF戦の経験がほとんどない二人をアシストせざるを得ない深琴も、愛機の形態を左右別のものにし、状況を判断して自身の攻撃、二人のアシストと『ポジションフリー』の看板に偽りない活躍をしている。

「おい、そこに俺を入れておけ。一応俺も教えてるぞ」

「お前は深琴限定だろうが。しかも個別スキルと銘打っておきながら常に全力戦闘を仕掛けているのはどこの誰だ」

「仕方ないだろー。深琴の戦い方は特殊だし」

言って、零はデイバインから視線を逸らした。

「教える前からそうだけど、深琴って危なっかしいんだよ」

「それは知っている」

だからこそデイバインは、一度は彼女に厳しく当たり、魔導師を辞めさせようとしたのだ。——結局彼女の頑固さに折れ、今では可能な限り傍で見守るようになっていた。

そして零はデイバインの心情を知っている「友人」の一人だ。

「いや……多分、お前が思ってる以上に。あれはやばい。いつか壊れる」

「……どういうことだ?」

零の脳裏に、初めて彼女と会った——初めての個人スキル訓練当日の光景が過る。そして彼女が見せた——曰く「練習中」の魔法。まだ14歳という心も、体も成長しきってない彼女には、あまりにも危険すぎるそれを、零は告げた。

「集束砲だど?」  
[ブレイカー]

それを聞いたデイバインは眉を顰める。

「……待て、それなら一度使っている。俺の目の前で、あいつは……」



「いや、そつちじゃない。あれは深琴が、自分なりに考えた『安全なバージョンだ』」

それでも危険なことに変わりはないんだけどな、と零は呟く。

「あいつが練習していた方はただでさえ危険なうえに、さらに体に負担を強いることで威力を倍増させた『一閃必倒』の『集束系魔法』。しかもあいつは今よりも前に、それを使っている」

今よりも前——ただでさえ魔導師歴が浅い深琴にとって、その言葉が示すものは一つしかない。

「まさか、インターミドルか!？」

「そのまさかだよ。世界本戦で、な。……映像データが残ってたのは奇跡的だったよ、あれは」

まだ11歳になつて間もない少女が、負けたくないとの一心で使用したその技。会場周囲に非常警戒警報が出された程の魔力値を——しかもその半分以上を自分の魔力で補った一撃は、彼女の体にも深刻なダメージを与えた。

「しかも深琴は、一度スイッチが入ったら余程のことがない限り止まらないタイプだ。余裕もなくなる。もしかたあのアンノウンが現れたら——今度は確実に、その技を出す」

そしてリミッターがかかっている現在、彼女は三年前以上のダメージを受けるだろうことも簡単に予想できる。

「……どうしてあいつは、いつも……」

呟いたデイバインが、唇を噛んだ。その様子を横目で見ていた零は、「もう一つ」と口を開いた。

「例のアンノウンについてだ。過去二戦のデータをロゼットが取っていたんだが……魔法術式が、深琴に酷似しているらしい」

新しく開かれたモニターに、深琴とアンノウンの少年のデータが表示される。魔力傾向を映し出すと、デイバインの青い目が細められた。『特殊型近代ベルカ式ミッドチルダ混合ハイブリッド』と命名されたそこには、深琴の魔力資質が詳細に記されている。

——『近代ベルカ式』にしては純粹魔力の放出が得意で、『ミッドチルダ式』にしては近接系魔法や格闘技法を得意としている。

それは深琴が自らを語った際の一言だ。その言葉に偽りが無いことを、グラフが証明していた。

「まさかとは思うが、あいつ……深琴は『古代ベルカ式』と何らかの関係があるんじゃないか？」

デイバインのその言葉に、零は肩を竦める。

「まさか、そんなわけないだろ……と言いたい所だが、念のため聞いておこう。『その心は？』」

そして語られた推測に、零はそつと瞳を伏せた。しかしそれも一瞬のことで、すぐにどこか意地の悪い笑みを浮かべる。

「何だかんだ言いつつも、深琴のことちゃんと見てるんだな。お前は」  
「付き合いは長いからな。当然だ」

「……いや、そこ普通に返されると困るんだけど……」

照れる云々より以前になー、と零は乾いた笑いを響かせた。

「黙れ。——急ぐぞ」

「な、ちよ、待ってって！ 俺が飛行魔法苦手だって知ってるだろ待てやゴラア！」

◇

サードアベニュー地下水路、F94区画。到着した私たちは、手分けしてケースを探していた……はずだった。

現れたのは、ホテル・アグスタで遭遇した召喚獣と、エリオやキヤロと変わらない年頃の女の子。そしてその女の子はケースを手に、歩き出した。幻術で隠れていたティアナがダガーモードの刃先で脅すも、効果はないらしい。

「知ってるもんね。そうでしょ？ 『ルールー』」

「……わたしのこと、知ってるの？」

「ええ。名前だけだけど……その召喚獣は、確か『ガリユー』っていったっけ」

「……そう」

小さく、頷く。それを見て、私は笑顔で銃型のロゼットを構えた。

「……でも、あなたのことは知らないの。教えてもらえる？」

銃口の先には、リイン曹長と変わらない背丈の少女がいた。

「いいぜ、教えてやるよ」

色とりどりの花火をバックに、少女は笑った。

『烈火の剣精』アギト様だ！——お前らまとめてかかってこいやあ！」

うん、そういう姿勢は嫌いじゃないんだけど——この状況では。

自然と、ロゼットを握る手に力がこもった。

《Hoop Bind.》

淡紅色のリングがルーラーを縛り上げる。落ちたケースは着地する寸前でレオンからルーチェに渡り、後方に下がった彼女が簡易的な封印処理を施した。

「……ねえ、レオン。今の状況つてさ、『公務執行妨害』で通る？ ついでにちよこつと破壊しても問題ないよね」

「あ、ああ。通るだろうけど……いや待て、破壊はやめろ。頼むから」  
「なるべく努力する」

ロゼットをダガーモードに変形させ、右手のロゼットの銃口を向けた。周辺に魔力弾を生成させる。

「お望み通り、かかっていってあげる。——遠慮も容赦もしないから、そのつもりで」

言って、私はカチリ、とセーフティを解除した。

## 12：ナンバーズ

ルーチェがケースを手にした瞬間、炎が舞った。自身を『烈火の劍精』と称した彼女・アギトは恐らくリイン曹長と同じ——古代ベルカ式の融合騎なのだろう。

だが、今はそんなことどうだっていい。

「ティア、どうする？」

「任務はあくまで、ケースの確保よ。撤退しながら時間を稼ぐ」

ガリユーに吹き飛ばされたキャロはまだ気を失ったまま。ルーチェが簡易的な封印をかけたが、完全な封印処理には敵わない。フォワードの中で最も速く、かつ確実に封印処理を行えるのはキャロだけだ。

なら私たちにできることは、キャロが目覚めるまでの時間を稼ぎ、かつ封印処理を行えるだけの安全圏を作り出すこと——それだけだ。

「そう上手くいくと思う？」

聞き慣れた声が響いた。同時にティアナを、背後から深紅色の短剣が襲う。

《Tri Shield》

淡紅色の盾が、刃先を噛んだ。

「久しぶりだね、深琴」

言って、少年はその赤い目を細める。

「ええ。フェアクレールト」

盾を解除し、ロゼットは変形した。右手をショートソード、左手を銃型のダガーモードで構える。

そして私たちは、互いに斬り合う。

『『フェア』でいいよ。みんなそう呼ぶし』

「……少しくらい、真面目にやってもらえる？」

「嫌」

笑って、フェアクレールトは後ろへ飛ぶ。そのままデバイス——確か『アインザッツ』と言ったつけ——をロゼット同様フォルム・ドライへと変形させた。

(あれ、深琴と同じ……!?)

(彼が例のアンノウンってことね……)

「……こいつの相手は私がする。ヴィータ副隊長とリイン曹長が合流できるまで、召喚師連中を頼んでいい?」

私一人で勝てる相手じゃないけど、みんなを危険に晒すよりいい。最優先はレリックの確保だ。幸いにも副隊長とリイン曹長の魔力反応はすぐ上から確認できる。そして別ルートから、また二つの魔力反応が確認された。味方は多い。大丈夫。

「付き合ってあげてもいいよ。今日は僕も暇だし」

「……そう……」

満面の笑顔に、腹が立つ。——なら、ちょうどいい。うげっ、とレオン、ルーチエが身を引いた。

「生憎、何度もしてやられて大人しくできるほど、私って人間出来てないんだよね……」

足元で、淡紅色のベルカ式魔法陣が輝いた。——今日ばかりは逃がさない。

「徹底的にぶっ潰す!」

《All right!》

心なしか、ロゼットもノリノリで反応してくれたような気がした。そうこなくつつちゃ、とフェアは微笑む。

「ルールー、アギト、ガリユー。邪魔しないでね」

「……わかった」

ルールーと呼ばれた少女が頷いた瞬間、天井の一部が崩壊した。

「捕らえよ、凍てつく足枷!」

リイン曹長が氷の足枷を召喚してルールーとアギトを拘束し、

「ぶっ飛べー!」

煙の中から飛び出してきたヴィータ副隊長はグラーフアイゼンでガリユーをなぎ倒した。

「……ねえ、深琴。場所変えない?」

その光景を横目で見ながら斬り合うこと数回。フェアクレールトは提案した。

「ここ、狭い上に人が多いしき。どう?」

(行つてこい、深琴)

逡巡する私の背を、ヴィータ副隊長が押す。

(よろしいでしょうか?)

(うん、大丈夫だよ)

(いつでも援護できるから)

地上にいるのはさんとフェイトさんから言われたら、上がらないわけにはいかない。

「アインザッツ」

「ロゼット!」

《《Drive ignition》》

所有者の呼びかけに、互いの愛機は同時に答えた。飛行魔法を展開して、ヴィータ副隊長が作った穴から地上へと向かう。

飛び出した先は人気のない、寂れた場所——第八臨海空港近隣の、廃棄都市区画だった。

廃棄都市区画。私がここを訪れるのは今回で三度目。一度目はまだここが廃棄都市になる前に。二度目は魔導師ランク試験に。そして三度目の今日——思い返せばここは私の原点でもあるためか、全てにおいて「魔法」に縁があった。

憧れと目標を見つけた場所。私を見つけてくれた場所。そして今、私はここで戦っている。

「前々から気になってたんだけど、目的は何!?!」

「別に、特にないよ」

そうあっさり言われても、困るのだけど。

「レリックに関しては、ドクターに頼まれてるんだ。ドクターにはお世話になってるから」

「ドクターって……ジエイル・スカリエッティのこと?」

「そ。一応恩人なんだ」

そんな誇らしげに言われても、困惑しか生まれない。

「そうそう、ドクターが言ってたよ。『よかったら一度、遊びにおいて』って」

「……馬鹿にされてるの……?」

どう見ても敵対関係にある人間を「遊びにおいで」と誘う神経が分からない。しかしフェアは唇を尖らせて「まさか」と口を開いた。

「ドクターがそんなこと思うわけないじゃん。君もある意味では、僕たちと『同じ』なんだから」

「何よ、それ……」

同じ、って何が。問いたただそうとした瞬間、突然地面が揺れた。

見れば黒い——カブトムシを巨大化したような謎の——生き物が、電撃と共にその重量で地面を押し潰そうとしていた。モニターで表示するまでもない。あの場所——地下にはまだ、みんなが——!

「っ、させるかああああー!」

跳躍し、召喚師——ルールーを背後から狙う。しかし追ってきたフェアに妨害された。

「邪魔しないでって言ったよね、ルールー」

「……邪魔、してない」

桜色の魔力弾が援護に入り、私たちは再び距離を取る。虫は未だに地面を押し潰そうとはりきっていた。

「——深琴、聞こえる!?!」

(ティアナ! うん、聞こえてるよ)

足を止め、視線はフェアに固定する。同時に聴覚はティアナからの念話を拾うのに神経を磨り減らしていた。向こうから聞こえるのは、天井が崩れ落ちる音。

(こっちはちゃんと脱出するから心配しないで。それと、キャロが目覚めました。レリックは封印処理と、私が幻術を加えておいたから……)

(……心配しないで、自分の戦いに集中する)

(そ。脱出したらすぐ零さんとアーウィング執務官に、そっちに行ってもらおうから……気を付けて)

(……うん。ありがと、ティアナ)

念話が切れると同時に、地面は陥落する。その光景を見て、フェアは肩を竦めた。そして一気に距離を詰め、私を瓦礫の際まで追い込

む。首筋で交差するように、ショートソードを瓦礫へと突き刺した。「面白いものが見えるよ。ほら」

笑って示された方角。その空の下には——機動六課のヘリと、ヘリを狙ったエネルギー砲の一撃。誰もが息を呑んでその光景を目にした。

そして逃げ場のないヘリの胴体に、砲撃は着弾する。

「ヴァイス陸曹！ シャマル先生！」

「ディエチもクアットロも、派手だよねー。ケースとマテリアル無事かなー？」

間延びした声で言ったフェアを、私は睨みつけた。涙が滲んで、視界が揺れる。

爆煙が晴れ、同時に見えたのは——無傷のヘリと、ワンピースにも似た防護服を纏った、なのはさんの姿だった。

『スターズ2とロングアーチ04、そしてロングアーチへ』

ノイズの向こうから、なのはさんの声が響く。

『こちらスターズ1。ギリギリセーフでヘリの防御、成功！』

『市街地での危険魔法使用、及び殺人未遂の現行犯で、逮捕します！』

《Enchant Defence Gain》

なのはさん、フェイトさんの通信と同時に、ロゼットが補助魔法を発動させた。刃が当たるすれすれの首筋にバリアを張ると同時に、カナリア色の魔力弾と露草色の魔力砲がフェアの背後に現れた。深紅色の盾で防ぎ、フェアは私の首筋に当てていたショートソードを引き抜く。

その場から離れ、ルーチエとレオンと合流した私は重心を落として構えた。一方のフェアは不機嫌そうな目でこちらを見ている。

「……邪魔だ、って言ってるのになあ……どうしたら良いんだろうね？」

「……深琴、下がってる」

言って、レオンとルーチエが前に出た。その様子に、更に機嫌を降下させたフェアは次の瞬間、笑顔を浮かべた。

「捨てられた人間同士、仲良くしたいだけなのにな？」



「捨てられたって……深琴が？」

「反応するな、ルーチェ。六課のフォワードが合流するまで、俺たちでもたすぞ」

捨てられた、ってまさか。デバイスを構えたレオンとルーチェに構うことなく、フェアは笑顔とは裏腹に無感動の声を、響かせる。

『あなたの母になった覚えはない』

言葉と同時に、母の顔が過る。最後に見た冷たい表情で。

『私から、あなたみたいなの化け物が産まれるはずないもの』

「……嫌……嫌……」

「深琴、聞いちゃ駄目！」

記憶の中の母とフェアが同じ言葉を紡ぐ。やだ、聞きたくない。二人に、みんなに、あの人に聞かれたくない——！

『あなたなんか、産まなければよかった』

『言うなああああああああ！』

突撃し、フェアの首へと腕を伸ばす。触れるか触れないかの瞬間、深紅色の砲撃が直撃した。

(あ、やばい……)

意識が、飛ぶ。何も見えなくて、何も聞こえない。同時に視界の端でケースが奪われたこと、誰が奪ったのかを確認することすらできない。

けれど。

《buddy!》

「——深琴っ！」

——けれど、その声だけは、初めて名前を呼んでくれたその声だけは聞き取れた。体を振じって、右足を跳ね上げる。同時にダガーモードに移行したロゼットの魔力刃を叩きつけた。もう片方のロゼットは銃のまま、カートリッジを搭載していたマガジンに残っていた残弾八発、全てロードした。そのまま私の両手を、深紅色の鎖が縛り付ける。

「ロゼットー！」

《Form zwei.》

ロゼットが腕輪型へと変形した。同時に『繋がれぬ拳』でバインドを砕く。

「ちよ、嘘でしょ……?」

「生憎、笑えない冗談は嫌いな……!」

「っ!? やめろ、深琴!」

バインドを仕返し、周辺全域の魔力をかき集める。それでも足りない分は、自分の魔力で補う。何をしようとするのか察知した零さんが、悲鳴混じりの声をあげる。

「……ごめん、ロゼット。かなり無茶するけど、付き合ってくれる?」  
《Any way to me, please.》私に構わず。どうぞ!」

……ああ、なんてできた相棒なんだろう。自分の弱さに、不甲斐なさに涙すらでてこない。

「一閃必倒……っ!」

零さん、ごめんなさい。『約束』、破ります。

周辺の残存魔力と私自身の魔力が集束し、私の右腕を覆った。同時にフェアとの距離を詰める。

「……『剣閃・桜華』っ!」

淡紅色の集束砲が、ゼロレンジで爆発する。

——『剣閃・桜花』。私が持つ中で最強の威力を誇る集束系魔法。反動を相殺するため、防護服の外装が弾け飛ぶ。アンダースーツにも相応のダメージが入った。だが——手ごたえは、あった。

「深琴、容赦ないよね……」

息も絶え絶えな様子で、けれどまだ余裕があるような口ぶりで、フェアは言う。しかし彼の防護服も、私と似たような状況だった。距離を離し、様子を確認する。

「でも、こうでなくちゃね……!」

「っ!」

視界が歪む。けれどここで逃がすわけにはいかないし、倒れるわけにもいかない。加速し、接近してきたフェアがショートソードを振りかざす。でもなぜか、体は動かない。

動かなきゃ。でないとは私は死ぬ。——なのに、体は動かない。

思わず目を瞑った瞬間、刃がぶつかる音が響いた。恐る恐る見開いた視界には、黒い防護服を纏った背中が映っていた。銀の髪が揺れる。

「また、邪魔する気？」

「ああ。何度でも、なっ！」

勢いで弾き返した先には、黒い笑みを浮かべた零さんが刀に手をかけていた。

「とりあえず、いつペン死んでみる。な？」

「いや、普通断るし」

冗談混じりの口調で答えたフェアは、零さんの斬撃を捌ききった。同時に地面から人の手が伸びる。

「うっわー。フェア様ぼろぼろじゃん」

「……セイン、うるさい。あと遅い」

大丈夫ー？ と軽い口調で問うのは、水色の髪をした少女。セインと呼ばれた彼女がフェアの体を抱きかかえ、そのまま地面へと潜る——  
うって、え？

「……逃がしたか」

「まあ仕方ないだろ。全員無事なんだし……いや、一人例外がいたな」  
言つて、零さんは私を見た。その視線を、見つめ返すことができない。

「まあ言いたいことは山ほどあるが、ひとまず治療だな。キャロ、頼んでいいか？」

「あ、はい！」

「いえ、大丈夫です……自分で何とか……！」

「あ、馬鹿、動くな！」

立ち上がった瞬間、右腕を発端に全身に激痛が走る。よろけて、その場に座り込んだ。

「いつ……！」

右腕が動かない。打撲と骨折、発射の反動で受けた軽度の脳震盪——  
クラッシュエミュレートで慣れたはずの痛みは、耐えがたいもの

だった。

「つの馬鹿！ 少しは自分の体を考えろ！」

「あ、あの、アーウィング執務官、治療は私が……！」

キヤロを押しつけて、執務官は私のすぐ傍で膝をついた。その顔には怒りしか見えない。

《Physical Heal.》

銀色の魔力光が、右腕を包み込む。執務官から視線を感じるが、目を合わせることができない。先ほどの言葉は全部聞かれていたようだ。レリックを奪われ、一味は取り逃がして——散々な状況にも関わらず、みんなが私に気遣わしげな視線を向けているのが分かる。

「……深琴」

執務官に溜息混じりに名前を呼ばれ、私は反射的に身を竦めた。ごめんなさい、と呟くようにしか答えられない。何に対して？ ——全部に対してだ。

母から最後に贈られた言葉は、いまだに残っている。レオンにも、ルーチェにも、伯父や伯母にさえ話したことはないそれが、こうもあつさり暴かれるなんて。

怪我をしてごめんなさい。無茶をしてごめんなさい。言うことを聞かなくてごめんなさい。——生まれてきて、ごめんなさい。

そう呟いた瞬間、私の体は抱きしめられていた。誰に？ 決まっている、執務官にだ。

視界一杯に、黒が広がる。

「ひとまず泣き止め。……誰も、お前が『産まれてこなければよかった』なんて思っていない」

「……でも……」

誰もそう思っていないなんて、わからないじゃないですか。

そう反論しようとした次の瞬間、体に回された腕に力が込められた。そして執務官は、私の耳元で囁く。

「そんなこと、俺が言わせない。絶対に、誰にも」

声音も、腕の力も、あの日と何も変わっていない。何一つ変わらないう優しさに、私は声を上げて泣き出した。

そして私が落ち着きを取り戻した頃。

「ケースは、シルエットではなく、本物でした」

奪われたレリックに施した「仕掛け」を、フオワード陣は説明していた。ちなみにこれは隊長、副隊長は知らない私たち現場の独断である。……まあ私も、念話で参加した程度なんだけど。

「私のシルエットって衝撃に弱いんで、奪われた時点でばれちゃいますから……」

「なのでケースを開封して、レリック本体に直接嚴重封印をかけて……」

「その中身は……」

キャロの帽子の中から、ヘアバンドにも似た形の、花が咲いた髪飾りが出てきた。

「こんな感じで」

ティアナが指を鳴らす。ヘアバンドが元の——レリックへと姿を戻した。

「敵との直接接触が一番少ない、キャロに持ってもらおうって」

「帽子もありますし、見た目のシルエット次第では簡単にばれないんじゃないかなーって」

「なるほどおー！」

感心しきり、といったリイン曹長とは正反対に、ヴィータ副隊長は乾いた笑い声を上げていた。



それから数日後の夜。一日の訓練を終え、ふらふらになりながらも寮に戻った頃、そのメールは届いた。差出人は秋月静真。……端末、届いたんだ。

『端末、ありがとな。すっげー嬉しい』

その言葉から始まったメールは、兄の学校で最近あったことが中心

に書かれていた。添付されていた画像は、兄と彼方さん、秋葉さんのスリーショット。気を利かせたロゼットが、メールソフトを立ち上げる。

その日から、私の日課に「兄へのメール送信」と「添付するための写真撮影」が加わった。

### 13：命の理由

「行っちゃやだあああああ！」

——その日、機動六課には幼女の泣き声が響き渡っていた。エースオブエースが勝てない最強の敵との遭遇である。……とは、言い過ぎか。

初めての休暇にして廃棄都市区画、そして市街地上空での戦闘行為から早二日ほど。

「臨時査察って、機動六課に？」

機動六課部隊長室で、フェイトさんは八神部隊長の言葉を繰り返した。

「うん……地上本部に、そういう動きがあるみたいなんよ……」

「地上本部の査察は、かなり厳しいって……」

「うう……うちはただでさえツツコミどころ満載の部隊やしな……」

満載どころか、むしろツツコミどころしかない、と思うのは私だけだろうか。

オーバーS、ニアSランクの隊長・副隊長。しかもなのはさんもフェイトさんもそれぞれ本局次元航行部と教導隊からの出向扱い。八神部隊長の『身内』を除いた隊員は全員が新人扱い。そして——一年間という運用期間の限定。関西出身でなくても、思わずツツコミを入れたくなる。一応地球、日本は関西圏出身である私は、部隊員という立場でなかったら即ツツコミを入れている自信があった。

「ねえ、これ、査察対策にも関係してくるんだけど……六課設立の本当の理由、そろそろ聞いてもいいかな？」

「……そやね。まあ、ええタイミングかな。今日、これから聖王教会本部、カリムのところに報告に行くんよ。クロノ君も来る」

「クロノも？」

クロノ・ハラオウン提督。機動六課の後見人の一人であり、フェイトさんの義理のお兄さんだ。次元航行部隊の所属で、私が卒業した第

一士官学校の卒業生でもある。

「なのはちゃんと一緒に、付いてきてくれるかな？　そこで、まとめて話すから……深琴も、私の補佐つてことで同行してもらおうし」

「うん。……そういえば深琴は、クロノ提督とお会いするのは初めてだっけ？」

「直接お会いしたことは、ありません。遠目にお見かけしたことは何度か……」

「昨日の今日やからしんどいとは思うけど……気分転換にええと思つてな。北部はこことまた違つてええとこやし」

気遣わしげな視線を私に向けて、八神部隊長は言った。

ちなみに私を八神部隊長に紹介したのは、クロノ提督らしい。地球での私の経歴——入院のことや、発作のこと、そしてそれらとロストロギア事件の関連性についても調べたとか。

——と、モニターから盛大な泣き声が聞こえてきた

◇

そして今、私は八神部隊長、フェイトさんと一緒になのはさん、フェイトさんの自室に来ていた。ここでは泣きやまない女の子に困惑しているなのはさんとフォワード達がいる。

先の戦闘で保護された『レリックのケースを持った女の子』——名前は、『ヴィヴィオ』。

泣きやまないヴィヴィオは、なのはさんの足に縋りついている。年齢は五、六歳くらいだと聞いている……やっぱ寂しいものなのか、と考え込む。

ヴィヴィオの泣き声が止んで、同時に足元から熱を感じるまでは。

「……う？」

「……………」

見れば、私の足元にヴィヴィオがいた。なのはさんにしてたようにギョツと、スカート裾を握りしめている。真紅と翡翠の瞳には、



まだ涙が残っていた。思わず一步下がろうとしたが、その瞬間ヴィオの顔が歪む。

「行っちゃだあ……」

(深琴も、懐かれたみたいだね)

お揃いだ、となのはさんは笑っていた。いやいやいや、懐かれたつて、なんで!?

「ありがとね、ヴィヴィオ。ちよつとお出かけしてくるだけだから」

『深琴お姉ちゃん』と一緒に、お留守番してくれるかな?」

「ええっ!？」

「……うん」

フェイトさんの手から兎を受け取ったヴィヴィオは、空いていた手で、いまだに私のスカートを掴んでいる。

(ごめん、深琴。あとは頼むな)

(あんたの分の書類は引き受けるから、あとよろしく)

(え、あ……)

とんとん拍子で決まっていくな話に、水を差せるほど私に度胸はなくて。

「了解です……」

内心でこれでもかと涙を流しながら、私は敬礼していた。



さて、それからどれくらいの間が経つただろう。現在場所はなのはさん、フェイトさんの私室。部屋には私とヴィヴィオの二人きり——とはいえエリオとキャロがちよくちよく様子を見に来てくれるけれど。

そして、今。

「……や」

私の背後に隠れたヴィヴィオは、小さくもよく通る声で執務官の要請——曰く、私を少し貸してくれ——を断った。零さんはそんな執務官を指差して笑っている。そして「よく見てろ」と言わんばかりに、零

さんはしゃがんで、ヴィヴィオに視線を合わせた。

「ほら、ヴィヴィオ。お菓子あるぞー。これやるから、お姉ちゃんをちよつと貸してくれるか?」

「やっー!」

間髪いれず、ヴィヴィオは即答した。……っていうか零さん、お菓子で釣るのはやめましようよ……。

「おかしいな……幼女って、お菓子くれる人は無条件にいい人扱いになるんじゃないのか?」

「嫌ですよ、そんな人。ただの誘拐犯じゃないですか」

「いや、俺の知り合いが昔こうして幼女を釣ってたんだが」

「おまわりさんこつちです!」

「お前、最近キャラぶれてねえ? 『真面目で大人しい後輩キャラ』はどこいった」

「最初からそんなキャラ作ってないですから! というかキャラ言わないでください!」

全力でツツコミを入れる。というかほんとやだこの人。ぜーはーと肩で息をしていると、零さんは「まあそんなことは置いといて」と話を戻しやがった。

「はやてに頼まれたんだよ。定期的に様子見てくれってな」

「……もうそろそろ限界だと思っただけ」

「……ありがとうございます」

まさにその通りでした。そしてできることなら変わってほしいです。

「それは無理」

……ですよね。うん、分かっていた。私を見上げるヴィヴィオが眉を顰めている。やばい、泣かれる。

そう思った瞬間、執務官はヴィヴィオを抱き上げた。一気に急上昇した視界に喜んだのか、ヴィヴィオは笑っている。すごーい……。

「深琴、ロゼットを借りてもいいか?」

「あ、はい。大丈夫ですけど……」

私からロゼットを受け取った零さんは、満面の笑みで地を這うよう

な低い声を出した。

「前に言ったよな? 『剣閃・桜華』は使えないようにしとけ、使いそうになつたら全力で阻止しろつてなあ……?」

「I, m sorry. I forgot careless sly. 『すいません。ついうっかり』」

「何が『ついうっかり』だよ! お前仮にもインテリ型だろうが!」

なんだよそのレイジングハートの思考! と零さんが叫ぶ。

(……まあ、仕方ないんだけどね……)

あの技は、ほんとは伯父にも禁止されている。多分あの時あれを使わなかったら、インターミドルで、もう少し上位のランクに食い込んでいたかもしれない——とは言い過ぎかもしれないけど、それだけの力を、あの技は持っている。

きつとあれが完成した時、そのダメージは計り知れないものになるだろう。

「……おねーちゃん……」

執務官の腕の中で、ヴィヴィオが私を見つめていた。……あれ?もしかして、怯えてる?

え、どうして? 困惑していると、溜息を吐いた執務官が人差し指で私の眉間を突いた。

「……皺、寄ってるぞ」

「あつ……」

気づかないうちに眉間に皺を寄せていたみたいだ。ヴィヴィオには「自分が睨まれている」と思わせたのだろう。……反省しないと。

「ごめんね、ヴィヴィオ。ちよつと考え事してただけだから」

「ほんと……?」

「うん、本当」

につこりと笑ってみせると、安心したらしいヴィヴィオも笑った。そういえば彼女の笑顔は初めて見る。

「……なにこの夫婦……」

そんなことを思っていたせいか、零さんの眩きには気づかなかつた。



「遺伝子調整……ですか？」

それは昨日、隊長達とリイン曹長、シヤマル先生、ザファイラが集まっていた会議室。私は到着早々に掛けられた言葉を繰り返した。

「ええ……」

頷いて、シヤマル先生は二つの遺伝子データを表示させる。一つは私、もう一つは私の伯父・秋月英史のものだ。実父の遺伝子だとか僅かな差異はあれど、二つはよく似通っている。

「より正しく言えば、『遺伝子調整された形跡がある』なんだけどね」  
言つて、シヤマル先生はデータを切り替えた。伯父のものから、兄・静真の遺伝子データを表示させる。そして三つを並べ、一部の情報を拡大させた。個人の魔力資質に関わるそのデータに、シヤマル先生を除く全員が息を呑む。

「そんな……これって……」

「あり得るのか……？」

そこに表示されたのは、私と伯父、そして兄の魔法術式。古代ベルカ式を根底に、独立したミッドチルダ式、混合部分の近代ベルカ式の三つで構成されているという事実。それぞれの比重は異なれど、その基本は三人共通かつ、完全一致しているというものだった。

そしてそれは、伯父より兄、兄より私の順で段々と濃く、強くなっていた。

「もちろん、まずあり得ない。こんな……まるで、『魔導師にするためだけに』子孫と、その資質を残すなんてこと……」

「確か秋月教官って、高校生くらいまでは普通の生活を送ってたんだよね。静真君も、この年まで何もなかったってことは……」

「代を重ねる毎に——血が続けば続く程、魔導師の血を濃くするため  
の遺伝子調整……」

シヤマル先生の言葉にフェイトさんが続き、私が口を開く。

確かに衝撃は大きかった。けれども、頭のどこかでは「やっぱりそ

うか」と納得する自分がいる。そして私は右手で、そつと下腹部に触れた。先天的な病気で子供を生むことができない伯母と伯父の間に子供はいない。

もし将来、私が誰かの子供を授かったとして、その子供はどうなるのだろう。

そして母さんは、この事を知っているのだろうか。それだけを、考えていた。

◇

そして日は暮れ、なのはさんたちが帰ってきて。ようやく解放された私は寮の裏庭——いつもの自主練スペースにいた。纏うのは、訓練用のジャージ。前回の反省を活かした結果だ。

深く息を吸って、吐く。閉じていた目を開き、ショートソード型に展開させたロゼットを振るう。右腕の痛みもない。

試しに右の拳を握って、そのまま勢いよく突き出す。後退して右足を跳ね上げ、再び前進。そしてまた拳を前へ。こちらも問題ない。

「あんまり、張り切り過ぎるなよ」

「アーウィング執務官」

その言葉と共に現れた執務官は、少し不機嫌そうだった。

「一応完治したとはいえ、まだ全快じゃないだろう？　少しは休め」

「でも、なんかしてないと落ち着かなくて……」

「相変わらず、お前は……」

言って、執務官は私の頭を軽く叩いた——違う、撫でた？　呆然とする私に気づかず、執務官は早口で呟く。——なんで俺も、こいつがいいんだか、と。

「あの……っ？」

「あ、悪い」

ぱつと、手が離れる。それがなぜか名残惜しいような……あまりにもあつさりしていて、胸が締め付けられる。頭を撫でられたなんか、初めてだ。

「……そういえば、レオンも本局に帰っちゃいましたね」

「そうだな。文句の一つくらい言われても無理はないと思っただが」

「文句なんて……」

見送りに行った時の、レオンの言葉を思い出す。六課で上手くやれるようによかった。訓練、厳しいだろうけど頑張れよ。まあお前なら心配ないよな、『ポジションフリー』。それから……。

「レオン、言ってみましたよ。執務官の補佐として一緒に仕事できてよかつたつて。とても勉強になったと」

「ならいいんだけどな。かなり連れ回したが」

「レオン、根っからの捜査官志望ですから。いい経験になったし、むしろ大歓迎だったつて」

現にあの後、ギンガさんとかかなり話しこんでいたのを思い出す。一方のルーチェだつて、今の研修が終わって試験に合格すれば、正式な教官になる。仮にも総合成績上位三位。そうそう落ちることはないだろう。

しばらく会うことができない。その事実には、少しだけ寂しくなる。

「……ヴィヴィオ、これからどうなるんでしょうか？」

「状況次第だな。六課の出動が少なければ、ここで保護児童とすることもできるが……」

お昼寝中に、小さく漏れた「ママ」という言葉が突き刺さる。探して、会わせたいと思う反面、そう簡単に見つかるかどうかという不安もあった。

「姉として自覚が出たか？」

「それはどうでしょうか……今まではずっと、『妹』とかだったわけですよ」

妹として、姪として、無力な子供として。六課に来るまで、私はずっと『守られる対象』だった。エリオやキャロと出会ってから年上としての自覚が芽生えた人間が、いきなり「お姉ちゃん」扱いである。自覚するより以前に、訳が分からなくなる。

「つていうか、何でヴィヴィオつて私に懐いたんでしょうか……？」

「さあな。案外似たものを感じたんじゃないのか」

その言葉に、私は思わず口を閉ざした。アーウィング執務官も、「しまった」と言わんばかりに、自分の手で口を覆う。

「……悪い。そういうつもりで言ったんじゃないんだが……失言だな」

「い、いえー！ まあ例の件は関係なくて……というか、その……私より、母の方が気になって」

そもそも検査だって、元は私の術式と合うカートリッジを探すためだったのだ。非常に稀有なこの術式と合うカートリッジは希少価値が高い。今私が使っているのは伯父が教育隊で研究に研究を、実践に実践を重ねて「術式と比較的合致」して、かつ安価な弾薬とシステムだ。カートリッジシステムと術式の相性が悪いと、最悪デバイスの破損や術者の怪我、死亡の原因となる。だからこそその検査だったんだだけだ。

だが、と声無き声が思考を停止させ、方向を変えさせる。

血が続けば続くほど、魔導師の資質を濃くなるはずの遺伝子調整。それから唯一外れた母にも、推測の域を出ないが私たちと同じように魔力資質、魔法術式を受け継いでいるという結果が出ている。にも関わらず、母だけはそれが表に出なかった。

なのに血を分けた兄も、息子も、娘も秋月の異端を継いでしまった。それを知った時、母は何を思ったのだろう。嫌っていたはずの家を継いでまで、母は……。

(もしかしたら、私は何か勘違いしているのかもしれない……)

もしも、母が「私たちのために」家を継いだのだとしたら。兄を魔法から引き離し、私を「捨てた」のも、秋月を継がせないためだったら。

そしてそれは、ひいては私たちを「秋月の異端」から解放するためのものだとしたら。

都合のいい『もしも』が泡沫のように生まれては消えていく。けれど、心の片隅では願っていた。

(……会いたいよ、お母さん……)

同僚たちに食堂へと引きずられる最中も、私は笑顔の下でずっと願  
い続けていた。



## 14: Mothers & Children

「はい、全員集合」

早朝、陸戦訓練場。今日も私たち新人フオワードは訓練に勤しんでいた。

「じゃあ、朝練はここまで。——今日は目立ったミスもなく、いい感じでした。今後も、この調子でね」

「ありがとうございますましたっ」

ヴィヴィオが機動六課預かりになって、早数日。あれから出勤はほとんどなく、平和な日々が続いています。

「セカンドモードも、だいぶ馴染んできたかなあ」

「そうですね」

寮への帰り道、話題は自然と現在練習中のセカンドモードについて、になっていた。

「変化の少ない私やキャロはともかく、深琴とティアとエリオは大変そうだよね」

「形から変わっちゃいますし」

「あたしは、別に。ダガーモードはあくまで補助だしね」

言って、ティアナは私とエリオを見る。

「複雑なのは二人の方でしょ」

「ストラーダのセカンド、過激だもんね」

「ローゼンクランツに至っては、形どころか戦闘スタイルだって変わるんだし」

「まあ、それが目的だしね」

状況に合わせてデバイスと戦闘スタイルを変更し、臨機応変に対応する——それが私の、『ポジションフリー』の役割だ。

なんだけど。

(……平和だなあ……)

嵐の前の静けさだとは考えない。考えたくない。頭の上には雲ひとつない青空が広がっていた。



本日、ライトニングは現場調査、ティアナは八神部隊長と同行で本局行き、ということになっていた。副隊長達はオフシフトのため、オフィスに残っているのは私とスバル、なのはさんだけである。

「前線メンバーは私とスバル、深琴の三人だけだね」

「何も起きないことを祈ります……」

そんな話をしているのは、なのはさんとスバル。一方今日も今日とて六課に滞在中の零さんはふと顔を上げた。

「そーいやヴィヴィオって、夜までどうしてるんだ？」

「あ、寮ですよ。なのはさんとフェイトさんのお部屋で」

とは言っても、数少ない子育て経験者にして寮母のアイナさんが面倒を見てくれている。ザフィーラはガードだ。

理由はまだ判明していないが、ヴィヴィオがケースと共に行動していたことや言語能力とかから、『プロジェクトF』や関係する技術で生み出された「人造生命体」だという検査結果が出ている。施設から逃げ出したのか……いずれにしても、寮内とはいえ一人にしておくのはまずい。

そんなオフィスの片隅で、私は一人古代ベルカ語と向き合っていた。それも聖王統一戦争付近のものではない。——真正正銘の、先史ベルカの詩文だ。持ってきた零さん曰く、「予言」だという。

「カリム・グラシアって知ってるか？」

「一応は。聖王教会騎士団の騎士で、時空管理局本局の理事官ですよ  
ね」

この機動六課の後見人の一人で、八神部隊長と同様に古代ベルカ式のレアスキル——『プロフェーティン・シユリフテン予言者の著書』の保有者。私の答えに満足したのか、零さんは頷いた。

「で、それとこれに何の関係が？」

「これが大ありだ。なんせこれは騎士カリムから、お前あてに預かった予言なんだからな」

「……はい？」

思わず聞き返してしまった。なんでも、この間の会合で語られた六課創設の理由がこの予言に関係しているらしい。本来参加予定だった私はヴィヴィオに懐かれたため行動不能に陥ったため欠席。で、騎士カリムは零さんに、この予言について私に説明してくれと頼まれたらしい。

だがここで一つの問題が発生した。

「……俺古代ベルカ語、分からねえんだ」

「仮にも教会騎士ですよね？」

「いや、聖王統一付近はできるんだぞ一応。ただ先史ベルカが無理なだけで」

古代ベルカは元々他国併呑の歴史を持っている。言語はその最たる例で、一つの単語でも気が遠くなるほどの意味が——それも時には矛盾したものが——ある。

私も、読み書きできるのは聖王統一付近だ。先史ベルカは単語毎でなら訳せるが、文章ははつきりいつて無理。しかも詩文形式なんてマジ勘弁してほしい。

「まあやっつてはみますけど……」

モニターに映るデータを見る。えーっと、これがここにかかって、こうなるから……。

「古い……あ、違う。『古い』か。『古い結晶』……『無限の欲望……交わる地』」

文章に直すとこうなる。『古い結晶と無限の欲望が交わる地』、『死者の王の下、聖地より彼の翼が蘇る』、『死者達は踊り、中つ大地の法の塔は虚しく焼け落ち』、『それを先駆けに数多の海を守る法の船は砕け落ちる』。——ちなみに所要時間は、三時間。昼休みを告げるチャイムが鳴っている。

しかし、今の私にはそんなこと気にならない。手は震え、目はモニターに固定された。考えるのはこの詩文——予言のこと。

（『古い結晶』がレリックだとして……）

根拠はないけど、『彼の翼』とは聖王伝説に関する何か——恐らく『聖王のゆりかご』だろう。一応聖王は「かつて実在していた人物」の

ため、ゆりかごの存在を信じて疑わない学者たちはこぞつてその秘密、場所を探している……が、今はそれよりも、後半の文章だ。

〔中つ大地の法の塔は虚しく焼け落ち〕、『それを先駆けに数多の海を守る法の船は砕け落ちる』……〕

それが意味するのは一つ——地上本部の壊滅と、管理局システムの崩壊。何が怖いって、ガジェットがあればそれが容易だという点だ。管理局法では質量兵器——実弾銃とか、核兵器とか——の保有は全面的に禁止されている。比較的クリーンで安全な力として魔法文化が推奨された分、ガジェットが持つAMFに対抗できる魔導師は少ない。

「魔法文化もどうかと思うけどな、俺は。結局才能が無い奴は使えないわけだし。魔力至上主義っていうのもな」

「それ、オーバーSランクが言う台詞じゃないですよ」

「事実だろ？ まあ永遠のテーマだろうさ。『力無き正義は夢物語、正義無き力はただの暴力』ってな。ほら、シュークリーム。カスタード、チョコ、生クリームな」

「古代ベルカの人の話を聞きたいですね。あ、頂きます」

カスタードクリームが零れないよう、慎重に口に運ぶ。残っている隊員たちに配り歩く零さんの背中を見送って、私はモニターに視線をやった。もうすぐお昼休みだというのに、私はなんで食べているのだろうか。

だがそれ以上に気になるのは騎士カリムの考えだ。ただの一管理局員でしかない私に、何故こんな重大なことを……。

「あ、深琴。ちようどよかった」

オフィスの向こうから、スバルが声をかける。彼女がモニターを見る前に、大急ぎでモニターにロックをかけ、閉じた。

「どうしたの？」

「……ううん。なんでもない」

「そっか。深琴、デスクワークも得意だもんね」

羨ましいなあ、と呟いたスバルは、私の手を取る。

「お昼まだでしょ？　なのはさんが寮でヴィヴィオと一緒にお昼にす

るんだけど、深琴もどうって」

「う、うん！ 行く！」

頬が引き攣った気もするが、私はなんとか笑顔を浮かべた。



同時刻、第97管理外世界〈地球〉海鳴市。梅雨も終わり、本格的な夏が近づいていた。

「……やっぱり……」

そんな中、暗闇に包まれた——まるで外界を拒絶するようにありとあらゆる鍵をかけ、カーテンを閉め、倒れない程度に休息と空調を利かせた室内に、霜月秋葉はいた。その目が睨みつけているのは——本人達が知る由はないが——深琴が見ているのと同じ、プロフェーティン・シユリフテン『予言者の著書』の詩篇が映されたモニターだった。

「どこをどう訳しても、これ以上のものはない、か……」

現在は管理局の囑託魔導師といえど、身寄りのない彼女は聖王教会の騎士に引き取られた存在である。騎士カリムとも顔見知りだ。——だが何故、これが自分に送られてきたのだろうか。

まさか、自分にも関係あるというのか。レリック事件——そこに繋がっているだろうジエイル・スカリエツィと、自分が。

「そうだとしたら……」

「……なんだこれ!？」

秋葉の眩きをかき消した声の主——秋月静真はどたどたと音を立てて、玄関からリビングへと目指す。

「せめて電気点ける馬鹿野郎！ 外めちやくちや晴れてっぞ！ つか何だこの部屋、エアコン効きすぎじゃなねえか風邪ひくぞ!？」

「先輩、うるさいです。つていうか鍵持つてるからつて遠慮なく人の家に入らないでほしいです」

「おま、それがわざわざ来た先輩に対する言葉か!？」

「来てくれ、と言った覚えはないです」

言いながらも秋葉は立ち上がり、カーテンを開ける。そのままキツ

チンへ移動し、彼が愛用するマグカップを取り出した。

「それに先輩、今日は三者面談でしょう？ 進路相談、無事に終わったんですか？」

「……終わったからいんだよ」

とは言うものの、静真の表情は固い。

「……あいつがさ」

「先輩の母君がどうかされました？」

「母君とか言うな、気持ち悪い」

反射的に言い返して、静真は瞳を伏せた。今度は茶化すことなく、秋葉は言葉を待っている。

「……留学は認めないって言いだした」

「……あー、まだ『留学』ってしてたんですね……」

「今回は違えよ。けどあいつに……」

言って、静真は銀色の携帯電話——にも似た通信端末を握りしめた。それはつい先日、彼の妹から届いた「ちよつと遅くなった誕生日プレゼント」である。

「ミッドチルダに……深琴のここに行くって正直に話したら……『絶対だめ！』って盛大に泣かれた」

「……ほんとに親子ですか、あんたら」

あまりにも弱すぎる、と秋葉は吐き捨てた。静真とは約二年、深琴とは数十分とは言えど共に戦ったからこそ分かる。「似たもの兄妹ではあっても、似たもの親子ではない」と。魔力資質云々ではなく、その意思と、目に感じる何かがあった。

「……で、面談後親子喧嘩勃発の後、ここに退避したと？」

「戦略的撤退と言ってくれ」

「キリッ、じゃないですよ」

静真から『土産』ことチョコミントアイスを受け取った秋葉は、付属のスプーンを取り出す。チョコの甘さとミントの爽やかさが見事にマッチしたそれを口に含んだ秋葉は、目を細めた。

「先輩はどうするんです？」

「どうって……決まってるだろ。俺は絶対、家を出て、ミッドチルダに

行く」

揺るぎない意思を、静真は口にした。二年前、出会った当初から変わっていない彼に安堵すると同時に、秋葉は不安を覚える。

でもね、先輩。と言葉にできない思いは、彼女の胸の内を駆け巡った。

あなたの母親は、きっとあなたが思っているような人ではないですよ。だって私のことに、内心では気づいているようですから。

「つつーわけで今日は泊める。メシは俺が作る」

「当然です」

ちよつと買い物行ってくるわ、と言って静真はリビングを出る。その背中を見送った秋葉は、まったく、と言いたげに肩を竦めた。



「でも、ヴィヴィオって…この先、どうなるんでしょうか?」

「ちゃんと受け入れてくれる家庭が見つければ、それが一番なんだけど」

「難しいですよ。やっぱり、普通と違うから」

察へと続く道で、なのはさんとスバルはヴィヴィオのこれからについて話している。しばらく時間はかかるだろうから、なのはさんがヴィヴィオの「保護責任者」になろうって話。

「深琴、どうかした?」

「あ、いえ、なんでも…」

「ちよつと元気ないみたいだけど…大丈夫?」

歩きながら予言のことを考えていたせいか、表情からいつもの元気(どんなだ?)が消えていたらしい。…そりゃ、元気も無くなる。多分他のフォワードには伝えられていない予言のこととか、色々。

そんな私の心中を察してくれたのか否か、なのはさんがまるでチェシャ猫のような笑みを浮かべる。

「アーウィング執務官も、本局に戻っちゃったしね」

「っ!?!」

「み、深琴、大丈夫!？」

前につんのめった私は、スバルの背中に激突する。全然察してくれてなかったよなのはさん!？」

「な、なななななのはさん!? いきなり、えっ!？」

「あれ、違うの? てつきりそうだとばかり……」

それもあるけど……って違う! そうじゃなくって!

——そう。アーウィング執務官は今朝方、本局に戻った。ホテル・アグスタから始まった捜査は、108部隊と機動六課、聖王教会に正式に引き継ぐ形で。元々彼の担当は「凶悪事件」だから、専門外の事件だったのだ。それでもここまで帰還を長引かせたのは、執務官本人の希望だったらしい。私はその理由を知らされていないけど……。

(……夜、メールしてみようかな……)

一応、連絡先は本人から聞いている。いきなりメール、というのもあれだが今は正直、頼れるものには全力で頼りたい気分だ。

「おねーちゃん」

「ヴィヴィオ、こんにちは」

とてとて、と小走りで駆け寄ってきたヴィヴィオを、私は抱き上げる。その軽さに、内心で驚きながら。

こんなに小さい子だって、頑張ってるんだ。

私が頑張らなくてどうする。

(……そうだよね? お兄ちゃん)

けれど不安なことに変わりはない。なのはさんを「ママ」と呼ぶヴィヴィオに微笑みながらも、私の手は震えていた。



# 14.75: Meaning of strength

強さとは何だろう。

それは何度も繰り返し返して、けれど未だに答えが出ない問題。きつと、明確な答えは存在しないもの。

なんだけど……誰か、この状況を説明してほしい。

「鉄板の最強候補は六人！」

「近接最強！ 古代ベルカ騎士！ ヴィータ副隊長とシグナム副隊長！」

「六課最高のSSランク！ 超長距離砲持ちの広域型魔導師、リイン曹長とのユニゾンって裏技もある八神はやて部隊長！」

「六課最速のオールレンジアタッカー、フェイト隊長と説明不要の大本命！ エースオブエースなのは隊長！」

「そして、魔導師歴一年未満であのインターミドル世界本戦まで勝ち進んだみなさんご存じ『ポジションフリー』、秋月深琴！」

「最強は誰だー!?」

「なのはさんに決まっところーが！」

「シグナムさんだ！」

「部・隊・長、部・隊・長！」

「ヴィータ副隊長！」

「フェイトさんにきまつてる！」

「あつきづき！ あつきづき！」



「フォワードとメカニック陣が？」

部隊長補佐、グリフィス・ロウラン准陸尉がルキノの報告を聞き返した。

「隊長たちのうち誰が強いのかで、ちよつとしたお祭り状態に……」  
「まあ昼休みをどう過ごすほうが自由ではあるけど……」

事の発端は、ヴィヴィオの「なのはママとフェイトママ、どっちが強いのか？」という一言。そこからいつしか「つていうか六課で一番強いのは誰なのかしらね」に繋がり、昼休みの機動六課駐機場はルキノの報告のような盛り上がりを見せていた。

その日は朝からオフィス待機だった私は、今、休憩室でロングアーチスタッフと昼食後のお茶をしていた。いきなり巻き込まれた身にもなつてほしい。

「……つていうか、なんでそのメンバーに私まで入っているのかが非常に気になります……」

「まあ、深琴は三年前の時点で『世界で十番目に強い女の子』だしねー」  
お菓子をつまみながら、シャーリーが答える。……え、それだけの理由で？

「あまりに過ぎるようなら、僕から注意するよ」

「そーだねえー」

「……それでいいでしょうか、副隊長」

「構わんよ」

と、シグナム副隊長は言う。

「戦いの合間に仲間同士、笑顔でいられるのは悪いことではない。切り替えさせしつかりしていれば文句はない」

言つて、副隊長はルキノを見た。

「お前も、参加してきてもいいんだぞ」

「あ、いえ、わたしは」

それは勘弁してほしいです、副隊長。ルキノにまで向こうに回られたら大変なことになりそうだ。

「ルキノは真面目ですからね。報告ありがとうございます」

と、グリフィスは微笑む。そんな彼にルキノも嬉しそうだ。……そういうえば、この二人つて結構仲がいたよね。ルキノは艦船マニアで、グリフィスもその手の話は「嫌いじゃない」から話が合うようだ。  
「シャーリー、何だその目は」

「ベーターにー？」

にやにや（によによ？）な笑顔で二人を見るシャーリー。そしてそんな私たちを見て、やれやれと言わんばかりに、シグナム副隊長は肩を竦めた。

◇

「で、実際どうなんだ？」

所変わって、陸戦訓練場近く。午前訓練に参加できなかった私は一人、なのはさんから貰った空戦データを練習していた時。ちょうど近くを通りかかったヴァイス陸曹が、例の「最強は誰だ」の話を持ち出した。

「どうって言われても……瞬殺される自信しかないです」

「おいおい……んなあつさり言うなつての」

「それ以前に、隊長たちと戦う状況にもよります。個人戦とか集団戦とか、そういうの」

個人戦で私が勝てる可能性があるとすれば、恐らく八神部隊長（もちろんユニゾン禁止）くらいだろう。後で知ったことだが、部隊長もティアナから似たような質問に、「私が相手だったら確実に負ける」と答えたららしい。

「まあ……そうだよなあ。でも、お前だって一応インターミドルの世界10位だろ」

「とはいつても、初戦で負けてますから。当時の都市代表の中では文句なしの最弱です」

私はその経歴で話題になっているのは、「管理外世界出身」、「魔導師歴約一年」という形容詞があるからだ。私が強いから、では決してない。

それに隊長たちと私では、経験に差がありすぎる。

と、脳裏に伯父の姿と、言葉が過った。

「……ヴァイス陸曹、こんな言葉、聞いたことありますか？」

「？」

『自分より強い相手に勝つためには、自分の方が相手より強くないといけない』って」

「……なんだ、そりゃ?」

面喰った様子で、陸曹は首を傾げる。

「昔……インターミドルに出場する前に、伯父に言われたんです。『この言葉の矛盾と意味をよく考えて答えを出せ』って。強さの意味を履き違えるな、と」

「マジかよ……お前そのとき11歳だろ?」

「マジですよ?」

しかし当時の私は、あつという間に答えを見つけた。それはあまりにも単純で、だからこそ分かりにくいもの。

「へえ……ま、考えとくわ」

「はい」

「そういやお前、午後はどうすんだ? 108部隊への出向研修、参加しないんだろ?」

「どつちかって言うと、捜査協力って感じですから」

午後からフォワードメンバーは、陸士108部隊で出向研修、合同訓練を行うことになっている。しかし私だけは108部隊の捜査官——捜査主任のラッド・カルタス二尉、捜査官のギンガ・ナカジマ陸曹のもとに捜査協力として派遣されることになっていた。きつと今頃、フォワードのみんなは出発の準備をしているんだろう。

そう思った瞬間だった。

『状況 アラート2。市街地付近に未確認体出現。隊長陣および704、出動準備。待機中の隊員は準警戒態勢に入ってください』

「出動みてーだな。行くぞ!」

「はい!」



『動体反応確認、やっぱりガジェット!』

『I型17機、III型2機!』

『Ⅲ型は……始めてみるタイプだ。前線は注意して!』

ロングアーチから送られてきた映像には、見慣れた球体のⅢ型に足がついていた。

現場は、レールウェイの地下通路。既に私以外のフォワードは集まっていた。

『ロングアーチ04、合流確認!』

『フォワードチーム、こちらロングアーチ』

全員が揃ったことを確認して、八神部隊長が通信を繋げた。

『こつちからはライトニング1・2が緊急出撃する。みんなはそつちの状況確認とガジェットの迅速な撃破。——108部隊や近隣の武装隊員も警戒に当たってくれてる。スターズ1からは何か』

『スターズ1からフォワードチームへ。AMF戦に不慣れなほかの武装隊員たちにガジェットや危険対象をなるべく回さないように。こんな時のための毎日の訓練だよ。……5人でしっかりやってみせて』

『はいっ!』

『じゃ、行くわよ!』

ティアナの号令のもと、私たちはデバイスと防護服を展開する。

『現場はレールウェイの地下通路! 狭いけどしっかり連携とついでこう!』

『おっ!』



「あーらら。動き速いなあ」

E37地下道に、少女——ナンバーズNo.6・セインの声が響いた。

「機動六課だっけ? 例の部隊が出てきちゃったよ。……どーしよ、クア姉」

『そーおねー』

モニターの向こうで、ナンバーズNo.4・クアットロが間延びした声で言う。

『今ここでプチツと潰しちやってもいいんだけど、まだ不確定要素が多いし、今回の作業はⅢ型改のテストとお披露目だけなんだし。もうほとんど済んだでしよう?』

「まー、だいたいのところはね」

『じゃあ空からおつかかなーいのが飛んでくる前に、早めに退いて戻つてらっしゃい。Ⅲ型改も放つといていいわ。量産ラインに投入するかどうかまだ決めてないし』

「はい! はいはいクア姉!!」

と、赤毛の少女——ナンバーズNo. 11・ウエンデイが手を上げた。

「せっかくお外へ散歩に出られたのに、もう帰るのはつまんねーっスー。……あいつらに、ちよこつとちよつかい出したりしちゃダメっスか?」

『そーおねえー……これから大事なお祭りが待ってるんだし、武装も未完成なあなたが損傷ケガでもしたら大変だから、直接接触はしちやダメよ』

でも、とクアットロは息を吐いて笑った。

『見学と遠隔ちよつかいくらいなら良しとしましよ』

「わーい! ありがとっスー!」



「よしっ、全機撃破!」

つい先日の出撃を思い出す、地下通路の戦い。けれどそれぞれがポジション通りに動いているだけで、あつという間に担当エリアの掃除は終わった。

「は……速エ……」

「というか、改めて凄いな。機動六課」

その様子を見ていた近隣の武装隊隊員が呟く。彼らの表情は、まるで信じられないものをみるそれであった。

『Ⅲ型改の反応、新規に出現! 機動六課フォワードチームG12へ

！』

「了解！」

「それでは！」

敬礼し、私たちはG12へ急ぐ。残された局員たちはこう話していたらしい。

「前に見たときよりも速いし強い……」

「半年前まではランクなりの新人だったはずだよな……？ いったいどういう成長速度だよ……」

◇

「へー、こんなに動けるんだね、この子たち」

モニターに映る機動六課フォワードチームを見て、セインは言う。

「うん、フェア様が気にいるのも分かるな……ってなんだよ、ウエンデイ、その楽しそうな顔は」

話を振られたウエンデイは、心底楽しそうに笑っている。

「こいつらの担当、あたしやN<sup>ノー</sup>o<sup>ヴェ</sup>・9のになるんスよね？」

「多分ね」

ガジェットに座りなおして、セインは頷いた。

「こーゆー連中をどーやって叩きつぶそうかなとか、どうしたら攻撃を食らわずに済むかなとか、考えるとなかなか楽しいんスよ」

と言うものの、ウエンデイの顔から笑顔が消える。

「こいつら単体でも魔導師ランクでAはありそうっスけど、それぞれの特化技能はAA級——もしくはそれ以上じゃないっスかね」

「ぼいね」

「で、別々の特化技能を連携させることで総合力を高めてる……まー、分断してブツ叩くのが適切っスよね」

言って、ウエンデイは自分の武装——ライディングボードを構えた。

「——ま、連携戦だろうが単体戦だろうが、負ける気はねエっスけどね」

妹の様子に満足したのか、セインはガジェットI型を二機並べ、横になる。

「シッポ掴ませるとウー姉やトーレ姉に怒られっからさー。一発撃つたらすぐ引つ込むよー」

「了解っスー」

答えて、ウエンデイは発射する弾薬を設定する。そして躊躇いなく、その引き金を引いた。

◇

「アルケミックチェーン！」

キャロが召喚した鎖が、III型改を捕らえる。捕まえた、と全員がほっとした瞬間、III型改を何かが貫いた。貫通した様子も、不発弾である様子もない。III型改は金属とエネルギーの塊で、しかもここは地下通路——嫌な予感が全身を駆け巡り、警鐘を鳴らす。

《Sniping position check. Field rise also finishes soon. 『狙撃位置確認。防御フィールド出力の上昇もすぐ終わります』》  
「うん、ありがと。……エリオ、準備はいい？」  
「いつでも！」

スバル、ティアナ、キャロが前へ出た。同時にIII型改が爆発する――

◇

「命中ー」

まるで鼻歌でも歌うかのように軽やかな声で、ウエンデイは確認する。

「貫通してないじゃん。不発かー？」

「冗談。これでも一応射撃型っスよ？ ……今のは、反応炸裂弾」

ウエンデイが、凶悪な笑みを浮かべる。



「チンク姉に教わった狭所でのエネルギー運用理論。金属とエネルギーの塊であるⅢ型に撃ちこんで、狭い通路内を一瞬で満たす爆散破片に変える。——これならあたしもデイエチやチンク姉に匹敵する破壊力が出せる……はずっス」

ウエンデイのしなやかな指が、パチンっ、と軽やかな音を立てる。同時にモニターの向こうでは大爆発が起こった。

「えげつねーなあ。ちよつとやりすぎだぞ」

「えっへっへえー」

さすがに苦言を呈したセインに、ウエンデイは笑って見せる。

「ま、それでも」

爆煙の向こうから、魔導師達がバリアを張って攻撃を防いだ姿が見えた。

「連中が5人セットなら防いじやうでしょーねえー」

「……甘く見たな、ウエンデイ。5人じゃないぞ。3人で防いだんだ」

「ふえ？」

言つて、セインはウエンデイにモニターを見せた。そこには前衛と指揮型の中衛、そして後衛を務める3人の少女しか残っていない。

「ホレ。爆発直後にもうこっちの位置を特定。高速型の中衛が二人、こっちに向かってカッ飛んできてる。——クア姉とデイエチが向こうの隊長たちに落とされかけた時とおんなじパターンだね」

「んん、こいつらもなかなかやるもんス」

満足げに二人は笑う。

「まー、ちゃんと遊んで満足したろ。交戦しないうちに帰るよ——I

S デイープダイバー！」

「はーいっ」

先にガジェットと共に床に消えていくセインを見届けて、ウエンデイは懐から一本のサインペンを取り出した。

「でもその前に……」



《Soon to the destination. Please  
e t u r n o n t h e l e f t. 『目的地までもうすぐで  
す——次の角を左へ』》

「うんー」

エリオと私——中衛と中後衛は、ガードウイング ウインドバックティアナの誘導操作弾とフ  
リードを引き連れて、先ほどの狙撃ポイントに向かっていった。その速  
度はキャロのブーストを受けているため、いつもの数倍はあるだろ  
う。

なのに、曲がった先には人っ子一人いなかった。

「……いませんね」

「ガジェットとの反応も無いし……」

幻術などで隠れている様子はない。ロングアーチのセンサーに  
引っ掛かってもない。

「……深琴さん、これ……」

「何？」

私を呼んだエリオは、壁を指差した。そこには油性マジックで書か  
れた文字と絵があった。

——「またね、バイバイ」と。

「……書き置き、でしょうか……？」

「みたい、だね。とりあえず報告しとこうか」



それから特に異変はなく、警戒態勢は解除された。協力してくれた  
ギンガさんたちと食事をしながら、話題は出動前——あの言葉にな  
る。

『自分より強い相手に勝つためには、自分の方が相手より強くないと  
いけない』？」

言いながらも、ギンガさん、スバル、エリオの周囲には弁当の空箱  
が山のように溜まっていた。いや、前衛組のカロリー消費は凄いのは  
知ってる。けど、私とティアナ、キャロは軽く引いていた。

「その問題の答えは分からないけど、私としてはそれは否定するべき言葉だと思うけどなあ」

言つて、ギンガさんは左手を握りしめる。

「母さんが言つてた。刹那の隙に必倒の一撃を叩きこんで終わらせるのが打撃系のスタイル。出力がどうか、射程や速度や防御能力がどうか、自分と相手のどちらが強かろうが——そんなの全部関係ない」

言つて、ギンガさんは手刀をスバルの首筋に当てる。その動きは無駄がなくて素早く——油断してたこともあったけど、私もスバルも全く反応できなかった。

「相手の急所に正確な一撃。狙うのはただそれだけ」

ギンガさんは、満面な笑みを浮かべている。

「私は、そう思つてる」



「……悪い。全然わからねえわ」

六課隊舎に戻つて早々、ヴァイス陸曹が言つた。

「そんなに難しいですか？」

「難しいっての。まあ矛盾してるなー、とは思うんだけどな。……どう説明していいものやらつて感じだ」

「……ほんとに、単純ですよ」

待機形態に戻つたロゼットに触れる。

『自分より総合力で強い相手に勝つためには、自分が持っている相手より強い部分で戦う』です」

そしてそのために、自分の一番強い部分を磨きあげて、自信と気概を持つて戦いに当たる。

その解答に、陸曹は引き攣つた笑みを浮かべていた。

「おい、本当に単純だな」

「そう言いましたよ？」

「そうだけだな……じゃあその場合、お前は隊長たちとどうやって戦

うんだ？」

逆に問われ、私は脳内で状況をシミュレートしてみる。

「そうですね……相手の射程外砲撃から斬り合って締めは『剣閃』が妥当ですね。八神部隊長が相手だったら、そのまま突撃します」

体力と魔力には自信がありますから、と私は笑った。

「とはいえまだまだ経験不足ですから。精進しないと」

「そうかい。頑張れよ」

「はい」

探していく強さの意味。いつかきつと、本当の答えが見つかるまで。

そしてその場所にたどり着けるその日まで。

今は八月。——機動六課解散まで、後八ヶ月。

「さて、今日の朝練の前に、一つ連絡事項です」

もはや日課となった朝練。集まった私たちフォワードの前には、108部隊所属の捜査官・ギンガさんの姿があった。

「陸士108部隊のギンガ・ナカジマ陸曹が、今日からしばらく、六課へ出向となります」

「108部隊、ギンガ・ナカジマ陸曹です。よろしくお願いします」

「よろしくお願いします！」

しかし、本当にスバルの「お姉さん」なんだなあ。戦闘スタイルも利き手が違う以外は一緒だし。

「それから、もう一人」

「どうもー」

フェイトさんが示した先には、本局制服の上に白衣を纏った女性。そして眼鏡。技術者だろうか？

「十年前から、うちの隊長陣のデバイスを見てきてくださっている、本局技術部の精密技術官」

「マリエル・アテンザです」

「地上でのご用事がある、とのことでしたら六課に滞在させていただくことになった」

「デバイス整備を見てくれたりもするそうですので」

「気軽に声をかけてねー？」

十年前、というPT事件——いや、闇の書事件の頃からの付き合いなのだろうか。

「じゃあ紹介もすんだとこで……今日も朝練行つとくか！」

「はいー！」

ヴィータ副隊長の一声に、私たちは応える。ライトニングはフェイトさんと、ティアナはヴィータ副隊長と。スバルとギンガさんはこの後一対一の模擬戦。

「深琴は、今日は私とね」

「はー！」

ロゼットのセカンドモード——フォルム・ドライは射撃魔法特化型のフォルムだ。ここ最近、私はなのはさんかフェイトさんとの訓練が多い。そして私は本日よりサードモード解禁だ。

「ロゼットのサードモードはこれまで以上に扱いが難しいから、時間をかけて、ゆっくり確かめるよ」

「はいっ！」

《I will do my best. 『頑張ります』》



そして個人訓練が終わり、現在はスバルとギンガさんの対一の模擬戦中。打撃系の格闘型同士、息をつく暇もないハイレベルな模擬戦だ。そして場所はウインググロードによる上空へ。

「なんか、二人とも楽しそうだね」

「スバル、お姉ちゃんっ子だしね。ギンガさんもスバルに甘いし」

……そういうものなのかな？ 兄妹揃って魔導師じゃないから分からないけど、そういう触れ合いだと考えればいいのかも。……いや、無理があった。

そして最後の一撃を、ギンガさんは寸止めを決める。この一戦について各々が感想・反省を交えていたところ、なのはさんから集合があった。……ああ、今日もか。

「せっかくだから、ギンガも入れたチーム戦、やってみよっか？ フォ

ワードチーム六人対、前線隊長四人チーム」

「……ええっ!？」

ギンガさんはかなり混乱しているようだった。まあ普通はないよね、こんな訓練。

「いや、あのね、ギン姉。これ、時々やるの」

「隊長たち、かなり本気で潰しにきますので」

「まずは、地形や幻術を駆使して、何とか逃げ回って」

「どんな手を使っても、決まった攻撃を入れることができれば、撃墜になります」

「キョクー」

ちなみに私たちフォワードチームは全敗記録を更新中だ。何より厄介なのは「決まった攻撃」。スバルみたいにデバイス攻撃——拳か蹴りなら楽だけど……。

「一番大変なのは深琴だけだね……」

「解放された全フォルム使って、隊長たち全員に一撃入れる、だもんねえ」

「あはは……」

スバルの説明に、乾いた笑い声しか出ない。しかし今日から解禁されたサードモードは扱いは非常に難しいけど、役に立つ。今日なら勝てる……気がする。

「じゃあ、やってみよっか」

「はいっ！」

六人分の返事が悲鳴に変わるの、数分も経たないうちであった。

◇

——悲鳴が聞こえた。それも六人分。何かと外を見た零の視界に、見慣れた10人分の魔力光が入った。もうそんな時間か、と零はどこか放心気味にその光景を見つめている。

「若いつていいよなあ……」

『……いきなりどうした』

モニターの向こうで、デイバインが呆れた様子で溜息を吐く。

「いや、今フォワード陣が恒例の隊長戦やってんだよ。悲鳴上がったけど、楽しそうだなあと」

『悲鳴上がってる時点で楽しくないだろ、普通。お前、騎士団辞めて傭兵にでもなればいいんじゃないのか?』

「それもいいな。だが段ボールがない」

『……?』

「……悪い。今が通じるのは深琴くらいだった……つかアレ傭兵だっけか?」

と、二度目の悲鳴と共に、桃色と淡紅色の魔力光がぶつかった。

「……そういやさ。俺、あんま詳しくねえけど士官学校卒、つて結構なキャリアだろ？」

『そうだな』

「お前の臨時部下の……レオン、だっけか？ そいつや他の同期はちゃんと尉官から始まってんのに、なんであいつだけ三士なんだ？」

「ずっと気になってたけど、六課は誰一人この連中そんな話してねえし。そう続けた零に、デイバインは肩を竦めた。

『深琴本人の希望らしい。階級にこだわりのないっていうこともあったが、卒業までに中々進路が決まらなかったからな』

「地球出身、14歳、士官学校卒、『ポジションフリー』、三等空尉、空戦A+ランク……ああ、そりやどこの部署も欲しがらるわな。学校側は出来るだけ有名な部署に行かせようとするし」

『で、本人が出した条件が三等空士として管理局入りするということだったらしい。その上新人規定で何らかのハンデがつけられるから、残ったのは六課だけだったと』

「深琴らしいっつーかなんっつーか……よく学校側もオーケー出したな」

『実際ははやてが深琴をスカウトした後で、本人が言いだしたらしい。もう六課に入ると決めてたから、頑として譲らなかつたという話だ』

機動六課設立のための裏工作を考えれば、いくら新人とはいえ空戦A+ランクの三等空尉は取れはしない。ランクも階級も、本来の部隊であれば隊長級のものだからだ。実戦経験が皆無に等しい点を除けば、どこの部隊だつて喉から手が出るほど欲しい逸材である。

しかし三等空士として入局するなら話は別だ。その上新人規約によりリミッター等のハンデが発生するのだから、話は更に変わっていく。最近はこの部隊でも人手不足が叫ばれているため、新人をしつかり教育できる環境が少ない。一瞬零の脳裏にA「俺が」、B「俺が」、C「じゃあ俺が」、A・B「どうぞどうぞ」と懐かしいコントが過ったが、そこは黙っておくことにした。

「……でも、まあ……」



呟いて、零は模擬戦の映像をモニターに出す。解禁された新フォルムの扱いにも慣れた当の本人は、それはもう楽しそうだ。最近では当初のような背伸びした感じもなくなり、肩の力も抜けている。同僚とのコミュニケーションも問題なくこなすし、年齢相応の表情も増えた。六課解散後も、きつと——とまで考えて、零は黙り込む。

『どうした?』

「いや……深琴の進路を全力でシミュレートしたんだが、あまり意味がなかった。なんだこの虚しさ」

窓の外では、模擬戦の決着がついた。

◇

「はい、じゃあ今日はここまで」

「全員、防護服解除!」

「はい……」

なのはさん、ヴィータ副隊長の号令に、息も絶え絶えながらも返事をする。正直、どう動いたかなんて覚えてない。

「深琴、いい感じだったよ。サードモードにも慣れたみたいだね」

「あ、ありがとうございます……」

なんとか全員に一撃は入れたのだが、その直後に私は撃墜されている。

……でも、まだまだだ。リミッターとかで全力が出せないということもあるけど、それは隊長たちだって同じだから、負ける理由にならない。

それでも、フォルム・ドライ——ひいては射撃魔法は執務官の愛機・アルカディアからのデータ提供(というか相互リンク)のおかげで、今まで以上の精度を得た。問題はスタミナと——。

「まあ、そこら辺はこれから鍛えていくから大丈夫だよ」

考えていることは筒抜けだったのか、なのはさんは笑っている。

「ちよつと休んだら、クールダウンして上がろう。お疲れ様」

「ありがとうございますっ!」



「毎日、朝からこんなにキツイの？」

「隊長戦は……まあ、ちよつと特別だけど」

他の部隊ではこんな訓練はありえないだろう。そもそも教導の期間自体、本来なら二、三日。長くて二、三週間というところだ。

「教育隊はもつと長いのよね？」

「そうだね。まあ普通だと訓練校とか、そつちに派遣されるから」

ちなみに私の伯父は現在、本局勤務だ。平たく言うところ「教官の教官」だからで、資格を取ったばかりの新人教官を更に鍛えていくのが仕事だという。訓練校とかに派遣されるのはよほどのことがない限り、そして私を引き取ってからはなかったはずだ——私に魔法を叩きこむために。

「ママー、おねえちやーん」

と、嬉しそうな笑顔でヴィヴィオがこちらへ走ってきた。その足取りは軽やかではあるもののどこか危なっかしい。危なくなったらブリッツアクションでも使って助けなきゃ——ってあああ！ 転んだ！

思わず立ち上がった私は、ヴィヴィオを起こそうと動き出す。が、なのはさんに阻まれた。

「大丈夫。地面柔らかいし、綺麗に転んだ。けがはしてないよ」

「それはそうですけど……」

けれど転んだ側としては、どうだろう。幼い頃——まだ自由に走り回れた頃、兄と一緒にいたくて、ずっと追いまわしてた私は、よく転んで。転ぶ度に兄が手を貸してくれた。自分で起き上がるという大切さも分かるけど、「起こしてもらえた時」の感覚——自分って大事にされてるんだな、とかそういう思った思ってたきつと大切で。

「フェイトママ……？」

「うん。気をつけてね」

動けない私の代わりに、フェイトさんがヴィヴィオを抱き起した。

「ヴィヴィオがけがなんかしたら、なのはママもフェイトママも、深琴お姉ちゃんもきつと泣いちゃうよ」

「ごめんなさい……」

「もー。フェイトママ、ちよつと甘いよ」

「なのはママは厳しすぎです。ね？ 深琴お姉ちゃん」

「えっ!? あ、えつと……」

ふらついた時点でブリツツアクションを使いそうになった身としては、何も言えない。

「ああ、二人の子供かあ……ええええええええ!?」

光景を見ていたマリーさんの絶叫が、森の木々の葉を揺らした。



「なるほど……保護児童なのね」

所変わって食堂。事情を説明すると、マリーさんは簡単に納得してくれた。ヴィヴィオの保護責任者はなのはさんで、フェイトさんは後見人。

先ほどまで泣きじゃくっていたヴィヴィオが笑顔でオムライスを口に運んでいるのを見て、ティアナは笑って肩を竦めた。

「しつかしまあ、子供って泣いたり笑ったりの切り替えが早いわよね」

「スバルのちっちゃい頃も、あんなだったわよね」

「えー! そ、そうかな?」

「リインちゃんも」

「えー!? リインは初めっから割と大人でしたあ!」

「嘘をつけ」

「身体はともかく、中身は赤ん坊だったじゃねえか」

「うー……はやてちゃん! 違いますよね!」

「あはは。どうやったかなあ?」

……こういうときばかりは、「兄」「姉」ポジションを羨ましく感じる。だって親以外分らないもの——まあ私は親ですら分からないんだらうけど。

と、なのはさんがヴィヴィオの皿を見て声を上げた。

「駄目だよ、ヴィヴィオ。ピーマン残しちゃ」

「苦いのきらーい」

「え？ おいしいよ？」

どうやらヴィヴィオはピーマンが苦手なようだ。ピーマン苦手な子って多いよね。あの苦いのがいいのに——とルーチエに話したら「お前人間じゃねえー」的な目で見られたのを思い出す。っていうか、18歳にもなってピーマン食べられないって方が人間としてどうだろう。

「あー、そやなあ。好き嫌い多いと、ママやお姉ちゃんみたいな美人にはなれへんよ」

「あの、八神部隊長……さっさと私まで一括りにしないで頂きたいのですが……」

身内の鼻真目なしで見ても、私の親戚の顔立ちは整っている。しかしそれと私自身は無関係だ。海鳴市への派遣任務で兄と一緒に行動したあの数十分の間、一体何回「何であんな子が一緒になのよ!？」という刺々しい視線を受けたことか。思い出すだけでもずきずきくる。

「……当の本人が気づいてないっていうのが、一番深刻やなあ……」

「いや、まだ女だからいいんじゃない？ これが男だとぶっ飛ばしたくなる」

「あー、それもそうやねー」

八神部隊長と零さんが言っつて、まるで「可哀想な人」を見る目で私を見た。解せぬ。



そこは、牢屋だった。暗くて冷たい、鉄格子の外にはなににもない。あるとすれば白衣を纏った大人たちと、自分と同じ牢屋に入れられた子供たち。

気が狂いそうな「実験」で、子供たちが次々と消えていく。一人、また一人、時には十人くらいいつきにいなくなっていた。

頭が痛い。

吐き気がする。

ここはどこで、自分は誰なのだろう。

いつそ殺してほしいと願うのに、死ぬことは許されなくて。助けてほしいのに、誰も助けてくれなくて。

ならばいつそ、全て消してしまえばいい。その答えに行き着いた瞬間、体は勝手に動いていた。ナイフを手に取り、大人たちを刺し殺す。深紅色の魔法陣が輝き、非殺傷設定なんか最初から存在しない魔法で壊れていく箱庭。

『——これはすばらしい』

炎に包まれる箱庭を見つめていた自分に、声がかけられた。振り向いた先には、血溜まりの中に横たわる彼らと同じ白衣を着た男が立っている。

『これは、全て君が？』

その問いに、自分は答ええない。答えられない。答えるための術を持っていない。それに気づいた男は、そつと手を差し伸べた。

『私と一緒においで。少なくともここより居心地はずっといいだろう』

連れてこられた先には、男を「ドクター」と慕う少女が数人いた。男が微笑む。

『名前がないのは不便だな。君さえよければ、私がつけてあげよう。……そうだな……』  
「フェアアクレールト・ナハト」はどうだ？ 異世界語で、浄められた夜という意味らしい』

フェアアクレールト・ナハト。それが自分の名前。同時に訪れたのは、意識が浮上するあの独特の感覚。

「……懐かしいな……」

そう呟いて、フェアアクレールトは体を起こした。場所はジェイル・スカリエツィのアジト。気が付いたら眠っていたらしい。作戦決行まではまだ時間はあるから、彼や彼の娘に怒られることはないだろうけど。

無言で、フェアアクレールトは自身の愛機を手を取った。深紅色のク

リスタルが一瞬、煌めく。

そして戦場で度々刃を交えた少女の顔が、過った。

(深琴……)

弱くて、まっすぐで、何も知らない彼女。彼女なら、自分の過去を聞いて何を思うだろう。少なくとも、だからと言って彼を許しはしないだろう。

自分たちは似ている。戦い方も、力も、その生まれも。にも関わらず、彼女は頑なにその事実を認めない。彼女はこちらに来るべきだ。だが本人がそれを望まないというのなら、ドクターは強要しない。

「……残念だよ、深琴」

ぼつり、とフェアクレールトは寂しげに呟いた。



アラーム通りに作動した目覚まし時計が鳴り響く。スイッチを押して止めた私は、ベッドから飛び降りた。

「……やっばい。本気で寝てた……」

念のためにアラームをセットしててよかったとさえ思う。現在フォワードチームは自由待機中だ。オフシフト他のみんなはまだ休憩所でお菓子を食べている頃だろう。

(でも、今の夢……)

不思議な夢だった。十歳にも満たない男の子が、違法施設に連れられていかれて、薬物投与とか気が狂いそうな実験を受け続けて——ついに施設の関係者を殺し、破壊していた。そして出会った男——ジェイ・スカリエツェイに連れて行かれた彼は、名前を与えられた。名前は確か——『フェアクレールト・ナハト』。

漆黒の髪に、赤い瞳。あの少年は、彼の過去だと考えるのが自然だろう。

でもあれは、ただの夢なのだろうか？

そんなことない、と私は頭を振る。ただの夢にしては出来過ぎているし、何より秋月の血がそれを否定している。ただの夢なんてない、

もしそうだとしてみちゃんの意味は存在するのだと。

「フェア……」

もしこの夢が事実だとしたら、彼がスカリエツティを「恩人」と呼んだのも分かる。けれど、だからといって彼を見逃すわけにはいかない。なら自分にできることをするだけだ。

よし、と私は気合を入れ直す。ロゼットを手に部屋を出て、訓練場に繰り出した。

## 16：その日、機動六課（前編）

9月11日、午後19時14分。場所は機動六課隊舎入口。

「というわけで、明日はいよいよ公開意見陳述会や」

いよいよ明日の開催を迎えた公開意見陳述会。その警備のため私たちフォワードとスターズ分隊長、副隊長、そしてリイン曹長は準備と仮眠を取って、集まっていた。

「明日14時の開会に備えて、現場の警備はもう始まっている。なのは隊長と、ヴィータ副隊長、リイン曹長とフォワード五名はこれから出発。ナイトシフトで警備開始」

「みんな、ちゃんと仮眠取った？」

「はいっ」

その返事に満足げに頷いた八神部隊長は指示を続ける。

「私とフェイト隊長、シグナム副隊長は、明日の早朝に中央入りする。それまでの間、よろしくな」

「はいっ！」

そして、所変わってヘリポート。出発を控えた私の視界の端に見慣れた色が映り込む。——ヴィヴィオが、寮母のアイナさんと一緒に、そこにいた。

「ヴィヴィオ？」

「どうしたの？　ここは危ないよ」

「ごめんなさいね、なのは隊長。どうしてもママとお姉ちゃんのお見送りをするんだって……」

そういうえば、なのはさんが夜勤体制というのは今日が初めてだ。ヴィヴィオも不安がっている。

「なのはママ、今夜は外でお泊りだけど、明日の夜にはちゃんと帰ってくるから」

「絶対？？」

「絶対に絶対」

言って、なのはさんは右手を指きりの形にした。

「良い子で待ってたら、ヴィヴィオの好きなキャラメルミルク作って



あげるから。ママと約束ね」

「うん！」

「それにしても、ヴィヴィオ。ほんとに懐いちゃってますねー」

「全く」

「そうだね。結構厳しく接してるつもりなんだけどなあ……」

「きつと分かるんですよ。なのはさんが優しいって」

「あははは……」

最近、ヴィヴィオはよく笑うようになった。初めて会った時みたいに、なのはさんや私以外の人に会ったら泣き出すことはなくなつて、自分から挨拶だってできる（ママの教育方針か？）。いつそのまま、ということも理想ではあるんだけど……。

「受け入れてくれる家庭探しはまだまだ続けるよ。良い受け入れ先が見つかつて、ヴィヴィオがそこに行くことを納得してくれれば」

「納得しない気が……」

「うん」

「えー！」

エリオの言葉に、キャロが同意する。なのはさんは不服そうだが、私も二人と——ひいてはフォワード全員と同じ意見だ。

「ああ……ずっと一緒にいられたら嬉しいけど、本当に良い行き先が見つかったら、ちゃんと説得するよ？　良い子だもん。幸せになつて欲しいから」

そりや、ヴィヴィオを本当に受け入れてくれる家庭が見つかればいい。——私にとって、それが伯父夫婦だったように。けれど現状では難しいと思う。

何より、私もヴィヴィオの「お姉ちゃん」であるわけで。自分がこれまで守られる「妹」だったからこそ、今度は私が「姉」として守る番だと思っている。

「あ……まあ！　そんな家庭が見つかるまでは、私が責任もって守つてくよ。それは、絶対に絶対」  
「ですねー！」

「はい！」

スバルと、エリオ、キャロは満面の笑みで頷いた。なのはさんが私を見る。

『深琴お姉ちゃん』も、手伝ってね」

「……はい！」

日付が変わって、午前2時35分。陳述会会場となっている地上本部の警備は、物々しかった。警備員に、陸士制服のまま汎用デバイスを構えた魔導師組。とはいえ機動六課は本局直属の部隊であるため、担当場所は端っこだ。場所がどこだろうと真面目にやらないと、思う反面、ちよつとのんびりしているのが現状だ。

駐機場で、ティアナとすれ違う。小走りでその場を離れた彼女と、その背中を見送るヴァイス陸曹。

「……泣かせましたか？」

「いきなり何言ってるんだ、おめーは」

へりにもたれながら、ヴァイス陸曹は言う。

「お前といいティアナといい……真面目に警備しろつつの」

「文句は担当を端っこにした地上本部に言ってください。……それに、仮にも六課は本局の部隊です。その上先日査察を受けたばかり。地上本部の印象は最悪です」

戦力だけで言えば重要場所の警備を任せられるはずだ。けれども今はデバイスの装備すら許可されないし、汎用デバイスは配布の声すらかけられない。

「……で？ わざわざ、何しに来た？」

「お伺いしたいことがあります。——霜月秋葉さんの件で」

その名を聞いた陸曹の頬が、ピクリと引き攣った。

「なんでまた、いきなり……」

「彼女が管理局を辞めたのも、ティアナのお兄さんが亡くなった原因も、ただの偶然では片付けたくないんです。首都航空隊の同僚だとお聞きしたので」

秋葉さんは、ティアナのお兄さん——ティーダ・ランスターのコン

ビパートナー。けれどティーダさんは亡くなり、秋葉さんは管理局を辞め、今は海鳴市で嘱託魔導師だ。けれど未だ調子は万全ではなく、魔力値も半分を切っているらしい。

その直接的な原因を知る者は、いない。

「……俺も現場にいたわけじゃねえし、詳しくは知らねえ」

そう前置きして、陸曹は口を開いた。

「元々俺とあいつらは同じ部隊でも担当が違ってたんだよ。でもまあ顔合わせたら世間話くらいはする程度には仲が良かった。ティーダはともかく秋葉はまだ入隊したてで、あまり他人に心を開いてなかったが」

「はい」

「六年前——逃走した違法魔導師の逮捕のため、あいつらに出勤命令がかかった。なんせ航空隊一のコンビだ。すぐ片付くだろうって思ってたが……実際は、秋葉は瀕死の重傷を負って、ティーダは亡くなった。ティーダの遺体は一時期地上本部に預けられてたって話さ」  
名目は「死因の解明」らしいけどな、と陸曹は続ける。

「その遺体を現場から回収したのは秋葉だったんだけどな。二人揃って血塗れで……航空隊の防護服、分かるか？」

「一応は」

「ちらり、と視線を横に流す。そこには航空武装隊から派遣された警備部隊がいた。

「その防護服も無残な状態になってな。それも砲撃とかそんなんじゃないくて、まるで斬られたみたいに。逃走した魔導師はミッドチルダ式の術者だって話だったから、二人を覚えてるやつらはみんな首傾げてたぜ。……入院中もちよくちよく様子を見に行ったが、あいつは何も話さなかった。挙句の果てに黙って資格返納して管理局辞めて、行方くらましたっつーわけだ。そこから俺も知らねえけど……」

「海鳴市にいらっしやいましたよ。現地の嘱託魔導師として」

「……そうかい」

「なのはさんを襲った『未確認兵器』がガジェットだったとして。任務中のティーダさんと秋葉さんを襲ったのもまたガジェットだった

としたら。

気になる点は一つ。ティーダさんの遺体を預かっていたのが地上本部という点だ。

(考えられるのは情報の漏洩を防ぐため……)

遺体に残った刺し傷とかをばれないようにするために。確かにミッドチルダ式の魔法でも斬撃や刺突魔法もある。だがもしそうだとしたら……。

(今回の襲撃の予言は内部のクーデターというより、マッチポンプが正しいのかもしれない……)

例えば、地上本部——もしくはそれに準じる関係者が、ジェイル・スカリエツティと協力関係にあったとしたら。スカリエツティが開発した「魔法を無効化する」ガジェットと、魔法とは違うエネルギー構造を持つナンバーズへの対抗策に『アインヘリアル』を運用するために。

運用されれば、本局次元航行艦隊や希少技能保有者に頼らず地上の安全保障体制を確立できる、とされている巨大魔力攻撃兵器・アインヘリアル。今回の意見陳述会の争点にもなっているという話だ。

……でも六年も前から？ 組織までも疑いたくは無い。

「ま、元氣そうならそれでいいさ」

「ヴァイス陸曹は、お優しいんですね」

ぼろっと、他意のない言葉が出てきた。その瞬間陸曹はへりに頭をぶつける。大丈夫ですか、と声をかけると「馬鹿野郎」と頭を叩かれた。

「んなこと気にする暇があったら、とつとと警備に戻れ！」

「はい」

これ以上文句を言われるのは避けたいので、とつとと警備場所に戻る。

(……秋葉さん)

兄とのメールには、彼女のこともある程度記されていた。事故に遭って管理局を辞めたこと、両親がいないこと。そして何より「名前がなかった」こと。だから名前を貰うまでは——貰ってからもしばら

くは誰にも心を開けなかったこと。自分という存在が分からないから、いなくなつたつて一緒だからと。

(そんなこと、ないですよ。心配してる人、たくさんいます)

ヴァイス陸曹や、零さんのように。きっとそれは私の兄も同じはずだから。

◇

9月12日、午前11時55分。

「公開意見陳述会の開始まで、後三時間を切りました。本局や各世界の代表によるミッドチルダ地上管理局の運営に関する意見交換を目的としたこの会。波乱含みの議論となることも珍しくなく——」

地上本部には、人が続々と集まり始めていた。八神部隊長にフェイトさん、シグナム副隊長。騎士カリムとシスター・シャツハ。そして報道陣。

「いよいよだな」

「そうですね……つてええっ!?!」

聞き慣れた声に思わず返事をしてしまったが、思い返せばその人物はいないわけで。思わず振り返った私を、声の主——零さんはドヤ顔で見ている。

「なななな、なんでここに!?!」

「まあひとまず落ち着け。そして俺だけじゃないぞ」

「へっ?」

ほら、と零さんは振り返る。そこにはディバイン・アーウィング執務官がいた。

「本局の人間はほとんど来ないが、一応顔を出しとこうと思つてな」

「俺はお前の顔見とくついでに、カリムの護衛という名目でついできた」

「零さん、優先順位が逆です」

ひとまずツツコミを入れておく。

「にしても、さすがに嚴重な警備だな。——なのは達は?」

「既に中で待機してらっしゃいます。八神部隊長たちは先ほど」  
「そうか。お疲れ」

わしゃわしゃ、と音が聞こえそうな勢いで、執務官は私の頭を撫でた。

「……にしても、本当に担当端つこだな……夜はしつかり寝たか？」

「零さん、零さん。六課は警備担当です。夜寝てたら大問題ですよ」

仮眠ならばつちり取りましたけども。兄にメールを送る時間だつてありましたとも。それに今は緊張感が勝っていて、眠気なんか吹っ飛んでいる。

「深琴」

呼びかけた執務官が、私の頭を小突いた。

「緊張感を持つことは大事だが、あまり力むなよ。何もかも全部を一人で背負いこむな」

「……はいっ」

「はあっ!? どういうことだ、それは!」

私の返事と同じタイミングで響いた大声は零さんのものである。見れば零さんは、地上本部の局員と言いつ争いをしていた。現状では零さんが優勢のようで、対応している地上本部局員がかなり恐縮した様子で説明を繰り返している。どうでもいいけど、零さんの職業って『騎士』じゃなくて『クレイマー』じゃないだろうか。

「……ですから上層部からの命令で、出席者や内部警備にはデバイスの持ち込みが禁止されておりまして……」

「命令がどうした! こっちは出席者の護衛で来てるんだぞ!? なのにデバイス持ち込み禁止ってふざけるのも大概にしろよ! 俺はデバイス持ちじゃないからいいけどな!」

「いいんかい!」

確かに彼が普段使用している刀は、私たちが使うようなデバイスではない。——真正正銘の、「太刀」というやつだ。インテリシステムも、カートリッジシステムも当然あるはずがない。そもそもデバイスですらないからだ。ある意味質量兵器でないことを理由に零さんは堂々と携帯しているが、本来なら立派な犯罪です。彼が特別な許可を

得ているためできる行動のため、他人には真似できない。するつもりもないけれど。

「……持ち込めないなら仕方ないな。深琴」

「は、はい！」

私を呼んだ執務官は、左腕から黒銀の腕輪を外した。

「アルカディアはお前に預ける。頼むぞ」

「はいっ！」

二人の背中を見送って、私は受け取ったアルカディアを強く握りしめる。少なくとも、信頼されているという事実が心揺らした。気合を入れ直して、同僚たちのもとへ戻る。

——今日一日、絶対平和に終わらせる！



夕暮れの光が、ミッドチルダを包み始めた頃。

「連中の尻馬に乗るのは、どーも気が進まねえけど」

そう、アギトは漏らした。その隣に立つ男は、「それでも」と彼女を諫める。

「貴重な機会ではある。今日ここですべてが片付くなら、それに越したことはない」

「まあね。……つか、あたしはルーラーも心配だ。大丈夫かなあ、あの子」

連中に協力的な姿勢を見せる少女は、今日もこれからの「祭り」のための作戦に参加していた。そんな彼女も心配だが、それと同じくらいアギトにとってこの男のことも心配の種である。自分を救いだし、てくれた恩人を守りたい、その目的を叶えたいと願う彼女にとって、今日ほどの好機はない。

そしてそれは、フェアクレールにとって同じことだった。地上本部のセンサーに引っ掛からないようリミッターをかけた状態で、彼はモニターに送られてくるリアルタイム映像に視線を遣る。声高に意見を主張する男と男を見つめる聴衆。そして地上本部の外で、同僚

たちと警備任務に就いている少女。

(……深琴……今日こそ、決着をつけよう)

思えばこれまで、彼女との戦闘は一戦目を除き引き分けが続いている。けれど今回は大丈夫のはずだ。協力者には手出し無用だと伝えであるし、邪魔者担当には協力者とガジェットがいる。心おきなく、彼女と戦うことができる。

「弱いなりに、頑張つてね」

「ナンバーズ、ナンバー3・トーレからナンバー12・デイドまで全機、配置完了」

『お嬢とゼスト殿、フェア様も配置に着かれた』

『攻撃準備も全て万全。後はゴースインを待つだけです』

その報告に、男——ジェイル・スカリエッティは満足そうに笑っていた。

「楽しそうですね」

そう言うNo. 1・ウーノも、楽しそうである。

「ああ……楽しいさ。この手で世界の歴史を変える瞬間に、研究者として、技術者として、心が沸き立つじゃあないか」

立ち上がったスカリエッティは、その金色の目に異常な光を浮かばせる。

「我々のスポンサー氏にとくと見せてやろう。我らの思いと、研究と開発の成果をな。——さあ、始めよう！」



## 17：その日、機動六課（後編）

その時、地上本部の内外は恐怖に包まれていた。突然のシステムクラックに侵入者、砲撃に召喚されたガジェット。後に、この日はこれから一週間ほど先に起こる事件の「予兆」として語られる。

その事件は『ジェイル・スカリエッティ事件』——略して、『JS事件』と。

「うわあああああー！」

悲鳴を上げて、陸士制服のままの警備組が逃げていく。辺りには召喚された無数のガジェットⅠ型とⅢ型。頭上に聳える地上本部からは煙が上がっていた。既に何十機かがバリアを突破している。

それらを可能な限り破壊していたのは、誰でもない。私たち機動六課のフオワードだ。

（八神部隊長、シグナム副隊長、なのはさん、フェイトさん！）

念話を繋ぐが、返事はない。

（っ、零さん！アーウィング執務官！）

こちらも、同じだった。建物内のAMF濃度はこれまで以上に高く、飛行すらままならない状況だ。

「ガスは致死性ではなく麻痺性！今防御データを送るです！」

報告によると、建物内ではガスが充満しているらしい。私たちの防護服は衝撃もしくは熱変化や魔力攻撃に対して高い防御性能だが、気体兵器についてはごく一般的な遮断機能しか持ち合わせない。そのため防護服のデータを更新することで万全の防御を行うのだ。

また通信妨害がきつく、六課本部との連絡すらままならない状況である。ここまでの経過から考えると、一味は最初から事前に情報を得ていたに違いない。それも適切かつ、正確な情報が。それに戦闘機人のハイスペックが加われれば、向かうところ敵なし、だ。

……ああ、非常に腹が立ってきた。ここまでしてやられているとい

う事実や、その他諸々全て含めると余計に。……どこかで戦闘機人と遭遇したら、一機や二機ほどぶちのめすかもしれない。それほど私のストレスは溜まっていた。

けれど今優先するのは、内部に残っている人たちの安否確認だ。そしてそこには内部に侵入した敵の排除も加わっている。だが今、地上本部に向かって推定オーバーSランクのアンノウンが向かっているという——この中で空戦ができるのは私か、副隊長しかない。

「副隊長、私たちが中に入ります！」

そう言ったのはスバルだった。なのはさんから預けられていたレイジングハートを握りしめている。

「なのはさんたちを、助けにいかないと！」

フォワードチームは頷く。スバルの案にヴィータ副隊長も頷いた。

「空はあたしとリインが上がる。地上は——こいつらがやる！」

◇

「落ち着いてください！　こちらは大丈夫です！　心配はありません！」

局員が、声を上げているのが聞こえる。その様子に零は肩を竦めた。

「この状況で落ち着けるかっての」

「お前が言うな」

「あはは」

「無理もないかな」

なんせ窓の外にはガジェットが、中は隔壁でロックされ閉じ込められるという状況だ。その上エレベーターも動かないし、外との通信も繋がらない。念話ですら繋がらないのだから、これで慌てない方がおかしい。

「で、どうする？」

「一応、緊急時の移動ルートは指示してあるよ」

「目標合流地点は地下通路、ロータリーホール」

「……問題は、そこまでどうやって行くかというだけか」

なのは、フェイト、デバイス、零はほぼ同時にある一点に視線を向けた。そこでは有志がエレベーター前で作業している。システムを解除して、扉をこじ開けようとして。

「……なあ、俺、今思いついたんだが」

「うん。多分みんな同じこと考えてる」

「心読むなし」

零の呟きに気を留めることなく、なのはは三人を振りかえった。

「ちよつと荒業になるけど……みんな、付き合ってくれる?」

「ああ」

「当然」

「おい俺は無視か……ちよつと行ってくる」

「おい、ちよつと離れてろよ」と、間延びした口調で、零は有志達を遠ざけた。

「あ、あの、騎士零……何を?」

「決まってるんだろ。危ないから下がってろよ」

言って、零は刀に手を遣る。腰で溜め、集中すること数秒。一步踏み出すと同時に刀を抜き、薙いだ。

「……また、つまらぬものを斬ってしまった」

その呟きと同時に、扉は無残にも瓦礫と化した。おお、とどよめきと歓声上がる。

「いいよねえ、零くんは。その刀、デバイスじゃないから」

「まあな」

「……この修繕費はどうなるんだ?」

「ど、どうなんでしょう……?」

「え、まさか俺持ち?」

「……うん。これなら」

「ちよ、おま、フェイト! 無視すんなよ! 後マジでやんのか!? 結構高さあんぞこれ!」

「どうやらエレベーターは一階より下まで降りているらしく、中は暗闇に包まれていた。」



『……また、つまらぬものを斬ってしまった』

(何やってんですかっ！)

どこからともなく聞こえてきた零さんのボケに、私は反射的にツツコミを入れた。向こうはどういう状況なのか、分かるようでわからない。

一方こちらは、赤毛の戦闘機人コンビ——ノーヴェとウエンデイと戦闘中。それでも余裕があるのは、今私がフルバックとして支援に集中しているためだ。……同時に攻撃が手薄になっているけども。

エリオがウエンデイの攻撃を引きつけている。目の前ではティアナのシルエットが消え——私たち5人全員のシルエットが何十体——目視確認だけで五十体以上——と現れたところだ。その動きはどこか無機質——言ってしまうえばゾンビじみっていて、ちょっと怖い。

《The load by the silhouette control increases.『幻影制御 負荷増大』》

《The limit of the energy boost is near.『エナジーブースト、リミット間近です』》

それぞれクロスミラージュ、ケリユケイオンが告げる。

(……ロゼット。あなた単体で、どのくらい持ちそう?)

《It lasts for 5 minutes.『五分は持ちこたえて見せます』》

(ごめん、助かる)

幻影の制御・維持にいつばいいいつばいのはずのティアナが、念話を繋いだ。

けれど、何故ティアナは戦闘機人の——幻影に対する知識があるのだろうか。そして先ほど赤毛コンビが言っていたタイプ・ゼロ——多分、スバルのことも。

「幻術だろうがなんだろうが……要は全部潰しやいいんだろうが！」

言って赤毛の少女——確かノーヴェと呼ばれていた——は、その右

手に黄色いスファイアを6つ生成した。

が、それも無意味に終わった。幻影に紛れ込んでいたスバル（勿論本物）が背後から突撃し、彼女を吹っ飛ばす（一瞬見えた横顔が非常に怖かったことは内緒）。そして彼女に加勢しようとしたウエンディは、ストラーダのサードモードからのサンダーレイジに倒される。「てったーい！」

その指示に従って、私たちと幻影集団は走りだす。とはいえ制御限界を迎えていた幻影は、すぐ消えてしまったけれど。

◇

「高町一尉！ 騎士零！」

「シスター・シャツハ」

「どうかしたか？」

地下一階、ロータリーホール。エレベーターのワイヤーを利用して降下したなのは達の後ろから、シスター・シャツハが駆け寄った。

「はやてちゃん達は？」

「お三方とも、まだ会議室にいらっしやいます。ガジェットや襲撃者たちについて、現場に説明を」

「意味はないだろうがな」

言って、零は肩を竦める。そんな彼にシャツハは厳しい視線を向けるが、反論しなかった。

と、5人の反対方向から見慣れた姿が5人分＋1匹やってくる。

その光景にフェイトが笑みを浮かべた。

「あ、いいタイミング」

◇

視線の向こうには、なのはさん、フェイトさん、零さん、アーウィング執務官、シスター・シャツハの姿があった。よかった、無事だった。

「深琴、無事か？」

「何とか。途中、戦闘機人2名と交戦しました。赤毛の女の子で、一人は格闘型、もう一人は射撃型でした」

「女の子……？」

「そう言えば、前に交戦したのも女だったよな。……開発者って、もしかしくても変態？」

執務官にアルカディアを渡しながら、全員に報告する。零さんの咳きはあえて無視することにした。

「……ギン姉？ ギン姉！」

「スバル？」

悲痛な声で、スバルはギンガさんと呼んでいた。彼女を呼んだなのはさんに、スバルは不安そうな表情で答える。

「ギン姉と通信が繋がらないんです！ まさか、あいつらと……」  
「っ！」

その言葉に不安を覚えた私は、急いでロングアーチと通信を繋ぐ。

「ロングアーチ、こちらロングアーチ04」

『……深琴？ こちらロングアーチ……』

応答したグリフィス准尉の声のほとんどが、ノイズで遮られていた。

「グリフィス准尉？ まさか、そっちも……」

『……こっちは今、ガジェットとアンノウンの襲撃を受けて……持ちこたえているが、もう……』

『防御システム……もう持ちません！』

「ルキノ！」

ノイズを掻い潜って、ルキノの声が聞こえる。六課に残っている魔導師はシャマル先生とザファイラ、ヴァイス陸曹と交代部隊だけだ。

「分散しよう。スターズはギンガの安否確認と襲撃戦力の排除」

「ライトニングは六課に戻る。深琴は……」

「六課に戻ります。……私だって、ロングアーチだから……」

一瞬、執務官は心配そうな目で私を見たが、気づかない振りをした。「うん。零さんとデイベインは、こっちで私たちと一緒に」

「……ああ」

「了解。シャツハ、カリム達を頼む」

「もちろんです。あなたも、気をつけて」

「深琴も、無茶するなよ」

「はい！」

幸い、魔力にはまだ余裕がある。それに、いざとなったら……。

地上へ戻り、そのまま飛翔する。

「フェイトさん、先行してもよろしいでしょうか？」

「うん、気をつけて！」

「了解！」

不安でたまらない。みんなが無事かどうか心配で、それ以外のことはあまり考えられなくて。

(ヴィヴィオ……)

きつとヴィヴィオも、不安で泣いているだろう。

(待ってて。お姉ちゃんが、すぐ行くから！)

◇

「あつれー？」

倒れている局員を軽く蹴って、フェアは首を傾げた。その赤い眼はきよろきよろと周囲を映している。

「なんか全然楽勝なんだけど。いいのかな、これで」

楽であることに越したことはないが、あまりにも楽すぎる。

「つていうか弱すぎ？ ……深琴はどこだろ」

つい先ほどまで、彼女の魔力を感じたというのに。今はどこを探しても感じられない。愛機にも探させているが、反応はない。ノーヴェとウエンデイの報告によれば、彼女たちと交戦した魔導師集団の中に深琴がいたという。それからあまり時間は経ってないはずだから、探查範囲外に出ることはほぼないはずだ。

「……何者だ、お前は……」

「あ、まだ喋れる？」

フエアが踏みつけていた局員が、彼を睨みつける。その視線を意にも介さず、フエアは笑った。

「まあ、今日のところはドクターに感謝してね？　誰も殺すな、って命令だから」

「ふざけるな……！」

「うるさいなあ。弱い犬ほどよく吠えるっていうけど、本当なんだね」  
言って、フエアはアインザッツの銃口を局員の額に押しつけた。

「でもね、『殺すな』とは言われてるけど『怪我させるな』とは言われてないんだよね。——言ってる意味、分かる？」

笑顔とは裏腹に、フエアから放たれる殺気は本物である。気づいた局員が震えだした。

「ああ、ようやく分かった？　そういうことだから、大人しく倒れててよ。平和と法の守護者だかなんだか知らないけど……綺麗ごとだけで全部解決できるわけないでしょ？」

言ってフエアは、局員の鳩尾に拳を叩きこむ。局員の体がぐったりと倒れ落ちたのを確認して、更に歩を進めた。

その背後で、魔力が揺らめいた。銀色をしたそれは十数発の魔力弾となつて、躊躇いなく彼へと飛んでいく。

「せっかくのプレゼントなんだから、喜んで受け取ってほしいものだよね」

魔力弾を弾き返したフエアは、呟いて口角を上げた。その視線の先には、銀髪の男が立っている。

「誰が受け取るか。熨斗つけて返品してやる」

「まあそう言わずに、さー！」

アインザッツをショートソードに変形させて、フエアは男——デイバイン・アーウィングに斬りかかった。

「あんたがいるってことは、深琴もここにいるんでしょ？　どこ？」  
「教える馬鹿が……どこにいる！」

銀色の魔力刃を展開させて、デイバインは腕の力だけでフエアを弾き飛ばす。

「そう言わずにさ。ね？」



「——いっそ定番でこれはどうだ？」  
「っ!？」

声と同時に、背後から斬りかかられた。深紅色のバリアが刀の刃を噛む。乱入した黒髪の男——渡辺零は微笑んだ。

「俺たちを倒したら、教えてやるよ」

◇

機動六課が、燃えている——。

目の前の光景を、私は信じられなかった。いや、信じたくなかった。交代部隊のみんなも、バックヤードスタッフも息はある。でも、動かない。

「みんな……ヴァイス陸曹……」

《Round Guarder Extend.》

私の視界の端で、人型の召喚獣が動いた。その腕にヴィヴィオを抱いて。

「……ヴィヴィオ……」

「この子で、間違いない?」

『はい、間違いありません。保護してください。ありがとうございます。その子もとても可哀想な子なんです』

召喚師の少女が、確認している声が響く。——保護、だって!?

「……っ、ふざけんなああー!」

少女たちへ斬り込もうとした瞬間、横から現れた別の少女に邪魔をされる。

「……ありがとう、デイド」

「いえ。お嬢様、お早く」

「うん」

「……な……」

全身の血が、沸騰したように熱くなる。炎に包まれる隊舎、戦って、傷ついた同僚たち、そしてヴィヴィオ——。

「邪魔を……っ!」

《Form vier.》

ロゼットがサードモード——身の丈ほどの大剣へと変形する。

「するなああああああああ！」

「っ!？」

「デイドー！」

ナンバーズの髪の毛の長い少女が吹き飛んだ。

「……返せよ……」

別の戦闘機人の一声で、ガジェットが動き出す。それらが大剣で一薙ぎして一掃した。

「……六課を、みんなを……ヴィヴィオを……返せえええええ！」

◇

「いい加減、投降したらどうだ」

「……誰が」

デイバインの提案に、吐き捨てるように答えたフェアはデバイスを構え直した。諦める様子を見せない彼に、零は肩を竦める。

「これ以上やっても無駄だと思うけどな。俺たちだってプライドってものがあるし」

「深琴の居場所を教えてくれたら、すぐにでも離脱するよ」

「それじゃ意味ねえっての。とにかくお前は深琴の名前を出すな。こいつ、深琴に関しては親馬鹿な上に過保護だから。今マジで気が立ってる」

「黙れ、殺すぞ」

地を這うような低い声が響くと同時に、銀色の砲撃が零の髪を僅かにかすった。

(こいつら……)

まるで漫才のような光景を見つめながら、フェアは腰を低くする。(騎士も魔導師も、個人技能でオーバーSランク……連携戦においては、それ以上ってどこか)

戦闘スタイルの違いと、息の合った連携。

(スタン設定の魔力弾といい、バインドを挟みこむタイミングといい……魔導師の方は手慣れてる……)

何度か接近戦を挑んでみたが、それも全てダガーモードに変形させたデバイスで捌かれた。その動きに不慣れ故の無駄はない。その動きは何より、深琴のそれとよく似ていた。

(これ以上長引かせるのは危険、だね)

「まだやるか?」

未だ失われない戦意に、零は溜息を吐く。負けず嫌いは好ましい性分ではあるが、引き際を間違えるのはただの愚か者だ。

零の足元で黒い剣十字が輝くと同時に、先ほどまで感じられていた気配が消えた。それが示す事実を、零は一瞬受け入れることができなかった。

「……深琴? ……どうした。なにがあつた!」

「お前も落ち着け! 深琴がどうした!」

そして零以上に、デバインはその事実を受け入れることができなかった。主に代わって、デバイスが告げる。——ローゼンクランツがシステムダウンした、と。そして消えた深琴の魔力反応——それらが示すのは至極簡単なことだ。

「深琴が、墜ちた……?」

「……マジかよ……」

だが、まだ確定したわけではない。零はそう思考を切り替える。

深琴はそれほど軟ではない。毎日自分やなのは達が鍛えているのだ。きつと今のだって、妨害が強化されただけだ——最後は現実逃避だったが、それでもまだ確認したわけじゃない。

「零」

「……わーってる。先に行け。俺もすぐ行く」

「すまない」

「って、勝手に話を進めないでほしいんだけど!」

戦闘を離脱するデバイスに、フェアは銃口を向ける。そこに切り込んだ零の足元で再び、黒い剣十字が輝いた。そして剣十字は複数展開され、さらに輝きを増す。

「悪いな。出し惜しみは無しだ」  
無限に生まれる輝きに、零は手を伸ばした。



炎に包まれた機動六課で、巨大な黒い竜が暴れている。ガジェットを破壊し続ける竜とは別の方向に、深琴はいた。外装を完全に失い、アンダースーツから素肌のほとんどが露出し、白い肌には無数の傷を負っていた。手にしていた愛機はこの激戦に耐えられなかったのだろう。——メインシステムが完全に落ちていた。周辺に残骸となつて残されたガジェットには大量の血液が付着している。愛機を失つてもなお、彼女は戦い続けていたというのか。

「深琴……」

「……………」

しかし、それでも深琴は立っていた。魔力も疲労も限界を超えていくはずなのに、その体から戦意は消えていない。

「……ヴィヴィオ……ごめんね……」

眩くと同時に、深琴は崩れ落ちた。

## 18：翼、ふたたび

思い出すのはいつだって、彼の最期。それは逃走した違法魔導師の逮捕という、とても簡単な任務。けれど実際はそうではなかった。敵は、魔導師だけではなかったのだから。音もなく近づいた機械が、その刃で私の胸を貫く。それに気を取られた彼もまた、魔法が効かないその機械の刃に貫かれた。何度も、何度も。時には私を庇って、彼は攻撃を受け続けた。重傷を負った彼に、私の治癒魔法はほとんど効果がなくて、でも救援が来るまではなんとかしたかった。

だって自分は、彼のコンビパートナーだから。彼と共に戦うことが、彼とともに生きることが自分の存在意義だと思っていたから。蒼氷色に輝く魔力が、彼に流れていく。同時に自分の体から赤い血が滴り落ちた。

「もういいよ……」

弱弱しい声で、彼は言う。

「これ以上は……きみが、危険だ……」

「っ……喋らないで……まだ、大丈夫だから……」

もちろん大丈夫なはずはなかった。けれどその時、自分のことなんか考えていなかった。ただ、彼が生きてくれればいい。私なんかより、彼の方がずっと大事で、大切に。

「……ありがとう……」

彼が、微笑んだ。血に濡れた手の平で、私の髪に触れる。まるで撫でるように何度も、何度も。

「……君は強いから、この先も……大丈夫だよ……」

「……この先って……何、馬鹿なこと……」

お互い限界が近いことは分かっている。でも、認めたくなかった。

「……秋葉……」

彼は、笑っている。出会った頃と何も変わらない、優しく、暖かいその笑みを浮かべて。

「約束、守れなくて、ごめん……」

——そして笑顔のまま、彼は逝った。

彼は、自分の夢をよく話していた。執務官になって、これからも妹を守り続けると。そして。

『その時は、秋葉に補佐官をしてもらおうかな』

『……寝言は寝て言え、とでも言えればいいの？』

『僕は本気だよ。秋葉、結構事務得意だし』

入ったばかりの私の「教育係」だった彼は、言った。「約束だよ」と、笑って。

そう。いつだって、記憶の中の彼は笑っていた。

屋上に吹く風が、更に強さを増した。揺れる髪を押さえるのを合図に、足下に幾何学模様の魔法陣が輝いた。

(……ねえ、ティード)

今は亡き友に、思いを馳せる。

(今度こそ、守れるかな?)

答えのない問いを繰り返しながら、秋葉は転送ポータルへと足を踏み入れた。

◇

「っ……………」

意識が、浮上した。ゆっくりと広がった視界で、銀色が揺れる。見間違えるはずがない。

「……アーウイング、執務官……?」

「……目が覚めたか」

ほっとしたのか、執務官は大きく息を吐いた。

「……………ここは……………?」

「聖王医療院だ。他の隊員も、運び込まれている」

「みんなも……………?」

ガジェットに囲まれ、ナンバーズと召喚師に襲撃された機動六課。炎に包まれる隊舎に、倒れていた同僚たち。そして——連れて行かれた、ヴィヴィオ。守れなかった。助けられなかった。

体を起こすと同時に体全体に鈍い痛みが走る。だが、耐えられない

痛みではない。制止を振り切って、私は立ち上がった。

「そんな体で、どこに行くつもりだ」

「……六課へ、戻ります」

みんな大なり小なり怪我をしているのなら、尚更だ。それに、今ロングアーチは……。

「アルトも、ルキノも、シャリーも、シャマル先生も、ザフィーラも、リイン曹長も、グリフィス准尉もヴァイス陸曹も……みんな、いないのに……！」

と声を荒げたと同時に崩れ落ちた私の体を、執務官は受け止める。そのままベッドまで横向きに抱きあげられた。ベッドに到着すると、執務官は溜息を吐いた。

「だとしても、今の状態では危険すぎる。せめて今日一日くらい安静にしてろ」

「でも……！」

「少しは俺の言うことも聞けー！」

いきなりの大声に身を竦めると、執務官は悪い、と小さく謝罪した。「だが、今の状態ではあまりにも危険すぎる。覚えてないだろうが、つい数時間前まで集中治療室にいたんだぞ。……それに、ロゼットの破損状況も酷い」

そうだ、ロゼットは、とベッドに戻されると同時に思い出す。六課の隊舎が壊されて、みんなが怪我をして、ヴィヴィオが連れて行かれて——散々な状況に、私は俗に言う「暴走状態」に陥っていた。ただ目の前の戦闘機人やガジェットを倒すただけにサードモードを起動させ、短時間とはいえ「奥の手」を使ってしまうという事態。後先考えない魔力消費や相手の攻撃などの蓄積ダメージで、ロゼットは武装のほとんどを破壊され、そのシステムは完全に落ちた。

けれど、彼女は最後まで私とみんなのことを気にかけていて。

なのに、私は……ロゼットのことを、なにも考えてなかった。自分で勝手に道具扱いして……。

「……奪われたものは奪い返す、必ず助け出す。それだけは忘れるな」  
「……はい」

執務官が言うと同時に、部屋の扉が軽く叩かれた。開いた扉から顔を出したのは、ティアナだった。

「よかった。目、覚ましたんだ」

ほっとした様子で、ティアナは言う。ちよūdい、と執務官は腰を上げた。

「しばらく外に出ている。こいつが羽目を外さないよう、見張ってもらえるか?」

「はい」

執務官の背を見送って、ティアナは椅子に腰かける。ほら、と袋からジュースと菓子パンを取り出した。

「起きたばっかで、ご飯ろくに食べれてないでしょ? ちよūtとお腹に入れときなさい」

「うん。ありがと、ティアナ」

紙パックのジュースの口を開け、ストローを刺す。よかった。もし缶だったら開けられないところだった。

「……体、まだ辛い?」

「動かしにくいけど、大丈夫。……ねえ、ティアナ」

「何?」

缶ジュースを一口飲んだティアナは、首を傾げる。

「あのね……スバルと、ギンガさんのことなんだけど」



所変わって時空管理局本局技術部。そこを訪れた零は、修復用ポットに浮かぶ淡紅色のクリスタルを凝視していた。脳裏に過るのは重傷を負った妹分の姿。

「れーいー」

そして現在、自分に抱きつく女性二人に、零は溜息を吐いた。会わなくなつて早数年が経つというのに——そして互いにいい年なのに、この二人のスキンシップは昔から変わらない。

「……で、ちゃんと直るんだろうな」



「まあ、一応はね」

そう答えたのは髪の長い女性——藤原咲夜だ。

「つていうか言われなくても直すし」

「シャーリーお手製、マリー先輩改良つていう、血統書つきの機体いい子だしね」

うんうん、と髪の短い女性——藤原楓は頷く。でも、と楓は続けた。同時に呼び出したモニターにはローゼンクランツのデータと、フェアクレールトのデバイス・アインザッツの戦闘データが映し出されている。

「問題は、どつからデータが洩れたかってことなんだよね。六課は本局の部隊だから、登録デバイスは全部本局でデータ管理してるんだけど」

「でもアインザッツが出てきたのつて、初出動の時でしょ？ いくらスカリエツティが優秀でも、各モードまで似せたやつを初出動の時にぶつけるなんて無理だよ」

それ以前に、彼はその時点で使いこなしているんだから。そう言つて、咲夜はカフェオレを飲み干した。

「スカリエツティが開発したデバイスが、偶然同じ形だったという確率は？」

「かなり低い」

「少しは悩んでくれ」

間髪いれずに即答した義姉二人に、零は深い溜め息を吐く。

「……可能性としては、本局側にも『内通者』がいるつてことか？」

「じゃないの？ 知らないけど」

「だからハモるな！」

しかも知らないのかよ、とツツコミを入れて、零は視線をローゼンクランツに遣った。つい先ほどデivainからの連絡によると、深琴は無事目を覚まし、魔力回復も順調だという。

(肝心のこつちがなあ……)

と、別のモニターが一枚開かれた。膨大なデータが整理され、やがて一つのそれに組み上げられていく。

「ロゼット? どうした?」

《Favor to ask and then repair.  
『修理ついでに、お願いしたいことが』》

表示されたモニターに目を通した楓、咲夜は口を閉ざした。

「……本気か? ロゼット」

《Yeah. Afford to lose more than  
this I'm not going. — Whether, t  
hank you for your cooperation.  
『ええ。これ以上負けるわけにはいかないのです。——どうか、ご協  
力を』》

◇

『こちらは、昨日テロ事件の被害を受けた時空管理局ミッドチルダ地上本部の上空です』

ニュースアナウンサーの言葉に、私はデータを纏めていた手を止める。そこには瓦礫と化した施設の一部やガジエットの残骸、その調査をする局員の姿が映し出されていた。

『施設の被害や負傷者の数、事件の詳細については、未だ管理局側からの発表はありません。事件直後に犯人らしき人物からの犯行声明があった模様ですが、その内容については慎重な検討の後に公表する、と広報部からの報告がありました』

「……そっか。システムにクラッキングしたんだから、そこから犯行声明が流せるもんね……」

だが、地上本部のセキュリティはそんなに脆いものだったのだろうか。もしそうだとしたらこれまでまでの事件でよくその隙を突かれなかったものだ。

それとも……。

(戦闘機人が優秀なのか……手引きした人間がいた……?)

ニュースを流し続けるモニターの電源を落として、私は纏めていたデータに目をやる。

一つは『戦闘機人事件』。今から八年前——新暦67年に発生した事件で、地上本都防衛隊が担当していた事件だという。違法施設の摘発を行っていた同隊が壊滅した事件でもある。だが事件の詳細は隊員たち家族にはもちろん本局にも知らされていない。スバルとギンガさんのお母さん——クイント・ナカジマ捜査官が亡くなった事件で、スバルとギンガさんは事件中ナカジマ夫妻に保護された「戦闘機人の実験体」だそうだ。

そもそも戦闘機人とは、鋼の骨格と人工筋肉を持ち、遺伝子調整やリンカーコアに干渉するプログラムユニットの埋め込みによりその戦闘力を大幅に強化させた人型兵器である。ここミッドチルダでも人工骨格や人工臓器の使用は珍しくない。だがそれはあくまで「身体機能の代わりを務める」レベルのもの。それだって拒絶反応や長期使用におけるメンテナンスなどの問題だってある。

それをクリアするために、ジェイル・スカリエッティは「素体になる人間の遺伝子を調整」することでこの技術を完成させた。その技術の根底には、「プロジェクトF」が関わっているらしい。

ちなみに似たようなものに、「人造魔導師」というものもある。遺伝子操作とか人工的な手段で「強力な魔導師」を生み出すそれは、遡れば古代ベルカの時代から研究されている。もちろん私達秋月家も、遡ればこの種類に該当する。古代ベルカの技術はあらゆる望みが叶う理想郷・アルハザードからの提供があったとか言われるくらいのもんだから、かなり異常だ。古代ベルカの書物——聖王統一戦争付近のそれをひも解けば、一目瞭然である。分かりやすい具体例を挙げるなら「聖王のゆりかご」だろうか。

聖王のゆりかご。長く続いた戦乱の最中、高い武力を誇った古代ベルカ聖王家はこの船を居城とし、王家の血族のうちある一族の者たちはこの戦船の内部で生まれ、育ち、子を残していった故に、「ゆりかご」と名付けられた戦船。それは軌道上——「二つの月」の魔力を受けられる位置まで到達すると、なんと地上への精密狙撃や魔力爆撃まで可能となるのだから。

(先史ベルカ時代から、既にロストロギア扱いされてた理由も分かる

気がする)

現在の魔導理論では、軌道上の月が魔導師の魔力や魔法に与える影響はないとされているし、魔導師達の実感もない。だがごく一部の魔法では、月の位置の影響を受けるといふ実験結果も残されていた。ゆりかごもその一つ。……なんか、ファンタジー小説を読んでいる気分だ。

もちろん、今はそんな悠長なことを言ってる場合でもないのだけだ。

情報を整理していたモニターを閉じて、私は横になる。鈍い痛みはまだ全身を駆け巡っている。清潔感しか感じられない空間にただ一つだけ置かれた白いベッド。それはかつて、地球で暮らしていた頃と何一つ変わらない。

違う点を挙げるとすれば、眠っているときに感じる気配があること。自分のものではない、今となっては感じられない時はつい視線を彷徨わせてしまうほど。

穏やかな眠りが、リンカーコアに集められた魔力をさらに結合させ、自身の体を巡っている感覚。指の先、細胞の一つ一つに送られる力の感覚。

——そして体中に負った傷が、時間の経過と共に、常人の倍に近いスピードで癒されていく感覚に、自嘲の笑みを浮かべながら、私は瞳を閉じた。

(……待ってて、ヴィヴィオ……)

だからこの時、私は気付いてすらもいなかった。

囚われたヴィヴィオに、赤い旧き結晶が埋め込まれる様を。

そして恐怖に怯える彼女が、ずっとママを呼んでいたことに。

## 19：ゆりかご

地上本部と機動六課壊滅の日から一週間。傷ついた隊員たちは、それぞれ程度の差にもよるがそのほとんどが一時的に職場復帰を始めていた。——ただ、一番の重傷を負ったヴァイス陸曹やザフィーラを除いて。

「ヴァイス陸曹……手術、お疲れさまでした」

集中治療室の中で、彼はまだ眠り続けている。医者の話では手術も無事成功したから、あとは目覚めるのを待つだけ。バイタルが安定次第一般病棟に移すとのことだ。峠を越えたとはいえ、最後には間に合わないだろう。

「これから六課は、機能全てをアースラに移して活動を再開します。ヘリはアルトが操縦してくれるし、艦船操舵はルキノが……みんなまだ万全じゃないけど、立ち止まってられないからって」

だから、と私は続ける。

「六課は大丈夫です。ギンガさんも、ヴィヴィオもちゃんと取り戻しますから……陸曹は、ゆっくり休んでください」

治療室を出て、私は外へ向かう。視界の端で赤い髪が揺れたことに、気づかないまま。



所変わって、時空管理局本局技術部。そこにはシャーリーと、そして見慣れない二人組の女性がいた。

「ああ、深琴。ちようどよかった」

「シャーリー……あの、スバルは……」

スバルも本日本局技術部に行くと思っていたのに、いない。まだ来てないんだろうか。

「今、マリーさんと一緒。体の最終確認だって」

「そうですか……」

「そうそう。紹介するね」

言つてシャーリーは、二人組を示す。

「私の先輩の、藤原楓さんと咲夜さん」

「どもー」

「あ、ちなみに髪が短いほうが楓さんね」

女性——楓さんと咲夜さんの顔は、どことなく零さんに似ている気がするんだけど……今はツツコミを入れないでおこう。

「ロゼット……」

傷だらけの、淡紅色のクリスタル。修復用のポットに浮かんだまま。三人が部屋を出たのを確認して、私はポットに触れた。

「ごめんね、ロゼット……」

《No. Just it is enough if you are safe. 『いえ。あなたが無事であれば、十分です』》

だから自分のことは気にしないでくれ、と相棒は言う。

《I had a problem. It is my responsibility which was not able to pull out your best. 『問題があつたのは私の方です。あなたの全力を引き出せなかつた私に』》

「そんなことない……それに、あんなの全力なんて言えない……」

ただ目の前の敵を破壊するためだけの攻撃。周囲のことを、彼女のことロゼットを気にも留めなかつた、ただの暴走。あんなのは——。

《Please do not blame yourself.

∴ An evaluation meeting is so far, buddy? 『自分を責めないでください。……反省会

はいつまでに行きましょう、相棒』》

言つて、ロゼットはいくつかモニターを表示させた。

《Restoration of a system is completed safely. ∴ I want you to tell an opinion about this plan. 『システムの復旧は無事に完了しています。……このプランについて、あなたの意見を聞かせてほしいのです』》

表示されたモニターには、これまでのロゼットのデータ、そして強

化プランと銘打たれた数字がいくつも並んでいる。基礎フレームの強化、一部フォルムのモードの変更と追加、使用カートリッジ——私の魔法体系はまだ珍しいから、それに合ったカートリッジは数が少なく、希少価値が高い——の変更、そしてそれによる魔力運用効率の上昇と、同時に魔力消費量の増加等々メリットとデメリットを正直に数値化していた。

「魔力消費量は実質倍近く……本体重量も、1. 2倍……」

重量はともかく、問題は魔力消費量の増加。私が「奥の手」を出せば何ら問題はないどころか余裕すらある増加量だけど……問題はその状態で、私の体が——リンカーコアが耐えられるかどうか。

「これ、全部ロゼットが考えたの？」

《Yes. It is the result of gathering old data in me. . . . It is a strategy for winning” them” of and me》はい。今までの戦闘データを私なりにまとめた結果です。……そして私なりの、「彼ら」に勝つための戦略です。』

「……そっか」

なんて、私は駄目な魔導師なんだろう。ここまでデバイスにばかり気を使わせて、自分のことばかり……こんなんじや駄目だ。このままじゃ、私は誰も助けられない。誰かを悲しませるだけだ……。

「いいよ。やろう、ロゼット」

浮かんでいた涙を、私は乱雑に拭う。

隊長たちに、同僚たちに、零さんに、執務官に、そしてロゼットに——今まで私は、何回助けてもらった？

なら今度は私が、微力ながらも彼らを助ける番だ。

「このプラン、採用！」

「よしきた！」

軽やかなユニゾンが答える。扉の向こうにいた楓さん、咲夜さん、シャーリーはその手に大量のデバイス用パーツを抱えていた。

「じゃあ今すぐ作業開始ですね！」

「おー！」

「深琴、ちょっと待っててね。本局の中、色々見てくるといいよ！」  
——つて、いきなり言われても。技術室から追い出された私は、ひとまず歩き出す。本局の紺色制服の中で、一人陸士制服は目立ってしようがない。

そう思った矢先だった。

「あれ、深琴？」

「ルーチェ……レオンも」

名前を呼ばれ、振り向いた先には本局制服を纏う友人二人。そしてその更に向こうには懐かしい顔が揃っていた。時空管理局第一士官学校61期生。その中でも二年間を共にしたクラスメート達だ。

「怪我はもういいのか？」

「つていうかなんでお前ここにいるの」

「深琴発見なう」

「相変わらずちっちゃいー」

「怪我は大丈夫。用事があるからいるんだけど文句ある？　そこ眩くな。そんでもって小さいとか言わないでよへこむから」

「よし誰かメール送れ。全員食堂に集合な、五分以内」

「送らないでいいって」

あとこの状況で全員を集めないでほしい。みんなの職場に迷惑がかかる。

とはいえ、みんなとの再会は嬉しかった。明るくて、楽しくて。地上本部襲撃の件は深く追求されなかった。まあ私自身が一介の三等空士だから、というのものもあるだろう。——聞かれても、答えられないし。

「でも、みんな心配してたんだぞ？　六課の隊舎、壊滅だって聞いて」「対策で時間取れなかったけど、みんなでお見舞いに行こうつて話も出たんだよっ。」

「まあ、でもさ。あんまり酷い怪我じゃないみたいだし。良しとしようよ」

カリーナ、アスカ、シルフィ……みんな、口々にそう言葉にした。ただでさえ忙しいはずなのに、私を気に掛けてくれる。



「……ごめんね。ありがとう、みんな」

所変わって、時空管理局無限書庫。管理局が管理する世界の書籍やデータが全て収められた、巨大なデータベース。『世界の記憶を収めた場所』である。円筒系をした、無重力の広い空間。

みんなと別れた私は、そこを訪れていた。

(やっぱり、広い……)

検索魔法を駆使し、書物を探し出す。その理由は至極単純——可能な限りフェアに関する情報は集めておきたかった。

この先彼を逮捕——否、保護したとして、彼は管理局法で裁かれることは避けられない。確かに彼のこれまでの行動——密輸品の窃盗、テロリズム幫助、殺人未遂——は犯罪以外の何物でもない。けれど彼の行動は全て「スカリエッティ恩 人のため」だ。あの、地獄のような施設を壊し、人を殺した自分すらも受け入れた彼に対しての恩義。

そもそも、あの夢が本当なら——彼の価値観が管理局が想定したものと異なることは自明の理だ。管理局だって鬼じゃない。ちゃんとした理由があつて歪まざるを得なかった子供が——そして何より本人がそれを望むなら、更生の機会はもちろん与えられる。拘留や監視期間だって短縮される。いくらでもやり直せるのだ。

だから。できるなら、彼がそれを望むなら——彼を、助きたい。

(作業が終わったらメールくれるって言ってたし……)

時間はまだ若干の余裕がある。一息吐いて、私は再び検索魔法を発動させた。



ほぼ同時刻。ミッドチルダ東部森林地帯。

その一角にある洞窟を、聖王教会シスター・シャツハは覗き込んでいた。その奥では透明な猟犬が青い熱線に倒されている。

「ごんな、洞窟の奥に？」

「僕の猟犬を発見して、その上一発で潰した。並みのセキュリティ

じゃない。ここがアジトで間違いないね」

眉を顰め、ヴェロツサ・アコースは希少技能——無限の獵犬の発動を解いた。そんな彼に、シヤツハは微笑む。

「凄いですね、ロツサ。こんな場所、よく掴めました」

「シヤツハ、いいかげん僕を子供扱いするのは止めて欲しいな」

言つて、ヴェロツサは獵犬を撫でた。

「これでも一応カリムやはやて、零と同じ、古代ベルカ式のレアスキル継承者なんだよ」

「無限の獵犬、ウンエントリヒ・ヤークト。あなたの能力は存じ上げていますよ」

「ま、今回の発見は、フェイト執務官やナカジマ三佐の部隊の、地道な捜査があつてこそそのものだけだね」

同時に、シヤツハが携えていた双剣・ヴィンデルシャフトが反応する。周辺に隠れていたガジェットI型が一斉に姿を現した。

「大人しく帰してくれる気はなさそうですね」

「戦闘はあまり得意じゃないけど……まあこのくらいなら」

「お任せください」

力強く答えたシヤツハは、瞬時に防護服を展開する。そして一発ずつカートリッジをロードした。

「あなたとカリムを守るのが、私の務めですから！」



「おつきいねー。あたし、L級艦船に乗ったの初めてだよ」

「私も……普通、次元航行部隊じゃないと乗らないと思うけど」

ロゼットの調整も終わり、移動した先は時空管理局本局、次元航行部隊L級艦船——正式名称はアースラ。

初めて乗るL級艦船の広さに驚きながら、合流した私とスバルは歩き始める。

「スバル……体、大丈夫？」

「うん。いい調子だよ。深琴の方こそ、大丈夫？」

「平気だよ。強度としては、普通の魔導師に比べたら結構丈夫なほうだし」

体中に負った傷は、今はもう完全に塞がっていた。人並みよりちよつと早い治癒速度も、遺伝子調整の結果だという。——結局秋月の人間は、戦うために生み出された戦闘機人達と変わらない。

「スバル、深琴！」

「二人とも、お帰りなさい」

「怪我、大丈夫でした？」

廊下で合流したティアナ、エリオ、キャロが口を開く。それに笑顔で頷いた私達は、次の瞬間響き渡った警報に表情を強張らせる。

「これって……」

開かれたモニターに映るのは、アインヘリアルを沈めた戦闘機人達が移動している光景。廃棄都市区画で彼女たちと共に走る、ギンガさんの後姿。

そして森林地帯から浮上する巨大戦艦。そして玉座と思しき場所に繋がれたヴィヴィオの姿。

『さあ、いよいよ復活の時だ。私のスポンサー諸氏、そしてこんな世界を作り出した管理局の諸君。偽善の平和を謳う聖王教会の諸君も、見えるかい？ これこそが、君たちが忌避しながらも求めていた絶対の力！』

恍惚が入り混じる男の——スカリエッティの声だけが響く。聖地より帰った船は、待ち望んだ主を得て再び空へと舞い戻ろうとしていた。

『旧暦の時代、一度は世界を席捲し、そして破壊した。古代ベルカの悪魔の英知』

「聖王の……ゆりかご……」

船を手中におさめた無限の欲望が牙を剥く。

——そしてこれが、後にJ・S事件を語る上で欠かせない長い一日となる。

## 20：無限の欲望

『旧暦の時代、バラバラだった世界を平定したのは最高評議会の三人。現役の場を次の世代、私たちや時空管理局ってシステムに託してからも、評議会制を作って見守ってくれていた。レジイ坊や……、レジアス中将もやり方が時々乱暴ではあったけど、地上の平和を守り続けてきた功労者。だから、彼らが今回の事件に関わっているなんて……信じたくは、ないのだけれど』

モニターの向こうで、ミゼット提督は言った。その言葉を聞いた八神部隊長は、艦長席と私たちがいる作戦会議室とをモニターで繋ぐ。『理由はどうあれ、レジアス中将や最高評議会は、偉業の天才犯罪者、ジェイル・スカリエッティを利用しようとした。そやけど、逆に利用されて裏切られた。どこからどこまでが誰の計画で、何が誰の思惑なのか、それはわからへん』

先ほどのスカリエッティからの通信中にあつた、「スポンサー諸氏」——曰く最高評議会とレジアス中将は、「地上世界の平和と安全」を目的に人造魔導師、戦闘機人計画にそれぞれ協力していたらしい。どちらも元は管理局が実用化寸前までこぎつけた計画だ。そこらへんの捜査はアコース査察官が資料にまとめてくれたけれども……仕事速すぎです。

『そやけど今、巨大船が空を飛んで町中にガジェットと戦闘機人が現れて、市民の安全を脅かしてる』

「ゆりかごには本局の艦隊が向かつてるし、地上の戦闘機人たちやガジェットも各部隊が協力して対応にあたる」

「だけど、高レベルなAMF戦をできる魔導師は多くない。私たちは3グループに分かれて各部署に協力することになる」

内訳はフェイトさんがスカリエッティのアジト。シスター・シャツハ、アコース査察官、そして聖王教会から派遣という形で零さんが同行する。

なのはさん、ヴィータ副隊長、八神部隊長は空でゆりかごの対処、そして囚われているヴィヴィオの救出。航空魔導師達と一緒だ。

そして私たちフオワード陣とシグナム副隊長、リイン曹長は地上。私たちは前線でガジェット、戦闘機人の対処。シグナム副隊長はあの騎士——ゼスト・グランガイツの対処だ。

「Has detected a reaction of them”. It seems that the towards the Midchilda Central Office”彼らの反応を検知しました。地上本部に向かっている模様です」

「……うん」  
完全復活したロゼットが告げる。頷いた私の視線の向こうで零さんと零さんによく似た男性——一度海鳴市で出会った、兄情報によると藤月彼方ふじつきかなたさんが談笑していた。

「あいつは？」  
「聖王医療院にいるよ。かつての同僚が心配みたい」  
「あいつらしいな……」

嬉しそうな様子で肩を竦めた零さんを、彼方さんは呼ぶ。

「兄さん」  
彼方さんが、一振りの日本刀を差し出した。

「兄さんの相棒、持ってきたよ」

「……助かる、彼方」  
「うん。……兄さん」

零さんが、刀を受け取る。シユラン、と音を立てて鞘から引き抜かれたその刀身は、美しく輝いていた。いつも彼が使用する日本刀と違う様子は見られない。もちろんデバイスでもない。彼方さんは微笑を湛えたままだ。だが次の瞬間にはその眉を顰める。

そして彼方さんは、深刻そうな顔で口を開いた。

「——この後のご飯、何がいいかな？」  
知らんがな。

「そうだな……深琴、何がいい？」

「何故ここで私に振るんですか!？」

「なんとなく？」

理由ないんかい……っていうか出勤間近の私にご飯のメニューを

決めさせるか、普通……。

「おでん食べたいです。こんにやくがあれば嬉しいです」

そして答える私が出た。いや、だって、ねえ？　せつかくだしき——って私は誰に言い訳してるんだろう。

「よし、とろつとろになるまで煮込んだ大根と卵もつけよう」

「じゃあキッチン借りるよ。今から煮込んだら十分間に合うはずだしね。深琴ちゃんは関西風派って静真君から聞いてるけど、それでいい？」

「大歓迎です！　行ってきますー！」

「行ってらっしゃい。気をつけてね」

帰ったらあったかいおでんが待っている——なんて、四歳くらいまでの頃の話だ。母の味なんて、伯母のそれとはまったく違うということしか覚えてない。

そして「間に合う」って、何に？

『第一グループ降下ポイントまで、あと三分です！』

スピーカーを通して、ルキノの声が聞こえた。なのはさん、ヴィー々副隊長は、並んだ私たちを見る。

「今回の出勤は、今までで一番ハードになると思う」

「それに、あたしもなのはもおまえらがピンチでも、助けにいけねえ」その言葉を聞いても私の表情は変わらなかった。当然と言えば当然の状況だし。覚悟は、もう決まっている。

「だけど、ちよつと目を瞑って今までの訓練のことを思い出して」

なのはさんの言葉に従い、目を瞑る。

「ずっと繰り返し返してきた基礎スキル。磨きに磨いたそれぞれの得意技。痛い思いをした防御練習。全身筋肉痛になるまで繰り返ししたフォーメーション。いつもボロボロになるまで私たちと繰り返した模擬戦」

続いた言葉と同時に、瞼の向こうに訓練風景が浮かんだ。思い出すだけで疲労感が蓄積された気がした。——改めて思うと、これだけの訓練を四月からずっと私たちはやってきたんだよね……。あの日か

ら、私は少しでも強くなっているのだろうか？

「目、開けていいよ」

きつと全員顔に出てたのだろう。苦笑混じりになのはさんは言う。

「まあ、私が言うのもなんだけど、きつかったよね」

「それでも、5人ともここまでよくついてきた」

「どんな相手がきても、どんな状況でも絶対に負けないように教えてきた。守るべきものを守れる力。救うべきものを救う力。絶望的な状況に立ち向かっていける力。ここまで頑張ってきた皆は、それがしつかり身につけている。——夢見て憧れて、必死に積み重ねてきた時間。どんな辛くても止めなかった努力の時間は、絶対に自分を裏切らない。それだけ、忘れないで」

「きつい状況をビシつとこなしてみせてこそそのストライカーだからな」

なのはさんとヴィータ副隊長、二人の表情は明るい。

「じゃあ機動六課フォワード隊、出動！」

「行ってこい！」

「はい!!」

——絶対戻るんだ。みんなの所に——機動六課に、絶対！

《Limiter full release. At any time you go, buddy》リミッター全解除。いつでも行けます》

「うん」

へりに向かう途中で、ロゼットが告げる。ソードモードは練習時間が短いから使用したくないけど……同型のデバイスを持つフェアに對抗するために、手段は選んでいられない。

「いざとなったら『奥の手』も順番に開放していくよ」

《All right. — Message was received》

こんな時に、誰だろう。狙っているとするなら伯父や伯母か、レオンか、ルーチエか。零さんとはさつき会ったばかりだし、海鳴市に

残っている兄にはメールを送らないよう彼方さんが伝えてあるはずだし。

っていうか、ロゼットが送信者の名前を出さない時点でもう一人思い出すべきだった。

『無事に帰ってこい。絶対に無茶はするな』

文末にはこれまた短く送信者の名前——デイバイン・アーウィングと署名が入っている。

「アーウィング執務官……」

今は本局だつていっぱいはいっぱいのはずなのに、それでもわざわざメッセージを送ってくれるなんて。内容は必要最低限、って感じだけど——それでも無茶をしかねないのが私だと、心配しているようで。

目を閉じると、脳裏には四年前の記憶が蘇る。燃え盛る炎と、崩れ落ちる天井。彼の腕に抱かれて、初めて飛んだ空……夢見て憧れて、ここまで来たんだ。

「行こう、ロゼット」

《All right, buddy》

——もう逃げない。迷わない。フェアもヴィヴィオも、助け出すんだ！



一方その頃、アースラ内の通路の一角。通路に凭れかかっている零は、モニターの向こうのデイバインに話しかけていた。

「いいのか、メッセージだけで」

『出勤まで時間がないだろう。妥協した結果だ』

「妥協、ねえ……」

言葉を繰り返した零は、にやりと口角を上げる。モニターの向こうで、デイバインは苦虫を噛んだような——彼の心情を現すなら不服の——表情を浮かべていた。

『……可能なら直接行って話したいし、現場に関わりたくらいだ』  
「だと思つたよ。——来れそうか？」



『調整はしている』

まったく、と零は肩を竦める。互いのポジション上、デイバインと深琴の相性は悪くはない。だが個人的感情としてはどうもデイバインは深琴に甘すぎる——というより過保護すぎるのだ。危ないからと魔導師を辞めさせようとしたり、認めはしても傍で見守るために六課への滞在期間を延ばしたりと、なんやかんやと口を出す。

だからあの時——地上本部と機動六課が襲撃され、深琴が集中治療室送りにされた時はホテル・アグスタでの事件以上の衝撃と怒りを彼に与えた。彼にとつて深琴は「守るべき象徴」なんだろう、というのが零やなのは、フェイトの共通見解である。「何も守れなかった、助けられなかった」デイバインが唯一助け出すことができた深琴。そしてデイバインに救われ、強さを求めた深琴——零が思う以上に、この二人の依存関係は強固なものだった。

だが、今はどうだ。強くなること、戦うことを自分の意思で選んだ深琴はもうデイバインの——そして零の保護下から自立しつつある。(教導は面倒だが、成長を間近で見守れるのは悪くないんだよなあ……)

前にデイバインは言っていた。深琴には平和で安全な世界で、生きてほしいと。自分に憧れるだとかそんなことなくていい。——むしろ自分のことは記憶の片隅でいいとさえ、彼は言った。(とか言うくせに、深琴が自分に反応しないと機嫌悪いんだよな、こいつは)

内心で溜息を吐いて、零は肩を竦める。アースラに移動する前、本局で偶然出会った彼はひどく不機嫌だった——曰く、深琴が彼を頼らなかつたから、と。話を聞くと例の少年——フェアクレールトに関して、深琴は独自に情報を集めていたらしい。だが一介の三等空士である彼女にはアクセス権限がほとんどない。そんな彼女が取った行動——士官学校時代の人脈をフルに活用し、独自に改良を加えた検索魔法を駆使して無限書庫に引き籠もる——が、デイバインは気にいらなかつたらしい。言葉では色々取り繕っているが、結局のところ「何故俺を頼らない！」の一言に尽きる。

だからって、こうして巻き込まれる俺の身にもなれ。と、何度刀に手をかけたことだろう。

だが。

「まあ、大丈夫だろ。フォワード陣はチームで出撃するし。俺も『あいつ』も、自分の仕事を済ませ次第、すぐに救援に向かうつもりだしな」

『ああ、頼む』

軽快な音を立てて、モニターは閉じられた。

(ゆりかごが軌道ポイントに到着するまで、三時間ほど……)

長い三時間になりそうだ。だが悪くはない。

嘆息した零は、腰に提げた刀に触れた。

「——行くぞ、『無頼』」

## 21：決戦

昔々、古代ベルカと呼ばれた今は無き世界の話。最初はその世界も、次元の海に浮かぶ一つの世界として誕生しました。それは他の世界となんら変わらない、極普通の始まり。

しかし「理想郷」とされる次元世界・アルハザードから提供された優れた兵器開発技術によって、いつしか国家間での争いは激化。周辺諸国のみならず、別世界へと侵略の手を伸ばし始めました。同盟・協定・敵対——世界間のパワーバランスによって侵略図は日々変化し、絶え間ない戦乱に比例するように兵器開発は激化の一途を辿りま

す。

それは大きな進化を遂げた人造生命体技術で、各国が擁する「王」の肉体を強化し、過度な力を宿らせること。そしてその子孫にも宿命づけること。

求められたのは「戦を自分の勝利で収めること」と、力の象徴。始まりは終わりへ、終わりは始まりへ。古代ベルカの争いは、必然的に終結を迎えました。「古きベルカの地の、実質的消失」という形で。消え果てた民と、汚染によって人が住めなくなったベルカの大地。ここまです『古代ベルカ戦争』といます。

再起を図り、尚も争いを続けようとした他国を制し、ベルカ統一を計ったのは、「聖王のゆりかご」を擁する「聖王」。生き残った国はそれぞれ自らの王家の名で世界を統治。この時期には「古代ベルカ式」や伝承者、その武装も失われていたとされています。

こうして終結した古代ベルカ戦争——『聖王統一戦争』は「勝者無き戦争」として、語り継がれていきました。

——それは幼少の頃より幾度も読み、学んだ古代ベルカの歴史。争いの悲しさと虚しさと愚かしさ、そして平和のありがたさ——それを今に残す数少ない資料だとその人……渡辺零さんはそう語った。

『烈風一迅！』

カートリッジをロードしたヴィンデルシャフトを構え直し、シャツハはガジェットの大群に飛び込んだ。

『――斬り裂け、ヴィンデルシャフトお！』

(……つたく、ほんとにあいつは『修道女』か?)

モニターを横目に、零はぼやく。その間も絶えず襲ってくるガジェットの大群を斬り伏せて。そして次の瞬間、洞窟を揺らした衝撃に舌打ちする。

(フェイトのやつ……っ、やりすぎだ!)

恐らくバルディッシュの刀身を魔力で延ばし、振り下ろしたのだろう。その際刃先が頭上の岩に触れたようだ。崩落したらどうする、と女々しいことを言うつもりはないが……いや、やっぱり少しは気にしてほしい。ミイラ取りがミイラになつては身も蓋もない。援軍が安全無事に到着できるようルートを確保する。ついに出てくる雑魚は蹴散らし、相手の戦力を削る――それが今、零に与えられた任務だ。(まあ結構頑丈そうだから、心配はないか……)

二人よりも先行・突撃した零の周囲には、壁に沿う形でナンバリングされたポットが並んでいた。その中には多くの女性たちが一糸纏わぬ姿で眠りについていて――少なくとも眠っているだけだと零は思っている。でなければやっていられない。

その中の一つ――X Iと刻印の入られたポットで眠る一人の女性に眼を遣った。穏やかな表情を浮かべる、若紫色の髪をした女性。その顔に、零は見覚えがあった。それは数日前、ゲンヤ・ナカジマ三佐が提供した「戦闘機人事件」のデータの中で。

そして虫を使役する、幼い召喚師を。

「……メガーヌ・アル・ピーノ……」

当時は戦闘機人事件を追っていた捜査官で、陸戦魔導師。まさかこんなところに囚われていたとは、と零は嘆息する。八年前に「死亡した」はずのゼスト・グランガイツ、明かされないクイント・ナカジマの死因、「地上の正義の守護者」レジアス・ゲイツにまわりつく黒い噂。

何より疑問なのが、ジェイル・スカリエツティだ。この事件以前か

ら通信映像や音声データが確認されているにも拘らず、逮捕歴は無い。そして一部のガジェットに使われていたジュエルシードの存在——これら全てが偶然とは考えられない。もしそうならレジアスは今頃、いつぞやの演説のようにスカリエツティやその一味の逮捕を叫んでいるはずだ。虎の子であるアインヘリアルを失ったためか、ゆりかご浮上から今まで、彼らの発表は無い。

「ということとは……ゆりかご含め、後ろについている奴がいる……」

そしてその黒幕は、相当の権力者か何かなのだろう。そう零は思考に結論付けた。空の様子を確認するため開きっぱなしにしていたモニターに眼を遣る。そこには魔導師隊をもともせず、無数のガジェットを地上へ送り出す巨大な戦艦が映し出されていた。

スカリエツティが発見し、今も上昇を続ける『聖王のゆりかご』。その巨大さと教会に伝わる資料を一読すれば、さらに絶望したくもなる。そしてこの状況だ。

もう一度舌打ちした零の両足に、先導していた無限の猟犬が音もなくすり寄る。猟犬の頭を撫でて、零は僅かに頬を緩ませた。

「立ち止まってる暇はない、よな」

この奥で待っているのはスカリエツティと戦闘機人、そしてせいぜいガジェットくらいである。いくらここが高濃度のAMFで満たされていると言えども、零やフェイト、そしてシャツハの足を止めることなどではししない。洞窟の外には教会騎士団と陸戦魔導師隊、空にはエースオブエース、夜天の王とその騎士、航空魔導師隊。そして地上では愛弟子とストライカー級の魔導師が戦っている。

——自分が戦わなければ、どうする。

（ウイルス汚染されたゾンビとか怪物が出てこなければ、勝つる……多分！）

脳裏に過ぎる光景は、ずっと幼い頃に双子の弟・彼方と一緒に遊んだゲームの記憶。個人的には2が好きだとかふざけたことを吐いても、ツツコミがない虚しさ。無事に帰還したら筐体ごと六課に持ち込んで深琴にやらせてみよう。怖がるか平気な顔してるか二通りだが、どっちかというとその反応を見たデイバインの反応が見たい。

弄り甲斐のある奴は楽しい。よし、覚悟完了。

刀を構え直し、零は前を見据える。奥から再びガジェットⅠ型、Ⅲ型が続々と出現しているところだった。

「行くぞ……っ！」

◇

アルトが操縦するヘリに乗り込んで、私たちフォワードチームは降下ポイントを目指していた。追撃してきたガジェットⅡ型を振り切るため発生した揺れを乗り切つて、私たちは改めて作戦と役割を確認する。

「あたしたちはミッド中央、市街地方面——敵戦力の迎撃ラインに参加する」

ティアナの言葉と同時に開かれた周辺マップ——廃棄都市区画のそれには、迎撃ラインとそこに近づいてくる赤い点が表示されていた。

「地上部隊と協力して、戦闘機人や召喚師達を最前線で迎撃——だよね？」

「そう」

「他の隊の魔導師たちはAMFや戦闘機人戦の経験がほとんどない。だからあたしたちがトップでぶつかって、とにかく向こうの戦力を削る」

「後は迎撃ラインが止めてくれる、というわけですね」

私の言葉にティアナが頷き、スバルが補足する。最後のキャロの確認に、ティアナは頷いた。

そう上手く行くといいけど……なんて言葉を、私は飲み込んだ。戦闘機人たちと召喚師、そして未だ姿を見せないフェア——彼らとガジェットの相手なんて正直しんどいし、ギリギリだけどやるしかない。

何故なら迎撃ラインの向こうに広がるのは市街地と、地上本部なのだから。

そして未だに、今回の事件について地上本部は自分たちだけでの調査を強硬に主張し、本局の介入を拒んでいる。状況は相変わらず後手後手だ。捜査情報も公開されていない。ここまですれば地上本部も自棄なのだろう。本局からの戦力投入も未定だ。もちろん機動六課の後見人の皆さん、その他個人的な繋がりを駆使して掛け合っている状況である。

だが、そんな思惑と地上部隊の魔導師達は関係が無い。もちろん、本局直属の私達——機動六課も。

「でも、何だか……」

エリオが口を開いた。

「何だかちよつとだけ、エースな気分ですね!」

「……そうだね」

なのはさん風に言うなら、「ストライカー」だろうけど。それでも今、迎撃部隊にとって頼れるのは私たちだけ。諦めるわけにはいかない。

「……後は、ギンガさんが出てきたら」

言いづらそうに、ティアナは口を開いた。脳裏には先ほどモニターに映っていた、戦闘機人達と行動を共にしているギンガさんの姿が過る。洗脳されてるだけだ。そう思いたい。

「優先的に対処」

「安全無事に確保」

「うん」

「よつし、行くわよ!」

ハッチが開き、私たちは勢いよく飛び降りる。——その姿を、六課を襲撃した戦闘機人が見ていることに気づかないまま。

「ノーヴェ、デイド、ウエンデイ。例の5人がそっちに向かってる」

「ほんとか?」

「ああ。……ただ、前とは状況が違う。正面から戦う気で来てる」

『なーに、望むところツスよ!』

その様子を確認した戦闘機人——N.O. 8オットーは、淡々と指示を出す。

「ゆりかご」浮上前に、中央本部を制圧。司令部を押しさえたい。——状況に対する不確定要素は、なるべく排除する」

◇

「っ！」

フリードの背に乗ったキャロが、廃ビルの屋上を見た。そこには憂いを秘めた目をした少女——見間違えるはずもない。召喚師とその召喚獣が立っている。

こちらの視線に気づいた少女は、左を指差した。そこにはアルトが操縦するヘリが——！

「フリード！」

キャロの声に従って、フリードはエリオ、キャロを背に乗せたまま召喚師へ向かっていく。

「キャロ！……予定変更、こつちを先に捕まえる！　いいわね、スバル、深琴？」

「了解！」

文句なんかあるわけない。スバルも頷き、ウインググロッドを発動させる——その瞬間だった。

どこからともなく、緑色の光線が回り込むように誘導軌道をとって放たれた。

近くにあつたビルの屋上に跳躍して回避したティアナを、あの双剣タイプの戦闘機人が。

そのまま後方へ跳躍したスバルを、格闘タイプの戦闘機人が。

そして空中の私を狙って、深い青色をした道と、左拳が飛んでくる。

「……ギンガさん……」

「……………」

バックステップを取って回避しつつ、右のフォルム・ドライのダガーで拳を受け流す。だが顎を狙って放たれたブリッツキヤリバー



の蹴りに、一瞬だけ意識が飛んだ。その一瞬で十分だったのだろう。腹部に衝撃が走る。痛いとかそんなレベルじゃない。勢いよく殴り飛ばされた私はそのまま地上へ落ちる。高高度リカバリーがなかったら死んでた、多分。

『ティア、深琴！』

涙混じりの、スバルの声が聞こえる。だが彼女に返事をする前に、深紅色の砲撃が飛んできた。

「……フエア……」

「深琴、久しぶり」

相変わらずの笑顔で、フエアは言う。その向こうでギンガさんは走り始めていた。確かあの先にはスバルが――！

「っの……！」

「行かせないよ」

追いかけてようとした次の瞬間には、フエアに阻まれる。

こんなところで足止めされるわけにはいかない。急いでみんなに合流しないと――！

『ライトニング、スバル、深琴！』

「ティアナ!?!」

『作戦、ちよつと変更。目の前の相手、無理して一人で倒す必要はないわ。足止めて削りながら、それぞれに対処。それでも充分、市街地と中央本部は守れる』

ティアナの指示には焦りさえ見える。

『通信は以上！全員、自分の戦いに集中!!』

「ちよ、ティアナ!?!」

いささか性急に通信は切れた。……まさかさつききの戦闘機人三機が、ティアナを？

視線を廃ビルに移すと、緑色をした半透明な何か――恐らく結界だろう――に包まれているのが見えた。何度呼びかけても、返事はない。

(エリオとキャロは召喚師とその召喚獣、スバルはギンガさん、ティアナはあの三機……そして私がフエア……)

ロゼットを握る手に力を込める。弱音を吐いている暇も、立ち止まっている暇もない。私にできるのは彼を保護した後、みんなの援護に回ることだ。支援や補助はロングアーチの十八番である。

フォルム・アインを構え直す。相對するフェアもまたショートソードを構えた。

「最後通告。深琴、一緒に来る気はない？」

「そんな気、あるわけ無い」

「そっか。残念」

その割には、フェアの声音は明るい。

ただ願うのは、平穩無事な和解。だがそれも叶うはずがない。なら、私にできることは一つだけだ。

互いの距離を詰め、斬りかかる。深紅と淡紅——二つの紅が火花を纏った。

聖王医療院も、クラナガンと変わらない混乱ようだった。次々とやってくる救急車に乗り、安全な医療施設まで搬送される患者たち。そして見舞客はそれぞれの手段で安全な場所へ逃げていく。

無理もない、と霜月秋葉は溜息を吐いた。

空間モニターにはガジェットⅢ型と呼ばれる自動機械と、戦闘機人が三機。第七廃棄都市からクラナガンに向かっていているとの情報がニュースになっている。案内放送と局員の誘導に従って、落ち着いて避難しろとニュースキャスターは言うが……。

(それはそれで無理がある、かな)

人間というものは一瞬でもパニック状態に陥ると、何をしでかすかわからない。火事場の馬鹿力を発揮すれば、時として殺戮を厭わない。ただ逃げまどい、集団の中で転倒し圧殺されることだってよく聞く話だ。

(その知識のほとんどをテレビゲームで得た……とは言えないけど)

それを考えたら自分は、平和な世界で、平和な時間を——「幸せ」と呼べる時間を過ごしてきた。帰る場所があつて、帰りを待ってくれる人がいる。守りたい世界があつて、守りたい人がいる。そのためなら死んだって構わない。心情的には、そう表現しても大げさではないほどに「霜月秋葉」という人間は幸せだった。

看護師が、見舞客であろう少女を連れて病室から消えていく。それを確認した秋葉は、廊下の角から病室の表示を確認した。

そして廊下から姿を現そうとした瞬間、中から声が響いた。

『……なんともまあ、情けない話だね。てめえの失敗から逃げて、責任から逃げて、未だに向き合えてねえから、またしくじって、この様だ』  
聞き覚えのある声より、僅かに低くなつた声。後悔をこれ以上ないほどに湛えた声には、湿り気が帯びている。

そして扉が、内側から開かれた。見慣れない狼が、包帯を巻いた姿で病室から出ていく。

「旦那、そんな身体でどこへ？」

「やらねばならぬことがある」

旦那、と呼ばれた声に狼は答えた。

「旦那！ つ……………」

彼を追うようにベッドから降りようとした男は、痛みに顔を顰めている。

「…………つい先日まで集中治療室にいて、動く馬鹿がどこにいるんですか？」

溜息混じりに、秋葉は口を開いていた。

「うるせえ！ ……秋葉……………?!」

「…………お久しぶりです。ヴァイス先輩」

ペこり、と軽く一礼して、秋葉は手近にあった椅子に腰かける。

「怪我は残ってるようですが、その様子だと元気だけは有り余ってるみたいですね」

「だけってなんだよ、だけって！ ……つか、お前、その服装……………」

「制服です。一応向こうでは学生ですので」

黒を基調にした、聖祥大学付属高校の制服。目立たないように季節外れを承知で、秋葉はその上からベージュのコートを羽織っていた。

「囑託とはいえ、私はもう管理局の——首都航空隊の人間ではありませんから。制服も処分しましたし」

「じゃあ、なんで戻ってきたんだよ」

「八神二佐から、協力を依頼されました」

言って、秋葉は窓の外を見る。

「過去の事件に関係するかもしれないから、力を貸してほしいと」

「過去…………ティータのことか？」

「でしょうね。…………まあ彼のことになくても、協力するつもりでしたけど」

「嘘つけ。お前、いつ便利屋になったよ」

「似たようなもんですよ、魔導師なんて。——だから管理局では一時的に戦闘機人計画や、人造魔導師計画が採用されかけたんですから。

私だって元を正せば似たようなものですし」

その言葉が、病室いっぱい広がる。

『ほんとうです』

『わたしは、あのひとにたすけられるまで“しせつ”にいました』  
今よりずっと幼い、舌足らずな口調で——それでもどこか大人びていた、過去の秋葉の姿がヴァイスの中で蘇った。

『このなまえも、あのひとにつけてもらいました。それまでは“11ばん”と』

「……違うだろ。お前とあいつらは」

「違わないです。あの人に出会うまでは——そして皆さんと出会うまでは、結構似てます。自分でも言いきれます」

「言い切んなよ!」

「言い切ります。過去を認めなければ、今の私も認められないって知ったから」

淡々と、それでいてどこか温かみのある表情で、秋葉は言う。

「だから戻ってきたんです。過去に決着を着けるために。あの子達を守るために」

「……ティアナと……深琴か?」

「はい。二人には——二人のお兄様には、お世話になりましたから」

「変わったな、お前」

「よく言われます」

言って、秋葉は立ち上がり。

「偶然、操縦者がいないヘリが一機あるそうです。……元気が有り余っているなら、ついでにどうでしょう?」

「言うねえ……行くぜ、ストームレイダー」

(変わってないですね、先輩も)

そう内心で呟いて、秋葉は微笑んだ。そして握りしめたドッグタグを見つめる。

「私たちも行こう、『フリージア』」

その声に、ドッグタグにあしらわれた蒼氷色の水晶が煌めいた。



《Defenser.》

《Load cart ridge.》

「……前に言ってたよね？」

淡紅色の盾が深紅色の魔力刃を阻む。カートリッジロードにより斬撃の威力は増したが、まだ耐えられる。その状態で私は口を開いた。

「スカリエツティは恩人だって。だからレリックを集めてるって」

「うん、言ったね。それが？」

「……勝手に悪いけど、あなたのことを可能な限り調べた」

盾が破壊され、同時に私は後方へ跳躍する。追撃は、ない。

「……どうやって？」

そう言ったフェアは、目を丸くして——本気で驚いているようだった。

「夢を見たの。まだ幼いあなたが、違法施設に囚われている夢」

「……何それ。深琴って、そういうオカルト的なもの、信じるタイプ？」

「信じてないよ。でも、『そういうこと』もあるって、知ってるだけ。……何より、あの夢を『ただの夢』だって思いたくなかった」

だって、夢の中の彼は涙一つ流すことがなかった。空虚なままで、施設を壊し、研究者を殺した。まるで自分が体験したようにリアルな夢。それや一般的に言う「第六感」は、秋月の家では緻密な計算や常識よりずっと大事で、重要視されていた。——もちろん今となってはあり得ない話である。

「そんな過去があつて、スカリエツティに救われて……彼らのために力になりたいっていう気持ちは分かる。……でも、だからって誰かを傷つけたり、悲しませたりさせちゃダメなんだよ……」

「……そんなの、詭弁だろ？ 僕たち人間はどんな時代でも競争する。誰かを傷つけ、蹴落として、少ない席を取り合う。それと同じじゃないか」

「違うよー！」

加速して距離を詰め、私たちは再び斬り合った。

「まあよく先生とか言うけどね! 『大事なのは点数じゃない、どれだけ頑張ったかだ』とか! でも実際努力したからいい点数が取れるとは限らないし、判断基準は数字なわけだし!」

《Load cartridge. Divine Shoot  
r.》

ロゼットが二発分、カートリッジをロードする。私の周囲に魔力スフィアを生成した。そこから生成された八発の魔力弾がフェアへと向かう。

「でも、それと誰かを傷ついたりとか、殺しちゃうとのとは全然違うよ!」

「それ、平和ボケって言わない?」

「それこそ詭弁って言うの!」

《Form Drive. Load cartridge. — Cross  
s Fire Shoot!》

空中に新たに生成された魔力スフィアから、20発以上の魔力弾が生成された。ロゼットの引き金を引いたまま、一斉に発射する。

「死んだ人は帰ってこないし、傷は癒えるのに時間がかかる。傷つくことにも、傷つけることにも、誰かを殺すことに慣れるって、自分を殺すことと同じじゃないの!」

——それは、私がないのはさんに言われた言葉だった。



「深琴のそういうまつすぐな所って、とてもいいことだと思うよ。でもそれと自分を傷つけることはイコールにしちゃいけない。『自分が傷ついただけなら』とかそんなこと、考えちゃだめ。死んじやつたら元も子もないんだよ? ——あのね、深琴。深琴の力はね、自分のことも、みんなのことも守れるくらいずっとずっと強いんだよ」

言って、なのはさんは私の頭を撫でる。——それは聖王医療院に入院していた時のこと。面会に訪れたなのはさんに、六課を、みんなを、ヴィヴィオを守れなかったことを謝罪していた時のことだった。

「ねえ、深琴。ヴィヴィオが転んだ時、フェイト隊長が言ったこと、覚えてる？」

「えつと……転んで怪我したら、ママやお姉ちゃんが悲しむ、としか……」

「そう。深琴も同じだよ。深琴が怪我したら私やフェイト隊長や八神部隊長だって悲しいし、ロングアーチスタッフやスターズ、ライトニングのみんなだって心配する。零くんやアーウィング執務官は、今みたいにつきつきりで傍にいるだろうし」

「余計なことを言うな。誰のせいだと思ってる」

「深琴のせいじゃないよね？」

あはは、と笑って答えるなのはさんと絶対安静状態の私を、同席していたアーウィング執務官は睨みつける。

「確かに深琴は色々あって、自己犠牲とかに慣れてる部分があるのは分かってる。でもそのままだと、どんどん心が枯れて、死んでいっちゃうんじゃないかって私は思う。死んだ人は帰ってこないし、一度付いた傷は、癒すのに時間がかかる。手遅れになる前に救うのが、私たち魔導師のお仕事だよ」

「……はい……」

「つて、なんかお説教みたいになっちゃったね、ごめん。——でもね、深琴。逆に考えてみて。治療するのに時間がかかるってことは——」



《Stinger Blade》

発射された深紅色の魔力刃を、ダガーモードに移行させたロゼットで捌き切る。

「治療するのに時間がかかるってことは、逆に言えば『時間さえかければ』傷は癒えるってことで……」

《Chain Bind》

そして無防備になったフェアを、淡紅色の鎖が縛り付けた。

「どれだけ時間がかかっても、『生きてたらやり直せる』んだよ！」



「っ！」

フェアが、深紅色の瞳を見開く。

「お願い……武装を解除して、投降して……」

「そんなことできると思ってたの？ ……大体、どうやってやり直すのさ!? ドクターも、ナンバーズのみんなも、ルールー達がいらない世界なんか、生きてる意味がない！ 居場所なんか、あるはずないだろ！」

「そんなことない！」

——ああ、そういうことか。似たような魔力資質で、戦い方で、生まれ方で、どこか昔を思い出させる彼。

そっか。感じてたのはこれだったんだ。なんだ、すっごい単純。

——似てるんだ、昔の私とフェアは。

今生きてる理由も、意味も見つけられなくて。唯一見つけたそれに必死になって縋りついて——その理由が無くなってしまふことを恐れて、でもだからって何もできない自分がいて、迷い込む。あの時——アーウィング執務官と再会して、彼の重荷になってたと初めて知った時、魔導師を辞めようと本気で考えた私のように。

でも——！

「今更、どうやって——！」

「一緒に探そうよ！」

声が震える。涙混じりに叫んだ私を、フェアは呆然と見つめていた。

「私だけじゃない。六課のみんなも、零さんも、アーウィング執務官も……ちゃんと話せば、みんな分かってくれるよ。……あなたはどうしたいの？ どこに行きたいの？」

「そんなの……分からない……っ、僕は……」

「今はそれでもいいよ。これから、一緒に探そう？ 私も、ちゃんと手伝うから」

大事なのは手を取り合うこと。フェアの目から、一筋の涙が流れた。もう戦意は感じられない。

よかった、これで——。

『あー。フェア様、だめですよお』

安心した直後、一枚の空間モニターが開かれた。そこに映るのは栗色の髪と眼鏡をかけた女性。纏う白いケープとスーツに刻印されたナンバーは、「IV」とあった。

「あなたは……あなたも、戦闘機人？」

『もう、フェア様もルーお嬢様も困りますう』

質問に答えることなく、女性は底知れない何かを孕んだ、間延びした声で続ける。

『戦いの最中、敵の言うことに耳を貸しちやいけません。邪魔なものが出てきたらぶつち殺してまかり通る。それがあたしたちの力の使い道。そうでしょう？』

「クアットロ……でも……」

不安そうな目で、フェアは私と、クアットロを交互に見た。その様子にクアットロは肩を竦める。

『無理もないです。無垢なフェア様に、その悪魔の言葉は耳触りが良すぎますね』

「悪魔だとか、あなたにだけは言われたくないんだけど!？」

『でも、もう大丈夫ですよ』

「人の話を聞いて!」

そして大丈夫というには程遠い邪悪な笑顔を、クアットロは浮かべた。

『フェア様が迷わないように、そのお力の全てを發揮しちやいませう!』

その言葉と同時にフェアは痙攣し、その足元には戦闘機人のテンプレートが浮かぶ。

「フェア!？」

『いいですか、フェア様？ 目の前の女は私たちの——ドクターの夢を邪魔する敵です』

「……ドクターの、敵?」

言うや否や、フェアはバインドを解除して、私に斬り込んできた。空虚な瞳、けれど斬撃の一つ一つは先ほどよりもずっと重くなっている。

る。ただの洗脳じゃない……？

『ドクターが仕込んでくれた、コンシデレーション・コンソールで誰の言うことも聞く耳を持たない無敵のハートをプレゼント！』

そして剣十字の魔法陣が浮かぶ。深紅色だったそれは僅かに様々な色が混じり合い——次の瞬間には虹色へと変わった。

(虹色の魔力光なんて……まさか!?)

嫌な予感が走ると同時に、斬撃の重さに耐えられなかった私は弾き飛ばされる。僅かな瞬間でみた彼の瞳には、また変化が起こっていた。——右目の色が、翡翠色へと変わっている。

真紅と翡翠のオッドアイ、そして虹色の魔力光。それらはかつて「聖王」と呼ばれた人物の血統に見られる特徴だ。

『簡単なことよ』

ふふっ、とクアットロは笑っていた。

『だって彼は——彼もまた、プロジェクトFで生み出された聖王<sup>レブリカ</sup>の鍵<sup>カ</sup>なんだから』

## 23：星と空と雷と

プロジェクトF。正式名称は『プロジェクト「F・A・T・E」』というその技術は、人造生命の研究、その中でも「記憶転写型クローン」を作り出す研究の総称だ。この技術を完成させたのはかの大魔導師プレシア・テスタロッサー——フェイト隊長の「生みの親」である。

だがこの技術をもつてしても、死んだ人間を蘇らせることはできない。生まれるのはあくまでの「クローン」であり、また記憶転写に成功しても基になった人物の性格や利き腕、魔力資質まで完全に受け継がれることはないという欠陥が見つかっている。この技術で生み出されたのがフェイト隊長と、エリオ。

そして、クアットロの言葉が真実なら——フェアクレールト・ナハトもその一人となる。プロジェクトFの技術で生み出された、聖王の鍵のレプリカ。

『とは言っても、ドクターの技術を基にして生まれたってだけですけど』

残忍な笑みを浮かべて、クアットロは告げる。

「っ……フェア！」

「……………」

呼びかけるも、返事はない。ロゼットがフェアの愛機に接触をかけているが、こちらにも反応なし。先ほどまでは深紅色だった魔力光は今や完全に虹色に、同色だった瞳は右だけが翡翠色に変色している。

（この状況は、正直想定外だった……）

僅かに視線を動かす。未だ結界に包まれたままの廃ビルと、虫型の召喚獣と、そして空に広がる青色の道。

（スターズもライトニングもそれぞれの相手に手一杯だし、迎撃部隊の人を巻き込むのは危険すぎる……私一人でやるしかない……！）

応援は期待できないし、しない。その上こちらはあのゆりかごの相手も残っている。ゆりかごの軌道ポイント到達まで1時間40分程。一分一秒も無駄にできない。

フェアがこのまま、自力で意識を取り戻せばよし。説得が通じれば

御の字。だがまずは……。

「……魔力ダメージでノックアウトさせて、保護。やれるよね？ ロゼット」

《Yeah. If you and me. 『ええ。あなたと私の、二人でなら』》

「うん！」

ロゼットを構え直し、私は意識をフェアに集中させる。

「……絶対、助けるからね……」

◇

「レリックウエポン？」

一方その頃、スカリエツテイのアジト。フェイトがスカリエツテイとN.O. 3とN.O. 7、シャツハがN.O. 6の相手をしているその時、零はヴェロツサ・アコースと共にアジトの奥へと進んでいた。

「つてーと、あれだろ？ 古代ベルカ王族にのみ許された人体強化技術とかなんとか」

「そう。厳密に言えば用いられるのはレリックのようなロストロギア——エネルギー結晶体なんだけどね」

「ぶつちやけなくても人造魔導師つてことだよな……古代ベルカ鬼畜すぎるだろ」

「まあまあ、それ言い出したらキリがないよ。……で、本題はこっからなんだけど」

時折襲撃するガジェットは零が力づくで斬り伏せて、二人は進んでいく。

「前に君が言ってた、フェアって子……あの子が幽閉されていた施設って、人造魔導師関係の研究をしていたらしいんだ」

「情報源は？」

「関係者への『査察』」

言って片目を瞑ってみせるヴェロツサに、零は呆れと感嘆という両極端の感情を半々に込めた溜息を返した。

「その上彼は、基になった人物が存在する——プロジェクトFの被験者だつて話もある。それも最高評議会が関与しているらしい」

「まあ、最高評議会かよ。まあ評議会は人造魔導師計画を押し切つたつて聞くしな。あり得ない話じゃない」

ヴェロツサの報告によるとフェアは——フェアの基になった人物は十年以上前に魔導実験事故で亡くなつていてという。両親の手慰みのために生み出されたが魔力資質などの面から、本物と似ていないことを理由に研究施設に売り飛ばされたらしい。元々魔導師としての素質を秘めていた彼は施設での実験で頭角を現した。ロストログアを始めとするエネルギー結晶体との適合率が高く、素体として優秀でもあつた彼は、さらに過酷な実験動物としての人生を歩んでいく。「本物のフェアの、両親は？」

「フェアを売つた数年後に、事故死している。両親を調べてみた結果、遠いご先祖様レベルの傍流だけど、聖王家の血が入つてることも判明した」

「なんだよそれ！ 思いつきり教会お前らの信仰対象じゃねえか！」

「君だつて教会騎士団だろう？ ……ともかく今のフェアクレールトは、ヴィヴィオと並んでゆりかごの『鍵』に数えられるはずだ。……もし覚醒させられたら……」

「ピンチどころじゃねえよ。どちらかが生きていたら、回収さえすればゆりかごの浮上は継続できるんだからな」

先ほど来た機動六課ロングアーチからの報告によれば、ゆりかご内でヴィヴィオをなのはが、地上でフェアを深琴がそれぞれ相手しているという。

だが駆動炉の破壊や戦闘機人達の確保は遅々として進んでおらず、それどころか管理局側がじり貧状態だとも聞いている。しかも各地のAMF濃度が半端ない速度で上昇しており、通信が阻害されつつあつた。ただでさえ膨大な数のガジェットと、量より質の戦闘機人を相手にせざる魔導師陣が不利である。数も足りなければ、人間であるが故に疲弊する。

「本局からの支援は、まだ……？」

「難しいだろうな。海で待機するだけならまだしも、地上へ直接支援するにはまだ時間がかかる」

「期待はしないほうがいい？」

「そうだな」

ヴェロツサにやや冷たく当たった零は、僅かに唇を噛む。自分にもっと力があつたなら、こんな事件をさっさと終わらせられるはずなのに。

なのはもフェイトもはやても、深琴も秋葉も——誰も悲しませずに済むはずなのに。

「……とつとと終わらせるぞ、ロツサ」

「当然。祝勝会の準備だつてあるしね」

「ああ」

頷いて、零は腰を低くして刀を振った。何も無いはずの空間が揺れ、見慣れないガジェットらしき機体の残骸を二人の目の前に晒す。鋭い刃を装着した多脚型のそれを見て、零は舌打ちした。

脳裏に、血で全身を塗らした妹分とその同僚の姿が過ぎる。

「そういうことかよ……」

「……確かにこれは、君じゃなくても腹が立つよね……」

背中を合わせ、二人は警戒を強める。瞳には何も映らないが、何か——恐らく先ほどと同型のガジェットが——いるのを感じていた。「どうする？」

「決まってるだろ。一機残らずぶっ壊す」

仲間を失い、翼を折られた彼女が言っていた、機械兵器。

黒色をした剣十字が浮かぶ。輝きを増したそれに手を伸ばした零は、次の瞬間二本目の刀をその手に携えていた。

「こいつが……こいつらが『あいつら』の仇なんだからな！」



『……懐かしいな。お前の防護服姿見るの』

「そうですね。私も、まさかミッドチルダに戻る日がこんなに早く来

るなんて思ってもみませんでした」

ライフル型のデバイスを抱えるヴァイスに、秋葉は笑って見せる。ハッチを開けているとは言え空を飛ぶ秋葉に、ヴァイスの肉声は届かない。モニター越しがやつとである。

眼下の地上では陸戦・航空魔導師達がガジェットを迎撃している姿。だがガジェットの数は一向に減る様子を見せなかった。

『にしても、数が多いな。狙いをつける間に気づかれる……秋葉、やれるか?』

「やつてみせます」

足を止め、秋葉は杖を構えた。それまで使用していた汎用デバイスではない杖を、頭上へ掲げる。

「——悠久なる凍土」

蒼氷色のミッド式魔法陣が強く輝きを帯びた。

「凍てつく枢のうちにて、永久の眠りを与えよ——凍てつけ!」

《E t e r n a l C o f f i n . 》

音声トリガーが発動すると同時に、眼下の地上が氷に覆われていく。しかし凍りついたのはガジェットのみで、迎撃部隊の魔導師達には温度変化による寒気を与えただけだった。

《E x c e l l e n t . 》

『……相変わらずだな、お前』

「広域魔法は苦手ですけど」

はにかむように言って、秋葉は手にした杖を胸元へ下した。

「フリージアのサポートがありますから。それに氷結変換は私の十八番です」

同時に地上では青磁色の縄と藍白色の檻が、廃ビル群の中でも一際小さいビルの屋上を覆う。

流星の射手は茜色の、鋼鉄の走者は空色の星を。巨大な黒竜が心優しい巫女の声に応え、若き槍騎士はその腕に雷を纏う。

均衡は、崩れ始めていた。





「っー」

斬撃に弾き飛ばされ、地上へ落下する。腕が重い。魔力の限界が近い。

(やつぱり……ここまでなのかな……)

視界がぼやける。立ちあがることもできないほど、魔力も体も限界を迎えていた。

攻撃の殆どは通らないし、通ったと思っただけそれ以上のカウンターが飛んでくる。時間が経てば経つほど勝機は見えなくなった。

斬撃も、砲撃も通らない。ならばと空間ごと巻き込んでも意味はなくて、防御の上から通るダメージに心が折れる。

(もう無理だよ……勝てっこないよ、こんな……)

立ち上がるのも億劫になる。攻撃は通らない。魔力も体力も底を尽いた。大剣へと変形させたロゼットを握る手に、力が入らない。

逆に鋭敏になった聴覚が、マガジンの回転音を拾う。助けるとかなんとか言っておきながら、何もできない自分に涙が出てくる。

(ごめん、みんな……)

弱くて、守れなくて、助けられなくてごめん。

(零さん……アーウィング執務官……)

絶対帰るって、約束したのに。絶対帰ってこいって言われたのに、それすらも守れなくてごめんなさい。

ぎゅっと目を瞑り、私は最後の瞬間を待った。——待って、いた。

だが待てども待てども、そんな瞬間も痛みもやってこない。恐る恐る目を開けると、虚ろな瞳で立っているフェアの姿が目に入った。

(……フェア、泣いてる……?)

気のせいだろうか——いや、そんなことはなかった。フェアは泣いている。一筋の涙が煌めいていた。同時に彼が手にしている愛機から小さな悲鳴が聞こえる。

(アインザッツ……まさか……)

《Master… Master… r… Mas… ter…》

初めて聞いた、アインザッツの声。ノイズに混じって聞こえた言葉

は、主を呼び戻そうと必死なもの。そのボディが悲鳴を上げているにも関わらず彼は主を呼び続ける。深紅色の宝石が、悲しげに輝いた。

《.:. buddy.》

その声に答えるように、ロゼットが淡紅色の宝石を弱弱しくも輝かせる。

《We can still fight, You and I. Not finish yet. Is that right?》『私もあなたも、まだ戦えます。まだ終われない。そうでしょう?』

「ロゼット……」

《Please call me, buddy. Please let me keep, an appointment with you.》『私を呼んでください。私に、あなたとの約束を守らせてください』

言いながらも、ロゼットはカートリッジを一発ロードした。まだ彼女は、戦うつもりでいる。フレームだって破損して、限界が近いはずなのに、それでも戦おうとしていた。

《Buddy!》

「……そうだね。私が諦めちゃ、駄目だよね……」

ふらつきながらも、私はフォーム・フィアを支えに立ちあがる。涙を拭って、残った魔力をかき集めた。罅が入っていたフレームを、修復させる。

「ローゼンクランツ、フルドライブ!」

《Ignition.》

現れた淡紅色の魔法陣が輝く。もう迷わない。使うなら、今しかないんだ。

「……魔力リミッター、フルリリース!」

《Pressure mode, off.》

リンカーコアにかけられていた負荷が、一気に消え去った。一挙手一投足に費やされ、押し込められていた魔力が全開放される。溢れんばかりの魔力が全身を駆け巡った。同時にこれまで押し込めていた分の圧力が肉体を軋ませる。瞬間に訪れた痛みをやり過ごし、傷を治

癒させた。

僅かに目を丸くしたフェアが、アインザッツを構え様子を窺っている。虹色の魔力光が辺りを漂っていた。

「行くよ、ロゼット……」

《Stand by ready. Barrier Jacket, Burst form. — Mode "Exelion"》

同時に浮かんだ淡紅色の魔法陣が、その輝きを一層強くする。その中で、私の体は空へと浮かんだ。

「……バーストフォーム……『エクセリオン』！」

光が、弾ける——。

## 24：桜花爛漫

例えば、兵器として生み出されても。

例えば、肉親の死が無意味なものだと蔑まれても。

例えば、誰かのコピーとして生み出されても。

例えば、その力の強大さ故に故郷を追われても。

それは全て、自分たちが望んだことではない。他人に押しつけられたそれらの事実を、その人たちは一生背負い、生きなければいけない。

それでも、その人たちは言っていた。きつかけや、思い一つで変わるのだと。諦めるのではなく、受け入れるのだと。

今も、その人たちは戦っている。理由はもちろん、破壊なんかであるわけではない。

その願いはただ一つ——「悲しい今」を撃ち抜くために。

私はまだ地球に住んでいた頃。ある時期までは魔力素をリンカーコアに取り入れ、自身の魔力に変換することができた。……とはいえ当時は自分が魔法を使えることなんて知る由もなかったのだから、「不思議な夢」を見るしかできなかったけど。

それが一変したのは、4歳の時。春にジュエルシード、冬に闇の書——『闇の書の闇』が海鳴市に現れた年のこと。

春、来年から通う予定の幼稚園を見学した日の夕方。小学校から帰ってきた兄と遊んでいた時——私は急に意識を失った。原因不明の意識喪失。全身をくまなく検査しても見つからない異常。「原因不明の病」を負った私は、入院先の病院で突発性意識喪失という名の発作を繰り返すようになった。

それでも夏から秋にかけては、順調に回復の兆しを見せていた。それまでは寝ても寝足りなかったのに、ある時から急に体中に力が駆け巡るあの感覚を、今でも覚えている。念のため移動には車椅子を使用していたが、自由に動き回れることに喜んだ。

けれど冬——クリスマスイブの夜、私は数ヶ月ぶりの発作を起こす

ことになる。その翌日、初めての帰宅を許されていたが、もちろん中止。それから1ヶ月に数回発作を起こすようになり、それが理由で小学校も通えなくなった（近所のボランティアや兄が勉強を見てくれたので不自由はしなかったけど）。

それから6年後。ミッドチルダへ移住してから発作を起こすことが無くなって、一ヶ月ほど。私は自分の「異常」と、その結果を知ることになる。

元々の「異常」はジュエルシードや闇の書の闇が現地の魔力素に干渉し、リンカーコアが未成熟な上、体も成長していない私はその影響を十二分に受けたこと。だがそれでも、私のリンカーコアは魔力素を取り入れ、発作を起こしつつも魔力に変換していた。

その結果、私のリンカーコアの魔力素収集速度、魔力変換効率は一エース級の魔導師のそれを大幅に上回るものになり、その代償として「魔力過剰供給による処理落ち」という欠点になっていた。

それを解決———というか、今思えば先延ばしにしていただけでも思うが———するために、私と伯父は一つの方法を見つけた。一挙手一投足、動作の一つ一つ全てに魔力を消費させれば不足することはあっても過剰供給は起こらないだろう、と。士官学校を卒業し、機動六課でローゼンクランツを受け取るまでは、伯父手製の制御アイテム（つて言っても見た目普通のリストバンドだったけど）で負荷をかけ続けていた。六課での訓練も最初はちよつときつかったけど、問題はなかった。

私にとって、その制御を解くということとは文字通り「全力全開」であると同時に、自身を傷つける諸刃の剣であるということ。それは伯父からも、六課隊長陣にも厳しく言われ続けてきた。

けれど、「本当の本当はどうしようもなくなった時」には解除も已む無し、という扱いである。———それがこのフルドライブ『エクセリオンモード』だ。

リンカーコアを全開放し、押さえつけていた魔力を全身に廻らせる。同時に纏っていた防護服は形を変えた。より強く、より速く。

防御に回す魔力を節約し、攻撃と速度に転化させるフォーム。それ

が今、私が纏うバーストフォームだ。

インナーは上下に分かれ、まるでスバルのそれのように。上着部分は袖を無くし、裾はずつと短く。外装のスカートも短くなるなど、ロングアーチスタイルにあった装甲と呼べる装甲のほとんどを、このフォームでは排除していた。

そして手にしていたロゼットもまた、その姿を変えていた。広域制圧戦を目的に用意されていた大剣・フォルム・ファイアの、もう一つの姿。

細く鋭く、洗練された一振りの刀へと。

《Load cartridge.》

ロゼットがカートリッジを一発、ロードする。そのままフェアと空中で対峙すること数秒。

《Drive ignition.》

互いが構える愛機がその機能を全開放させる。それと同時に、私たちは斬り合いを再開した。

◇

「……………」

その頃、秋月静真は自室で塞ぎこんでいた。机には参考書やノートが広がっているが、手を着けた様子はない。その眼はただ、銀色の通信端末を見つめていた。

「……………つ、あー、つたくー！」

沈黙に耐えること五秒。叫んだ静真は枕に顔を埋める。

「秋葉のやつ着拒しやがって…………マジで繋がらねえし…………今忙しいのは分かるけどよ…………」

それでもメールの送信すら禁止されるとはどういうことだ、と静真は呻く。秋葉も彼方も、深琴も今頃異世界で戦っている。それは分かっている。けれど。

「残された方の身にもなれってんだよ…………」

連絡もなく、ただ待つことがどれだけ虚しく、悲しいか。

自分はずっとそうだ。いつも待たされ、残され、置いていかれる。巻き込まないため、と言われてもそれが納得いかない。自分が無力なのを痛感する。

じつとしていっていることにも飽きて、静真は部屋を出た。その瞬間、彼の耳にすすり泣く様な声が入り込む。

(母さん？ また泣いてんのかよ……)

静真の進路に未だ納得していない母は、三者面談以降も部屋に閉じ籠って泣くようになっていた。今も「どうして……」と繰り返して。けれども、その声の方向は母の部屋ではない。

普通の一戸建てに住む秋月家は、それぞれ自分の部屋を持っている。それでも十分広い家では部屋も余り、客用寝室などに利用されていた。

母の声は二階の奥——いわば物置的扱いの部屋から聞こえてくる。可能な限り足音を殺し、静真はその部屋の扉に手をかけた。

隙間から見えたのは、物置にしては片付いている部屋。窓に沿うように置かれたベッドに、床に座り込んだ母親は頭を預けている。日が差し込むカーテンも、新品同様のベッドも淡いピンク色。置かれた学習机はどう見ても小学校入学したての子供が使うようなもの。

だが静真は、この部屋のレイアウトに見覚えがあった。そして。

「……深琴……」

泣きじやくる母は、捨てたはずの妹の名前を確かに呼んでいた。

「……深琴、どうか無事で……」

呟いて、母は顔を上げる。その手には小さな携帯端末が握られていた。

(……そういうことかよ)

そつと部屋の扉を閉めて、静真は自室へ戻る。深琴がミッドチルダへ渡った日に、秋月家はこの海鳴市に引越した。父の転勤先が海鳴市だということだ。

だが母は実家を——実家の「異常さ」を嫌い、海鳴市から遠い、西の地方で結婚したのだ。

そんな母が父の転勤を理由に実家のある海鳴市に——この家に戻

るだろうか。普通はありえない。その理由を、静真は「深琴から離れるため」だと思っていたが……どうやらそうでもないらしい。

母は何らかの手段を用いて、ずっと深琴を見守っていたのだろう。4年前に「産まなきやよかつた」と言ったその唇は、今はただ深琴の無事を祈る言葉だけを紡いでいた。

そして視界の端に捉えた、あの部屋に貼られた写真の数々。その全てに、軍服にも似た制服を纏う深琴が映っていた。

(なんだよ。俺の勘違いかよ……)

自嘲の笑みを浮かべて、静真はへなへなとその場に座り込む。

(深琴、どうか無事でいてくれよ……)

再会後、幾度となく交わしたメールで約束した。必ず一度は地球へ帰ると。その時はまた一緒に、どこかに遊びに行こうと。だから。

その時はかれこれ十年振りの、家族水入らずで食事でもしよう。

沈黙が下りた室内では、秒針が音を立てて進んでいた。

◇

地上での戦闘は、終局を迎え始めていた。

自分の力を恐れていた鋼鉄の走者は「悲しい今」を撃ち抜いて、不利な状況に追い込まれながらも、流星の射手は持ち前の頭脳で戦況を覆す。

若き槍騎士は何度も槍を交えた戦士と共闘し、黒竜の巫女は相対する少女を破壊と絶望から救いだす。

過去に苛まれていた狙撃手は再びその手に銃を取り、傷ついた魔導師は再び蒼氷色の翼を広げる。

——そして、彼らから少し離れた空の下でも、また。

◇

スカリエツテイのアジトで、No. 1ウーノは淡々と作業を続けていた。だがモニターに表示されていた数値——魔力値が徐々に大き



くなっていることに気づいた時には、もう遅い。

「探しましたよ、お嬢さん」

軽やかに呼びかけたヴェロツサを、ウーノは驚愕の表情で見つめる。

「なっ……」

ここに至るまでの道中に配置していたガジェットはすべてあの多脚タイプ。百機以上に及ぶそれを相手にしてきたには到着が速すぎる。

(あの騎士は……)

先ほどまで彼の傍らにいたはずの騎士を、ウーノは探す。

モニターの向こうでは、多脚タイプのガジェットが全機破壊されていた。破壊し尽くし、焼き尽くされたそこには多くの刀が散乱し、そのいずれもがガジェットを貫いていた。術者であるらしい少年は、言葉一つ紡ぐことなく、そこに立ち尽くしている。

そしてその刀はいずれも、実体のない——魔力で構成された模造品であった。

「スカリエッティのもう一つの頭脳。戦闘機人12体の指揮官、N.O.1ウーノ」

不敵な笑みを浮かべたヴェロツサは、自身の右手を挙げる。

「君の頭の中——ちよいと査察させてもらうよ」

◇

剣戟を重ねること——あれ、何回だろう。少なくとも五十は既に超えている。事前に消耗していた分完全回復したとは言えないし、ベストコンディションではない私の体は悲鳴を上げていた。スタミナ切れとかではない。

露わになった皮膚が裂け、赤い雫が滴り落ちる。フェアの攻撃は捌き切っているし、追いつけなくてもロゼットが防御魔法を自動詠唱・発動させるから問題はない。

魔力の過剰生成による肉体ダメージ。神経が高ぶっている今は痛

みも感じないが、きつと全部終わったらシャルル先生に怒られるだろう。怒られるだけで済めばいいけど。

っていうかきつとシャルル先生以外にも怒られる。フェイトさんは今にも泣きそうな顔で、なのはさんは澄ました顔で——それでも苛立った声で「駄目だつて言ったのに」と言うに違いない。八神部隊長は「仕方あらへんなあ」と肩を竦めながらもその向こうに般若が降臨するだろう。スバルやエリオ、キャロは心配してくれて、ティアナは「何やってんのよ」と呆れながらもちよこちよこフォローしてくれて。零さんは「だから言っただろー?」と笑顔でスパルタ指導、アーウィング執務官は問答無用で説教からの完全回復まで隔離コンボに違いない。……やばい、笑えない。

《buddy.》

「大丈夫、痛くないよ。……これくらい、全然平気」

だが、治療に必要な魔力を残す気は毛頭なかった。あれを使うタイミングは一度だけ。治療して逃すことに比べたら、後で痛くて怖い思いをする方がマシだ。

だから——。

淡紅色の魔力刃が、ゆうに100以上生成される。それら一つ一つは同色の環状魔法陣を纏っていた。

《Stinger Blade——Execution Shift.》

そして至近距離からフェアに向かったそれは、一斉に爆発する。魔力刃の爆散による濃煙がフェアの視界を阻害した。だがすぐに彼は——聖王としての機能を発動させ、煙の範囲外にいた私を見つけ出す。

だがどれほど短くても、機能発動から私の発見までにロスはある。一分にも満たない——もしかしたら30秒もなかったかもしれない。

けれど、それで十分だった。

《Restrict Lock.》

「行くよ、ロゼットー!」

淡紅色の光の輪が、フェアの動きを完全に拘束する。  
構えたロゼットの刀身が展開し、淡紅色の魔力刃へと変わる。同時に辺りの空間一帯の魔力を集束させた。

集束された魔力が、より密度を増していく。それをロゼットに纏い、距離を詰めた。その間も集束された魔力はより鋭く、力強い輝きとなる。

ロゼットの刃は、寸でのところで虹色の盾に防がれた。でも、諦めない。

皮膚が裂け、血が流れる。腕から、足から、胴体から、頭から——それでも私は魔力集束を続けた。

《Load cartridge》

「いつ……けえええええええ！」

空間の魔力だけでなく、リンカーコアの魔力をもかき集める。ここまで来て、負けるわけには——諦めるわけにはいかない。ロゼットも同じだったようで、カートリッジをマガジンの残弾全てロードする。

ピシリと音を立てて、盾に罅が入った。同時に限界を迎え始めた肉体は内側から耐えられない痛みを訴えた。内臓にダメージが入ったのか、反射的に少量の血を吐く。

それとほぼ同じタイミングで、盾の向こうから赤い結晶——レリックが姿を現した。ここまで来たんだ、もう後戻りはできない。だから。

片手で攻撃を維持しつつ、柄のマガジンを取り換える。再び両手でロゼットを携えた瞬間、魔力刃が膨れ上がった。

「二閃必倒！」

痛い。苦しい。逃げたい。でも——逃げたくない。

分かり合えないことは辛くて、存在意義を見いだせないことは悲しい。迷うのは嫌だ。真っ直ぐ進みたいと思うのに、私は弱いから、いつだって道を踏み外して迷い込む。

盾が割れ、ロゼットの刃がレリックに触れる。

でも、それでいい。それでいいんだ。

一緒に戦う仲間がいる。頼れる先輩たちがいる。一緒にいて楽し

い友達、守りたい家族がいて、帰りたい場所があつて。

一人で抱え込まなくていい。悲しい今は壊せなくても、誰かと共有すればいい。

だから、今度は私が誰かの——フェアの支えになる番だ。

「……フェア……」

——全部終わったなら、たくさん話をしよう。自分たちの過去のこと、この事件のこと、これからのこと。全部話そう。それから一緒に探そう。進むべき道を、帰るべき場所を。

レリックが罅割れていく。その速度はだんだん速くなった。

「……っ、『桜華一閃』！」

撃ちこんだ魔力により、レリックは音を立てて消滅する。

そしてその次の瞬間、空間一帯は魔力爆発に包まれた。

## 25：ファイナル・リミット

黒銀と蒼氷が輝く。ブラックアウト寸前の意識で腕を伸ばす。それは奇しくもあの日と同じ光景で、その懐かしさに頬が動いた。

けれど、確かに違うものが一つだけ。「生きたい」と唇を動かして、私は意識を手放した。

その時、アースラ内のロングアーチメンバーに衝撃が走った。ゆりかごは尚も上昇を続けているが、残る戦闘機人はゆりかご内部のN0.4のみ。スカリエツテイの逮捕、ライトニングFによる召喚師一味の保護、ギンガ・ナカジマの無事救出という嬉しい報告が続いていたこともあって、ダメージは人一倍だった。

「高濃度の魔力爆発を確認！ 場所は……っ、ロングアーチ04の交戦地点です！」

『うん……こつちも目視で確認したよ』

シャーリーの報告を聞いたはやては、視線をその地点に戻す。

「深琴のことやから魔力砲撃ってことも考えられるけど……それだけにしては威力が大きすぎる。……多分……」

『レリック破壊による爆発、ですよね……』

『横入り、失礼します』

アースラに繋がっていた空間モニターに、一人の少女の姿が映った。

『ロングアーチ04及び交戦していたアンノウンですが、無事を確認しました』

モニターが切り替わり、意識喪失状態の二人が映し出される。

『っ……』

『深琴!?』

僅かに身動きした深琴に、シャーリーは悲鳴混じりの声で呼びかけた。その隣で作業を続けるグリフィスもまた、返事を待っている。艦船操舵を行いながら、ルキノが唇を噛んだ。

ゆつくりと、黒い瞳が開かれる。

『……シャーリー……？』

『深琴！ 大丈夫!?!』

『な、なんとか……』

銀色のバリアと、黒銀の魔導師の腕に抱かれて。

息も絶え絶えな様子ながらも、深琴はそつと微笑んだ。

◇

フェアに埋め込まれていたレリックが、桜華一閃で打ち込まれた魔力に反応し——結果爆発した。魔力のほとんどを使い果たし、また防御力度外視のバーストフォームを身に纏っていた私に完全防御をする術はなく——重症は覚悟の上、とバリアバーストとリアクティブパージを発動させた……とこまでは覚えている。

次に目を覚ましたのは、今にも泣きそうな声でシャーリーが私を呼んでいた時。ぼやけた視界の向こうで銀色が揺れていて、その向こうに青空が見えた。

……あれ？ 私、生きてる？

『深琴、大丈夫!?!』

《Are you all right, buddy?》

「な、なんとか……」

乾いた笑い声上がる。生きてるんだ。その事実には驚く……つてちよつと待て、私。

段々鮮明になってきた意識が、現状を認識し始める。視界の端に映り込む黒銀。背中と膝下に腕が回されて、不思議と不安定さは感じない。抱き上げられていることは確かなんだけど……問題はその人物だ。

若干怯えながらも、私はその人物——アーウィング執務官を見上げる。執務官は表情の見えない顔でモニターと地上付近を見つめていた。

だがその瞳は、とても冷やかな色を湛えていた。青色だとかそんなレベルじゃない。……完全に、怒ってる。その原因の6割くらいは私

だろう、多分。

「……今回ばかりは……」

「？」

「……本当に、間に合わないかと思った」

言つて、執務官は私を抱き寄せる。その唇からは安堵の息が洩れていた。そのままの体勢で、私たちはゆっくりと地上に降りていく。

「ロゼット、大丈夫？」

《No problem.》

ボディには罅が入っているが、前回のようシステムダウンする程の損傷ではないらしい。残りの魔力値は、およそ3割ほど。デバイスのリカバリーと防護服を再装着するには十分足りる。

《Recovery.》

「うん。……それと……」

地上に降りて、私は覚束ない足取りながらもフェアのもとへ向かう。蒼氷色のバリアに覆われた彼から、先ほどのような妙な威圧感を感じない。

「……改めて、ロングアーチ04より、ロングアーチ、スターズF、ライトニングFへ」

気を失っているフェアの状態を確認する。意識喪失と戦闘時に負った傷以外、目立つ異常はない。埋め込まれていたレリックは爆発の中心にあったせいかな粉々に砕け、9割ほど消失していた。

「交戦していた、アンノウンの少年を保護。意識喪失と軽傷は見られますが、それ以外に異常は見当たりません。埋め込まれたレリックも9割ほどが消失。粉々に砕けてます」

『うん、了解。召喚師一味はライトニングが保護したし、戦闘機人も残るはNo. 4だけだつて』

「そつか……ゆりかごは？」

『軌道ポイント到着まであと38分。次元航行部隊の到着までは……後、45分』

「7分差……」

しかも主砲は既にミッド首都に向けられている。7分もあれば

……。

「……撃てるだろうな、確実に」

「ですよね……」

内部の状況は分からない。ヴィヴィオは無事なのか、なのはさんもヴィータ副隊長も怪我してないかと心配だし、不安だ。

『悪い。ちよつと問題発生したっばい』

もう一枚モニターが開き、映し出された零さんが口を開く。

『なんか自爆しそうだわ、このアジト』

「じばっ……ええ!?!」

何さらつと言ってるんですかこの人!

『ちよつと』の範疇をだいたい超えてるだろ……」

「相変わらず空気が読めてるんだか読めてないんだか……」

一人パニックに陥る私をよそに、執務官と秋葉さんはそれぞれ溜息を吐いていた。

『ライトニング3より、ロングアーチ04へ。こちらライトニング3』

モニターが切り替わり、フリードの背に乗ったエリオが映し出される。その後ろにキヤロは乗っておらず、見慣れない黒い竜の手の平に乗っていた。黒竜を見た瞬間、故郷ではよく知られている怪物が出てきたが、心の中に仕舞っておく。

『フェイト隊長達の救出は僕たちが行きます』

『地上の支援は、私とヴォルテールが!』

確かに今から私が飛行しても、間に合わないことは確かだ。それにフリードとヴォルテール——二騎の竜召喚を成功させ、戦力にしている二人なら大丈夫だろう。

「分かった。そっちは任せる。気を付けてね」

『はい!』

『深琴さんも、気を付けて!』

軽やかな音を立てて、モニターは閉じられる。さて、これからどうしたものか。

いつの間にか活動を再開したガジェットが空と陸、両面から襲いかかっている。そちらの迎撃に向かうべきだろうか——魔力がほとん



ど残っていない私が行っても、足手まといにしかならない。

「……フリージア」

《Divide Energy.》

フリージアと呼ばれたデバイスの蒼水色の宝石部分から、同色の魔力がロゼットに流れ込む。

「きつちり半分……ってわけにはいかないんだけど、前に分けてくれたお礼」

流れ込む魔力が、私のリンカーコアに蓄積されていく。数値にして30%程分け与えられた。先ほど使ってしまったが、なんとか半分——これなら、行ける。

「ごめんね。私、深琴ちゃんと違ってそこまで魔力量多くないから……」

「いえ！ ありがとうございます！」

《Thanks.》

《You're welcome.》

もう支えなしでも立てるし、歩いて、飛べる。だから、大丈夫だ。



「……ゆりかご、速度が落ちたみたいですね」

本局武装隊、教育隊待機室。そこで出勤命令を待ちながら装備確認をしていたルーチェ・バイオレットは、同じく装備確認中の秋月英史に話しかけた。待機室の外は未だ騒がしく、足早に通り過ぎる局員が数多くいる。

「このまま、無事に終わるといいんですけど」

「終わらせるだろうさ。六課の連中が確実に」

「そうだといいいんですけど……」

それでも、ルーチェの心は晴れなかった。出勤しているはずの親友と未だ連絡は取れない。親友の伯父である彼もまた同様のはずだが、不思議と落ち着いている。

「……深琴、無事だといいですね」

「無事だよ。あの子は強いからね」

◇

その部屋は、もとより空き部屋だった。由緒正しい日本家屋を所有する秋月家には、そんな部屋は多数存在していた。勿論内装は時代を経るごとにリフォームされ、今となつては洋風な内装になっているが。

秋月静真と深琴の母、秋月遥は——この家が嫌いだった。歴史の長く、それゆえにしがらみも多いこの家が嫌いだった。

何より嫌っていたのは、その家風。四角四面、現実主義を信条とする遥とは正反対の——神秘だとか、異能だとかオカルト的なものを、秋月家では信仰していた。実の兄が自分の全てを家に捧げなければならぬ程、弱体化していたが。

何が魔法だ。何が神秘だ。そんなものあるわけない。あつたとしても全て科学で説明できる。そう主張する遥は、内心で兄を羨んでいた。自分にはない才能を持ち、勉強も運動もなんでもできる兄。そして才能がなく、何もできない自分。

そんな家に居続けることを遥は拒絶し、高校卒業後単身関西へと渡った。そこで今の夫に出会い、二人の子供をもうけることになる。遥本人は秋月姓を継ぐことに反対していたが、夫の強い要望もあつて渋々賛同したのだ。

だが一人目——静真を、遥はどうしても愛することができなかった。言語学習能力が高く、運動神経も優れた彼に、兄を重ねてしまっていたから。

だからこそ遥は当初、深琴にその愛情を注いでいた。それは彼女が突発性意識喪失という発作を起こすようになってからも変わらなかつた。——むしろ重症化していた。この子は大丈夫。この子は自分と同じだと愛情を注ぎ続けて。

だが、結果はどうだ。自分と同じだと思っていた深琴が兄と同じ「魔導師」の素養があつて、兄の面影を持つ静真が「自分と同じ」だつ

たなんて——そう簡単に信じられなかった。そして思わず口を衝いた言葉が、遥の脳裏に過つては消える。

『あれの母親になった覚えはありません』

『あなたなんか、産まなければよかった』

そんなはずはない。そう思い、遥は顔を上げる。コルクボードに留められた写真には、その全てに紺色の制服を身に纏った深琴が映っている。共に見ることができなかった彼女の成長の速さに、遥は悲しみと悔しさを噛み締めた。

兄がその力に目覚めた時、遥は確かに嫉妬を覚えた。だがそれと同じに、より家に、血に束縛される彼を見ていられなかったのも事実である。それが例え静真でも、深琴であつても変わらない。

今、深琴は遠い世界で戦っている。その世界が平和になれば、静真もその世界へ行く。時間は、ない。勝手な願いだとは分かっている。それでも、遥は願わずにはいられなかった。

「深琴……どうか、無事で……」

そしてまた会える時が来れば、その時はもう一度自分を母と呼んでほしい。

未だ連絡のない携帯端末を握りしめる。遥の頬に幾筋もの涙が流れた。



ギンガを背負うスバルと、足を半ば引きずるように歩くティアナ。先ほどヴァイス陸曹、シャマル先生から指示のあつた廃棄都市の道路で、私たちは再会を果たした。

「スバル、ティアナ！」

「深琴！」

「よかつた、二人とも無事で……ギンガさんも」

ヘリが無事に着陸し、シャマル先生がギンガさんを受け取った。

「シャマル先生、フェアをお願いします」

「ええ」

「……深琴……」

「大丈夫だよ。シャルル先生、いい医者さんだもん」

不安そうなフェアに、私は笑って見せる。そして私とティアナは、同時にヘリに格納されたバイクを発見した。

「船の上昇は止められたみてーだが、あの中じゃまだ、戦いが続いてんだ」

操縦席より下りたヴァイス陸曹は、見慣れないライフルを抱えていた。

「突入したなのはちゃんたちと連絡がつかなくなってるの」「えっ!？」

「インドアでの脱出支援と救助任務、陸戦屋の仕事場だぜ!」

頷いたスバルとティアナは、ヘリへと乗り込む。

「……ヴァイス陸曹。私も、同行してもよろしいでしょうか?」

「だ、駄目よ! そんな状態では許可できません!」

シャルル先生が青ざめた顔で言った。

確かにコンデイションとしては最悪である。分けてもらったとはいえ魔力値は半分ほど。止血はしてるし痛みもないけれど……騙し騙しであることには変わらない。でも……。

秋葉さんが巻いてくれた包帯を、やや手荒に解く。露になった肌に負ったはずの傷は、消えていた。

「嘘……あんなにぼろぼろだったのに……」

「ある意味、人じゃないんで。私も」

目を丸くする秋葉さんに、私は苦笑する。高濃度のAMF空間でも、私のリンカーコアは耐えられるはずだ。それに、私が行かなくてはならない理由はまだある。

「ゆりかごは完全に破壊しなくてはいけません。でないと、うちのご先祖が報われませんから。仮にも古代ベルカの人間でしたし」

「深琴ちゃん……」

「……行くのか?」

「はい。なのはさん達が心配ですし……今度こそ、助けるって決めましたから」

それでも——やはりというべきか、シヤマル先生はまだ心配そうだった。けれど溜息を吐いて、肩を竦める。

「仕方ないわね……でも、絶対無理はしないこと。限界だと思ったらすぐに退避すること。いいわね？」

「はい。ありがとうございますー！」

「……深琴」

急いでヘリに向かう私を、フェアが呼びとめた。その手には待機形態に戻ったアインザッツが握られている。

「アインザッツを連れて行ってあげて……ゆりかごに関係するプロگرامが構築されてるって、前にドクターが言ってたから……」

フェアの目は、両目とも深紅色に戻っていた。心細げな彼に、私は笑顔で頷く。

「大丈夫。ちゃんと帰ってくる。それから、ゆっくり話そうね」  
今までのことも、これからのことも、全て。

「……うん……」

穏やかな笑顔で、フェアは頷いた。私たちを搭載したヘリは、ゆりかごまで一直線に向かう。

託された願いと、受け取った思い。守りたい人と、帰りたい場所。

「——絶対、助けようね」

「うん。みんな、一緒に」

「当然よ」

私の言葉にスバルが頷いて、ティアナは微笑を浮かべた。

## 26：約束の空へ

事件が終わりを告げる時。それは機動六課がその役目を果たす時。今はまだそんなこと考えられないけど、「終わり」は確実に近づいている。

けれど、そんなことはどうだっていい。

今できることは、この事件を悲しみと後悔で終わらせないということとだけだから。

スカリエツティのアジト外。聖王教会騎士団と陸戦魔導師達に、シャツハとヴェロツサは逮捕した戦闘機人の護送を依頼していた。

「私は、フェイト執務官を助けに」

「シャツハ！ その負傷じゃ無理だよ。僕が行く」

「ですが！」

『待って下さい！』

モニターが開き、データを解析しているフェイトが映し出される。『こちらは自力で脱出できます。それより、この崩落を止めないと。ポットの中の人たちが、まだ生きてるかもしれないんです。道連れにさせるわけにはいかない』

「……なら、できることは一つだよな」

日本刀・無頼を片手に、零は再びアジトへ向かった。

「なっ……零!? 何をするおつもりですか?!」

「決まってるんだろ」

シャツハとヴェロツサに背中を向けて、零は続ける。

「シャツハはひとまず治療。ロツサは猟犬でサポートを頼む」

「あ、ああ」

「他に手が空いている者、及び治療が終了した者は俺と一緒に来い。手分けして救出任務に入る。いいな?」

有無を言わず、零は即座に指示を飛ばした。その視線の向こうには救援に来た六課のライトニングFがいる。白銀と黒い竜を見て、零は呟いた。

「……怪獣大決戦かよ……笑えねえ……」

後にこの発言を聞いた妹分二人は同時にツツコミを入れたという。「つていうかその発言が笑えねえ」と。

◇

「いいか！ 船人中、奥に進むほど強度のAMF空間だそうだ」

ハッチを開けつつ、ライフル型デバイス——ストームレイダーを構えたヴァイス陸曹が言った。

「ウイングロードが届く距離までくつつける。そいつでつつこんで、隊長たちを拾ってこい！」

ちなみにそいつ、というのはバイクのことである。なんでも陸曹の私物らしい。

そのバイクに三人乗り（普通なら違法です）して、私たちは突入のタイミングを待っていた。ハンドルを握るのはティアナ。その後ろに私、最後にスバルが乗っている。

戦闘機人モードでスバルはAMF下でも問題なく行動できるし、練り上げた魔力を肉体から離さないようにすれば私も飛行できるほど回復していた。普段はアクセルフィンを使用しているが、一番近い魔導師である伯父はそういった魔法を使用せずに飛行することができするため、私も六課で副隊長兩名に教えてもらっていた。安全性を一番にしていたから魔法を使用していたけど——最短距離かつ敵の襲撃がなければ、問題は無い。

開け放たれたハッチの向こうに、ゆりかごの装甲が見える。周囲で活動を再開したガジェットII型を、ヴァイス陸曹は撃ち落とした。同じ射撃型のティアナが反応する。

「前に言ったな。俺あエースでも達人でもねえ。身内が巻き込まれた事故にビビって、取り返しをつかねえミスショットもした。死にてえぐらい情けねえ思いもした。それでもよ！」

ヴァイス陸曹はマガジンを取り換え、カートリッジを四発ロードす

る。

「——無鉄砲で馬鹿つたれな、後輩の道を、作ってやるぐれえのことはできらあな！」

そして生成された多重弾殻が、ガジェットⅢ型を射抜いた。

「よし、行け！」

「は、はい！」

「ウイング……ロード！」

空色の道が、ハッチとゆりかごを繋げる。

「「ゴーツー！」」

勢いよくアクセルを吹かせて、私たちを乗せたバイクはゆりかごへと向かった。



「……行きましたね」

「そうだな」

空色の道が広がったことを確認して、秋葉とデイバインは溜息を吐いた。それでも攻撃の手は緩めず、へりにまわりつくガジェットを破壊していく。

「なんであいつは、好き好んで危険な道に進むんだか……」

「でも、深琴ちゃんらしいといえづらいかもですね。あれで大人しかったらびっくりです。そういうところは兄妹そっくりなんですよね」

もしくはそういうところが「秋月の血」なのだろう。静真曰く「びっくり人間大賞」時には「平和主義の殴り合い主義」と呼ばれるその血を、先ほど——フェアとの戦闘で秋葉は確信していた。

「執務官的には、深琴ちゃんは『可愛い妹分』ですか？」

「それは零の方だろう。お前と一まとめに『弟子兼妹分』と言ってるからな」

「どうでしょうね」

さらりと言い放って、秋葉は「だってあの人、身内大好き人間です



から」と続ける。

「あの人、身内が巻き込まれるのも身内を巻き込むのも大嫌いですから。いきさつはどうであれ、こうして関わりを許した時点で身内じやなくなつて、いわば『戦友』つてやつです。ぶっちゃけなくても優しすぎるんですよね」

足を止め、広い視野で捉えた敵に魔力弾で攻撃する。

その僅かな間に、秋葉は瞳を伏せた。

(まるで……ティード……あなたみたいに……)

自分を庇い、死んだ戦友ティードと自分を救い、導いた恩人零。

自分の胸を刺す後悔は消えるどころか未だ色濃く残っているけれども、それでも自分はまだ生きている。こうして戦うことができる。だから。

「終わらせましょう。ここで、全部」



「アインザッツ。ちよつとだけ、力を貸してね」

《Drive ignition》

私の魔力でダメージを修復したアインザッツは、ゆりかごへのアンチプログラムを発動させた。魔力が私の体を一気に駆け巡る。——さすがに魔力素も消されて、新たに結合することはできないけど。(でも、マシであることには違いない)

バイクから飛び降りたスバルが先導し、キューブ状の防衛兵器を破壊する。しかし後方に残っていた兵器はそのまま照準をバイクへと向けた。

「深琴ー」

「任せてー」

立ち上がった私は、バランスを取りつつ右腕を伸ばす。ロゼットのフォルム・ツヴァイ、そしてショートソード型のアインザッツを構えて、八発の魔力弾を生成した。

「行くよ、ロゼット、アインザッツ」

《All right, buddy.》

《I will do my best.》

二機のサポートを受けた魔力弾は防衛兵器に向かっていく。キューブ型を破壊して再び手元に戻ってきた魔力弾を集め、砲撃へと変える。

狙いは後方——ガジェットⅢ型！

《Cross Fire Shoot.》

一直線に飛んで行った魔力砲撃は、そのままⅢ型を貫いた。ミッドチルダ式のそれを改良し、私が得意としてきた純粹魔力の放出。資質的にも肉体的にも、使用には何の問題は無いらしい。これなら帰り道にガジェットが現れても、交戦可能だ。

「……深琴……あんた、ほんと無茶するわね……」

「あはは、よく言われる」

「ほんとに、もう……」

肩を竦めたティアナは、前方を見据えたまま続ける。

「迎撃はスバルに前端的に任せる。あんたは魔力、温存しときなさい。」

——さすがに五人乗りできないから、このバイク」

「できたらびつくりだよ」

今回の三人乗りだってギリギリだったのに（私も隊舎にバイク置いておこうかな）、なのはさん、八神部隊長、ヴィヴィオ、No. 4は一度には乗せられるはずがない。まあそりゃ誰かとヴィヴィオなら行けそうな気もするけど。

前方のスバルが、玉座に続く壁をぶち壊す。眼下の玉座ではなのはさんの腕に抱かれるヴィヴィオ、八神部隊長とリン曹長、拘束されたNo. 4が呆然とした表情で、私たちを見上げていた。

「お待たせしました！」

「助けに来ました！」

「……うん」

◇

「スカリエツテイ本拠地、振動停止。突入隊及び、ライトニング1、ライトニング3、脱出確認！」

アースラ艦内にルキノの報告が響く。

そしてそれに続くかのように軌道上で待機していた次元航行部隊の報告が上がる。

「巨大船内部に突入した魔導師、第一隊から第四隊まで退避。最深部機動六課メンバー」

空間モニターに、空色の道が広がった。

「——全員、脱出確認！」

◇

それから八神部隊長とリイン曹長、N.O. 4はバイクに、なのはさんはスバルが背負い、私はヴィヴィオを抱き上げて来た道に戻る。

「お姉ちゃん……」

「もう、大丈夫だよ」

そして主と駆動炉を失ったゆりかごは、惰性的に上昇を続け——軌道上に到達する寸前で、次元航行部隊の一斉砲撃により撃墜された。

私が——私とスターズコンビがそれを聞いたのはおよそ半日後。

「やったあ！ やりましたあ！ あはは！ やったあ！」

遠くで、シャーリーの声が聞こえる。喜んでいようだ。凭れなかったためくもりに、私は瞳を閉じる。すぐさま襲ってきた睡魔は、容赦なく私を引きずり込んだ。なんとか抗おうと試みるも、意味はない。

「……よく頑張ったな」

優しい声が、すぐ傍で響く。肩に回された腕が、頭を優しく撫でてくれた。——ああ、もう限界。

意識を飛ばす寸前に、八神部隊長の声が聞こえた気がした。

「みんな、ほんまにお疲れや」

——レリック事件をきっかけに始まった、今回の任務は、こうして無事に終わりを告げました。

いくつもの出来事が絡み合ったこの事件が、ジェイル・スカリエツ  
テイ事件、または、JS事件と呼ばれるようになったのは、事件が終  
わって随分経ってからのこと。



JS事件終結より、三ヶ月後。

逮捕されたスカリエツテイと、事件捜査に協力の意思を見せなかつた戦闘機人たちは、それぞれ別世界の軌道拘置所。

罪を認め、捜査に協力的な姿勢を見せた子たちは、ミッド海上の隔離施設。ライトニング隊が保護した二人、ルーテシアとアギトとフェアも、自分たちで決めてそこにいる。

「つか、なんでフェア様も？」

セインに話を振られたフェアは、深紅色の瞳を瞬かせた。しかし数瞬後にはその表情は穏やかなものへと変わる。

——「これからは、ちゃんと生きるって約束したから」とのことらしい。

そうそう。フェアの経歴に関して、なぜかスカリエツテイは詳細を纏めたデータをフェイトさんに提出したらしい。それはルーテシアとアギト、そして更生を決めた娘たちの分もあったとのこと。

彼女たちが、すぐに外に出られるように、と。異能の天才と呼ばれ大規模テロリズムの首謀者にも関わらず、ジェイル・スカリエツテイという男もまた身内には等しく愛情を注いでいたらしかった。

それからミッド地上は平穏を取り戻し、機動六課のオフィスも修理完了。隊員たちも全員職場復帰を果たして、ヴィヴィオも一時保護と検査から無事帰ってきて、ママと一緒に平和な暮らし。

けれど過ぎていく日々は、一つの事実を突き付けた。

機動六課の試験運用は、一年間。春が来たら、私たちは卒業だ。

(あつという間だなあ……)

卒業後の進路とか、ランク試験のこととか、フェアのことで頭がいっぱいになっている内に、毎日は過ぎていた。

そして新暦76年、4月28日。機動六課隊舎では解散式が行われていた。

「長いようで短かった一年間。本日をもって、機動六課は、任務を終えて解散となります。皆と一緒に働けて、戦えて、心強く嬉しかったです。次の部隊でも皆どうか元気に、頑張ってください」

入隊の時と同じ、短く簡素なメッセージ。——あまりにも一年があっさり終わってしまった。

「まあ、この後お別れ二次会もありますし」

「シャーリー、張り切ってたからね……」

しかも二次会後は有志による三次会、四次会と続くらしい。機動六課同窓会会長・シャーリーが忙しいはずなのににこにこ笑顔で奔走していたのを思い出す。

「あ、みんな、ちよつと」

そう呼びとめたのは、なのはさんとギンガさん。

「二次会前に、フォワードメンバー。ちよつといいかな？」

そうして呼び出されたのは、訓練スペース。いつもは何もない海上だが、今日は違っていた。

桜の花びらが、訓練シミュレーターを埋め尽くす。こんなに近くでこの花を見るのは、初めてかもしれない。

「うわあ……綺麗……」

「私やなのはちゃん、深琴の故郷の花」

「お別れと、始まりの季節に……つきものの花なんだ」

式典とかでは見ることができなかったけど、病室の窓越しに見ていたこの色はよく覚えている。そしてそれ以上に見覚えのある人々。隊長たちにヴィヴィオはともかく、零さんやアーウィング執務官、秋葉さん——そして実兄・秋月静真まで集まっている。

「って、お兄ちゃん!? なんでここに!? 大学は!?」

「講義が午前中だけだったんだよ。で、俺も関係者枠で二次会に呼ばれててさ」

クラナガン市内の大学に一発首席合格を果たした兄は、にこやかにフワード陣とあいさつを交わしていた。色々ツツコみたいが、整列の号令がかかったのでそちらを優先する。

「さて、まずは5人とも、一年間訓練も任務もよく頑張りました」「この一年間。あたしはあんまりほめたことなかったが。おまえら、まあ、随分強くなった」

……え？

「辛い訓練、きつい状況、困難な任務。だけど、一生懸命頑張って、負けずに全部クリアしてくれた。……皆、本当に強くなった。5人とも、もう立派なストライカーだよ」

「……ああ、泣くな馬鹿たれどもが」

どうやらみんなして泣いてしまったらしい。袖で涙を拭うと、なのはさんもヴェータ副隊長も涙ぐんでいた。

「さて。せっかくの卒業、せっかくの桜吹雪。湿っぽいのはなしにしよう」

「ああ」

「自分の相棒、連れてきてるだろうな」

まあ相棒ですから、置いてくるはずがない。だがそれにしては隊長たちとフェイトさんの雰囲気あまりにも違っていた。

「え？ え？」

「なんだ？ おまえは聞いてなかったのか？」

「全力全開、手加減なし！ 機動六課で最後の模擬戦！」

あの、シグナム副隊長……そんなの、聞いてませんよ？

「全力全開って……聞いてませんよ!!」

「まあ、やらせてやれ。これも思い出だ」

「ああ、もう……ヴェータ、なのは！」

「固いこと言うな。せっかくリミッターもとれたんだしよ」

「心配ないない。皆強いんだから」

周囲が敵だらけであることを悟ったフェイトさんは、零さんとアーウィング執務官に矛先を向けた。

「二人もなんか言っつて！ なのはたちを止めないと……」

「いや、無理だろ」

「思い出になるかは分からないが、記憶には残るだろう。いいんじゃないか」

「だよなー」

「もう……」

ああ、フェイトさん、すっごく苦勞人だ。

でもまあ、それでも全力全開の模擬戦に私たちフォワード陣のやる気は一気に上昇する。どういうフォーメーションを取るか、とか絶対勝つぞ、とか盛り上がっていた。

「フェイトさんも、お願いします!」

「頑張つて勝ちます!」

「もう……!」

エリオとキャロの言葉に頭を抱え、そんなこと言う割にノリノリな気がするのはいのせいですか、フェイトさん。

「それでは」

防護服を纏ったフォワード陣と秋葉さんは一列に整列する。

「レディー……」

同じく防護服を纏った隊長陣と零さん、アーウィング執務官も整列した。お互いのその手には、事件を共に駆け抜けた愛機が握られている。

「ゴーツ!」

八神部隊長とギンガさんの掛け声と同時に、12人の魔導師はぶつかりあった。

ちなみにこの模擬戦は24分間という短くも濃い時間で決着が付いた。一言で言うと、死ねた。

機動六課卒業から、早一週間。

あれからみんな、それぞれの進路へと進んだ。隊長陣はそれぞれ元の所属先に戻り、変わらぬ日々を過ごしていると聞く。

私たちロングアーチ、フオワード陣も、また。

シャーリーはフェイトさんの補佐官として次元航行部隊に復隊。

アルトは地上本部、ヘリパイロットとして正式に採用された。

ヴァイス陸曹も同じく地上本部。返納していた武装局員資格を再取得したとか。

グリフィス准尉は次元航行部隊に転属し、事務官として。ルキノはグリフィス准尉の補佐官を勤めつつ艦船操舵手への道へ。

フェイト隊長の二人目の補佐官になったティアナは次元航行部隊に転属し、夢に向かって進行中。

キヤロは前所属の自然保護隊に復帰、希望転属したエリオと一緒に竜騎士・竜召喚師コンビとして自然保護・密猟者対策業務において活躍。

スバルはかねてより希望していた特別救助隊にスカウトされ、フオワードトップとして活躍。

秋葉さんは高校を中退して、首都航空隊に復帰。凍結系変換資質を活かして、近隣の災害担当に貸し出されることが多くなったとか。

ルーテシアは目を覚ましたお母さん——メガーヌ・アルピーノさんと、無人世界・マウ克蘭で一緒に暮らすことになった。彼女の召喚獣・ガリユーも当然、傍で見守っている。

アギトはシグナム副隊長の融合騎として、補佐官の道を歩み始めた。今は八神家の一員として、元気にやっているらしい。

フェアは零さんの申し出を受け、ナンバーズのセイン、オットー、デイドと一緒に聖王教会で修道騎士兼執事として社会勉強中。

——そして、私は。  
「こんなもの、かな」

鏡に映る私が纏うのは、本局法務部の黒制服。少しばかりサイズが大きい気もするが、まだまだ成長期。背ももう少しくらい伸びてくれると信じてる。確認も完了し、私は外へ出た。

向かうは本局法務部オフィス。しかしその道の途中で、私は足を止めた。

わざわざ待っていてくれたらしい上司——デイバイン・アーウィン



グ執務官が、私を見る。

「もう少し、ゆっくりしてても良かったんだが」

「お待たせしては申し訳ありませんから」

「それもそうか。——行くぞ、『秋月執務官補』」

「はい。アーウィング執務官」

執務官の一步後ろを歩きながら、私は過去に思いを馳せる。

一年間、共に過ごした仲間たちへ。色々大変なこともあったけど、今はこうして、全部を笑って語れるようになりました。

——また会う日まで、どうか元気で。

## 26. 5: The Day after I

9月14日。——次元世界を震撼させた、時空管理局ミッドチルダ地上本部襲撃事件。その中心にあったのは次元犯罪者ジェイル・スカリエツテイと、その作品群「ナンバーズ」。

対策部隊である機動六課は主力が出撃していた間隙を突かれ召喚士ルーテシア・アルピーノとその召喚獣たち、魔導師フェアクレールト・ナハト及びガジエツト群によって本部全壊。

真実を知り得ないまま高町なのはが保護していた「聖王の器」はスカリエツテイの計画の為拉致。機動六課出向中のギンガ・ナカジマ陸曹は、ナンバーズ三名によって致傷及び拉致。

——十年以上の過去にさかのぼる「戦闘機人事件」。そして「人造魔導師計画」。

管理局の希望と暗部が螺旋の様に絡み合うその事件の最中、無限の欲望は牙を剥く。——聖王のゆりかご復活と、聖王覚醒。

待ち望んだ主を得てゆりかごは空へと上がり、空と陸、激戦の果てに掴んだものは——勝利と達成と、伸ばした手を取り合うこと。

そして決戦の後もなお飛び続けるゆりかごと自壊を続けるスカリエツテイの本拠地。

取り残されたエース達を救出したのは機動六課のストライカー五名。

事件は幕を閉じ、混乱の一時は瞬く間に過ぎてゆき……。

10月の暦が終わる頃、機動六課はその隊舎と共に、平穏な日々を取り戻していた。

機動六課隊舎、陸戦訓練場。その一角で、私達フォワードはぐったりしていた。

「あーあー。フォワード諸君、ぶったるんどるねえ」

そう言ったのは、私達のデバイスを預かりに来たアルトだった。

「たるみもしますよ……」

息も絶え絶えに言ったのはティアナ。その言葉に同意して、スバルがよろよると立ち上がる。

「最近ますます訓練がキツイんだよー……」

「訓練レベル、どんどんあがってるもんねえ」

アルトの言葉通り、最近高町教導官、ヴィータ副隊長の訓練レベルは上昇の一途を辿っている。少し前——今ではJS事件と呼ばれる事件で一番の大ケガをしていたはずなのに、誰よりも速く復帰して。「まあレリック事件は終わったけど、みんな魔導師としてはまだまだレベルアップできるんだもんね」

言って、ルキノはデバイスを受け取る。

「卒業までに教えることが目白押しなんだそうです」

「うれしいですがちよつと大変です……」

キャラの手を引いて、エリオは言う。

……卒業、か。

一年間の期間限定で設立された機動六課は、来年の四月でその役目を終える。同時に隊員達は各々古巣や新天地へと向かう……のだから。

今のところフォワード陣では私とエリオ以外は古巣に戻る予定だ。スバルとティアナは386部隊に、キャラは自然保護部隊に。

事件解決の協力者である霜月秋葉さんは、かつて所属していた航空武装隊へと復帰する予定だとか。今はリハビリに忙しいらしい。時々六課を訪れては、本格的な治療を受けている。

「そっか。深琴も士官学校出て、すぐうちに来たんだもんね。希望とかあるの?」

「希望とかは、あまり……」

娘同然に育ててくれた伯父から、教育隊へ来るよう誘いを受けているが、保留にしている。

もちろん希望はあるが——正直なところ、自信がない。六課で過ごした一年間で少しは強くなっているとは思うけど……。

「まあ深琴は忙しいもんね」

言って、ルキノはロゼットを受け取る。あ、とアルトは思い出した

ように声を上げた。

「そっか。試験つてもう来月なんだっけ」

「うん」

「勉強も大事だけど、ちゃんと寝ないと駄目だからね」

ルキノは言う。というのもつい先日深夜まで私の部屋の灯りが付いていたところを目撃しているから。今から一年未満にはまだ士官学校の学生だった私は、試験勉強にも特に嫌悪感を持っていない。ただ勉強中はそれに集中しているせいかな周囲——人の動きだとか時間だとか——にかなり鈍感になる。

おかげで隊員の九割以上が知っているアルト・クラエツタの「恥ずかしい秘密」(彼女に言わせれば黒歴史らしい)も知らなかった程だ。……まあ当初は誰かと必要最低限の会話ができなかつたというのもあるけど。

それを考えたら、成長はしてるんだよね。再会した兄とは頻繁にメールするほどまでに関係が修復されたし、つい先日まで敵対していた親友とだつて説得できたし。一部始終を知つた兄貴分は「何その『友達に……なりたいんだ』からの全力全壊」とか言つてたけど気にしない。

「そーだ。八神部隊長から伝言」

「？」

ぽんつ、と手を叩いたアルトが口を開いた。

「アーウィング執務官から面会予約入つてるって。ちなみに待ち合わせまで後15分程」

「それは早く言つてほしかった!」

◇

全速力で寮へ戻つた私は、大急ぎでシャワーを浴び、陸士制服に着替え、待ち合わせ場所である機動六課隊舎へと向かう。飛んだり加速魔法が使えたらいいんだけど、隊舎内での魔法使用は原則禁止とされていた。近くを通る同僚たちは「頑張れよー」とか「転ぶなよー」と

か声をかけていた。誰もぎよつとした顔で振り返らない。いや、まあちゃんとぶつからないようにルートは目視確認してるんだけど、一人くらい何事かくらい思おうよ。

目的地は機動六課隊舎・ロビー。部隊員や外部との交流がメインのこの場所は、食堂に次ぐ利用率だったりする。その一角に、アーウィング執務官はいた。

「すみません！ お待たせしました！」

「ああ……っ!? 馬鹿、そんな靴で走るな！」

言つて、執務官は立ち上がる。それと同時に。

いきなり叱責された事実には、僅かなりとも動揺した私はバランスを崩す。右足が嫌な音を立てた。

——本当に今更だが、ここ機動六課では制服の着こなしはあまりうるさく言われなかったりする。ヴァイス陸曹はほとんど運輸部の制服だし。それ以外のみんなは、よほどのことがない限り陸士制服を着用する。

しかしリボンやネクタイの色や形、靴下やストッキングの種類・丈、そして靴はまったくもって自由だ。ちなみに私は淡紅色の紐リボンに黒のオーバーニーソックス、そして同色でヒールが低いパンプスを愛用している。

さて、ここで本題に戻ろう。私が履いているこのパンプス、ヒールが低いため非常に走りやすい。だがいくら低いヒールと言えど、ある程度の安定さと走りやすさを考慮すると「ぺたんこ」にはできない仕様だ。

つまるところ、全力疾走していた私はヒールが滑ってバランスを崩し、右足を挫いて、そのまま右寄りに。

——それはもう盛大に床にダイブした。

「深琴！」

駆け寄った執務官は私を抱き起す。反射的に衝撃緩和魔法を発動したおかげで痛みはほとんどない。あるとしたら右足と精神的なものだ。ロビーにいる人があまりいないのが幸いである。

大急ぎで右足首にヒーリングをかける。徐々に和らいでいく痛み

は、一分後にはまったく感じなくなつた。

「大丈夫か!? 他に怪我は……」

「……だ、大丈夫です」

——なんか、子供扱いされてる気が……。

そもそもその出会いは「被災者とその救助者」だから仕方ないとして……でもあれからもう4年が経つ。再会してから6ヶ月は過ぎていて、その間にナンバーズとの交戦、地上本部襲撃事件（機動六課隊舎襲撃も含む）、そしてJS事件とその殆どに彼は関わっていた。

（つて言っても、執務官とお兄ちゃんって一つしか変わらないはずだし……）

……もしかしたら私は執務官と兄を重ねているのかもしれない。自分を守ってくれる存在として。自分を（少なくとも兄は他の家族よりはそうだった）大切にしてくれる存在として。

傍にいてくれると安心できて。姿が見えないと寂しくなつて、つい探してしまいそうになる。自分で何とかしなきゃと思つても、その存在を頼りにしてる自分がいた。

でも、このままじゃ駄目なんだ。強くならないと。彼を頼りにするのではなく、彼に頼られるような——そんな強い人にならないと。

「——だいたいお前はいつも……深琴？」

「っ、あ、はい！」

呼びかけに顔を上げると、心配そうな青い瞳と視線がぶつかった。

「顔色が悪いが……さっきの怪我、まだ痛むか？」

「いえ、大丈夫です！ つていうかさっきのはもう掘り返さないでください！」

かつてのヴィヴィオなみのダイブの床は精神的にきついものがある。年齢的な意味で。だからできるならもう二度と掘り起こさないでほしい。

と、執務官は「ならいい」と話を切り替えた。

「はやて達から聞いた。——六課卒業後進路について、色々声がかかっている」と

「……みたい、ですね……」

伯父からは本局教育隊に。副隊長達と秋葉さんからは航空武装隊に。そして。

「それとなのはからも、声がかかっているんだろう？ 教導隊に来ないか、と」

「……はい」

ポジションフリーとしての私の主な戦闘スタイルは一応「航空剣技」である。ちなみにこのスタイルは珍しく、またその上でミッドチルダ式の砲撃魔法を使用し、古代ベルカ式技能者の私は更に希少だなのはさんは言っていた。だから教導隊ちに来ないかって。戦技教導隊は（平時は）装備や戦闘技術のテストや研究、演習での仮想敵役や技能訓練が主な仕事だ。私のスタイルならどの仕事だってこなせるから——となのはさんが熱弁を振るっていたのを思い出す。

「……なんか正直言つて、頭がパンクしちやいそうなんです。どこに行けばいいのか、全然わからなくて……」

六課に入隊する前は、そんなことなかった。ランク試験はあるし、進路は中々決まらないし、その詳細の話が私に降りてくることはめつたになかった（教官や伯父、その他スカウトしてくれた部隊まで止められていたとは聞いているけど）。

そしてあの頃は、ただ執務官に会いたいという思いでいっぱいだった。会って話が見たい。感謝の言葉を改めて伝えたいと、それだけで一日一日を過ごして。いて。

でも、彼と再会し、こうして気兼ねなく話をすることができるようになって、分からなくなってきた。これからどうすればいいのか。いや、そもそも「これからどうしたいのか」が。ただ根底にあるのは強くなりたいというだけ。

「……あまり、お前を困らせたくはないが……」

言つて、執務官は「仕方ないか」と溜息を吐いた。そして意を決したように真剣な目で私を見据える。

「深琴。俺と一緒に来る気はないか？」

「……………え？」

言葉が、それ以上出てこなかった。今、彼はなんて言った？

駄目押しと言わんばかりに、執務官は再び言葉を紡いだ。

「俺の副官——執務官補佐をやってみる気はないか？」

「……すいません」

ああ、言っちゃったよ。私の返事——しかも拒否を聞いた執務官は、指先一つ動かすことなく固まっている。私の予想だと「だよな」とあつきり受け入れると思ってたんだけど……。

余程衝撃的だったのか、執務官が自力で我に返ったのはそれから五分程経過した頃だった。そして「一応言っておくが」口を開く。

「別に補佐考查を受けるというわけじゃない。俺はフェイトと違って正式な補佐官を持ったことがないから、希望指名でお前を……」

「でしたら、尚更……すいません」

引き抜く、と続けようとする彼の唇が、閉ざされる。何故、とその眼が聞きたそうに揺れていた。

「その、受けるつもりなんです、私。再来週の……『執務官補佐考查』」



「で、現在進行自棄酒中ってか」

「……悪いか」

「悪くはねえよ。原因が原因だからむしろ笑える」

不敵な笑みを浮かべて、零は手にしていた缶チューハイを呷った。そのペースは非常にゆったりとしたもので、かれこれ一時間以上は経過しているにも関わらず、まだ一本目を開けていない。

一方のデイバインはその手で缶ビールを無意味に揺らしながらも、20分に一本のペースで缶を開けていく。ちなみに彼がメインで手にしているのは500ml缶で、零は350ml缶である。

現在彼らがいるのはミッドチルダ首都・クラナガンのマンション。デイバインが自宅として申請している部屋だった。「虫の知らせ」を聞いた零が缶チューハイを購入してそこを訪れたのが1時間半前。その時点でデイバインは自棄酒を開始している。

「……何で、深琴は……」



俺の誘いを断つたのだろう。何故俺の傍にしようとしなのだろう。先ほどから事あるごとに呟かれたその台詞が、再び紡がれた。

「仕方ないだろ。深琴本人が考えて出した結論だし。それに正式な資格を取ってから引き抜くって手が残ってるだろうが」

「……それじゃ、遅すぎる」

「十分だろうが。しかもお前は六課の連中にある程度顔が利く分、他の部隊のやつらに比べて恵まれてる。深琴本人と個人的に連絡取れる分、六課を——はやてを通す必要はない。違うか？」

溜息混じりに、零は言い放つ。そろそろ彼の堪忍袋も限界が訪れていた。別に、友人の愚痴を聞くことが嫌なわけでも、例え酔っ払いであつてもその世話が嫌いなわけではない。ただ問題を挙げるとすれば、一つ。

「お前、深琴に対する認識をそろそろ全面的に改めろよ」

その一点に尽きた。

「あの火災から4年。深琴だつてもう14歳だ。いつまでも子供扱いしてんじゃねーよ」

その気持ちは分からなくもないけど、とは言葉にしない。そしてデバイスもまた口を開いた。

『もう』じゃない。『まだ』14歳だ」

「それでもだ。俺たちはその年にはそれぞれ今の職場で、今の仕事をしてただろうが。……まあその分、早い頃から訓練は受けてたけどさ」

「だつたら尚更、潰されないように守るべきだろ」

「何に潰されるんだよ。管理局か？ 仕事か？ それとも上司か？

そもそもそれは深琴が自分で考えることだし、あいつの横のつながりは俺やお前の比じゃない。俺やお前が出しゃばる領域じゃない」

ミッドチルダ第一士官学校を卒業した深琴の同期の殆どは、時空管理局本局でキャリア組として日々その仕事に従事している。特に彼女たち61期生はこれまでにない豊作だったらしく、首席卒業チームを除いた9割が管理局にキャリア組として入局していた。

深琴自身はあまり友人付き合いが得意な方ではないが、それでも相

手は同期生、そしてその3割程はクラスメートとしての付き合いがある。特に深琴は最年少。「妹分」として可愛がられていたのは彼女に  
関係する人物にとって周知の事実だった。

「いいこと教えてやるよ、デイバイン。深琴に直接声をかけた人間で、  
お前以外の全員が深琴の『現在』を評価してるんだよ。お前みたいに、  
いつまでも過去の——『守られなきやいけない』あいつじゃない」  
「……………」

「いい加減分かってやれよ。っつーか、そこまで深琴にこだわるなよ。  
そりや深琴が珍しいのは分かるけど」

執務官として、そしてそれ以前から「何も守れなかった」デイバイ  
ンが唯一守れた命。だからこそ彼女の危機にはすぐさま駆けつけ、手  
を貸す。その気持ちは分からなくもない。だが彼のそれは行き過ぎ  
だと零は感じていた。確かに自分も深琴や秋葉に甘い、それでも突  
き放す時は突き放している自覚がある。

(いっそそういう関係になった方が楽なんじゃねえの、こいつの場合)  
彼の行動原理は「深琴を守りたい」だ。そしてそれは「自分が」、「深  
琴を」、「自分の傍で」、「自分(自分の知り合い)以外から」守りたい  
という、言ってしまうなら独占欲から来ている。

そんな動機で将来を束縛される深琴に心から同情した零は、溜息を  
零した。

(まあでも、見ている飽きないからいいけどな)

きつと今頃、件の妹分は盛大にくしやみをしながらも来るべき日に  
向けて勉強を進めているのだろう。



「くしゅんー！」

盛大にくしやみをした私は、膝にかけていた薄手のカーディガンを  
羽織った。さすがに夜になると冷えてくる。

「大丈夫？」

「うん。ティアナこそ、寒くない？」

場所は機動六課の寮、私の私室。二人部屋を一人で使用している私は、今日からここにティアナを招くことにした。夕食後から、就寝前の数時間だけ。

再来週に行われる執務官補佐考査に向けて、勉強会だ。

「悪いわね。いきなり押しかけて」

「ううん。私は一人部屋だし、気にしないで」

「そう言ってくれると助かるわ。ありがとね」

「どういたしまして」

ティアナはスバルと同室だし、その進路は確実に違う。再来週に試験を控えた身としては夜も可能な限り勉強に時間を割きたい。というところで私の部屋を訪れた。

「でも、そろそろ休憩しない？ お茶淹れるよ」

「あ、いいのよ？ そこまで気にしなくても」

「根を詰め過ぎるのも駄目だしね。コーヒー、紅茶、レモネード……

あ、ココアもあるけど、どれがいい？」

「じゃあココアで」

「おっけー」

備え付けの簡易キッチンに立ち、お湯を沸かす。二人分のコップにココアを用意して、冷蔵庫に入っていた水羊羹を出した。

「季節外れの貰いものだけど、よかつたらつまんで」

「ありがと。次からは私も何か持ってくるわ。……せめてコップだけでも」

「あはは。そこまで気にしなくていいって」

切り分けた水羊羹を、二人で食べる。会話は自然と試験の話になった。

「でも、ティアナなら受かるよね。きつと100点満点で」

「それはこっちの台詞よ。まあ二人揃って満点合格できたらいいけどね」

「ねー」

——ゆつくりと近づいてくる「卒業」の時。変わってゆくもの、変

わらないもの。

## 27 01:11月、休暇の前に

思い出すのはレリック事件——JS事件の渦中の出来事ではなく、機動六課の隊舎が完全復旧し、平和な通常勤務に隊員のほとんどが慣れ始めた頃。

ちようどこの頃と言えば、みんなにスカウトが入り始め卒業の雰囲気を感じられた時。

私とティアナは、先週受けた執務官補佐考査の結果待ち。

エリオとキャロは二人仲良く、キャロの前所属の自然保護隊への転属を考えて。

唯一スバルは、今のところ前所属の陸士386部隊へ復帰の方向で話が進んでいる。

でも今日からしばらくは、そんなことは考えなくてもいい。

今月の頭に各部隊隊員たちへ通達された、三日間の休暇。余程のことがない限り呼び出しはなく、滞在地制限もない——勿論どこへ向かうかは一応申請はするけど——機動六課初めての、完全休暇。

スターズ、ライトニング、ロングアーチと各自持ち回りかつ希望シフトで振り分けられたそれを、みんな満喫する予定だ。……ちなみに、スバルとティアナはこの話をすっかり忘れて、ヴィータ副隊長に怒られていたりする。世界は平和そのもの、出動も無いけれど、訓練はあるしそのレベルはこれまで以上の難易度だ。他にもやれ進路だの試験だので最近は忙しかったから、忘れていても無理は無い……のかなあ？

そんなこんなでスターズ隊は二日前に休暇に入り、ライトニングF、そして私は事務仕事と——シグナム副隊長と個人戦を繰り広げていた。つい30分前に始まったにも関わらず私たち……っというか一方的に私はぼろぼろの状態で、周囲の残存魔力もかつてないハイペースで上昇している。

「行くぞ、レヴァンティーン！」

《Jawohl.》

炎の魔剣が、その名の通り猛る炎熱を身に纏う。

「ロゼット！」

《Load cartridge.》

相對する私はローゼンクランツ フォーム・エクセリオンを構えた。展開された装甲部分に周囲の魔力が集束される。そのまま私たちは一気に距離を詰めた。

「紫電——」

「——桜華」

炎熱と集束された魔力が剣戟の度に火花を上げる。炎を纏った刃先をロゼットで薙ぐように逸らし、そのまま奥へ踏み込んだ。

そして刃先を反転させ、斬り上げる。

「——閃！」

膨れ上がった魔力刃が、シグナム副隊長を切り裂いた。もちろんダメージは残らない。

「なかなか、悪くない太刀筋だな。なのは隊長と騎士零の指導を受けているだけはある」

「ありがとうございます！」

お互いデバイスを待機状態に戻して、着地する。一部始終を見守っていたヴァイス陸曹は「怪獣大決戦かよ……」とよくわからない感想を漏らしていた。女性に怪獣とは失礼な。

「しかし、『剣閃』か。あまり聞かないな」

「秋月の家に伝わる格闘技法の総称だそうです。剣や槍とか弓とかなんでもありみたいで」

「無茶苦茶だな」

「まあアームドデバイスと魔力があれば問題ないみたいですので」

まるで、魔導師のためにあるようなこの『剣閃』。遡れば秋月の祖先は古代ベルカから地球へ渡った騎士の末裔だ。残された資料と遺伝子情報によれば、聖王統一戦争以前に敗北した王の一族だとか、何か。

「まあ今日はここまでにしよう。明日は早いんだろう？」

「そうですね。シグナム副隊長、ありがとうございました！」

明日——午前中に、私は今月二度目の試験を受けることになってい

る。魔導師ランク認定試験。受験ランクは——空戦AAA。本来なら卒業後に受験する予定だったが枠が空いてないとのことで今回、受験することになった。

なのはさんとヴィータ副隊長曰く、現時点でフォワード陣は全員陸戦AA（総合に切り替える予定のキャロはA+）は確実に合格できるレベルだとか。つまるところ一段階スキップということ。私は空戦、そしてAAAという一般魔導師では到底近づくこともできないところまで来てしまった。

（AAAランクって言えばヴィータ副隊長と、陸戦ではシスター・シャツハが取得してたような……）

そしてなのはさんやフェイトさん、クロノ・ハラウオン提督に至っては10年も前から取得していたと聞いている。こう表現すると怒られるかもしれないが、人間辞めちゃったような感じだ。最近地球では「若者の人間離れ」が加速しているらしい。まあミッドチルダ——管理局は最低就業年齢が9歳だから、十代で局員かつ魔導師ということとは大半の人が「若者の人間離れ」を果たしている。何それ怖い。（それに明日って確か……補佐考査の結果発表じゃなかったっけ）

本音を言うならその結果を聞いてから、安心して試験に臨みたいんだけど無理は言えない。

シャワーを浴びて、私はベッドに倒れ込む。補佐考査と言えば、もう一つ嫌なことを思い出した。

（……アーウィング執務官、やっぱり怒ってるかな……）

つい先々週、私は彼の補佐にならないかと声をかけられた。考査を受験することを理由に断ったが……ちゃんと云った方が良かったかもしれない。

ちゃんとした資格を持った——今と未来の私を認めてほしいと。

もう守られるだけの私でいるのは嫌だ。もう守られるだけの私は、いない。だから。

「何が何でも、明日は一発合格狙うよ、ロゼット」

《Of course, buddy.》

例え相手がなんであろうと、誰であろうと。

負けるわけにはいかないのだから。

◇

時は少し前に遡り。

ピツ、ピツと軽快な音を立てて、医療器械による測定は進んでいた。大小様々なそれらに囲まれ、霜月秋葉と六課医療班のシャマルは検査結果を待っている。次々と表示される数値に目をやって、前回のそれと比べ、状況に合ったりハビリを考えていく——その真つ最中だった。

そして機器は最終結果を表示させ、動作を終わらせる。

「はい。お疲れ様、秋葉ちゃん」

「こちらこそ、いつもありがとうございます」

ゆっくりとした動作で起き上がった秋葉は、ベッドサイドに置かれていた服を手を取った。私立聖祥大学附属高校の女子制服を纏うその姿は、普通の女子高生となんら変わりが無い。日本名には少々似つかない燃えるような赤毛が違和感を与えるが。

「前回に比べたら、だいぶ良くなってるわ。魔力もこれまで以上に回復してるから、最近のリハビリメニューじゃ物足りないかもしれないけど……もうしばらくはこのまま、体を慣らしていきましょう」  
「はっ」

素直に頷いた秋葉に微笑んで、シャマルは深い溜息を吐いた。

「まったく……なのはちゃんもヴィータちゃんも深琴も、もう少しこつちのことも考えてほしいわ……」

「……ああ、六課前線メンバー最大負傷率のトップスリーですね」

つい二ヶ月前——ミッドチルダ地上全体を震撼させた大規模テロ事件、通称『J S 事件』。浮上した古代ベルカの戦艦『聖王のゆりかご』と魔力結合を無効化させるAMF機能を持った機械兵器『ガジェット』、その影響を受けず、人間の体に機械を融合させた『戦闘機人』達。次元世界の平和と安定を巡ったこの事件。

最前線で活動した機動六課のメンバーは、先日の地上本部襲撃と同



時に発生した隊舎襲撃事件で多くの隊員たちが負傷したにも関わらず、という状況だった。各陸士部隊と聖王教会騎士団との共同戦線、本局が有する艦隊などの協力で事なきを得たが、「対策部隊」である六課のメンバーが最前線を担当したことには変わらない。

その中でもゆりかごに突入した高町なのは一等空尉とヴィータ三等空尉、地上で「ゆりかご」の鍵でもあったアンノウンの迎撃に当たっていた秋月深琴の負傷率は、言わずもがな隊員の中でも酷いものだった。……ちなみに二名程入院中にも関わらず聖王医療院を脱走した隊員がいるのだが、彼ら（というより一人と一匹）もまたシヤマルに盛大に怒られたメンバーに含まれるため、実際は「トップファイブ」という名称が正しかったりする。

（ヴァイス先輩に関しては私が唆したからだし……）

とはいえ、正直にそれを話す秋葉ではない。延々と続きそうな愚痴を止めようと、話を逸らす。

「そういえば……ヴィヴィオ、学校に通うって聞いたんですけど」

「ええ。休暇中に、なのはちゃんと一緒にザンクト・ヒルデ魔法学院に見学に行くって」

「ザンクト・ヒルデって……確か騎士カリムとシスター・シヤツハ、アコース査察官の母校ですね」

先天的に凍結の魔力変換資質を有する秋葉は、幼少期に違法施設に誘拐され、実験体として生きてきた過去がある。そんな彼女を救い出したのは教会騎士団に所属する騎士・渡辺零だ。身寄りの無い秋葉を、まるで家族のように受け入れてくれたのは騎士カリムとシスター・シヤツハ、本局査察官のヴェロツサ・アコース達である。

「確か秋葉ちゃんって、そのまま入局したのよね？」

「あ、はい、そうですよ。……騎士カリムは学校に通うよう、色々お話ししてくれたんですけど……」

言って、秋葉は視線を僅かに逸らした。

本当の名前も、家族の顔も、年齢すら分からない。そんな彼女は保護されたその日から他人に怯え、心を硬く閉ざしていた。そんな状態で学校に通わせても逆効果だと進言した零が彼女を鍛え、そのまま航

空武装隊に放りこんだ——聖王教会に伝わる「びっくり人間七不思議」の一つだ。ちなみに命名者は渡辺零である。

とはいえ、それはもう過去の話。6年前に親友を亡くしたことで精神に異常をきたした彼女は、零の伝手を頼って、第97管理外世界へ地球へ海鳴市に移り住み、人としてそれなりの生活を送っていた。「自分は幸せだった」と、胸を張って言える程。

ただ、気がかりな事が一つだけ。

「早く、みんな進路が決まればいいんですけどね……」

新人フオワード然り、自身の先輩然り。

深い深い溜息を、秋葉は吐いた。

## 27 02 : 試験と結果と

「うっわー……」

「これはまあ……」

「その、何て言うか……」

「……ぶっちゃけなくても、なあ……?」

「っスねー」

「……………」

場所は海上隔離施設。ミッドチルダ海上に設置されたその建物は、年少者や若年者の犯罪者が収監される施設である。牢獄的な意味合いより厚生施設としての性格が強いせいも、面会や差し入れの手続きは非常に簡単だ。また更正プログラムが行われる場所は緑鮮やかな芝生と大樹が植えられている。また収監された人物は全員共通の服装を——白一色の収容服の着用が義務付けられていた。

そして今、一室に集まるのは、『戦闘機人』ナンバーズ。N o . 6 . セインは目を丸くし、N o . 5 . チンクは唇の端を僅かに上げ、苦笑とも微笑とも取れる微妙な表情を浮かべている。彼女達に続いてN o . 10 . デイエチが首を傾げながら眉を顰め、N o . 9 . ノーヴェはN o . 11 . ウエンデイに話を振った。ウエンデイから視線を受けたN o . 8 . オットーとN o . 12 . デイードは二人揃って沈黙を守っている。そんな彼女達と少し離れた場所で、地面に肘と膝をついた少年、もとい青年——聖王教会騎士・渡辺零が爆笑していた。ちなみにルーテシアとアギトは面会中。

「ちよ、おま、フエア!? すっげー! マジありえねえよ! パネエ! マジパネエ!」

「うるさい! というより、これを持ってきたのはあんただろ!」

中心から逃げ出した少年——フエアクレールトはその深紅色の瞳を細め、未だ笑い続ける零を怒鳴りつけた。

纏うのは、黒を基調にしたスーツ。……なのだが、ジャケットやシャツの袖とストラップスの裾には若干を通り越して遥かに余裕があるようだ。

「つていうか何で前日夜に持つてくるの!? 馬鹿なの!? 馬鹿だろ!?」

「仕方ないだろー、俺も色々忙しかったしさー」

「はいはい! 今日のお土産は何っスか!?!」

「良くぞ聞いてくれた、ウエンデイ! 今日は何……採れたての林檎をふんだんに使ったアップルパイだ喜べ手前ら!」

「いえーい!!」

「い……いえーい……?」

「もう、零つてば……」

零とウエンデイの突き抜けたテンションに、フェアクレールとフェイトを除く全員が訳も分からずに盛り上がっている。やれやれと言わんばかりに肩を竦めて、フェアクレールはフェイトを見た。

「零から聞いてると思うし、また改めて説明するけど……明日は時空管理局本局で、テストを受けてもらいます」

「能力測定だよね?」

「そう。最初に筆記テストを受けてもらつて、その後こちらで選んだ——フェア君と同等くらいの魔導師と、模擬戦形式で戦ってもらうの」

「へえ」

J S 事件で収監されたもう一人の魔導師——ルーテシアには、その試験の話は来ていない。そう彼女から聞いていたフェアは、そつと瞳を伏せた。

フェアクレールト・ナハト。プロジェクトFで生み出された人造魔導師だ。その基になった人物は乱立する王たちを制した古代ベルカの王『聖王』の血を僅かに引く傍系の出身で、同じくプロジェクトFで生み出された『聖王』ヴィヴィオとは奇しくも同じ『ゆりかごの制御キー』である。古代ベルカ式の保有者は少なくレアスキル扱いのため、今回の措置が取られたのだろう——そうフェアは推測した。

もちろん、自分の出生などフェアは気にしていない。蟠りはあるが——それでも自分がしたこととその結果は消えないのも事実だ。

それでも未来を信じ、自分を助けようとした少女の姿を思い出し、

フェアは静かに微笑む。

「……その人、強い人だといいけど」

そう、呟いて。

◇

「……こんな場所があったとはね」

呟いて、少年・藤月彼方は目を細めた。室内の床には、無数のガラスの破片と薬品、そして人間の脳が撒き散らすかのように放置されていた。その付近には三つのポットがケーブルに繋がっている。

場所は時空管理局本局、その中でもごく一部しか使用できないときれる一室だった。噂では「幽霊となった最高評議会出席者が出る」とか何とか。

「そもそも最高評議会の人の顔、知ってる人いるのかな」

「あの、藤月査察官……そういう問題じゃないと思います……」

「あれ？ そうなの？」

平然と純粋な疑問を口にした彼方に、捜索に参加した局員は小さく突っ込みを入れる。

旧暦の時代を生き、時空管理局設立後に一線を退いた三英雄。その最期の姿を目撃した面々は一様に顔を青くしていた。

「気分悪い人、外に出ていいからね。僕に一声かけてからだけど、無理しないで」

言いながらも、彼方は破壊された内、中で最も高い位置に置かれたポットを検分する人物——執務官制服を纏う、デイバイン・アーウィングに近づいた。

「どうです？ 凶器とか」

「ざっと見た感じだと刃物……刺突用の武器で破壊された、という感じだな。こう……」

言って、デイバインは右手を斜めに振り下ろす。

「なるほど。脳が傷ついてないのは……この培養液みたいな液体が、文字通り彼らの生命線だったから、ということですね」

コンソールで毎日一定時間に行われていたチエツク。自らの命を残し、生かすための培養液から外へと出された脳は抵抗一つなく即死したらしい。

「検死鑑識は驚くだろうね。旧暦の時代を平定した三英雄が、こうして脳だけになってでもしぶとく管理世界の支配を企んでたんだって」  
「騎士ゼストが残してくれたデータのお陰だな。場所まで記されていたことは驚いたが」

「後は彼らが関わった件について、データが出てくればいいんですけどね」

「期待はしていない。そもそも局員の誰もが——それこそ伝説の三提督ですら気づかなかつたんだ。そこら辺はしっかりしていた、ということだろう」

そう、デイバインは肩を竦める。彼方も微笑んで、「そうですね」と頷いた。

「まあどうせ別にいてもいなくても困らない人たちの集まりですからね。この際ですから悪事は暴きつつ盛大に解体しちゃいましょうか。死人に口なし、とは言いますが、自分達がしでかした事くらい責任取れって話ですよ〜」

「……お前、本当に零の弟なんだな……」

「ええ、そうですね？」

気楽に鼻歌を歌いながら作業に入ろうとした彼方は、ふと手を止める。鼻歌が止まった。

「そういえば今日って、深琴ちゃんのAAAランク試験ですよ〜？  
行かなくていいんですか？」

何の悪意もない、親切心から生まれたその言葉に、デイバインは動きを止める。周囲で作業をしていた捜査官、査察官達が顔を青くしてあわあわ立ち尽くしていた。

◇ さて、時は少し遡り。——本日早朝、機動六課隊員寮にて。

この時間帯特有の空気は、季節柄もあってか冷気を帯び始めていた。隊舎周辺を一回り、ランニングしてきた私の体は汗だくだから、

ちようどいいくらいだけど。

いよいよ今日は、ランク試験当日。無事終了したら午後からもう半日分の有休で海鳴市に。それ以降は例の完全休暇だ。

本日は今日一旦帰還した後、半日だけ仕事をする予定だったのだが、今月のソフト作成時に八神部隊長からそうするよう打診があった。六課に入って初めての半日休暇が潰されたから、と。

「それでは、八神部隊長。秋月深琴、ただいまより本局へ向かいます」  
「うん。気をつけてな」

「二人とも、しつかりですよ」

《All right.》

八神部隊長とリイン曹長に見送られ、私とロゼットは時空管理局本局の特別訓練スペースに向かった。六課で使用する訓練シミュレーターと似たようなものを使用しているためか、建造物内とは思えない内装である。

そこは海と、そこに沈没寸前のビル群。海上戦闘空間だった。

(……これは初体験だなあ)

ひとまず待機していると、一枚のモニターが開かれる。そこにはなぜか、フェイト執務官が映っていた。

『本日の試験官は私、フェイト・T・ハラウオンが代理で担当することになりました。緊急つてことだったから、知らせが行つてなかったね。ごめんね』

「いえ。よろしくお願いします」

まあ、仕方ないと言えば仕方ないしね。代理が呼ばれるほどの理由が気になるけど。

『えっと、今回の試験は今までと違って——』

言った傍から、目の前に転送ポートが現れる。その中から現れた人物は、見覚えのあるとかそんなレベルを超越していた。

闇色の髪に、深紅の瞳。華奢で瘦躯なその身はその二色を組み合わせた地味めなスーツに包まれていた。

そしてその手に構えるのは、ローゼンクラッツと同型のデバイス・アインザッツの待機型。

「フェア……っ!?!」

「って、深琴?! え、何で?!」

「こっちの台詞だよ! どういうことですか、フェイトさん!」

レリック事件、そしてJS事件で幾度と刃を交えたアンノウン——  
フェアクレールト・ナハト。今は海上隔離施設で更生プログラムを受  
けてる頃じゃ……!?!

『簡単に言おうと、フェアクレールトの正確な能力確認のためのテスト  
も兼ねてるんだ。二人の戦績は一勝一敗二分け。しかも魔法体系も  
主体が違うだけで同じ混合ハイブリッド型だから……』

「計測相手にはもってこい、というわけですか」

しかもフェアは六課の隊長たち、そして交戦した零さん、アーウイ  
ング執務官から「最低でもニアSランクはある」と言われている。

「決着をつける日が来るなんてね」

「まったくもって予定外だったけどね」

「同感」

『さて、二人とも。そろそろバリアジャケットの着装を』

肩を竦めて、笑いあう。フェイトさんの言葉に従って、私たちは愛  
機を呼んだ。

「ローゼンクラントツ!」

「アインザッツ!」

「セツトアップ!」

《Stand by ready. — Set up.》

互いの体を、防護服が包み込む。最初から全力全開での戦闘は、今  
日が初めてだ。

「行くよ、深琴」

「うん。いつでも」

その言葉を合図に、深紅と淡紅がぶつかりあった。

そして戦闘時間は、合計して1時間27分。結果は双方魔力エンプ  
テイにつき——引き分け。





「あー……動けないー……」

「ごろごろごろ、と私は医務室のベッドで寝返りをうった。

「こつちは全身痛いよ……最後の最後で魔力集束砲は勘弁してほしい」

「やー……だってあれないと私、勝てないしさ」

「結果引き分けじゃん。っていうか最後のあれがなかったら僕が勝つてたし」

不服そうに言うも、フェアの表情は明るい。隣に用意されたベッドで、彼もまた横になっている。

「……この間ね、ギンガが言ってたんだ」

「ギンガさんが？」

「うん。これからのこととか、そのために必要なことを『心を持った命』として考えて』って」

事件中に拉致されたギンガさんは、洗脳と改造を施されて私たちと敵対した。今はその治療と並行して、隔離施設のナンバース、ルーテシアとアギト、そしてフェアの更生プログラムを担当している。

「それがどうしたの？」

「チンクやデイエチ、ルールーと話してたんだけどさ……いいのになって。あんなことやらかしたのに、こうして許してもらえていいのになって。他の……ノーヴェやウエンデイ、オットーやデイドのような後発組と違って、僕たちは最初から関わってたから」

深紅色の瞳が、揺れていた。

「たくさん壊して——殺しはしなかったけど……たくさんの人達を、深琴を怪我させたのに、捜査協力したってだけでいいのになって」

「でも、怪我で済んだよ？ 傷は残るかもだけど、それでも痛みはその一瞬。時間をかければ必ず癒える。……前に八神部隊長が言ってた。確かにしたこと責任は取らなくちゃいけない。でも、みんなにはそうしなくちゃいけない理由があった」

洗脳されていたり、それが間違っていると見えるような正しい教育を

受けられなかったり、それを選択できなかったり。そしてその上でちゃんと反省している。自分の欲望にただ従うだけの犯罪者に比べたら、それだけでも考慮されるんじゃないだろうか。

「背筋伸ばして謝って、それらを全部受け止めて。そしてこれからを生きるならそれでいいんだって……少なくとも管理局は、許してくれるよ」

事件終結後から、私も可能な限り彼やルーテシア、アギト、更生組ナンバーズみんなの罪が少しでも軽くなるよう管理局法を調べ上げた。もちろんそれはあくまでも法律の話であって、局員やそれに準ずる人たちの意識は別だけど（現に闇の書事件の首謀者と言われている八神部隊長は、地上本部ではいたく嫌われていたし）。

それでも六課の隊員や関係者達は、足しげく海上隔離施設に赴いては彼らと分かり合おうとしている。それだけでも、違うんじゃないかな。

「二人とも、入っても大丈夫?」

「あ、はい。どうぞ」

フェイトさんの声がした。シュツと圧縮された空気が排出されると、フェイトさんともう一人——非常に久しぶりに会う人物がそこにいた。

「伯父さん!?!」

「少しは落ち着け。馬鹿者」

がばり、と起き上がった私の全身を、筋肉痛が駆け巡る。あまりの痛み悶絶していると、伯父・秋月英史の呆れた声が降ってきた。この人といいアーウイング執務官といい、人のことを馬鹿馬鹿言い過ぎだ。馬鹿だけどき。

「で、ひとまず結果なんだが……」

手にしたモニターに視線を落として、伯父は口を開く。

「フェアクレールとはともかく、深琴はギリギリ及第点で合格だ。魔力値はそれぞれSランク以上、それ以外も悪くはない」

だが、と伯父は私を鋭い目で見据えた。

「特にお前はその突撃思考を何とかしろ。集束魔力を刀に乗せるまで  
はよく考えたが、その後の一発を右腕で放ったのは大問題だ」

そう。試験中、私は二度集束砲を放っている。一度目——ロゼット  
に乗せた『桜華一閃』は逸らされた。二度目、自身の右腕に纏った『剣  
閃・桜華』は直撃し（超ゼロ距離ということもある）、その反動でお互  
いK・Oされたけど。

「その点を考慮すれば深琴は不合格なんだが……まあ現時点での魔力  
値等を考えれば、このままシングルAでいさせるのは非常に危険だ——  
—というのが私とハラオウン執務官の共通見解だ。何か質問は？」

「一度落としてから再試験受けさせればいいんじゃない？」  
「そうしたいのはやまやまだが、生憎枠がない」

ですよねー。ちなみに一度落として云々はスバルとティアナがB  
ランク試験に不合格となった際、なのはさんが提示したものだ。

「それと、もうひとつ」

言って、フエイトさんもモニターから視線を上げた。

「速報。ティアナも深琴も——執務官補佐考査、満点合格だつて」

◇

「——って聞いたんですけど本当ですか、部隊長!？」

「ほんまやでー」

大急ぎで帰還した私は、報告も兼ねて部隊長室を訪れた。いや、襲  
撃した、が正しい。

あー、でもなあー。と私は冷静になる。

午後から半日休暇再び、そして翌日からは完全休暇。その間はさす  
がにアーウイング執務官に会えない。休暇後すぐに連絡を取ること  
も考えたが、そもそも彼が現在案件を抱えていることも考えられる。  
「ま、いざとなったら私が間に入る。深琴は気にせず、休暇を満喫して  
こなな」

「……はい。それでは、行ってきます」

「行ってらっしゃい」

目的地は第97管理外世界・地球、海鳴市。足取りは、自然と踊つていた。

## 27 03：故郷に馳せる

『深琴』

それは本局を出る少し前。フェイトさんはフェアを隔離施設に送るため先にミッドチルダに戻り、私と伯父はそれぞれの近況——JS事件のこととか、ルーチェの教官資格試験のこととか——話していた。入口が近くなったところで、伯父は私を呼びとめた。

『これから海鳴市に行くんだろう？』

『うん。静真お兄ちゃんと一緒に、兵庫まで』

『そうか』

外泊なので何か言われるかと思ったが、何も言われないまま時間は過ぎる。

『……遙に、よろしくな』

ただ伯父は小さく、そう呟いた。

青い空、白い雲。何一つミッドチルダと変わらないその場所。

転送ポートから出た私は、その風景にしばし見とれた。場所は海鳴市内のとあるマンションの最上階、ルーバルコニー。所有者は霜月秋葉さん（ちなみにその書類関係は零さん、彼方さんが関わっているとのこと。何それ怖い）だ。

だから彼女の高校の先輩にあたる実兄・秋月静真が我が物顔でいるのはまだ考えられた。その隣に立つ女性は——はつきり言っただけで想定外だったけど。

先ほどまでの感情は、一瞬で弾けた。

目の前の女性は、既に傷だらけの手の甲に爪を立てている。かれこれ会うのは4年振りだ。

「……お母さん……」

唇が震え、上手く声が出せない。足は動かなくて、視界がぼやける。——怖い。また拒絶されるのではないか、あの冷たい視線に晒されるのか——そう思うと、逃げ出したくなった。

だが、その人は。

「……謝っても、もう意味はないのかもしれないけど……」

記憶に残る頃よりずっと老いた——少なくとも精気の欠けた表情で、その人は——秋月遥は笑った。

「深琴、ごめんなさい。元気そうではよかった」

硬直していた私を、抱きしめて。

「ずっと会いたかった……お帰りなさい」

「……っ……」

視界が、涙で歪む。

——帰ってきて、良かったの？

——会いたかったっていうその言葉は、本当？

「……『お母さん』……っ！」

優しい『母』の腕に抱かれて、私は泣いた。



「なんか早朝外出ってテンションあがるよな」

「そう？」

それから、私と兄、母、父は何年ぶりの「一緒に夕食」を楽しみ、海鳴市の秋月家で一泊。現在は早朝。私は兄のバイクで新幹線の駅に向かっていた。大きな荷物は家に置いていて、背負った小型バッグには母が用意してくれたお弁当が入っている。

休暇二日目、完全休暇一日目。目的地は関西方面、兵庫。私が生まれ、10年間を過ごした場所。とまあ「関西人」である私だが、なぜか関西弁が喋れない。今の私が使用する言語は共通語に関西のイントネーション、表現が奇妙に混ざり合ったもの。これは兄も変わらないうい。……まあ関西弁だと八神部隊長以外には通じなさそうだからいいけど。

新幹線に飛び乗り、指定された座席を探す。窓際に私が、その隣に兄が座った。鞆からお弁当を取り出し、広げる。

「そういや、秋葉から聞いたぜ。試験二つとも一発合格したって」  
おめでとさん、と兄は言う。

「まあ二つとも部隊の皆さんにギリギリまで見てもらってたからね。……お兄ちゃんの試験は2月だったけ」

「おう。学校は仮卒業期間だから休みだし、観光ついでにギリギリまでいようかと。案内頼むな」

「うん。ちゃんとお休みもらうね」

今のまま平和な状態が続けば、2月頃には完全に通常勤務に移行できるだろう。それは八神部隊長を始め、六課隊長陣、聖王教会の騎士カリムも言っている。

だが、平和というのはそう長くは続かない。少し前にクロノ提督、ナカジマ三佐とお話する機会があったが、何でも世界単位で大きな事件が起きずに済む平和な一時は、よくて10年程らしい。20年もつたら奇跡、50年、100年というのはまず無理だ、とのこと。

確かに数多の世界の歴史をひも解けば、何十年から何百年の間に戦争や天災などがその世界を襲い、多くの犠牲者を出している。その要因は人為的なものもあればそうでないものもあって、その度に人は悲しんで。

そしてようやく復興を果たしたと思えば、長くは続かない——なんて嫌なサイクルだ。

けれど、ナカジマ三佐は言っていた。組織と人間を育てて維持して——後の世代に繋げなければいけないと。自分の子供や孫の世代のためにも、それが今を生きる人間にできることじゃないかって。



「そういえばさ、フェア君ってこれからどうするの？ 聖王教會的にも、管理局的にも」

「ん？ あー、それなあー」

クリームをこれでもかと塗りつけた、焼きたてのスコーンを齧る。咀嚼しながらそう問いかけた藤月彼方は、向かいに座る八神はやてを見る。一口紅茶を飲んだはやては、数枚のモニターを立ち上げた。

「しばらくは更正組ナンバーズやルーテシア、アギトと一緒に更正プ

ログラムの受講やね。そこでの素行や再教育の状況次第で出所は変わらへんな」

「報告によると素行はそれなりにまともだそうだ。唯一の男子っていうこともあって、ツツコミに磨きがかかっているが」

「それは零のせいだと思うけど?」

「同感です」

「それが妥当だねえ」

はやての答えに補足を入れた零が、カリム、シャツハ、ヴェロツサから総ツツコミを喰らう。唇をへの字に曲げて、零はサンドイッチに手を伸ばした。

「全員監視付だとしても、出てくるには10年もかからないだろ」

「まあね。あれから色んなデータがあがって来たから、情状酌量の余地はあると思うよ」

零の言葉に、ヴェロツサは頷く。フォークを片手に、イチゴのミルフィーユと格闘していた。

「みんな、いい子ですしね」

「そうね」

和やかなお茶会。弾む会話を聞きながら、零はそつと溜息を吐いた。

(問題はあいつらなんだよなあ……どうしたもんか)



『新大阪ー、新大阪ー』

出発から2時間と少しが経った頃、新幹線は目的の駅に到着した。大勢の人でごった返す駅を抜けて、今度は電車に乗り換える。そしてそれから約30分が経過すると、駅前には見慣れない建物ができていた。

「ショッピングモールだよ。できたのは深琴が向こう行ってすぐのはずだから、俺も行った事ねえけど」

結構有名らしいぜ、と兄は続けた。確かに休日ということもあって



か開店はまだのはずなのにたくさん車が近くを走っている。

バスを乗り継いで、公園前で降りた。駅からのバスは本数は多いが、中心から外れたこちらの方面は案外少なかったりする。

「でも、このあたりとか全然変わってねえよなあ」

「そうだねえ」

道沿いに歩きながら、周囲の風景に目を遣る。穏やかな風、あちこちで咲く色とりどりの花。

そのまま公園を横切り、無言で歩くこと数十分。目の前に大きな建物が現れた。私が4歳の頃からほぼ6年間を過ごした、病院である。

「……変わらないね、ここも」

「だな。入るか？」

「止めとく。見てるだけで十分」

私が出た。もう4年が経つ。早いものだ。この4年間、いろんなことがあったっけ。

アーウィング執務官と出会って、自分の力を受け入れた。

強くなりたくて、伯父の売り言葉に買い言葉でインターミドルに出場することになって。初めて「勝つこと」の嬉しさと「負けること」の悔しさを知った。

士官学校に入学して、友達ができた。初めて学校というものを知った。

そして機動六課に入隊して、同僚が、大切な仲間ができた。再会したり、新たに出会ったり、とても忙しくてしんどいけど、それでも前を向いていける強さを知った。

八神部隊長。なのはさん。フェイトさん。ヴィータ副隊長。シグナム副隊長。スバルとティアナ、エリオとキャロ、そしてフリードとヴォルテール。ライン曹長にシャマル先生、ザフィーラ。アルト、ルキノ、シャリー、グリフィス准尉、ヴァイス陸曹。アイナさん。ヴィオ。ギンガさん。ナカジマ三佐。マリーさん。カルタス二尉。クロノ提督。騎士カリム。シスター・シャツハ。アコース査察官。

レオン。ルーチエ。零さん。彼方さん。楓さん、咲夜さん。秋葉さん。アーウィング執務官。ローゼンクランツ。そして——フェア。

ミッドチルダで出会った、大切な人たち。

「……私ね。自分をもっと強いつて思ってた」

ただ、大事な人たちを守りたい。大事な人たちが悲しんでほしくない、傷ついてほしくない。だから、自分が悲しいのも、傷つくのも平気だった。それが強さなのだと思分に言い聞かせて。

「でも、私が傷ついたり、悲しんだりして……それを見て誰かが傷つくなんて、思いもしなかったんだ。誰にも心配されることなんかなくて、ずっと思ってた」

「んなわけないだろ。俺や母さんだって事件中連絡取れなくて、神経すり減らしてたんだぞ」

「……ごめんなさい」

J S 事件中、私もなのはさんやヴィータ副隊長ほどではないけど、それなりの傷を負った。一週間程度の安静でなんとかなかったけど——ダメージが内臓にまで到達していたことで、零さんとシャルル先生に非常に怒られた（近くに病院脱走組がいたから、説教のほとんどはそっちだったけど）。

『一歩間違えたら、死んじゃってたかもしれないのよ……!』

涙声でそう訴える、シャルル先生の顔が過る。

ただあの時は、死んでも構わなかった。だって目の前には、自分の意志ではない破壊を強制されたフェアがいて、泣いていたのだから。そして自分の犠牲を厭うことなく主を救おうと呼びかけた、彼の愛機がいたのだから。

『だからって、お前が死んだら意味ないだろうが!』

いつになく鬼気迫る表情で、零さんは言う。

確かに、爆発に巻き込まれた時、秋葉さんとアーウィング執務官が助けに来てくれなかったら、私は確実に死んでいただろう。けれど特別恐怖は覚えなかった。ずっと、心のどこかではそれを望んでいたから。

——いつか死ぬのならいつそ、今この瞬間に。苦しいのも、痛いのも、一瞬で終わるから。

そのはずなのに、私は反射的に祈ってしまった。「生きたい」と。

「私は弱いから、失敗して、同じことを繰り返す。でも……それでもいいって言ってくれる人のために、生きようって思ったの」

それはきつと、機動六課が解散してからもずっと。

「進路、もう決めてるんだろ？」

「うん。……後は、その人とお話しするだけ」

もう守られるだけの私ではないと、認めてほしくて。せめて一步後ろに立てれるだろうと、評価してほしくて——あの人を困らせてしまった。それは私が悪い。ちゃんと謝らないと。

この場所は、私にとって生と死の境界線。いつ死んでもおかしくない状況で、それでも生き続けた。窓越しに花を見て、日の光を感じ、月の光を浴びた。いつか青い空の下を気兼ねなく歩ける日が来ると信じて。

当時に比べたらどうだ。今の私は生きている。第二の故郷を見つけ、花に触れることも、空の下を飛ぶことだってできる。

だから、もう迷わない。

「……吹っ切れたか？」

「うん。ありがと、お兄ちゃん」

わざわざ付き合わせてごめん、と呟けば「気にすんな」と髪を混ぜ返すように撫でられる。

「帰るか」

「……うん！」

……本当に、ありがとね。お兄ちゃん。



「はい。お待たせしました」

「ありがとございます」

海鳴市に戻り、荷物を受け取った私は喫茶・翠屋を訪れていた。箱を四箱受け取り、清算する。

「あの、ケーキとコーヒー、とっても美味しかったです。ありがとうございます」

「いいえ、どういたしまして」

「またいつでも遊びに来てくれ」

「はい。ぜひ!」

桃子さんと土郎さんにお店の外まで見送られて、私は秋葉さんのマンションへ向かった。

「あ、お帰りなさい」

「おじやます。あ、これどうぞみなさんで」

二度もお邪魔して転送ポートを使わせてもらうのに、土産の一つもないとか失礼だろう。

「あ、いいのに。気にしなくて」

「そうだぞー。こいつ俺の後輩なんだし」

「すいません。馬鹿な兄がいつもご迷惑を」

「いえいえ」

「おいこらあ!」

漫才のような会話に微笑み、私はそれでも転送ポータを指す。

「……じゃあな。しつかりやれよ」

「みんなよろしくね」

「はい。それでは」

光が強くなり、弾けて消えた。

## 27 04：首都クラナガンにて

ミッドチルダ西部、エルセア地方。ポートフォール・メモリアルガーデンを、赤毛の少女は歩いていた。纏うのは、黒を基調にした異世界の制服。足取りに迷いは無く、19号第5区画16番地へ向かっている。

「ここに来るのも、6年振りか……」

以前は、コンビパートナーだったティード・ランスターに連れられて。だが当時、16番地へ向かったのは彼とその妹——ティアナ・ランスターだけ。少女・霜月秋葉本人は19号第5区画の入り口で二人を待っていた。

目的の墓には、既に先客が花を置いている。

秋葉もそれに倣い、手を合わせた。

「ティードとティアナのお父さん、お母さん……初めまして、霜月秋葉です。そして……久しぶり、ティード」

袖で涙を拭い、秋葉は続ける。

「……6年前の事件だけどね、色んな証拠が出てきたって。あなたを無能呼ばわりした奴は謝罪したよ。航空隊のみんなは最初からそんなこと思ってたから、それで充分かなって」

謝罪といっても、別に会見を開いてとか盛大なものではない。彼の当時のコンビパートナーである秋葉に謝罪のメッセージが届いただけだ。その場に居合わせた某騎士の双子の弟はいい笑顔で「埃の叩き甲斐がありそうだねあははは」と怖い笑顔を浮かべていたが。

「それとティアナの進路だけ……この間、執務官補佐考査に満点合格したんだって。フェイト・ハラオウン執務官の二人目の補佐官として、執務官目指して頑張るって張り切ってた」

そしてエースオブエースが集束系魔法を教える予定だと話しているのを聞いて、俄然やる気である。

「それから……私もね、来年から首都航空隊に復帰することが決まったよ。機動六課のシグナム二尉が推薦してくれたの。リハビリもすごい順調だし、やっぱり凍結系は珍しいから」

本来復帰はもう少し先の予定だったが、意外にもリハビリが順調に進んでいるため4月から部隊復帰・任務活動が可能だと診断を受けた。もちろん最初から高難度な任務は無理だろうが……後方支援は秋葉の十八番でもある。

「一緒に空を飛べないのは残念だし、約束を守れなかったのは悔しいけど……私とティアナ、二人とも見守っててね」

立ち上がり、秋葉は「また来るね」と満面の笑顔で言った。



「……………、だよね……………」

私・秋月深琴は手にしたロゼットに表示される地図データと現場の状況を照らし合わせる。地球・海鳴市から戻ってきて早一時間。

場所はミッドチルダ首都クラナガン、地上本部すら徒歩圏内にある超高層マンションの入り口。もう片方の手に提げた翠屋の箱を揺らさないよう気をつけながらも、私はふと呟いてしまった。

「……飛んだ方が早くない？」

《I think so, buddy.》

市街地飛行許可貰ってないけどさ。赤縁の伊達眼鏡越しでインターホン用のコンソールとオートロック解除用の鍵穴を見る。しかもインターホンはこちらの顔が見れるようにカメラが取り付けられていた。安全第一だよねえ、と納得した私は改めて服装を確認する。

肩が出た、大きな赤のリボンがついたニットトップスに白のブラウス。スカートはチェーンのついた黒のフレアミニスカート。露わになる足はアーガイル模様のタイツで覆われ、足元は黒のスニーカー。(……いくら休暇だからって、この格好はまずいんじゃないか……)

先方も休暇——とは協力者から聞いた話で——なので間違っではない、のかなあ。

でもなあ、と考えながらインターホンに指を伸ばし、部屋番号を押す。協力者は話を通してしていると聞いたけど、あの人のことだ。ちよっ

とばかり信用できない。

もし間違つてたらピンポンダッシュをも辞さない覚悟で謝罪してから逃げ出そう。そんなよくわからない覚悟を決めて、私は呼び出しボタンを押した。

ピンポンと呼び出し音が響く。あ、この音はどこの世界でも共通なんだ。そんなことを考える。そして待つことなくガチャツ、と通話が繋がる。

お久しぶりです、とかそんな言葉より前に、ある言葉が口を衝く。

「き……」

『きゅー』

「……来ちゃった？」

沈黙が流れた。当然、先方——デイバイン・アーウイング執務官だつて返事に困るだろう。そしてそれをやってのけた私自身、恥ずかしい。何でこうウケ狙いに走っちゃうかな!?

穴があつたら入りたい。いつそ埋めてほしい。っていうかももういつそ私を殺してええええええ!

◇

時は、少し前に遡る。場所はミッドチルダ首都クラナガン、地上本部すら徒歩圏内にある超高層マンションの一室で、デイバイン・アーウイングはしばらくなかった休暇を過ごしていた。

とはいえ普段は管理局本局の寮に滞在する彼がすることと言えば、部屋の掃除や資料整理くらいしかない。そして今日もまた、掃除を早々に片付けた彼は空間モニターを開いていた。

そこに映るのはジェイル・スカリエツテイと彼が作り出した戦闘機人、そして協力者であるルーテシア・アルピーノとアギト、フエアクレールト・ナハト。その中から隔離施設に入った9人のデータを呼び出していた。

(……どうしたものか……)

未遂とはいえ、大規模テロリズムの実行犯とその幫助犯。その他殺

人未遂などの余罪をすべて追及しては彼らが生きているうちに外の世界に出られる筈がない。そしてこれは本来彼が受け持つ案件でもないから、彼が頭を抱える必要はなかったりする。

だが。

『これまでのこととかたくさん話して、一緒に「これから」を探すつて約束しましたから』

そう言った機動六課のフォワード陣——秋月深琴の顔が過った。そして現在、彼女は自分がもつ人脈——それもデイバインを始めた知り合いではなく——時空管理局第一士官学校61期生達にかけ合っている。その現実が、非常に腹立たしい。

『深琴はもう自分の足で立っている。前に進むことが出来る。何よりその意思を持っている。それを潰してでも、お前はあいつを守ると言うのか？』

それは『守る』ということではない。そう頭では分かっているけど、心が否定する。守りたいと——一人は嫌だと、幼い頃の記憶が蘇る。

時空管理局の一佐だった父と、魔導研究に従事していた母。厳しかった二人の笑顔が見たくて、自分は執務官を志した。だが父は輸送中だったロストロギアと運命を共にし、次元の海に消えた。研究所に籠って研究を続けていた母は、彼を追うように事故で亡くなる。

——執務官資格を取得し、現場で働くようになれば。誰か一人でも救えるのではないか。誰かの命を守るのではないか……その考えは甘く、自分の手から零れ落ちる命の数が圧倒的に多かった。理解ある友人達を得ても、それは変わらなかった。

それでも、深琴だけは違う。その命を守ろうとすることは間違っていないはずだ。

けれど彼女は変わっていく。守られるだけの彼女ではいられない。ならば自分は、どうすればいい？

そこまで考えたデイバインの耳に、メッセージ受信時独特のメロデイが入った。

『おいつすー』

聖王教会を背景に、渡辺零が映っていた。



「……何の用だ」

『時間もなさそうだから単刀直入に行くぞ。今深琴がそっちに行ってるんだわ』

「……は？」

『ほら、秋月家、クラナガンに引越したって言ってたし』

「ちよつと待て。あいつは今休暇中じゃ……」

インターホンが鳴る。もしやと思い出ると、モニターに見覚えのある顔が映っていた。目深に被った黒いハンチング帽に赤縁の眼鏡という変装をしているが、——誰でもない、秋月深琴の姿が。

『き……』

『き?』

『……来ちゃった?』

乾いた声と、爆笑が響き渡った。

◇

「もう殺してください……いっそ飛び降りていいですか?」

『いやー、しかし「来ちゃった♪」をマジでやるなんて、お前ほんとに関西人なんだな。くっそ、めっちゃ笑った』

自己嫌悪に陥っている私と、モニター越しにげらげらと笑い続ける零さん。

「ほんとにいるとは思わなかったんですもん!」

『おいおい、俺はちゃんと言ったぞ? 今日はいいつも休暇で、クラナガンの自宅にいるって』

「零さんの言うことは、ことアーウィング執務官に関しては8割が冗談だって秋葉さんと彼方さんが言っていましたー」

『ああ、否定はしない。あ、土産届いた。サンキューな』

「いや、少しはしてくださいよ。そのドヤ顔やめてください。『自分の口と舌を守る者は、自分自身を守って苦しみに遭わない。』って言うらしいですから。いえいえ、お気になさらず」

『今度は聖書か。お前の引き出しってどうなってるんだ? メロンパン

入れ？ にしてもこのシュークリームマジ旨いわー。俺転職して翠屋にアルバイトで潜り込むわ』

「関西人としての嗜みです。おすすめだったんで買ってみました。先方の迷惑になると思うので実行しないでくださいね」

『いや、それ絶対方向性間違ってるだろ。つかお前って何気にそういうの得意だよな』

噛み合っているようで噛み合っていない会話が、部屋に響いては消える。そのやり取りに満足したのか、零さんは『そろそろ切るわ。じゃあなー』と何の躊躇いもなく通信を切った。

一先ず勧められるままにソファに座り、口を開く。

「あの……すいません。休暇中に押しかけてしまって」

「いや。ちようどやることも無かったしな」

テーブルに置かれたコーヒーが湯気を立てる。流れた沈黙を、アーウィング執務官が破った。

「……そういえば、俺が執務官になった理由……話したか？」

「いえ。……あ、でも……」

彼の口から直接聞いたことは無い。だが前に一度だけ——フェイトさんが少しだけ話してくれた。『大事な人を亡くしたから、今度は守るために』と。

そう告げると、執務官は苦笑を浮かべながらも話し始めた。自分が執務官を志した理由と、家族のこと。

管理局でも名高く、強かった父親と、魔導研究（カートリッジシステムの研究だったらしい）にのめり込んでいた母親——厳しかったことしか記憶に無い二人の笑顔が見たくて、管理局入りを……それも難関とされる執務官を志した彼。

だが父親は輸送中のロストログアの暴発事故に巻き込まれて次元の海に消え、母親は逃避のためより研究に没頭し……事故で亡くなった。残された子供は、当時7歳。彼もまた二人の死から逃避するように勉強と訓練に明け暮れ、2年後無事に執務官資格を取得した。

「当時は巻き込まれた人を助けられる、守れると意味も無く信じていたな。結果はこの有様だ。……この10年間、たった一人の命しか救

えなかった」

凶悪事件をメインに担当するということは、必然的に任務の危険度は高い。今回のようなテロとかが一つの例だ——故に執務官の殆どはこの類の事件を忌避し、補佐官が滅多に付かないという状況だったりする。この辺りは人事部の頭痛の種らしく、私とテイアナが二人揃って執務官補佐試験を満点合格したというニュースは彼らを沸かせた……らしい。

それでも彼は、担当を替えることは無かった。例え一人であつても事件を担当し解決する——毎日神経をすり減らして。

あの日……4年前、彼は事件後の休暇でこの家に戻っていた。溜まった疲労とすり減らした神経では何も出来ず、ただぼーっとしていたらしい。

そんな中発生したのは、ミッドチルダ北部臨海第八空港の大規模火災。救助に参加し、搭乗口で被災した私を救助した。後悔とかは無く、その時は純粋に「私が生きていたこと」、「それを自分が助けることができた」と喜んでいたらしい。

けれどそれからインターミドル、士官学校入学、Aランク試験、そして機動六課に配属となり、自分の行動が間違っていたのではないかと考えたそうだ。

「……おりやつ」

語り続ける執務官の隣に移動し、彼の額を弾く。もちろんちゃんと威力は調整済みだ……いい音が響いたから不安になるけど。昨日兄とゲーム中にこれやって本気で泣かせてしまったから……反省。

「色々言いたいこともあります、まずこれだけは言っておきます。あの時助けてもらったこと……それからかけてくれた言葉、私はとても嬉しかったです。血を分けた両親にも認めてもらえなかったのに、赤の他人は認めてくれたし、褒めてくれた。そんなこと、記憶にある限り初めてでした……伯父はそんなタイプじゃないんで」

あの言葉があつたから、私は前を向けた。この人のように強くなりたいと、誰かを守る自分になりたいと願った。……あの言葉が、あの温もりが無かつたら今の私は存在しない。

だから、それが間違っていたなんて言わないで欲しい。

そつと、執務官の手を取って私の胸元へ誘導する。心臓はいつも通り鼓動を刻んで、その動きを伝えていた。

——ほら、私は生きているよ。危ないこともあったけど、ちゃんと乗り越えてここにいる。だから、そんな悲しい顔をしないで。

「繋いでもらった命と、大事な人達から受け継いで、育ててもらったこの力……それを憎んだことなんか、あの日からは一度も無いんです。そこだけは、何があっても変えるつもりはありません」

手を放して、私は満面の笑みを浮かべた。

「けれど私は弱くて、一度は道を間違えてしまうから……傍で、見守っていてください」

「……っ」

腕を引かれ、強く抱きしめられる。背中に回された腕と、押し殺す涙声。その背中にそつと腕を伸ばす。そういえば今まで誰かを面と向かって抱きしめたことが無い。力加減に気を使いながらも、肩越しに彼を見る。

この力は、破壊のためではない。守るための、救うための力。私の力もそうなのだと、機動六課に配属になってようやく分かった。それだけは絶対忘れないし、間違えない。一人では出来なくても、二人でならきつと出来る。スバルとティアナ、エリオとキャロ——仲間がそう教えてくれたから。

止まない雨はない。晴れない霧はない。いつかは晴れ間が見えるはずだ。そうなれば、どこまでだって羽ばたける。

(……ありがとう、みんな)

休暇最終日。私・秋月深琴はミッドチルダ海上隔離施設を訪れていた。収監されている皆への差し入れと、フェアとの面会のため。

「あれからね、あの騎士に言われたよ」

ガラス越しに向かい合って、フェアが微笑む。「あの騎士」というのは言うまでも無く渡辺零さんのことだ。事件後彼の保護責任者として名乗り上げた零さんは、頻繁に面会を行っているらしい。テンション高いし鬱陶しいし——そう言いながらも、フェアは笑っていた。

「ここを出たら、聖王教会に来ないかって」

「そっか……あ、確かセインやオットー、デイドも聖王教会組だよね？」

「うん。残りはえつと……ナカジマ三佐、だっけ？ その人が保護責任者になるって。ただセインもだけどチンクとデイエチは稼動歴が長いから、ここを出るのはその分遅くなるかもって……」

「そう……」

そしてルーテシアは、目を覚ました母・メガーヌと共に八年間の隔離処分を受けることになっている。これに関しては賛否両論があったが——ベルカ式をベースにした召喚魔法を使い、そして母子共々実験体扱いされていたことや、そもそもルーテシア本人を捕らえたのは最高評議会で、調整したのはスカリエツティなわけであり、根底部分は洗脳されていたということになる。まあそれでもテロ幫助や公務執行妨害をしたという事実を変えられないらしい。ただ八年間という数字はこれからの再教育次第で短縮されることは確実だし、誰にも邪魔されずずっと求めていた母親との時間を過ごすことに重点を置いて、この判決が出された——らしい。裁判には士官学校の同期が関わっていたから、又聞きだ。ちなみにその同期（男）はルーテシアの事情を聞いて「こんな幼い子供を利用するとかマジで許せないよな！ 俺に出来ることなら何でもするぜー」と妙にやる気を出していたことを、私は忘れないだろう。

「ってことは……ノーヴェとウエンデイも、二人が出るまではここに

残るって？」

「うん。やっぱり、姉妹だからって」

「そっか」

それからの会話は、この間面会に来たスバルをノーヴェが拒否したけど実は仲良くなりたがっているとか、ウエンデイがテイアナをライバル認定したとか、ゆりかごでなのはさんと交戦したデイエチがなのはさんの砲撃の威力を体感して「ほんとに人間か……？」と漏らしたとか、セインがお姉ちゃん扱いされないと愚痴ってたとかそんな暴露話。その一つ一つをフェアは身振り手振りと満面の笑顔で話してくれた。

そして面会時間はあつという間に終わりを告げる。

「……ありがとう。あの時、僕を助けてくれて」

最後にそう締めくくったフェアの表情は、とても穏やかなものだった。

◇

そして休暇も終わり、訓練再開初日。私は隊長室に呼び出されていた。六課運用期間後の話だそう——その最終確認だ。ちなみになのはさんも同席している。

「じゃあ深琴は……予定通りって言うのはあれやけど、アーウィング執務官の正式な補佐官として本局に転属やね」

「何か問題はありますか？」

「いえ、ありません」

八神部隊長とリイン曹長の確認に、私はそう答えた。

「じゃあ今日の訓練は、深琴は補助魔法を中心に新しいの覚えていこうか。リイン、手伝ってくれる？」

「はいです、なのはさん」

『桜華』の新しいバリエーションも考えてるから、エクセリオンモードの練習も忘れないでね」

「はー」

なのはさんの言葉に頷いて、私は先に退室する。寮に戻って訓練用ジヤージに着替え、フオワード達を追いかけた。気づいた四人は「お帰り」と私を迎えてくれる。

「それじゃあ、今日も頑張っていこー！」

「おー！」

スバルの号令に声を揃えて、エリオとキャロ、ティアナ、そして私は拳を突き上げた。

◇

そして4月。機動六課が解散になって、私たちはそれぞれ新たな配属先で日々忙しく過ごしている。

そのメールが届いたのはちょうど休憩時間中。フェイトさんが送ったその内容は、ちょうど皆の進路が決まり始めたあの頃のものだった。

『そしてそれから、機動六課卒業までの静かな日々と、卒業からしばらくのいろんなことがあった日々は今も本当によく思い出します。卒業の日の模擬戦の、本当に熱かった24分間とか、ね』

その文面の目にした瞬間、アーウィング執務官は唇をへの字に曲げた。いきなり不機嫌になる。

「……執務官、一番に落とされましたもんね」

「落とした張本人が言うか？」

だって執務官厄介だもん。典型的な射撃型のセンターガードである彼は、その周囲に味方がいれば文字通り最強の指揮官となる。しかもその時彼らにはエースオブエースだっていたわけで。戦闘スタイルの相性的にも私が彼の相手をする方が非常に有利なわけである。

「でも楽しかったですよね」

「二次会は悲惨だったかな」

「模擬戦で体力、魔力共に使い切りましたしねー」

なのに全員三次会まで出席したのだからわけがわからない。つていうか三次会まで用意していたシャーリーが鬼だった。いや、彼女に

悪気はこれっぽちもないのだろうけど。ノリが良すぎるのもどうかと思う。同窓会会長にシャーリーを選んだのは正解だ。……ちなみに次回の幹事はスバルとフェイトさん、そして私が入っている。いいのかな。

参加者全員がぼろぼろになりながらも笑顔で映る写真データ。それを表示させ、執務官はそこに映る私と、彼の隣に座る私とを見比べる。

「どうかされました？」

「いや……髪、伸びてきたな」

あれから——六課を卒業してから、私は髪を切るのを止めている（毛先を整えるくらいはするけど）。本格的に切る時間の余裕もないし——というのは実際のところ建前である。大学進学のため渡航した兄が言うに、小柄な上に童顔、かつ胸がない、というか全体的に未成熟な幼児体型である私がショートヘアの状態だと三割増しで幼く見えるとのこと。

ようやく肩甲骨辺りまで伸びてきた黒髪を、執務官はその指で弄る。

「数年もしたらなのはやフェイトより長くなるだろうな」

「一応目標にしますもん。色が黒なんで、重く見えそうですけど」

でもいつか、なのはさんみたいなサイドポニーにしてみたいな。

「でも、そろそろバリアジャケットも更新しないとですね。戦闘中は纏めないと邪魔になりそうですし」

「なりそう、じゃなくてなるだろう。確実に」

「あはは。でも正直な話、私そこらへん苦手なんですよね……」

一応、何でもそつなくこなせることが自慢であり、そして唯一の特技でもある。なんだけどそう言ったプログラミングは苦手な部類だ。決められた形があつて、その通りに構築していくのなら得意なんだけど……専用の防護服プログラムの様に「さあどうぞ好きにやってください」と丸投げされるとお手上げ状態だ。

となると開発者のシャーリーや改造者の楓さん、咲夜さん、マリィさんに頼むのが妥当だろう。



『機動六課メンバーは、今は別々の場所で過ごしてるけど……この青空の下、それぞれの場所できつとみんな、あの日の事を忘れずに暮らしてるよね——って、よく思います』

画面をスクロールして、メールを最後まで表示させた。

『今日はお休みで、これからののはとヴィヴィオと、ちよつとお出かけしてきます。お姉ちゃんも来れたらなー、ってヴィヴィオが言ってたけど……また休みが合えば、一緒に出かけようねって』

その一言につい笑みが零れる。ヴィヴィオも学生だから、ちゃんと曜日とか考えないと……。

『同窓会の企画、みんな忙しくて難しいけど、きつと実現させようね。実行委員会会長のシャーリーが頑張ってくれてるから。同窓会の幹事として一緒に頑張ろうね。それじゃあまた。——フェイト・T・ハラウンより。秋月深琴様』

## 27. 5 The Day after II

「今日もお仕事、お疲れ様ー！」

機動六課隊員寮、休憩室。そこに集まった私達フォワード四人とアルトとルキノはお菓子やジュースをテーブルに広げていた。会話の中身は、卒業後の進路。

「フォワード5人とも行き先が決まって、これからまた少し忙しくなるねえ」

「特にティアナ。これから執務官に向かって研修と勉強で大変だー」  
「頑張ります」

アルトとルキノの言葉に、ティアナは微笑みながら頷く。

「それ考えたら、深琴はちよつと楽だね。戦闘特化の補佐官だし」

「あははー」

殆どの場合、魔導師が執務官補佐になるということは将来的には執務官資格取得を視野に入れるらしい。その必要が無い私は戦闘を得意とする「補佐専門」になる。執務官もその補佐官も数が足りないし、戦える補佐官はもつと少ない。一人くらいそんな人がいてもいいだろう——と、八神部隊長とフェイトさんがあの手この手を使って人事部を納得させてくれた。

「スバルも、まさかスカウトとはねえ」

「えへへ」

スバルには湾岸特別救助隊からスカウトが来たらしい。戦闘機人の体と、優しい心。救助隊向きのスバルにとって天職であることは間違いない。

「それに湾岸特別救助隊って……確か、スバルが目標にしてたところだよね？」

「そうだよ。っていうか、災害担当局員全員の憧れだね」

「そうなんだー……？」

私は首を傾げ、ポテトチップスをつまむ。ちなみにこれらのお菓子は全て機動六課の購買で売られている。安いし美味しいし、ということを利用して少ない人は少ない。

「エリオとキャロも2人仲良く平和な職場！」

「フェイトさん喜んでたねー」

「ありがとうございます」

エリオとキャロは、キャロが所属していた辺境自然保護隊に。密猟者対策で魔導師は必要だし、キャロの召喚魔法は調査に必要不可欠だ。フリードもいるし、何より2人一緒なら六課で学んだことを活かせる——そう、前に話してくれた。

「なんかもー、おねーさんもうれしいよー」

涙を拭って、アルトが言う。アルトはヘリパイロットとして地上本部に、ルキノは次元航行部隊の事務官に転向するグリフィス准尉の補佐官をしつつ、艦船操舵の道へ。……グリフィス准尉の転向について、シャーリーは「ルキノの影響じゃないのかなー？」とニヤニヤ邪推していたが、本人の話によれば関係がないらしい。シャーリーは聞いてなかったけど。

「今日は飲むよ！ 全員ジュースだけど！」

「おー！」

既にアルコールが入ってるんじゃないか。そう疑いたくなるテンションだった。

ただ一人だけ——スバルの横顔に元気が見えなかったのは、私の気のせいだろうか？



それから、休憩室に詰めていたメンバーはそれぞれ部屋に帰り出す。その中で一人だけ、スバルは外を一回りして帰ると言って走り出してしまった。

「……なんか、スバル元気ない？」

「あ、深琴もそう思う？」

ティアナと2人、非常にゆっくりとしたペースで廊下を歩く。

「何ていうか……目標だったところから話が来て、すごく嬉しいはずなのに……迷ってる……？」

「うん」

「寂しいっていうのもあるんだけど……それとは違う気がする」

六課に入ってから、初めて顔を合わせて。その中で私が理解したのは、どの人も「立ち向かうための意思を持っている」ということだ。悲しい事件とか、理不尽な痛みとか、全てに。

私を横目で見ていたティアナはちよつとだけ微笑んで肩を竦めた。

「あいつ……スバルはね。深琴も知ってるとは思うけど、バカでドジで時々情けなくて。でも、自分で思ってるよりずっと強い。あいつの言葉があつたから、あたしもあの状況で生き残れた」

「うん。それ、ちよつとだけ分かるかも」

最前衛のフロントアタッカーを務めるスバルは、いつも真っ先に敵へと向かっていく。普段は書類が苦手だったりとか、助けを求めてティアナにあしらわれて泣きそうになったりとか、ちよつと驚くけど。でもエリオやキャロをいつも気にかけて、私にも優しく声をかけてくれた。同じ格闘型としても、先輩としても、そういうところは憧れる。年が近いお姉さんがいたらあんな感じなんだろうなって。

「あいつが悩んでるのは、六課を出たらあんな感じなんだろうなって。あたしたちのことを、もう守ってあげられなくなるから……じゃ、ないのかなって」

「そっか……やっぱり、スバルは優しいね」

でも、きつとスバルなら。これからたくさんの人を助けることが、守ることが出来るはずだ。

だから……。

「あれ、深琴？」

「スバル」

場所は寮の少し裏手の方。ティアナと分かれてから、部屋に戻る気になれなかった私は一人で魔力弾操作の練習をしていた。

「やっぱり深琴はすごいよねー。ベースは古代ベルカ式なのに、射撃だって出来ちゃうし」

「習い始めた頃は全然上手くいかなかったよ。毎日伯父さんに怒られ

たもの」

一回だけ本気で頭に來たから、伯父に魔力弾を6発命中させたのはいい思い出だ。事情を聞いた伯母が私を怒りつつ、背景に般若が見えるくらいの勢いで伯父を怒っていたけど。伯母は絶対に怒らせてはいけない——そう私が心に誓った日である。

「……それに私から見たら、スバルの方が凄いや？ すっごい速いし、防御力も攻撃力もあるし。絶対凄いや救助隊員になれるよ」

「深琴……」

『安全な場所まで一直線に』、自分の力で助けること。それが、スバルの目標でしょ？」

だってそれは、もう既に叶えられている。

「もう叶えられてるよ。だってゆりかごに突入した時は、スバルがいたから救出できたんだもの。だから、もう大丈夫だよ。スバルなら絶対誰にも負けないし、たくさんの人を助けられる」

「……深琴……」

「年下だし、頼りない私が言うのもなんだけど……スバル・ナカジマはとても強くて優しい人だよ。六課で一年間一緒だった、秋月深琴が保証します」

えへへ、と笑う。一方のスバルは涙目で「深琴お……」と泣きじやくっていた。

「ご、ごめん！ 私、なんかいけないこと言った!？」

「……ううん……ありがとう、深琴」

涙を拭って、部屋へと帰るスバルの背中を見送る。泣かせてしまったのは申し訳ないし、反省するべきだけど。

それでも今、スバルの背中から、先ほど感じられたような迷いは見受けられない。

「……これで、いいのかな？」

《Yeah. I think so too, buddy.》

翌朝、ティアナと話して完全に迷いを振り切ったスバルは、特救への転属希望を出したそうです。



別れを意識すると、季節はあつという間に流れていった。

それを「寂しい」と思ったのは、初めてだ。

(うん。変わったんだ。私も、みんなも)

24分間の全力全開の模擬戦の結果は、内緒。

けれど写真に映る参加者は全員ぼろぼろで、それでもなお笑顔を浮かべていた。

その写真もフォトパネルに納め、私は息を吐く。

初めて『家族』で撮った写真。初めての同窓会で撮った、酔っ払い同然のテンション。そして六課で撮り続けた『友達』。

——一緒に過ごした時間と受け取った思い出があるなら、それはきっと「お別れ」じゃなくて新しい旅立ちだから。

終わりのない夢の途中。私たちはきつと、きつとどこかでまた出会う。

駆け抜けた日々はまた会う日まで大切に抱きしめる、愛しくて優しい——私たちの大切な宝物。

## StrikerS サウンドステージX

### 01：事件

昔、大きな戦がありました。数百年以上も長きに渡って続いた「古代ベルカ戦争」。その終焉には、古きベルカの土地を、人の住めない場所に変えてしまった、忘れ得ぬ戦。そんな戦乱の歴史は、数えきれない命と可能性を奪いましたが、同時に、様々なモノを生み出しました。独自の魔法や技術。そして武器や兵器。忌まわしい記憶として消えてしまったモノ。今も受け継がれているモノ。大きな戦争が無い時代になって、暦が新暦を数えるようになってから、もうじき八十年。——世界は概ね平和ですが、尽きること無い事件や災害と、今も戦い続けている人たちがいます。

爆発音が響く。その轟音に目を細めながらも、男性は報告を続けた。

「爆発発生！二十七階中央、シヨツピングフロアです！」

『ビル警備員の避難終了。ですが犯人以外にもう一人！』

「誰かいるのか……？」

「何だ……何なんだお前は！」

自分に近づく影に、恐怖を隠せない声で男は問いかけた。しかし、返ってくる言葉は先程と何ら変わらない。

「答えてください。あなたにそれ以外の選択肢はありません」

「だから、なんのことだか分からんと！」

男の答えに、納得できないのか影——ボディースーツを纏った女性は、男の首を掴みあげた。

「私達は、イクスの在処を知りたいだけです……あなたはそれを知っている」

「うぐ……知らない！ 本当に知らない！」

「ならば、イクスの在処を知る者は？」

男が首を振る。同時に介入者が声を発した。

「動くな！ 管理局だ！」

その声に女性はバイザーに覆われた顔を向ける。

バイザーに映された介入者達の姿を見て、女性は呟く。

「時を経て、兵士たちも随分と様変わりをしたようです」

「ここは既に包囲されている！ 人質を離して、投降しなさい！」

「……左腕、武装化。『形態 戦刀』」

女性の左腕が破裂し刀へと姿を変えた。その様子に恐怖を覚えつつも、リーダーらしき人物は一団に命令する。

「ショック弾、撃てー！」

発射された何十発もの魔力弾が、女性の刀に弾かれた。

「あなた方を、イクスの墓標の元へ……」

そう囁いて、女性はその場にいた自分以外の全員を薙ぎ倒し、息の根を止める。ただ命令を遂行するだけの人形のように躊躇いも無く。

◇

『ミッドチルダ、MBCニュースです。現場はここ、海岸沿いの大型デパート、ファイリズの27階。窓からは煙が上がっています。被害状況はまだ良く分かっていませんが、27階のイベントホールで爆発、男性一名の死亡が確認されています。ホールでは古代美術展が開催されており、男性は美術展の関係者であると……あ、武装隊のヘリが飛んでいます！やはりただの事故では無いのでしょうか!? フォルスやヴァイゼンで発生した一連のテロ事件との関係は未だ発表はありませんが……局からの発表が待たれます……』

海岸線沿いの大型デパート、ファイリズのほぼ真上を、時空管理局陸士108部隊のヘリ・JX705が飛んでいた。

「あーあ……テレビ局、仕事速いのは良いけど、情報規制はちゃんと守ってるのかな……」

「まあ、彼らも自分の仕事に一生懸命ですから……」



速報の内容を聞きつつも溜め息を吐いたヘリパイロット——アルト・クラエツタを、隣に座る女性——ギンガ・ナカジマ捜査官が宥めた。

「むう……ギンガ捜査官は今回の事件、どう見ます？」

話を振られたギンガは瞳を伏せ、考えた。

「被害状況、殺害の手口、目撃された犯人像……いずれもフォルスやヴァイゼンの事件と一致します。一連の事件と見ていいでしょうね」「そっか……今回も『一連の事件』くらいで済んでくれればいいんですけどね……三年前みたいな大事件は、出来れば御免被りたいです」「大きくなる前に、解決しちやいましょ。それが私達の仕事です」「ですね」

ギンガの言葉に、アルトは気を取り直して、続ける。

「じゃあ、降ります」

「はい。お願いします、アルトさん」

ボタンを切り替えて、アルトは通信を繋いだ。

「こちら、陸士108隊JX705一番機。着陸許可願います」

『こちらヘリポート。着陸了解。二号パネルに降りてください』

「二号パネル、了解です」

ヘリポートからの指示に合わせて、アルトはヘリを操作する。その最中、ギンガは小さく呟いた。

「この手の連続事件なら、本局の方で捜査官か執務官が事件を追ってるはず……その人と連携が取ればいいのだけど……」

◇

「被害者の男性、コーレル・マクバード。学士院出身の、古代文化研究者」

真面目な声で、黒制服を纏った女性——ルネッサ・マグナスは画面を表示させていく。

「表立った犯罪歴はありませんが、法定保護遺跡の盗掘や、ロストログアの転売に関する疑惑で捜査対象となっていました」

「やつぱり……今までと、同じ?」

報告するルネツサに、黒の執務官制服を纏ったロングヘアの女性――ティアナ・ランスターが尋ねた。ルネツサは答えると同時に、新たな画面を開く。

「被害者と警邏隊員を殺害したのも、マリアージュで間違いなさそうです」

「あなたが……ルネがそう言うなら、間違いはないんでしょうね」

「ありがとうございます。光栄です」

はにかんで、ルネツサは次のデータを表示した。

「現地の捜査部隊は?」

「港湾警備隊、ですが対外窓口は陸士隊の捜査官になっています」

表示されたデータに、一人の女性の顔写真が映る。

「この方です。ギンガ・ナカジマ捜査官」

「ああ……」

「お知り合いですか?」

「かなり、ね」

ティアナの答えに、ルネツサは指示を仰いだ。

「では、交渉はお任せした方がいいでしょうか?」

「そうね。ミッドに降りる、準備の方は?」

「移動チケットと、初日の宿泊手配はもう済ませました。簡単な着替えや身の回り品は整いましたが……持っていかれる手荷物があれば、私が寮まで取りに戻ります」

「大丈夫よ。じゃあ、すぐに発てる?」

「いつでも」

その答えに納得して、ティアナとルネツサは立ち上がる。

「これから、ミッドチルダ首都南部に拠点を移動。マリアージュ事件の捜査を続行します。ルネツサ・マグナス執務官補、引き続き同行補佐を願います」

「了解です。ティアナ・ランスター執務官」

その様子に、ティアナは微笑んで歩みを進めた。

初めて受け持った事件以降、凶悪事件をメインに担当してきたティ

アナについた、臨時補佐。非常に優秀な人材だが、いざ戦闘になれば彼女は危険に晒される。

(後で……深琴に連絡、入れてみましょうか)



昔、大きな戦があった。数百年以上も長きに渡って続いた「古代ベルカ戦争」。その終焉は、古きベルカの土地を、人の住めない場所に変えてしまった、忘れ得ぬ戦い。

それはあまりにも身勝手に、無意味だった争い。

国を支配し、侵略する王達は別世界を侵略してまでもベルカ諸国の領土を広げる。それが行き詰った時、王たちはその身を作り変え、強大な質量を操る兵器となって戦場で万騎を屠り続けた。

血で血を荒い、大地を汚し、人の領分を逸脱したその時代。

そんな時代、ひどく変わった王がいた。2人の王で国を支え、国と民を守るだけに全力を注いだ王。自分たちからは攻めること一つせず、侵略されれば全力で敵を屠る。2人が携えたのは、幾千、幾万もの刃。故に彼らは『刃王』しんおうと呼ばれ、争いを好まない一族として栄え、王達からは忌み嫌われた。

「別に構わないさ。俺たちアルティスは、必ず、誰一人他国を侵略しない。だが我が国が侵略された時は、全力をもってお相手しよう」

その戦場を賑めるような言葉は諸国に届くことなく、アルティスの国は侵略を受け続けた。しかしその領土は一度も奪われること無く、刃を振るい侵略者を屠り続ける。

そんなある日、アルティスを支えた王の一人はその予兆を感じ取った。

——このままでは、このベルカの地は、ベルカの民は消滅すると。

彼はその直感を、すぐさま兄であるもう一人の王に告げた。平和な世界へ、せめて民だけでも逃がそうと。もう一人の王は賛同し、急ぎ準備を整えた。

「……あなたは、民と共に。ここは私が食い止めます」

数えるのも飽きる程の襲撃。それに乗じてアルティスの王と民は平和な世界へ——ミッドチルダへ逃げ出す計画だった。しかし侵略者の数は多く、2人の王が刃を取ったその時だった。兄である王を戦艦へ押し込んだ弟は、振り返ることもせず侵略者へと向かう。王がいなくなれば、誰が民を守るのだ。導くというのだ。

それから、異世界に渡った王たちは世界の統一を計り始めた。ミッドチルダへ逃げたアルティスも、その標的だった。が。

「戦場を侮辱し、貶めた王の一族が口を出すな」

ある一国の侵略。当時の王の発言に、兄たる王は激昂した。何度も何度も刃を振るい、ある者は串刺しに、ある者は顔の判別も不可能な程執拗に——たった1人で1000の軍勢を虐殺した。受けた傷はすぐ塞ぎ、鍛え抜いた魔法の力に為す術なく、諸国の軍勢はたった一人の王に屠られた。

「争いを嫌い、国と民のためだけに生きた我が弟が臆病者であるはずがない。力でしか物事を計れない愚か者……お前たちこそが臆病者だ！ クオン・アルティスを侮辱すること、このゼロ・アルティスが断じて許さぬ！」

盛者必衰、必滅は真理。例外なく弱体化の一途を辿ったアルティスの民は、自身を守り抜いた2人の王をこう語る。

「誰よりも強く、何者よりも美しく。あの漆黒の髪と黒曜の瞳は、どこの世界でもそう賞賛されるはずさ。我々は幸福だったよ。なんせここまで、王に守られ、共に生きてこられたのだから」と。

アルティスの家は滅び、残された者は王の名をもじってその血を受け継いできた。全ての始まりにして終わりの数字——「零」と。

そして時同じくして、遠い遠い異世界に一人の男が倒れていた。全身を血に濡らし、衰弱した状態で発見された彼は、海の波が心地よく響くその地を治める家に運ばれた。神や精霊と交信し、その御技を受け継いだと言われるその家は、彼を快く迎え入れる。

その家の姫——秋月深雪は彼に名前を問うた。  
彼は答える。全ての望みにして全ての絶望である永久——「久遠」  
と。

## 02：マリアージュ

——ティアナがミッドチルダを訪れる半日前。第5管理世界《アリエル》の北部にある古代ベルカの遺跡群は夜の帳に包まれていた。発掘作業に従事する作業員のために照らされた明かりが、煌々と輝いている。

そんな遺跡群から少し離れた森の中。人気のないその場所から、銃声とそれを弾く音が響く。

「……邪魔を、しないでください」

体の線に沿うようなボディスーツを纏い、バイザーをした女性が、機械じみた声で告げた。相對する私——秋月深琴は防護服とデバイスを展開し、後方で怯える男をバリアで包み込む。

「生憎、目の前で脅迫する銃刀法違反者を見逃すほど、お花畑な頭はしてないの。彼に何の用があるのかは知らないけど……」

言って、私は男を見遣った。中肉中背、どこにでもいそうな姿の男は私と上司が追っていた、最近ここで連続する法定保護遺跡の盗掘とロストログアの違法転売容疑がかけられている。

「然るべき法によって、彼は裁かれる。聞きたいことがあるというのなら、定められた手続きをしてお願ひしたいのだけだ」

「それでは困ります。私たちは知りたいだけなのですから」

「ならその銃を下ろして」

「それはできません。この男は、かの王の墓標に捧げられるのですから」

「王、ね……」

どうやらあちらは何かを探していて、それは彼女たちに非常に深く関わる問題らしい。それを知るはおそらくこの男で、例え知っても知らなくてもいずれは殺す——それは彼女たちの意思か、それとも「かの王」とやらの命令かは分からない。

「王というのは、もしかしなくても古代ベルカ時代の王様のこと？」

「ええ。我らを生み出し、我らを統べ、進軍する王です」

「……聖王、ではないね。聖王にそんな機能ないはずだし」

そもそも聖王は「ゆりかご」を所持し、その機能を発動させる鍵なのだから。他の機能があるはずはないけれど。

「あなたは、イクスの在り処を知っている」

「し、知らない！ そんなもの、知らない！」

「……では、在り処を知る者は？」

女性の冷たい声に、男は首を振る。「そうですね」と頷いた女性は、その左腕を破裂させ刀へと変形させた。私のデバイス——ローゼンクランツが反応して、左をサイドモードの拳銃、右を基本形態のショートソードへ変形させる。

「ならば、あなたもイクスの墓標の元へ……」

そう呟いて、女性は斬りかかった。真正面から右手一本で受け止めて、魔力を纏わせた左足で蹴り込む。僅かにへこんだ腹部に手を当てた女性が一步後ろへ下がると同時にスタン設定の魔力弾を6発打ち込んだ。宙に浮いた女性の体が着地する寸前に、淡紅色の鎖で縛り上げる。やりすぎの感は否めないが、まだ彼女は本気を出していないことは明白だった。本気を出される前に捕らえなければ、こちらが危険だ。

「なるほど……あなたは稀に見る、優秀な騎士ですね」

「武装を解除して投降しなさい。抵抗さえしなければ、あなたにも弁護の機会が与えられます」

女性の褒め言葉に返事をする事もなく、私はこの三年間で何度も繰り返した言葉を威圧的に紡ぐ。女性はバインドから逃れようとしていたが、数分もしないうちに抵抗を止めた。

「——ですが、マリアージュが虜囚の辱めを受けることはありません」ぞつとするような冷たい声を響かせて、女性——マリアージュはその体を破裂させる。両手足、胴体からあふれ出たのは血液ではなく、黒い液体だった。

（この色、この匂い……もしかして……）

そして最後まで残っていた頭部が、火花を起こしながら地面へと落下する。その光景を目撃した瞬間、私は愛機を呼んだ。

「ロゼットー！」

私本人と容疑者の男を、新たに生成した防火バリアで包み込む。同時に頭部は黒い液体で染められた地面に落下し——火花に引火した液体は、大爆発を上げた。

◇

「……しかしまあ……派手にやったな」

時間は過ぎて、お昼前。容疑者への事情聴取や戦闘に関する報告や何やらを提出し、後はこちらの法務局に任せるという手筈で、私と上司——デイバイン・アーウィング執務官の仕事は終わりだ。

そんな中、私たちが訪れていたのは「マリアージュ」との交戦地。頭部から放たれていた火花に引火した燃焼剤は大爆発を起こし——交戦地から半径数100メートル範囲内の木々を焼き尽くし、マリアージュが立っていた地点の地面を抉った。呆れたような視線を向ける彼と、目を合わせることが出来ない。

燃焼剤火災は燃焼が早く温度が上がりやすいという特徴があり、消火は容易ではない……とは、現在防災課の特別救助隊に所属する友達・スバルから聞いた話。

「ですが、被害としては軽い方でしょう。たったお一人で、しかも30分足らずで完全に鎮火させるとは……さすがは秋月執務官補ですね」「ありがとうございます」

駆けつけた北部の防災課隊員の言葉に、私は素直に返事をしておいた。「さすがは」と言っているがその視線には多分に悪意が含まれている。今回の消火活動は私の独断だし、常人では聞き取れない程の小声で「何してもコネがもみ消してくれるからな。いい気なものだよ」とか言っている隊員の姿だつてある。実際の流れ、火災が発生し、バリアで身を守りつつ私は彼らに報告・出動要請を入れた。その誤差は5分にも満たない。にも関わらず彼らが到着したのは要請から45分が過ぎた頃。つまり彼らが現場に到着した時点で消火活動は終了していたのである。「そもそもあんたらがもつと早く来てくれたら



！』という言葉を飲み込んで、私たちはその場を後にした。

「あー……何か腹が立つー……」

やっぱりどこでも地上と本局の仲は悪いのだろうか。っていうか私が魔導師をやっているのとコネは関係ないと思うんですけど。

「そんなこと考える奴ばかりじゃないんだけどな、実際は。魔導師だろうとそうでなからうと、しつかり働けば認められるのが殆どだ。……まあお前の場合は特に周りが周りだからな。まだ若いし出世は早いしで、愚痴りたくもなるんだろ」

「それは分かりますけど……というか、知り合い皆をコネ扱いたくないでほしいです。はつきり言って」

親戚や友達、元同僚に元上司。皆、本局でも有名な実力者だ。でも私は繋がり目的で知り合ったのではないし、コネだなんだと言われても対応に困る。唇を尖らせていると、アーウィング執務官は私の頭を乱雑に撫でた。

「お前一人が気にすることじゃないだろう。これからは特に」  
「気にしてません。気にくわないだけで」

かれこれ7年ほど言われ続けているから、実を言うと慣れてはいない。ただ理性的に処理できないのはいつものことなので、余計苛立ちを感じた。

ふと視線が、アーウィング執務官の左手の薬指に留まる。嵌められているのは、シンプルなプラチナの指輪。同じものが、私も同じ場所に嵌められている。

(もうそんなに経つんだもんね……)

彼の補佐官になって三年。彼を異性として意識するようになって、付き合い始めたのが一年半前。婚約という形でこの指輪を嵌めるようになったのは一年前。周りの反対が皆無という状態だ。

もちろんミッドチルダの法律では、17歳の私はまだ未成年である。しかし女子は両親の許しと正当な手続きを行えば16歳で結婚はできるのだ。ここでいう両親は現地保護者ではなく法的保護者——私の場合は実の両親ということになる。なので海鳴市に帰った時、彼と一緒に報告をしたのだが……。

『本当にいいんですか？　うちの娘のために人生を棒に振るといふことですよ!?!』

——父は真顔で、そう言った。結婚は人生の墓場とは言うが、その言い草はどうかと思う。私はそこまで人として劣っているのだろうかかと悩んでしまった。一方母はただ笑って、「お願い」という形で一言だけ口を開いた。

『秋月の家とか血とか……そんなこと関係なく、一人の女性として、娘を愛してください』

既に亡くなった私の祖父は、毒を盛ってまでも孫娘の資質を確かめた。予想以上の資質を秘めていた私を当主として養育しようとして母と揉めに揉めて——母は、私をミッドチルダに送るといふ決断を下したらしい。だが普通に送ったのでは、祖父が何らかの手段を用いて干渉するだろうと、それでは意味が無いと考えた母は私にこう告げた。

『あなたなんか、生まなければよかった』

結果私は再会するまで一度も連絡を取ろうとせず、祖父が亡くなっていた事も知らなかった程だ。全ては仕組まれていたことだと知った私は何も言えず、動くことすらままならなかった。

けれど、もしあの時母がああ言わなければ。私は自分の力を嫌うことは無く、彼との出会いだつてまた違うものになっていただろう。こういう関係になるまでには至らず、ただの憧れで終わっていたかもしれない。

そう考えると嬉しいような、なんか悔しいような、そんな感情に駆られる。

『どうした?』

『いえ……少し、考え事を』

軽く頭を振って、先ほどまでの回想を追いやった。

「あ、そうでした。提出したデータなんですけど、ティア……ランスター執務官にも同様のものを送ってもよろしいでしょうか?」

一年半前、ついに目標だった執務官資格を取得した元六課の同僚、ティアナ・ランスタター。私たちと同じ凶悪事件を担当する彼女は今、

「マリアージュと名乗る人物による連続爆破、殺人事件」を追っている。

三ヶ月前、〈フオルス〉で発生したその事件は〈フオルス〉で6件、〈ヴァイゼン〉で4件。被害者はいずれも古代ベルカの研究者や遺跡発掘に携わった人々で、「マリアージュ」と名乗る女性を彼らを拉致して脅迫を行い、そして殺害している。唯一の例外は私たちが追っていた容疑者のみだ。

本来は私達が担当するか、私がティアの臨時補佐に付いて協力体制を取る予定だったのだが……こちらの容疑者が中々曲者で、時間がかってしまったのである。臨時補佐云々は以前にもティアが執務官になって初めての事件担当の時に付いたことがあり、以降も何度かこちらの案件が特別立て込んでいなければ、協力体制を取っていた。

「ああ、構わない。そこら辺の判断はお前に任せる」

「ありがとうございます、アーウィング執務官。じゃあロゼット、頼んでいい?」

《All right, buddy.》

ロゼットがティアのデバイス・クロスミラージュにデータを送つてすぐ、映像通信を受信した。

「プライベート通信……?」

誰だろう。というか、はつきり言つて珍しいことだ。

視線を上げて、執務官の許可を貰う。後ろを向いて、私は映像モニターを表示させた。

「はい、秋月です」

『あ、深琴! 久しぶり!』

「スバル!」

画面に映ったのは、ショートカットの少女。特救の銀制服を纏つた、スバル・ナカジマだった。

「久しぶり。元気だった?」

『深琴こそー。あ、今いい?』

「うん、大丈夫だよ。スバルは休憩中?」

『えへへー。これからオフなんだー』

そうスバルは笑っている。しかし次の瞬間には肩を落とした。

『でも三回に二回は出勤がかかるのがいつものパターン……もう慣れましたー』

「あはは。災害担当は厳しいもんねえ」

スバルとの出会いは、四年前。一年間という期間限定で新設された部隊——機動六課だ。分隊は違うが同じ前線フォワードとして、年の近い友達として、一年間一緒に過ごしてきた。

『でね、実は今、ティアがミッドに来ててさ』

「ティアが？」

『事件捜査なんだけど、私の借りてるマンションに泊まる事になったんだ。まだエリオとキャロの返信待ちなんだけど、深琴ももしお休みだったりしたら、うちに来ないかなーって』

「一応、私も休暇ではあるんだけど……」

「いいんじゃないか？ 久しぶりの休みなんだし、友達と一緒にでも」

『あ、アーウィング執務官！ お久しぶりです！』

ちやつかり輪に入ってきた執務官とスバルが盛り上がる。まあ休暇は休暇だし、久しぶりに皆で集まるところというのも悪くない。

『じゃあ決まりだね。どっか行きたいところとかある？』

『エリオとキャロはあそこに連れてってあげようよ。マリナーガーデンに』

「アルト！ 久しぶり！」

スバルの隣にもう一枚モニターが表示される。顔を出したのは六課の元同僚——アルト・クラエツタだった。

『いいね！ 深琴は行ったことある？』

『スバル……深琴だよー？ 聞くのは野暮ってもんでしょー？』

「いやあの……ありますけど何か!? 何か問題でも!？」

怒鳴るような声で叫びながら、私は頬が熱くなってくるのを感じた。何の罰ゲームだろう。にやにや笑うアルトに腹立たしいものを感じつつも、いざとなれば彼女の黒歴史を暴露することでチャラにしようとも思ったりした。

『詳しいことはまたメールするね。お疲れ様』

「お疲れ様ー」

回線が閉じられたことを確認して、私は深い溜息を吐いた。

「……ティアがミッドに移動したってことは、ミッドでも同様の事件が確認されたってことですよね?」

「みたいだな。今朝方だそうだ」

関連情報を受け取って、再び溜息を吐く。ミッドチルダの湾岸部で発生したその事件は手口などからして、これまで通り——マリアージュと同一人物らしい。

「お前がそこまで気に病むことじゃないだろう。少しは肩の力を抜いて来い」

「……はい」

「その代わり、何かあったらすぐ連絡を入れろ。いいな?」

「了解です。……デイバイン」

久しぶりに口にした彼のファーストネームに照れつつも、私は微笑んだ。

### 03：詩篇と蒼氷

——詩編の六。かくして王の帰還は成されること無く、大いなる王とその僕たちは闇の狭間で眠りについた。逃げ延びた僕は、王とその軍勢を探し彷徨い歩く……。

赤いインクで——十中八九は血液だろうが——で書かれた古代ベルカ語の詩篇から目を上げて、渡辺零は修道騎士見習いのデイードを見た。

「……で、何で俺に？」

「騎士零なら、何かご存知かと。オットーが無限書庫に行きましたが……こちらでも調べておくべきかと思いました」

「なるほどな」

場所は修道騎士達が鍛錬に使う訓練場。その一角でデイードと同じく騎士見習いのフェアクレールト・ナハトの訓練をしていた零のもとを訪れたデイードは、あいさつもそこそこにティアナ、オットーから転送された古代ベルカ語の詩篇を見せた。

「デイード。言っておくけど、この人古代ベルカ語分からないよ」

「……そうなのですか？」

「否定はしねえよ。フェア、後でタイムマン勝負してやろう」

「はっ。僕に勝てると思ってるの？」

と勝手に火花を散らしあう師弟の様子に首を傾げ、デイードは口を開く。

「ですが先ほどの、詩篇の解説は……」

「ああ。聖王統一戦争付近の単語だからな。そこらへんなら何とか訳せるんだよ」

「はあ」

「……でもさ。この詩篇、オットーとデイードの記憶にもないんだろ？ 文献って線、外れてるんじゃないの？」

手にしていたデバイスを待機形態——深紅色の大きな水晶のペンダントに戻して、フェアは首を傾げた。その様子に、零はフェアを見る。

「その心は？」

「僕……というより、ドクターが見せてくれた文献になかったから。犯人……マリアージュだっけ？ そいつが狙ってるのって、古代ベルカ系の学者や発掘調査員でしょ？ デイードは知らないかもしれないけど、ドクターはゆりかご関連の調査のために、古代ベルカ系の文献をあらかじめ調べ上げてるんだ。少なくともその中にはなかったって断言できるよ」

「……そうですね。私やオットーの稼動は最後でしたから、記憶にないのはそのせいかもしれません」

オットーやデイードの生みの親で、JS事件の首謀者、ジェイル・スカリエツテイ。今も尚第9無人世界へグリューエンの軌道拘置所に収容されている希代の天才科学者だ。事件に関しての協力は今もないが、野に下ることを決めた娘や協力者の詳細データを送りつけ、刑期の縮小を図ったという事実もあるらしい。

そんなことはさておいて、「しかし」と零が口を開いた。

「だとしても、わざわざ詩篇を残す意味はあるのか？ ……そもそも犯人が何をしたいのか、何を探しているのかがさっぱり分からない」「誰かに宛てたメッセージでしょうか？」

「だとしたら、マリアージュ自身も古代ベルカ関係ってことになるよね。ただそれだけ」

「んー……フェア、お前後で深琴にメール入れろ。あいつもしくはデイバインを使う」

散々唸って出した零の結論に、フェアとデイードは白けた視線を送る。自分で調べないのかよ、っていうか自分でメールしろよと言いたげな表情だ。

それと同時に、深紅色の水晶——フェアのデバイス、アインザッツがメッセージの受信を告げる。立ち上げたモニターには本局の寮らしい場所にいる、黒制服の少女の姿があった。

「……噂をすればなんとやら、だな。なんつータイミングだよ」

『え？ あ、すいません……』

「謝らなくていいよ、深琴。この人が勝手に言ってるだけだから」

「フェア様の仰るとおりです。……深琴、お久しぶりです」

『うん、久しぶり。っていうかあの、何の話?』

言って、深琴は訓練場の片隅、三角座りで「の」の字を書く零を見る。一応彼女も師弟関係にあるはずだが、その視線はやや冷たい。

「さつきティアナからメールが来ました。古代ベルカ語の詩篇なんですけど……」

『それってあれ? 血文字で……かくして王の帰還は成されることなくーってやつ?』

「は、はい。それです」

『私にもさつき、ティアナから届いたんだ。デイドのところにも来たんだね』

唇に右手の親指をやって、深琴は『そりやそうかー』と納得したようだ。

「そういえばさ。深琴、事件捜査はもういいの? えっと、確か第5管理世界の……」

『うん。容疑者は現行犯逮捕できたし……それはよかつただけ……』

歯切れの悪い返事に、フェアとデイドは首を傾げる。同時に、調子を取り戻した零が「何かあったのか?」と口を開いた。一連の出来事を思い出したらしい深琴が『そーなんですよー』とだらけた声を響かせる。

『こっちの方にもマリアージュが出てきたんですよ。で、バインドで捕まえたと思ったらいきなり自爆してきたんですよ!』

「じば……っ、ええ!」

「だ、大丈夫なんですか!」

『私も容疑者も無傷だよ。で、ここからが本題なんだけど……そっちにデータ送るね』

言い終わると同時に、複数のモニターが立ち上げられ、送られてきたデータが表示された。

『このデータね、さつきティアナに送ったものと同じなんだ。詩篇のデータと入れ違いになったんだけど、ティアがデイド達にも送って



「おいて欲しいって」

「では、オットーにも転送しておきます」

『ごめんね。で、あともう一つ。フェア、これから巡礼とかある？ なかったらちよつと協力してほしいんだけど』

言つて、深琴は零を見る。

『実は私、明日から休暇でスバルのところに厄介になるんだけど、マリアーヂュが事件を起こしたらそのままティアの補佐につきます。で、今事件捜査を担当する港湾警備隊は人手が足りません。救助任務で手一杯です。私が前線に出られるとも限らないので、念のためにフェアをお借りしたいんですが……保護責任者、いかがでしょうか？』

「別にいいんじゃない？」

間髪入れずに返つてきた言葉に、フェアも深琴もずっこけた。デイドはデイドで「もう少し考えても……」と残念な視線を零に向ける。当の本人は意に介さない様子だ。

「デイバイン……法的後見人の許可を貰った上での話だろ？ なら問題ない。手続きやカリムへの説得は俺が何とかするし」

『ありがとうございます、零さん。じゃあ、フェア。詳しいことはまたメールするね』

「うん。またね、深琴」

ピツと、軽やかな音を立てて全てのモニターが閉じられる。

「……アインザッツ。さつき受け取ったデータ、纏めてもらえる？」

《All right, master.》

「……そういや、巡礼で思い出したんだけど」

「？」

アインザッツがデータを纏めている様子を眺めながら、零が呟いた。

「いや、今回の巡礼の担当つて、シャツハとセインだったような……」

「……大丈夫ですよ、騎士零。シスター・シャツハと一緒に……  
セイン  
姉の方は、どうかは分かりませんが……」

「そこは大丈夫、つて言うべきところじゃない？」

視線を逸らしたデイドに、フェアがツツコミを入れる。「それも

「そうだな」と頷いた零は、そつと息を吐いた。

(……変わったな、こいつらも)

たった3年前までは、刷り込みに等しい目標のため、命を賭けて戦った間柄だというのに。

今ではそれぞれシスター姿や執事姿が板に付き、執事や修道騎士見習いとして自覚が芽生えたのか成長も著しい。

「俺も、年をとったなあ……」

「……まだ、22歳ですよね？」

「つーか、見た目は10代半ばの人間が言う台詞じゃないよねー。身長、今年で追い抜くよ？」

零の呟きにデイドが冷静にツツコミをいれ、フェアは嘲笑を浮かべる。零とフェアの身長差は、頭半分も無い。

「……よし、フェア。剣を取れ。その性根、叩き直してやる！俺はもう22だ！」

「はいはい」

刀を抜いた零に対し、フェアはアインザッツと防護服を展開する。集まり始めた修道騎士見習いの同期達はどちらが勝つかと盛り上がっていた。

——今日も、聖王教会は平和です。



「失礼します」

腰に届く赤毛を一つに結び、首都航空隊の制服を纏った少女・霜月秋葉は自身を案内してくれた職員に敬礼して、先に続く扉をくぐった。港湾警備隊のオフィスである。その奥にあるデスクにいた男性——港湾警備隊前線指揮官のヴォルツ・スターンが秋葉に気づき、軽く手を挙げた。

「本日より、首都航空隊から一時出向となりました霜月秋葉三等空尉であります。遅くなって、申し訳ありません」

「いや、こっちこそ急に悪かったな。早速で悪いが、これを見てくれ」

言つて、ヴォルツはモニターを立ち上げる。そこには先日火災が発生した大型デパート・フィリーズが映し出されていた。

「例の連続殺人事件と、放火の……」

「ああ。使われたのは燃焼剤で、知つてるとは思うが燃焼剤火災は消火しにくい、非常に厄介な火災だ。消火剤を用意するのも時間がかかるし、魔導師が運べるサイズじゃない」

必要なデータを表示させ、ヴォルツは横目で秋葉を見る。熱心にモニターを見つめ、データの一つ一つを頭に叩き込んでいる様子だ。

「今後この手の火災が発生した時に備えて、空が飛べて、かつ凍結系の魔法が使える魔導師を……と思った時……」

「スバル……じゃない。失礼しました。ナカジマ防災士長が、私の話を？」

「そういうことだ。ちょうどこの時も、出動したと聞いてな。若いのに苦勞なことだ」

「それが仕事ですから。それに、今はどこの部署でも私より若い魔導師が大勢いますし」

にこりと微笑んで、秋葉は答える。ヴォルツも苦笑していた。

「だな。話を戻そう。秋月三尉には前線に出てもらおうつもりだ。メインは消火活動だが、時には犯人と交戦することもあるかもしれない。こゝまで……」

「問題ありません。指揮は前線部隊に？」

「ああ。だが今回の——マリアージュが関連する事件では、担当の指示に従ってください」

言つて、ヴォルツは三人の女性の写真を映し出す。

「ティアナ・ランスター執務官。それとこっちは108の捜査官の、ギンガ・ナカジマ。それからうちのスバル・ナカジマ。執務官とナカジマ姉——2人とも、もう知り合いだったな」

「はい。後ほど、通信でもして挨拶しておこうと」

「そうしてください。よろしく頼むな」

「こちらこそ。よろしくお願ひします」

敬礼を交わし、秋葉は退室した。同時に深い溜息を吐く。

「スバルとティアナ、それにギンガさん……あと108のヘリパイはアルトだったよね……身内多いね」

モニターを立ち上げながら、秋葉は手近のソファに腰掛ける。表示したのは、マリアージュが関与したと思われる事件の詳細データだった。

（〈フリーズ〉で6件、〈ヴァイゼン〉で4件。そんなもってミッドチルダで1件かあ……）

手口はどれも共通しているらしく、古代ベルカに詳しいとされる被害者を拉致し、脅迫し殺害。その後周辺を火の海に変えるという。

（被害者はいずれも、咽喉部を鋭利な刃物で刺突……傷の具合から、自殺の可能性が高いとされる……）

被害者自ら死を選ばせるほどの脅迫か、それとも何らかの暗示、洗脳か。いずれにせよ拉致された被害者がただ一人を除いて死亡していることは間違いない。

その例外——先日第5管理世界〈アリエル〉で発生した事件では、本局の執務官とその補佐に追われていた容疑者が被害者とされている。逃走していた容疑者をマリアージュが拉致し、脅迫していたらしい。だが追跡していた魔導師——担当の執務官補佐に場所を特定され、交戦。不利を悟ったマリアージュは体を破壊し、燃燒液を撒き散らし、自身ごと爆発に巻き込んだとされている。

「……まあ深琴ちゃんだしね。オーバーSランクは伊達じゃない、か」  
呟いて、秋葉はモニターを閉じた。



「よかったー。じゃあ2人も、明日来れるんだね？」

夜。出発の準備を終えた私、秋月深琴は映像通信を立ち上げた。モニターの向こうでは元六課フォワードのエリオ・モンディアルとキャロ・ル・ルシエが笑っている。

『はいー』

『でも、みんなお休みなんて久しぶりですよね？』

「あ、そういうえばそうだね……まあティアはお仕事だけ……」

しかしそれでも、普段からそれぞれ忙しい部署に所属する私たちが一同に会することはほとんどない。本局に所属する私とティアはともかくだ。

そして先ほどスバルから、秋葉さんが港湾警備隊に合流したこと、彼女もスバルの部屋に泊まると連絡が来た。……部屋のキャパシティアは大丈夫なのか？

「せっかくだからさ、明日の夜は私とキャロで何か作ろうか？ ティアの執務官祝いと、秋葉さんの昇進祝いに」

『あ、いいですね！』

『じゃあ明日、スバルさんに頼んで買出しもしちゃいましょう！』

私の提案に、エリオもキャロも乗った。それからは決めるべきことがテンポよく決まっていく。

一先ず明日は、ミッド湾岸部の次元空港で待ち合わせ。外でスバルとアルトが迎えに来てくれることになっている。

『……でも、ティアさんの事件、早く解決するといいですね』

「……大丈夫だよ。ティアとギンガさんが担当だし、スバル達もいる。それにいざとなったら、私たちも協力させてもらえばいいんだし」

不安そうに呟いたキャロに、私は笑顔で言った。

そう。何かあれば、私たちが協力すればいい。機動六課のフオワードの5人が集まって、できないことは何一つないのだから。

## 04：胎動と再会と

その世界の色は黒と深紅——暗闇と血と燃え盛る炎の色だけ。周囲の建物は破壊され瓦礫と化している。見覚えのあるはずのないこの光景が、なぜか懐かしい。

「……まだ、戦いますか？」

機械染みた女性の声が響く。赤く染まった地面に片膝をついた男性は、女性を睨みつけて立ち上がる。黒いベルカ式魔方陣を浮かばせ、新たな刃を生成すると同時に全身に負っていた傷が癒えた。

「そんな馬鹿なこと、わざわざ聞くのか？」

「あなたは、『王』でありながらも争いを否定する——それは、何故ですか？」

柔らかい、少女の声が響く。悲しげに顔を歪ませた少女に、男は溜息を吐いた。

「争いは争いしか生み出さない。争えば人が傷つき、血が流れ、命が消える。争いを制するために生み出した兵器は、この大地を汚染する。その汚染は広がり、いずれは世界が消滅する」

「ですから、我ら王は戦うのです。自分の勝利で争いを制し、領土を広げ、また新たな命を芽吹かせるのです」

「自分たちが汚した世界を放り出して、か？　なら芽吹いた命が再び領土を求めて争いを始めたら、どこを奪いあうというんだ？」

男の殺気に、女性が身構える。少女はぐつと唇を噛んだ。

「国は……王は、民がいるから成り立つものだ。民が今を幸福だと喜ぶなら国は繁栄し、逆に不幸だと嘆くなら国は壊滅する。それは当然のことだ。俺たち王だけじゃ、国は回らない」

刃を構え、男は続ける。

「この世界だって同じだ。俺たち王の数に比べて、民のほうが圧倒的に多い。俺たちは民によって支えられ、王を名乗ることを許されている。そんな民たちをわざわざ戦地へ送り、『死んで来い』、『殺し合え』なんて俺は、俺と兄は口が裂けても言えない。お前だってそのはずだ

……『冥王』イクス」

今回だつてそうだと男は内心で続けた。今、片割れの王と民は異世界へ逃げている。自分が残ると知った時、民は口々に言い出した。自分たちも戦わせて欲しい。自分たちが残ります。この命、今こそ返すべき時です……それを一喝したのも、この男である。

『ならお前たちが死んだとき——誰が我が兄を支えるというのだ！民なくしては、王も国も成り立たないとお前たちが良く知っているはずだ！』

そう。自分は間違つてなどいない。民を守るために、自分たち王が存在するのだから。

「残念です。刃王・アルティス……いえ、クオン」

燃え盛る炎の中で、屍兵器が動き出す。周囲を囲んだ兵器たちは、ゆつくりと距離を詰めていく。

その向こうに、クオン・アルティスは見た。忌わしい、巨大な船を。両目に大粒の涙を湛えた少女は、小さく唇を開き、身を震わせた。

「……あなたなら、あなたとなら……分かり合えると、信じていたのに……！」

切り替えられた意識が、異なる空間を認識する。青い空に浮かぶ白い雲。爽やかな風に乗って運ばれる、女性の声。振り返った男——クオン・アルティスに微笑んで、女性は彼の隣に腰を下ろした。

その光景を見ていた私は、唇を噛む。

男の笑みは、刀を振るう自分の師匠に。女の笑みは、自分の母——ひいては、自分によく似ている。

(これは、記憶なんだ……)

私の——私達の遺伝子に刻み込まれた、記憶。戦う理由とその代償、後悔を刻み込んだこの記憶は、血を引く子孫たちに永遠に受け継がれるもの。

『力の意味を履き違えるな。その力は破壊でも、争うためのものでもない』

防御力よりも機動性を追求した鎧を身に纏うクオンと私は向き合う。

『争いは争いを呼ぶ。説いた声は甘き幻想と蔑まれ、御すために得た

力は暴君と詰られる。何故か？」

……前に零さんが言っていたつけ。「力無き正義は夢物語、正義無き力はただの暴力」だと。

意見の衝突はいいことだと思う。この世界に生きる人は、誰一人として同じ人はいない。ならばこの世界に生きる人の数だけの意見があつて当然だ。

「あなたの『理想』と他の人の『理想』が異なっているから。そして話し合うことなく、その力をぶつけ合つてしまったから」

アルティスが望んだ理想は、「争いなく、領土を奪うことない平和な世界」ただ一つ。しかし当時の古代ベルカの現状はその理想とは程遠いものだった。それでもこの人は——この人達は世界に絶望することなく、自分の願いと役割を果たして、命を散らした。

いつか自分達と同じ思いを抱く末裔が生まれること、そして誰もが協力して作り上げる平和な世界を夢見て……。

『愛する者を守るために共に戦う、それもまた一つの道だ。だが忘れるな。力というものは意思一つで姿を変える。破壊と守護、両方に』  
「忘れるはありますがありません。もとより間違えるつもりもありません……私だって、秋月の人間なのだから」

反射的に言い返す。「誰かを守る自分になりたい」と願つて、私は強くなるうと誓つたのだから。

口調の厳しさに驚いたのか、クオンが眼を丸くした。しかし、それも一瞬のこと。肩を竦めたクオンの姿が、陽炎のようにかすんでいく。

——ああ、夢が終わる。

「……あなたは、幸福しあわせでしたか？」

そんな言葉が、私の口から零れた。答えは求めていない。こうして出来の悪い子孫の夢に出てきては導こうとする彼に、私にできることをしたい。不幸だったと嘆くなら、可能な範囲でその原因を取り除きたい。親孝行もろくに出来ない私が言うのはなんだけど。

薄れゆく彼は口を開かない。代わりに淡く、そしてどこか誇らしげな笑みを浮かべて——闇の中へと消えた。





『6月25日、午後二時になりました。お天気情報です。ミッドチルダ中央では今朝までの雨は現在上がっていますが、夕方から夜まで雲が多く、時折雨が降るでしょう』

女性のアナウンスを聞きながら、合流した私とエリオ、キャロはスバル達との待ち合わせ場所に向かっていった。

「でも、本当に久しぶりですよ。こうして会えるのは」

「そうだね。映像通信とかはするけど、実際会うのは……だいたい1年半振り？」

「ですね。中々お休みも合わないですし」

そんな話をしていると、クラクションが聞こえてきた。その方向を見るとヴェインテージカーに乗ったスバルとアルトが手を振っている。

久しぶりに再会した二人の成長に、スバルもアルトも驚いていた。エリオもキャロも背も伸びたし、顔立ちだって三年前とは違っている。エリオに至ってはスバルと頭半分も変わらなくなっていた。

……エリオが零さんを追い抜くのも、時間の問題かもしれない。

「深琴は背も髪も伸びたよねー。ぐっと大人っぽい感じ」

「そうかな……？ なるべく服装とかは気を使ってるけど……」

アルトの言葉に、私は首を傾げた。今年で17歳だから、年齢相応の服装を心がけてはいるけど……そこまで大人びているとかは思えない。

「さて……初日からマリングーデンもいいんだけど、今日はお天気良くないみたいだし……」

「あの場所は晴れた日の方がいいもんね」

海の上に建築されたレジャーランド・マリングーデンは、深海付近まで伸びた海中トンネルと海と湾岸部の景観を一望できる遊園地とイベントホールが並ぶ大型施設だ。陸地とは「アクアライン」と呼ばれる海底トンネルと海上橋で繋がっていて、道中の景観も観光名所の一つになっている。

紺碧の海を眺めるには、やはり晴れた日の方がいい。

「深琴さん、行ったことあるんですか？」

「うん。三回ほど」

「結構なりピーターじゃん！」

「そんなことないよ。内一回は同期生とプレオープンに招待されたっただけだし」

「というか、同期生の親戚(非局員)がマリナーガーデンの建設に携わったというので「友達とぜひ一緒に」という言葉に甘えて第一士官学校61期生Aクラス25人で参加したという話だ。」

残り二回は、完全なプライベート。アーウィング執務官と一緒にだった二回目。そして初めて両親と兄、私とで出かけた三回目。父と私の休みが偶然合う日があったため、両親共々ミッドチルダへ来て、一緒に出かけたのがつい2ヶ月前だ。アルトがまだ何か言いたそうにしているが、私はリピーターでは決していない。

「じゃあさ、ミッド湾岸部食べ歩きツアー！……とか、どう？」

「賛成です！」

「ぜひ！」

スバルの提案に、エリオとキャロが元気よく頷いた。育ち盛りの食べ盛り、すばらしい。もちろん私も異論はない。

「じゃあ荷物、後ろに載せちやおつか！」

言って、アルトが車のトランクを開けた。



「服飾強盗……ってあれ？ 深夜の」

「そう。E-37の衣料品店でね」

雨の中、軒先で港湾警邏隊とその指揮を取るギンガ・ナカジマと合流した秋葉は首を傾げた。昨夜遅くに発生した強盗事件の詳細データを、ギンガから受け取る。

「ショーウィンドウの破損と、衣類数点の窃盗。深夜で店舗や周辺を目撃者、被害者は無し……」

「監視カメラの画像も鮮明に残ってるわ。顔面上部にバイザー、ボディースーツ系の衣服を着用した175くらいの大柄な女性よ。盗んだサマースーツやブーツを着用してるかも」

「なるほどね……」

画像を切り替え、秋葉は息を吐く。そこには深琴から報告があった「マリアージュ」とほぼ同一人物と思われる女性が映し出されていた。「どこかに潜入でもするつもりかな？」

「ティアナはそう見てるわ。普段の姿だと目立つ場所なんでしょうね」

魔法文化が発達し、異世界との交流も盛んなミッドチルダは異文化の服装等にも寛容だ。とはいえ施設によってはドレスコードのようにある程度の正装が義務付けられているし、そもそも異世界からの渡航者は最初からその世界に合わせた服装をしてくるのが一般的である。

(……まあボディースーツだとしても目立ちそうなんだけど……)

内心でツツコミを入れて、秋葉はモニターを閉じた。

「警告、どこまで進みました？」

「リストの半分はなんとかね」

古代ベルカの遺跡研究機関や遺跡関連の骨董品ブローカー……結構な数を纏め上げたリストは、半分を消化したといえど喜べる数字ではない。むしろこの短時間でここまで調べ上げたという事実には驚いていた。

「アーウィング執務官からの提供もあったみたい。この間の案件、こちら辺が関係してたって話だし」

「あ、納得」

一人が駄目なら二人、それでも駄目なら三人で。三本の矢は折れにくい——という話を思い出し、秋葉は納得した。

「私も手伝います。ナカジマ捜査官、よろしいでしょうか？」

「ありがと、秋葉」

手伝いを申し出た秋葉は、リストを受け取って空を見上げた。

雨はまだ、止みそうにない。

## 05：火災、遭遇

降りしきる雨の中、誰かが呟いた。紅玉色の瞳に、炎を宿して。

「……急がないと、いけないな……」

◇

「んー！ これ美味しいねえ！」

「はいー！」

目の前のテーブルに、お皿が載せられていく。一枚、二枚……少なくても十枚はあるだろう。近所のテーブル席に座る客達が何事かという目でこの席に座る面々を見ていた。そんな視線を気にすることなく、渦中の二人——スバルとエリオは一枚、また一枚と皿を重ねていく。

「あ！ せっかくだから、もう一皿行つとこつか？」

「行きましょう！ ……すいませーん。これ大盛り、お代わりお願いしまーす！」

衰えることないそのスピードに、同席者は全力で「引いて」いた。

「いやー……相変わらずびっくりする程よく食べるねえ……」

「ねー」

アルトの呟きに頷いて、私は自分の皿の中身を片付ける。昔に比べて食べるようになったとはいえ、元から食べるスピードは遅い方だし、自分が注文したもので手一杯だ。

「たくさん食べるから、大きくなるんですかね？」

「キャラは真似しない方がいいと思うけどね……」

『……っていうか、その二人が異常なだけじゃないの？』

キャラの羨ましがな呟きを、アルトがやんわりと引き止める。信じられない様な声で会話に入ったのはフェアだ。ちようど休憩時だったように、彼も零さん特製の「おやつ」をつまんでいる。

「まあ最前衛と前衛だしね。出勤時のカロリー消費もそうだけど、普段から食べとかないと体がもたないんだって」

『へえ。っていうか師匠が滅茶苦茶目を輝かせてるんだけどどうすればいい?』

「放っておけばいいと思うよ。いつものことだし」

モニターの向こうから何か奇声が聞こえる気がするが、ここは無視に限る。そんな光景に目を細めていると、女性のアナウンスが入った。

『お客様へお知らせいたします。南部海岸ライン、ベルウィードホテル上層階にて大規模な火災が発生しております。本ビル内への延焼の危険はありませんが、南部海岸ラインをご利用予定の皆様は、どうかご注意ください』

その知らせに、このテーブルについている全員が口を閉じる。同時にレストラン利用客が小声で囁き始めた。

「近くで、火事?」

「海岸ラインのホテルって、あの黒くておつきな……?」

「高級ホテルだよ。確かその上層階って、会員制じゃなかった?」

「防災設備は五つ星のはず。何でそんなところで……」

エリオ、キャロ、アルトが情報を交換する。スバルは確かめるように呟いて、マツハキャリバーを呼んだ。同時に展開されたモニターに、この火災に関する情報が表示される。

「防災はもう出動してるけど……火災レベル、4!」

「大火災じゃん!」

そのモニターに映された映像——燃え盛る炎と防災担当の攻防——を見た私とエリオ、キャロは目を合わせて、頷いた。

「スバルさん!」

「手伝いに行きましょう!」

「うん! みんな、ごめん!」

ガタン、と席から立ち上がって、私たちは移動を始める。会計はアルトが済ませてくれるとのことなので、先に行かせてもらった。

『深琴。僕も行きたいんだけど、いいかな?』

「あー……そうだねえ……」

保護責任者である零さんの許可は既に貰っているし、法的後見人で

あるアーウィング執務官には移動中に、簡単に報告を入れれば大丈夫だろう。「前線での判断は無茶しない程度に任せる」つて言われてるし……うん、多分大丈夫。

「すぐ来れそう?」

『ついさつき、シスター・シャツハが戻ってきたところ。遅くても5分以内にはそつちに着ける』

「了解。それじゃあ、お願いできるかな?」

『うん』

音を立てて、モニターが閉じられた。

◇

「これはひどいなあ……」

言って、秋葉はベルウイードホテルを見上げた。上層部から上がる煙と炎。防災担当が慌しくも確実に、そして早い段階から消火活動しているにも関わらず、鎮火にはまだまだ時間がかかりそうだ。

「それじゃあ、行こうか。フリージア」

《Stand by ready. —Set up.》

蒼氷色の水晶をあしらったドッグタグが輝き、防護服とデバイスを展開する。そのまま一気に飛翔した秋葉は目を細め、送られてきた情報を確認した。眼下の地上では放水隊が突入しようとしては炎に妨害されている。

「フリージア、カートリッジロード」

《Load cartridge.》

カートリッジを一発ロードして、秋葉は自身の周辺に30発の魔力弾を生成した。素早い動きで炎に命中した魔力弾は瞬時に氷へと姿を変える。

しかしそれも一瞬のこと。凍りついたはずの炎が勢いを取り戻し、氷ごと飲み込んだ。

「……やっぱり、大本からじゃなきや無理かな……」

溜息と共に、秋葉は杖型のフリージアを掲げる。蒼氷色のミッドチ

ルダ式魔方陣が輝きを増した——瞬間、上層階に広がる炎が小さく煌いた。

「っ!？」

反射的に構えた左手に、蒼氷色の盾が展開される。盾によって侵入を阻まれたその異物は徐々に勢いを失い、同時に盾を解除した左手に音もなく落下した。金色に塗装された、拳銃に使用される実弾そのもの。

「質量兵器……物騒なもの使うのね」

銃弾をポケットに仕舞い、秋葉は凍結効果を組み込んだ砲撃を撃ち込んでいく。

——質量兵器はその性質上、子供でも簡単に使えることから時空管理局で厳重に管理・使用を禁止されている。そもそもミッドチルダやその他管理世界に関しては「比較的クリーンで安全な」純粋魔力を積極的に使用し、魔法文化を発展させていた。

とはいえ、その所持や使用に関しては時空管理局が正式に認可したものは別となる。例えば非魔導師の捜査官や執務官補などが、職務の都合で事件現場に向かう時の護身用として。

もう一つ——こちらは本当に稀な例だが——魔力を有してはいるが、その性質上「その武器でなければ」魔力運用が出来ず、デバイスで代替できない又は代替が非常に困難な場合に許可されることもある。前者の例は滅多にないが、後者はたった二名に適用されていた。

——聖王教会騎士団騎士の渡辺零と、双子の弟で時空管理局本局査察官の藤月彼方。とはいえこの二人が認められたのはその魔法術式がいまやレアスキル認定の「古代ベルカ式」であること。一応二人とも最初は専用デバイスを作るという話だったが、そのためのデータ測定の際に本局技術部が所有する計測用デバイスを全て破壊したという逸話を残している。計測用を破壊してしまう魔力を誇った当時彼らは9歳……同世代のエース達と並ぶ「怪物級」だ。

(となると犯人は質量兵器を所有する違反者か……マリアージュ本人、もしくは関係があるというなら古代ベルカ時代の兵器か……)

あるいは——一番あつてほしくはないが——管理局の認可を得た、

内部の人間か。

「いずれにしても、この状況を何とかしないとね……」

『霜月三尉!』

秋葉が呟くと同時に、この現場を指揮する司令部から通信モニターが繋がられた。女性通信士と顔を合わせることもなく、秋葉は砲撃を続けながら「状況は？」と尋ねる。

『火災レベルは4を維持。上層部は依然変わりませんが、下層部の内部温度が若干下がりはじめています。放水隊が先ほどから、協力者5名と共に突入を開始しました』

「協力者?」

『はい。この方たちです』

言って、通信士は協力者5人の顔写真をモニターに映し出した。全員に見覚えのある秋葉が、砲撃の手を止める。

『特別救助隊のスバル・ナカジマ防災士長。本局法務部の秋月深琴執務官補。自然保護隊のエリオ・モンディアル保護官とキャロル・ルシエ保護官。そして聖王教会のフェアクレールト・ナハト修道騎士見習い。最前衛はスバル・ナカジマ防災士長です』

「ナカジマ防災士長からは何か?」

『はい。外部の消火活動に関して、方法などは霜月三尉にお任せすると。それとこの火災が放火の場合、犯人がまだ近くに潜んでいるかもしれないから注意して欲しいと』

「了解しました。こちらは消火活動を続けます。放水隊の位置情報、送ってもらえますか?」

『了解です』

即座に返ってきた情報を確認して、秋葉はデバイスを構え直した。(……確かに。この5人なら余程のことがない限り、犯人と問題なく渡り合える)

なら、自分は自分に出来ること……課されたことをすればいい。

「行くよ、フリージア」

《Yes, Sir.》

蒼氷色の翼を広げ、秋葉は砲撃を再開した。





未だ消火活動が進まないベルウィードホテル内部に突入した私達は、スバルの指示に従って行動を開始していた。

エリオとキャロは放水隊の防護先導。私とフェア、スバルはそれぞれ別れて人命検索と救助。火災探知などのシステムは稼動しておらず、当然のことながらスプリンクラー等も止まったままだ。事前に受け取ったホテル内の地図と生命反応を確認して、逃げ遅れた人を探す。現在私がいるのはホテル26階。ここからがいわゆる「上層階」である。衰えることを知らない炎は更に勢いを増し、エレベーターと階段を吹き飛ばした。

「っ……っ！」

熱を孕んだ爆風をバリアで阻害するも、汗は止まらない。ちゃんと防護服の耐熱設定は更新しているんだけど、温度上昇と速度がそれを上回っている。

(階段とエレベーターの爆破に、所々で確認できる黒い燃焼液……計画的に準備していたと見る方が自然、か)

階段とエレベーターの爆破は標的を逃がさないためと、こちらの行動を阻害するため。爆破系特化の魔導師か質量兵器を持った違法者か……あるいは、マリアージュか。

と、腕輪型のモード・ツヴァイで展開していた愛機・ローゼンクラウンツが生命反応を感じた。

《buddy!》

「生命反応……距離は結構近いね。急ぐよ、ロゼット」

《All right.》

26階に設置されている会員専用とされるホテルラウンジ。大小様々なシャンデリアが飾られた高い天井。面する海を一望できることから生命反応が確認された。もちろん周辺は火の海で、頭上のシャンデリアが揺れるたびに恐怖に襲われる。なんでこんなところにシャンデリアなんて使うんだか。

ひとまず息を吸って、「管理局です！」と声を出そうとしたその瞬間だった。

中央に設置された、一際大きなシャンデリアを繋いでいた鎖が音を立てて自壊する。支えを無くしたシャンデリアがそのまま下へ——小さな女の子の真上に落下を始めた。揺れ動く影に気づいた女の子は顔を上げて、虚ろな目で状況を確認する。

——ああ、死ぬんだ。幼い自分の声が蘇る。

「ロゼット！」

《Drive ignition》

淡紅色の鎖がシャンデリアを押さえつけ、その隙に女の子を抱いて飛翔する。安全圏まで逃げたところでバインドを解除し、シャンデリアを落下させた。

「遅くなってごめんね。もう大丈夫だよ」

恐る恐る目を開けた女の子に、私は微笑みかける。無残にも床に破片をばら撒くことになったシャンデリアと私を交互に見た女の子はようやく安心したのか、くしゃりと顔を歪ませた。栗色の長い髪はぐしやぐしやで、上質そうなワンピースは所々が破れている。翡翠色の瞳には涙が溜まっていた。

「どこか痛いところ、ある？」

「……大丈夫、です……」

「よかった。よく頑張ったね。偉いよ」

名前と年齢を聞きだし、残るは脱出だ。にこやかに告げた私は、次の瞬間に動作を止める。……どこから脱出しようか。

来た道は既に炎で覆われているから、危険。かといって非常口まで進むのも同様の理由で困難だ。……無いなら作るしかないんですけども、と考えると同時に通信モニターが開かれた。

『秋月執務官補、ご無事ですか!?!』

「はい。何かありましたか?」

『先ほど本局のランスター執務官が突入されました……もしかしたらこの火災を起こした犯人が、執務官が追っている事件の犯人と同一人物かもしれない、と……』

「なるほど……こちらは無事です。26階中央ラウンジで女の子を一人保護しました。アイリ・クレスタ、8歳です」

モニターの向こうで安堵の溜息が聞こえる。どうやら関係者がいたらしい。こちらで発生している問題と個人的解決策を伝えると、二つ返事で了承が返ってきた。大丈夫だろうか、この組織。

「ちよつと待っててね。——ロゼット」

名を呼ぶと同時に、愛機は即座にバリア系の防御魔法で少女を覆う。次にロゼットは第二形態——二丁の拳銃型に姿を変えた。そして私は、輝一つ無い巨大な窓ガラスに向かい合う。距離にして、約100m程。このホテルの窓は全て衝撃や熱に強いタイプのガラスを幾重にも重ねる形で採用しているらしい。ここより更に上の階ではさすがに割れているという報告を受けているが、それでも並大抵の砲撃は通らない。

《A firing lock is cancelled. Load cartridge.》

左手に構えた銃のリボルバーが一発分動く。右手の銃はダガーモードに変形させ、そのまま下ろした。

足元には淡紅色のベルカ式、左の銃の銃口には同色の環状魔方陣が浮かび上がり、輝きを増していく。銃口の先に8発の魔力スフィアが形成され、その全てを一つに纏め、魔力を練り上げた。

「クロスファイア……」

カチリ、と音を立ててセーフティが解除される。

「シューーーート！」

音声トリガーと共に発射された淡紅色の砲撃が、迷うことなく直進した。窓ガラスに直撃して——溶かすように消し飛ばしてしまう。

「……あー……やり過ぎちゃったね」

《Because it is an emergency, I'll have overlook.『緊急時ですから、大目に見てもらいましょう』》

「そうだね……ともかく、これでもう安全な場所まで一直線だからね！」

しかし機動六課を卒業してから三年、計四年間の付き合いだが、この愛機も言うようになった気がした。

少女を抱き上げ、飛翔して脱出する。火の勢いはやや弱まりつつあるのか、内部のあちこちで放水隊が動いていた。最寄の救護隊に少女を預け、再びビルに戻ろうと飛行した瞬間、フェアから通信が入る。

『こちらフェアクレールト。深琴、マリアージュを見つけたよ』

「今どこ？ 誰か傍にいる？」

『ホテルの屋上に続く階段。ティアナが一緒……深琴は？』

『海沿いの救護隊。要救助者を保護して、預けたところ』

答えると、フェアは『だってさ』とやや上を見て言った。恐らく、ティアナがそこにいるのだろう。

『ティアナから。時間稼ぐから上がってきて、三人で挟み込むってさ』  
「了解。すぐ上がる」

モニターを閉じ、私はそのまま屋上へ飛翔した。

◇

未だ炎が燃え盛るベルウイードホテルの屋上に、バイザーを着けた女性が佇んでいた。

「イクス……今、マリアージュが参ります」

その声に、答える声は無い。しかし突如響いた機械音声と共に現れた茜色の縄が、彼女を捕らえた。

「これは……捕縛魔法……」

「無駄よ。そのロープは力じゃ解けない」

銃を構えて、ティアナが言う。その半歩後方ではフェアクレールトが拳銃型に変形させた愛機・アインザッツを構えていた。

腕に力を込め、縄から抜け出そうとしながら女性は呟いた。

「どうやら、その様です」

「マリアージュ。連続放火殺人の容疑で、あなたを逮捕する。動けないとは思うけど、抵抗するなら撃ちます」

その言葉を聞きながら、マリアージュは力を抜く。

「成程……これでは、私に脱出の手段はありませんね」

「賢明な判断よ。大人しくしていれば、あなたにも弁明の機会が……」

「——ですが、マリアージュが虜囚の辱めを受けることはありません」  
「っ、ティアナ！」

ティアナの言葉を遮って、マリアージュは続けた。フエアがティアナの前に出ると同時に、マリアージュの腕が破裂する。そして彼女の体は液体と化していった。

「トレディアの居場所と、イクスに向かう手掛かりは掴めました。私  
がここで朽ちても、僚機たちが探し当てます」

（この色、この匂い……まさか……）

ティアナは目の前の現状を見つめながら、機動六課より前に所属していた部隊で得たデータを思い出す。その条件に当てはまる液体の名称を思い出して、顔を青ざめた。

「……マリアージュは壁の兵。死したその身も、敵地を焦がす炎となる」

（——燃燒液!?!）

「二人とも、逃げて！」

屋上の空に到着した深琴が叫ぶと同時に、液体となったマリアージュに炎が引火する。炎は次の瞬間には燃え盛り、轟音を立てて爆発した。

「ランスター執務官！」

聞き慣れた声と靴音が響き、ティアナは意識を取り戻す。そして自分に覆い被さるように倒れたフエアを抱き起こした。

「フエア、大丈夫!?!」

「……っ……」

防護服の外装を失い、インナーから露出したフエアの肌には火傷の痕と爆発の衝撃で受けた傷が広がっている。

「ご無事で……肩を」

「私は大丈夫。それより……ルネ、聞いてくれる?」

駆け寄るルネツサを制止して、ティアナは真っ直ぐな目で彼女を見た。

「マリアージュなんだけど……捕まえたと思ったら自爆しました。死体は黒い液体となって燃えている……って言ったら、信じる？」

「ランスター執務官の仰ることでしたら、信じます」

ルネツサが頷く。迷い無く、真っ直ぐに。

「ですが、これで連続殺人は止まるのですよね？」

「……多分止まらない。もっと大きな事件になる」

ルネツサが目丸くする。ティアナはフェアに治癒魔法をかけながら、マリアージュが残した言葉を思い出した。

「マリアージュは、自分を兵隊だと言った。それに僚機がいる、と」

「僚機……仲間か、あるいは……」

「マリアージュは、他にもいる」

そう呟いて、ティアナはもう一度ルネツサを見て、指示を飛ばす。

「ルネ、急いで調査班を呼んで。マリアージュの残骸を回収、技術局に回す」

「はい」

「それから……『トレディア』と『イクス』。聞いたことは？」

「いえ……」

ルネツサは首を横に振った。僅かに瞳を伏せ、どこか寂しそうな声が響く。その様子にティアナは僅かに目を細め、指示を続けた。

「データベースの照会。必要があれば本局データと、無限書庫のもの」  
「了解しました」

走り去るルネツサを見送って、ティアナは通信モニターを起動させる。相手——深琴はワンコールで出た。

『二人とも、大丈夫!?』

「私は大丈夫。フェアが庇ってくれて……」

フェアが庇って、という一言に目を丸くした深琴は『そっか……』と消え入りそうな声で呟く。

「でね……マリアージュなんだけど、提供されたデータと同一人物と言っても過言じゃないみたい。今ルネ……臨時補佐に残骸の回収を指示したわ。技術局に回す」

『うん』

「多分この後、私も108に行くことになると思う。一緒にフェアも連れて、治療を受けてもらうけど……」

『了解。治療が終わったら連絡くれると嬉しい』

いくら協力の意思があり、実際協力したとは言え、まだフェアは観察処分期間の真つ最中だ。保護責任者や後見人、もしくはそれに準ずる関係者なしの行動は許可されない。

そしてティアナは、もう一度口を開いた。

「色んな情報が判明するのは夜だと思うんだけど……深琴。あんたさえ良ければ、臨時補佐を頼みたいの。アーウィング執務官には、私から報告するから」

『……一応、許可貰ってるよ。じゃあ私も、108に行った方がいい？』

「それは明日以降でいいわ。今日は一先ず、情報整理をお願い」

『了解です、ランスター執務官。……一旦切るね。消火活動、まだ続いてるし』

「ええ。ありがとう、深琴」

『どういたしまして。フェアのこと、お願いね』

音を立てて、モニターが閉じられる。それを確認して、ティアナは息を吐いた。

——深い、深い溜息を。

## 06：探すべきもの、それぞれの夜

夕方。ベルウィードホテルの火災はあれから無事、鎮火した。防災担当や捜査官が現場調査を始め、解散の指示が出された私とエリオ、キヤロは一先ず解散。犯人——マリアージュの自爆からティアを庇い負傷したフエアは、スバルの口添えもあって湾岸特別救助隊の医療班に引き渡され、治療を受けている。古代ベルカ王族が遺伝子レベルで受け継いだ、「鎧」に等しい身体強化と防衛機能。傍流とはいえ聖王の血を引く人間を基に生み出された彼も、もちろんこの能力を所有している。そのためか、火傷などの傷は「見た目の割にはたいしたこと無し」らしい。しかし念のため今日一日は安静だ。

見舞い兼監視は、零さんの双子の弟である藤月彼方査察官が引き受けてくれた。ちょうど火災の初期対応した部隊の内部査察の途中だったらしいが、火災対応のため中断。「やること無いし、家が北部のベルカ自治領近くで戻るのも面倒だから」と二つ返事で了承してくれた。

『トレディアとイクスカ……聞き覚えはないね』

所変わって、クラナガンに建つマンションの一室。執務官の自宅だ。包丁片手に私は、モニター越しに彼方さんの言葉に「そうですか」と頷く。その後ティアが送ってくれたデータにあった、マリアージュが探しているらしい『トレディア』と『イクス』という単語。

「私が交戦したマリアージュは、『イクス』の在り処を探してたんですけど……」

今回現れたマリアージュは「トレディアの居場所と、イクスに向かう手掛かりは掴めた」と言っていたらしい。

『聞いた感じだと……トレディアはマリアージュからイクスを奪い、隠して逃げたって感じだね。隠し場所はトレディアだけが知っている。だからマリアージュはトレディアを追って、イクスを確保したいと考えている、と』

「イクス……」

あの日——初めてマリアージュと交戦した日から見る夢。どんな



に短い、微睡みの中でもあの光景が蘇る。黒と赤で彩られた世界。マリアージュらしき人物と戦っている自分の祖先。クオン・アルティスそして彼に「冥王・イクス」と呼ばれた少女……。

その事を伝えると、彼方さんは目を細め、厳しい表情を浮かべた。しかしそれも一瞬のこと。次の瞬間には彼方さんは気まずそうな、気遣わしげな表情を浮かべる。

『普通に考えたら分かることだけど、深琴ちゃん達——秋月の家は、クオン・アルティスの遺伝子をそのまま受け継いでいる。当時の地球に遺伝子操作技術があるわけないから、当然なだけ……僕や楓姉さん、咲夜姉さん……それに兄さん以上に、刃王アルティスの直系だと言われても過言じゃないからね。そういう夢……とか記憶を引き継ぐのは無理も無いよ』

私が祖先の出自——ひいては連なる親族の現状を知ったのは、三年前。機動六課を卒業して、アーウィング執務官の補佐について初めて担当した事件でのこと。とある世界にある古代ベルカ時代の遺跡が、集団による盗掘を受けていた。犯人グループの中には違法魔導師が多数確認されたため私達と呼ばれたのだが——その遺跡はアルティスの人間に作られたもので、中央に行けば行くほどアルハザード提供と思われる対侵入者用トラップやAMF発生装置が未だ稼働していた……とか解除できず、研究員ですら近づけない状態だ。

対魔導師用のトラップはご丁寧にも「遺跡製作者一族以外のリング執務官に反応して攻撃。一方古代ベルカ関連のため急遽呼び出した零さんと私には反応せず。ついでに事件後に受けた遺伝子検査の結果、私と零さんの遺伝子が「親戚レベル」で酷似していたこと——ここでようやく、「私もアルティスの血を引く人間だ」ということを零さんが話してくれた。

外見的特徴は、黒い髪に黒い瞳。身体的特徴には「1%でも魔力が残っていたら傷を治療できる」こと。零さんや彼方さん達は操作を受けた遺伝子を可能な限り「普通に」戻した一族で、最低限の魔力で古代ベルカの秘技『剣閃』を扱うことに特化したタイプ。

一方私や伯父、兄——秋月の人間は、クオン・アルティスが保有する遺伝子の殆どを受け継いでいる。クオンが地球に漂着した当時に遺伝子操作技術があるわけがない。

聞いてすぐは納得できなかったけれど、よくよく考えてみれば私と零さんには少なからず共通点がある。それに零さんがこのことを黙っていたのは、私のためだった。六課に入ってから一年間で強くなったとは言えど、零さんから見た私はまだまだ未熟者。

それに、判明したことで私が何らかの義務を背負い、不利になるということはない。……まあそれでも、私よりも先にアーウィング執務官が知っていたことには驚いたけども。

「できるなら、もっと早くから夢に出て来いって感じですけどね」

『あはは。だって僕たちのご先祖だよ？ 無理だつて』

さらりと笑顔で、彼方さんは一蹴する。——ああ、やっぱり零さんの弟だ。

モニターを閉じると同時にタイマーが作動して、鍋を温めていた火が止まる。中身はブラウンソースのシチューだ。先ほどキャロから教えてもらった、保護隊でも人気の料理らしい。ブラウンソースで機動六課風の味付け。機動六課の隊長陣が日本出身ということもあってか、六課では和風の味付けが好まれていた。夜と翌朝、残しても大丈夫なようにパンやサラダも用意している。

（買い物した。掃除した。ご飯は温めるだけだし、お風呂の準備も出coming……よし、全部できた）

指折り数えて、私は確認する。

——ティアの指示で解散後、私とエリオ、キャロはスーパーで買い物をしていた。スバルは残って協力するということなので帰宅も遅くなるだろうから、自分たちで夕食を準備しておこうと。私も本当はそのままスバルのマンションに行く予定だったのだけど、まだ執務官が帰宅していないこと、そして記憶が正しければ冷蔵庫の中身が空っぽに等しかったことを思い出し、一人別行動をすることになった。というか、つい昨日まで異世界に出張していたのだから、冷蔵庫に中身が入っているわけが無い。思い出してよかったと内心で冷や汗かい

たことは内緒だ。多分中身が無いなら無いで、あの人は放っておくだろうけど。この辺り、似た者同士なんだよなあお前ら、と零さんの言葉を思い出す。

メモを残し、マンションを出る。時間は19時。スバルとティア、まだ仕事かなあ……。



「さて、と……」

通信モニターを閉じた彼方は、目の前のベッドで眠り続けるフェアを見た。古代ベルカ王族の血を引く人間にとつて、火傷などはどうということはない。自分や零、深琴の様な人並み外れた回復力を持つ肉体でも痛みは感じるし血も流れるが、それは同時に「自分たちがまだ人間の枠から外れていない」という僅かな安心感をもたらしている。聖王統一戦争で名前が挙がる聖王や霸王達王族に比べたら、だいぶまともな人生を送ってきた。

『過度な力は争いを呼ぶ。しかし力がなければ、何一つ、誰一人守れない』

だから自分や零達——ゼロ・アルティスは子孫にその遺伝子の殆どを受け継ぐことを許さなかった。最低限の魔力と『剣閃』で充分だと。そして彼はクオンの生存を信じて疑わなかった。彼や彼の子孫と自分達が手を組み、背中を預けることができれば敵は無い。

手にした刀が折れぬよう、心の刃が絶てぬよう鍛錬に打ち込んだ日々は、遠い昔の話。

「気分はどう？ フェア」

「……あ、やっぱりバレてた？」

片目を開けて、フェアは彼方を見る。フェアの無邪気な様子に彼方は肩を竦めて微笑した。

「まあね。具合は？」

「運ばれてすぐに比べたら大分良好。面倒だから痛覚は遮断してるけど」

「あー、それ、僕もよくやってた。どのくらい回復したか分かんなくなつて、動いて傷開いたことあるよ」

「へえ」

聖王教会に保護されてからの彼は、元来の無邪気さや素直さを発揮して修道騎士見習いとして目覚ましい成長を見せている。既に完成された戦い方と、それを活かす為の勉強も苦に思わないらしい。セイン、オットー、デイドと並んで、年配の信者からは孫の様に可愛がられているとか。

(兄さんがウザいほど自慢してたっけ……)

とはいえ自分達が保護した人物がこうして他人に受け入れられているという事実は、純粹に嬉しい。

そして保護した人物が、これまででは到底想像できないような——例えばフェアが今日、爆発からティアナを庇った様な——行動を自然と取れるようになったということは、関係者に準ずる者として誇らしい。

「……みんな、心配してた？」

——そして、こうして他者の気持ちを察して案じることも。

「ちよつと席外すね。大人しくしている様に」

「はーん」

まあ一步でも動けば即座に拘束できるようトラップを仕掛けてはいるんだけど、と彼方は内心で呟いて医務室を出た。6月の終わりとはいえ、20時を過ぎれば空は闇色に染まる。食堂で二人分の注文をしていると、彼方の耳にある言葉が聞こえた。

「——それでもやはり、自分からすれば夢の様に平和な世界に感じます。食料と友愛がそこら中に溢れて……絶望なんか見当たりません」  
小さく、どこか冷たさを感じさせる声。その声で紡がれた言葉に、相対していたティアナ・ランスターは「ぐうの音も出ない」と肩を落とした。声の主——ルネッサ・マグナスの表情は、氷の様に冷たい。「じゃあ、『幸せ』の定義って何なのかな？」

口を衝いて出た彼方の言葉に、ティアナとルネッサは目を丸くして彼方を見る。二人の視線を集める彼方にいつもの笑みはなく、ただ瞳

を細めるだけだった。

「彼方さん……」

「確かに戦場に比べたら、ミッドチルダは平和だね。食料もある、文字も読めるし書ける。みんな親切だし、法に背きさえしなければ一定以上の生活が出来る。なら何で人は犯罪を起こし、争って、人を傷つけるんだらうね？」

空いていた椅子に腰掛けて、彼方はルネツサを見る。口調は穏やかそのものなのに、表情は伴っていない。敵意さえ感じられる。いつもの彼からは想像つかない状況に、ティアナは口を閉ざした。

「でもこの平和ってさ、大勢の人が一生懸命創り上げたものでしょ？」

「これまでの人たちの意思を受け取って受け継いで、繋いでいく。——その努力もしないで絶望がどうか言わないでもらえるかな？」

「……それでも、あの世界に比べたら……ここは、夢みたいの世界です」

「戦争の話を聞くたびに思うよ。人を殺すことは子供だって出来る。ナイフや銃、魔法……時間はかかるけど素手でも殺せるか。でもそれよりも、話して理解しあうことのほうが簡単じゃないかなって思うんだ」

絶望を絵に描いた場所でも、平和への希望を抱く人がいる。同時に平和を絵に描いた世界でも、世界への絶望を抱く人もいる。

「言葉にした思いは受け継がれるよ。平和のありがたさ、戦争の愚かしさ……百聞は一見にしかずとは言うけど、人の口から語られる争いの経験ほど、衝撃なものはないよ」

争いを嫌い、殺害を拒み——それでも守るべき者のため戦地に身を置き、侵略者の血で刃とその手の平を濡らした自身達の祖先。その背中を見ていた彼らの民は、王と同じく争いを嫌った。

「争えば血が流れ、大地が汚れ——人が死ぬ。その怒りと恨み、嘆きはまた争いを呼び、血を流し、人を殺す。始められた争いを止めるには力で制するしかないかもしれない。……でも始まっていない、芽吹いていない種なら——誰も傷つけることなく、殺すことなく刈り取れるんじゃないかな」

「……いずれ記憶は風化します。その時は？」

「風化させないよう、記録を残す。それも破壊されるというのなら——これは僕個人の意見だけど、そいつらは争う事で得られるものが欲しいんだよ」

言うだけ言って、彼方にはにこりといつももの笑みを浮かべる。

「ごめんね、勝手にぐだぐだ言っちゃって」

「い、いえ……こちらこそ、分を弁えない発言でした。ランスター執務官も……失礼いたしました」

「いいのよ。気にしないで」

和らいだ空気に安心したのか、ティアナがそつと息を吐いて笑った。二人の光景を眺めていた彼方は、注文が出来たと告げる声に返事をして立ち上がる。

『生きてたら——その意思があればやり直せるって、教えてくれたから』

フェアが聖王教会に引き取られることが決定した日。立場上では無理だと分かっていたいながらも、彼方は反対の立場にいた。

確かに彼もまた被害者だ。けれど同時に加害者でもある。いくら洗脳に等しい状況に置かれていたと言えど、簡単に許してしまえば局内には少なからず反発者が出るだろう、と。

そんな自分と面会したフェアは、「何故引き取られることを良しとしたか」という質問にそう答えた。

『その人は自分が怪我をしてまでも、僕を助けようとしてくれた。迷っている僕に手を差し伸べてくれて……まるで自分のことのように心を痛めてくれた。思い一つで、きっかけ一つで変わるんだって聞いて、思ったただけだよ。』もう二度と、この人を悲しませたくない  
“ っ ”

罰せられて当然の自分に差し伸べられた手。その手を取りたいと——変わりたいと願ったのなら、手を伸ばしてくれたことを後悔させないようにと。

(なら、僕にできることはその子達を見守って……はぐれないように道を教えることだけだしね)

さしあたっての問題は、一連の事件を起こしたマリアーヂュが捜し求める、『トレディア』と『イクス』の情報だ。いくら深琴でも、「夢で見た」なんて言葉で受け入れられるはずが無い。

(でも無限書庫は行つてすぐ帰れる場所じゃないし……)

二人分のトレイを両腕に乗せて、彼方は歩く。その脳裏に一人の少年の顔が浮かぶまでは。

(……そうだ。静真君なら……最近レポートが忙しいとか言つてたし)

間に合うならば事件後にレポートを手伝うとして、捜査協力という形で許可してみようか。そんなことを歩きながら、彼方は少年・秋月静真に送るメールの文面を、鼻歌混じりで考えていた。

## 07：無限書庫&共同調査

——無限書庫。時空管理局が管理する世界の情報全てを集めた最大級のデータベース。当然規模が広く探すのには手間取るが、それでもここでなら何かしらの情報は入る。逆に言えばここで手に入らない情報が存在したとしたら、それはその世界に乗り込まないと発見できない——とは誰が言ったものか。

上に広がる無重力にも似た空間に、秋月静真は溜息を吐いた。

（だからってなあ……俺程度の検索魔法で見つかるわけないだろ……）

朝一で無限書庫に籠っている静真は、牡丹色に輝くベルカ式魔方陣を展開する。ミッドチルダでも屈指の難易度を誇る大学に入学して三年目。最初の一年はハイレベルな講義と自分の後ろ盾への嫌味でストレスを溜める毎日を送っていた。ちなみにそれを妹につい漏らしたところ「じゃ、ちよつと殺つてくるね」と歌う様に軽やかな声でマジレスされたことは心に深く仕舞っておく。その後何だかんだでオール優で全単位を履修した二年目では嫌味も格段に減り、前期の時点で目当てのゼミの教授から声がかかり始めた。レポートに必要な資料を探すため、検索魔法を覚えたのもこの頃である。

一応は秋月の人間である静真にも、リンカーコアは存在した。それも、かつては高校の後輩である秋葉に「魔力資質ゼロ」と言われたが、一般的に見たら割と高いレベルの魔力を秘めて。しかし現役教官の伯父と15歳で空戦S+ランクを取得した妹に比べると、訓練開始の遅さと期間の短さからか、まだまだ見劣りする面が多々あった。今年の春に初めての魔導師ランク試験を受けたが——取得したのは陸戦D+。一般局員と大差ない。

それでも遅くないと、学業と両立できる範囲でもやりこめばそれなりのレベルには必ず到達する——というのが妹・秋月深琴の元上司にして戦技教導隊のエースオブエース、高町なのは教導官の感想だった。

と、そんな話は横に置いておくとして。検索魔法が条件に基づいて



検出した書物を探し回る。読書はまったく苦にならない静真でも、さすがにこれだけの量の書物は見えていて気分が悪くなる。一時期は染髪などはあったが、根は真面目な男。学業もスポーツもそつなくこなしてきた。基本的に勉強も運動も苦にならない——そこら辺は、彼も秋月の人間ということである。

仕切り直しとばかりに、静真が溜息を吐いた直後だった。資料探しに悪戦苦闘する知り合い——執事服を纏った少女の背中を見つける。「何してんだ、オットー」

「あ……静真さん」

おはようございます、と頭を下げたオットーが手にしている古代ベルカ関連の本を見た静真は「あ、調べ物か」と一人納得した。そして次の瞬間、「調べ物以外でここに来る人間がいるかつ！」と内心で一人ツッコミを入れる。

「少し、調べ物を。静真さんは？」

「俺も調べ物だよ。来月頭に提出するレポート、内容は決めたんだけど、中々資料が見つかんなくて」

「それは大変ですね。大学の方は？」

「全然。研究室にも無くて、教授に『無限書庫くらいにしかないんじゃないか？』って言われてさ。……管理局の施設を利用するには許可がいるつつうのに」

例外は聖王教会や自然保護部隊など管理局と協力関係にある組織や下部組織所属の人間だ。「妹の元上司の友人」で、これまでも何度か資料探しに協力してくれた司書長のユーノ・スクライアならば二つ返事で許可してくれたが、今日は彼はオフシフトのようだ。代わりに受け付けた局員は明らかに局員ではない静真の姿を見て訝しげに、そして刺々しく「何か御用でしょうか？」と告げたのはつい先程の話。

しかし今日はレポートとは別の資料探しも目的だった。起床してすぐ送られてきた、彼方からのメールには、最近ミッドチルダ地上で発生している連続殺人、放火事件に関するキーワードが添付されていた。『トレディア』と『イクス』……機材か人物か、それすらも分からないこの二つの単語を調べて欲しい。必要なら根回しもするから、よ

ろしく——。相変わらず人使いの荒い人だ。

「つってもなあ……『トレディア』はともかく、『イクス』は聞いたことねえつてのに……」

「っ！ 静真さん、それって……知ってるんですか!？」

ぽつり、と零れた静真の眩きに、オットーが目を丸くする。それと同時に、書庫の入り口付近が騒がしくなった。

「あー、ヴィヴィオ。おはよう」

「おはようー、ヴィヴィオー」

「おはようございまーす！ オットー、来たよおー……あつ！」

紅と翠のオツドアイをもつ少女——高町ヴィヴィオが、慣れた動作で待ち人の隣まで移動する。その途中待ち人であるオットーの近くにいた静真の姿に、ヴィヴィオは目を輝かせた。

「静真さーん！」

「おー、ヴィヴィオ！ 久しぶりだなあ」

よしよしとヴィヴィオの頭を撫でて、静真は笑う。静真の実妹・秋月深琴を姉と慕うヴィヴィオは、彼にとつてもう一人の妹のような存在だった。深琴と仲睦まじい「兄妹」として過ごしていた期間が長くなかった静真のヴィヴィオへの構い方は、実妹をして「自分を慕う年の離れた従妹、すなわち兄馬鹿ならぬ従兄馬鹿」と評されるが、その事実を彼は知らない。

「で、静真さん。さっきの話なんですが……」

「ああ、『トレディア』と『イクス』のことだよな？」

「え？ 静真さんも知ってるんですか？」

検索魔方陣を展開しながら、ヴィヴィオが首を傾げる。無限書庫名物、現役小学生司書の肩書きを持つ彼女は、自称「普通の小学三年生」だ。聖王のクローン、ゆりかごの鍵として生み出された過去を清算し、人として遜色ない生活を送っているとはいえ——静真の中で「普通」の定義が揺らぐ。普通の小学三年生は確かに「陛下」と呼ばれることを嫌う……というか呼ばれることすらないとは思っただが。

「知ってる、って言っても名前だけだぞ。詳細を調べるためにここに来たわけだし……俺が知ってる『トレディア』は人物だよ」

言って、静真はモニターを展開する。

『トレディア・グラージェ』。オルセア解放戦線の活動家……でもその行方も、生死も不明。現にオルセアは今でも内戦続きで、政府は管理局の介入を硬く拒んでいる。俺が知ってるのは——というか、資料で判明しているのはこれだけだ。マリアージュのマの字も出てきてねえし……俺の検索魔法の展開は四式が限界だし」

「あはは……でも、これじゃあ確かに絞込みが難しいねえ……」

「条件は、ロストログアや兵器関連で探して欲しいと」

オットーの口から告げられた条件に、ヴィヴィオは肩を竦めた。「また物騒だね……」と眉を顰める。その様子に、オットーは苦笑を浮かべた。

「ランスター執務官からのご依頼ですから」

その一言に、ヴィヴィオは動きを止める。

「ふえ？ ティアナさんから!？」

「言っていないませんでした？ そうです」

「早く言おうよー！ あ……もしかして、深琴お姉ちゃんも!？」

「あー……何か巻き込まれたついでに臨時補佐についた、とは聞いてるけど……」

詳しいことは静真も聞いていない。というより深琴が事件に巻き込まれたとか臨時補佐云々の件は彼方からもたらされた情報である。知り合い二人が——ひいてはそれ以上の人数が関わっていることを知ったヴィヴィオが、悔しそうな表情を浮かべた。しかしそれも一瞬のこと。思考を切り替えたヴィヴィオは「よーし!」と愛らしく気合を入れた。

「オツケーー！ 高町ヴィヴィオ、全力全開で調べちゃうー!」

「お願いします」

「ルールーから頼まれてる資料もあるし、さくつと見つけるよー。……検索魔方陣七式、展開!」

宣言と同時に、虹色の魔方陣が展開される。次いでヴィヴィオは、検索条件を指定した。

「指定エリア、BCベルカから現在のベルカ自治区まで。本文含み、全

文検索」

「おいおい、かなり重いだろそれは」

「大丈夫ですか？」

「朝ごはんしつかり食べてきたし、大丈夫。オットーと静真さんは、出てきた本の確認をお願い」

言つてヴィヴィオは心配しきりの静真、オットーに笑顔を見せる。

そしてしつかりと前を見据え、ヴィヴィオは検索開始を命じた。

「フルドライブ……オープン！」

◇

早朝、ミッドチルダ湾岸部のマンションの一室はスバルの部屋。キヤロと並んで台所を占領した私は、朝ごはんを作っていた。昨夜にエリオが作ったパンの種の残りを焼いてチーズとハムを挟んだパニーニと、野菜と鶏肉を挟んだサンドイッチに。おかずはプレーンオムレツと温野菜の添え物。他にもツナとパスタのフジツリに軽く火を通したシソをオリーブオイル、塩、胡椒で和えたサラダに野菜たっぷりのスープ……。

「ほんと……スバルもエリオもよく食べる人だからいいよねえ……」  
「ですね。どれもおいしそうに食べてくれるから、作り甲斐ありますし」

朝っぱらから大量の食事を作りながら、私とキヤロは笑う。それでも手は止まらないのだから、料理を習つてよかったと心底思った。零さんと母さんに感謝しなくては。

「そうだ、深琴さん。昨日の火災のことなんですけど……犯人って、ティアさんが追っている事件の犯人と、同一人物なんですよね？」

「うん。一昨日、私が遭遇した人物と同一人物と言つても過言じゃない。多分、マリアージュは……」

人語を解し、命令に忠実だがお世辞にも高いとは言えない作戦遂行能力。死ぬためだけに生み出された壁の兵。そして500年以上は昔の『記憶』と寸分違わぬその姿。その名称は、現在コーラス・アル

ザス地方に伝わる「祝福」や「婚姻」とは180度異なる意味を秘めている。

『人形』……マリアージュは、古代ベルカが生み出した機械兵器だと思おう」

古代ベルカの時代、兵器関連の技術はあのアルハザードから提供されたと言われているほどの代物だ。マリアージュのような機械人形を生み出すことは容易い。

心配そうに私を見ていたキャロに微笑んで、私はフライパンを振る。

「フオワードが5人揃って、アルトやギンガさん達だっている。フェアや彼方さんだって手伝ってくれるし、ナカジマ四姉妹の協力だって取り付けてる。だから、きつと大丈夫」

そう、きつと……きつと自分達なら大丈夫だ。そう、私は自分に言い聞かせる。

一人では、この世界の悲しみ全てを撃ち落とすことはできない。でも同じ思いを持った人が集まれば、理想は現実にも変わるかもしれない。受け継がれた意思と願い、そして力は、また受け継がれていくものだから。

（だから、これで終わらせませす。クオン……あなたの無念は、私がこの手で晴らします）

『涙を流し続ける少女に、青空を』

『運命に囚われた王達に、自由を』

（そして、この争いに終止符を……）

そつとガスを止めて、私は顔を上げる。内心の決意を悟らせない様、笑顔を浮かべて。



場所は戻って、時空管理局無限書庫。秋月静真、高町ヴィヴィオ、オットーの三人は検索に引っかけた書物の翻訳を開始していた。

が、一通り文面を目にした静真が溜息を吐く。

「なあ、これ……俺の見間違いないやなかったら、どう見ても先史ベルカ時代の文章だよなあ……？」

「ですね……まあベルカ戦乱期の物ですから……」  
「あうう……」

うんうん唸りながら、三人であーでもないこうでもないと言語を訳していく。三人寄れば文殊の知恵。古代ベルカ語にある程度知識を持つ三人でも、文脈で躰き始めた。三人の心は一つに。曰く、「もう専門家に頼ろうぜ」。

そして最も頼りになる専門家——今は無人世界で母親と暮らすルーテシア・アルピーノに、ヴィヴィオが呼び出しをかけた。もう一人の専門家・アギトと一緒にだったルーテシアは協力を快く引き受け、三人が苦勞した翻訳を相談しながらもすんなりとなす。

『死者達によって構成される、多数の軍列』

ルーテシアの小さくも凜とした声が、読み上げた。

『死したって騎兵を喰らい、その数を増やし、戦場を焼け野に変える——それがマリアージュ。イクスによって構成された無数の軍列は無限に増殖し続け、その進軍を止める事は不可能……』

それが示すのは、「マリアージュは増殖兵器」という事実。しかも死体と『イクス』によって生成される、インスタント兵器だ。それを発見した人物が、『トレディア』のようだ。

続いて、ルーテシアが持ってきたのは友人・キャロからプレゼントされた稀少本。『イクス』に関する描写があったらしい。

『冥府の王。冥王……』

『冥王・イクスヴェリア……』

『静真、何か知ってんのか？』

ルーテシアの言葉に続くかのような静真の呟きに、場が騒然となる。

「……いや。何か聞き覚えがあるってただだ。悪い」

『他には？』

「他って……んなこと言われても……」

小さく唸った静真の脳裏に、見覚えのないはずの光景が浮かんだ。

漆黒の闇と、赤く滴り落ちる血と、燃え盛る炎。その向こうで、誰かが声を荒げている。一瞬でも気を抜けばすり抜けていきそうなその光景を、静真は必死に手繰り寄せた。

——無茶だ。声が響く。目の前で背中を見せる男に、呼びかけていた。

『一人では無茶だ！ あれは——の王が……！』  
かき消される寸前で、言葉を掴み取る。

「……『ガレア』。人名か地名かは分からないけど……」

多分、深琴なら。彼女ならこの全てに気づいているはずだ。兄妹間の、信頼にも似た何かを静真の中を駆け巡る。

静真がそう確信を覚えたと同じタイミングで、ヴィヴィオは更なる絞込みをかけていた。

「えっと、絞り込み検索。『冥王・イクスヴェリア』」

そのキーワードに反応して、一枚のモニターが原文データを映し出す。

「先史224年生誕。古代ベルカ、ガレア王国の君主。戦乱と残虐を好んだ、邪知暴虐の王……」

「人の屍を利用して生み出す兵器を駆使し、近隣諸国を侵略したとされる。……古代ベルカで『人形』を意味する『マリアージュ』と呼ばれる死体兵器とその製法は、聖王家の戦船やゆりかご技術と同等のオーバーテクノロジーによるものと考えられる……」

『あー！』

先ほどから一人唸っていたアギトが、声を上げてルーテシアを見た。

『トレディア・グラッセって、あたし達聞いたことあるじゃんか！』

『……どこ、で……？』

『あれだよ！ あの、変つ態博士の……！』

「ドクターのアジトで、ですか？」

変態博士ことDr. ジェイル・スカリエツィイ。散々な呼び名と印象に、静真は一人笑いを堪えると同時に同情した。そういう状況じゃないと分かっているが、笑いと哀れみで目頭が熱くなる。

「オットー！ 今の話、急いでテイアナさんに！」

「はい」

「彼方さんと深琴には俺から連絡する。ついでに原文データを添付したいんだけど……ヴィヴィオ司書、何か問題は？」

「ありません！ 遠慮なくやつちやつてください！ 急いで資料を纏めちゃおう！」

『翻訳、手伝うよ』

『あたしもな！』

満面の笑顔で頷くルーテシアとアギトに、ヴィヴィオも同じく笑顔を浮かべた。

「——二人とも、ありがとう！」



## 08：捜査、進展

モニターの映像と送られてきた情報を整理して、私は捜査員の報告から得られた情報を纏める。彼らの現在位置と確認された反応は逐一確認した。もし何らかの——それこそマリアージュの襲撃があれば、彼らだけでは対抗できない。

その辺りも考えて指示を出すのは執務官。補佐官の仕事は情報を収集・纏めて報告し、必要となる渉外やその他事務処理だ。この場合、補佐官は非魔導師の場合が多い。犯人との戦闘は協力部隊に所属する魔導師が殆どだ。執務官がエース級の魔導師である場合は、補佐官が前線管制を担当する。

とはいえ、これは「一般的な」執務官と執務官補佐の場合で、当然例外は存在する。その場合真っ先に例に挙げられるのは私とアーウィング執務官のコンビだ。

決定的な違いは、「交戦時に補佐が最前衛を、執務官が補助と前線管制を担当する」という一点だけ。協力部隊の魔導師は中衛や他アジトの制圧に向かわせることが多い。戦闘スタイルやポジションからしてこの配置が私達の「黄金パターン」だ。「補佐官を人質に取ったら実は魔導師で、返り討ちにあつて自分が人質になった」というのは、この三年間で結構遭遇したパターンである。

このため、私が「一般的な補佐官」として事務や渉外を担当することは滅多にない。あつてもせいぜい、今回のように捜査中の場合が殆どだ。

「深琴さあ……お茶飲む時くらい、手、止めたら？」

「んー、そうしたいのは山々なんだけどねー」

言つて、フエアは椅子に座った。「座った」とは言つても背もたれに顎を置くその姿は、聖王教会に所属する修道騎士見習いとは思えない。背中に負った傷は今朝方には完治が確認され、本人の意思もあり捜査への参加は続行。予定としてはこの後、アルトやテイアの臨時補佐官のルネッサ・マグナスと共にK267の地下街でトレディア・グラーゼの捜索に参加する。

兄とオットー、ヴィヴィオからもたらされた情報を元に、彼方さんはトレディア・グララーゼの調査を開始。同姓同名のオルセア解放戦線の活動家との関係性等の調査だ。そのため入れ替わりでK267での調査協力に渡辺零さんが参加することになっている。ルネッサの代わりにティアの補佐を担当する私はこの場——湾岸特別救助隊や現場から離れることができず、フェアの道中の行動は私の監視から外れることになっていた。

「零さんとアーウィング執務官、それに彼方さんにはその旨を報告しとかないと駄目なの。今はその書類の作成中」

「ふーん」

興味なさそうに、フェアは言う。

まあ零さんや執務官なら、こんな形式ばった報告は必要ない。何だかんだ言ってフェアを信頼しているし、その成長を喜んでいるから。——ティアを庇って、フェアが負傷したことを報告した際、この二人は二重の意味で驚いたらしい。一つはフェアが負傷するほど、マリアージュは強敵だったのかということ。もう一つは、「フェアが誰かを庇った」という事実。

そこまで出来るようになった彼が、私の監視下から離れた途端に裏切ったりすることはないだろう——というのが、保護責任者と法的後見人の意見だ。

そんなことを考えながら、私はキーを叩く手を止めない。誤字脱字や不備がないことを確認して、送信ボタンを押す。

見計らったタイミングで、フェアが口を開いた。

「深琴ってさあ、あんまり『他人』を信じてないよね？ 六課の関係者とかにはいつも通りなのに、そうじゃない人に対してさ」

「まあね。基本的に『他人を疑う仕事』だから」

信じていない、という表現には語弊がある。信頼と信用の間、と言うべきか……ともかく、私の仕事は上司の指示に従い、早期に事件を解決することだ。行動中信じているのは上司と自分、そして付き合いのある協力者だけ。JS事件を含めて二度、内通者によって痛い目に遭った身としては用心に越したことはない。もちろん、周囲にはそん

なこと悟らせないようにしている。

「でも、私はフェアのこと信じてるよ。『友達』だもの」

かつては刃を交え、信じるもののために戦った間柄だし。

友達、との単語を聞いて、フェアは目を輝かせる。嬉しそうに頷くその姿に、涙が出そうになった。純粹すぎるよ、この子……。

秋葉さんに連れられて108隊へ向かうフェアを見送って、私は小さく溜息を吐いた。

それと同時にティアのもとへ移動する。通信を終えたらしいティアは、モニターを閉じた。

「悪いわね、深琴。せっかくの休暇なのに」

「大丈夫だよ。もとより、そのつもりだったし」

「そう言ってくれると助かる。……あ、お弁当ありがとね。すつごく美味しかった」

ティアの言う「お弁当」の中身は、彼女のお気に入りの野菜と鶏肉のサンドイッチやタマゴサンド。楊枝にも使えるピンで刺した一口サイズのハンバーグとか、プチトマトとか。保温効果が高い水筒には野菜スープ。当然スバル達の協力を受けたものだ。

「ルネも美味しいって言ってたわ。やっぱり深琴やキャロが作ると違うわね。色んな味が楽しめるっていうか……」

「出身によつて好みとか違うしね。気に入ってもらえたなら何よりだよ」

笑って、私は纏めたデータをティアに見せようとモニターを開く。

——それと同時に、複数の足音がこちらへ近づいてきた。

「ティア！」

「スバル……それに、あんた達……」

「「お疲れ様ですっ！」」

スバルの声に振り返ったティアが、スバルの後ろから近づいてきたエリオとキャロを見た。

「ギンガさんとスバルさんをお願いして、今回の事件についての協力許可を頂きました」

「所属の保護隊からも、オツケーを貰いました」

「エリオ・モンディアル一等陸士と」

「キャロ・ル・ルシエ一等陸士」

敬礼した二人は、笑顔。

「ランスター執務官の下で、事件に協力させていただきます！」

「よろしくお願いします！」

二人の様子を見て、ティアは何故か私を見る。……私、何もしてないよ？ 協力できたらしようね、とは言ったけど、二人の所属である保護隊やギンガさんに話はしてないし。

それにこの二人も、一回言い出したら聞かない。お母さん譲りなのだろう。言うだけ無駄だと悟ったのか、ティアは肩を竦めた。

「ありがと。心強いわ」

「フォワードチーム、5人集合ですわね！」

ティアの言葉に喜んで、エリオが笑う。スバルも同じく笑顔で、エリオの言葉に頷いた。

「うん！ アルトもいるし……それに、応援も呼んでくれるとか」

元々の事件担当は湾岸特別救助隊で、救助隊の特性上担当窓口はギンガさん。第一の応援に秋葉さんが呼ばれ、ティアとルネッサが捜査担当で来て。私とエリオとキャロ、フェアが自主応援でやって来て、彼方さんと零さんも参加してくれる。ナカジマ四姉妹とアーウィンが執務官は状況次第。

横の繋がりだけでも結構な数の協力者の顔を浮かべて、私は小さく口を開いた。

地上部隊で、横の繋がり——ティアの要請で来てくれそうな人もう一人。

機動六課時代の先輩で、ヘリパイロット兼狙撃手——ヴァイス・グランセニツク陸曹長が。

◇

『はい！ 見えました！ 再開発地区、K267です！』

「……下手くそな操縦ご苦労。つか、いちいち揺れがでえんだよ、チ

「ビアルト！」

『はぁーい。荷物がパイロットに文句つけるのはご遠慮願いまーす』  
青空の下、JX705のキャabinは緊張感に欠ける空気に包まれていた。荷物扱いの言葉に苛立ったヴァイス・グランセニックが口を開く。

「言われたくなきや操縦替わるかあ？」

『やーです！ この子はあたしのー！』

軽口を叩き合う二人と、我関せずで小さな窓から外を見つめるフェア。その空気に居た堪れなくなつたルネツサは申し訳なさそうに口を開いた。

「すみません、ヴァイス・グランセニック陸曹長。自分は……」

「あー。アルトから聞いてるよ。俺の後輩の補佐官殿だろ？」

『すいませんね、ルネツサさん。ガラの悪い先輩で……』

「誰のガラが悪いって!？」

「……管理局のヘリパイは、免許の他にも掛け合い必須なの？」

アルトの言葉に噛み付いたヴァイスを見て、フェアが小さく呟く。  
『まあまあ』とアルトが取り成した。

『この人も六課の隊員だったんですよ。ティアナと深琴の先輩でもありました』

「秋月執務官補の……?」

『はい。特に深琴は、フォワード兼ロングアーチスタッフだったんで』  
「そういうことだ。ま、よろしくな」

「ごちらこそ」

握手を交わし、ヴァイスは「ところで」とフェアを見る。一方のフェアは先ほどと変わらない様子で、窓の外を見つめていた。

「お前……この揺れで、よく外見ようと思えるよな」

「この程度の揺れで酔う程、繊細な神経してないみたい。それに、こうしてヘリに乗ることなかったから……記念に？」

小首を傾げたフェアは、ヴァイスとルネツサを見る。気遣わしげな視線を送る彼らに、更に首を傾げて見せた。キャbinを包んだ沈黙に気づいて、フェアはアルトに「僕、何かまずいこと言った？」とモニ

ターを繋げる。

「あー……フェア。何だったら帰り道、俺が操縦してやろうか？ チビアルトに比べて、大分マシだとは思うけど」

『ちよ、ヴァイス先輩！ この子はあたしのです！』

「え、いいの？」

『あー！ フェアも乗っちゃ駄目だってば！』

言ってアルトとヴァイスは、再びヘリの操縦権を賭けて争い始める。その様子を眺めていたルネッサを、フェアが深紅色の瞳で見つめた。

「ティアナが言ってたけど……君、射撃型なんだっけ？ しかも今時珍しい本物の拳銃の」

「はい、一応は……」

頷いたルネッサは、腰のホルスターから銀色に輝く拳銃を取り出した。弾倉を確認して、銃弾を詰める。

「しかもリボルバー！」

『なんて言ったっけ。デバイス扱いで、可愛い名前で登録してたよね？』

「……『シルバーダガー』……思い付きだけで、芸のない名前です」

頬を染め、はにかんで、ルネッサは謙遜する。銀色に輝く牙の名は、銃によく合っていた。同じく射撃型のヴァイスが、銃を検分する。

「そのサイズのハンドガンってことは、レンジはショットからミドルだな……」

「そこまで分かるの？」

「まあな。……陸戦ポジはガードかセンター？」

「すいません。自分は武装隊の経験がないもので……」

ルネッサの言葉に、ヴァイスは「こりゃ失礼」と即座に謝罪した。

「捜査官一筋？」

「本業は検死と鑑識です。……生きている人間より、死んでる人間相手の方が合うみたいで」

ルネッサが言うと同時に、地上の警邏隊から通信モニターが開かれる。

『JX705 一番機へ。こちら地上警邏。手配中の容疑者が出現、三名を確認』

地上から送られたリアルタイムの映像に、全員が表情を引き締めた。間髪入れず、今度はアインザッツが通信モニターを開く。モニターの向こうには、騎士服を展開した渡辺零が映し出されていた。

『俺だ。準備は？』

『言われなくてもできてるよ』

『ならいい。——俺は先に地下街に突入する。お前は地上でマリアーシュの相手を頼む。無茶するなよ』

「分かってる。深琴みたいなこと言わないで。……切るよ」

モニターを閉じ、フェアは防護服とデバイスを展開させる。二振りのショートソードを手首で回し、状態を確認する。デバイスも自分も、問題はない。

「執務官補。三人相手、前衛やれっか？」

「陸曹長殿は地下でも狙撃弾丸を届けられると伺っています。フォーをして頂ければ」

「最前衛は僕が行くよ。注意を引くから、その間に無事に降下してくれたら——やれるよね？ アインザッツ」

《No problem.》

操縦席に座るアルトがポジションを確認し、ハッチを開く。

「行くぜ、ストームレイダー」

《Variable Barret.》

「……行こう、シルバードガー」

ハッチから飛び降りて、フェアはそのままの姿勢で攻撃を開始した。彼に気をとられたマリアーシュが三体応戦している隙に、ルネッサもまた降下する。

その姿を、一つの影が見ていた。影は眩く。機械染みた、感情の見えない声で。

「海に回った僚機達がいる。……どうか、イクスを……」



——地上で戦闘が勃発する少し前。地下街へと突入した零は、集まっていたマリアージユを淡々と破壊していた。合計五体のマリアージユを苦戦することなく倒して、零は進む。

マリアージユが来た方向、そして零の前に姿を見せた頻度から考えて、今進んでいる方向で間違いはないはずだ。

(死体によって生み出されるってことを考えると……事件が明るみになる前から、殺人は続いていたんだろうな)

あるいは、戦地で調達したか。いずれにせよ非人道的なその行為に、零は唇を噛む。争いを、力で無理やり収めようとすることからこうなる——と、自分たちの先祖が生きた時代を思い出した。

「……生きるためには殺さなければいけない……っていうんなら、まだ分かるけどな」

それでも争いの根本は、戦火が広がる前に潰せるはずで。国境問題、地域や民族の差別、侵略——解決には、本当に争いが必要なのだろうか。話し合いでは何故駄目なのだろう。

そう思うのは自分の甘さか、それとも受け継がれた後悔か。……いずれにせよ、このサイクルはどこかで止めなければならぬ。

(……何だ、この部屋……)

足を止め、零は辿り着いた部屋を見回す。置かれているのは旧式のテープレコーダーだけ。再開発地区という割には、この部屋はひどくこざっぱりしていた。

刀を鞘に納め、零はテープレコーダーを再生させる。テープを巻き取る耳障りな音が響いた。

『詩篇の九。時が訪れれば、王は帰還する。操主の姿は無くとも、冥府は再び開かれる』

男の、くぐもった声は続く。

『舞い上がる炎と鬨の声は、そこに正しく、平和の価値を知らしめる。

——この声に惹かれたのは、マリアージユか、捜査官か。……いずれにせよ、時は来た。何があるかと、私の悲願は、止まらない——』

「——っ、ふざけんなよー」



音を立てて、テープが止まる。同時に零の拳が、床を叩いた。音を立ててめり込んだ床に、赤い血液が滴り落ちる。それに構うことなく、零は言葉を紡いだ。

「何が悲願だ！　何が平和の価値を知らしめるだ！　恨む相手が違おうだろうが！　この世界の人間が、お前達に何をしたってんだよ！　好き好んで争う人間ばかりと思ってるじゃねえよ！」

肩で息をしながら、零は怒鳴りあげる。

確かに世界は変わらない。争い、傷つけて、何事も無かったかのようには平和を享受する。そして再び人は争い、傷つけ——それだけをただ繰り返す。

だが、と零はテープレコーダーを睨みつけた。

そんなどうしようもない世界でも、人は一生懸命生きている。明日への希望を、平和な未来になることを願って戦い続ける人がいる。争いのためだけに生み出され、それでも今を笑って生きようとしている人だっているにも関わらず——彼らの努力を無に帰す企みに、零の苛立ちは増していくばかりだ。

「だったら、止めてやる……」

証拠となるレコーダーを回収し、零は来た道を急ぐ。全てが手遅れになる前に、5人のストライカー達に伝えなければ——。

## 09：マリリングーデン

紺碧の海が炎に包まれ、星が煌く夜空が赤く染まる。大地は黒い燃焼液で汚され、そう容易には人の立ち入りを許さなかった。この光景を、私は何回目撃しただろう。

一度目は、10歳の頃。密輸されたロストロギア『レリック』が爆発し、飛行機内はおろか空港をも巻き込んだあの火災。なのはさんに救われたスバルと、アーウィング執務官に救われた私に訪れた転機。その姿に憧れ、変わりたいと——強くなりたいと願い、その道を決めたあの日。

二度目は、14歳。地上本部の襲撃と時同じくして襲撃を受けた、機動六課での光景。ヴィヴィオは攫われ、交代部隊やロングアーチスタッフ、バツクヤードスタッフが傷つけられた。彼らを守れず、居場所を壊された怒りと悲しみと後悔で埋め尽くされたあの日。

何度見ても慣れないし、そもそも慣れていいものじゃない。にも関わらず、どこかの世界で、「人を傷つけるため」の炎は上がる。

6月26日、夜。ミッドチルダ南部の海上施設マリリングーデンにて上がった炎は今も尚、海と空をその牙にかけていた。



『こちら港湾警備隊本部！ 火災の規模はコンディション7！ 燃焼剤で燃えてる分、内部温度の上昇が激しい！』

至る場所で、火災を告げる警報が鳴り響く。特別救助隊と応援の陸士部隊、航空武装隊の隊員達が装備を整え、未だ炎に包まれたマリリングーデンを目指していた。不幸中の幸いとは言ったもので、出火時点で既に営業時間を終えていたマリリングーデン内部には従業員が僅か。しかしマリリングーデンの広さや火災状況、その上燃焼剤使用というこの状況は、救助隊だけでは対処しきれない。そしてマリアージユの件もある。ティアはマリアージユ対策で武装隊の指揮。エリオとキャ

口はスバルと一緒に現場作業。私はこの二組を始め、東側に展開する部隊の前線管制を担当することになった。本部からの通信モニターを開きながら、必要なデータを表示させる。

『特救はツーマンで人命検索！ 防災は水利要請、化学火災用の消火剤！ 空隊はエリア区切って消火弾！ 指示を待て！』

特救のヴォルツ司令の命令に沿って、隊員達は動き出した。一足先に空に上がっていた秋葉さんが、指定された範囲に凍結効果を付随させた砲撃を撃ち込む。炎の勢いが弱ったと同時に、控えていた空隊がツーマンで消火弾を撃った。該地点の温度は低くなったが、それでも400度を超えている。秋葉さんに空間系の魔法を使用してもらうという手もあったが、現時点で対応できるほどの液剤車や消火剤タンクがない。

この状況で、マリアージュの襲撃を受けたら……。

「深琴！」

モニターを見つめ、唇を噛んだ私を呼ぶ声。振り返ると、カノンを携えたデイエチがこちらに向かっているところだった。彼女とチンク、ノーヴェ、ウエンディの四人——通称ナカジマ四姉妹は、戦闘機人特有のデータ共有等の特性を生かして、『N2R』というユニットを組んでいる。こうした大規模な災害が発生した時は四人の保護責任者であるゲンヤ・ナカジマ三佐の権限で召集・活動することができた。「ごめん、遅くなった。状況は？」

「若干ではあるけど、炎の勢いは弱まっている。でも油断は出来ないし、従業員達……逃げ遅れた民間人がいる。救助しようにも崩落地帯は多いし手が足りない。放火犯に関しては現在不明ってところ」

「厳しいね。……今、ノーヴェとウエンディに消火剤タンクを持ってきてもらってる。カノンの使用も申請してるから、二人が戻り次第、私も消火の手伝いに」

「うん、お願い。……マリアージュに関してはティアが指揮担当だから、もし発見したら連絡を」

「了解」

デイエチが頷くと同時に、開いていたモニターに緊急通信が入る。

映し出されたのは、零さんとフェアの姿だった。飛行しているのだろうか、零さんがフェアに抱えられている。発信者は零さんだ。

『俺だ。ヴォルツ司令に市街地飛行許可を貰った。全速力でそっちに向かっている。状況は？』

「秋葉さんや空隊の皆さんのお陰で、屋外の温度は600度前後で推移しています。ですが瓦礫の崩落が多く、民間人の救助は難航。屋内や海中トンネルはスバル達が突入していますが……屋内の温度は一番低いところで700度。現時点で確認された最高温度は900度ちようどです」

『マリアージュは？』

「今のところ、確認されてません。イクスに関しても……108隊のソナーによる発見待ちです」

ついでに現状のデータを添付して、あちらに送信する。それを目にした零さんが唇を噛んだ。

『災害特例で四姉妹が召集かけられるくらいだからな。油断できないか。……彼方とダイバインに連絡は？』

「既に入れていきます。お二人とも、遅くとも1時間以内にはこちらへ来てくださるそうです」

正直なところ、私が管制を担当することになってすぐした事というのは、この二人に連絡を入れることだったりする。彼方さんは「マリアージュと戦闘？ 五体くらいまでなら大丈夫だよ。数字に根拠は無いけど」と言っていたし。アーウィング執務官に関しては、私も出動するとなれば管制の代理がいる。……実際には、私が代理のようなものなんだけど。

『了解した。この調子なら……30分もあれば装備込みで行動できる。引き続き、協力を続行する』

「お願いします。ではっ」

通信を切り、私は管制用のモニターに目を向ける。消火剤タンクを持ってきたノーヴェとウエンデイが活動を開始し、タンクを背負ったデイエチが本部から指定されたエリアに消火剤砲撃を開始した。徐々に消えていく崩落地点や未消火のエリアは、参加する誰もが「犠

犠牲者を出すことなく終わらせること」を自身の誇りや生命、信条に賭けて活動していることを示している。

(私も、すっかりしないと……)

ただでさえ突撃思考なのに、ここ最近はその傾向があるのはいただけない。軽く頬を叩いて、私はモニターを見つめた。

◇

『嗚呼……この世界は何故繰り返すのか……』

彼女の記憶に残る声は、言う。地の底みたいな戦場で、共に戦った仲間。彼が語った未来は「平和な世界」そのものだった。誰も傷つくことなく、争うこと無い世界。夢の様な世界に殉じた仲間の顔は晴れやかなものだった。

しかし、そんな世界は所詮夢物語。救い出された世界は、人の数が多いだけ。食料も友愛もそこら中に溢れているのに、人は傷つけ——そして殺しあう。

『痛みを知って欲しい。……いや、知るべきだ!』

その痛みが現実となって人々が感じれば、争いは無くなるはずだ。彼はそう言っていた。かのアルハザードの遺物を発見し、その量産にとりかかる。自分は、そんな彼を止めなかった。空っぽな世界が作る偽りの平和など、『平和』ではないと。

『明けの星……再生の炎の中で、イクスは王として蘇る……』

彼の言葉を脳裏に浮かべ、彼女は微笑んだ。

美しくも冷酷な、その笑みを。

◇

『N2R 赤毛1・2、崩落地帯破壊突破。ハチエツト、マーリ、水利確保』

『ソードフィッシュ1、要救助者3名搬送』

『N2R 栗毛、フロアX—23 完全消火!』

炎で照らされた夜空で消火活動中の航空武装隊隊員が、その報告に喜びの声を上げた。かれこれ30分程休む間のなく消火弾を撃ち続けている彼らにも、疲労の色が見え始めている。炎の勢いは弱まり、屋内外の温度は600度を下回り始めていた。

「喜ぶのはいいけど、手は止めない」

「は、はい！ すいません、霜月三尉！」

彼らを率いて活動していた秋葉が、マガジンを取り替えながら言う。その言葉に謝罪した隊員達は陣形を崩すことなく砲撃を再開した。とはいえ秋葉の口調は彼らを咎めるほど厳しくはない。その証拠に、彼女の表情も和らいでいる。疲労の色も大分濃いが。

(このまま、何事も無ければいいんだけど……)

最大の不安要素であるマリアージュは、未だ姿を見せていない。彼女たちの存在一つで勢力図は容易く引っくり返されることだろう。元機動六課のフォワード5名や彼女の師匠である零やデイバイン、フェアなら何とかなるだろうが……。

そこまで考えた彼女の耳に、咆哮が届いた。獣の様であり、機械の駆動音にも似たその声に続いて固い靴音が響く。何十をも反響するその音はまるで軍隊の行進にも似ていた。

音は止み、地上を覆う炎から空を見る影がある。長身に纏うボディースーツと顔の上半分を覆うバイザー。見覚えのある姿をした『人形』マリアージュが一騎、そこにいた。

右腕の銃口を、自分たちに向ける。

「全員、防御陣形！ 隊列乱さないで、バリア張って！」

《Oval Protection》

各自が張ったバリアの上から、蒼氷色のバリアが全方位を覆った。阻まれた砲撃を意に介さない様子で、マリアージュは再び、秋葉達に目標を定める。

「私が地上で迎撃します。クレスタ副隊長はランスター執務官に連絡を。他のみんなは消火活動を続けてください。以降の消火活動の指揮は、副隊長にお任せします」

「……分かりました。お気をつけて」

不安そうな顔で、副隊長は頷いた。しかしそれも一瞬のことで、落ち着いた様子で連絡と指揮を開始する。年下の上司、女の上司——どちらか片方だけでも男性は受け入れがたいらしい。その上秋葉は3年前まで現場を離れていた立場だ。にも関わらず、彼は秋葉の意思を尊重し、受け入れてくれる。

「あなたも……イクスの糧に……」

「お断りよ、そんなの」

愛機を構え、秋葉は周囲に魔力弾を生成した。そして二人はほぼ同時に動き出し、杖と銃身で鏢競り合う。距離をとっては蒼氷色の魔力弾がマリアージュを攻撃し、マリアージュはいとも容易く弾き返した。

「残念ですが、あなたでは私に勝てません」

「勝つつもりなんて、最初からあるわけ無いじゃない。まあでも……私に狙いを定めた時点で、ほぼ勝ったも同然かな」

言って、秋葉が微笑むと同時に複数の短剣がマリアージュの周囲に突き刺さる。同時に黄色のテンプレートが短剣の柄の部分に展開した。

「IS発動。——《ランブルデトネイター》」

凜とした声が響き、その声を合図に短剣が爆発する。爆風から身を守った秋葉は、声の主を振り返った。N2R全員共通防護服の上から、灰色のコートを纏う小柄な少女。元ナンバーズN0.5、チンクだ。

「ありがとね、チンク」

「いや。無事で何よりだ、秋葉」

背後から近づく影に振り返ることなく、秋葉は笑う。しかし徐々に近づいてくる多数の足音に、その表情は不機嫌なものとなった。

「諦めてくれたら手っ取り早いなだけどね」

「そうもいくまい。人形というのはそういうものだ」

それでも軽口を叩く彼女の視界の外から、一機のマリアージュが音も無く近づく。振り向きざまに、秋葉は笑った。

「勝つつもりなんかないけど、負けるわけにもいかないからね」

深紅色の光が輝き、マリアージュの刃を受け止める。マリアージュが息を呑んだ一瞬の隙に、光は斬撃を叩き込んだ。破壊されたマリアージュの残骸を見下ろして、深紅色を纏ったフェアは不服そうに唇を尖らせる。

「ちよつとは慌てるなりしようよ。危ないなあ」

「援軍期待して、迎撃に向かったんだもの。——さて、と」

奥より現れた十機編成のマリアージュを見て、三人はそれぞれポジションに着いた。最前衛にはフェアが、中衛にはチンクが。最後衛は秋葉がそれぞれ担当する。

一度も試す機会がなかったこのフォーメーションだが、不安は無い。

紅と蒼、そして黄。三色の光が強く輝いた。

◇

一方、その頃。17機のマリアージュをシングルアサルトで迎撃するエリオにも、援軍は訪れていた。

「しっかし、よく湧いてるねえ。どこから材料用意したんだろう？」

「俺らが知ったことじゃねえよ、絶対」

のんびりとした口調で首を傾げる彼方と、同じく緊張感に欠ける口調の零。二人の手にはよく似た日本刀があった。

「零さん、彼方さん……」

「エリオ、ここは俺達に任せておけ。安心しろ。これまでこんなフラグは片っ端から立てて折っていったからな」

「兄さんうるさい。エリオ君は今のうちに一旦避難して、バリアジャケットの再構築やつといで。深琴ちゃん達の計算が正しければ、そろそろ限界だと思うから」

彼方の言葉に頷いて、エリオは一旦安全地帯まで後退する。彼の姿を見送って、零と彼方はその表情を引き締めた。彼らを囲うマリアージュは10機。それらに対して、二人は互いの背中を合わせる。

そこにあるのは、血を分けた双子の兄弟への絶対的な信頼。アル



ティスの血筋に連なる者として責任と、騎士としての覚悟。

「兄さん。この事件が無事終わったらさ、また皆にご飯を作ってあげようよ」

「そうだな。皆疲れてるだろうし、空腹だろうしな」

「メニユーは何にしようかな。喜んでくれるといいけど」

「——あなた方も、イクスの糧に」

空気を読まない会話に苛立ったのか、マリアージュの声は刺々しいものへと変わる。

「これ以上、無意味な争いを続ける気はない」

「争いを止めるために、争いは必要ない。守るためには戦うさ。そちらがその手に槍を携える限り」

『和平の使者は槍を持たない』。和平を申し出るなら武器を捨てる。つまりところ平和な世界のために過度な力は必要だと。

「我々はそのために、そのためだけに生み出されました。進軍は当然です」

「だからって、『はいそうですか』なんて言うと思ってるのか？ 大体古代ベルカはどうの昔に滅んだんだよ。お前たちが進軍する戦場は、どこにもない」

吐き捨てるように言って、零はその瞳を細めた。

「——ゼロ・アルティスの末裔にして、聖王教会騎士団騎士、渡辺零」

「同じく、ゼロ・アルティスの末裔にして、時空管理局本局査察官、藤月彼方」

「我ら、王家の大地に実りを、民に平和を齎すため、ここに馳せ参じた」  
認めないと、抗うというのなら。せめてもの手向けに、古代ベルカの戦に則ろう。刀を構えて、二人は同時に口を開いた。

「アルティスの名の下に——推して参る！」

二人の声を合図に、一斉に動き出したマリアージュより速く。

二閃の煌きと漆黒の輝きが、一帯を覆い尽くした。

## 10：信念

争いが繰り返される理由と、平和の「意味」。世界はずっと争ってばかりで、平和なひと時が与えられても、片隅では争いは続いていて。

国境問題や地域や民族差別。侵略。理由は異なれど、どの世界でも争いはなくならない。規模は世界によって異なるし、そもそも規模の問題ではないと思う。人は判断する時に、一番分かりやすい数字を利用するが……根本的な問題は数字ではなくて（武器や兵器産業の利益という点ではその通りのだが）、価値観の相違とか、そんなもの。

とはいえ、今回の事件に関しては、私は声を大にして叫びたい。ミッドチルダの人々が何をした？ 平和の価値を知らずに軽んじているから？ それはどこの誰が判断したのか、ぜひ聞きたいものだ。今この時だつて、事件の早期解決に動く人がいる。同時に訳のわからない兵器や火事で、消えかけている命がある。他の世界がそうならないように、一生懸命働いている人たちがいる。

それでも尚、「争いをもって争いを制し、平和の価値を知らしめる」と言うのなら、問おう。あなたたちが壊そうとしている平和と、消えうとしている命は、その理想に値しないものなのかと。そんな神様気取りの言動は、認めたくない。

別に自分は、神様でも全人類の代弁者でもない。ただこの世界に生きる一人の人間として、そして力を持って生まれた者として、自分の意思で戦うと。一人の人間が出来ることは、いつだって限られている。だから人は言葉を交わして、時には拳を交えてお互いを理解できるはずなのだ。その過程に、「過度な武力を用いた争い」は必要ない。だから、止めなくてはならない。全てが手遅れになる前に。



マップに表示された、マリアーージュを示すアイコンが消えてはまた現れる。北側で迎撃に入ったフェアとチンク、秋葉さんの元には10機。東側で迎撃に入った零さんと彼方さんの元には、15機。ジャ

ケットの再構築を終えて、キャロと合流したエリオは現在西側で7機と交戦中。

そして遺跡観覧トンネルに突入したスバルは反応消失。ジャミングをかけられているのか通信端末も反応なく、念話も通じない。本部からの情報によると観覧トンネルの温度は現在600度をやや下回っているが、フラッシュオーバーの危険が高い。また瓦礫と燃焼が酷くて突入が困難だそうだ。防災担当の経験もあるティアが突入予定で、今は北側の展望道路で容疑者と「お話中」。

(スバル……)

合間合間に通信ボタンを押すが、反応はない。

108のソナーによると、海底遺跡に眠っていたイクスヴェリアは既に起動しているとのこと。道に沿って移動しているとしたら、彼女を追うマリアージュがそちらへ向かっていてもおかしくはない。現にマリアージュはその材料をどこから調達したのか、増殖を繰り返しては移動をしている。

スバルのことだから大丈夫だとは思うけど、ロスト前に起こった天井崩落に巻き込まれていたら。いくら戦闘機人の体ではタダでは済まないだろうし、行動にも支障が出る。その上、もしもマリアージュに襲われたりしたら……。

「深琴！」

声に振り返ると、黒制服を纏ったアーウィング執務官がこちらに駆け寄っていた。そして挨拶もそこそこに、状況の確認を行う。

「炎の勢いは弱まっています。温度も600度前後で推移して、こちらには順調。ただ……」

「……マリアージュの数が多いな。死傷者は？」

「負傷者は若干名……要救助者2名、どちらも軽症とのこと。死者は現時点では確認されていません」

とはいえ、スカリエッティの証言によると、トレディア・グラーゼは新暦63年にスカリエッティと出会い、マリアージュの量産計画を開始している。イクスヴェリアの覚醒を待つことなく、マリアージュを量産できるように。

そしてイクスヴェエリアが覚醒した今、マリアージュの生産はもつと容易に行えるはずだ。

『あなたとなら……分かり合えると、信じていたのに……!』

炎の向こうで、マリアージュを従えた少女——ガレアの『冥王』・イクスヴェエリアの、涙混じりの声が脳裏に過ぎる。きつと彼女も、心の片隅では願っていたのかもしれない。平和な世界を。そして王とは名ばかりの、『兵器』からの解放を。

状況の確認と報告を終えると、執務官は管制モニターを引き継いだ。

「港湾本部の許可は得ている。お前は行って来い。——役目は、分かっているな?」

念入りに、執務官は確認する。ここまでされても、つい無茶をするのが私だ。思わず自嘲の笑みを浮かべてしまう。

「スバルと合流して、イクスヴェエリアを保護。ついでにマリアージュは無力化、もしくは活動停止……ってところですね」

以前捕縛し、それでも自爆された身としては、無理に確保しようとは思えない。イクスヴェエリアに、指揮・命令能力が残っていることを祈ろう。

「何度も言うが、絶対に無茶はするな。……行って来い!」

「はいっ!」

頷いて、私は走り出す。勢いに乗って軽く跳躍すると同時に、デバイスと防護服を展開した。もう一度念話でスバルに呼びかけるも、やはり反応はない。

(スバル……お願い、無事でいて……)

《W. A. S. Stand by.》

ぐつと唇を噛んで、私は通信モニターを呼び出す。相手——ティアは通話中とあったが、「横入りごめん!」と先に謝ってから通信を繋げた。モニターに映ったのは、スターズスタイルの防護服を纏ったティア。既に防護服を展開した私に驚いている。

『深琴、あんた……』

「こちら深琴。アーウィング執務官が管制を引き継いでくれた。今、

東側アクアライン突っ切って、遺跡観覧トンネルに向かってる。そっちは？」

『……今、容疑者を護送したところ。ヴァイス先輩が引き受けてくれた』

そう寂しげに、けれど淡々と告げるティアの傍に、彼女は——ルネッサ・マグナスはいない。ティアの推理は正しかったようだ。ティアにとって、一番疑いたくなかった相手だっただろうに。私は「……そっか」と小さく頷いただけで、詮索はしなかった。それは全てが終わった後に、ゆっくり片付けるべきもので。

『容疑者が……ルネが言うには、稼動しているマリアージュは32機って』

「地上で迎撃中の合計がちようど合うね。でも量産を計画してたってことは、イクスヴェリアがいなくても生産できるようにいくつかプログラムを弄ってあると思う。ヴィヴィオ達の話だと、元々マリアージュって二つのタイプに分かれるらしいから」

私達がこれまでに遭遇したのを『兵士型』と名づけるなら、もう一つのタイプは『軍団長型』と訳すらしい。兵士型に比べてずっと強いらしく、またその見かけはそう大差ない。多分判別がつくのは、イクスヴェリアくらいだろう。

『で、でも、深琴一人でしょ?! 無茶だよ、そんなの!』

『アルトの言う通りよ。今から私かティアナがそっちに向かうから……』

「大丈夫です。ってというか、最初から無茶だと分かってたらうちの上司が許可しませんよ」

『でも……』

心配そうな目で、アルトとギンガさんは私を見た。一方のティアは目を細めたまま——判断しかねている。

「それに、今手が空いているのは私だけだから。インドアでの機動力はスバルに劣るけど……でも、場所とか考えたら、私が向かうほうがいい」

そして生憎というかなんと言うか、正直に言うと私は止まる気はな

い。人がいないことをいいことに、戦闘中と殆ど変わらない速度で飛行を続けている。

「だから……お願い、ティア。私に行かせて」

『……分かった。というかあんた、駄目って言っても行くつもりでしょ？ ほんとにもう……そういうところは、昔と変わらないままなんだから……』

深い溜息を吐いて、ティアが言った。六課の頃から、彼女に迷惑をかけたばなしな身としては、非常に申し訳なく思う。とはいえ彼女の言う通りで、もし駄目だと言われたら盛大にごねてでも許可を出させるつもりだったし。

『あたしは地上で方法を考える。……スバルのこと、頼んだわよ』  
「了解！」

モニターを切り、観覧トンネルまで一気に降下する。その途中に人の気配は無く、念のため先行させていたエリアサーチを確認するが……結果は変わらない。

(この辺りだけ、温度が一気に上がってる……それに……)

崩落したと報告があった瓦礫が見当たらない。黒く粘性のある燃焼剤の跡と炎の勢いから、「誰かがここを破壊突破した」と判断できる。まずスバルなら燃焼剤を必要としないし、他の隊員がここに来たという報告もない。もしそうだとしても、この付近に撒き散らされたジャミングの説明が出来ない。なら導き出される結果はただ一つ。

(この奥にマリアージュがいる……)

そして恐らく、イクスヴエリアも。

「……ロゼット。アルカディアに直接、データを送れそう？」

《Is possible. Please wait. 『可能です。少々お待ちを』》

答えて、基本形であるショートソード型のロゼットは淡紅色のクリスタルを2、3回発光させた。

《Completed.》

「うん、ありがと。……それじゃ、行くよ！」

《Load cartridge.》

二回マガジンを回転させ、ロゼットは葉莖を排出する。それを確認して、私は奥へ突入した。

11：だけど、今は

スバルとの出会いは、機動六課に配属初日。所属する分隊は違うけれど、同じ新人フオワードの顔合わせで知り合った。明るくて、優しくて——線を引いていた私にも、声をかけてくれた……誰よりも人らしい彼女の体は、人ではなかった。

鋼の骨格と人工筋肉。遺伝子調整とリンカーコアに調整を加えて生み出された、『戦闘機人』。ナンバーズと呼ばれる彼女達のプロトタイプとされている彼女は昔から、その力を怖がっていたらしい。

「痛いのか、怖いのか……自分がそういう目に遭うのも嫌いだけどね。誰かにそういう思いをさせるのは、もっと嫌いだった」

地上本部の襲撃と、機動六課襲撃から一週間。大破した愛機の修復とスバルの体の最終確認のため本局を訪れた私達が合流して、話題は自分達のことになっていた。小さい頃こんな場所に行ったとか、学生時代の思い出とか。

そして何より、ミッドチルダ臨海第八空港での火災。今に至る最大の理由を思い出して、スバルは微笑んでいたのを思い出す。

『この人みたいになりたい』って思ったの。強くて、優しくて、かつこよくて……」

「うん」

「でもね。それに比べて、私は泣いてばかりで、何も出来なくて……情けなかった」

「……うん」

過去を振り返るスバルの隣に座って、私は頷いていた。その気持ちはよく分かる。自分も、同じだったのだから。

「生まれて初めて思ったの。『泣いてるだけなのも、何も出来ないのももう嫌だ』って。——強くなるんだって」

そう話すスバルの横顔を、私は忘れない。

その拳に宿る意思は固く、悲しい今を撃ち抜く力。誰よりも、何よりも「人らしく」生きるその姿は、とても眩しくて、とても綺麗だった。





轟音が響き、閃光が通路を覆い尽くした。広がる硝煙と鉄の匂いに思わず顔を歪めた私は、その方向へと向かう。

目指していたその場所から、機械染みた声が響いた。

「——戦車を一撃で破壊する弾丸です。人の身で耐えられるものではありません」

「なんて……ことを……！」

徐々に輝きを失う空色のバリアの向こうで、少女が嗚咽を漏らす。外見年齢は、ヴィヴィオとそう変わらない。纏う白いワンピースにも似た衣装は、袖と襟、裾を金色で縁取られているもので、この時代では見かけない縁取りだ。素足のままの少女は、その顔を伏せる。その視線は、赤い血溜まりに向けられていた。

「あなたをずっと探していました。あなたがいなくては、我らの進軍は成り立ちません」

「進軍なんて、しなくていい……もういいの……私達は、目覚めちゃいけないの……」

肩を震わせて、少女は泣いている。マリアージュが左腕を伸ばした。

「導いてください。我らを、新たな戦場へ。冥王・イクスヴェリア……」

「っ……」

「——そこまでよ」

淡紅色のバリアでイクスを保護し、誘導弾で二人の距離を離す。間に降り立った私は、ショートソードの切っ先をマリアージュに向けた。

「連続放火殺人事件の容疑者として……そして先程の救助隊員殺人未遂の現行犯で、あなたを逮捕します」

『未遂』……ですか」

「ええ。私の知ってるスバルは、あの程度の弾丸に負けはしない」

とはいえ、無事でないことだけは確かだ。……でも「スバルなら大丈夫だ」と私は自分に言い聞かせる。そして私の言葉に、イクスが目を見張った。

「例えそうだととしても、最早意味を成しません。そこをどいてください」

「そんなこと、すると思うの？ ……武装を解除して、投降しなさい」  
「それはできません。進軍は、我らの存在意義です」

言って、マリアージュは右腕の銃口を向ける。以前のものとは違う、大口径だ。生半可なバリアでは容易に破られる。

「マリアージュ、駄目！ もうやめて！」

「せっかいです。あなたの屍は、我らの素体に利用しましょう」

「遠慮するわ。——刃王の末裔が屍兵器になるなんて、笑い話にもならないしね。それに……」

続く声を、掻き消す音があった。力強く回転するローラーの音。その事実には、私は微笑む。

「私は、一人じゃないから！」

そして音と共に、スバルがマリアージュへと向かっていった。その目は金色に輝いており、リボルバーナツクルには空色の環状テンプレートが展開されている。

「深琴！ イクスを！」

「了解！」

私はイクスに近づき、ロゼットを腕輪型へと変形させ、バリアの出力を上げた。同時にスバルの拳が、マリアージュの右腕を破壊する。

「私の戦槍を破壊……あの拳……」

「相棒！」

《Load cartridge.》

呆然とするマリアージュに追撃をかけるべく、スバルは愛機を呼んだ。ナツクルのカートリッジが三弾分ロードされ、テンプレートは同色の近代ベルカ式魔方陣に変わる。

「戦槍、再構築……」

「——『振動拳』！」

拳がマリアージュに触れると同時に、圧縮した衝撃波を打ち込んだ。研鑽し続けた魔力圧縮技術とリボルバーナックルの性能とマツハキヤリバーとの協力で編み出した、スバルが持つ「絶対破壊」の一撃である。スバルのISをより安全に、そして効率的に利用したこの技は、なのはさんのバリアを正面から一撃で破壊する程の威力があった。

そんな技の衝撃は、バリアで緩和したとはいえ、スバルの後方にいた私にもダメージを与える。爆煙が去るのを待ち、私はバリアを解除した。

「スバル！」

「っ……………」

その場に膝をついたスバルに駆け寄る。防護服の外装は弾け飛び、上着は右袖しか残っていない。上半身左肩のインナーは意味を成さず、破片が刺さった白い肌からは出血が止まらず、所々機械骨格が露出していた。スバルの防御力はフォワード随一だ。だが彼女がここまでのダメージを負うほどの威力が、あの砲弾にはあったらしい。

「……………深琴？ イクスは!？」

「大丈夫。ここにいるよ」

ひとまず出血だけでも止めようと、治癒魔法を展開する。スバルの無事を確認するため駆け寄ったイクスは、瞳を見開いていた。

「その機械骨格……………人工筋肉……………あなたも？」

「……………うん」

「……………あなたも、兵器ですか?！」

イクスの言葉に、スバルは瞳を伏せた。

「……………そうだね。鋼の骨格に、強化筋肉。戦闘機人の体は、兵器なのかも……………」

けれど、それは違う。彼女はここにいて、生きている。人として生きたいと願って、ここにいます。思わず口を開こうとした私とイクスに、スバルは微笑んだ。

「だけど、今は人間だよ。……………深琴、ありがと。もう大丈夫」

「マリーさんも呼んでるから、終わったらしっかり診てもらおうからね」

「はい。……じゃあ、イクス。脱出しますよ」

立ち上がったスバルは、その腕でイクスを抱き上げる。怪我を心配するイクスに「大丈夫」と告げて。……大丈夫なわけ、あるもんか。

「そんな無茶苦茶、許可できません。そんなわけで、イクス。私でもいいですか?」

「えっ? あ、いえ……あの、自分で……」

嫌がるイクスを無理やり抱き上げ、スバルのすぐ隣を飛行する。

「……あのね、イクス。うちは姉妹が六人いるんですが、みんな私と同じ体です。でも、みんな元気に……人間として生きてますよ。聖王陛下だって、ゆりかごなんて物騒な船とはバイバイしました。今は優しいママと一緒に明るく暮らして、楽しく学校に通ってます」

「本当……ですか?」

「本当です。帰ったら紹介しますよ。うちの姉妹や聖王陛下……昔のベルカのこと、色々知ってる人達に。みんなきつと、イクスによくしてくれます。……もちろん、私達だって」

イクスに優しく語りかけ、スバルは私を見た。すかさず私が頷くと、イクスは不安そうに瞳を伏せる。

「そんな……ことは……」

「大丈夫! 私が教えますよ。こんな炎の中じゃない、広くて青い空。イクスが生きてた時代とは、違う世界も」

力強くイクスの言葉を否定したスバルは、笑っていた。相変わらずの彼女に、思わず私も笑ってしまう。それはイクスも同じようだった。

「防災士長……あなたは少し、強引な方ですね」

「あはは、たまに言われます。『気弱なくせに、強引でワガママだ』って」

「そう思います」

六課にいた頃によく見た、スバルに溜息を吐いていたティアの姿を思い出す。そして一緒に笑っているエリオとキャロの姿は、非常に懐かしい。

「ワガママついでにもう一個。家族や友達は、私のこと『スバル』って

呼びますので……イクスもよかつたら」

「あ……」

「あ、そうそう。紹介が遅れましたが、この子は深琴です。私の友達ですよ」

スバルの言葉に、イクスは私に視線を向ける。その目が僅かに見開かれ、直後に困惑するように細められていった。

「……あなたは、まさか……」

小さい眩きは、私にも届かない。イクスの様子に首を傾げながらも、スバルは私を見た。

「深琴！ ちょっと飛ばすけど、私が先導する。付いて来て！」

「了解！」

《Accelerate Fin.》

淡紅色の小さな翼が、足首付近に広がる。脱出劇が、始まった。

## 12：集え、星の輝き

一帯を覆いつくす炎はほぼ消火され、残るは一人だけ取り残されている人命救助と、放火犯・マリアージュの殲滅のみ。

(目的が分かりやすいというのは、いい事ではあるんだが……)

管制モニターに映し出される状況を見て、デイバインはその青い瞳を細めた。倒しても倒しても、際限なく増殖を続けるマリアージュの数は、容疑者——ルネッサ・マグナスが自白した稼動数を大幅に上回っている。既に彼女と今は亡きトレディア・グラージェにはマリアージュの「操主」としての役割は失われており、覚醒を果たした冥王・イクスヴェリアにはそれらの機能が全て削除されているらしい。先程デバイスを通じて送られてきたデータから推測すれば、現在のイクスヴェリアには「マリアージュコアの生成能力」すらも失われ、生存能力以外の戦闘能力も皆無に等しい状態だ。

(なら、イクスの代替は……マリアージュの母体が何処かにいる……) だが、闇雲に探しても意味は無い。その上こちらは貴重な戦力であるスバルと深琴、両名と通信が取れない状況だ。幸いローゼンクラントとアルカディア、この二機は製作の都合上データ共有のためのリンクシステムが組み込まれている。それを遡って反応位置の確認やデータの送受信は可能だが、そこに通信機能は設けられていない。

と、管制モニターの右端下——映像通信を知らせるアイコンが点滅していた。

『アーウィング執務官。ティアナです』

「どうした？」

『さつき、アルトさんから周辺探索の結果が届きました。地上で確認されたマリアージュは、現在迎撃している分で全部だそうです』

添付されたデータに目を通して、デイバインは肩を竦める。

「残りは20機か。働き蜂の群れに隠れているか……あるいは、サーチャーに引っかかるらない地下に隠れているか、だな」

『そう思います。……私は地上から、スバル達の救援に向かいます』

「了解した。気をつけろよ」

『はいっ！』

モニターが閉じ、周囲は補給を終えた隊員達が再出動を急ぐ音で包まれた。

(結局、最後はエースに頼らざるを得ない……か)

P T事件、闇の書事件、J S事件——そして今回も、最も危険で過酷な現場は年若いエース達が受け持つことになる。だが、泣き言は言っていられない。丑三つ時に差し掛かった空は、より深い闇色に包まれた。

◇

(スバルの反応がロストしたのは地下。来た道で帰れないなら……)

デイバインとの通信を終えたティアナは、思考を止めることなく走り続けていた。訓練校から機動六課を卒業するまで、ずっと一緒にコンビを組んできた彼女だからこそ分かる。この状況でスバルならどう動くか。

——そして、『スバルなら絶対に諦めない』ことを。

「ティアナー！」

「ウエンデイ!? 人命検索は？」

声に振り返ると、固有装備であるライディングボードに乗ったウエンデイが傍に移動している所だった。

「反応された人員は全部助けたっス。……ただ、スバルの反応が出たり消えたりで……生命反応は三つあったし、脱出しようと動いてはいらぬみたいなんスけど……」

「うん。それは間違いない」

足を止めて頷いたティアナは、クロスミラーージュに送られてきた地図をウエンデイに見せる。

「これ見て。この地図。スバルと深琴の反応位置と、火災情報、崩落予想位置。……これでスバルが何を考えるか、どこに行くかの予想はつけられる」

「マジっスか!?!」

「マジで。ウエンディ、付き合ってくれる？」  
「おうっス！」



「駄目です、この先も行き止まり……」

「大丈夫！ 想定内です」

一方、地下。スバルの先導で脱出を図る私達は苦戦していた。火災と崩落は続き、脱出経路はない。天井を砲撃で破壊するということも考えたが、位置によっては地上側が危険だし、更に崩落を呼ぶ可能性だってある。……まあ高密度の魔力は発射した途端から減衰して、目標に届く時には威力がやや下がるものだ。地上から地下を撃ち抜くのと、地下から地上へはまたプロセスが異なってくる。

けれど、スバルは唯一、この地図を完璧に記憶していた。ならば正規の道でなくとも、私達が地上に向かえる場所——スバルが道を作れるコースを導き出す事は簡単。

（スバルならそう考える。なら、狙っている場所も大体は予想がつく……）

そしてスバルが足を止めたのは、吹き抜けのホールだった。

「ここも……他より天井は高いですがまだずいぶん……」

「いいんです。ここからなら行ける……イクス、ちよっと待っててくださいね」

言って、中央まで移動したスバルは構える。空色の魔方陣が輝いた。

「スバル……まさか、天井を砲撃で!？」

「はい!？」

「無理です！ マリアージュの砲撃で、もうボロボロなのに……」

その証拠に、スバルの体の機械部分から悲鳴が上がっている。

「待って、スバル！ 砲撃は私が……っ!？」

言い終わる寸前に、私はイクスを強く抱えこんで身を捻って地面に倒れこんだ。転がり衝撃を殺して身を起こすと、私が立っていた場所



——それも背中から心臓を突き刺せる位置に、刀の切っ先が向けられている。

「深琴！」

「……外しましたか」

軍靴の行進にも似た足音と、機械染みた声。バイザーで覆われた顔と、身に纏うボディスーツ——マリアージュが、そこにいた。

「……危ないことするのね。私が避けてなかったら、あなた達の王様も死んでたのに」

そう。イクスを抱えていた私を刺すということは、同時にイクスの命も危険に晒されるということだ。にも関わらず、このマリアージュに躊躇した様子は見られない。息も絶え絶えに、私は愚痴るように呟いていた。

「構いません。……もう、イクスヴェリアは必要ない」

言うだけ言ったマリアージュは、私目掛けて突撃する。立ち上がった私は逃げ回り、スバルの近くに向かった。そのままバリアを展開し、刀を受け止める。

「イクス、あのマリアージュは……」

「……いいえ。あれは、私が知っているマリアージュとは違います」

スバルの腕に抱かれて、イクスは小さく呟いた。

「あの子は……恐らく、マリアージュを素体にして生み出された、マリアージュによく似た別の個体です。先程スバルが倒した子達とは違います」

「そうです。私はマリアージュであつて、マリアージュではありませんせん」

言い放ったマリアージュが、バリアを叩き壊そうと刀を振るう。尚もマリアージュは続けた。

「あなたのデータを基に、操主・トレディアより生み出された、マリアージュの母胎。自ら戦場に赴き、操主亡き後はその権限を継承する。不完全な……失敗作であるイクスヴェリアとは違います」

「……失敗作、ね……」

何の定義を以って、失敗作とするのだろうか。自分が生み出した娘

達と協力者に等しく愛情を注いだジェイル・スカリエツテイなら、「そんなものあるはずないだろう」と笑い飛ばすだろうか。愛娘の喪失を埋めようとプロジェクト「F・A・T・E」に手を染めたプレシア・テスタロツサなら「愛娘アリシア以外の全て」と答えるだろうか。秋月家の復興に全てを賭けた祖父なら、「素養を持たない者全て」と吐き捨てるのだろうか——いずれにしても、今の場に、私の問いに答えてくれる人はいない。

「……イクス、不完全なその身を呪うことはありません。それら全て、私に取り込んで差し上げます」

——不完全な命は、生きることすら許されないのだろうか。

マリアージュの言葉を聞いた瞬間、私の中で何かが弾けた。

《Barrier Burst.》

バリア表面の魔力を集束して爆発させ、マリアージュを刀ごと吹き飛ばす。音を立てて破壊された刀をマリアージュは見遣った。スバルとイクスに向けて新たにバリアを展開して、私は愛機を見る。

「エクセリオンモードで、一撃で終わらせる。……やれるね？　ロゼット」

《No problem.》

右腕を振るうと同時に、ロゼットはエクセリオンモードを展開した。黒く袖の無いワンピースにも似た上衣と、銀色のベルトで留められた黒のスカート。露わになった足を覆う装甲は靴以外は無く、腕には指貫のグローブがあるだけだ。腰に届く髪は白いリボンでツインテールの様に結び上げられている。以前のデザインとは大幅に異なるこれは、JS事件後から六課卒業前までに調整に調整を重ねた、最適な形だ。防御は最低限に止め、余った魔力は攻撃と速度に転化。それでも自分の体を傷つける魔力を制御できるように、と——シャリーやリイン曹長、なのはさん、フェイトさん、レイジングハート、バルディッシュと一緒に考えてくれた。

ちなみにデザインは偶然にもアルティス家の騎士服に酷似しており、後に零さんから「お前、本当に何も知らなかったんだな」と呆れられたものである。

「……左腕、戦槍。再構築」

《Load cart ridge.》

刀を再構築するマリアージュとほぼ同じタイミングで、日本刀を模したエクセリオンモードのフォルム・フィアがカートリッジをロードした。そして一気に距離を詰める。

「……無駄な抵抗です。あなた一人で、私に敵うはずがありません」  
「勝手に決め付けないでもらえる？ 私、そういうの大っ嫌いだから」  
「努力も何もしないまま、できないと決め付けて諦める——昔の私とそっくりな言葉は、大嫌いだ。お陰で士官学校時代は敵も作ったが、気にならなかった。何も出来ないまままで終わりたくない。出来ないことばかりだった過去に戻るつもりはなかった。」

だから、終わりにするんだと。

《Chain Bind.》

淡紅色の鎖がマリアージュを拘束する。抜け出そうと躍起になるこのマリアージュにはどうやら、自爆機能はないらしい。しかしその腕力はいとも簡単に腕の拘束を破っていた。カートリッジを三発ロードして、再度距離を詰める。マリアージュの両腕とロゼットの刃が鏗り合った。

「閃必倒！」

「……」

装甲に覆われた刀身が展開し、淡紅色の魔力刃を輝かせる。足元には同色の古代ベルカ式の魔方陣が展開し、輝きを増した。

戦闘をろくにしていけないこの空間に漂う残存魔力は心許ない。集束したそれをカートリッジに込められていた魔力で、威力を爆発的に引き上げる。耐え切れずに砕けた左腕に、マリアージュは動揺を見せた。

「戦槍、再構築……！」

「——『桜華一閃』！」

膨れ上がった淡紅色の魔力が爆発し、その衝撃をマリアージュへと伝播させる。耐え切れなかったマリアージュはそのまま爆発し、フロア一帯を揺るがした。

「深琴、大丈夫!？」

「……問題ないよ。大丈夫」

粉々に破壊されたマリアージュを一瞥して、私はスバルの元に戻る。装甲を戻したロゼットが、同時に残存魔力を排出させた。バリアを解除すると、イクスがじつと私を見ていることに気づく。

「そのお姿……あなたはもしかして、アルティスの……?」

「ええ。一応、クオン・アルティスの末裔です」

「やっぱり……彼は、生きていたんですね……」

嬉しいような悲しいような、複雑な表情でイクスは呟いた。兄と民を異世界へ逃がし、クオンが海鳴市まで漂着することになった原因は、ガレア王国の侵攻にある。

とはいえ、それに関して恨みがあるわけではない。そもそもの目的は事件解決と彼女の保護なわけで、それはクオンの遺志と合致する。

……だから、なんて言えば彼女は安心するのだろうか。頭を抱えたと同時に、今まで反応が無かったモニターが開かれた。

『スバル、深琴! 聞こえてたら返事して!』

「ティア!」

『見つけた。……もう大丈夫。映像通信、ちゃんと見えてる?』

モニターの向こうに映るティアはほっと息を吐いて、確認する。

『それとさっきの揺れなんだけど……』

「あ、ごめん。それ私。マリアージュの母胎と交戦して、破壊したせい」

後で詳しい報告を上げるし、今は簡単なもので済ませたい。

『なるほどね……その子が、イクス?』

「うん。そっちは地上?」

『あんたたちの真上よ。七フロア分』

どうやらティアも、スバルの行動を予想して動いていたようだ。一緒に行動していたらしいウエンディが「ほんとにいた!」と驚いているし。

……七フロア分、か。カートリッジには余裕があるし、その位ならなんとか……。

しかし、私の心配は杞憂に終わった。モニターの向こうで、ティアがクロスミラー・ジユを構える。

『今から、天井を抜いて道を作る。そしたらイクスを連れて、上がって来られるわね？』

「うん！」

『え、でも……ティアナが壁抜きつて……』

頷いたスバルとは反対に、ウエンディは首を傾げた。

そう。ティア個人の魔力容量は大きくない。魔力量が少ないということは、ほぼイコールで火力に乏しいということだ。……だからといって魔力量が大きければ大きいほど強いのか、と言えばそうではない。大魔力と高速運用・並列処理は衝突することが普通で、制御は困難を極める。機動六課の八神はやて部隊長や私の直属の上司であるアーウィング執務官はこのタイプで、また適性から後方で指揮と補助を受け持つことがほとんどだ。

もちろん、大容量の魔力を持ちながらも最前線での活動は可能である。しかしデバイスや自身での緻密な制御が必要とされるし、高度なマルチタスクを要求されることから滅多にいない。一応こちらには私が該当するが——スバルやシグナムさんの様に最前衛で戦えるかと問われれば、否だ。

よく「将来的には単純魔力はSS以上で、砲撃も難なく使えて最前衛でバカスカ戦える」とか夢見る学生がいるが……実際そうなれる魔導師や騎士は、はつきり言おう。存在しない。俗に言う妄想の産物だ。でなければ人造魔導師は全員このタイプで作られるはずだし。

と、そんな話は横に置いて。

確かにティアの魔力容量は大きくない。だからこそ彼女は、砲撃魔法を使用することが殆ど無いのだ。魔力容量は遺伝や幼少期の訓練が大きく影響するから、改めて鍛えるのは至難の技だ。

だが、集束魔法ならその話は別だ。なぜなら集束魔法に必要な魔力は、周囲の残存魔力。それが薄ければ薄いほど威力は落ちるが、高い集束技術を持つ魔導師なら——カートリッジと合わせても、壁抜きは可能になる。

そしてティアにその技術を叩き込んだのは、戦技教導隊のエースオブエース——高町なのは教導官だ。

「光の粒が集まって……まるで星みたい……あれは、集束砲？」

モニター越しに映るその光に、イクスは目を細める。

「何故でしょう……あの茜色の星達は、破壊の光なのに……綺麗です」

「……うん。私も、そう思います」

着弾の衝撃に備えて、バリアの内側で待機するスバルが頷いた。

そしてクロスミラージュのサードモード——ブレイザーモードの銃口に、茜色の星が宿る。音声トリガーによる最終セーフティを解除して、その星の輝きは七フロアの床を撃ち抜いた。

ぽっかりと開けられた穴から見えたのは、疲労困憊ながらも笑顔を見せる親友と。

——夜空に浮かぶ、満天の星空だった。

### 13：嵐の後

茜色の星が天井を撃ち抜いた。その向こうから見えるのは闇に浮かぶ星空。そしてその空に繋がる道を、イクスはスバルの腕の中に見ていた。

(何か、昔を思い出しちゃった)

(空港火災のこと?)

(うん。私もイクスの様に、なのはさんの腕に抱かれてこの空を見たんだよなあって)

ボロボロになりながらも、イクスを落とさないようにスバルは抱える。念話を通して聞こえる彼女の声は、嬉しそうだった。

「スバル！ 空に、星が見えます！」

「えっ？」

「それに、海も空気もこんなに澄んで……」

目を丸くするイクスの言葉に、私の脳裏には古代ベルカのデータが過ぎる。海も空も濁りに濁ったベルカの大地。その世界で生きていたはずの人々が、動物が、まるで消えるように死滅した世界。これまで見てきた世界のどことも異なるその環境は、地獄そのものだった。「でも、今の世界はこんな感じですよ。そうじゃない場所もまだまだあるけど……滅らしていくよう、皆が頑張ってます。……生きる希望、出てきました？」

「……その……」

ちらりと私を見て、イクスは俯く。迷っているのかな。やっぱり。イクスの表情を見て、スバルも心配そうに瞳を伏せた。

(いきなりは難しいかな……)

(……そう、だね。特にイクスは昔の記憶を持つてるから……多分余計に)

激変した世界の環境に、イクスの体は……心はすぐ馴染めるだろうか。争いだらけの、それこそ血と炎で彩られた世界しか知らない彼女にとって、その幸福を受け入れることは難しい。

——自分は、ここにもいいのだろうか。それは海鳴市で目覚め

たクオンも通った道だ。でも……。

「ゆつくりでいいんじゃないかな。焦っても何もならないし、生き急ぐことになっちゃうから」

「あ……」

思わず口から漏れた言葉に、イクスは顔を上げる。まだ不安そうな彼女に、私は微笑みかけた。

「……少なくとも彼は、<sup>クオン</sup>そうしてましたから」

もちろん周囲の協力があつたわけだけど、それは彼女だって同じ。私やスバルがいるし、ティアや皆だつている。

「ヴィヴィオ、喜ぶだろうね。また友達が出来たって」

「だね」

「友達……？」

イクスが首を傾げ、スバルは笑った。同時に力強いローラーの音が響き、私たちのすぐ傍で止まる。

「スバル！ ……この馬鹿！ 心配かけやがって！」

「ノーヴェ……」

スバルによく似た赤毛の少女。N2Rの一人であるノーヴェが、勝負な声と顔でそう言った。とはいえ本当に随分心配していたらしく、通信履歴にはダントツで彼女の名前が上がっている。私でこれなのだから、スバルにはその倍と見ても過言ではない。

現に今も、スバルの怪我にノーヴェは驚いている。もちろん、イクスもだ。

「んだよその怪我！ ほれ、二人まとめて連れてつてやるよ」

「……あの。お顔も声もそっくりですが……ご姉妹で？」

「んあ？」

照れくさそうに、けれど加減ができなかったのかノーヴェはイクスに鋭い視線を向ける。こらこら、とティエチが通信でノーヴェを窘めた。

けれどスバルは、それはそれは嬉しそうに笑っている。

「えへへ。妹」

「不本意ながらな！」



その様子に肩を竦めて、私はスバルからイクスを預かった。一方のスバルはノーヴェに背負われて、後方で——いつの間にか前線管制付近まで展開していたけど——待機している救護班とマリエル技官まで向かう。スバルの怪我を見たマリエル技官は顔を青くして、一緒にいたギンガさんも慌てていた。

「マリアージュの反応が消えたそうだ」

防護服の再装着を行っていると、アーウィング執務官がモニターの一枚をこちらに飛ばす。先程まで無限にも等しい増殖を繰り返したアイコンは、綺麗さっぱり消滅していた。とはいえ迎撃にあたっていた皆の疲労は限界寸前で、立っているのもやっとの状況で。秋葉さんに至ってはチンクの肩を借りている状態だ。これは酷い。

「じゃあ周辺警戒しつつ現場の確認と、自力で戻れなさそうな迎撃メンバー拾って来ましょうか」

「あ、あたしも手伝う」

「悪いな、二人とも」

立候補したノーヴェと二人、執務官に見送られて私は現場に戻る。

——結局全てが片付いたのは、闇色の空に太陽が昇り始めた頃。限界まで作業を続けて、スバルの部屋で泥のように眠る頃には既に朝日は昇っていて。

「……これで、良かったんですよね？」

夢の中に現れたクオンは私の言葉に頷いて、あっという間に消えてしまった。

そしてその日から、彼が夢に現れることは——二度となかった。



翌日のほぼ真昼から再開された捜査活動は、大忙しだった。

今回の「マリアージュ事件」は、ルネッサ・マグナス執務官補による複合事件として扱われることになって——それが厄介にも物議を醸した。

連続殺人はトレディアの生存を匂わせるためと、証拠隠滅のため――

―彼女自ら、手を下していた。

管理局員が、そして臨時とはいえ自ら選択した副官が犯罪を犯していたという事実。ルネツサの計画そのものや、計画の一部だった都市襲撃を未然に防いだということとティア自身は重大な処分を免れた。とはいえ活動自粛と減俸処分は免れなかったけれど……この程度で済んだ、と見ていいのか。それは私にも分からない。

一方のイクスは、救出されたその日から海上隔離施設に保護されて、ずっと眠り続けている。その原因は分かっておらず、スバルとヴィヴィオが様子を見に行っているけれど……起きているイクスと会うことはできていない。

事後処理と報告、その他諸々含めて、事件が終結したのは火災から一週間と少し。今日でその日を迎える。

「じゃあ、ティア。お疲れ様でした」

「うん。……悪かったわね。結局最後まで付き合わせちゃって」

「気にしないで。それが仕事なんだし」

報告書を提出して、ティアと並んで救助隊の更衣室に入る。とはいえティアはこの後私用で108隊に向かうらしく、ベンチで休憩していた。

「お礼って訳じゃないけど、夕食奢るわ。スバルも一緒だから」

「いいよ。そんな気にしなくても」

……と、一応言っておく。スバルと一緒にすることは、八割方の確率で逃走不可能だ。嫌いじゃないんだけどね。

「そういえば、静真さんのレポート……大丈夫そう？」

「まあ、提出まで二週間はああるしね。七割程はもう書き終えてるし」

何だかんだで、兄は計画的に物事を片付ける性格だ。今回のレポートも資料は提供されたし、内容も「オルセアの内戦の原因だと考えるもの」。考えられる原因を片っ端から調べ上げ、解決策を考える。現在はアーウィング執務官のマンションに入り浸っているとか。伯父夫婦の家では資料が置けず、研究室では健康に悪い——という判断だ。零さんと彼方さん、そして秋葉さんが交代で見守っている。……まあ妹としても、見張りが大勢いるほうが安心ではあるが。

しかし今一番の気がかりは、ティアの横顔に翳りが見えること。丁寧に畳んだ制服を鞆に仕舞い、アイボリーのシャツと黒のシフォンスカートに着替えた私は、思わず口を開いていた。

「……ティア、無理してない？」

信頼していた——それこそ事件後には正式な補佐官への指名も考えていた人物の裏切り。戦いの意味とその虚しさを世界に知らしめるその計画を知った時、私は驚いたし——同時に「やっぱり」と納得した。他人を疑う仕事とはいえ、世界が綺麗事で回るはずが無いことを知っている。

でも、まだ私だからいい。これがヴィヴィオや彼女の友達、果てはこれからの命まで巻き込むとならば話は別。彼女達の目に映る世界が平和で安全で……希望に満ちたものにするために自分は戦っているのだと、胸を張れるから。

そしてそのために戦っている人を、知っているから。

「無理、と言うか……もっと早くに、ルネの悩みに気づいていたら……とは思ってる。後悔しても仕方ないとは分かっているけど……」

——一緒にいる間、もっと話し合えたらよかった。そう呟いて、ティアは顔を俯かせる。そして隣に座った私の右肩に、こてんと頭を乗せた。額を乗せる形で、その表情は見えない。

「……ごめん。ちよっと、肩借りるわ」

「いいよ。私のなんかで、よかったら」

「……ありがとう」

呟く様なティアの声は、湿り気を帯びていた。



それからしばらくして、場所はスバルのマンション。2週間ぶりのオフを満喫しているだろう彼女へのお土産はアイスクリームだ。

「ただいまー」

「あ、お帰りー」

慣れた足取りでリビングまで来た私を出迎えたスバルに、袋を手渡

す。中身を見て目を輝かせるその様子に、思わず笑みが零れた。何だかんだですつと泊り込んでいた身としては、土産の一つでもないと申し訳なくなる。

「ごめんね。何だかんだで泊り込みじゃって」

「全然いいよ。楽しかったし、料理も美味しかったし。あ、お茶淹れるね」

言って冷蔵庫へと向かおうとしたスバルの首に下がるマツハキヤリバーが、通信を告げた。

「また着信……はい。スバルです」

『あ、マリーです。スバル、今空いてるかな?』

「はい! 二週間ぶりのオフですよー」

通信の相手はマリエル技官。何事かと首を伸ばすと、技官はややぎこちない笑みを浮かべていた。心臓が早鐘を打つように、鼓動が速くなる。

『あのね、イクスが目を覚ましたの。会いに来れる?』

——何でだろう。嫌な予感がする。マリエル技官の表情とか言い方が、いつもと違う気がして。

そして、その予感は的中した。喜ぶスバルに、申し訳なさそうに技官が口を開く。

『ただね……伝えておかなきゃならないことがあるの。二人とも……落ち着いて、よく聞いてね』

続けられたその言葉と、それが示すだろう意味と未来。

それらを否定するように、私は瞳を閉じた。

14:1000年

潮風の香りに葉が揺れ、太陽は穏やかな光を地上に届ける。青い空、白い雲、そして紺碧色の海。

その真上に立てられた海上隔離施設には、瑞々しくも咲き乱れた草花が訪れた者の目を楽しませる。決してそういう施設ではないのだが、こういった植物に触れ合うのも情操教育の一環らしい。この施設に収監されるのは年少者や若年者の魔導犯罪者。そんな彼らの更正に必要なのが自然溢れる場所と優しいスタッフだ。そのせいか面談や差し入れの手続きも結構スムーズに行うことが出来る。

またこの施設には戦闘機人技術等に詳しいマリエル・アテンザ技官がいるためか、違法技術で生み出された被害者を受け入れることもあった。今回——イクスがこの施設に保護されたのも、そのためである。

——海上隔離施設。そこを訪れた私とスバルは、イクスが待っていると小高い丘に来ていた。そこは施設の中でも数少ない外が見える場所で、海と空、その両方が見える唯一の場所らしい。

そしてマリエル技官の言うとおり、イクスはそこで待っていた。

「イクスっ」

「あ……スバル。お久しぶりです」

「うん。お久しぶりです」

イクスの隣にスバルが座り、その隣に私が座る。私の姿を確認したイクスは「深琴も。お久しぶりです」と声をかけた。そんな彼女に微笑んで見せるが、やや頬が引き攣っていたのは気のせいではない。ばれない様に頬を動かして、和らげる。

「目覚めの気分はどう？」

「快適です。お茶や食事や、お菓子まで頂いてしまいました」

「そっか」

それから私達が来るまでは、ここでこの世界の風景やビデオレターを見ていたらしい。あの日から彼女宛に届けられたメールは、ヴィオや教会の関係者、それに古代ベルカを生きた守護騎士達の皆さ

んがわざわざ送ってくれたもの。その殆どが機動六課の関係者という点には少々思うものがあるが、それだけあの部隊の隊員たちへの絆があるのだらうと思ってみる。

「はい。聖王陛下からのものも。かわいらしい方で、驚きました」

「でしよう？ イクスと話したがってたんだけど……あ、通信繋がるかな」

呟いて、スバルはマツハキヤリバーからヴィヴィオの端末の番号を呼び出した。

『はい、ヴィヴィオです』

「あ、スバルです。今お昼休み？」

サウンドオンリーとはいえ、すぐに返事が返ってきたということは少なくとも授業中ではないのだろう。スバルの質問に頷いたヴィヴィオはイクスの件を聞いて——すぐさま映像通信に切り替えた。曰く「全力で大丈夫です！」。

『えっと……ごきげんよう、イクスヴェリア様』

「あ、聖王陛下……メール、拝見しました。ありがとうございます」

『いえー、とんでもない。失礼とかなかったですか？』

「いえ」

「ちよ、やめなよー。二人してそんな丁寧なー」

元は古代ベルカの王族同士。そしてヴィヴィオは現在ザンクト・ヒルデで学ぶ学生だ。礼儀正しさをモットーにするのは聖王教会由来のものでもあるためか、口調は非常に丁寧なもの。見た目の年齢は10歳かそこらのはずのイクスと、小学三年生のヴィヴィオ——そんな丁寧な口調で話さなくても。そう思ったのはスバルも同じようで、苦笑じりで二人の間に入った。ヴィヴィオも『そうですね』と頷いている。

「あの……陛下？」

一方のイクスは真剣な表情で、ヴィヴィオを見ていた。

「あなたのお話……あなたのお話……とても勇気付けられました。陛下は素敵な家族と、ご友人をお持ちでいらっしやいます」

『イクスも、もうスバルさんや深琴お姉ちゃ……深琴さんと仲良しで

しよ？ 私もお友達になれたらなああって思います』

「光栄です」

そう言って微笑んだイクスに、ヴィヴィオは苦笑している。

『とりあえず、“陛下”はやめない？ ヴィヴィオって呼んでくれた方が……』

「あ……失礼しました。じゃあ……『ヴィヴィオ』」

『失礼とかないよ。ありがと、イクス』

微笑ましいその光景から、私は視線を逸らした。脳裏にはスバルのマンションで聞いた、マリエル技官の言葉が過ぎっている。

「昏睡……？ イクスが、ですか？」

『今朝分かったの。機能不全なんだと思うんだけど……今の技術じゃ治療が出来なくて……』

そして自然な形での目覚めは、今日が最後かもしれないと。

——古代ベルカ時代の王の体は、大なり小なり人の手による改造を受けている。聖王家が保持する戦船の鍵としての機能や、ガレアの王が保持した屍兵器の生体コア機能。私達アルティスもそれは同じで、最低限の魔力さえ残っていれば、負った傷はどんなものであるかと自然に治癒させてしまう。例えばそれが臓器を欠損する程の怪我だとしても、魔力と少々の時間さえあれば再生できた。私がこれまで——機動六課時代から怪我をしてもすぐ回復できたのは、アルティスの遺伝子に刻み込まれた機能が発動したから。

それでも、アルティスの改造はその程度で。聖王家のゆりかごが破壊された今、ヴィヴィオやフェアに『ゆりかご』の鍵としての機能は残されていない。

だが、イクスは違う。今の彼女にマリアージュの生成機能は残されていないとはいえ、長い間ずっとガレアの王として進軍を命じ、兵士を生み出してきた。彼女の肉体構造は私達や聖王の——ヴィヴィオのものとは異なっていて、代替わりをすることなく、ずっと一人がその使命を背負っていたと言う。

そしてそれらの技術はアルハザードから提供された、オーバーテクノロジー。失われた技術であるそれらを治療するだけの技術力を、管

理局は持ち合わせていない。これからに期待するしかないのだと。

『じゃあ、通信で長話もなんだから……イクス』

「はい、ヴィヴィオ」

『友達になってくれて、ありがと。イクス』

「こちらこそ、ありがと。ヴィヴィオ」

そして期待して、待つしか出来ない自分達の無力さに——私とスバルは言葉を紡ぐことが出来なかった。何より無邪気に笑う二人に、その事実を伝えることができない。

思わず唇を強く噛んだ私は、痛みに顔を顰める。そつと唇に触れた指には血が付着していた。もう一度指で唇を拭いてみると——そこに血液が付着していた様な痕跡は無い。

『じゃあスバルさん、深琴お姉ちゃん。ありがとございました！』

「うん！」

『またねー、イクス。ごきげんよう』

「ごきげんよう」

最終的には「お姉ちゃん」呼びに戻ったヴィヴィオは、イクスに声をかけて通信を切った。イクスも印象年齢が近い人と話せて——そしてその相手が聖王陛下であることもあるだろうけど——嬉しそうで。私やスバルだと、どうしても「お姉さん」になるだろうから。

「スバルとは、なんだか落ち着きます。助けて頂いたからでしょうか？」

「そっかー。何か嬉しいな」

言って笑顔になるスバルを見たイクスは、私を見た。

「深琴は……懐かしい感じがします。クオンと一緒にいるみたいですよ」

「そっか……私自身、ご先祖のことは最近まで知らなかったから」

機動六課時代に判明していたのは、古代ベルカの血を引いている事だけだったし。海鳴の秋月本家にはいくつか彼らが生きた時代の書物や物品が残されているが——その存在を知ったのも、六課を卒業した頃だ。

一方のイクスは、そんな私を見て、懐かしそうに目を細めている。



「髪も目の色も、本当によく似ています。あの騎士服も……そしてその強さも」

「……そうですか」

齒切れの悪い私やスバルの言葉に気づいたのか、イクスは笑って首を傾げた。

「……聞きましたか？ 私のこと」

「……うん、聞いた。眠っちゃうんだよね、これから」

「今までもそうでしたから。……あ、眠っている間は、安全な場所に置いて頂けるそうですので。安心ですね」

「当然だよ。子供が眠るなら、安心して休める場所じゃないと」

「……今までは、ね」

無邪気に言うイクスに、スバルが笑う。しかしそれも一瞬のこと  
で、イクスは瞳を伏せた。

「目覚めてはマリアーヂュを生み出して、戦地へ送り出して……城の中以外は、灰色の空と不毛の大地……血染めの泥濘ぬかるみしか、世界を見たことが無くて……」

ぽつぽつと語るイクスの言葉に、クオンから受け継がれた記憶が蘇る。空は濁り、植物は生きるよりも早く枯れ果て、戦場には野晒しにされた兵士の遺体がそのまま。兵士は疲れ果て、それでも武器を片手に戦い続けて。

それでも自分達の国と民を守るため——戦を自分達の勝利で収めようと、王たちは戦い続けた。その身を異世界からの技術で作り変え、力の象徴となり、人の領分を越えた力で万騎を屠る。そんな時代だった。

「今度はいつ眠れるんだろう……いつになったら殺さなくてよくなるんだろうって、ずっとそんなことを考えていました」

「……だから、クオンに言ったんですよね？ 『あなたとなら、分かり合えると思ってたのに』って」

「はい。……彼らの言葉は、他の国には理解されないものでした。当時は特に、少しでも有利に争いを進めていくことが重要とされてきましたから。……だから、彼らならこの時代を少しでも良い方向に変え

てくれるのではないかと、思っていました」

けれど実際は、できなくて。クオンは兄と民を守るためにイクスやマリアージュと戦い、一方のゼロは民を率いて平和な異世界へと逃げ、自分達の信条を貫いた。それは彼女を始め、アルティスの民以外には理解されなかつただろう。

現に当時はアルティスを示して軟弱だの何だの言つて侵略しようとしては返り討ちにあつた王家が、それこそ星のようであつたとか。「けれど、あなた達と会えて、それは違つたのだと分かりました。自ら死のうとしてる命さえ、命を賭して救おうとしてくれる人がいる。大切な人を守るためだけに戦い、不必要な力は振るわない。私や、私の時代の人々が壊してしまつた世界を、こんなに綺麗に育ててくれたのは……きつとお二人の様な人達なのだと」

「私達は別として、この世界には、いろんな人が生きてきましたから」「はい」

素直に頷いて、イクスは微笑む。

「私は私で、自分を——自分の周りの世界を変えなければいけないかつたんですね。……そうしたらもつと早く、変わっていたかもしれない」

「過去は過去ですよ。大事な今は今と、これから」

スバルの言葉に、私も頷いていた。過去は嘆いても変わらない。でも、今とこれからは違う。……自分の手で、切り開いていける。

「その通りです。そんな簡単なことに気付くのに、千年以上もかかつてしまいました」

「かかりましたね」

「かかり過ぎです」

穏やかな笑みを浮かべて、イクスは言う。

「今のこの世界は、綺麗ですね」

「……はい」

「青い空と……紺碧の海。綺麗な風」

「……ちよつと眠つて、また起きたらさ！ いつでも見られますよー！」  
遠くを見る様な目をするイクスに、スバルは必死に語りかける。そ

の声は湿り気を帯びていて、どうやらスバルも泣いているらしかった。私の視界がぼやけている理由も、同じだから。

「ここだって綺麗だけど、山も、海も、空も、もっともーっと綺麗な場所たくさんあるんだ！ 紹介したい人だってたくさんいる。食べてほしい物も、見てほしい物も、すごい、たくさん……」

「……そうですね。そういった、綺麗で素敵なモノ全部、あなたと一緒に触れていきたく……」

イクスの言葉は、過去形だ。それでも彼女は幸せそうで……その姿に、私は袖で涙を拭う。親友として泣くのはスバルに任せた。この体に流れる血のためにも、せめて涙は拭わなければ。クオンの遺志を継いだ者として、秋月深琴として。

「……泣かないで、スバル」

両目から涙を零すスバルを見て、イクスは微笑んだ。

「私が次に目を覚ました時……その時の目覚めは、きつと素敵です」

「っ……イクス、私……」

「……えいつ」

それでも泣き止むこと無いスバルに苦笑混じりの笑みを浮かべたイクスは、細い指でスバルの額を弾く。ぺちつと軽い音と衝撃に驚くスバルに、イクスは笑った。

「人の感謝に泣いたりする子には、デコピンです」

「……そんな、変なこと覚えて……」

「教えたのはスバルです」

言つて、スバルとイクスは笑う。その原因は分からないが、あの時——私と合流する前にも似たようなことがあったのだろう。そして一頻り笑ったところで、イクスはゆっくりと体を伸ばした。

「たくさん笑ったら、眠くなってきました。優しいスバル、少し肩を借りても？」

「肩でも胸でも、いくらでも」

頷いたスバルに、イクスは嬉しそうに微笑んで——私とスバルの間に移動する。そして二人分の膝に、頭を乗せた。暖かさに喜ぶ彼女の頭を、スバルは優しく撫でる。

「……？ スバル、それは？ 何故頭に触れるのですか……？」

「撫でてるんですよ。『いい子だね』って」

その感触に、気持ちよさそうにイクスは目を細めた。もう限界なのだろうか、呼吸もゆっくりとした速度に変わっていく。

「いい気持ちです……眠くなつて、きましたよ……？」

「うん……いいですよ。ゆっくり眠って」

「大好きです……ありがとう、スバル、深琴……お休み、なさい……」  
ゆっくりと閉じられていくイクスの瞳を見つめて、スバルは消え入りそうな声で呟いた。

「……お休み。イクス……」

——こうしてイクスはいっせ覚めるか分からない眠りについて。その体は聖王教会の聖遺物管理部が保有する海沿いの教会の一室に保護された。広い空と緑の山と野原。そして海を望める展望の一室で、静かに守られながら。

けれどその寝顔はとても穏やかな——まるでお昼寝している子供そのもので。年若き聖王陛下や彼女の友人、そして古代ベルカの騎士や融合騎達が、色とりどりの花束や写真を手に訪れるそうです。



「ただいまー」

それから、夕方。スバルの部屋に帰ってきて、昼食も取らずに私とスバルはボーっとしていた。何をやる気にもなれず、口を開けばイクスのことしか出てこなさそうで。

ちようどティアが帰ってきたのを、二人で出迎える。とはいえやはりティアは鋭く、異変に気づいたようだった。「何かあった？」と首を傾げている。

「今日のお昼くらいにね、イクスが起きたんだけど……また眠っちゃった」

「……そうなんだ」

「少し長い眠りになるって。10年か……1000年か」

「……そう」

スバルの言葉に頷きながら、ティアはそつと私に視線を向けた。心配そうなその視線は、覚えがある。それからスバルはちよつと迷つて、口を開いた。

「イクスと話して、帰ってきてぼーつとしててき。その時、ティアの副官の子……あの子が言つてたつて事、ちよつとだけ……ほんのちよつとだけ分かつた気がするの」

「……どんな風によ？」

一先ず三人とも座つて、スバルの言葉を待つ。

「生きてるとき、悲しいことつてたくさんあるでしょ？ ……大切な人を亡くしたり、会えなくなつたりとか」

「……そうね」

「だけどき、心はすごく悲しいのに……半日食べなきや、ちやんとお腹は減るんだよね」

「うん」

「悲しいのにご飯食べて、眠くなつたら眠つて、やらなきやならないことやつて……そんなことやつてるうちに、悲しかった思い出が消えていつて……そしたら悲しかったことまで嘘になつちやうような、そんな気がして。……それで寂しかったんじやないかなあつて」

ああ、なるほど。そう言われればそうかと、納得する。

親に捨てられたことが悲しくて。伯父の訓練は厳しいし、全然強くなつてる感じがなくて、自分の存在に価値が見い出せなくて、泣いていたあの頃。そんな思いをしたくなくて必死に強くなるうとして、訓練に打ち込んでいた士官学校時代は、確かにその記憶を忘れていた。人付き合いを犠牲にしたその時間が終わつて、六課に入つて——気がついたら、あの頃の私は何で泣いていたのか。その理由を忘れていた。

ルネッサも、そうだったのだろうか。考えていると、ティアは私とスバルに問いかける。

「……じゃあ今夜はその話、ゆつくり考えようか。お店はキャンセルする？」

「平気！ イクスは眠っただけなんだし、防災士長がうじうじ考えてたら恥ずかしい！」

イクスが眠ったあの場所で、二人して——マリエル技官もN2Rの皆がそつとしてくれたお陰で、涙が枯れるほど大泣きしたせいも、涙は出てこない。イクスが目覚めてからの「これから」を、真っ直ぐに考えることが出来る。

「明日も仕事だもん！ しっかり食べなきゃ！」

「そうだねー」

「ん、お互いにね」

ティアの着替えを待って、三人揃って外に出る。広くて大きな空は、優しい茜色に包まれていた。

## 15：それから

青い空、白い雲。夏の太陽が本格稼動する前の海鳴市は、ミッドチルダ同様やや汗ばむ気候だった。季節は7月。無理も無い。

そんな海鳴市は、秋月家が所有する土地に設けられた墓地——というか、秋月家が代々信仰している氏神を祀った神社の敷地内に設けられた墓地の一角。太陽が上がりきる前のその時間に、私はそこを訪れていた。とは言っても私だけではない。他にも静真お兄ちゃんやアーウィング執務官、そして零さん、彼方さんが一緒だ。

「つうかさ、『秋月』って名前だけで複数あるってどういうことなの」「そういうことです。いわゆる本家や分家ですね」

その中でも一番目立っているのが、本家——クオン・アルティスも眠る墓である。

マリアージュ事件から半月。事件中臨時補佐についていた私は、事後処理やら何やらでようやく休暇を取得した。お兄ちゃんは休日で、零さんと彼方さんは公休日。零さんの「使い所がいまいち分からない有給休暇を使って墓参り行こうぜー」という一言を発端に、この計画が実行された。ちなみにチケットは既に零さんが入手済みだったりする。

「そういうえば、秋葉さん大丈夫でした？ あの後だいぶぐったりしてましたけど……」

マリンガーデンを襲った火災とマリアージュ。その迎撃に当たった一人である秋葉さんは自力で立ち上がれないほどに疲弊していたことを思い出す。

「今までに比べたら回復も早かったよ。様子観察含めて3日以内に現場復帰したし」

「……多少の無理やり感が否めないがな」

彼方さんの言葉に頷きながらも、執務官が小さく呟いた。一方彼女の師匠に当たる零さんは「大丈夫だろ」と軽い調子である。

「あいつももういい大人だしな。余計な口挟む必要は無いだろ」

「とか言いながら、一番心配してたのは兄さんだけどね」

「そうだったな。医務室前で不審人物のごとくうろろうと」

「るっせーよ！」

零さんは格好つけてはみたものの、あつという間に彼方さんと執務官によってその調子を崩された。心配性なのか、優しいのか——恐らくは前者だろう。

「……仲いいよなー、相変わらず」

一方レポート地獄に打ち勝った兄は、やや寝不足な顔で呟いた。それでも頭は冴えているのか、無駄の無い動きで墓に水をかけていく。手入れは怠っていないらしく、汚れやゴミは何一つ見当たらない。

そして諸々の作業を終わらせ、手を合わせる。

(……本当に、これでよかったのでしょうか)

イクスは、いつ目覚めるとも分からない眠りについた。クオンの願いは彼女たち古代ベルカの王を、その宿命から解放すること。確かに解放することは出来た。イクスはもうマリアージュを生み出せないようプログラムされており、彼女と量産された母胎を無くしたマリアージュは生み出されることは無い。

だけど、それはあくまでも「冥王・イクスヴェリア」を普通のイクスヴェリアにしただけで……今の技術では治療できない肉体はまた別問題ではないだろうか。今の状況では、どんなに頑張ってもイクスヴェリアをヴィヴィオの様な「普通の少女」にすることは出来ない。

それが、私には気がかりだった。

ほんの僅かな時間だけど、言葉を交わし、触れ合って。今でも座った時とか、ふとした瞬間にイクスのぬくもりが思い出されて——寂しくなる。

ヴィヴィオと友達になって喜んでる顔とか、泣いているスバルの額を弾いた事とか、この世界を「綺麗だ」と喜んでるその姿が、今でも鮮やかに蘇るのだ。

もっと出来る事があったんじゃないのかと、答えの無い疑問が渦巻いて消えない。

『いいんだよ、これで』

穏やかな、クオンの声が鼓膜を刺激する。声を聞き取ったことに気



づいたのか、その声は優しく続けた。

『彼女は笑っていただろう？ それが答えだ』

——大好きだと、ありがとうとイクスは笑っていた。眠りにつくその直前に、けれどしつかり鮮明に。それを思い出すと同時に、その声はまた遠くなる。

『兄さんの子孫の顔も見れたし——これで、少しは休めそうだな。……ありがとう。お疲れ様』

「深琴！」

声が掻き消えると同時に、右腕を引つ張り上げられる。……あ。足に力が入ってない。そんな私の顔を、執務官が覗き込んだ。

「大丈夫か？ どこか具合でも……」

「すいません……大丈夫です」

ぼーっとしながらも、墓を見遣る。何の気配も感じないし、声も聞こえない。

けれど、そこに彼の——クオン・アルティスの姿が見えた気がした。

「……で、この後どうするよ」

「ひとまず静真君たちのご両親に挨拶でしょ」

「土産ついでに翠屋行きましょうか。店長達に挨拶したいし」

既に先を歩く三人は、この後の予定を考えている。さっきの声は、私にしか聞こえなかったらしい。

「深琴？」

「いえ……行きましょうか」

最後にもう一度墓に礼をして、先に行く三人を追いかける。雲ひとつ無い青空は、まるであの日見上げた空と同じで、少し寂しくなってしまうけど……それでも笑顔だったイクスを思い出した。あれからスバルも訓練や出勤の帰り道、青空を見るとイクスのことを思い出すらしい。

会って話げできたのはほんの少しの間だけ——その時間は、消えることが無い大切な思い出。いつか彼女が目覚める日まで、私もまたその時間を忘れることはないだろう。

隣を歩く執務官の手をそっと握って、小さく呟いた。

「大好きです」

「……知ってる」

さざらりと返されてしまったけれど、その手が解かれることは無い。  
その事実には安心して、私は瞳を閉じた。

(イクス……ずっと、待ってるからね)

——青空の下でまた会える、その日まで。

## 特別編

### Report 01：秋月深琴のある1日

「そういえば、深琴って普段何してるの？」

勤務後のお風呂上り、いつも通りフワード5人で休憩室を占拠していた時だった。隊員達の進路が確定したとか話していたとき、スバルが言った。

スバルの言葉に、ティアナは「確かに」とジューズ片手に私を見る。

「深琴の一日って、想像できないのよねー。オフィスの時とか特に」

「一日って言われても……大体みんなと一緒にだよ？」

訓練して、ご飯食べて、オフィスで事務処理こなして……特別変わったこと、していないんだけど。

「でも、ロングアーチの普段の仕事って……僕、あんまり思い浮かばないです」

「私もあんまり……」

「キョクー」

エリオとキャロの言葉に頷くように、フリードが鳴いた。

《Shall I explain from me, buddy?

『私から説明しましょうか?』》

「そうだねえ……ってちよつと待って。何か嫌な予感がするのは私の気のせい?」

宝石部分を発光させて尋ねた愛機にツツコミを入れる。しかし愛機はそれに答えることなくさらに宝石部分を発光させた。

《First of all——『最初は……』》



11月も終わりに近づいた頃の、朝4時きっかり。ベッドの片隅に置いていた目覚まし時計が鳴り出した。それと同時に窓にかけられたプリーツスクリーンが一斉に開く。窓の外はまだ暗く、日の出まで

時間があつた。中でも異彩を放つのは、ベッドの上でもぞもぞと動き出す毛布の山。その中から右腕を伸ばして、私は鳴り続ける目覚まし時計を止めた。ついでにもう一つタイマーをかけていたデジタルタイプの時計のスイッチも止めておく。

それを確認して、私は躊躇い無く毛布から抜け出した。それと同時に、時計の横にかけられていた私のデバイス・ローゼンクランツが声をかける。

《Good morning, buddy.》

「……おはよー……」

支給された冬用のシャツと、自前で持ち込んだ黒色の丈が短いスパッツ。その姿で体を伸ばして、やや覚束ない足取りで室内の洗面台へと向かう。冷水で目を完全に覚まし、訓練で使用するものとは別のジャージを着込んだ。部屋に戻ってローゼンクランツを首にかけ、小さい冷蔵庫から取り出したゼリータイプの栄養補助食品を手取る。

「今日も一日晴れ、か……」

手にしたパツクの蓋を開け、口に含みながら本日の天気や気温を確認する。爽やかな林檎の味が口いっぱい広がるが、補助食品特有の味もまた同時に広がり、私は思わず表情を歪めた。しかし飲み込めない味ではないと一気に嚥下する。必要なのは活動を維持するための栄養素で、時間もかからないのだから味は二の次三の次。

——本日は一日中晴れているが、風は冷たく、体感温度は低いようだ。

《Cautions are required so that the body may not be cooled. 『体を冷やさないよう、注意が必要ですね』》

「だね。温度設定とか気をつけなきゃ」

空になったパツクをゴミ箱に入れ、時計を確認する。時間は午前4時15分。ちょうどいい時間だ。部屋の施錠をし、そのまま寮の玄関で靴を履き替える。冷気を孕んだ風に辟易しながらも外に出て、念入りに柔軟をし、ランニングを行った。

毎朝30分かけて寮の外周と隊舎から寮へ繋がる道を走る。10

歳までの6年間入院していたせいで、必然的に体力が無く、持久力も無い。長時間の戦闘ではスタミナ切れを起こすこともある。そのため戦闘中は一挙手一投足のエネルギーを膨大な魔力で補うという暴拳に出るほどだ。魔法を学び始めてからの「癖」となってしまったそれを、何とかして矯正しようと習慣にしているのが朝のランニングだった。お陰でここ4年間は特別病気をすることもなく、健康そのもので過ごしている。

「ゴールっ」

午前4時45分。息切れすることなく予定通りランニングを終えて、始めと同じように念入りにクールダウンをする。5分間かけてじっくり体を柔軟させた後は、深呼吸をして瞳を閉じた。仮想戦闘データを用いた回避訓練に入る。

《Pattern—E018, start.》

ローゼンクランツのアナウンスと同時に、私の心象世界に仮面を着けた影にも似た仮想敵が登場する。彼らの攻撃一つ一つを回避し反撃すること、そしてそれを実際に体感することで限りなく実践に近い経験を積む事が出来た。ちなみに朝の自主訓練で使用するのは陸戦データ、仕事の合間に使用しているのは空戦データと使い分けている。

「——っ」

仮想敵との距離を感じ取り、攻撃を回避。同時に自分の反撃圏内に入った敵には容赦なく拳を打ち込み、蹴り飛ばす。それを繰り返すと20分、ようやく仮想敵が全滅した。

《Pattern—E018 clear. continued?》

「ううん。止めとく」

息を吐いて、目を開く。体全体が汗ばんでいた。心象世界で行われる戦闘をイメージし続けることもそうだが、その世界で自分と自分以外の存在の動きを継続しながら体を動かすというのは非常に困難である。

(……でも、なのはさんは9歳の頃にはやってたんだよね……)

同郷の出身であり、出会ってから今まで目をかけてくれた

高町なのはは9歳の頃に偶然魔法と出会い、事件に巻き込まれた当時からこの訓練を行っていたと聞く。もちろん戦闘スタイルが異なるため厳密には同じ訓練では無いのだが。

「……シャワー、浴びよう……」

深い溜息を吐いて部屋に戻った私は、そのままシャワーの準備を整える。ちようどいい温度に設定されたお湯を全身に浴びながら、本日の予定を表示させた。

(今日は午前中が訓練なんだよね。午後はオフィスだから……)

脳内で予定を立てながら、シャワーヘッドに手をかざす。機械が反応して水流を止めたことを確認すると、私は洗面所に繋がる扉を開けて、用意していたタオルで体を拭いた。次に纏うのは訓練用の冬用ジャージである。白い長袖のシャツと、紺色のズボン。腰のポーチには応急手当のセットとスピードローダーに嵌めこんだカートリッジが収納されている。時間は朝の5時20分。早朝訓練は6時からなので、若干の余裕があった。

固形タイプの栄養補助食品を食べながら、私は通信モニターを開いて夜のうちに届いたメールの確認をする。届いていたメールは一通。一通は卒業した士官学校の友人からの他愛ないもので、もう一通は実母である秋月遥から。正月休みについて、申請が降りるなら帰って来なさいという誘いだった。

(もう申請してるよ……っつと)

来週になれば年末年始の特別シフトが公表される予定であるという旨を加えて、メールを送信予約に入れる。設定時間は朝の10時だ。

食べ終わった補助食品の袋をゴミ箱に放り、歯磨きをすれば時間は5時半。ローゼンクランツを携えて玄関に降りると、ちようどいいタイミングで機動六課前線フォワード——スターズ分隊のスバル・ナカジマとティアナ・ランスター、ライトニング分隊のエリオ・モンディアルとキャロル・ルシエ、飛竜フリードリヒが降りてくるところだった。

「今日もやるぞおー!」

スバルの掛け声に、ティアナを除いた三人分の拳と声が上がった。

◇

機動六課前線フォワードの訓練時間は、普通の隊員達とは異なる。

まず最初に行われる早朝訓練。朝6時から7時30分までの1時間半行われるそれをこなすと、8時30分までの休憩がある。休憩と言う名目ではあるが、実質朝食を取る時間だ。

そして8時30分。大部分の隊員達の始業開始に合わせて、午前の訓練が開始される。訓練レベルが上がった今では最初に個人スキルを磨き、11時から昼休憩までの残り時間いっぱいを使った模擬戦が行われていた。

もちろん、今日も。

「さて。そろそろ模擬戦に入ろうと思うんだけど……みんな、大丈夫？」

防護服を纏い、手に愛機・レイジングハートを携えてスターズ分隊長兼戦技教導官であるのはさんは私たちに問いかける。今日の模擬戦はなのはさん対フォワード5人。数では圧倒的にこちらが有利に見えるが、実際そんなわけではない。

スバルとエリオがツートップでなのはさんに向かっていく。ティアナは指揮と射撃、幻術を駆使してキャロと共に前線のサポート。私は後衛への攻撃を捌きつつクロスからミドルレンジで遊撃し、必要であれば後衛の補助に参加する。

結果は――。

「後もうちよつとだったねえ」

最後のスバルとエリオによるフォーメーションが見破られ、敗北。遠くで響く、お昼休みを告げるチャイムに気が抜ける。

「今日はみんな、午後はオフィス待機だからね。疲れてると思うけど、頑張ろう」

「はいっー」

「それじゃあ、今日の訓練はお仕舞いです。お疲れ様」

「お疲れ様でした！」

一糸乱れぬ挨拶をして、フォワード陣は一旦寮まで戻った。私も共用のシャワールームで汗を流し、六課の隊員制服に着替える。

「来週から12月だよ。早いねえ」

「そんな実感無いけど、早いものよね。ここも後四ヶ月かあ……」

「ですなえ……」

山盛りのスパゲッティを分けながら、そんな話をする。ミッドチルダには「クリスマス」という概念が存在しないが、大体24日や25日くらいに皆で集まって、今年一年に感謝と来年に対する祈願を行うのが一般的らしい。とはいえその中身は日本式のクリスマスと変わらない。違いを挙げるなら、「クリスマス商戦」なるものが存在しないことや、「サンタクロースがプレゼントを配りにこない」点だ。まあ後者は地球でも伝承扱いだけでも。

「じゃあ、悪い子にはプレゼントは無いんですか？」

「一説ではね。まあ由来になった逸話と今のサンタクロースは大分違うけど」

入院中はその時期になるとそわそわする多くの子供達と接していたが、翌朝がっかりした彼らの顔を思い出す。寝たふりをして待っていたが、実際枕元へプレゼントを置いてくれていたのは夜勤の看護師さんだったらしい。そして彼らは大人の階段を上るらしい。

ちなみに悪い子の元を訪れる「黒いサンタクロース」という人物がプレゼントの代わりにベッドの周りに豚の臓物をぶちまけたりするという話もあるが——エリオとキャロには必要もない知識だし、何より純粹な二人の顔を見ていると心が痛む。そんな知らない知識は、心の中にそっと仕舞う事にした。



午後13時30分。一時間のお昼休みを終えた私は、ロングアーチスタッフが詰めるオフィスにいた。前線フォワードを兼ねる私は、他のスタッフと違って事務処理関係の資格を持っていない。士官学校



でその系統の講義を受けただけで、実務経験もあるわけが無い。

なのでオフィス待機での仕事は報告書の作成と、検索魔法を使用した紙媒体の資料検索や器具の運搬がメインだ。余った時間はリイン曹長やアルト、ルキノに専門職の勉強を教えてもらっている。とはいえ本格的なものではなく、知識として。魔導師である私にできることは、いつだって戦うことだけだ。

『魔導師はいい身分よね。いつだって評価されて、昇進だって早いんだから』

『あたし達裏方がいなかったら何にもできないのに』  
『生意気だよー』

——いつだったか、士官学校技術学部の生徒に言われたことがある。魔導学部と合同で授業をしていた時だっただろうか——今となっては彼女達の顔も名前も思い出せないが、その言葉は私に向けられたものだということは覚えていた。

『……じゃあ、あなた達は自分の仕事をしながら戦えるの？』

そして純粋な興味から、私は彼女たちに問いかけたのを思い出す。別に私はバックヤードの仕事を下に見ていないし、どちらかというに興味さえあった。出来ることなら勉強したかったが、1日24時間という制約は誰にでも平等で。睡眠時間を削ればよかったのかも知れないが、体力の限界まで訓練を必要とされる当時には到底無理な話だった。

けれどきつと、彼女達はそうではないのだろう。そう思っていた。ちなみに返事は無く、ただの屍のように黙り込んでいたっけ。

それでも今はこうして、時間の合間を縫って皆が色んな事を教えてくれる。リイン曹長は前線管制、グリフィスは交通通信、シャーリーはメカニックや将来の執務官補として必要な事務や渉外を。アルトはヴァイス陸曹と一緒にヘリについて色々話してくれるし、ルキノは艦船操舵についてマニアックな知識を聞かせてくれる。……前にフェイトさんが「深琴がそっちの道に目覚めないといいけど……」と言っていたけど、どうということなんだろう。



午後18時30分。通常勤務体制に移行した機動六課は、これから交代部隊の夜間勤務となる。報告書と申し送り事項を提出してからは自由時間だ。食堂で夕食を取り、大浴場でまったりと寛げる。この後に休憩所でお菓子をつまむのは最早日常茶飯事だ。

「……っていうか、今じゃない！ それは！」

「そっすよ？ みんなと殆ど変わらないでしょ？」

ツツコミを入れるティアナに、私は首を傾げる。スバルが「確かに変わらないといえばそっすよ……」と困惑していた。

「でも、朝4時起きて……」

「辛くないんですか？」

「あんまり、かな。夜も早いし……あ、最近は布団から出れなくなりそうになってるけど」

寒いし、かといって暖房をつけたら起きられない。これから寒くなるのだから対策を考えないと……と首を捻ると、全員が苦笑いを浮かべていた。

それから、午後19時40分。お茶会も終わり、歯磨きを終わらせた私は自室のベッドに横になる。就寝前のメールの確認だ。現時点で覚えている魔法の各種プログラムをより最適化させるべく書き換えを考えていると、ローゼンクランツがメール受信を告げる。

「ルーチェから……？」

差出人は士官学校からの友人であるルーチェ・バイオレット。中身は同窓会の誘いだった。

『61期生だけじゃなくて、60期生の先輩や先生達も出席する予定です。忙しいとは思いますが、なるべく顔を出してくれると嬉しいな』  
指定の日時は、12月29日。年末にして休日だが、その日は予定では海鳴市の実家に帰省する日だ。それも夕方から夜間なので、出発する時間帯である。特別シフトにもよるが、参加できそうに無い。

『ごめん。実家（地球）に帰省優先にしているから無理』

あとまだ来月のシフト出てないから分からないよ——と付け加え

て返信し、部屋の電気を消して毛布に包まった。

(同窓会かあ……)

そちらも参加したいが、10年振りに家族揃って正月を迎えたいし——何よりクラスメート以外も参加すると言うことは気が引ける。他のクラスや学部には仲が良くなかった人たちもいるし……と考えながら、睡魔の波に引き込まれた私は、そつと眼を瞑って夢の世界に旅立った。

この出来事が後にそれなりの禍根を残すことを知らぬまま。

## Report 02：「親友」の思うところ

「えー、それでは」

12月29日、19時。仕事上がりの会社員達が集まって忘年会を繰り広げるミッドチルダ市内の居酒屋。その座敷の一席を押さえたグループは、時空管理局第一士官学校の61期生と有志参加の60期生。大半が本局勤務の管理局員のため懐かしい顔触れとは言えないが、3月に卒業してからかれこれ9ヶ月が過ぎようとしている事もあって盛り上がっていた。しかしそれでも、今回の「同窓会」主催者であるルーチェ・バイオレットが口を開くと同時に静まり返るのは性だろう。

「皆さん、お忙しい中集まっていたいただいて、本当にありがとうございます。60期生の先輩方ともお会いすることができて、私も嬉しく思います。今年も色々ありましたが、また来年もよろしくお願いします……つと、長い挨拶は嫌われてしまうのでこの辺で。最後に乾杯して、飲み食い始めちゃいましょう！」

全員が飲み物を入れたコップを持ち上げ、「乾杯」の合図に合わせて隣近所のコップを軽く鳴らした。

「……本当の意味で、『全員』集まりたかったけどね」

「無茶言うなよ。所属が違えば休みも違うんだし」

苦言を呈したルーチェのコップに烏龍茶を注いで、レオンが小声で制する。

「……深琴だって、ようやく家族と和解できたんだ。年末年始くらい家族と過ごしたって悪くないだろ」

「えー！ 秋月さんいないのー？」

間延びした口調の声が上がったのは、60期生女子のグループからだ。最もその全員が件の少女の不在を喜んでいるようである。

「秋月さんのことだから、訓練でお忙しいんでしょうよ。協調性がな  
いのはいつものことだし」

「執務官補佐考査に受かったらしいけど、どうせコネでしょ？ いい

ご身分よねー」

きやはははと可愛らしくも下卑た笑い声が響いた。彼女たちに反論するものはいない。恐れているのではなく、呆れていた。当の本人がいれば彼女達の父親が提督クラスであることを指摘しただろうが。以前にも似たようなことがあったが、彼女達の記憶からは抜け落ちていくようだ。

「いい加減にしとけよ、お前達」

苛立った声が、笑い声をかき消す。声の主である少年は燃えるような赤毛を掻き上げ、グループの中心格である女子を睨みつけた。鋭い視線に射抜かれたグループは沈黙し、そうでないグループからは団欒の声が沸き上がる。グループの恨みたらしい視線に微動だにしない少年は、ルーチェとレオンに視線を向けた。

「相変わらずだよね、あの人も」

「ねー。本人の前では似たようなことしか出来ないのに」

「……いつものこと」

「だよねー」

アスカの言葉にシルフィが頷き、控えめなセレナの弦きにカリーナが笑って同意する。先程の少年——レックス・フォレスターも普段は女子グループと同じく「秋月深琴否定派」だ。しかしこういった「本人がいらない集まり」となると一転して「秋月深琴擁護」に変身する。曰く、本人が目の前にいると素直にお喋り出来ないのだとか。

(……今日ばかりは、深琴は不参加で正解だったのかもしれない)

厳しくも和やかな機動六課で過ごした深琴にとって、この空気は耐え難いものだろう。自分を教え導いてくれた上司と、厳しい訓練と実戦と一緒に駆け抜けた同僚達との間にこのようなギスギスした関係は見当たらない。一度だけ一緒に行動したときの事を思い出したルーチェは、物思いに耽るように手にしたコップを弄ぶ。

その脳裏には、自分達が初めて出会ったあの日のことが過ぎっていた。



新暦73年、6月。時空管理局本局直轄の第一士官学校では入校式が行われていた。青色をした制服を纏った男女が集められた講堂の壇上で、学長が祝辞を述べる。元氣と若さに溢れる目で彼を見返すのは、入学試験を乗り越えた若き士官候補生達。

『志を持って本校に入校した諸君らであるからして、管理局員としての心構えと誇りを胸に、次元世界の平和と安全のための力となる決意をしかと持って、訓練に励んでほしい』

(眠い……)

欠伸をかみ殺して、私——ルーチェ・バイオレットは眠気覚ましに小さく周囲に目を向けた。男女で僅かに違いがあれど、その殆どがお揃いの制服。髪の色も、その背丈も何一つ違——まだ名前も知らないが、きつとその胸に抱く夢も違うはずだ。

そしてその中でも一人、一際異彩を放つ女子がいた。私が並ぶ列の左隣に並ぶその体は筋肉はあるんだろうけども小柄で細い。最初は目を疑ったが、彼女が並んでいる列は私と同じ魔導学部之列である。(うつわー……ちゃんとやってけるのかなあ、あの子)

もしかしてコネ入学か、とも考えたがそれはありえない。

魔導学部の入学試験は魔導知識の筆記と体力や魔力の検査を始めとした実技試験だ。筆記試験ならまだしも魔導学部に入學しようというのに、実技試験をせずに入学を認めたといいことはない。それなら技術学部に行けって言う話だ。

『それではここで、新入生代表の挨拶に移りたいと思います。技術学部——』

顔も名前も知らない少女を案じていた私も、そのアナウンスに反応して壇上を見遣る。先に呼ばれた技術学部の新入生代表——トツプの成績で入学試験をパスした首席——の少年が、出席している来賓の方々に微笑ましく見守られながら壇上へ向かっていた。

『魔導学部、新入生代表。秋月深琴さん』

その名前に、講内の新入生、在学生共々興奮した様子で周囲に立つ生徒と視線を交わす。

——秋月深琴。前年度のインターミドル・チャンピオンシップに初

参加で世界ランク10位にその名を刻んだ、少女の名前。管理外世界の出身で、しかもその魔法歴は約1年という彼女は恵まれた魔力量と近代ベルカ式とエミュレートしたミッドチルダ式の魔法を使いこなす実力者。レンジやポジションを問わないその戦闘スタイルは『ポジションフリー』と名づけられ、当時11歳にして「稀代の天才」として騒がれていた。

『皆さん、静粛に』

学長が、ゆったりとした声で語りかける。その声に冷静を取り戻した生徒たちは徐々に静かになっていった。

そして壇上には、いつの間にか少女が上がっていた。隣に立つ技術学部首席の少年と会釈を交わす彼女は、見間違えるはずもない。先程私が見かけた「あの少女」が、そこに立っていた。

所変わってホームルーム教室。入学式を終えた61期生はそれぞれ割り振られたホームルーム教室へ移動し、担当教官から教科や施設についての説明を受け、男女合計約20名の魔導学科A組はそれぞれの自己紹介を始めていた。

そして訪れた新入生代表にして『ポジションフリー』の秋月深琴の自己紹介は――。

「秋月深琴です。よろしくお願いします」

一分足らずで終わってしまった。どうやら彼女は他人と話す事、合わせる事が苦手らしい。話しかけられたら「はい」か「いいえ」。誰とも会話することなく過ごしている。奇遇にも寮の部屋が同じだったため何度か話しかけたが5分以上会話が続くことは無かった。

同時に分かった事は、彼女は朝早くから寮の門限ギリギリまでの時間を訓練等に費やしているという事。また基本無口だが芯はしっかりしているらしく、「売られた喧嘩は即座に買う」性格であるという事も判明した。

「秋月さんってさ、高町二尉と同じ世界の出身なんですよ？」

放課後練習に付き合った帰り道、私はそう話しかけた。話しかけら

れた彼女は小さく「はい」と頷く。広がらない会話に小さく溜息を吐いて、私は続けた。

「やっぱり、秋月さんの家族も魔導師だったりするの？ 遺伝とか」

「……さあ。正直に言うと、私は家族のことをろくに知りませんから。捨てられたようなものなので」

さらりと続けられた言葉に、私は思わず足を止める。目の前の——12歳にも満たないこの子が、捨てられた？

彼女が言うには、幼少の頃から彼女は入院していたらしい。それから10歳までは家族と会うことはできず、滅多に許可が降りなかったそうだ。

「病気の治療という名目で伯父に預けられましたけど……連絡を取ったこともないので。向こうとしては、私はとつくの昔に死んだも同然だと思えます」

それでもある人に救われたことで、彼女は変わったのだと言う。「死んでも同然」だった自分を助け、生きていることを喜んでくれたその人に憧れて、彼女は魔導師の道を志したとか。「強くなる」ために、時間を費やしてきたと。

そう語る彼女の横顔はいつもとかわらない。けれどどこか柔らかい笑みを浮かべていたのは気のせいではなかった。——その日を境に私たちは名前で呼び合うようになり、深琴もゆっくりではあったがクラスに馴染み始めた。

それからレオン・アヴァンシアを含めた三人でチームを組んだ私達はいっしょか歴代最強チームと呼ばれ、後には首席卒業を果たすのだが、それはまた別のお話。



「……ルーチエ、どうした？」

「んー……ちよつとね」

物思いに耽る私を、レオンが呼び戻す。卒業してから一回だけ一緒に戦ったあの日感じた違和感が、口に出た。



「深琴の戦い方、変わってたよね」

今までの深琴の戦い方は、膨大な魔力と変換効率、それと放出速度を活かした切込み型。ぶっちゃけると私とレオンは深琴の後ろで、彼女が仕留め損ねた敵を相手することが殆どだった。

けれどあの時——下水道での深琴は、最前衛を務めながらも後方の私達を気にして、攻撃と補助を両立させていたのを覚えている。今までは戦うたびにポジションを変更していたが、機動六課に配属となつてからはチームでの戦闘を重視していた。その事もあつてか今まで以上に効率的な戦い方が出来るようになったのではないだろうか。

それに、内面も。

昔の深琴は頻繁に笑わなかったし、泣いたところだって見た事が無い。年の近い人達や初対面の人に話すこと一つろくに出来なかった。「何か寂しいなつて。深琴がどんどん変わっていくのが……嬉しい半分」

「前にあいつが言ってただろ。『出来ないことを出来ないままにするのは大嫌いだ』つて」

「言ってたね。それで難癖つけてきた先輩達を撃退してたっけ」

「後で教官に怒られたけどな」

売られた喧嘩を買っただけです——そう正直に答えた彼女に深い溜息を吐く教官の姿は、記憶に刻み込まれている。いい意味でも悪い意味でも真っ直ぐな彼女は、言葉に遠慮がない。おかしいことはおかしいとはつきり言うし、かといって武力行使は徹底的に打ち負かす——そんな彼女が敵を作らないはずが無かった。彼女の言動は間違つてはいないのだけど、認める事が難しいときもある。それでも最近では、少しは柔らかくなつてはいるらしい。

この間は目標の一つであった執務官補佐考査とAAAランク試験に一発合格したし、勢いはまだ続いている。

「いいんじゃないの、そういうのも。俺は俺で、お前はお前で、深琴は深琴なんだから」

「ん……そうかもね」

「深琴も、いつまでも子供でいるわけじゃねえしな」

言いながらレオンは、ルーチエの頭を軽く撫でた。それに目を細めたルーチエは小さく頷く。

「つていうか二人ともー、ちゃんと食べてるー？」

「どっか皿余ってない？ こっちに回してー」

「どうかプログラムに隠し芸大会とかあるけどマジかよ。聞いてねー」

「あ、この皿使ってないから平気」

「えー。隠し芸大会は連絡したよー？」

和気藹々に過ごすグループに笑顔で答えて、二人はテーブルに近づいた。



夜、ミッドチルダの次元港。帰省する人の波に飲まれながらも確保した席に座った私・秋月深琴は沈み込むように身を埋めた。ついでに隣の席に上着と小さな鞆を置いてこちらも確保する。

あふ、とかみ殺し切れなかった欠伸が出た。今頃61期生は皆同窓会なんだろうなあ、と考える。会いたいのはこちらも同じだが、同時に胸元の愛機・ローゼンクラutzがメールの受信を告げた。

「レオンからだ……何だろ」

モニターに映し出されたメールには、添付画像が一つ。メール自体は「気をつけてな。土産よろしく」と簡素なものだった。画像を展開すると——そこには見慣れた同期生たちの姿が映されている。ほぼ全員が成人しているためか酔っ払っている者も若干名。しかし一様に笑顔を浮かべている彼らに、思わず笑いが零れた。

「ごめん、深琴。お待たせ」

「フェイトさん」

上着と鞆をどける。フェイトさんとは休暇も行き先も一緒なので、一緒に行動することになっていた。ここまでの車を出してくれたのも、フェイトさんだ。

「その写真……士官学校の？」

「はい。同窓会の真つ最中だそうで」

席に座ったフェイトさんも、この画像の雰囲気には笑いが零れる。

「お土産、忘れずにしないとね」

「はい！ ロゼット、返信するからメールフォームの立ち上げをお願いね」

《All right.》

出発するまでの間にさっさと書き上げたメールを送信する。無事送信できたことを確認して、モニターを閉じた。

『レオンへ。皆元気そうで、何よりです——こっちは今から出発です』  
『今回参加できなかったのは、本当に残念です。お土産の件は了解しました。お楽しみに』

『また機会があれば、誘ってもらえたら嬉しいな。皆忙しいから難しいとは思うけど……今度は頑張って、お休み合わせるから。また皆に会える日を心待ちにしています』

『皆によろしく伝えてね。それじゃあ、また——深琴』

## Report 03 : そして影は忍び寄る

10年振りに、家族でお正月を迎えた。ミッドチルダに渡ってから伯父夫婦と一緒に過ごすか、休暇中に呼び出した友人と遊んでいるかのどちらかだったけれど。

赤い振袖に身を包んで町内を練り歩く羽目に合い、その途中で隠し芸大会に巻き込まれるなどハプニングはあったものの、どちらもいい思い出となった。

「気をつけて、しつかりな」

優しく笑って、お父さんが言う。その隣ではお兄ちゃんが忘れ物はないかと慌てていた。持ってきた荷物は最低限の着替え位のものだったが、それ以上の割合をお土産が占めている。

そんな二人を尻目に、お母さんが私を抱きしめた。

「六課の……いいえ、皆さんによろしく伝えてね」

「うん」

頷くと、母さんは腕に力を込める。

「向こうも寒いだろうから、風邪には気をつけて。女の子なんだから、体は冷やさないように」

「う、うん」

普通の人の腕力のはずなのに、苦しい。困惑していると更に力は強まる一方だ。息が詰まる。やばい。

「夜更かしも駄目よ。せつかく綺麗な肌なんだから、ちゃんと寝ること。それから……」

「母さん、母さん。深琴が窒息しそう」

「あら、本当」

解放されると同時に、深呼吸して呼吸を整える。「これを素でやっているから、うちの家族は全員天然入ってるんだよなあ」とお兄ちゃんが遠い目をしていて。咳払いをして、母さんは注意を集める。

「また連絡頂戴ね。いつでも帰ってきて良いんだから」

「……うん。『行って来ます』」

「はい。『行ってらっしゃい』」

あの時とは違う言葉に、転送ポートを通る合間に涙が零れた。

◇

新年を迎え、半月。休暇を取っていた隊員たちが帰って来た機動六課は、その活動を再開していた。

「はい、それじゃあ今日の訓練はここまで！」

「全員、防護服解除ー。しっかりクールダウンしろよー」

疲労困憊の体を必死に動かして、防護服を解除する。相変わらず訓練レベルは高いままで——正直死にそうだ。

「秋葉さん、大丈夫ですか？」

「な、何とか……」

その中でも秋葉さんの消耗は人一倍で、今は立ち上がることすら困難のようだった。デバイスに体をより掛けて、呼吸を荒げている。

「おーおー、今日もやってんなー」

「零さん……」

いつもの待機服に身を包んだ零さんがやって来た。その視線が、秋葉さんを射抜く。

「あんま無理すんなよ、病み上がり」

「……分かってます。あと、病み上がりっていうの止めてください」

「だが断る！ そんなもって、深琴。フェアの事なんだけどな」

ドヤ顔で言い放った零さんが、今度は私に話しかけた。

「聖王教会入りはほぼ確定した。来月には一回外出許可貰って、教会と六課に顔を出させる」

「ほんとですか!？」

「おうよ。お前と決着つけるって張り切ってるとき。『切り札』もあるとか」

そういえば、フェアとの戦績は初対面時を除いた分で1勝1敗2分けだ。ホテル・アグスタで1敗、廃棄都市区画とランク試験で2分け、JS事件で1勝が公式扱いである。ランク自体はほぼ同等扱いだが、それまでの経験で大分私が負けている。『切り札』かあ……。

「もちろん、受けて立ちますよ！ 私だって負けません！」  
「……って、何であんたは……そんなに、元気なのよ……」  
未だグロッキー状態から回復していないティアナが呟いた。



「秋葉の調子も、大分良くなってきているな」

「うん、魔力量も順調に戻ってきてる。後は体を慣らしていただくだけだね」

午後訓練を終えて、機動六課隊舎へ戻る道すがら。並んで歩いていたのはとヴィータは先程の模擬戦の結果について話していた。最近参加するようになった霜月秋葉に関してである。

6年前の事件で負傷し、聖王医療院で数年入院した秋葉はここ2年間は海鳴市の学校に通う学生だった。それまで鍛えてきた体力も入院中に衰えている。こんな状態では、首都航空隊に復帰することは出来はしない。凍結の変換資質というレアスキルを保有する彼女が担当する現場は多いだろう……と本人の希望もあつて最近ではフォワード陣に混ぜられて、同じ訓練を受けている。とはいえ彼らとは半年分の差があるため、数日でその差を埋めることになったのだが。最初は慣れなかったが本格的な訓練を開始してからは勘を取り戻しつつあった。今では訓練終了まで何とかやっていけている。

と、なのはは僅かに瞳を伏せた。

「そういえば、ヴィータちゃんは聞いた？ 来月の出向研修受け入れについて」

「おうよ。あたしは、あんま気が進まねーけど」

なのはの言葉に頷いて、ヴィータはモニターを展開する。そこには、来月機動六課が受け入れる出向研修の情報が表示されていた。地上に隊舎を構えているとはいえ本局直属の部隊である機動六課が主に受け入れるのは、本局の隊員が多い。

1年間という期間限定で運用されているこの部隊は、本来なら出向研修を受け入れる必要はなかった。しかしJS事件での功績や各隊

員達の活躍が知れ渡っていることから「そこを何とか」と人事部に頭を下げる関係者が多数存在したらしい。そこまでならよかった。

その中でも機動六課が受け入れることになった管理局員は10人。全員が本局所属だが——この内5名には、ある共通点があった。

「第一士官学校60期生が1人、61期生が4人か……」

「捜査官枠でレオン・アヴァンシア、教官枠でルーチェ・バイオレット。一般キャリア組でセレナ・ソネット三尉、アスカ・フォルクス三尉。それからレックス・フォレスター二尉。5人とも魔導科の生徒で、深琴とは同じカリキュラムだったって」

学生時代から優れた実力を持っていた深琴が飛び級で上級カリキュラムを受講していたことは、関係者は全員知っている。その事もあって士官学校卒業後の進路も引く手数多だったのだが——本人の希望とはかけ離れていたこともまた、事実。

「らしいな。深琴はこの話、知ってたのか?」

「うん。士官学校からメールがあったんだって」

そう話しながら並んで歩くのはとヴィータは、小さく溜息を吐いた。

「……何も起きなければいいけどな」

「……ほんとだね」



彼女と初めて出会ったのは、進級式の翌日のことだった。何でも午前中の実技テストで満点合格を出したとか何とかで、特別に上級カリキュラムに進むことになったらしい。とは言え実際は、同級生の中でも頭抜けた彼女が初級カリキュラムを受講することは「余りにも危険すぎる」という判断だ。

「……秋月深琴です。よろしくお願いします」

好奇の視線に晒されながらも、彼女は淡々とカリキュラムをこなしていった。魔力量もその放出も効率も、経歴も何もかも自分達より優れた彼女に浴びせられたのは賞賛。しかし余りにも淡々とした表情

と口数が少ないせいと同時に嫉妬も呼んだ。自分もその一人である。気に入くわない、生意気だ、コネで評価されている——思いつく限りの罵詈雑言を彼女に放った。中には私物を荒らそうとした者もいたらしいが、寸でのところで阻止したこともある。これは技術学部に在籍していた女子にも共通している。理由は簡単で、自分達と違うというだけ。

それでも暴力に訴えようとしなかったのは最低限のプライドで、同時に敵わないことを悟っていた。正々堂々挑んでも負ける。かといって闇討ちの様な真似はプライドが許さないし、こちらも恐らく敵わないだろうという簡単な答えだった。

『逃げたりしねえよな？ 世界ランク10位のお前が、負けるはずないしなあ？ どうせあつという間に終わるんだし……3対1で、いいよな』

そしてその予想が、現実になる。

合同授業の一環で行われた模擬戦。教官の制止を聞かず自分達は戦った。3対1と言う、卑怯な手段で。とはいえ自分達も強いと自負していた。良くても引き分けだろうと思われた勝負は5分もしないうちに「敗北」した。

前衛に突撃すると同時に生成した誘導弾で、後衛を視覚外から攻撃。フォーメーションを崩された自分達は立て直すことも出来ずに誘導弾の直撃を受けて、朦朧とする意識で喝采を聞いた。

危険行為とはいえ、誘導弾の制御や攻撃方法……そしてその処理もカリキュラムで修得済みである。にも関わらず自分達は負けてしまった。彼女に攻撃をかすらせることができずに。

(……負けた？ 俺が……？)

一方の彼女は危険行為を教官に咎められたが、平然と「売られた喧嘩を買ったまで」と言い放つ。あくまで降りかかった火の粉を払ったに過ぎないと。深い溜息が零れた。同期生が口々に自分を慰め、彼女に対して悪態をつく声を聞きながら、反応しなかった。

絶対に敵わない。彼女の実力を甘く見ていたと——自分の弱さを、痛感して。



『——生意気なのよ、あんたは！　そうやって澄ました顔して……何でもかんでも思い通りになるって、調子に乗ってんじやないわよ！』  
『さつきみたいなの戦い方、最低よ！　謝って！』

『……黙ってないで、何とか言いなさいよ！』

同席していた技術学部的女子が、甲高い声で叫ぶ。そんな彼女達と相対して、そいつは言った。

『私が負けるはずないから、という理由でそちらが3対1を申し出たんですよね？　私は正々堂々戦いましたし、最低だと言われる理由が分かりません。……誘導制御魔法は既に習っていますし。まあ急所への直撃は危険行為ですので、それに関しては謝罪します。後、私は別に神様とかじゃないので。全て思い通りに出来るわけがありませんので訂正を要求します』

表情を変えずに、淡々と。呆氣に取られる女子に、彼女は続ける。

『天才だとか言われていますが、そんなことはありませんしありえませんが、私より優れた人は世界中にたくさんいますし……ですが、それなりの努力というものはしているつもりです。そんな声で叫ぶだけの元氣と余裕があるのなら、テキストを1ページでも読み進めることをお勧めします』

その言葉通り、彼女は人一倍の努力をしていた。朝は誰よりも早く訓練場に入り、終了時間ギリギリまで自主練習。夜は共用スペースで消灯時間まで勉強して予習・復習をする。最近では同級生も似たような行動を取るようになったらしい。

『私、負けず嫌いらしいですよ』

偶然を装って訓練場で遭遇した時、彼女は言った。

『できないことをできないままにしておく事が嫌い。できないからって諦めるのはもつと嫌い。そして諦めた癖に他人にとやかく言うのは論外です』

『お前はそうかもしれないけど、そうじゃない人間だっているんだよ』  
『できるまで頑張ればいいじゃないですか。どんなに時間をかけても……いえ。時間をかけたからこそ、できるようになった時が嬉しいと思います』

私はそうでしたから、と小さく続けた彼女ははにかんでいた。思い出すように遠くを見る瞳は黒く、白い頬に赤色が差し込んでいる。その横顔を見て、自分は眩いていた。

『……俺さ、自分より成績の低い女とは付き合えないんだよ。会話が噛み合わないし、何かピーチクパーチク煩いしさ。……どうせなら、頭のいい奴と一緒にいる方がいいだろう？』

馬鹿正直に言うのは恥ずかしいと、いつもの感じで言葉を紡いで照れ隠しを試してみる。その言葉に、彼女は僅かに首を傾げた。その目が自分を映しているだけで、鼓動は早鐘を打つ。

『それは思いますが……でしたら、誰ともお付き合いできないと思いますよ』

『何でだよ』

『相手にだって、選ぶ権利ありますから』

その一言に、俺——レックス・フォレスターは崩れ落ちた。

Report 04：2月某日、機動六課にて（前編）

雪がちらつく2月某日の午前9時。私はミッドチルダ中央次元空港に来ていた。朝早いのに、人通りは多い。

「深琴、大丈夫？ 寒くない？」

「はい、大丈夫です。ありがとうございます、フェイトさん」

フェイトさんの言葉に、私は頷く。袖を通してある白いコートはフェイトさんに見立ててもらった物で、非常に暖かい。ぬくまりながら、私は視線をきよきよと動かす。

「もうそろそろだね。静真君の到着は」

「はいー」

そう。今日は兄の静真が大学受験のため、ミッドチルダに渡航する日だ。本当はクラナガンの伯父夫婦の所に泊まる予定だったのだが伯父が教官研修で一週間、伯母も実家の用事で同じく一週間家を留守にすることになっている。さすがにそれでは大変だろうということ、今日から一週間と数日、兄は機動六課に身を寄せることになった。受験までは後一週間。最後の追い込みと、大学進学に際して必要となる法的後見人——管理外世界からの渡航者が入学する場合、ほとんどが必要となるらしい。何でも血縁や親戚は駄目だとか——の決定だとか、やることは山積みだ。

それでも家族一緒ということ、正直、私は浮かれている。昔の事は時折頭をもたげるけれども、この数ヶ月でめつきり「家族大好き」な「寂しがり」になっていた。

そんな時、乗降口に繋がるエスカレーターから兄が降りてくる。視線がきよきよ動いているのは、好奇心からだろうか。その視線が私を捉えると兄は笑い、フェイトさんに気づいて会釈した。

「すいません、お待たせしました」

「ううん、気にしないで。長旅お疲れ様」

「荷物持ってください」

そのまま駐車場へ戻り、機動六課へ。

（今日はルーチェ達が出向研修だし、零さんもアーウィング執務官も

来てる)

それに午後からはフェアが来て、模擬戦をする事になっている。皆の仕事や研修の邪魔にならないようにしつつも今日は一日オフだから……と予定を脳内で組み立て始めた。これも六課に入った当初は出来なかつた事を考えると、少しは成長したということになるだろうか。

そんな事を考えながら、ふと視線をドアミラーに向ける。当然と言えば当然なのだが、鏡の中の私も笑っていた。

◇

「なんと言うか、まあ……」

その頃、機動六課訓練場。教官枠で出向研修中のルーチェ・バイオレットは目の前の状況に絶句していた。本気で戦つてるとしか思えない機動六課隊長陣3名と、フォワード4名。ボロボロになりながらも個人の能力を合わせて強大な敵に立ち向かうフォワード側と、真つ向から迎え撃つ隊長陣。本来はこれにフェイト・T・ハラオウン執務官と自身の友人である秋月深琴が加わるのだから、とは考えたくも無い。

(……無理。こんなの勝てっこない)

(でも、あいつらも対等に渡り合ってるんだぞ?)

そうルーチェに念話を繋げたのは、捜査官枠で出向研修中のレオン・アヴァンシアだった。彼は以前臨時補佐についていた上司の意向で、数日間機動六課に滞在したことがある。その間に隊長戦も経験していた。

(……でも、普通は無理……)

(というか、ここまでしてたら強くもなるわな……)

続いたのは一般キャリア枠で出向研修中のセレナ・ソネットとアスカ・フォルクスだ。現在はオフィスで研修中のはずだが、二人も第一士官学校の卒業生。不真面目ではあるがマルチタスクはお手の物である。

(お疲れ様……の前に、二人とも。そつちの様子はどう?)

(……今のところは、まだ。気にしてはいるみたいだけど……)

(深琴は今日一日オフだからな。八神部隊長も気を使ってくれたみたいだし)

(そつか……ならいいんだけど……)

セレナとアスカの報告を聞いて、ルーチェは小さく溜息を吐いた。今回の出向研修で唯一の第一士官学校60期生のレックス・フォレストーと深琴は、学年が違うとはいえ同じカリキュラムを受講していたことがある。当然顔見知りだし、その仲は悪かった。

もとより深琴と60期生の仲は悪い。事あるごとにコネを持ち出す60期生と、彼らを「先輩と言うだけで敬う気は無い」と言い放った深琴——両者の印象は最悪だった。お互いにプライドがある以上、修復も容易ではない。

なら自分たちにできることは、この二人をなるべく接触させないという一点に尽きる。出向研修は1週間。

(やれる限りは全力を尽くすけどさ……)

深い溜息を吐いて、ルーチェは肩を落とした。



いつになく、機動六課が賑やかだ。そう直感した渡辺零はそれとなく周辺に視線を向ける。見覚えの無い顔も多い。機動六課が運用を開始してからしばしば通っていた零はそれなりに馴染んでおり、隊員達一人一人の顔と名前を記憶していた。一方見知らぬ彼らも、零の傍を通る際には会釈し、時折話しかけてくる。恐らく自分の妹分もそれなりの知名度を誇っているのだろう——そう一人納得した零は、纏めていたデータを保存し、送信した。

「よっしゃ、終わったー」

「お疲れ」

サンルームの机に突っ伏した零が送ったデータを確認して、デイバイン・アーウィングは言う。二人とも機動六課の所属ではないが、J

S事件では機動六課への協力を始め、深い所まで関与していた。そのツケは「関連情報の報告」から「隊員達・事件関係者の今後」まで残っていたが、とはいえ悪い気がしないという。

「そういや、今日だっけか？ 深琴の兄貴がこっちに来るのは」

「ああ。今、深琴とフェイトが迎えに行っているらしい」

「……そっか」

J S事件が終わって、数ヶ月後。家族と和解を果たした深琴は、以前にも増して他人に甘えるようになったらしい。士官学校時代や六課に所属して間もない頃は口数も少なかった事、また他人と壁を作っていた事を考えると十分な進歩である。……本人がどう思っているかは不明だが、少なくとも六課の隊員たちは好意的に受け入れているらしかった。「家族に存在を否定された」という過去の呪縛を乗り越えたという事だと。

だが、零の表情は浮かないものだった。その様子に、デイバインは小さく溜息を吐く。

「深琴に話さなくていいのか？ ……遠縁とは言え、血縁関係だろう？」

「……まあ、な」

古代ベルカの時代——聖王統一戦争以前に存在した『刃王』アルティス家。零は代々『二人で一人の王』として機能してきた王家の直系子孫に当たる。そして王はもう一人——民と片割れを生かす為に戦場に留まった人物がいた。

「それが『クオン・アルティス』。深琴の先祖……いや、『秋月』と交わった古代ベルカの王だ」

「……なら、深琴が古代ベルカの術式を使うのも納得がいく。術式を始め、遺伝子情報に刻み込まれているらしいしな」

「当時は遺伝子調整も珍しくない……というか、当たり前の時代だからな。単純な血の濃さはともかく、中身に関しては秋月家の方がオ리지ナルに近い」

「そう言い切って、零は肩を竦める。そんな彼を、デイバインは横目で見つめた。」

零の外見は、同い年とは——少なくとも19歳には見えない。よくて10代半ばが限度である。それも当然だ。何故なら零の体は15歳の誕生日を迎えて以降、成長すらしていないのだから。古代ベルカの時代に受けた遺伝子調整の影響だと言う。

「当時は王が戦場に出て何ぼな時代だったしな。戦えない王に存在価値は無い。民だって自分の国の王様が日に日に衰えていく姿は見たくない……だったら死ぬまで若い姿のままなら戦えるだろうっていうのが当時の見解だったわけだ。そういう意味では、聖王家のシステムも悪くは無いな。ゆりかごの中とは言え生まれて、死んでいける」

「だが、そのシステムにも綻びがある。お前よりも血を濃く受け継いでいる筈の深琴やその身内は、まだ成長を止めてはいない」

だが、だからと言って樂觀視は出来ない。いざその時を迎えた時、混乱するのは本人だ。

「正直な話、現時点では俺も彼方も姉さん達も、深琴にその話をするつもりはない。下手に話しても混乱するしな。……それに、あいつも薄々感づいている。肉体強度や自己治癒速度、それに遺伝子調整……アルティスの事は知らなくても、大体の予想はつく」

まあでも、と零はソファに凭れ込む。

「事情を知っている奴が身近にいるってだけでありがたいんだよ。特にお前は深琴にとってこれからの上司なんだし、付き合ってたって長くなるからな。頼んだ」

「……言われなくても、そのつもりだ」

いつも通りの口調でおどけながらも、零の表情はどこか寂しげだった。それに気づいたディバインは、また一つ溜息を吐く。その音は、複数の足音で掻き消された。



「機動六課へようこそ、秋月静真君」

所変わって、機動六課部隊長室。兄の到着と私とフェイトさんの帰還を報告していた。満面の笑顔で、八神部隊長は迎えてくれる。

「しばらくお世話になります」

「うん。受験大変やろうけど、ゆっくりしてってな」

「すいません、色々気遣ってもらって」

ちなみに六課に到着して部隊長室に移動するまでの間、ロングアーチスタッフを始めた隊員達があれこれ兄を気遣っていた。困惑した兄は私が何か言ったのではないかと疑っていたが、失礼な話だ。事務的にしか話せなかった私を気遣ってくれた人達なのだから、優しいに決まっている。

「……じゃあ深琴。休暇中で申し訳ないけどお兄ちゃんの案内、頼めるか？」

「はいー」

躊躇うことなく引き受けて、部隊長室を辞した私達はサンルームでグロッキー状態のフォワード陣と遭遇した。

「深琴さん、お帰りなさい」

「静真さんも、お久しぶりです」

「ただいま。皆もお疲れ様」

卒業まであと1ヶ月と半月程。なのはさんの話ではこれからは模範戦中心で訓練を行うとの事。背筋に冷たい汗が流れた。

一方兄は同席していた零さんとアーウィング執務官に捕まっている。……まあ捕まえたのは零さんだけだ。

「にしても、あれだな……」

零さんの視線が、私から兄に移動する。往復する事二回、その視線が「可哀想なものを見る目」になった。

「やっぱ、深琴は小さいな」

「放つといってください！　っていうか、これでも身長は伸びたんですよ！　5センチ程！」

なので身長は念願の150cmを突破している。その主張がまずかったのか零さんは涙を拭い、アーウィング執務官が宥める様に私の頭を撫でた。……微妙に腹立たしい。

唇をへの字に曲げていると、これ見よがしに靴音が響く。それに気づいた私達が、音の発生源に視線を向けた。視線の先に立っていたの



は、男。

「久しぶりだな」

紺色の本局制服に身を包んだその男が、私を見て言った。見覚えはある。けれど名前が思い出せない。沈黙をどう取ったのか、男は鼻で笑った。

「相変わらず、コネと媚売りだけは一人前だよな。まあ見た目はそれなりとは思うけど、実力が伴わないんじゃないやあ魔導師として失格じゃねえの?」

生憎、そういう中傷は聞き慣れている。半ば聞き流しながら、私は記憶から男の正体を探した。燃える様な赤い瞳に、紺碧色の瞳。小柄だが鍛えられた肉体と顔立ちは端整なのに口から出る言葉で全て台無しだ。

「……深琴さん、お知り合いですか?」

「俺としては認めたくないけど、『お知り合い』だ。なあ? 『ポジションフリー』さんよ……黙ってないで、何とか言え!」

「……どちら様ですか?」

キャロの言葉に男は答え、無言を貫いていた私を怒鳴る。大きなその声に気づいたのか、オフィスから隊員達が顔を出した。これ以上怒鳴られるのは避けたいので、私は口を開く。

「はっ?」

呆気にとられたらしい男は、間拔けな声を出した。しかしすぐさま持ち直す。

「とぼけてんのか? お前の永遠のライバル、レックス・フォレスターだ!」

「ライバル……?」

はて、私のライバルはフェアぐらいだが。そんなことを思ったが、男の名前に聞き覚えはあった。確か彼は……と、合点した私は軽く手を合わせた。

「あ」

「忘れたとは言わせねえよ。ふざけるのも大概につ……」

「3対1の模擬戦で、5分持たずにやられた人!」

そうそう。確かそんな名前の人が60期生にいて、喧嘩を売ってたんだっけ。

「え、あの……ライバルじゃ……？」

「そうなの？」

キャロの言葉に、私は首を傾げる。別にライバル認定したことはない。

そう考えていると、零さんが一人笑い転げていた。見ればオフィスから様子を窺っていた同僚達も「何だー」とか「やっぱり勘違いかー」と笑っている。一方のレックスとやらは項垂れていた。

「……悪意の無い一言って、残酷だよな……」

「だって事実だよ？」

「いや、『言っつていい事と悪い事』な意味で」

呟いた兄は、哀れみの視線を送っている。

兄の言いたいことも分かる。事実とはいえ相手を傷つける事は言っつてはいけない。だからって、言われっぱなしは性に合わないし、腹立たしく思う。

「また黙り込みやがって……」

かと言っつて話を聞いていたら「黙り込み」と解釈された。どうしろと。とはいえ私が思い出した事で調子を取り戻した彼は、意地の悪そうな顔で周囲を見遣る。

『奇跡の部隊』とか聞いてたけど、大したことねえな。凄いのには隊長陣や協力者。……まあコネ入隊のお前がいる時点で分かりきったことではあるか。仲良しこよしで馴れ合ってるだけ。『類は友を呼ぶ』んだっけか？」

「ちよつと、あんた……！」

「二士は黙ってるよ。いくら年齢が上だろうと、俺の方が階級は高いんだぜ？」

「小さい癖に態度だけは大きいのって、充分困り者ですが」

——ぶちり、と血管が切れた気がした。言い返そうとするティアナを制し、私は軽く息を吐く。

正直な話、私だけを攻撃するならよかった。聞き慣れているし、「1

対1じや勝てない癖に」と言える。けれどこいつは違う。部隊を、仲間を侮辱するだけでは飽き足らず階級まで持ち出した。士官学校卒業生として——何より個人的にも、許しては置けない。

「み、深琴さん……？」

「大体さつきから聞いてればコネコネコネ……馬鹿の一つ覚えにも程度があると思います。パン屋にでも転職される予定とか？」

何故か零さんが、私をさん付けで呼んだ。

「先ほどの階級に関してですが、階級が高いからって何ですか？ 偉い事は認めますが、それ以外に何かありますか？ そもそもそんなお偉方だけで組織が動くわけないじゃないですか。現場最前線で動いてくれる方がいるからこそ組織なんです。船頭が多くても、船は動きませんよ」

正論だな、と誰かが呟く。一方のレックスは唇を噛み締めていた。

「最後に、一つだけ訂正を要求します」

「……何だよ」

「六課の隊員達の評価です。彼らは八神部隊長を始めた六課隊長陣が直々に選んだ優秀な人達です。少なくとも、私なんか足元にも及ばない程に。……それをあなたがどうこう言う権限はありませんし、言わせるつもりもありません」

そう。あの空港火災からずっと、八神部隊長は「少数精鋭」の部隊設立のために尽力し、奔走してきた。エースと優秀なスタッフ、才能溢れる新人達。私なんか、彼らの足元にも及ばない。

「……そういうことは、一度でも私に勝ってから言っしてほしいものです」

一度も私に勝てなかった人に、言われてたまるか！

沈黙が場を支配する。

「……勝負だ。午後に模擬戦を一本、俺とお前の1対1で」

「構いませんよ。今日は1日オフシフトなので」

出力制限はかかっているが、リンカーコアのリミッターは外されている。デバイスのリミッターが問題だが……それで負ける程、弱いつもりも無い。

「いいのか、深琴。お前午後はフエアとも約束してたろ？」

「先にこちらを片付けてから、で」

「逃げるなよ？」

「それはこちらの台詞です。いつぞやの様な真似はなさらないよう、お願い致します」

騒ぎに気づいたセレナが駆け寄る。そんな彼女に「退け」と命令してレックスは去った。気遣わしげな視線を向けるセレナに、私は頷く。一応、彼女は彼の部下だし。

「友達、心配してるんじゃない？」

「大丈夫……だと思う。前にもこんなことあったから」

同じく気遣わしげなスバルに、私は言う。降りかかる火の粉を払うのは慣れていた。……やや強引な手法で、だが。

「あのさ、深琴……言い返してくれたことはすつごくありがたいんだけど……」

「何、ティアナ？」

「……アーウィング執務官が息してない」

「……えっ!？」

そういえば先程から一言も発していない彼を見ると、小さく何事か呟いて現実逃避を凶っていた。あ、でも息はある。

「……っっていうかよ。誰も止めないんだな、模擬戦とか」

お兄ちゃんの呟きが、響き渡った。

Report 05：2月某日、機動六課にて（幕間）

「模擬戦って……ちょっと、それどういうこと!？」

ルーチェが叫び、食堂の円形テーブルを叩いた。幸い食堂に集まっているのは、先程の騒ぎを知っている六課の隊員達。ヴィヴィオがこの場になくて良かったと、私は心の底から思った。

「……でも、言い出したのはあの人だし……」

「それはそうだけど……でもあの人、空戦で、炎熱変換持ちだし……ダブルAランクだし……」

セレナの言葉に、ルーチェは小さい声で訴える。確かに六課の運用に際してランクリミッターをかけられ、出力はB＋ランク程度の私には厳しいかもしれないけども。……それでも格上の相手との戦いは六課で学んできたし、JS事件では何度も実戦を経験している。メカニック陣には賭けにならないと文句を言われたが。

「まあいいんじゃないか。この際きっちり決着つけたほうが、お互いのためだろうし」

「だな。幸い、許可はあっさり出たんだし」

レオンとアスカ、二人の言う通りで模擬戦許可は簡単に出た。

もちろん条件もいくつかある。当然魔法は全て非殺傷設定だ。私はハンデとして出力リミッター維持とカートリッジ使用禁止。……それでもリンカーコアのリミッターは解除されているから、気にはならない。

「つていうか……気に入らないなら放っておいてくれたらいいのね」

士官学校時代から続く攻防を思い返して、私は言った。

聞いた話だと、彼が私を嫌う第一の理由が「年齢」らしい。何でも私が入学するまでは、彼が「クロノ提督に次いで最年少士官候補生」だったとか。一つしか変わらないのに、それすらも気に食わないらしい。気に食わないから難癖つけてきて、私がやり返す、と。

正直、無視してくれたほうがありがたく思った。好かれていない……それもお互い歩み寄ろうとすら思っていない相手と必要以上に

接するわけがない。

昔読んだ本にあった、『“好き”の反対は“嫌い”ではなく“無関心”』という言葉。それを実践すればこじれるし、かといって接触すればぐちぐち言われるし……。

「何がしたいんだらうね。あの人は……」

『えー、何でー？　僕が最初に言ったよね？』

モニターの向こうで、コートに身を包んだフェアが頬を膨らませた。模擬戦についてメールを入れた直後に通信を入れてきたのである。

「ごめんね、フェア。ただどうしてもその人とは決着を付けておきたくて……」

『……まあ先に僕と戦ったら、後が続かないのも納得だけどき……』

横から飛んできた拳を後方にステップして回避する。直後、すぐに距離を詰めて相手の——零さんの腹部に一撃を決める——が、黒色の盾に阻止された。

「悪くは無いな。でも……!」

「っ!」

桜色の誘導弾が、私の周辺から一斉射撃を開始する。魔力弾の特性を見分け、体全体を使って回避。再び零さんが攻撃してくるので、それに対応……と。

『つていうか、準備運動激しいよね!』

「これくらいやらないと、体温まらないからね」

「見てるこつちの心臓に悪いよ……」

フェアの突っ込みに笑って応じてると、フェイトさんが胸を撫で下ろしている。

「じゃあ次はインターセプトトレーニング、行くよ」

「はい!　お願いします!」

なのはさんの号令に合わせて、様々な特性を持たせた桜色の魔力弾が生成される。それらを全て見極めて対応した弾丸を生成し命中止せると言う訓練だ。最初のうちはティアナと一緒に受けてたっけ。

《buddy.》

「行くよ、ロゼット!」

フォルム・ツヴァイ、腕輪型に変形していた愛機・ローゼンクラウンは応答と同時に弾丸を生成した。カートリッジ使用禁止のため、このフォルムが一番使いやすい。

「あ、そうだ。深琴、新しいバーストフォームの調整も忘れずにね」

「はい!」

「調整? 早くないか?」

なのはさんの呼びかけに頷いて、調整データ収集用のプログラムを展開する。その光景に零さんが首を傾げていた。

「まあね。でも私やフェイトちゃん……隊長陣皆と深琴達で決めたから、大丈夫だよ」

「いや、俺は心配してないけどさ」

休憩に入った零さんが、小さく呟いた。

『でも、深琴。その先輩とかの模擬戦が終わったら、次こそは僕の番だからね?』

「うん。それはちゃんと約束する」

『……うん。約束』

にっこりと微笑んで、フェアは通信を切った。



「ねえ、あの話聞いた?」

「聞いた聞いた」

秋月深琴と出向研修中の局員が模擬戦を行う——サンルームでの騒ぎから1時間もしない間に、その話は機動六課全体に広がっていた。相手は士官学校時代の先輩で因縁があるとか無いとか、そんな所まで広まっている。

既にメカニック陣は集まって「どちらが勝つか」等一頻り盛り上がっていた。とはいえ「深琴の勝利は揺るがないだろうから、賭けにならない」と愚痴が零れていたが、それはまた別の話。

そ知らぬ顔で隊員達の会話に耳を傾けていたレックスは、唇を噛んだ。

六課の隊員達は、誰一人深琴の勝利を疑っていない。敗北はありえない、あつたとしてもそれはリミッターやその後には控えている別の模倣戦に備えるからだ、高を括っている。

(これだからあいつは生意気なんだよ……)

当然深琴が信頼を勝ち取る程の努力をしていることは、レックスも知っているし認めてもいる。しかし戦う前から敗北を決め付けられることは気分が悪い。

士官学校時代から、彼女はそうだった。優秀で真面目な彼女は教官達の覚えもいい。与えられた課題をそつなくこなしカリキュラムを進める彼女を誰もが賞賛し、評価する。けれど彼女が蹴落とした時点で、その相手は負け組の扱いを受けた。

『秋月ならこの程度、何とも無い』

『まだ12歳の秋月が余裕でこなしているというのに』

『この程度のこと、何故出来ない』

彼らなりの叱咤激励だとは知りつつも、レックス達はその言葉を信じていることができなかった。なりふり構わずかかっていった結果が、文句なしの敗北となれば尚更である。

けれどかつては、ここまで気にならなかった。それは深琴本人の態度。口数少なく、与えられたことだけを淡々とこなすその姿勢は、60期生の誰もが認めている。

しかし今はどうだ。他人に甘えて、笑って、自由気ままに生きるその姿は認めるには程遠い。自分以外の60期生でも文句のひとつは言いたくなるだろう。

何よりこれまでの時間は、自分も鍛錬に費やしていたのだ。これまでに以上に彼女といい勝負ができるだろう。状況次第では勝つことも、不可能ではない。

(……そうだ。俺は勝つんだ……!)

息を吐き、拳を握っては解く。冬の風に運ばれた枯葉が、同時に炎を上げた。



「今度こそ、俺が勝つ」

首を洗って待っている、と呟いて。

◇

「それで、ここが静真さんのお部屋です」

「はい」

「中の物は自由に使ってもらって構いませんし、足りない物とかあれば遠慮なく言ってくださいです」

「遠慮なくって言われても……」

机とベッドを始め、一人で使うには少々広い部屋。簡易キッチンやシャワーまでも完備と言う至れり尽くせりの環境に、秋月静真は慄いた。その上到着してからと言うもの、自分は関係者達にたく気に入られているらしい。先程も進学に必要な法的後見人について、はやて、なのは、フェイトがそれぞれ「自分が」と声を上げてくれたのだ。

もちろん美女に囲まれ、取り合いをされるといふ事は男の夢でもある。悪い気分ではないのだが、その根底には「深琴の家族だから」という思いがあると思えば少々複雑だ。

「ここまでしてもらって、申し訳ないくらいですよ……」

「そんな、気にしないでほしいです。六課の皆は元からフレンドリーなんで」

「そうですよー」

案内してくれたリインフォースIIとスバルが、笑う。

「……やっぱり、気になりますよね？ 妹さんが模擬戦なんて」

「まあ、少しは。売られた喧嘩は買う性格ではあるんですが」

まさかあそこまでとは。そう呟いて、静真は荷物を置いた。

「ですよ。皆も驚いてたし」

「いつも妹が迷惑かけて、すいません」

「そんな、迷惑なんて。むしろ私の方が年上なのにかけてっばなっして  
いうか」

鞆を開き、持ってきた荷物をあるべき場所に置く。

(母さんがこの事知ったら、気絶するかもな)

そんなことを、静真は考えた。4年前の出来事を完全に和解した母は、これまで以上に妹を溺愛するようになった。……かつては褒めることすらろくに出来なかったことを考えれば、しようがないのかもしれないが。

「お母さん、心配しそうですね」

「……それは思う」

正月休みに家族会議に挙げられたのは、今後について。これからは出来る限り家族一緒に、と考える様になった母親が言っていた。出来ることなら、自分達も一緒に向こうの世界に行きたいと。それから家族一緒に暮らしていきたいと。

けれど、秋月の家はそれなりの知名度と役目を担い、長い歴史がある家でもある。それら全てを放り出してしまっていないのか、と言われれば誰一人母の言葉に頷く事が出来なかった。

「……『家族』って、難しいな……」

「……そうですね。私も、そう思います」

静真の呟きに、スバルが頷いた。

Report 06：2月某日、機動六課にて（中編）

機動六課敷地内の海上に設置された、訓練スペース。廃棄都市区画をイメージしたビル郡で、私とレックス・フォレスターは対峙していた。時刻は午後1時ちょうど。お互い身に纏うのは管理局制服だ。その周辺には誰もいない——至る所に設置されたモニターで、リアルタイム映像を送っているから。六課の皆や関係者各位は、海岸辺りで待機している。流れ弾とか危ないし。

今回の模擬戦の制限時間は1時間。リミッターだの何だのあるので、細かいルールはD S A Aの試合ルールに則る形になった。非殺傷設定とクラッシュエミュレート設定を併用し、ライフ制。公式試合用タグで管理される数値は3000で開始される。ちなみにこの数値は『インターミドル・チャンピオンシップ』では用いられるタイプではなく、各ポジションに応じて設定されている。今回適用するのは、フロントアタッカーのものだ。またこの場合残りライフが100未満になると行動不能になりその時点で敗北になるのだが、今回は適用させないことにしている。ラウンドの設定やセコンドの設定も面倒だし——何よりお互い、自分が負けるとは思っていないから。

『二人とも、準備はいい？』

「はい」

「問題ありません、なのはさん」

私達の間に見れたモニターを通じて、なのはさんが呼びかける。返事の声は、固い。深呼吸して、はやる気持ちを抑える。

『どんなに辛くても、やめなかった努力の時間は絶対に自分を裏切らない。それだけは忘れないで』

ゆりかごが浮上して、地上本部が狙われて——別々に行動する事になった私達に、なのはさんがかけてくれた言葉を思い出す。これまでの訓練は何だったのかと考えさせられたハイレベルの教導に、付いて行くだけでやっとだった自分。けれど皆で一緒に頑張った。そして自分の意思で考え、導き出したその結果を、後悔するつもりは無い。

《Stand by ready. Set up.》

お互いの魔力光が場を包み込む。次の瞬間にはそれぞれの防護服を纏っていた。士官学校時代とは異なる、オリジナルのもの。レックスが纏うのは白い長袖の上着に黒のインナー、それとズボン。腕と足には騎士服によく付属する金属鎧が設定されていた。その手にはライフリングを施された長銃——マスケット銃と言うのだろうか——が二丁、握られている。

一方の私の防護服は、いつものロングアーチスタイルではない。黒いワンピースにも似た上衣と、ベルトで留められたミニスカート。髪は白いリボンで結い上げるような形だ。両腕にはフォルム・ツヴァイのロゼットが装着されている。

「薄い装甲だな。舐めてんのか?」

「別に、そういうつもりは無いですけど」

この、新しく設定し直したバーストフォームは、以前のものとはデザインからして異なっていた。とはいえ隊長陣やレイジングハート、バルディッシュの協力もあって、調整の殆どは終わっている。後は実戦を繰り返し、データを確認するだけだ。

そう内心で吐き捨て、私は再び彼と対峙する。シグナルが浮かび上がった。

(3、2、1……!)

赤色のシグナルが青色に変化する。開始のブザーが鳴り響いた。

◇

「はい、そんなわけで始めましたこの模擬戦。開始直後から接近戦ですねー」

「つていうか今、深琴ちゃんほぼ素手で銃身殴りに行きましたよ!?!  
あの子大丈夫なの!?!」

訓練スペースを離れた道沿い。シミュレーションスペースのデータ情報、模擬戦中の二人の魔導師に関するデータ、そしてリアルタイム映像が集められたその場所には、いつの間にか実況席なるものが設

営されていた。関係者達がお茶を手に見守る中、マイクを握り締めているのは藤原楓・咲夜姉妹である。管理局制服の上に技術部の白衣、その左腕には楓の「実況」、咲夜の「解説」という腕章が安全ピンで留められていた。

「いやいやいや、何で姉さん達がいるんだよ。そこからおかしいだろ」「話聞いてすぐに半休取ったんだって」

手伝いを申し出たティアナとキヤロと一緒に、そして執事という職業柄お茶の用意に勤しんでいた零の眩きに、満面の笑みを浮かべた彼方が説明する。双子の弟の言葉に零は頷いたが、次の瞬間には急須を持つ手を止めた。

「……何でお前もいるんだよ」

「何となく?」

紙コップに注がれたコーヒー、緑茶、紅茶、キャラメルミルクが湯気を立てる。それをこの場に集まる全員が受け取ったことを確認した咲夜が、マイクを手になのはに近づいた。ちなみに「この場に集まっている「全員」というのはなのは、フェイト、はやと深琴を除いた前線フォワードメンバー、シャーリー、シャマル、ヴァイス、士官学校61期生、零、デイバイン、藤月彼方、藤原姉妹、霜月秋葉、フェアクレールト、そして秋月静真という総勢22名の関係者である。他、機動六課メンバーはそれぞれオフィスのモニターから、この模擬戦を見守っていた。

「高町教導官、深琴ちゃんの立ち上がりをどう見ますか?」

「そうですね……いつも通り、問題ないと思います」

咲夜にマイクを向けられ、なのはは口を開いた。

「ですが、二人が戦うのはフォレスター二尉が卒業してからは今日が初めてです——専用のデバイスと防護服で戦うのも同じくですので、相手の出方を窺っている感じがします」

「というと……やはりお互い、警戒はしていると?」

「なのは隊長の言う通りやね」

なのはの言葉に頷いたはやてに、咲夜はマイクを向ける。

「八神部隊長。と、言いますと?」

「深琴や61期生の話によると、フォレスター二尉は炎熱変換持ちの近代ベルカ式。ですがデバイス形状は見ての通り、マスケット銃。近代ベルカ式とミッドチルダ式の相性が良いのは周知の事実とは言え、あの見た目やと砲撃特化……そこまで言わずとも、『砲撃戦もこなせるかも』と判断するかもしれない。最初に深琴が銃身を殴りに行ったのもそこら辺の確認やと思われます」

「深琴が今まで戦ってきたのは特定の能力に特化したタイプや、自分やフェアの様にポジションに囚われないタイプの魔導師が殆どで、あの意味両極端ですから。やりにくいというのはあると思います」

はやてに続いて、フェイトが言った。「ありがとうございます」と三人に笑った咲夜は、思い出したように実況席に座る楓に振り返る。

「そういえばね、模擬戦前に深琴ちゃんと話したんだけど」

「はいはいー?」

「今回の模擬戦について言ってたんだけど、『一度勝ってるからって、油断するつもりはない』って」

「おー。ちなみにフォレスター二尉は『徹底的にぶちのめす』とコメント残してますねー。ブーメランにならないければいいんですけども」

「……というか、何か実況・解説共に公平性を感じないんですけど」

風に身を震わせながら、秋葉が呟く様に言った。紙コップを握り締め、指を温める。

「仕方ないんじゃないの? 言い分は分からなくも無いけど、うちはコネだ何だで評価されてるわけじゃねえし。少なくとも深琴があの時まで暴言を吐くなんて、六課が始まってから今まで無かったわけだしな」

「……まあ深琴には、それしか道が無かったわけですから。目標達成のために打ち込む姿勢は、見ていて危なっかしいけど……今黙り込んでいる関係者は大体そう思ってるはずだし」

「あ、なるほど」

ヴァイス、そしてシャーリーの言葉に頷いて、秋葉は模擬戦開始から不安そうにモニターを見つめ黙り込んでいる秋月静真、デバイス・アーウィング兩名を見た。モニターの向こうではレックスが変換

した炎を銃身に纏わせ、深琴へ至近距離から攻撃したところである。背後からのそれを深琴はバリアで逸らしたが、衝撃により100のダメージを受けた。開始して最初のダメージは、深琴が負うことになる。ああ、と残念そうな声が上がった。そして、同時に。

「……そういえば、何で深琴がロングアーチなんだ？」

「……は？」

零の言葉に、場が騒然となった。「え、今更？ 今更それ聞くの？」との声も聞こえてくる。

「いや、階級同様何かあるんだろとは思ったんだが……疑問に思ったのって、俺だけ？」

「兄さんだけだと思うよ。っていうか静真君やフェア君以外は大体予想していると思うけど？」

「それ以前に、もつと早く疑問に思うべきじゃないか？」

彼方とデイバインから「可哀想なものを見る」視線を送られて、零は呻いた。彼の様子を見ていた楓が「んー……」と自身の顎に手を添える。

「あ、でも改めて言えば疑問かも。八神部隊長、お聞きしても？」

「はい。もちろんです」

にっこりと笑みを浮かべるはやてに、咲夜からマイクが渡された。

「最初に明確にしておきたいのは、我々ロングアーチは確かに後方支援隊として後方業務を全般に請け負っていますが、同時に機動六課の司令部でもある、ということ。深琴の場合『ロングアーチスタッフ』とは言っても、『後方支援隊』としてのロングアーチではなく『機動六課司令部』のロングアーチに所属していると考えてください」

「はあ……」

「で、六課は元々レリック事件及び聖王教会の『予言』の対策のために設立された部隊です。事件の展開によってはフォワード隊や交代部隊はもちろん、ヴァイス君やザフィーラを含めたロングアーチに籍を置く魔導師や騎士に出動命令を出さななりません。そうなった場合司令部に残ってるのは非魔導師の子達だけ」

紙コップに残る緑茶を一口飲み、はやては続ける。

「例え防衛システムがあるとしても、司令部も守らなアカン。戦力的にも前線にはフォワード部隊と交代部隊が出るやろうから、ロングアーチ隊の魔導師が残る事になる。……けど、そうなった場合にある問題が発生する」

「相手勢力の迎撃に回せる最前衛がいないな」

溜息混じりに呟かれたデイバインの言葉に、藤原姉妹が納得したように手を叩いた。

「そういうことや。ザファイラも最前衛やけど、攻撃より防御の方が得意やし……ともかく、ポジション問わずに行動できてそれだけの魔法を使いこなす。やから深琴はフォワード部隊と言うよりは、司令部が保有する独自戦力って形なんよ」

「でも、深琴は実戦の経験が殆ど無い。だから普段は前線フォワードと一緒に行動して経験を積んで、何かあつたら司令部の防衛に回って約束だったの」

「……だから六課が襲撃された時に、本人に意思決定させたわけだな。隊舎までの先行が許可されたのも同じ理由か」

「そうゆうこと」

はやての言葉になのはが注釈を入れ、いつぞやの出来事を思い出したデイバインが確認する。全ての疑問が片付いたらしい零は、深い溜息を吐いた。

「……このちび狸が……」

「あはは、零。聞こえとるでー」

「というか小さいとか、あなたも人のこと言えないと思いますけど」

地を這うような声で放った言葉が、秋葉の呟きによってそのまま零自身の心に深いダメージを与えた。

「……まあ後理由を挙げるとしたら、もう二つは考えてたけどな」

「まだあるのかよ……」

「当然や。深琴本人の希望進路の事もあるし、元とは言ってもあの子は士官学校卒のキャリア組やからな。フォワードとは言え司令部に置く事で指揮の勉強もできるやろうし、学校側も納得できる。執務官補佐に必須の事務処理能力を鍛えることも、前線管制についても学ぶ



「こともできるしな」

そこまでの理由を用意していたが、それだけの成果を彼女に残せたかと問われれば否である。

そしてこの直後、モニターから轟音が響いた。魔力砲撃に吹き飛ばされた深琴は、足首に生成された翼を器用に転換してビルの屋上に着地する。

「……深琴の残りライフは1000ちょうど。クラッシュエミュレーターは全身の軽度打撲と左腕火傷。ボディ蓄積ダメージが10%なのが、まだ救い……」

「でも、一方的にやられて……」

モニターが拡大され、深琴を映し出した。肩で息をし、汗を拭うその姿。鋭い視線の先にはレックスが映されているのだろう。

「……負けないよ、深琴は」

モニターを見つめて、フェアが口を開いた。その声と言葉に目を丸くして、ルーチェは疑惑の目で彼を見る。そんな彼女の様子に、フェアは首を傾げた。その温度差を疑問に思ったエリオはモニターに視線を向け、その目を丸くする。その反応に驚いたスバルが、小さく呟いた。

「深琴……笑ってる……?」



砲撃に煽られた体勢を整え、私は手近なビルの屋上に着地する。幸いにもアウトレンジまで退避することが出来た。全身に鈍い痛みが広がり、炎の直撃を受け火傷を負った左腕も見た目は何とも無い。上手くバリアを発動できたこともあってか、実際のダメージは低かった。

《Want to avoid further damage.

『これ以上のダメージは避けたいですね』

「同感」

とはいえ微妙に違いがあるとはいえベルカ式同士、戦闘距離は限ら

れているし射程はほぼ同じ。厄介にもあちらは自身の魔力でデバイスを複製、同時展開可能という特殊技能持ちだ。近づけば物理、遠ざかればマスキット銃による射砲撃。銃を破壊しても複製される——厄介な相手ではある。

だが、自然と口角が上がった。

「でも大体分かった。試したい対処法も見つけたしね」

《Good to hear. 『それは良かったです』》

「うん。……行くよ、相棒」

《All right, buddy.》

淡紅色のベルカ式魔方陣が展開され、輝きを増す。屋上から飛び立つと同時に、愛機が宝石を輝かせた。

《Mode select——RF6”, standby.》

◇

アウトレンジまで逃げた深琴の姿を目で追いかけているが、レックスはその手に携えるマスキット銃を握る力を込めた。開始直前の二丁以外にも、地表ギリギリに八丁を含めた合計十丁のマスキット銃が、いつでも使用できるようになっている。レックスのライフは開始以降減っておらず、そもそもダメージを負っていないのだからクラッシュエミュレートもない。

(これなら、勝てる……！)

思わずにやけそうになる頬をおさえる。接近戦では銃身に炎を纏わせた打撃、射撃戦には対応できる射砲撃魔法が設定済みだ。深琴は強敵だが、その射程は自分と殆ど変わらない。確かに彼女には出力リミッターが設定されているが、それを敗北した理由にすることは無いだろう。

だが、とレックスは歯噛みした。

昔の彼女は、笑わなかった。表情を変えることなく淡々と過ごしていたと言うのに、今はどうだ。絆だの不確定要素に夢見て、笑い、毎日を過ごしている。その結果が今だ。その事実が腹立たしい。

(秋月。俺が憧れたのは、昔のお前だ。その強さも、何もかも……)

昔の彼女は笑わなかった。表情を変えることなく淡々と過ぐし、言葉少なにただひたすら戦うために力を磨いていた。それが自分なのだ、疑うこと一つしなかった。故にその強さには、一点の曇りすらなかったのだと言える。

何度目かの突撃に瞳を伏せ、レックスは手にしたマスケット銃を薙いだ。力強い一閃に、深琴は苦悶の表情を浮かべる。

「今のお前は、本当のお前何かじゃない」

「それを決めるのは私です。あなたではありません」

声が響いたのは、上空。同時に目の前にいたはずの深琴は音も無く消え、上空に姿を現した。



『今のお前は、本当のお前何かじゃない』

『それを決めるのは私です。あなたではありません』

銃身の薙ぎ払い。その直撃を受け苦悶の表情を浮かべる深琴の姿がかき消された。同時に上空から声は響き、声の主はその姿を現した。

「今のは、幻術……？　もしかして、ティアさんの……」

「フェイク・シルエットにオプティックハイド……」

『先輩はぐ存じないでしょうけど』

上空に向けられた砲撃を回避して、モニターの向こうで深琴は微笑んだ。そして立ち止まった深琴は、渦を巻く様なバリアを展開し、マスケット銃による砲撃を阻害する。

「ホイールプロテクションまで!？」

機動六課で自分たちが覚え、鍛えられた魔法。各自の特性やポジションに合わせたそれらを難なく発動させる深琴の姿に、前線フォワード陣は呆然としていた。開いた口が塞がらない。

『六課の隊員や関係者、協力者の皆さんって揃いも揃ってスペシャリストなんですよ。そんな人達が協力したら強いに決まっています。』

そんなもって皆さん優しいので、私みたいな半端者でもちゃんと戦えるようにしてくれました』

加速して距離を詰め、右の拳を突き出す。銃身に受け止められた拳は、同時に生まれた衝撃波に電流を纏わせた。

『今度は変換!?!』

『半端者』の定義が行方不明ですね……』

シャマルが悲鳴混じりの声を上げ、アスカが申し訳なさそうな声で言う。レックスに対して500のダメージと感電のクラッシュエミュレート判定が出た。残り時間は、30分を切る。

『でも、だったら何で深琴はいつもこの技を使わないんだろう……』

何度も一緒に戦ったフォワードメンバーが首を傾げた。いつもリミッターがかけられているとは言え、深琴はその性格からして手を抜くという事を嫌う。練習中だったとか等意見が飛び交う中で、なのが小さく首を横に振った。

『多分、『使わない』んじゃないかって『使えない』んだと思う。ロゼットがフォルム・ツヴァイでなければ、成立しないんじゃないかな』

『かな』って……何も聞いていないのかよ』

『……うん。何も聞いてないし、初めて見たよ』

なのはの疑問系の口調に、零は眉を顰める。その視線をデイバインに転じた。

『俺が知るわけないだろう。全員に黙ってたんじゃないか?』

『……そやね。こうして機会がなければ、使わへんかったかもしれないし』

表情を緩めることなく、はやてとデイバインはモニターを見つめる。その向こうでは追撃の手を緩めず、レックスのライフを2000まで削った深琴が口を開いていた。

『……なので負けるわけにはいきませんし、だったらついでに条件をつけることにしたんです』

『条件……?』

『はい』

呼吸を整えると同時に、淡紅色のベルカ式魔方阵が輝く。次の行動

に対処できるような身構えたレックスの足元にも同様に、群青色の魔法陣が展開された。

『六課で教わって、学んで、知った魔法……過去の私が使えなかった魔法で、勝つんだって』

得意げな、声が響いた。

Report 07：2月某日、機動六課にて（後編）

過去と今は、切り離せない。過去が無ければ今が無いし、今が無ければそもそもそんな概念も存在しないだろう。……それでも、独立したものに変えることはできるはずだ。『過去は過去、今は今』と言い切る強さが欲しかった。

それまでの私は過去から逃げてばかりで。向き合うことを恐れて、拒絶した。ただ肉体的な強さを求めて自分を追い詰めて、怪我をして、心配をかけてばかりで。そんな自分が嫌いだけど、だからと言ってどうすればいいのか分からなかった。……ずっと、一方的な私を受け入れてくれた同期の優しさに甘えていた。

——六課で出会った人々が眩しく見えたのは、そのせいかもしれない。

厳しくも優しい隊長達。過去を受け入れ、それでも真っ直ぐに夢に進む同僚達。ずっと自分を守ってくれた憧れと、教え導いてくれた師範。自分によく似て、過去に縛られていた好敵手。時には耳に痛いその言葉は優しく、差し伸べられた手は温かかった。それが嬉しい反面、心苦しくなったのはいつだろう。変わりたいと、変わるんだと決めたのはいつのことだったか。それすらももう覚えていない。

それでも、ふとしたきっかけで足は止まる。途端に不安になってしまふのは、私がまだ弱いから。

だったらそうなっても大丈夫なように、出来る事はしておきたい。過去も今も全部受け入れるには、私はまだ幼いのだと言われるだろうから……可能な限りバレない様に。

それを伝えた時、共に駆ける相棒はこう答えた。

《Is possible. ——— you and I. 『出来ますよ。私とあなたの、二人でなら』》

海上に設置された訓練スペースに、潮風が運ばれた。冷たいはずの風は防護服やそれに類するフィールド魔法で、微塵も感じない。

(残りのライフは私が1000、先輩が2000……)

きっかり倍の差があった。制限時間は30分を切っているが、それでも不安を感じない。

《I thought at first that there will, RF6 guess good. 『最初はどうかと思いましたが、RF6は順調ですね』》

「だね。……一気に返上するよ。やれるね、ロゼット」

《Yes, of course. 『もちろんです』》

ロゼットが同意すると同時に、魔方阵を輝かせる。レックスが身構えたことを確認して、対峙すること数秒。どちらからともなく距離を詰めた。銃身で拳を弾かれ、距離が離れる。

《Snipe shot.》

《Blaze Cannon.》

直射弾と炎熱を纏った魔力弾が相殺された。一瞬の隙を与えることなく、互いのデバイスが再度同じ魔法を自動で詠唱する。その間を縫って、術者は再度距離を詰めた。繰り返される長銃による打撃を、バリアを展開した両腕で捌く。

《Calibur shot.》

蹴りと拳による打撃コンビネーション。スバルが使用するシューティングアーツの技としても、装備型のデバイスとの連携としても「基礎中の基礎」らしい。それでもロゼットの詠唱に合わせてコンビネーションを打ち込むのは、何度も練習を重ねた。

ティアナが使うフェイク・シルエットとオプティックハイド。スクリーンも偽装の寿命も短すぎて、彼女が使うものと同じとは思えない。

エリオが保有する雷への魔力変換。時間もかかるし効率はよくないし、資質の有無はともかくとしてまだまだ勉強が必要だ。

キャラが使うホイールプロテクション。距離も発生時間も、強度も彼女には敵わない。

けれどそれらの出力や制御は、全てロゼットが担っている。

フォルム・ツヴァイは元々後方支援——ブーストや防御魔法に特化

したフォルムだ。特別な理由がなければ攻撃に回ることが無いため、カートリッジは使えない。使わなくても、私が本来持ち合わせている魔力で充分補えるからだ。

そもそも愛機・ローゼンクランツは他のデバイスと違って、私のリムカーコアへのリミッターでもある。形態問わず身につけることで、魔力を制御できるように製作されていた。しかし彼女が破壊されたら同時にリミッターは強制解除され、制御を受け付けなくなった魔力は私の中に戻り、状況的にもいわば「暴走」してしまう。それが、機動六課が襲撃されたあの日の出来事だった。

その後ロゼットが自分で組み上げた改良プランには、このフォルムにいくつか機能を追加するものがあった。カートリッジが使えず、小型であるが故にボディの装甲も保障されたこのフォルム。ならば私の魔力制御に特化させよう——と、今思えばとてつもないことをこの相棒は言つてのけ、そしてやってのけた。

J S 事件後、ランク試験でフェアと再戦し引き分けたあの日。就寝前の反省会で出た意見は、「フォルム・ツヴァイだと攻撃力に欠ける」というものだった。将来的にどれくらいの頻度で使用するかは不明だが、備えておくべきだと進言された私が考え出した結論が——「六課の皆の技を使う」というもの。ツヴァイの記憶領域にそれらの魔法を記憶させ、使用時には制御している魔力で出力を強化させる。もちろんオリジナルである皆には敵わない。それでも目くらましにはなるのでは、という意見に、ロゼットは賛同した。

『お前馬鹿だろ』とか、絶対言われるだろうけどね……！』

使う機会がなくても勉強にはなるし、というか六課運用終了まで使うことは無いと私は思っていた。しかし今回使うことになり、また相手は士官学校時代の知り合い。攪乱にはなっている。

(始末書程度で済めばいいけど……！)

とはいえ本人達には無断なので、処罰は免れないだろうけど。





「あいつ馬鹿だろ!？」

ほぼ同時刻、実況スペースには零の叫び声が響き渡った。モニターの向こうでは六課や関係者の魔法を使用してレックスを追い詰める深琴の姿が映し出されている。残りライフは深琴が950、レックスが1400。じわじわと追い詰めているが、深琴自身のライフも危険水域に近づいている。

そんな中、モニターの一枚は深琴の愛機・ローゼンクランツのデータが表示されていた。そこには以前彼女が組み立てた改良プランと、「RF6」と名づけられた魔法システムと記憶領域の存在が示されている。それもつい先日、バーストフォームの調整時に提出されていた……ひっそりと。

「そんな理由でシステムの組み立てとか拡張とか聞いたことねえよ！」

馬鹿なの？ 頭のいい馬鹿なのあいつらは!？」

「真っ直ぐなだけだよ……多分」

頭を抱えて叫ぶ零に、フェイトが自信無さげな声で答える。

「静真先輩。兄として一言どうぞ」

「否定できないな」

「静真君もそんなところあるしね。血は争えないっていうか」

妹の規格外な行動について、秋葉に問われた静真は即答した。そして彼方の一言に崩れ落ちる。ちなみになのは、はやて、デイバインの三人は「またあの子は……!」と頭を抱えていた。

「でも、何で……」

「ティア？」

「何で深琴は、『私達の』魔法を使うんだろう……」

ティアナの言葉に、スバルが首を傾げる。

「今の所、隊長陣や零さん、アーウィング執務官の魔法をあの子は使っていない。でも本当に勝ちたいんだったら強力な魔法を使っても不思議じゃないと思うんだけど……」

「『友達を侮辱されたから』じゃないの?」

フェアの発言に、面食らった様子でその場に集まる彼以外の全員が視線を向けた。一方のフェアは久しぶりに再会した愛機・アインザツ

ツをショートソード型に展開し、暇つぶしと言わんばかりに手の内で遊ばせている。

「……理由は？」

「だって、深琴が怒ったのは六課の人達が見下されてたからなんですよ？」

そしてその中でも真っ先に復活したデイバインが口を開いた。そんな彼に、フェアは事も無げに言う。

「その人達の魔法で負けたらさ、相手としたら悔しいし、認識も変わるんじゃないかなあつて。まあ『認識を変える』んじゃないくて、『力押しのごり押しで書き換えさせる』だと思っただけ……そんなに驚く？」

「……いや。お前の成長に驚いただけだ」

「二応、真面目に更正プログラムを受けてるからね」

えっへんと言わんばかりに、フェアは胸を張った。しかし次の瞬間には、その紅色の瞳はモニターに向けられる。

距離を取って対峙する両者。その足元にはそれぞれの魔方陣が輝いている。残りライフは深琴が700、レックスが1200。制限時間まであと10分に迫っている。後がない状況だ。深琴が勝つには1000以上のポイントを一気に削れる様な高威力の技を使用するしかない。

「……終わったな」

「……うん。深琴の負けだ」

レオンの言葉に、ルーチェが同意する。深琴自身がその魔法を記憶していても、残り10分では覆すことはまず不可能だ。何より六課フォワード陣の魔法には、その条件を満たすものが無い。あるとすればなのはブレイカー等だが、言わば『新人フォワード縛り』の状況では……。

「確定するには、まだちょっと早いんとちゃう？」

「みたいですね」

落胆する61期生を見遣ったはやてに、シャマルが苦笑混じりに同意する。

「……そうだね。はやての言う通りだ」

「一か八かだけどね」

モニターに集中していたフェイトが頷き、なのはは肩を竦めた。その状況を信じられない61期生が動揺する中、はやてが笑う。同じ頃、モニターの向こうでは再び接近戦を再開した二人が、同時に展開したバリアがぶつかりあっていた。響く独特の音はお互いが流し込んでいる割り込みプログラム特有のものである。銃身の上から二重に防御を固めるレックスに対し、深琴は左腕だけで対抗していた。デバイスである長銃にも魔力をこめる必要があるレックスに比べて、深琴の割り込みプログラムの侵入は若干早い。

モニターに映し出された深琴の足元で、淡紅色の魔方陣が輝きを増した。同時に同色のこれまでに訓練場の空中に拡散した魔力が、彼女の周囲を漂い始める。いつしかその魔力は深琴の右腕に集められ、まるで籠手の様な形となった。しかし留まることなく、周辺の魔力が流星のごとくその右腕に集束されていく。

その事実には、61期生とほぼ同時にレックスもまた目を丸くした。「経験積まずためや、言うてもな。……深琴やって、『新人フォワード』の一人やで」

柔らかな笑みを浮かべ、はやては呟いた。



「左手一本で、持ちこたえるつもりかよ……!」

「当然です。それが出来るように、鍛えてもらっただんですから!」

二色のバリアが同時展開され、お互い流し込んでいる割り込みプログラムが反発した。自分か相手か、集中力が先に途切れたほうが負ける。

「…………ふざけんよ…………」

カートリッジを1発ロードし、群青色のバリアが強化された。負けじとプログラムの進行を急がせるが、バリアの強度も合わさって僅かにライフが減少していく。

強い意志を秘めた青い瞳が、私を射抜いた。

「負けるわけにはいかねえんだよ。お前なんか……今のお前には、負けられないんだよ！」

「だったら尚更、こちらとしても負けるわけにはいきません」

士官学校時代——入学当初は、あまりいい記憶が無い。教官からは過剰に期待され、先輩たちからは妬まれて、同期には持て余されていた頃。

確かに、私は扱いにくいと思う。期待されるだけの理由があつて、それなりの実績もあつた。大勢の人と生活すること自体初めてで妥協ができず、生意気で扱い辛いと思われていても仕方が無い。当時はそれすらも寂しいとかは思わなかつた。ただひたすら力を磨いていくことでその感情を消そうとした。その繰り返し。

だから当時の私に比べて、今の私が「変わった」と評される。他人と話せるようになった、妥協できるようになった……それから、『笑えるようになった』と。私自身、昔の私よりも、今の私の方が好きだったりする。

——だったら、皆にもそう思つて欲しい。そう思つてもらえるようになりたいと、心底から思う。

だから、負けられない。嫌いでも何でもいいから、今の私がいるということだけでも知つて欲しいから。

「ブレイクっ……！」

最後は魔力で無理矢理、群青色のバリアを打ち抜く。そのまま一瞬の隙も与えず、銃身の上から右の拳を叩き込んだ。バリア展開と割り込みプログラム開始と同時に魔力集束を始めていた右腕は、既に淡紅色の籠手に覆われたように魔力を纏っている。拳が触れると同時に、銃身は碎け落ちた。

「っ！」

「二閃必倒……！」

デバイスの再構成する時間も与えない。防御フィールドを強化して反動ダメージを阻止する。剣に見立てた右腕の魔力が先輩の防御フィールドを打ち抜いた。集束魔力と武器のコンビネーション技能、『剣閃』の真髄はここにあり。

「――桜華一閃！」

刀折れ、矢が尽きようとも。その胸に不屈の心がある限り、例えどんな絶望的な状況でも覆す一閃の輝き。そして勝利を齎すその輝きは、揺るがない。

試合終了のブザーが鳴り響き、残りライフの算定を行う。結果先輩のライフは0、対する私のライフは50というギリギリの決着となった。

「……怪我は無いですか？」

「……何とかな」

吹き飛ばされた先輩が立ち上がり、デバイスを復旧させる。お互い防護服もボロボロだ。そのほとんどがRF6で負ったダメージなのだから、彼も発言を撤回せざるを得ないだろう。

「お前、やっぱり馬鹿だろ」

「どうぞご自由に。そんな私に負けたあなたはもつと馬鹿ということを確認することになりますけど」

負けじと言い返して、私は笑った。しかし返事が無い。不思議に思う暇なく皆と合流し、治療を受ける。

「そうだ、深琴。さっき新技見せてくれたお礼に、『切り札』見せてあげる」

「いいよ、わざわざ。そういうつもりじゃないのに」

「行くよ、アインザッツ」

《Yes, master.》

「聞いている!？」

治療と休息の傍らで、フェアがアインザッツを手に笑った。嫌な予感がして制止の声をかけるが、遅い。

深紅色のベルカ式魔方陣が展開し、その輝きを強める。どんどん強くなった光は虹色に変色し、変更を加え白と赤を基調にした防護服を纏う。そして瞳を開けたフェアの右目は翡翠色に変わっていた。……もしかしなくても、これは……?？」

「そんなわけで『切り札』、聖王モード！」

「っ!?! 深琴さん、しっかり！」

じやじやーんと口ずさむフェアの姿に、私は一瞬意識を手放した。慌てたキャロの声に反応して意識を取り戻すが、早速現実逃避したくなる。

J S 事件も終盤、私は地上でフェアと交戦していた。説得もあり和解寸前、と思われたところで戦闘機人、ナンバーズ N O . 4 ・クアツトロの策謀によって妨害される。その際『コンシデレーション・コンソール』と呼ばれる洗脳から、フェアは自身の出生でもある『聖王の鍵のレプリカ』として覚醒した。

言わずもがなその力は強大で、リミッター全解除してようやく勝てたのである。……つまるところ。

「悪夢再び……！」

「だ、大丈夫ですよ。深琴さんなら絶対！」

「そうですよ！ 私も、しっかり治療しますから！」

嘆く私に、エリオとキャロが声をかけてくれる。1時間のインターバルを全て休息に回し、万全の調子で迎えた模擬戦。試合時間は30分。お互いの全てを出し尽くしたその戦いは——負けました。



体が重い。全力を出し尽くしたその体は、思うように動かない。それでも自分は負けたのだ——その事実が、レックスの中で消えては浮かんでいた。だが、彼はその結果に納得している。

『自分たちは負けて当然だ』

練習不足を棚に上げて、かつての自分たちは言った。だが今回は違う。デバイスも防護服も最適化した。魔力も体力も充分。万全の状態で挑んで、負けた。以前とは違い、1対1で。ここまで対等な条件で戦って負けたのだから、文句も言えない。発言の撤回も行った。

重い体を引きずって訪れたのは、海岸沿いの訓練スペース。模擬戦を二本こなした深琴の姿は、さすがになかった。今頃寮でぐったりしているのだろう。魔力も体力も使い果たした彼女は立ち上がることもすらくに出来ず、同席していた局員に抱えられて寮に戻っていた。

冬の風が、海面を揺らす。控えめな靴音が響いた。

「……こちらでしたか」

振り向けば、水色の髪の少女——セレナ・ソネットが立っている。その手にはレックスのコートがあった。気が利くような利かないような……複雑な顔で、レックスはそれを受け取る。

正直、彼女が部下に配置されるとは思っていなかった。人事部としては同じ士官学校卒業で顔見知りだからという単純な理由だっただろう。大人しく優秀ではあるが、異なる立場の自分はやり辛い相手でもあった。

「何の用だ？」

「……深琴から、『ありがとうございます』と伝えて欲しいと」

「……そうかよ」

かつて3対1で戦ったあの日も、彼女はそう言ったのを思い出す。不利な戦いも模擬戦だと……これだから、彼女には敵わない。

深い溜息を吐いて、レックスはセレナを見た。

「戻るぞ」

「……はい」

小さくもしっかりとした声。その姿に昔の深琴を思い出し——止めた。今は今だと、呟いて。

二人分の足音が響き、電灯で照らされた道を歩く。迷い無く、晴れた笑顔で。

## Report 08：秋月静真、過去を振り返る。

第1管理世界へミッドチルダ。その世界の首都中央から少し南の港湾地区に、『時空管理局 古代遺物管理部』機動六課の隊舎があった。交通の便は少し悪いが大抵の用件は近場で済ますことが出来るし、その周辺の雰囲気はどこか遠い異世界を思い出す。そんな世界に俺・秋月静真が来て早3日が経とうとしていた。

六課の人達はみんないい人で、いきなり異世界からやってきた部外者にも温かく接してくれる。初日、それも会って数分でそれなのだから、最初は妹が何か言ったのではと勘繰ったが——回し蹴りと共に否定の言葉を頂いた。

そんな彼女に言わせると、俺が生まれ育った惑星——管理局風に言うところ「第97管理外世界・地球」という世界は管理外の割にかなり有名ならしい。魔法文化や異世界渡航手段を持ちえない世界は時空管理局の管理外に当たる上97という数字から考えても「辺境の地」と言っても過言ではないが。

しかしそんな世界——特にその中でも話題に上げられるのが、現地・日本は『海鳴市』だ。失われた魔法技術が流れ着き、それに関連する異常現象の発生。またそれ以外でも度々発生する「魔法絡み」の事件・事故の発生や、それを迅速かつ内密に処理する存在——ぶっちゃけた話、後は異世界への渡航手段を何とかすれば『管理世界』に昇格できるわけだ。だがそれは強制的にはないし、地球側がそれを拒んでも何ら問題は無く、侵略や政治介入など存在しないとか。晴れて管理世界に昇格すれば人員や敷地、金銭面での援助が発生するが、その分その世界に魔法的異常等が起これば解決のために時空管理局は積極的に行動できる。一方反対の立場を取れば、援助の必要は無い。しかしその世界で何か起こっても、管理局は行動をとることができないとか。とはいえ艦隊派遣などはするが、実際行動を開始できるのは該当世界からの要請が来た時である。結局報告・連絡・相談が大事なのだとは関係者談。

一時期頻発した異常現象と、その解決に尽力した現地協力者の存



在、そして協力者を始めた現地出身者の奇妙な共通点。ついでに辺境の地の独特な文化——それらが合わさって、今海鳴市は空前のブームらしい。機動六課ももれなくそのブームを支えており、その上先程挙げた異常現象解決に尽力した協力者やその関係者、現地出身者の姪で自身も同世界出身者の計4名が在籍していることから、今の俺は「異文化を知るための手段」らしい。

——そんな異世界・ミッドチルダ。『魔法』が認知され文化として発展したその世界のことを知ったのは、俺が高校二年生の頃だ。しかし魔法を——ひいては自分たちの異常性を認識し始めたのは、それからさらに過去の出来事である。



物心ついた頃から、自分と「いい子」という言葉が両立していた。何でも、自分は俗に言う「手のかからない子供」だったらしく聞き分けはいいし人見知りしないし、周囲の母親はこぞって俺を褒めたらしい。

『静真君は本当にいい子ね。うちの子も見習って欲しいわ』

なんて台詞を聞くのは日常茶飯事。歩くのも文字を読むのも書くのも、話すことも同年代の子供達よりずっと早かった。知ってる顔が来たら「こんにちは」と挨拶し、何かしてもらったら「ありがとう」と礼を言う。率先して年下の面倒を見ようと頑張ってみたり、お礼を言われたら「こちらこそ」と謙虚になってみたり。今思えばかなり奇妙な幼稚園児がいたものだ。だが当時は幼いなりに「どうすればこの人は喜ぶのだろう」、「どうしたら泣かないでくれるだろう」と色々考えていたのである。それは専ら両親に向けられていた。「こうすればきつとこの人達は喜んでくれる」、「こうすればこの人達は自分を守ってくれるかもしれない」と。無意識の行動だったが、もしかしたら自分は恐れていたのかもしれない。自分はまだ幼くて、自分自身を守ることが出来なくて、一人では生きていけないから。身近にいる両親に嫌われないように、捨てられない様に、生きて未来に繋げる様に。

それでも褒めて貰える事は純粹に嬉しくて、誇りだった。

『妹の面倒をみれるなんて、いいお兄ちゃんね』

四つ下の妹・深琴が生まれてからは、その台詞を聞いても何とも思わなかった。何も無い場所で転ぶ妹は少々そっかしく抜けていたが、それを差し引いても「いい子」だった。人見知りは「大人しい」と解釈される、そんな子供。自分を追いかけて転んでは、涙を浮かべながらも立ち上がる。そのこけっぷりを見た周囲は俺に「お兄ちゃんも大変だ」と苦笑していたけれど……そんなことを思った事は一度も無かった。

(深琴はまだ、慣れていないだけだから)

目に映る全てが真新しくて、その心を惹き寄せる。『力の使い方』が分かっていないから普通の人には見えないものも見えて気を取られるし、手を突いて転んだ次の瞬間、間違えて側転して着地するという奇妙な運動能力を見せた。

ただそれも全て「慣れていない」せいだと理解していた。遠くない将来、彼女が先にその力に目覚めるだろうと言うことも。

深琴がその予兆を見せたのは、3歳になって間もない頃だった。「孫と孫娘に会いたい」とせがむ祖父に頼まれて海鳴市の実家に帰省したその日のこと。

屋敷と言っても過言ではない敷地内に響き渡る母の悲鳴と、制止する人の声。絶句する父が立ち尽くし、その視線の先には指先一つ動かさないう深琴が倒れている。妹を冷たく見下ろす祖父が唇の端に笑みを浮かべていたことは、今でも覚えている。幸い、深琴は次の瞬間には息を吹き返してすぐさま病院へ直行。特別異常も見つからなかったためその日の内に兵庫へ帰った。

『あんな性根だから、目覚めるはずの力も目覚めないんだ』

呆れた声が聞こえる。その言葉に納得した自分は、より一層妹を守ろうと決意した。——結局、叶わないままに終わったが。

翌年の春、幼稚園の見学から帰った深琴と公園で遊んでいるときだった。心臓の近くが突如激しく痛み出し、体の自由が利かなくなつた。立っている事すらできなくなつたその時、深琴が先に倒れたこと

は今でも覚えている。偶然近くを通った（近所に住む同級生のお母さんだった）人が俺達の異常に気づき母と救急車を呼んでくれて、病院へ運ばれた。その間一度も目を覚ますこと無かった妹は、昏睡状態に。まったく原因が分からないその症状は「突発性意識喪失」と名づけられ、6年間に渡る入院生活が始まった。

チューブに繋がれ、機械によって自動的に酸素を送られる。普段は静かに眠っているが、時折意識を取り戻しては激しい痛みを襲われるらしい。一度だけその現場を目撃したが、言葉を失った。

見開かれた目に溜まった涙。開かれた口から響く悲痛な声。痛みから逃げようと動かす体はチューブに絡まって、それから逃れようと動かして、危険を察知した機械が警告を訴える。

状況が落ち着いて、同席していた母は対応した医者と看護師に何度も謝罪と礼を繰り返した。その中の一人、年若い看護師はあることを教えてくれた。

「前にもこんなことがあったんですけど、その時深琴ちゃんが言ったんです。『死にたくない』って。……まだ4歳になってないのに。きつと一番辛いのは、深琴ちゃん本人なんだって……」

起きている時は本を読んでいるか、外を見ているということ。出された食事は好き嫌い無く、流動食も平気で受け入れること。苦い薬もワガママ一つ言うことなく服用し、時々泣き出す年下の子をあやすこと——そんな姿に、その看護師は思うそうだ。早く治療できるように、自分に出来る事をしてあげたいと。その看護師に、母は頷いた。迷いが晴れた、そんな顔で。

それから、6年の月日が流れた。地元の中学校に進学した俺は2年生になり、原因不明の病を抱える妹は一度も学校に通うことなく、10歳になる年の4月。学校帰りに病院へ顔を出そうとした俺を、母は呼び止めた。何でも父が海鳴市への転勤が決まり、引越すことを母は淡々と告げる。そして、深琴に伝える必要が無いことも。

「もう、深琴は病院にいないわ」

「……先に、転院したのか？」

「いいえ。お昼頃、海外に渡ったわ。兄さん……伯父さんが、預かって

くれるから。合流したら連絡を……」

「……見捨てたのかよ……」

母の話によると、伯父が住んでる国では深琴の病気も治療できるらしい。……だからって、10歳の子供を一人で知らぬ異国に放り出すか、普通。

正直、俺は納得いかなかった。それ以降母は深琴の話題を出すことも無く、俺が話題を振れば無視。父も母の味方をした。連絡を取る手段も無く、どこに住んでいるかも、そもそも存在していた事も知らなかった伯父を疑っていた点もある。

——両親は妹を見捨てた。俺は、妹を守れなかった。その事実を愕然した俺はその日を境にある決意を固める。例えどれほど月日をかけようと、この家を出る事を。



海鳴市に引越して聖祥大学付属中学校に編入した俺は、附属高校に進学するという、周囲と同じ進路を選択した。優秀な成績を維持し続ける俺を褒め称える両親にささやかな反抗心と、校則で禁止されていないこと理由に髪を染めて。進学早々「君、剣道部に入るよね？」と謎の勧誘をした藤月彼方先輩の紹介で、市内でも有名な喫茶店でバイトを始めた。聞いた話、主人の娘さんが「魔法使い」になって異世界に渡ったとか——にわかには信じられないその話を、その翌年再び聞く事になる。

翌年出会ったのは、一年下の後輩。『霜月秋葉』と名乗った少女は彼方さんの知り合いらしい。腰に届く赤髪は、日本人らしい名前に反して鮮やかな赤色。物静かな性格は妹を見ているような気分になる。そんな彼女は、異世界の出身らしい。その事実と彼方さんの知り合いであることから、俺達は一緒に行動する機会が増えた。

「……あんまり、妹さんとは似てないですね」

学校の帰り道、秋葉が小さく呟いた。彼女によると、妹の病気は既に完治しているらしい。というか実際は妹の魔力の源がこの世界の

魔力と適合できなくなった事が原因で起こった現象だという。今では元気になってある大会に出場したとか、ともかく有名になったらしい。

——妹も伯父も異世界で「魔導師」だった。その時に感じた感情は、不思議なことに何一つ無かった。

ただ思うのは、妹が元気にやれていることを自然と喜べなかったことと、自分達の親族が「異端」であること。それでも自分の目標を変えられることなく、俺は過ごしていた。

◇

「ねえ、君、今暇？ 近くにいいお店あるんだけど、一緒にどう？」  
「いえ、あの……」

学校帰り、バイト先に向かっていている時のこと。聞き覚えのある声に視線を向けると、見覚えのある少女が軽そうな男に言い寄られていた。最初は誰か助けるだろうと思っていたがそんなことはなく、調子に乗った男は少女の肩に腕を伸ばす。用事があると告げた少女の横顔に妹の姿がダブリ、その直後まるで欠けていたピースが嵌ったかのようにその事実を確信した——あの少女が妹であると。

助けに入って、行き先まで案内を兼ねて一緒に向かう。行き先の『喫茶翠屋』では彼女の同僚が待っていた。

「……仲間だから」

小さくはにかみながら、それでも誇らしげに話す妹の姿は、今でも覚えている。長い入院生活で一層内向的になった妹が年の近い人達と接しているという事に一番安心した。

◇

それから4カ月後。妹と連絡を取り合うようになったある日、彼女からこんなメールが届いた。

『六課の仕事で、しばらく連絡できなくなりそうです。大丈夫そうに

なつたらこつちからメールするから、心配しないで』

そのメールから数日後、俺はいい加減両親と向かい合うことを決めた。深琴の仕事がひと段落した事、またそれがかなり危険な事件を解決するというものだった事。そして母親の手に握られた通信端末と深琴のために用意されていた部屋——それら全てと、父親が漏らした「母さんは全部知っている」という一言。

結論としては、母は妹が魔導師であることを知っていた。それどころか4年前からずっと伯父と連絡を取り続けていたらしい。深琴が秋月の異端を、現時点で存命する誰よりも強く受け継いでいることで祖父はそれを利用しようとしたという事実。母が深琴を「見捨てた」のは祖父の手が届かない異世界に深琴を送るため。自分達への未練から祖父と接触しない様に、徹底的に。

『『秋月』の人間としてではなく、一人の人間として生きて欲しかった』泣きじやくりながら語る母の姿が、とても痛ましかった。ずっと自分ひとりで抱えていたことは純粹に腹立たしい。けれどももし自分がその事を知っていたらどうだろうと思つたとき、母を否定することができなかつた。

ただようやく家族として戻れた俺達が過ごす時間は、可能な限り温かいものになしようと満場一致で決定した。母の腕に抱かれて泣き出した妹の姿に、それを実感した俺だった。



一頻り語つた俺は、お茶を飲み干した。聞いていた深琴の友人は呆然としており、兄貴分を名乗る師匠は「どじっ子属性まで網羅してたのかよ。深琴、恐ろしい子……！」とツッコミにくい言葉を口にして、隣に座る男性に殴られた。あと男性と言っているが後者2人は俺と一つしか年が変わらない。特に銀髪の男性——デイバイン・アーウイング執務官の姿は、正直もう少し年上だと思つていた。何でも4年前、深琴の窮地を救つたのが彼らしい。深琴にとっては強さの象徴で、憧れ。

「でも、二人してすごい兄妹だったんですね」

「すごいつつつても、周囲がそう言っていただけだしな」

感心するスバルに、俺は言う。深琴との共通見解でもある。ちなみにこの一言は「ある意味むかつく」と大多数を敵に回す効果もあった。

「……だから、管理局法20条ではこうなるんだよ!」

「でも21条から推測で適用したら別ですよね?」

「だからそれはだな……」

靴音を響かせて、男女の声が近づいてくる。振り向けば妹と自称そのライバルが今日も元気に軽口を叩き合っていた。器用にも話しながらモニターを展開し、図を用いて互いの主張をぶつけ合っている。せめて前を見ろ。

「またやってますね」

「いつものことですよ」

「でも、深琴さん……ちょっと楽しそうです」

エリオの言葉にティアナが肩を竦め、キャロが微笑む。ちょうど彼女達の視線の先で、ヴィヴィオが深琴の足元に抱きつくところだった。柔らかな笑みを浮かべた深琴と、視線が合う。

満面の笑みで笑うその姿に、帰って来たばかりの彼女がダブった。

もう一人ではないと信じ戦うその背中に、かつての彼女はいない。

「……お帰り」

「ただいま」

つい口に出た言葉に周囲が目丸くする中、妹は笑ってそう答えた。

Report 09 : THE GEARS OF DE  
STINY (前編)

清潔さと無機質さが同居する真っ白なベッド。それに反して温かみを感じさせる木目調のインテリアや設備が整えられたその部屋で、私は眼を覚ました。ベッドの隣には車椅子と床頭台が置かれている。視界はいつもより低く、設置された鏡に映る姿はずっと幼い頃のもの。

(……また、この夢……)

最近頻繁に見るようになった夢の始まりは、いつもこの空間からだ。今までは幼い私と今の私は別々に存在していたのだけど……。

慣れた動作で車椅子に移り、外を一望できる窓際まで移動する。中央から程よく近いこの病院でも、上層階からはビル以外にも木々や海が見えた。車椅子にブレーキをかけて、床に足を着ける。力が入らないう手を動かして窓の鍵を外した。安全のため全開にできない仕様になっっているが、換気できる程度の幅まで開くことが出来る。

運ばれる風に混じる、仄かな潮の香り。冷たい風に体が震える。全てがリアルに感じられるこの世界は、「ただの夢」には思えない。

(多分、これは……)

「あ、秋月さん」

名を呼ばれ、振り返る。そこには笑顔を浮かべた看護師が立っていた。

「おはよう。今日は具合、よさそうっ。」

「は、はい」

「そんな緊張しないでも大丈夫よ。はい、上着」

分厚いカーディガンを受け取って、袖を通す。ベッドに戻された私は検温など以前の生活に戻ったような動作を、無意識に繰り返した。

——脳は時として、本人の精神状態を正常かつ安定させるために記憶の消去を図る。それは些細な日常から死など恐怖を受けた際にも起こる現象だ。だがそれは完全に消去されるわけではなく、ふとした



瞬間に思い出すことがある。

看護師が持つてきてくれた新聞に目を落とす。1面にはこの近隣のニュースが入っており、日付と年号は今から10年前のものだった。この頃の私は数ヶ月の昏睡と数日の覚醒を繰り返していた状態で、記憶がほとんど無い。ここ——『海鳴大学病院』に検査入院していた時期があっても不思議ではない。海鳴市には秋月本家が構えているし、当時の当主は私の祖父だ。部屋の広さや雰囲気から察するに特別個室に相当するだろうし、そこから、今の私は『原因不明の病を抱えた、地元名士の孫娘』という看板を背負っていることも推測できる。……でなければ私物と思わしき外国語の書物や、美しく活けられた花々があるはずがない。地元の病院にいる頃は、見舞いに花は遠慮していたし。

だとすれば、今の状況は『過去の再現』。明晰夢でありながら実体験、かつ当時の記憶が無いのだから矛盾しているが。

それでも感じる気配は、よく知っている人達のものだ。

(なのはさんとフェイトさん、八神部隊長……ヴィータ副隊長にシグナム副隊長、シャマル先生、ザフィーラ……)

もちろんいくつか知らない反応もある。けれどこの反応が正しければ、大体の状況は把握できた。

(恐らく時期は、『闇の書事件』終了後……でも……)

私が記憶している限り、『闇の書事件』は12月で解決している。

ロストロギア『闇の書』——本来は『夜天の魔導書』と呼ばれる魔導書の防御プログラムの暴走とそれ以前から頻発していた魔導師襲撃事件。それらが解決したのは12月25日。事件担当は巡航L級8番艦『アースラ』と乗員であるアースラスタッフ、囑託魔導師の当時フェイト・テスタロッサと現地協力者の高町なのは。暴走したプログラム破壊にはリイン曹長除く八神家一同が協力しており——機動六課に繋がる形となっている。ちなみに事件の詳細は、並大抵の間にはアクセスできない仕様となっていた。JS事件と同様敵味方、正義と悪が複雑に絡み合っており判断が困難なためである。

それでも事件のあらましは一般局員も知っているし、機動六課の隊

員は、それぞれ隊長達からそれとなく事情を聞いていた。肝心な部分は伏せられていたが、それでも聞いた情報を繋ぎ合わせれば大部分が見えてくる。

「……二、三日は発作も起きないから、安心したわ。今日も歩く練習をしましょうか」

「はい。よろしくお願いします」

長期間の昏睡状態にあった私は、筋肉が衰えたせいで自分の足で歩くことも出来なかった。一人で行動することも出来ず、原因が分からないことから食事制限も多い。栄養が偏った食事はもちろん、お菓子も食べることが出来なかった。

それでも当時は気にならなかった。家族に迷惑をかける何も出来ない自分が情けなくて、生きる意味を見出せなかったから。「こんな自分なんて、いなくなればいいのに」と何回思ったことだろう。

時間になれば迎えに来ると告げた看護師の背中を見送って、私はベッドに横になった。

(……なんか、変な感じ……)

強い眠気と、浮遊感。魔力が安定供給されていないこともあってか疲労感も強い。けれどどこか、体は軽い。……そういえば昔は、ちよつと動くだけでも体力が持たなかったっけ……。10年後には走り回るところか空を飛び回れる様になっているのだから、この人生も捨てたものじゃない。

(つて、あれ？ 何だろう、この違和感は……)

知っている魔力反応が、新たに3つ。知らない魔力反応も同じく3つの計6つが、ここから程近い場所——恐らく屋上に出現した。アーウィング執務官と零さん、それからヴィヴィオの反応が——つて、あれ？

(執務官と零さんはともかく、何でヴィヴィオまで……?)

おかしい。そもそも何でこの3人の反応が、今この時代に、そしてこの場所で感じられるのか。新暦66年の海鳴市ではまずあり得ない。

閉じかけていた瞼をこじ開けて、私は車椅子に移乗する。行き交う

看護師への挨拶もそこそこに廊下を抜け、角を曲がった。屋上に続く階段の先には、固く閉ざされた扉がある。車椅子から降りて、手すりを掴んで上がった先の扉を、私は睨みつけた。扉の向こうから感じる気配は、6人。逃げるつもりはないらしく……というか、慌てているようにも感じた。

ドアノブを握って眩く。

「――『アンロック解け』」

カチリとロックが外れた音が響いた。……当時の私でも、この位の魔法が使える程度の魔力はある。知識と経験が足りないだけで。

重い音を立てて扉を開ける。その向こうで男女合計6名と兎と猫、そして本が動きを止めた。

「……えつと……」

闖入者の登場と、中身はともかくその姿がどう見ても小学生未満の女兒であること――その他様々な要因が乱れ入る状況に、沈黙が流れる。が、やはりこの人――零さんだけは、容赦なかった。

「……悪いな」

「えつ、ちよつ……!」

背後に回り込み、刀の柄で脇腹を狙う。一瞬で意識を刈り取れるように、それでいて不必要な怪我をさせないために威力を調整していることは六課で教えてもらったが……敢えて言わせて貰うなら一つ。

「痛いものは痛いんですよ、それ!」

左腕で柄を弾き、向かい合っながら空きになっている鳩尾へ一発――入れるつもりだった。ここで私が失念していたことは、自分の体格。いつもなら腕を伸ばせば充分に届く距離なのだが、この私は当時4歳だ。その体格では、届くものも届かない。

あつ、とヴィヴィオの声が聞こえる。しかしもう遅い。バランスを崩した体は、重力に逆らうことなくコンクリートの床に向かう。そして――。

べちゃっと、嫌な音が響いた。

「にゃー」

猫の声と、わたわたと動いている音がする。分かっている顔を上

げられない。体も痛い、何より心が痛かった。顔から火が出そうなくらい、恥ずかしい。

一方の零さんは平気そうだ。

「オツケー、把握。全員安心しろ——こいつ本物だ。それも、俺達側のな」

「だからって、いきなり殴りかかる奴がどこにいる！」

「ここにいるぞー！」

ドヤ顔で言い放った零さんを殴りつけて、アーウィング執務官は私を抱き起こす。左手の薬指に嵌められた指輪が小さく輝いたのを見て、私は首を傾げた。——執務官、指輪なんてしてたっけ？

違和感が駆け巡り、周囲を見渡す。知らない顔は3人。

一人は、ザンクト・ヒルデ魔法学院中等科の制服を纏った碧銀の髪と紺青のオッドアイの少女。

一人は、動きやすそうな服を纏った元気そうな少年。

一人は、お淑やかな服を纏った、ロングヘアの少女。2人目と3人目は深い繋がりがあるのだろうか、銀細工が施された、揃いの腕輪をつけていた。

知っている顔も、微妙に変化がある。私が知っているヴィヴィオはまだ学校に通っていないし、自律浮遊する兎の人形も持っていない。アーウィング執務官も、私が記憶している限り指輪はつけていなかった。部位が部位なので邪推もするが——以前「そういう関係の奴はいない」と発言していたし。

何より恐ろしい事は——零さんの外見が微塵も変わっていないことである。身長も容姿も立ち居振る舞いも、何もかも。

「えつと……」

脳を全力で動かして、状況を認識しようと試みるが上手くいかない。見知らぬ3人も私の事は知っているらしい。いくら夢でもこんな展開は——できるから夢なのだろうけど。

そういうしている内に話し合いの内容は「場所の変更」になっていた。状況が状況だし、と。

「……あの、私の部屋はどうでしょうか？」

しかし、4歳児がすらすら話すというのもいかなものか。中身が14歳だから仕方が無いけども。

「それはありがたんだけど……。深琴お姉ちゃんは大丈夫なの？」  
「うん。個室だし、特別室だから……。『お客さん』って事で話を通しておけば、大丈夫だと思う」

全員座れるだけの椅子があったかは不明だけど……。持つてきてもらえるように頼んでみよう。車椅子まで戻り、私を探していた看護師さんと合流して、そのままリハビリへ。

「親戚の方か何か？」

「……はい。わざわざ来てくれたみたいで」

「そうなの。良かったわね」

まるで自分のことのように喜んでくれた。と、看護師は私の頭に触れる。

「見て。羽がついてたわ……。綺麗ね」

闇から暁へと変わりゆく様な紫色の羽を、私の掌に落とされた。

——それは、小さな願いでした。

破壊の因果に囚われ、泣いている少女。その涙を拭いたくて、怯える災厄を振り払いたくて、彼女を縛り付ける『運命』を変えたくて——ただ彼女を助けたくて、けれど何も出来なくて。

強くなりたかった。彼女を救えるほどの力が欲しいと。自分の運命を切り開けるほどの強さが欲しいと。一人でも戦える人間になリたかった。そうすればきつと、私は一人ではなくなると信じて。

紫色の天を織り成す彼女は、自身の名を口にした。

——『Unbreakable Dark』。即ち『砕け得ぬ闇』と。

Report 10: THE GEARS OF DE  
STINY (中編)

両手で手すりを掴み、歩く。踏み出した足に力が入らず、崩れ落ちそうな体を寸前で踏み止めた。普段は意識せずに出来ていることが出来ない。その事実を再認識して、思わず唇を噛んだ。

別に、この事を忘れていたつもりはない。けれど、「14歳の私」がそう思ったのだから、この時代の私が絶望するのも無理な話ではなかった。この時代を思い出す度に、自分一人では何も出来ない事が悔しくなつて。ほんの些細な一言でも、認められたことが嬉しかった。目の前の敵に立ち向かえるだけの力を鍛えてもらえた。きつかけ一つ、思い一つで世界は変わることを知った。だから。

だから、この時代の私にも胸を張って言える。「未来を信じて、前を向け」と。

歩行リハビリを終え、病室に戻った私は時間転移についての事情を聞いていた。発端であると思われる現在については、今のところは平行情界であるという結論だ。原因は十中八九、ロストロギア。

元よりこの海鳴の地は「そういうもの」を呼び寄せる土地らしい。本格的オカルトからロストロギアまで。それでも、やれ神隠しじや、やれ祟りじやにならないのは『秋月家』を始めた「その道の専門家」が討伐や事後処理を受け持っていたためだ。また、所謂「ヒトではない者」も協力的だったらしい。彼らの殆どは迫害されない安住の地を求めているため、自分達から騒ぎを起さそうとしないし、好まない。同類が暴れると「風評被害」を被る可能性もある。それは非常に困るから、意思疎通が可能な場合は大抵が仲間になるらしい。

中には「人間なんぞに尻尾を振るなんて愚か者め。誇りはないのか」という話もあるが、「誇りだけで生きていけたら苦労はない」という本音がちらほらと出てくるとか。……百年単位の昔話だから、信憑性に欠けるけど。

秋月も元々はオカルト分野で活躍した一族である。今でもそれなりの能力を持った人間が生まれるためか、衰退している事には変わりは無いが、同時期に活躍した一族に比べたらまだ繁栄している方だ。まだ3歳の孫娘を黄泉送りどころかそのままベリー・トウー・ベリーのコンボを決める程の毒——実際は高濃度の呪詛だったが——を盛る必要はなかった。秋月の本来の分野は呪術などのオカルト。それだけなら母さんだけでも十分なお釣りは来る。祖父が、わざわざ自分の寿命を縮める呪詛をかける必要は全く無かったのだ。当時の私は、毒を盛られるその瞬間までは魔導に目覚めていなかったのだから。

と、そんな話は置いといて。ともかく海鳴市にはそういった歴史があるためか、魔法だとか時空転移とかの存在は土地自体が寛容である。

——だからって、言わば世界線が交わる事なんかそうそう無いのだから。

「えっと、ということは……現在の時間軸は約10年前の新暦66年だから……」

「にゃー」

手にした鉛筆で、人に見立てた丸と該当する数字を書き込んでいく。

「新暦75年を基準にして……、執務官と零さんは3年後の新暦78年から。ヴィヴィオとアインハルトがその一年後の新暦79年、トーマトリリイが新暦81年からそれぞれ飛ばされてきた。で、現在の目標はタイムパラドックスを起こすことなく、それぞれの世界に戻ることに……」

「にゃ、にゃー」

「で、今のところの原因とされるのは異世界からの渡航者2名。出身世界は不明。渡航許可等も無い違法渡航者と思われる……。それと『闇の欠片』と呼ばれるものが生み出す偽者……」

聞いた話を復唱して、自分が分かりやすいように纏めた。合間合間に猫……じゃなくて豹型デバイスのアステイオンが鳴いている。アインハルトが窘めて、ベッドに上がろうとするアステイオンを自分の

膝へ移動させた。

一通り纏め終わり、全員を見る。

「……で、合ってる？」

「うん、合ってるんだけど……何か、見た目と内容のギャップが……」  
そう苦笑するのはヴィヴィオだ。私が知る時代の4年後というこ  
とで、既に小学4年生である。

「話には聞いてたけど、この年のミイちゃんって本当に小さかったん  
だね」

「でも話してると、いつも通りだね」

トーマと名乗った少年と、リリイと名乗った少女。二人の時代は新  
暦81年から。ヴィヴィオの時代の私が18歳、トーマ達の時代の私  
が20歳。アインハルトがぽつりと漏らした「旧姓の頃」という言葉  
……。ということは、彼女達が知る時点で私は結婚しているらしい。  
……結婚できたんだ、私。執務官が視線を逸らすのは何故だろう。

とはいえ、問題は山積みだ。

「重大なのは、お前が戦力外と足手纏いという」

零さんの一言が突き刺さる。……いや、あの、そうなんですけども。  
14歳の時のように戦えないですし、むしろそんなことになったら肉  
体が耐え切れずに「やめてくださいしんどします」だけどき……。  
ぐるぐる止め処なく回る思考を、打ち切る。外は快晴、風も弱い。と  
ことこ窓辺まで歩いて、窓を開く。

「……大丈夫。人間やればできる。そんなわけでやってみよう。イエ  
ス、アイキャンフライ」

「いやいやいやできないから！ 普通の人間は空飛べないから！ つ  
ていうかミイちゃん早まらないで！」

トーマが全力で止めてくれるが、今はその優しさも心には痛い。体  
力というか精神的な何かが勢いよく削られていく。

「結局戦えない私には存在価値なんて無いんですよ。だったら生きて  
るって虚しいじゃないですか。後さつきから普通に喋ってたけど、4  
歳の私って基本ネガティブシンキングだから。……だから、大丈夫だ  
よ……」



「それ、全然大丈夫じゃないから！」

「全く……」

溜息を吐いて、執務官が片腕で私をベッドに引き戻した。

「戦えないとか、そんな理由で存在価値を決め付けるな。……そもそも、今のお前を戦わせようと思うこと自体が間違っているんだ。お前が気に病むことじゃない」

慰められ、頭を撫でられる。……こうして気を使わせてしまうことが、非常に歯痒かった。

昔から、私は兄と違って臆病な性格で。誰かが泣いていても、声をかけることも手を差し伸べることもできなかった。

助けたいと思うのに、行動に移せない。声をかけたいのに、言葉が出てこない子供だった。

「にゃー？」

「アインハルトさん、どうかしましたか？」

「……いえ……」

ティオを撫でながら、アインハルトは何か考えている様子で私を見る。

「今の深琴さんは、4歳の頃の体に14歳の精神が入り込んでいるんですよね……？」

「うん。……多分だけど」

「でしたら……本来存在するはずの4歳の精神はどちらにいますでしょうか？」

『『もう一人の僕』みたいな感じじゃないのか？』

アインハルトの疑問に、零さんが一例を提示した。色々と突っ込みたいが、今は無視しよう。

「それは無いと思います。14歳の時ならまだしも、魔力適合すら困難なこの時代では……」

「……そうだね。アインハルトの言う通りだ」

本来あるべき人格以外に抱え込むという事は、肉体にも精神にも多大な負担を抱える。14歳の時ならまだしも、この時代の私は特別不安定だったわけだし。

……でも、なら何故。

「……何で『私』は、ここにいるんだらう……」

「深琴お姉ちゃん……」

ほんぽん、と頭を柔らかい何かが叩く。見上げれば兎のデバイス・セイクリッドハードが心配そうな顔をして、私の頭を撫でていた。

「ありがとね、クリス」

兎に手を伸ばそうとした瞬間、体中に激痛が走る。同時にこみ上げた嘔吐感に堪えかねて吐き出したのは、赤黒い血の塊。目の前が霞んで、意識が遠くなる。

「深琴！」

「……平気、です……っ！」

皺が残るほど強く、シーツを握り締めた。脂汗が引かず、次第に呼吸が荒くなる。魔力結合ができず、リンカーコアが悲鳴を上げた。それでも尚、漂う魔力素をかき集めようとする。

生きたいと、生きるべきだと。どこから聞こえるかも分からない声に従って。

「警告。脅威判定検知」

「……来たな」

舌打ちして、零さんは窓の外を見た。その様子につられて、全員は窓の向こうを見る。

見えたのは夕焼け色に染まる空と、色違いのバーストフォームに身を包んだ私の姿。血の様に赤い防護服と、露になった肌から見える刺青にも似た紋様。瞳に輝きが無いことを除けば、私にそっくりである。

「2Pカラーだな」

「……ツツコミ待ちですか……？」

呟いた零さんに、ツツコミを入れざるをいられない。

「トーマ、あれ！」

リリイが指差した先には、見知った顔のそっくりさんが。迎撃に向かう彼らを見送ることしか出来ない自分が、情けない。

(……何で、私だけ……)

とはいえ、今の私では足手纏いにしかならない。

魔法も使えず、剣閃を使える程の力も無い。

だが、それは向こうの私も同じようだった。見た目は14歳の私だけど、使っているのは魔力を衝撃波に変換するだけの単純なもの。もしかしたら中身は4歳の私なのかもしれない。

それなら納得が出来る。当時の私は家の事は何一つ知らなかったし、剣閃の事も知るはずが無い。魔法の事も知らないから、衝撃波への変換という初歩的なものしか使えないという。

「……でも、何で？」

何故4歳の精神が、闇の欠片に取り込まれてるんだろう。

「……それは、儂から説明しよう」

音を響かせて、扉が横に開いた。そこにいるのは右手に杖を、左手を隣に立つ男性に預ける壮年の男性。腰は曲がっているが、その足取りに不安は無い。

「……お爺様……」

「久しいの。じゃが、お前は儂が知る深琴ではないようだ」

男性の手を借りて空いた椅子に座った祖父は、じつと私を見つめた。



——眠い。鈍い痛み顔に顔を顰めるが、眠り続ける少女がその目を開くことは無かった。遠くから自分を呼ぶ声が聞こえるが、耳を塞ぐ。

(聞きたくない……放っておいて……！)

私は大丈夫だから。ちゃんと戦えるから。だから、だから放っておいて。せめてこの短い時間でいいから、夢を見させて欲しい。

家族の夢と、『友人』の夢。泣いているあの子が笑っている。それだけで幸せだった。

(……もう大丈夫だよ)

私が助けるから。あなたを縛りつける破壊の運命も何もかも、私が壊して見せるから。

決意を固め、紫色の天を纏う。

「――『砕け得ぬ闇』、ここに」

ずっと一緒だよ。そんな声が聞こえた気がした。

Report 11: THE GEARS OF DE  
STINY (幕間)

「どうして、泣いているの?」

その問いかけに、少女は驚きに目を丸くしながらも答えた。

「もう、壊したくないから」

彼女は言うには、彼女という存在そのものが『存在してはいけないもの』だという。破壊と殺戮を撒き散らし、いずれは星さえも破滅に導く存在。それが彼女だ。

もちろん彼女本人は、破壊なんて望んでいない。それどころか自分を壊すことさえ望んでいた。他人を遠ざけ、傷つけないように。

けれど、それすらも不可能だった。例えばどんなに小さな砂粒になろうとも、長い時間をかけて復活する。彼女という存在を宿しているものを消しても、同じ結果になってしまう。

何よりも彼女が悲しんでいたのは、本来一緒にいるはずの『仲間』がその傍らにいないことだった。全員が揃わなければ、彼女は正常に作動することが出来ない。彼女は泣きながら、そう教えてくれた。

もう何も壊したくない。誰も殺したくない。けれど自分一人では何も出来ないのだと、彼女は言った。

「……私じゃ、何も出来ないかな?」

ただ泣き続ける、痛々しいその姿を見ていられなくて。つい口に出た言葉に、彼女は一瞬だけ涙を止めた。

翡翠色の瞳が、僅かに金色へと変化する。喜びと、困惑と、ほんの少しだけ絶望の色を混ぜて。

それでも、私は彼女に手を伸ばす。何も出来ないかもしれないけれど、一緒にいることくらいは出来るから。

「私は、秋月深琴です。あなたは?」

「……私は……」

「まず、あの偽者は厳密に言えば『偽者』ではない。あれもお前の意思の一つだ」

着席して早々、祖父は説明を始めた。

「私の、意志……？」

「正しくは『この世界の』深琴の意思だがな」

祖父の視線に領いて、傍らに立っている男性が私に資料を渡す。……この人の顔は覚えていた。祖父の——『秋月の代理人』として、月に一度病院に顔を出していた人。

渡された資料は紙ではなく、ミッドチルダで使用される空間投影型のモニターだった。表示されるのは『闇の書事件』とこれまでの関連する事件の情報。そして度々観測されていた未知の魔力素のデータだ。

『夜天の魔導書』から切り離され、破壊された防衛プログラム『闇の書の闇』。それを含めた『闇の書の残滓』が紫色の天——『紫天の書』。今は制御プログラムも無く、そのコアである『エグザミア』が暴走状態にある」

言つて、祖父は慣れた手つきでモニターを切り替える。今までに時空管理局の人間と話す機会があったのだろうか。そんな秋月家の家訓は「習うより慣れろ」、「努力は裏切らない」。言うなら「やればなんとかなるのだから、ぐだぐだ言わずにとっとと行動に移せ」というものである。……と、どうでもいい話はさて置いて。

「とはいえ、このまま自壊してもその余波で星そのものを破壊することには変わりない。……ある時、制御プログラムを探して彷徨っていた『紫天の書』は、仮初の宿主を見つけた。それが……」

「この世界の私、ですね」

『紫天の書』としては残滓のままでもなら、破壊衝動の覚醒まで充分な余裕がある。幸いなことに、仮初の宿主には類稀な資質があった。最低限の機能回復を行い、制御プログラムの搜索——いや、制御プログラムに搜索してもらおう、というのが正しいか——いずれにせよ、それを待つだけでよかった」

ということは、と私は思考を整理する。現在確認されているプログ

ラムは4種類。一つは『紫天の書』そのものと、制御プログラムロード・ディアーチェ『闇統べる王』。残り二つ——『星光の殲滅者』と『雷刃の襲撃者』の補助プログラムだ。

制御プログラムを探しているという点で、『紫天の書』は制御関係を保持していないことになる。この制御プログラムというのは恐らく『管制人格』に当たるはずだ。魔導書そのものと内包するエグザミアの管制。そして補助プログラムはその名の通り管制人格を補助し、その運用を効率よく、円滑に行うのだろう。

……もしこのままこの体に宿っていたとしたら、と考えると恐ろしくなった。保有術式と『剣閃』だけで充分レアスキル認定されているのに、一歩間違えたら八神部隊長の様になっていたというのか。

「先日、『紫天の書』は復活した。しかし様々な不具合から本来取り込むはずの制御プログラムを取り込めず、また切り離すはずだった仮初の宿主の意識を残したままという、な。本来の器である肉体から切り離された意識は、その防衛本能に従って『異なる時間軸の宿主の意識』を呼び出した。この状況を打破できる程に成長した精神を、な」

「……時間軸は異なりますが、巻き込んだと思われる関係者が2名程います。その件については？」

「確証はないが、そちらも『紫天の書』に囚われた意識が求めたのだろう。この時間軸の器では、呼び出した自分の意識に応えられないからな。状況を受け入れられるだけの成熟した精神、かつ疑うことなく自分の器を保護してくれるという信頼と相応の力……その条件に適合するのがその2名だったのじやろう」

……確かに。この時間軸に関係する人達を除けば、条件に合う関係者は殆ど絞られる。

——つて、私が巻き込んだんだ。あの2人、結局とぼちりじやないですかやだー……と混乱する思考が結論付ける。

「ということとは、その2人がこの時間軸に飛ばされた直接的な原因は、他の人達とは違うんですよね？」

「そういうことになるな。『紫天の書』に囚われた意識が解放され、あ  
るべき器に戻れば——その時点で元の世界に戻るじやろうて」

「……いえ。それだけ聞ければ充分です」

ヴィヴィオやトーマ達と違い、2人——アーウィング執務官と零さんは、なのはさん達との出会いまでの期間が非常に短い。——あって数年、なくて数ヶ月。今回別の時間軸から呼び出された面々の記憶がどうなるかにもよるが、夢落ち的結末でも何らかの影響があるだろう。情報によると2人は既に管理局組（とヴィヴィオやトーマ達協力者）と別行動に移り、可能な限り接触をしない方針にシフトしたらしい。

……残るは、私次第だ。

だが、今の私では前線に出ることが出来ない。デバイスさえあれば、身体強化の応用でヴィヴィオやアインハルトの様な魔法を組めるのだけど……。

他に手段があつたとしても、『紫天の書』を守ろうとする私に敵うのだろうか。根底の理由が何であれ、意思を固めた『私』が発揮する底力は異常だと評される。その上今の姿は、エグザミアが生み出すエネルギーの何割かを受け入れられるだけの頑丈さも兼ね備えていた。

けれど、相手も『私』である。そこに勝機を見出すことしか出来ない。

「方法ならばある。……橘」

「はい」

応えた男性——橘という名前だったのかと今更ながらに思ってしまうが——は、上等そうな紫色の刀袋を私に差し出す。両手で受け取った私は、思わず目を丸くした。

刀が入っているのか疑問に思うほど、袋は軽い。赤い紐で施された封印を解き、鞘に収められた刀を引き抜く。羽のように軽い刀は無骨でありながらも、どこか繊細さを感じさせた。どことない違和感は、恐らくこの刀が私もよく知る「デバイス」に分類されるからだろう。

「我が秋月家に代々伝わる刀だ。名は『悠久』」

『悠久』……」

「何かの役に立つじやろう」

それ以上は知ったことか、とでも言いたげに祖父は口を閉ざした。



(私は……)

鞘に収めた『悠久』を手に、私は瞳を閉じる。先程まで体中を走った痛みは、不思議と消えていた。体の隅々に行き渡る、力の充足感が心地いい。

「正直な話……お爺様。私は、あなたを恨んでいます」

その言葉と、手にした刀。状況を察した橘さんはさっと前に出た。一方の祖父は沈黙を保っている。

「あの時の仕打ちがなければ、私の人生は変わっていたかも知れませんが……少なくとも、家族関係は冷え込むことは無かったですよ」  
化け物を見る目で見られる事も、怯えられる事も、悲しませる事もなかったかもしれない。もし同じ状況に陥っても、また違う状況になったはずだ。……けれどその場合、彼らとの出会いも今とは違ってくる。

「人生を変えるような出会いをしました。強くなるために力を磨きました。……大切な友達と、一緒に戦う仲間が出来ました。そこは、しだけ感謝しています」

ベッドから降りて、一歩足を踏み出す。今の私が伝えたいことは、全部伝えた。

「屋上を開けている。後は全て、お前に任せよう」

「言われなくても、そのつもりです」

「……すまんな、深琴」

「構いません」

その謝罪は過去に対するものか、それとも現在か。判断しかねた私は、こう答えた。

「私も、秋月の者ですから」



「もう泣くな！ 貴様の絶望など——我が闇で、打ち砕いてくれるわあ——！」

その言葉に、安心する。これで彼女は一人ではないのだと。もう誰

も傷つけないで済むのだと、もう悲しむことは無いのだと。

けれど、それでも自分の破壊衝動は止まらない。全てを消し去りたい、否消すべきではないと相反する主張が衝突する。

そして彼女から切り離された今、心が悲鳴を上げた。

「……一人は、嫌だ……」

痛いのも、怖いのも、一人ぼっちも大嫌いだ。平気なわけが無い。

「偉いね」と褒められても、嬉しくなんて無かった。

「……嫌だ……」

我慢なんかしていない。ただ、自分は逃げているだけだ。痛みや悲しみや——全てから。

「一人じゃないよー!」

そう声を荒げたのは、白い服を着た女の子。その隣で、黒い翼の騎士が頷いている。

『深琴ちゃん』やる? 初めまして、八神はやてです」

「私、高町なのは。この子はフェイトちゃん」

「フェイト・テストアロツサです。よろしくね」

女の子達が、声をかけた。その笑顔が眩しくて、同時に彼女達を傷つけた我が身が恨めしい。

「私達がいるから……もう、一人じゃないよ!」

「……私は……」

差し伸ばされた腕に、手を伸ばす。しかしその手は彼女に届くことなく、炎を生んだ。

「深琴!」

炎を防ごうと、銀髪の男性が銀色のバリアで私を包み込む。しかし自由を失った体は、別の意思によって動かされた。

「……駄目、止まらない……!」

バリアを砕くと同時に、意識が混濁する。暗く歪んだ視界に映る顔の判別が出来ない。斬りかかる刀を受け止め、どこか懐かしさを感じる彼に殴りかかる。

「……助けて」

遠くから聞こえるほど小さな囁きが、耳を打つ。しかし同時に、光が見えた。桃色より赤く、真紅より柔らかいその光。暖かく輝く淡紅色の光が、私を飲み込んだ。



「あつぶなー……」

大急ぎで飛んできた私の視界に見えたのは、制御プログラムに抱かれる『紫天の書』と、この世界のなのはさん達。そして闇の欠片に囚われた、この世界の私。私に殴りかかられる零さんを助けようと砲撃を放ったが、かすってはいないようで安心した。

『あつぶなー』じゃねえよ！ ガチで死ぬかと思ったわ！」

「間に合ってよかったです！」

「よくねえから！ 俺の命が間に合わないから！」

「執務官も、ご無事ですか？」

「俺の話聞けえええ！ っていうか対応違くない？」

叫ぶ零さんを見無視して、私はアーウィング執務官に話を振った。

「いや、無事ではあるんだが……。お前、その姿は……」

「はい。協力者がおりまして」

姿は14歳の私。纏うのはバーストフォーム状態の防護服。デバイスは一時的に借り受けた御神刀・悠久。

「……………」

相対する『この世界の私』は警戒しているのか、構えたまま動かない。

「え、えつと……深琴ちゃんが二人？」

混乱するなのはさん達の姿は、以前見た事件資料に映っていたのと変わっていない。

過去や平行世界とはいえ、彼女は私自身だ。しでかした事の責任は、自分で背負おう。

「さあ、行くよ」

Report 12: THE GEARS OF DE  
STINY (後編)

ぶつかり合う刃が、独特の金属音を奏でる。自分そっくりな彼女は涼しい顔で、斬撃を捌いた。……そういえば先程、男の人が言っていた気がする。「今のお前は、魔力があるだけで使い方を知らない」と。なら、使い方を知ったら——私は強くなれるのだろうか。この人のように、『あの子』を助けてくれた彼女達のようにになれるのだろうか。『否。器に過ぎぬお前には不要』

じわり、と炎が広がる。

『お前が求めるべくは永遠結晶エグザミアと紫天の書のみ。夜天の主と管理プログラムを食らい、ナハトヴァールは再び蘇る』

(……駄目だよ、そんなの……)

破壊や殺戮なんかのために、あの人達は生み出されたんじゃない。愉悦の声を響かせる炎が私の全てを飲み込もうとした瞬間、私は手にしていた刀の切っ先を反転させた。

「……痛いのも、苦しいのも、本当は大嫌い。死にたいって思うけど、実際死にたくは無い」

でも、と震える手に力を込める。

正直な気持ちを表に出せば、主治医の先生や看護師さん、お父さんやお母さん、お兄ちゃんを困らせてしまう。他の誰かをそんな目に遭わせようなんて思わないし、思いたくもない。

——例えそれが自分の意思であろうとなかろうと。

「誰かを傷つけるのも、苦しめるのも……もう嫌だっ！」

反転させた切っ先が、私の胸を貫いた。意識が遠退いていくが、不思議と痛みは無い。重い荷物を下ろした時の様な感覚だ。これでいい、と声が聞こえた気がする。ただ一つ心残りがあるとすれば、結局私は『あの子』を悲しませただけだという事だ。

……だけど、『私』という器すら無くしたあの闇は、これで打ち砕けるはず。

「……後は、お願い……」

呆然とする、自分そっくりな彼女にそう告げて、私は意識を手放した。

その夢は、いつだって唐突に始まって——そして唐突に終わりを告げた。

暗い闇の中で、一人ぼっちで女の子が泣いている。もう何も壊したくないと、誰も傷つけないと伸ばした腕は空を切った。

「ねえ」

そう呼びかけた私は——自分だとは全く思えない社交性を披露して——腕を伸ばす。

そして決まって、脈絡もなく彼女にこう言うのだ。

「私と、友達になってくれませんか？」

◇

目を覚ました時、見えたのはいつもの天井。清潔感と温かみが同居するその部屋に、カーテンから漏れた光が差し込んでいる。

「……………」

体が重く、思うように動かない。そうなった原因を思い出そうにも、ここ数日の間の記憶が無い事に気づいた。

——あの子は、どうなったのだろう。一人ぼっちで泣いていたあの子は、無事に帰れたのだろうか。

ぼうっとする頭を、窓の外に向ける。空は茜色に包まれ始めていた。

（私、何をしてたんだっけ……）

奇妙な浮遊感と交えた刃。何度も名前を呼ばれた気がする。あの空の下で、誰かに助けてもらった。

あやふやで曖昧な風景が過ぎっては消えていく。確証が得られない

い状況に苛立って、空気を入れ替えようと車椅子に乗り移った。窓辺に近づき、鍵を開ける。落下防止のため隙間程しか開けられないその窓に、風に紛れて何かが飛んできた。

「……羽？」

珍しいと思われる、紫色の羽に手を伸ばす。落とさないように、壊さないようにそつと、掌で受け止めた。

「綺麗……」

まるで闇から暁に移り変わる空の色の様で、美しい。その羽に見惚れていると、扉が叩かれた。時刻は夕方。看護師か誰かが、確認に来たのだろうか。そう思いながらも、私は「どうぞ」と声を出した。

「お邪魔します」

返って来たのは、女の子の声。声が示す通り女の子が3人、病室に入ってくる。見覚えはない。……だが、初対面でもない。ベッドに戻ると、3人は笑った。

「改めまして、高町なのはです。体は大丈夫？」

ツインテールの女の子が名乗る。金髪の女の子は『フェイト・テスタロッサ』、柔らかな関西弁の女の子は『八神はやて』と名乗った。

それから3人が話してくれたのは、私の記憶が無い『空白』の事。事件に巻き込まれたり操られたりしていたらしい。その間の最低限の記憶は残っているが、それ以外は封印がかけられている事も。私が余りにも幼いから、負担を減らすためらしい。

「ゆっくり思い出していけばいいって伝えてあげてっつて」

そこまで聞いて、私は掌に残る羽を見る。柔らかく、綺麗で、懐かしいその色はまるで……。曖昧な記憶が色彩を取り戻していく。

——ありがとう。彼女の声が聞こえた。

「……ユーリ……」

ずっと一人で泣いていた女の子。名前を聞いた私に、彼女は確かにそう答えた。『砕け得ぬ闇』でも、記号でもない、その名前を。

——『ユーリ・エーベルヴァイン』と。

絶対に、忘れない。彼女の名前を深く心に刻み込む。頬を伝う涙を拭って、心配そうに私を覗き込む3人に、微笑んだ。

「忘れない。……『友達』だから」

結局、まともに話した時間は殆ど無かったけれど。それでもあの時、手を差し伸べた私が言った言葉はちゃんと覚えていてる。

いつか、また会える日が来るはずだ。その時はきつと私も、今より少しは大人になっているだろう。そうしたら、きつとたくさんの事を話せる。

(……また会おうね、ユーリ……)

そう羽に呼びかけた瞬間、「またね」と彼女の声が聞こえた気がした。

◇

——盛大な夢オチだ。

目を覚まして早々に、私はツツコミを入れそうになる。結局夢の中の『私』と戦って、途中で彼女が自害した。彼女の肉体は、闇の書の欠片——というか、正確に表現するなら夜天の書の『防衛プログラム』の欠片』だが——によってつくられた偽者。意識だけの彼女と、偽者の肉体。彼女の生存本能により動いていると言っても過言ではない。その肉体は、他でもない彼女の手によって意識と切り離された。生存本能を侵食していた防衛プログラムは、その後に私の手で葬られたところで——目が覚めた。

(……っていうか、何で医務室?)

見覚えのある天井は、これまで何度もお世話になった機動六課の医務室だ。呼吸を整えながら、そもそもの経緯を思い出す。

確か今日の訓練は隊長戦。それもいつも通りのフォワード5人ではなくて、私の士官学校時代の同期と先輩で、現在出向研修中の5人と私の合計6人で、だ。一方の隊長陣はなのはさんとフェイトさん、ヴィータ副隊長とシグナム副隊長、そしてちようど近くをうろついていた零さんを捕獲しての5人。

(……負けたんだよね、今回も……)

慣れていないフォーメーションと、実力差。サポートに専念するは

ずだった私が前線に出た時点で敗北は確定していた。

「あ、起きとるな」

音を立ててカーテンが引かれ、八神部隊長が顔を出す。

「半日気い失つてたからな。気分はどないや?」

「おかげさまで、何とか」

「そっか」

若いつてええなー、と呟く部隊長に、思わず苦笑が漏れた。と、部隊長が眉を顰めた。

「なのは隊長とフェイト隊長がすごく心配しててな。いつもやったら長くても1、2時間で目を覚ますのに、ピクリとも動かない、つて。……まあ最近、オフィスも忙しいしな。疲れが溜まってるとんやないかって」

機動六課の運用期間は、残すも二ヶ月と少し。幸い大きな事件も無いし、担当案件も無いが、そもそも年度末近くは大抵忙しい時期だ。同時に思うのは、皆で一緒にいられるのももう僅かな時間だという事。入隊したての頃は「まだ1年」だったのに、今では「もう1年」と感じている。

そう考えていると、音を立てて扉が開かれた。

「グリフィス?」

「お疲れ様です、八神部隊長」

入ってきたのは、グリフィスだった。

「深琴に用事か?」

「はい。借りていた本を返しに」

そう言つて差し出された本は、確かに私が彼に貸した本。正月に海鳴市の実家に帰省した際、持ち帰ってきたものだ。

「それと、これ。挟んだままだったけど、深琴のだろうか?」

受け取った葉には、見覚えのある色の羽が綴じられている。

「なんや、懐かしいなあ。深琴が海鳴市におる時に、なのはちゃんとフェイトちゃんとの4人で作ったなあ」

……はい?」



◇

——どういうことだ。

あれから栞を受け取って、医務室を辞去して、今。私は機動六課の資料室に来ていた。資料室と言っても紙媒体の物は少ない。置かれている端末は本局のデータベースに繋がっている。

八神部隊長の話によると、私は『闇の書事件』の事後処理中に起こった事件——『闇の欠片事件』の更に3カ月後に起こった事件に巻き込まれたらしい。らしいというのは私自身にそんな記憶が存在しない事、そして4歳当時の私は昏睡と覚醒を繰り返していた時で、元々記憶が曖昧になっているためだ。

部隊長の話では事件自体は本局のデータベースにも報告が上げられていて、そこに私の情報も残っているらしい。もちろん個人情報は可能な限り伏せられており、その閲覧者は限られている。

(……あれは、夢じゃなかったの……?)

漠然とした不安が過ぎった。夢の中では零さんやアーウィング執務官らしき人物も出てきていて、その時点で過去の再現とか逆行では無くなったのに。

表示された事件の詳細——私の権限では関係者の最低限の情報しか得られないが——に目を通す。

事件担当は『闇の書事件』も担当したアースラスタッフ。それからなのはさんとフェイトさん、八神部隊長と守護騎士、そしてユーノ・スクライア現・無限書庫司書長とフェイトさんの使い魔・アルフだ。

被害者は現地1名とあるが、これが私なのだろう。被害内容は、とリンクを辿った瞬間にエラー音が鳴り響いた。

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい！」

ビーツ、ビーツと鳴り響くエラー音に一人謝罪しながら、端末を操作して画面を閉じる。端末起動時に本局が管理する個人のIDとパスワードを入力していて、ある意味では「本人」なのに閲覧許可が出ていなかった。忘れがちだが、私の階級は三等空士である。

エラー音が止み、画面が通常のものに戻ったのを確認して、私は溜

息を吐いた。異変に気づいた人がいたのだろうか、資料室の扉が開く。扉から顔を出したのは、なのはさんとフェイトさんだった。

「あれ？ 今のって深琴？」

「は、はい！ ちょっと調べ物してたんですけど……」

「そっか。ちよつと確認していい？」

「はい！」

私が頷くと同時に、フェイトさんがキーを叩いて履歴を辿る。最後に表示されていたページが、再び画面に表示された。

「あ。『闇の書事件』の事、調べてたんだ」

「……はい。勝手に、申し訳ありません」

「ううん、気にしないで。この事件に関しては、深琴にも関係があるから」

言つて、なのはさんと視線を交わしたフェイトさんが再びパスワードを打ち込む。表示された画面は事件の詳細情報を纏めたものだった。発生時刻、発生場所、そもそもの原因である『闇の書の闇』について。

「深琴。落ち着いて、よく聞いてね」

そう、なのはさんは優しく声をかけた。



事件のあらましは、夢の通りだった。違う点はいくつか——例えばヴィヴィオを始めとした「その世界の未来」からやってきた時間移動者の存在を、なのはさん達が忘れていたこと。その中に零さんとアーウィング執務官の存在は確認できなかった事には安心した。

今回の事例は、何らかの影響によってあの世界とこちら側の世界が交じり合ってしまったのだろう。『こちら側』の私達の過去に摩り替えられた理由は、分かっていない。

10年前の事件後、ユーリはシユテルやレヴィ、デアアーチエと共に異世界・エルトリアに渡ったという。エグザミアという力を役立てたいという、彼女達の意味だそうだ。

そつと手を伸ばし、葉に触れる。

「……また、会えるよね？」

いつかこの記憶が薄れても、再び会える日が来るように。  
そんな願いを込めて、私は葉を本に差し込んだ。

## Report 13：母と娘と

優しく穏やかな家族から、少し離れた所に私が立っていた。遠くも無く、近くも無く——拒絶しているわけでも、かといって気にしているわけでもないその距離はひどくもどかしい。

頭をもたげるのは、母の言葉と繰り返してきた『もしも』の話。

『——もしも、魔法と出会わなかったら?』

その話は、些細なきっかけから始まった。

「え、何それ。もしかしなくても私の人生全否定?」

「いや、だから『もしも』だって」

その仮定を聞いて、私・秋月深琴とその実兄・秋月静真は顔を見合わせた。二人揃って同じタイミングで首を傾げる。

「普通に学校に通って、部活とかしてたり?」

「あー。でもお前、向こうの中学の制服は似合わないだろ。聖祥大付属に入れられてたかもな。母さんの事だから」

「かもねー。あ。もしそうだったら、私、なのはさんの後輩になったのかな」

兄に言わせると、母はかつて「魔法少女つてもつときらきらしてふわふわして、『リリカルマジカル』言いながら杖を振り回すものだと思ってた」と様々な方面からお叱りの言葉を受けそうなことを口走ったことがあるほど「天然」だそうだ。これはひどい。

ともかく、それはそれで不思議な感覚だ。魔法の存在を知らないのに、一部の関係者とは顔見知りになっている可能性。けれど今の私には絶対になれないということになる。

穏やかな学校生活、というものに憧れた事もある。学校に通って部活をして、友達と他愛ない話をして——けれどそれは、叶うはず無いと知っていた。だからこそ憧れていたのだろう。

けれど。

(もし、そんな人生を歩むことが出来たら……)

私は、秋月の——いや、母さんの『誇り』になれたのだろうか。

そんなことを、考えていた。

◇

時は流れ、3月。機動六課解散まで、ついに一ヶ月を切ったある日。今日も今日とてなのはさんの教導と模擬戦でぐったりしていた時だった。

「深琴」

呼ばれ、振り返る。その先には「仕事用」と称する着物に身を包んだ、母・秋月遥が立っていた。隣には和菓子に舌鼓を打っているヴィヴィオという組み合わせ。

（深琴の……お母さん？）

（うん。なんだけど……）

何で、母さんがミッドチルダに来ているのだろう。っていうか、何で着物を着ているのか。まずはその辺りから話し合いたい。

「ちよつと用事でね。深琴、今時間あるかしら？」

こちらの念話を読んだのか、疑問には答えることなく母は尋ねた。

「これからお昼ですから。よかつたらご一緒にいかがですか？」

「あら、そうなんですか？ せつかくですからご一緒させてもらいましようか」

母の来訪と現状に首を傾げる私とは反対に、なのはさんはここにこを母を昼食に誘う。もしかしなくても、訓練の様子とか見られていたんだろうか。

（おい。それなんて保護者参観だよ）

「そうね。言ってしまうえば『保護者参観』って所かしら」

零さんが念話でぼやくと同時に、母が言う。考えていることは一緒なのか……って、ちよつと待て。

嫌な予感が全身を駆け巡る。恐る恐る、私はその予想を口に出した。

「……お母さん、さ。もしかしなくても……念話、聞こえてる？」

「ええ。最初から」

「それを先に言えええええ！」

満面の笑みで頷いた母に、全力で叫ぶ。

普通、念話というものには『フィルタリング』を設定することが出来る。魔力があれば簡単に使える技能であるため、不特定多数からの通信・傍受を防ぐために通信に関係する条件をつける事で設定ができた。もちろんその反対も可能で、頻度が多い相手には優先的に繋げるようにすることも出来る。

原理はまるで不明だが、母さん相手にはそのフィルタリングも意味を為さないようだ。

「って言っても、『何となく聞こえた気がする』ってだけよ。それも身内……あなたや兄さんくらいだから」

もちろん、強力なフィルタリングをかけられたら聞こえないんだけど——そう続けて、母はぺこりと頭を下げた。

「秋月深琴の母、遥と申します。——以後、お見知りおきを」

鹿威ししおどしが、軽やかな音を響かせる。仄かに香る抹茶と、それを点てる茶筌ちやせんの音が心地いい。

「風流でいいわよね。晴れた空、そよぐ風、梅の花……」

「ホログラムだけどね。っていうか暦では桃とか桜の季節なんだけど」

「美味しいお抹茶と和菓子。……本当に、日本に生まれて良かったわ」「ごっ、日本通り越して異世界なんだけども」

一人マイペースに呟く母は、にこにここと笑っている。その身に纏う着物は、春らしく流水と霞が描かれた水浅葱色。先程告げた「用事」があるにも関わらず、私たちはこうして茶道を楽しんでいた。しっかりとした作法を必要としない——あくまでも「家族間」で許される程度の緩いお茶会である。そもそも風景自体がホログラムなのだ。そこからツツコミを入れたとしたらキリが無い。

点てられた薄茶と一緒に出されたのは、梅をあしらった練り切り。その組み合わせといいこのホログラムといい、どうやら母は観梅にこだわっているらしかった。

「そうそう。この間言ってた、家の跡継ぎに関してだけど」

「……うん」

器を横に置き、正面から母と対峙する。

秋月の後継者は、兄か私の二人しか残っていない。内、私は既に時空管理局に在籍する魔導師だ。半分死にかけているほど老いているのに掟を振りかざす老が——もとい、老人側から見たら既に継承権を放棄しているに等しい。ならば自動的に兄が秋月を継ぐ事になるのだが……母としては「本人の意思を無視して」、そんなことを決定したくないとの事だ。

「二人には、ずっと家を背負わせてしまったもの。……せめて将来の夢くらい、選ばせてあげたいわ」

後悔を滲ませたその言葉に、私は先日の『もしもの話』を思い出す。「……ずっと、思ってたことがあるの。『もしも、魔法と出会わなかったら』って」

「ええ」

「最初はね、学校に通って、勉強して、友達を作って——家族みんなで、仲良く暮らせるんじゃないかって思ったの。それを『普通』と思えるかもって」

母が「そうかもね」と頷いた。淡々としたその反応に、特別感情は沸かない。私が母の立場なら、同じ言葉を返していただろうから。

「でもね……考える度に、今の私を否定しているみたいになったの。魔法と出会わなかったら、私はミッドチルダに来る事は無かった。魔導師を目指すことも……『強くなりたい』って思うことも、きつと無かった」

自分の力が嫌いだった。弱くて、泣き虫で、臆病で、情けなくて——「誰かを不幸にする」自分という存在が、どうしようもなく認められなかった。消えてしまいたくて——なのに、生きたかった。

魔法と出会わなければ、そんな私は存在もしなかっただろう。

——けれど、それはそれで寂しいものだ。

アーウィング執務官に救われ、目標を見つけた。インターミドルに出場して、敗北の悔しさを知った。士官学校に入学して、集団生活の

難しさを知った。機動六課に配属されて、『親友』と出会った。一連の出会いには、「魔法と出会わなければ」不可能なものだ。同じような出会いが、二度も三度もあるとは思えない。

そう締め括ると、母は微笑んだ。

「たった一人の人間として、女の子として——幸せに、なりなさいね」

◇

「そんなわけで！ 『渡辺零と3分クッキングー！』」

「どんなわけですか！」

ちやらちやちやちやちやちや、と聞き覚えのあるBGMを口ずさむ零さんに、私は盛大に突っ込みを入れた。

「どんなわけも無い。俺がやりたいからやるだけだ」

「横暴にも程がありますよ！？」 あとそのタイトルだと色々触れちゃいけないものに触れかねないので勘弁してください！」

「気分的には、『じゃあいつやるの？』、『今でしょ！』」

いつの間にか設置されていたシステムキッチン。そこにドヤ顔で居座る零さんは言い放つ。

「到底3分では作れないものをさも3分間で作ったかのように紹介する……すばらしいじゃないか！」

「どこが!? 具体的にどこが!？」

「——いいか、深琴」

私の両肩に手を置いて、零さんは静かに口を開いた。

「まず、3分という時間だ。某タイマーしかりインスタントラーメンしかり、どんなに急いでいてもその程度の時間なら待てるだろう?」

「某タイマーは作中設定だけですし、最近のインスタントラーメンは4、5分がほとんどだと思うのは私だけですか?」

「馬鹿野郎! お前に……お前にインスタントラーメンの何が分かる!」

「分からないよ!？」

以下インスタントラーメンについて語ることに少し。気を取り直し



て、零さんは咳払いをした。

「ともかくだ。せっかく弟子の母親が来ていると言うのに、見学できたのが戦闘訓練というのは味気ないだろう。特にお前は娘だしな。嫁入り前の娘が包丁より刀持ってる方が絵になるというのも正直どうかと思うんだよ、俺は」

「……別に、気を使ってくれなくても大丈夫ですよ。家族団欒的な用事じゃないですし」

母の用事。それは管理外世界——特に地球、その中でも度々<sup>ロストロギア</sup>特定遺失物の漂着が確認されてきた海鳴市における「魔導師滞在条件」に關係すると言う。ジュエルシード、闇の書、スライム的なロス<sup>トログア</sup>——いずれも「以前から海鳴市に滞在していた魔導師」が対応したものだ。まあ細かく挙げるとうせ後々には時空管理局から援軍を得ているので、差異はあるが——そもそも、管理外世界における魔導師の滞在条件は非常に厳しいものである。例えその世界の出身であっても、義務教育中だとかその世界の法に反さない限りは滞在が認められない。伯父さんの様に義務教育を終えた人や、私の様に教育機関に在籍する事が容易ではない人は滞在の話は一文字も出てこない。

(……平凡以下なら、話は別だろうけど)

管理外世界出身の魔導師は希少かつ、非凡な才能を秘めていることが多々ある。万年人材不足と言われる管理局の上層部から見たら、それこそ「喉から手が出るくらい」欲しくなるのだろう。

だから、母さんの要求は私情なものだ。これから生まれるであろう海鳴市出身の魔導師の事を考えてはいるが、それ以上に自分の兄や娘に対するものが強い。

でも、母さんはそれを表に出すことは無かった。私を捨てた4年前から、ずっと私を見守っていてくれた様に。

「戻っていけばいいんだよ。ゆっくりでも」

そう呟いた零さんの横顔が、寂しげに翳った。

## Report 14：戦技披露会

マリアージュ事件が終結して、数ヶ月が過ぎようとしていた頃。事後処理やらなんやらを終え、再びの平穏を取り戻した時空管理局は、それでも休むことなくその業務を続けていた。

平和の意義と、力の是非。遙か古代の時代から繰り返してきた問答の行方は、今は置いておこう。結局、その先まで行かないと分からないのだから。

——次元世界の平和を守る時空管理局。

いくつもの部署に分類されるこの複合組織のうち、防衛任務を担当する「武装隊」とその出身者には、一軍に匹敵する能力を誇る一流の魔導師が数多く在籍する。

そしてそんな魔導師達の戦闘技術を「模擬戦闘」という形で披露するイベントが存在する。それが——本局武装隊名物「戦技披露会」である！

『とまあそんな前置きはさておいて！ 次はいよいよ、エキシビジョンマッチです！』

前置きをさておくといつとんでも発言を投下したアナウンスは、武装隊広報部に所属するセレナ・アールズのものだ。

『実況は私、武装隊広報部セレナ・アールズ。解説は空戦の部エリートクラスに出場されます、本局教導隊・高町なのは一等空尉です』

『どうもー』

開かれたモニターに、教導隊制服に身を包んだなのはさんが映し出される。カメラに気づいて、満面の笑顔で手を振っていた。

『今回の組み合わせは時空管理局に所属する魔導師・一般局員問わず本来ならばまずあり得ないがなにはなくとも見てみたい対戦カード』アンケートを参考にしました。それでは赤コーナー！』

同時に空間モニターが一斉に開き、そこに立つ人物の姿を上下左右、様々な角度から映し出す。

『聖王教会騎士団最強の騎士にしてレアスキル保有者、渡辺零！ 騎士カリムも認める真正古代ベルカの騎士！ 今日もその神髄を見せしてくれるのでしょうか!?!』

『セコンドは騎士見習いのフェアクレールト君ですね』

セレナ、なのはさんの紹介に合わせてフィールドに現れた零さんはフェアと話しながら、様子を窺っているようだった。既に騎士服に身を包んでおり、準備は万端らしい。

『そして青コーナー!』

そういう要請とはいえ、こんな凝った演出はインターミドル・チャンピオンシップ以来だ。そう思いながらも、私・秋月深琴もまた防護服を身に纏い、フィールドへ向かう。

『かつてはポジションフリー、奇跡の新人としてその名を馳せた秋月深琴執務官補佐！ 魔導師でありながら騎士さながらの剣捌きは魔導師ランクにして、なんと！ 空戦シングルS+という逸材です!』  
『ランクだけで言えば零君や私たちと同格ですし、師弟対決ということでは二人とも気合が入ってると思いますよ』

『ちなみにアンケートで一位をとったのは高町教導官と秋月執務官補の対戦カードです』

『あはは。それもそれで楽しそうですね』

軽く笑って、なのはさんは流した。だが——きっと楽しいとかそういう問題じゃない。

(フェイトの胃がやばいだろそれ)

(やばいどころじゃないですよ。中間発表の時、フェイトさん涙目だったんですから)

っていうかなのはさん、『楽しそう』は勘弁してください。念話でぽつりと呟いた零さんにツッコミを入れて、私は肩を竦めた。同時にカメラは私と、セコンドを担当する上司をその射程圏内に納める。

『高町教導官、秋月執務官補のセコンドってもしや……?』

『直属の上司ですね。デイバイン・アーウィング執務官です』

『おお！ 部下のセコンドにつくなんて、理解のある上司ですね！ 羨ましいです!』

興味は無いと言いたげに、涼しげな顔で執務官はカメラを無視した。それはともかく、実際は過保護な上司、の間違いじゃないだろうか。いや、なんだかんだ言いながらもこうしてセコンドについてくれることは非常にありがたいんだけども。……うん、本当に。

だがそれ以上に、私の意識は観客席に引き寄せられる。原因は席の一角を占める、紺制服の集団。本局制服組と、よく似たデザインだが若干異なるそれを身に纏う少女少女たちの混成集団だ。

『そして秋月執務官補の母校、時空管理局第一士官学校の卒業生、在学生による応援団が盛大な応援合戦を繰り広げております！』

「帰れ！」

叫ぶ私の声がアウンスで掻き消され。

『対するは聖王教会騎士団！ こちらは大人の意地を見せる、本気の応援です！』

「お前ら帰れ！」

同じく叫ぶ零さんの声は、野太い声援で掻き消される。

応援団の方が目立つ件について、今度からちゃんと実行委員会に話をつけておかねば。そう思いながらも、私と零さんは応援団を帰そうとしていた。



「いやー、盛り上がってますなあ」

「二人とも、有名ですからね」

大勢の管理局員で埋め尽くされた会場を見渡して、秋月静真は感嘆の息を吐き、霜月秋葉は頷く。エキシビジョンマッチと銘打たれた、今回の試合。これまででありそうでなかったその組み合わせに、観客も期待の表情で開始の時間を待っていた。現在は戦闘空間の固定中で、紹介を終えた件の二人はそれぞれのセコンドの元に戻っていた。

普段は師弟として、そして遠縁の親戚にあたることもあって仲はいいはずなのだが——今、二人の表情はいつもの穏やかなものとは程遠い。鬼気迫るものすらあった。

「二人ともー！…こつちこつちー！」

そんな妹と兄貴分の様子に恐怖を覚えた静真を、聞き慣れた声が呼び戻す。観客席の一角を占めるその顔触れは、元機動六課フオワードメンバーとアルト・クラエツタ、ヴァイス・グランセニツク、そして高町ヴィヴィオだった。

「でもよ……」

アルトから缶コーヒーを受け取り、ヴァイスは空間モニターに視線を向ける。

「なんつー顔してんだよ、あいつら」

「二人合わせても、最低2、300人は軽く殺せそうですね」

「待って待って、秋葉さん。何か色々と間違っている」

かつての同僚の表情に苦言を呈したヴァイスに、秋葉は頷いた。さりりとんでもない事を口にした彼女を、スバルが制止する。

「まあ、完全な『全力全開』じゃないとは言え……二人がああして戦うのって、何気に今回が初めてじゃない？」

「あ……」

「そういえばそうですね……」

真剣な表情でモニターを見つめるティアナに、キャロとヴィヴィオが声を上げた。

「六課にいた頃は、あくまでも『模擬戦』だったし、零さんもそこまで本気出してなかったですし」

「セコンドの管制能力とか、そこら辺も今回は関わってくるだろうからねー。二人とも、怪我しない程度に頑張っただけいいなあ」

「ほんと……うちの身内が、すんません……」

同じく真剣に考察するエリオとアルトの隣で、静真は項垂れる。隣近所から聞こえる、妹への応援の声が虚しく響いた。

◇

戦闘空間の固定を待ちながら、ローゼンクランツ愛機の調子を確認する。ここ最近  
は特別事件も無かったから、整備に時間をかけることが出来た。変

形速度、フレーム強度、デバイスの出力方式であるユーザークロスリンク——術者の魔力をデバイスに循環させることで安定を図る出力方式で、これにより私の魔力は供給過多で不具合を起こすことがなくなっている——の再調整と確認。

そして何よりも優先されることは、私自身の状態だ。肉体も健康そのもの、リンカーコアにも異常は見られない。

「さすがに、緊張しているな?」

「……あ、ばれてます?」

モニターで空間の状況を確認しながら、執務官は口を開いた。肩を練める彼に、私は振り返って小さくも表情を崩す。

「こんな大勢の前で戦うの、かれこれ7年振りですから。ちゃんと予選とかあるんだったら、もうちよつとマシだったかも」

「何よりも返り血が似合いそうな表情で言われてもな」

「そんな表情してます?」

表情筋は正直だ。大勢の人の前で戦うことも、もちろん緊張の理由ではある。

だが、今回は相手が零さんだ。——それだけでも、気は引き締まって鋭さを増す。

「今までは模擬戦……しかも絶対に全力で相手してもらえませんでしたから」

どこまで私は戦えるのか。どこまでこの魔法は——この刃は届くのか。不安だし、それ以上に気になってしょうがない。

『皆様、お待ちせいたしました!』

アナウンスが響くと同時に、世界が変わった。乱立する廃ビルと、それを飲み込まんばかりに上昇している海面。

『地形条件は海上、廃ビル群。開始位置は有視界範囲200m』

『魔導師も騎士も一撃必勝がやりづらい距離ですね。初手の攻防に注目です』

解説の声が響く。それに合わせて、私はもう一度執務官を見た。

「じゃあ、死なない程度に頑張ってください」

「ああ。気をつけてな」

「はー」

戦闘空間に飛び込んで、開始位置に指定されたビルの上に着地する。データ構造物とはいえ当たれば痛いし、破壊できるものだ。崩落の危険性は無いと思うが、用心するに越したことはないだろう。

『また、この試合に限りカートリッジは使用不可となっております。制限時間は30分、一本勝負！ 厳しい戦いが予想されますが、高町教導官？』

『そうですね。共通の知り合いとしては、心臓に悪いので遠慮してほしいんですけど……陸と空、その両方で繰り広げられる戦いは見物です。』

『ありがとうございます。——おお、どうやら二人とも、準備が終わったようです！』

200m先の、同じく廃ビルの屋上に零さんが舞い降りた。私が立っているビルとは別の建物で、間には海。ジャンプできない距離では……ない。

腰を落とし、第一形態である二振りのショートソードを構える。視線は零さんから外さない。彼の視線を感じることから、どうやら考えていることは同じらしい。

『それでは……』  
空間モニターに、残り時間の表示が現れる。同時に私は、ぐつと足に力を込めた。

『試合、開始です！』

アナウンスとブザー。それらが鳴り響くと同時に、黒と淡紅色の魔方陣が輝いた。

「アクセルシューター！」

トリガーと同時に生成された全10発の誘導弾を回避して、零さんはそのままこちらへと向かってくる。鈍く輝く刃を、淡紅色の盾が阻んだ。遠慮も容赦も無い衝撃波と斬撃は、あつという間にバリアを削っていく。

「……ロゼット！」

《RF6. Impact Cannon.》

盾を解除し、ロゼットを第二形態である腕輪へ変形させる。そのまま零さんの距離を一気に詰めた私は、右拳を叩き込んだ。黒い盾によって阻まれた拳から、高速で射撃魔法が発動する。

「っ……………」

「……………プラスマスマッシュャー……………」

その上から環状魔方阵が展開し、電気を帯びた魔力が砲撃へと変化した。

「ファイアー！」

広がる爆煙。距離を取って、互いの姿を確認する。——さすがと言うべきか、零さんはほとんどダメージを受けていないようだった。騎士甲冑に若干傷が入っただけで、それ以上のダメージは見えない。

『今の攻防、ご覧頂けましたでしょうか!?!』

テンションが上がりっぱなしの、セレナ・アールズの声が響く。

『古代ベルカの時代を生きた、刃王・アルティスの血を引く末裔同士。かたや全ての始まりにして終焉を示す“無”を継いだ渡辺零。かたや全ての夢の象徴にして絶望を示す“永遠”を継いだ秋月深琴。誰よりも近く何よりも遠く！ 根底は同じなのに、全く異なっています！ その力が、今！ 長き時を経て歴史の大舞台に姿を現しています！』

「テンション高いなあ……………」

「ちよっと大きいですよね」

大本は同じ、アルティス。その兄弟から派生した自分たちはよく似ていて——こんなにも違っている。呆れた様な零さんの言葉に、私は頷いた。

過剰な力を否定し、あるがままの自分たちであろうとしたゼロ・アルティス。

過剰な力を「守るための」力にするため、より高めたクオン・アルティス。

その末裔である私たちも、結局は同じようだ。けれど、だからこそ負けられない。ロゼットの形態を戻し、再び構える。

「悪いな。負けてやりたいのはやまやまなんだが」



「……いらないですよ、そんなの」

翳る横顔を、ほんの僅かでもいいから明るくしたい。私はまだまだ弱いけど、それでも一人で抱え込むなど言ったのはあなただ。

(一人で、何もかも背負い込まないで)

声にならない思いが、胸いつぱいに響いて消えた。

◇

空間モニターの向こうでは、深琴と零が空中で追撃戦を繰り広げている。秋葉に言わせれば、零の空戦適性は「可もなく不可もなく」。決して低くは無いが同世代のエースと比べると大分見劣りするとの言葉を思い出した静真は、その「低くは無い」というレベルが信じられなくなっていた。

(まあ秋葉も、元々エースだって話だしな……)

元からエース級と謳われた側からしたら、確かに零の空戦技能は低いのだろう。けれどそうでない側——静真の様に魔導師歴も浅く、未熟な者からしたら充分すぎる程だ。

『そういえば、高町教導官。秋月執務官補の術式なんですけど……説明をお願いしてもよろしいでしょうか?』

モニターの向こうの実況・解説はそんな話題になっている。セレナ・アールズの疑問に、なのはは一度頷いて、微笑んだ。

『特殊型近代ベルカ式、ですね。これは簡単に言うと古代・近代ベルカ式とミッドチルダ式、3つの術式に対して非常に高い適性を秘めているという、非常に珍しい術式です』

『そうなんですか?』

『はい。……ベースとなっているのは古代ベルカ式。これはアルティス家のものですね。遺伝子調整を加えられたその術式に、秋月家が偶然秘めていたミッドチルダ式と組み合わせられました。そしてアルティス家の遺伝子調整の根幹には優れた血をより強く、濃く受け継がせるというものがあります』

『……それで、混ざり合った術式から近代ベルカ式の適性が生まれた、

ということですね?』

ほう、と静真は小さな声を上げた。自分や伯父、妹が持っていると思われる術式が非常に希少なものだというのは聞いていたが、ここまでは思っていないかった。特性と所持者の数から、レアスキル認定されるのも無理は無い。

『はい。特に深琴は、古代ベルカ式でも珍しく純粹魔力の放出を得意としています。古代ベルカ式の技能である“剣閃”、ミッドチルダ式の射砲撃、そしてその二つを衝突させずに両立させる近代ベルカ式のエミュレート……それら全てを総称して、特殊型とされています』

『なるほどー。聞いてるだけでもすごいとは思いますが……カートリッジとか、大変そうですね』

『深琴本人の魔力量から考えれば、数が少なくても何とかなるんですけどね。……まあ本人たちに言わせると、“対応を模索中”だそうですね』

苦笑混じりに話すのはは、観客席側ではなく模擬戦中の二人に向けられたカメラにそつと視線を遣った。そして、呟く。

『……まったく。二人揃って、似たもの同士なんだから』

青空を、自分と妹分は縦横無尽に飛び回る。飛行適性が『人並み』でしかない自分にとつて空戦は不利でしかないのだが、そうそう文句を言っではいられない。その分、彼女には「カートリッジの使用禁止」という条件が設けられている。溜息を吐いて、零は先程のオープニングアタックを回想した。古代ベルカ時代の王の末裔であり、その時代の魔法を受け継ぐ人間としては珍しく、零本人にはカートリッジシステムの適性も無い。

当時のカートリッジシステムは、魔力容量が少ないベルカの民が戦争を生き延びるため編み出したものだ。アルハザード提供の技術は殆どが国家等特権階級が掌握していたせいもあるのか、当時の技術の割に安定性は低い。

アルティス家を始めた王族は代々魔力容量も多いからか必要に迫られることは無く、中でもアルティス家は「安全性に欠けるもの

を民に使わせるのはどうか」と言う様な集団である。そのため代々受け継がれてきたアームドデバイス——と自分たちは呼んでいる——刀・『無頼』と『悠久』にはカートリッジシステムが搭載されていない。(……しっかし、深琴もやるようになったなあ)

先程のオーブニングアタックもそうだった。誘導弾の軌道と速度、拳に乗せた射撃砲の威力——並大抵の魔導師なら一撃で沈んでいるところだろう。カートリッジ使用不可という条件と、師弟関係による情報共有、そしてアルティス家の『直感』が無ければ、確実に撃墜させられていた。

定石どおり、短期決着だな。そう内心で呟き、零は空でこちらの様子を窺っている深琴との距離を計り、セコンドとモニターを繋げる。

「よっしゃ。行くぞ、フェア」

『一人で勝手に行つてなよ。僕には関係ないし』  
吐き捨てるような声が、青空に響いて消えた。



『白熱した試合が続いております……現在の状況は』

『零君がやや優勢ですが、魔力消費が激しいのが気にかかりますね。お互いらしくない戦い方が続いています』

シザーズ機動を取り入れて、私と零さんは追跡戦を繰り広げる。

『深琴。しばらく魔力は温存した方がいい』

空間モニターの向こうで、執務官が忠告を入れた。

『あいつが馬鹿みたいにはらまいたせいで、周辺の残存魔力が尋常じゃない勢いで上昇している。集束系ブレイカーを使うにはこれ以上ない機会だが……』

『私に使わせる』ことが目的かもしれない、と?』  
そういえば、と私は先程までの攻防を思い出す。

零さんは元々魔力量が少ないこともあって、無駄撃ちを嫌う節約志向だ。その分鍛え上げられた身体能力は男女の差はあれどなのはさん等同世代のエースのそれを大幅に上回る。例えはあれだが「試合で

は弱い殺し合いでは強い」だ。おお、怖い怖い。

模擬戦とはいえ「戦技披露会」なのだから、零さんもそれなりに本気で迎撃はしてくるだろうとは分かっていたけど、それにしても彼らしくない。集束系<sup>ブレイカー</sup>は威力に比例してチャージタイムがかかり、長時間のバインド維持などで疲労もかなりのものがある。発射後の反動とかその他諸々を加味すれば、大体の魔導師は一時間を一戦闘として1発撃てたらオーケー、2発撃てたら上出来と言われるレベルだ。もちろん元々高火力砲撃型と言わしめるのはさんなら、撃てて3発以上。そもそも使わずに戦闘終了と言うことも考えられる。っていうか後者が圧倒的に多いと思う。

だから執務官の危惧はまさにそれ。私が集束系<sup>ブレイカー</sup>を使い、零さんがそれを防御して極力ダメージを減らす。再チャージに入ったところで零さんが斬りかかる——と。もしかしたらチャージのタイミングを狙われるかもしれない。

そして、考えられるのはもう一つ。

『最悪、あいつ自身が撃ってくるかもしれない。そうなったらお前の装甲じゃ確実に墜とされる』

「そうだろうよ」

「っ!？」

反応した瞬間、幾重ものバインドに絡められる。壊しても壊してもキリがない。

そして次の刹那には全身を捕縛され、背筋に嫌な予感が走った。闇のような漆黒の魔力光が、周囲から彼の背後に四つ、集まっているのが見える。

「セーイックリッド、セーイックリッド!」

「ぷちスターライトブレイカー×4!」

漆黒の魔力砲が4発、迷うことなく真っ直ぐに向かってきた。

「……っ!」

バインドは壊せない。自由を奪われた私に残された手は一つ。

思い至ったと同時に、集束系<sup>ブレイカー</sup>の衝撃は私の体を貫いた。



漆黒の魔力砲が4発、深琴がせめてもの抵抗に発動させた幾重ものバリアを無残にも飲み込んでいく。衝撃と爆煙に飲み込まれた深琴の姿が、消えた。

『おおーっと、セイクリッドコールを無視した零選手に盛大なブーイングがー!』

「るっせえぞ外野! これだってかなり疲れるんだぞそれくらい分かれよ!」

聖王教会の応援団に、息も絶え絶えの様子で零は叫び返す。

「深琴お姉ちゃん……」

「……深琴の負け、なのかな?」

不安そうなヴィヴィオとアルトが、周囲を見遣った。

「……深琴の装甲は、私に比べたら大分低い。でもバリア出力は私と同じか、深琴の方が少し高いから……バリアで上手く相殺できていたら……」

スバルの呟きに、ティアナが頷く。しかしモニターの爆煙は消えることが無く、観客のざわめきの声が増え始めた。

『秋月執務官補の安否が気になるところですが……』

『確かに直撃コースでした。……でも』

薄れ行く爆煙に目を遣って、なのはは微笑んだ。

その向こうでは、バーストフォームに身を包んだ深琴が、無傷で立っている。

『な……なんと無傷です! ど、どういうことなのでしょう、高町教導官!』

『ジャケットを切り替えて、それによって発生した余剰魔力をバリアの出力に回したんでしょう』

「や、だからって無傷っていうのもあり得ない様な……」

——相変わらず、化け物じみた魔力なんだから。呆れた様な声が続き、観客は再びモニターに注目した。

◇

煙が晴れる。その向こうで「化け物かよ」と呟く零さんの声が聞こえた。バーストフォーム時、防護服に使用される魔力の配分は攻撃と速度優先に変更されるため、若干ではあるがロングアーチスタイル時に比べて魔力が余る。それをバリアの出力上昇に回して、自分の魔力に上乗せしたつてというのが実態だ。……けっして、私が化け物だからということではない……と思う。

「ありがとね、ロゼット」

《No problem.》

バリアのタイミングも強度も、綿密な計算が要求される。「最終的には全力全壊」（誤字に非ず）と評される私に合わせて、ロゼットはちゃんと行動してくれた。

『本気で心臓止まるかと思った……』

執務官が呟く。それでもセコンド席から飛び出さなかっただけありがたいけど。——「ぶち」とはいえあの威力。多分執務官でも一撃で撃墜される。

「——次は、こっちの番です」

ロゼットをエクセリオンフォームへと変形させて、一気に距離を詰めた。迎撃する零さんの魔力は、ほとんど残っていないようである。だが体力は男性のもの。魔力では私が上回っていても、そういう面では持久戦は避けたいところだ。

《Chain Bind.》

刃がぶつかり合う音。刃同士がぶつかったその瞬間に、淡紅色の鎖で零さんと刀を纏めて縛りつける。零さんがもがき、鎖が軋んだ。

「一閃必倒！」

「っ……！」

魔力を集束させた刀を振るう。黒い盾が阻んだ。だが、音を立てて、黒い盾はその罅を広げる。しかしそれと同時に修復を開始するのだから侮れない。

「剣閃——『桜華一閃』！」

膨らんだ魔力を、集中させる。形を持った集束魔力刃が、盾を完膚なきまでに叩き潰した。

爆煙が上がる。零さんの反応は——消えた。

『き、決まりました！ 師弟対決ともなったこのエキシビジョンマッチ、秋月執務官補の勝利です！』

「零さん！」

ダメージが大きすぎたのか、零さんは地上にまっすぐ落ちていく。落下防止のフローターを発動させて安全無事に着地させるが、中々意識が戻らない。

「……………」

「零さん！」

ゆつくりと開かれた瞳に、涙を湛えた私の姿が映る。

「…………強く、なったなあ。お前も」

「…………皆さんのお陰です」

何も知らなかった私がここまでこれたのは、全て周囲のお陰だ。みんながいなければ、私はここまでこれなかった。…………それは、零さん。あなたも含まれている。

俯いている私に、零さんは笑った。

「結局お前も見えた目、ほぼ止まりかけになったしな。…………面倒な血筋だよな、ほんとに」

自嘲の笑みを零さんは浮かべる。年齢的なものもあるのか、私の外見成長も最近では止まりつつあった。元々の入院とかで成長が遅かったことを考えても、そろそろ潮時だったのかもしれない。

それでも不安に感じないのは、自分が一人ではないと理解しているからだろう。

そんな私の様子に呆れたのか安心したのかは不明だが、零さんは微笑んだ。

先程までとは違う、穏やかな笑みで。そして乱雑に、私の頭を撫でた。

「ちゃんと、幸せになれよ」

「…………はい」

こらえきれず、涙が落ちる。どこまでカメラが回っているかは分からないが、「全ほにやららが泣いた」状態に陥っているようだった。予定なら握手して終わるっただけだったのに。

『……そう、ですよね。お二人は師弟である以前に家族ですからね……』

涙混じりの実況の声で、私と零さんはどちらからともなく念話を繋げた。

(ど、どうします？ 何かすごく『良い話だなー』になってるんですけど)

(っべーよ、マジやっべーよ。俺なんか「なんて言うと思ったかーバロス」とか言うつもりだったんだぜ。何だよこの雰囲気！)

(ぶち壊すのはあれですけど、言うほどしんみりした引き出しも無いんですけども)

(お前はまだいいほうだろ。俺なんかあれだぜ？ 『贈る言葉』かよ。人と言う字は支えあつてできているとか言えればいいのか)

ただ終わらせるのはもつたない。だからって「じゃあ茶番でもしようぜ！」っていう軽いノリが駄目だった。もとよりボケツツコミは持ち合わせていても、こういう「しんみりした」雰囲気に合わせてものは持っていない。

(とりあえず、立って握手な。起こしてくれ)

(了解です。その後とりあえずありがとうございましたとか言えればいいですよね)

(おっけ、ナイス深琴。それ採用)

ものの数秒で対応を決めて、私たちは立ち上がる。お互い差し出した手を握り合い、拍手と歓声に混じって「ありがとうございました！」と声を張り上げた。



そして、それから半日後。戦技披露会会場には関係者と機動六課の面々が集まっていた。



「それでは」

各々にジューズが入ったコップが行き届いたことを確認して元部隊長の八神はやて捜査司令が声を上げる。本日の主役ということで行われているのはエキシビジョンマッチに参加した私と、つい数時間前まで行われていた空戦の部・エリートクラス最終決戦を戦ったなのはさんとシグナム二尉だ。

「スターズとライトニング2、ロングアーチ04のちよつと過激な健闘と、元機動六課+αの同窓会に、乾杯！」

音頭に合わせて、参加者は「かんぱーい！」と声を揃える。

「まったく、怪獣め。殺されるかと思っただぞ」

「それはごっちのセリフです。シグナムさん、すぐ熱くなるんですから」

そうお互いに苦言を呈しているのは、なのはさんとシグナム二尉。先程まで感想戦でも仲良く争っていたと言うのに、まだまだ余力は残っているらしい。少なくとも「生意気な」と、シグナム二尉がなのはさんの頭を「ぐわっしや」みたいな擬音語が聞こえそうなくらいにぐりぐりしている点では、そう判断してもおかしくはないだろう。

私と零さんの魔力及び体力もそこそこまで回復。……同窓会のセッションを生き抜くことはできるはずだ。こうして大勢で会うのって、数年ぶりだし。

「はーい。じゃあせっかくですから、写真撮りますよー」

スバルの言葉に、まずはなのはさん、フェイトさん、八神司令と八神家、そしてヴィヴィオがカメラに視線を向けた。次に残ったメンバーで撮り、最後は全員で。それが終わった後、あ、とスバルが声を上げた。

「あ、待って！　なのはさんとシグナム副隊長と、深琴と零さんで一枚！」

「はーい」

言われるがままにカメラの前に移動する。順はカメラを構えるスバルから見て右からなのはさん、私、零さん、シグナム二尉だ。

「何だこのハーレム。嬉しくねえ」

「零さん。自重」

「みなさんこっち向いてー」

零さんの眩きに突っ込みを入れてみると、スバルがカメラを覗き込んで位置を確認している。

「……まあ、悪くないな。こういうのも」

そう呟いた零さんの顔に、翳りはなかった。